

# ストライカーウィッチーズ1944

セルユニゾン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

1945年

第2次世界大戦終結。世界は一応の平和を取り戻したかの様に見えた。しかし、かねてより各国の軍の上層部との癒着が噂される。謎の国際組織『キャニー』が、密かに軍部を掌握。実戦配備に至らなかった新型兵器群を持って全世界を内側より転覆させんと策謀していた。

各国の不穏な動きをいち早く察知した連合軍司令部は秘密裏に全世界より選りすぐりの名戦闘機とそのパイロットを招集。『キャニー』に対抗すべく、特殊部隊『ストライカーズ』を結成する。

そのストライカーズに優秀なパイロットとして所属していたブレッド・フィリップとはある巨大新兵器との戦闘の末に戦死した。

否、した筈だった。

ブレッド・フィリップは戦死の間際にネウロイと人が戦う異世界へと転移してしまった。

## 目次

ブレッド・フィリップ自己紹介	1
ラルとブレッドの通信	5
ストライクウィッチーズ編	
第1話 異世界の夜空	9
第2話 異世界の夜に	14
第3話 501合流	22
第4話 愛機と愛銃	27
第5話 問題と買い出し	34
第6話 その身を献身的に捧げよ	44
第7話 ジャズと新たな仲間	52
第8話 夜間飛行と忘れられぬ悪夢	62
第9話 夜戦と過去の悪夢	71
第10話 新たな仲間	81
第11話 重なる英雄の影	87
第12話 好機は突然	97
第13話 過去の成果	107
第14話 大統領、無視しますか？	116
第15話 過酷な夜間	127
第16話 壁を超えて	135
第17話 不穏な夜空	147
第18話 終わらない悪夢	152
第19話 予感	161
第20話 抗いようがない運命	170

第21話	悪夢を勝ち抜く為に……	178
第22話	事件解決はこの手に限る	190
第23話	完璧なロツテな2人	198
第24話	失った者同士	204
第25話	不穏な空気	210
第26話	ストライカーウィッチーズ	216
ブレイブウィッチーズ編		
第1話	飛ばされて異世界	231
第2話	戦う力	238
第3話	飛びたければ超えろ	244
第4話	強さの根幹	251
第5話	I'll get on a broom of a	258
gic and meet.		
第6話	寒空に羽ばたく小さな翼	265
第7話	寒空に銃声と翼あり	272
第8話	戦う意味は偶然か己の意思か……	279
第9話	極寒の空に赤い尻尾は飛ぶ	286
第10話	ペトロザヴォーツク熊事件	295
第11話	価値あるモノ	301
第12話	ペテルブルクに響く砲声	309
第13話	黒人+ビツクリ+連射の効く銃!!?	315
第14話	倒した筈の敵	322
第15話	新たな力	329
第17話	サトウルヌス祭開催の前に	337
第17話	新たななる精鋭4人	344

第18話	懐かしい過去	352
第19話	サトウルヌスの夜に	360
第20話	君の瞳に拳で語る	368
第21話	いつもの2人、再び	375
第22話	破壊される常識	382
第23話	伯爵戦	388
第24話	ペトロザヴォーツク上空の戦い	396
第25話	Thank you very much, my buddy	404
第26話	不穏な雲行き	415
第27話	模擬戦	426
第28話	その拳はbuddyの為に	434
第29話	勃発！ 姉妹対決!!	439
第30話	姉妹の関係	446
第31話	buddyとしての行動	455
第32話	フレイアー作戦始動	462
第33話	フレイアー作戦 ファーストラウンド	471
第34話	フレイアー作戦 セカンドラウンド	482
第35話	ブレイブウィッチーズ	489
ストライクウィッチーズ2編		
第1話	新たなる衝撃	506
幕間の物語		
ガリア復興		
	アフリカの空で	523
	502でゲーム	530

## ブレッド・フィリップ自己紹介

「ブレッドフィリップ。王立空軍所属の少尉だ。6月3日生まれの15歳。身長は161cmで体重は55kg。スリーサイズは得なんてないから黙るぞ。生まれはロンドンの南東にある古くも趣のあるライと言う港町の出身だ。父は軍人で母はロンドンで交換手をしてた。軍人になったのは時代の流れもあるが1番は本土防衛ってワードにワクワクしない男の子なんて居ない」

「階級についてどう持ってるか？ 少尉と言う階級で満足してるし戦果を上げて昇進しようという気はないな。敵を倒すのは軍人として当たり前なのだからそれで昇進するのを私は良しとしないんだ。無論ながら戦果で昇進するのを否定する訳じゃない。あくまでは私は嫌だというだけだ。どうせ上がるなら責任のあるポストと一緒に上がらないと損するだけだからな。まあ、1番は長機が面倒なのと責任が増えても給料は増えた責任に対して少ないし出撃も書類なんかで少なくなるからだな。根っからのフィールドワーク派なのさ。無論ながら簡単な書類仕事出来る。士官だからな」

「この戦争を終わりを生きて迎える事だな。兵卒の勝利は生きて終戦を迎える事だ。上層部や政治家とは違うしこの戦争に上層部や政治家が思う勝利は存在しない。だからこそ世界の恒久平和の為に戦える」

「半分は時代の流れに流されて軍人の道を選んだ。時代がそうで無くとも俺は空を目指した筈だ。空にはずっと憧れていたから」

「原隊は王立空軍第11戦闘機集団610戦闘機中隊所属だな。まあ、訓練学校に行っている最中に魔力適正が見つかり、政治的思惑が絡んですぐここ。少尉の階級も特別に受けれた試験を合格したから貰った階級だな。本当なら軍曹だぜ？」

「初出撃？ まあ、うん大変だったよ。初陣はバトル・オブ・ブリテンでハリケーンに乗って爆撃機の迎撃を担当した。敵の制空戦闘機に追われたり、銃座から集中放火を受けたりで無事では済まなかったが無事に帰還できた。爆撃機を1機撃墜した時の達成間は忘れられない」

い」

「ミーナ中佐は現場を考えない馬鹿とは違う。それにこの人は裏切れない、この人の信用に、信頼に答えたいと思わせる種類のカリスマがある。信用も信頼も出来るいい上官で指揮官だ。陸上でも接しやすから人としても好感が持てる。退役しても良き関係で居たい」

「リネット軍曹か？ プレッツシャーを跳ね除けられない弱さが目立つた印象だな。新人だから仕方ないのだろうが自信が持てる様になつてからは優しく強い女性に変わっている。それに後方から大局を見る能力が長けているからいい指揮官になれる。俺が指揮されてもいいと思える程には育つて欲しいな」

「宮藤軍曹は甘ちゃん。これに限るな。軍人なのに武器を持ちたく無いと言う気持ちがある。そういう奴を知っているから、わからないでも無いが武器を捨てる覚悟も理由も無い。ただ単に戦いが嫌い、戦いたくないだけと彼とは全く違う感じだな。でも、あんな奴ほど覚悟を決めた時は賞凄いんだ。揺らぐさせずに時に現実を見ればな」

「坂本少佐もミーナ中佐と同じ。戦闘面も訓練面でも高水準で纏まっているから何処でも生きる人材だな。ただ、扶桑人の気質なのか前線に拘っているのが心配だ。後方に下がる事に価値を見出して欲しいな」

「自由奔放な行動が目立つが、優しくすればじゃじゃ馬じゃなく、本当に祖国が好きで守りたいと思っている。いい子だよ。これから先で色々と経験するだろうが今の思いや性格が変わらずに持っていて欲しいそうすれば絶対にいい女になるよ」

「細かい事は気にしない性格だから他のメンバーの様にそこまで気を遣わずに接せられるのとルツキーニの面倒も一緒に見てくれるし整備も手伝える。速度を生かした戦闘スタイルはこっちの戦闘スタイルとも合うから陸でも空でも頼りに出来る。少しスピードジャンキーなのが偶に傷だな」

「バルクホルン大尉は抱え込み過ぎる程に生真面目だな。宮藤軍曹と何かあったのかそれが少なくなっている気がするから良かったよ。ナンバー1を争う人的資源が自滅紛いな経緯で損失など最悪の極み

だ。後は融通や冗談が通じるともつといいんだがな」

「ハルトマン中尉はマイペース？ とでも言えばいいのかな？ カー  
ルスラント人にしては様々な点でルーズとでも言うべきか？ 兎に  
角、らしくないと言うのが感想だな。戦闘は何も言えない程の実力だ  
から頼りになる。固有魔法も合わせ方次第で俺との相性もいい」

「元貴族と言う事で上から目線な感じだな。場所によつては敵を作つ  
て囲まれるタイプだが、良い所は認めるし自分の非も自覚があれば認  
める。気遣いも出来る。悪い奴ではないのは確かだが、少し言葉使い  
で損をしかねないのが心配だな。まあ、空での実力は確かだから大丈  
夫だろう。空は実力主義な場所だから」

「サーニヤか？ いつもお疲れ様、感謝している。この一言だな。最  
近は俺とエイラでロットや持ち回りになったから多少の負担減には  
なっているだろうが夜間飛行は結構辛いんだ。自己主張が乏しい性  
格が少しずつ変わっているから安心していい」

「不思議でへタレだな。他のメンバーにももう少し興味を示してくれ  
るといいんだがな……でも、空戦では昼でも夜でも戦えるから貴重な  
人材だよ。先読みの能力もあのスオムスのエースとあつてか回避も  
攻撃も素晴らしく、信頼できる。口が軽いから信用は難しいけど」

「世界が恒久平和に包まれてお互いがお互いに尊重出来る世界が見た  
い。理想主義的なことは認めるがそれでも思想や宗教、生まれで殺し  
合う様な世界はごめんだ。違いを違いとして認め、お互いに高め、持  
ちつ持たれつとの関係を築く。そんな世界を見たい。ストライカーズ  
やウィッチーズがそんな世界の縮小版に思えてしまうんだ」

「ウルトラマリリン スピットファイアmk. IXだ。2段2速魔力過給  
機を搭載した60系エンジンに交換した事でパワーが増大。その出  
力に対して誘導体が3枚だと効率悪いから4枚に改造されている。  
俺のエンジンはHF型にパーツやマップピングを改造してF型寄りに  
改造をして殆どの高度で万全に戦える様にしてある。どうしてス  
ピットに拘るのか？パイロットにとつては航空機は相棒であり、棺  
桶になりかねない物だ。許されるなら好きな物に乗りたい。私はス  
ピットとハリケーン以外に命を預けたく無いな」



「武器が多い？ 空に持って行くのだとトンプソン S とマズルブ  
レーキをコンペンセイター兼用のオリジナル品に交換したボーイズ  
対装甲ライフル M.k. I だ。大型が出てきた時はリヴォルヴァー  
ショットガン 10 ゲージモデルを使用する。基本は狙撃でトンプソ  
ン S は前衛や近付かれた時用だよ。リヴォルヴァーは単独夜間戦闘  
では嬉しいが仲間と戦うとなると少し取り回しが難しいから余り使  
わないな。弾の補給が少ないから。それとカランビットナイフは  
至って普通の物だ。いざという時の為の物だ。銃剣が装着出来る武  
器が無いから」

「イギリスについてか？ 偶にだけど俺たちから見ても珍妙な兵器を  
作るな。ハリケーンやスピットみたいな良いやつも作るんだが、どう  
してあんなアプローチになるんだ？ 飯の見た目と味がマズイが朝  
食とティータイムは本気だ。ただ、みんながみんなマズイ飯を作る訳  
じゃ無い。ストライカーズで日本人達から美味しい飯の作り方は教  
わっていたから 501 のみんなからはティータイムや朝食以外も好  
評なんだぞ？ 1 番人気はティータイムと朝食だけど……」

「それぞれの目的や覚悟に違いはあれどそれを理解して尊重してくれ  
るいい人しかいない。祖国や肌色、性別でも差別や虐め、険悪感が無  
いからとてもいい基地だよ。補給もバツチリで関係も士気も良好だ  
から大陸反抗作戦もなんとかなるんじゃないか？ クソ上層部が邪  
魔しなければな……ああ!! クソツタレが！ 彼奴らなんざ司令部  
ごと爆撃されて死ねばいいんだ！ ……おっと、此処はカットして  
くれよ

「強いて言えば肩身が狭い。女の子に囲まれていい気分だとか思っ  
てるかもしれないんが色々と気を使うからデリカシーがある奴には辛  
い所もある。それでも楽しい事も多いからこの基地から転属したい  
とは思わんな。したら政治の道具にされちまう。最後はカットな？」

## ラルとブレッドの通信

ラルが人払いをした部屋で受話器を取り上げ、交換手にとある基地の番号を告げると直ぐに基地に繋がるが目的の人物が留守にしていると告げられる。だが、何処にいるかはわかるのでそこに繋げて貰うと直ぐに目的の人物の声が聞こえる。

〈ヘッドハンティングならブリタニアを通して下さい〉

〈今回の場合はついだ。別の要件があつて通信を入れている〉  
受話器からついだかよと呆れた様なブレッドの声が響く。

ラルは知った事では無いと自分の要件を告げる。その内容は乗れるだろう機体とアランの魔力についてだった。

〈あいつの搭乗経験はPー39、40、51です。39ならあるでしょう?〉

〈オラーシャにはな。それはもう親の仇の如くな〉

こつちでもかよとブレッドが苦笑いを浮かべるとラルから衝撃的な発言が飛び出す。

〈こつちにPー51の現行モデルを送れるか?〉  
ラルの言葉にブレッドは首を振る。

〈Pー51の現行モデルは無理です。私の発言力でどうこうできるのは2線級ユニットが限度です……〉

そう話すブレッドだが、ラルは感じ取っていた。ブレッドの言葉には何か含みがあると。

〈Pー51の現行モデルは無理。ならば、Pー51を改造した現行モデルじゃない機体ならどうにかなるか?〉

やっぱり、気付きますかとブレッドの声が受話器から響くと少しの間を置いて話し始める。

〈壊れたグリフォンエンジンを何個も共食いさせて作ったグリフォンエンジンを手に入れて改造させています〉

〈へいつ頃できる?〉

〈金とパーツがありません。永遠に無理です〉

逆に言えば金とパーツ。もしくは金だけがあればすぐにでも出来

ると言う意味がこもったブレッドの言葉にラルがほくそ笑む。

「へわかった。賭けだがどうにかするとしよう。だが、動かせるのか？」

「決まったエンジンしか動かせないと言う特例があるアランだが、ブレッドは問題無いと告げる。」

「実はグリフォンエンジンはマーリン系統でも異色の存在と言う事でグリフォンエンジンと呼ばれ差別化されているが血はマーリン系統の血統書つきエンジン。つまりはマーリンエンジンの為にブレッドも動かせる。そして、P-51のエンジンはマーリンとアリソン。マーリンの血しかないグリフィンエンジンが動かせないはずが無く、ブレッドには回す事が出来た。」

「つまりはアランにも回せる。」

「へどうなる？」

「へまだ、計画段階ばかりですが、アランが乗るなら大幅な変更が必要でしょう。お楽しみになって奴です」

「へそうか。楽しみにしておく。所でアランの魔法力だが……」

「それに関してラルはアランに調査をお願いしていた。欧州のガリアやヴェネチアを中心とした国は古くからウィッチと言う存在についての叡智が蓄積されている。そして、クロステルマン家の屋敷に多くいるブレッドには名家の書庫とあってか多くの情報が残されていた。」

「へ報告の前に前情報を。魔法力ですが、細かく分けると6つに分けるそうです」

「へほう」

「へまずは魔力性質。これが固有魔法の発現に関わるそうです。アランはまだ固有魔法を出していないのでわかりませんね。現れてからわかるそうです」

「へ成る程な。固有魔法の形質が魔力の性質と言う事か」

「ラルの言葉にそうですと肯定してブレッドは次の項目を話す。」

「へ次に魔力純度です。これは如何に高度な魔法を発動できるかに値するものらしく固有魔法や飛行魔法の発現に関わるそうです。つま

りは飛行適正のあるウィッチとは純度の高い魔力を生み出せるウィッチです。ウィッチとしての強さを測る重要な要素です」

「鳥の使い魔を持ちウィッチの殆どが飛べるのも……」

「魔力の純度は使い魔によって上下するそうですね。鳥は比較的純度の高い物を生むそうです。と言うよりも大昔は鳥の使い魔を持つウィッチしか飛べなかったそうです。箒の登場からですね。飛べるウィッチの文献が多くなったのは」

「成る程な。固有魔法を持つ、飛べると言うだけでウィッチとしては強いと……」

「箒が登場しても、魔力操作が下手なウィッチは飛べないそうです。これが如何に上手く魔法に変換できるかの能力らしくこれは後天的に増やせるらしいです。エディータ・ロスマン曹長が成長させたのもこれですね。なんでも外に漏れ出る魔力にも影響を及ぼす事も出来るようになるそうです」

「弁が壊されたのもそれが増えたからか」

ラルの手に壊された弁が握られる。

「漏れ出ると言う事は蓄えられる量もあるのか？」

「正解です。それは魔力貯蓄量と言う物で肉体が受け止めて貯められる魔力量らしいです。そしてこれ以上に魔法生産量が多いと漏れ出ます。魔法生産量は1日で生産できる魔力量を示す言葉です」

「成る程な。最後は？」

「魔力生産効率です。魔力の源は熱量。つまりはカロリーらしくどんなに悪くても1カロリーあれば1カロリー分は回復するらしいですがこれが高いと1カロリーで数カロリー分生産できるようですね。あとは一定時間内に生産される魔法量の多さに起因する項目です」

「カロリーの殆どを魔力に取られるウィッチもいるらしいが……」

「それは生産量が多いタイプです。使い魔は24時間で生産しきれる量に達するまで契約者が生きるのに必要最低限のカロリーだけ回して残りを魔力生産に当てる使い魔がいるそうです。おそらくはそれでしょう。逆に生産量が多くても効率が高いとそれが起きません。純粋に効率がいいのは私の様なウィッチやウィザードです」

へアランは貯蓄量に対して生産量が効率、もしくははその両方が多いか  
……戦うだけで考えると性質以外は無視できないな

へそうですね。純度と操作は陸戦か空戦。貯蓄量は持久力。生産量  
と効率は回復力や継戦能力に直結です

へアランは持久力が乏しいか……分かった。参考になった。また何か  
あればな。それと何時でも参加を歓迎するぞ

へ何かあればお世話になるでしょう。では、また。ご武運を

それだけ告げたブレッドが通信を切るとラルは受話器を戻しながら  
ら呟く。

「武運を祈るのはこっちもだよ。ブレッド・フィリップ少尉」

ラルは少し祈る様に顔を下げると立ち上がり、部屋を出て行った。

## ストライクウィッチーズ編

### 第1話 異世界の夜空

1945年、第2次世界大戦終結。世界は一応の平和を取り戻したかの様に見えた。しかし、かねてより各国の軍の上層部との癒着が噂されるた。謎の国際組織『キャニー』が、密かに軍部を掌握。実戦配備に至らなかった新型兵器群を持って全世界を内側より転覆させんと策謀していた。

各国の不穏ないち早く察知した連合軍司令部は秘密裏に全世界より選りすぐりの名戦闘機とそのパイロットを招集。『キャニー』に対抗すべく、特殊部隊『ストライカーズ』を結成する。

今、ここに歴史の陰に埋もれる最後の世界大戦がの火蓋が切つて落とされる。

とある飛行船の周りを楕円形の翼を持った迷彩塗装の戦闘機が飛び交う。

その戦闘機に戸籍マークが描かれてこそいないがその優美とも言えるその姿は英国の救国を果たして名戦闘機、スピットファイア Mk IXである。

その内の1機が飛行船の上方よりパワーダイブをしながら船尾近くの機関砲群へと迫り、機銃を放つ。

主翼より放たれた20mm機関砲2門と7.7mm4門の弾丸が機関砲群に着弾、数基の機関砲を沈黙させる。

飛行船の後方へと苦れた機体を下部に搭載されて機関砲群が待ち構えていたと言わんばかりに放つ。

「来やがった!」

スピットファイアに乗るブレッド・フィリップが背後を見てすぐに機体を斜めに滑らせる事により、機関砲の照準をズラさせて回避する技術を用いながら飛行船から離れる。

ブレッドが離れる間に別のスピットファイアが下方から接近、機関砲を黙らせる。ブレッドが反転、下方からもう一度アプローチを掛けて機関砲を1基破壊、上方に出た瞬間にハンマーヘッドという頭と尾翼の重さを利用して反転する技術を使って上方の機関砲群に機銃を浴びせて、完全に沈黙させる。

そのまま後方から飛行船の下に逃げる途中で通信が入る。

《下面と上面の機関砲群は沈黙したが、中腹の対空砲と高射砲、艦載機がうざくなつて来た！》

《了解した。高射砲を…》

そこから先を話そうとした瞬間に後方から機銃の弾丸が通り過ぎる。飛行船の艦載機が後ろにびつたりと張り付いている事を悟る。

ブレッドは機体を翻して回避に専念する。

向こうが機体を左に傾ければ、右に傾け、蛇腹に移動して機銃から逃れたりとなんとか引き剥がそうとするがどうにも行かずに頬に冷や汗が流れ始めた瞬間。

《ブート！ 右に回避だ！》

仲間からの通信に機体を左に傾けるとP-38 ライトニングの救援が現れ、後ろを追っていた艦載機に20mm機関砲1門と12.7mm機銃4門の連射が浴びせられる。

《チャーリーか！ 助かったよ！》

《高射砲は俺たちがやる！ 船首の対空砲と艦載機を！》

《頼む！》

前方を斜めに通り過ぎた機体を横倒しにした機体で背後に位置取ろうと操縦桿を倒して、背後に着いた瞬間に7.7mm機銃だけを放ち、エンジンからの出火を確認すると別の機体を探すが、P-38が追われているのを確認して、機体を背面飛行させると背中から救援の為に急降下を開始する。

急降下をしながら全ての火器を放つ。下は雪の為に雪が外れた機銃で舞い上がる中で赤い炎が見えたと思うと爆発音が響くと機体を上昇させながら船首の対空砲に機銃を放ち、沈黙させると上方から迫っていた別の戦闘機達が船首の対空砲を破壊。

中腹の対空砲も1t爆弾の投下を喰らい、軒並み沈黙すると船首の装甲板が割れて、翼の様に広がると人型の兵器が現れる。

《新型兵器出現！ 各機、注意しろ！》

通信が飛んだと同時に顔の機銃や肩の機関砲から大量の弾丸が吐き出され、近付こうとすると空中に浮かぶ機雷により撃墜されてしまう。

《これならー！》

P-38の編隊から大量のロケット弾が放たれる。向こうも機銃での迎撃を行うとするが殆どが着弾、胴体の機雷に誘爆するなどして損害を与えるがそれでも交戦を続ける相手に今度はスピットファイアの部隊が機銃を大量に浴びせに掛かる。

機銃は無事な胴体や機銃、翼を穿ち、相手に顔の部分にある脱出用の飛行艇を射出させ、ブレッドが数機のスピットファイアを連れて、追撃を開始するが向こうも残された機銃でも反撃を開始。

ここまで来たら殺られる前に殺れを経験から知っている全機が機銃を連射で放ち続け、ブレッドのみになりつつも翼を全て奪う事に成功する。

ブレッドは推力だけで浮いている相手にトドメの一撃を浴びせる事に成功するがこの時に焦っていたのか相手との距離感を見間違っ  
てしまい、相手の爆発に巻き込まれてしまう。

「ブウウウトオオオ!!」

風防を開け放ち、肉眼で爆発があった場所から落ちる残骸にチャーリーの叫び声が放たれた。

ブレッド・フィリップ

1940年に王立空軍に入隊。第2次世界大戦を緒戦から参加、バトルオブブリテンをハリケーンで爆撃機を合計で20機を撃墜しながらも生き残り、スピットファイアに乗り換えてからは頭角を現して



独軍機を相手に戦闘機を30機撃墜して、終戦を迎える。

キャニーとの戦闘が現実視させる様になると教官として従軍していた彼はスピットファイアMkIXと共にスピットファイアMkIXのパイロットとしてストライカーズに招集される。

最終記録は巨大新型兵器2機の共同破壊、戦闘機199機、爆撃機56機、輸送機8機の265機と王立空軍としては破格の記録を持ち、王立空軍の中では今でも抜かれていない記録を保持し、その功績から軍人では珍しいメリット勲章を授与されるが授与されて3日後に巨大新型兵器の爆発に巻き込まれて戦死する。

世界からの評価では『彼こそが最高のスピットファイアのパイロットであった』と高い評価を受けている。

『ストライカーズ隊員資料より抜粋』

ブレッドは身体に伝わる衝撃とエンジン音で目が醒める。

気絶から目覚めたばかりの為に目が眩しいが直ぐに慣れて首を振ると先程まで飛んでいた曇り空では無く、黒い空に白い月、白い雲が疎らにあるだけの空だった。

「あの空域が晴れるなんて情報は無かった…それに夜空だと…一体、何が……」

ストライカーズの天気予報は外れない。今までの経験で分かっているブレッドは足で支えていた操縦桿を手で持った瞬間にある物を見つける。

「Ju52!」

Ju52はドイツが開発した3発輸送機で軽量かつ強固な胴体に短距離離陸機能を持つ為に空母などへの発着艦が可能と考えた上層部が主力輸送機の1機として選定した機体でもあり、撃墜や護衛をした事もある為に見間違える事は無い。

ブレッドは機体をJu52の前に出すとストライカーズの周波数

に合わせた無線機から目を離すとJ u 5 2に描かれた国籍マークが見た事の無い物であると同時にそれ以上に衝撃的な物を見てしまい、口元のマスクとゴーグルを外して目を見開く。

「なんで……なんで……人が生身で飛んでいるんだ……」

J u 5 2の近くを生身で飛ぶ人間がいた。

## 第2話 異世界の夜に

爆発に巻き込まれて死んだ筈。そう思っていたブレッドの前に現れたのは満月の夜空を飛ぶJ u 5 2と足に機械を付けて護衛する様に飛ぶ少女だった。

向こうは警戒心剥き出しだとブレッドは悟ると通信機を国際周波数に合わせて語り掛ける。

《此方はストライカーズ所属のブレッド・フィリップ少尉だ。貴機の国籍マークは見た事が無い。何処の所属か？ 此方はストライカーズ所属のブレッド・フィリップ少尉である》

隣の飛行しながら通信機の操作を終えるとブレッドは武器を構える少女に視線を送ると少女が耳に手を当てて何か口を動かしているのが見えた。

1944年のドーバー海峡を1機のJ u 5 2が飛行しており、貨物室に作られた長椅子に向き合うように座る2人の少女の姿があった。

「最近ネウロイの様子がおかしいな。襲撃の数が前に比べると減ってきている」

旧日本海軍士官用第二種軍装着を着た眼帯をした黒髪をポニーテールにした女性、坂本美緒が口を開く。

「確かにそうね…何かの前触れじゃなければ良いのだけど…それよりも、上層部の人達には困ったものだけだわ」

ドイツ軍将校服を着た赤髪を流しただけの女性、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケは肩に片手を置いて揉む様に指を動かしながら、嫌そうな顔を隠すこと無く表に出す。

「まだ、ネウロイとの戦闘が続いているに関わらず、ネウロイとの戦いが終わった後の事を考えているのか……」

貨物室になんとも言えぬ雰囲気支配すると窓に短く切った銀髪を風に流しながら近づく少女の影をミーナが見つける。

「あら、サーニヤさんがいるわ…迎えに来てくれたみたいね」

美緒も迎えに来た少女、アレクサンドラ・ウラジミール・ロヴナ・リトヴァクことサーニヤ・V・リトヴァクに労いの言葉を掛けようとする  
と美緒がサーニヤの異変に気付く。

《こつちに何かが近付いて来ます》

《まさかネウロイ!》

美緒が立ち上がるとサーニヤが首を振って否定する。

《コアの反応がありません。それに戦闘機位の大きさです》

サーニヤの言葉が終わって直ぐに雲の間から1機のスピットファイアが現れる。

スピットファイアは前を飛ぶ為なのか側面を見せながら近付くが、国籍マークが描いてある場所に国籍マークが描かれて居なかった。

「あれは…スピットファイアだな」

「確かにここなら飛行していても可笑しく無いけど、増槽も無しに此処まで飛べたかしら?」

2人が話し合っている間にサーニヤは手に持つ武器、フリーガーハマーをスピットファイアに構える。

《此方はストライカーズ所属のブレッド・フィリップ少尉だ。貴機の国籍マークは見た事が無い。何処の所属か? 此方はストライカーズ所属のブレッド・フィリップ少尉である》

国際周波数で語られた言葉に首を傾げる美緒とミーナの2人、サーニヤは武器を構え直す。

ミーナは考えていてもラチが明かないと判断して耳に付けたインカムに語り掛ける。

《此方は501統合戦闘航空団、ストライクウィッチーズの隊長をしているミーナ・デイトリンデ・ヴィルケです。階級は中佐》

《ヴィルケ中佐ですね。ブレッド・フィリップ。少尉です》

《それでフィリップ少尉。あなたに聞きたいことがあるのですがいいですね?》

ミーナ中佐は真剣な表情で外を飛ぶスピットファイアを見つめるとブレッドがコクピットから頷いたのが見えた。

《それは良いのだが、燃料が心許ない。地上で情報を交換しませんか？ 近くに基地があれば誘導をお願いします》

《了解しました。サーニヤさんの後を飛んで下さい》

《銀髪の女性ですね。了解しました》

ブレッドは誘導を受けながら501統合戦闘航空団の基地へと着陸すると銃を持った歩兵に囲まれるが直ぐに解放され、武器を没収されてから司令室へと連れて来られると席と紅茶を勧められる。

「此処なら落ち着いて話せるでしょう。まずはストライカーズについて教えてくれないかしら？」

ブレッドはミーナの言葉に目を見開く。

彼の世界でストライカーズと言えば、佐官以上であれば誰でも知っている情報だ。だが、ブレッドはかえってこの情報と先程のサーニヤの存在を異世界だと認識すれば、辻褄が合うと自己完結する事が出来た事で頭を落ち着かせる事に成功する。

ブレッドは大きく息を吐くとストライカーズについて語り始める。

第2次世界大戦が終結してからキャニーが登場した事とその対応の為にストライカーズが設立された事、ストライカーズがどんな部隊でどんな事をしたかを語り終えるとミーナと美緒は驚愕に顔を固める。

「まさか、人同士で戦争を……」

「もしも、ネウロイが現れなければあり得たかもしれないと言われていたが、まさか……本当に起きるとは……」

「やはり、此処は時代が近いだけの異世界と言う事でしょうか？」

「ええ、少尉の言う通りだと仮定すれば全ての辻褄が合うわね。イギリスもドイツも日本もアメリカなんて国も此処には存在しないから」  
そう言いながら立ち上がったミーナが世界地図を見せる。

「今から貴方の世界の事を教えて貰うけど、まずは地理的な事から教

えて下さい：私が指を刺した場所の名前を教えてください」

ブレッドが頷くと最初にミーナが指を刺した場所の名前を答える。

「其処はイギリスでしょうね。地形が少し違います。此処に半島は無かった」

「此処はブリタニア。私達を守るべき国よ。次は此処ね」

「フランスですね。国境の形が少し違いますね。成る程、この部隊はイギリス、こっちではブリタニアを守る為の連合軍基地ですか」

「察しが良いのね。此処はガリア。私達を取り戻すべき場所です」

「其処はロシアですね。何処が違うまでは…と言うか、防衛と奪還を兼任って無茶では？」

「無茶でもするしか無いの。此処はオラーシャよ」

「其処はフィンランドですね。ストライカーズにもフィンランド出身は多いですね」

「スオムスと言う国よ。優秀なウィッチを多く輩出してるわね」

「其処はイタリアですね。ローマとかロマーナとか呼ばれています？」

「ロマーニャよ。惜しいわね、なんでそんな事を？」

「古い呼び方と同じ国があったので、此処はプロイセンって呼ばれて、今はドイツって呼んでいます」

「其処はカールスラント。私達の祖国であり…：取り戻すべき国の1つよ」

「其処は日本ですね。形は全く一緒だ」

「扶桑よ。その坂本少佐の祖国です」

「成る程、アメリカですね。此処の物資には助けられました」

「リベリオン。物資の方面はこっちも大体は一緒ね」

こんな感じで何個か確認作業を終えて、3人が行き着いた答えは全くの異世界と言う訳では無く、共通点も多い事だった。

ただ、最も大きな点はネウロイと戦っているのか人同士で戦っているのかと言う点だった。

「ネウロイについてお聞きしたいのですが、よろしいですか？」

ブレッドは、この世界の辿った運命を教えてほしいと頼む。この世界で生きる為に必要な情報だと悟っているからだ。ミーナも思惑に

多少の違いはあれど知って置かなければいけない情報として教える事にした。

ブレッドはミーナと美緒からこの世界のことについて黙って耳を傾けた。ブレッドの世界では到底あり得ない話も出たが、何も言わずに黙って耳を傾け続けた。

この世界では人類はネウロイという正体不明の謎の存在と戦っていること。

この世界では人類が対立するのではなく、団結してネウロイと戦っていること。ネウロイに対抗するウィッチのこと。

それを聞いたブレッドが内心複雑な感情が渦巻きながらも頭の中で情報の整理をしていると美緒が口を開いた。

「少し後ろを向いてくれないか？」

「？ まあ、良いですが」

後ろを向いたブレッドの背中に美緒が張り手を放つ。ブレッドは痛くもなんとも無かったが時間差を置いて体の中に血液が暴れ始める様な感覚を覚えて、床に倒れて悶える。

「美緒！ 何をしたの！」

「待て。大丈夫だ、死にはしない」

美緒の言葉が終わると同時に血液がのたうち回る感覚はなくなり、何事も無かった様に立ち上がるブレッドが目の前に現れる。

「少佐……貴女は何を……」

したのですか？ その言葉はあり得ない物を見たとき口を開けて固まるミーナの顔を見ると『なんだ？』という疑問が上回り、吐き出される事は無かった。

「貴方……それ……」

ミーナがブレッドの頭上を指して話すとブレッドは『それ』と言われて何があるのかと思い、自分の頭を探る様に触ると完全な異物が指先に触れる。

「……何か……生えてる……？」

髪の毛の中に、自分のものとは違う何かが生えていることに此処まで適応して来たブレッドの脳も思考を停止仕掛けるが危険は無いと

判断すると形を確かめる様に指先をゆつくりと動かす。

「ん？」

ブレッドの頭に生えていたもの、それは垂れた猫耳だった。しかし、初めて出てきた物であり、初めて触る物の筈なのだが、触り慣れた感触でもあり、何処か懐かしい感触に訝しむ様な声を上げる。

「後ろを見てみて……」

ミーナの言葉に首を傾げながら振り返ると壁しか見えず、何が見えたのかわからず、肩越しに振り返るとそうじゃないと頭を片手で抱えるミーナと笑いを堪える美緒の前をスコティッシュフールドの長毛種が持つている尻尾が不規則に何度も通り過ぎる。

「な、な、な……」

声を震わせるブレッドだが……

「なんじゃこりやああああああああああ!!」

ブレッドの叫びで司令室のティーカップが揺れた。

「はあ……はあ……久し振りに叫んだ気がする……」

数分後、勝手に騒いで勝手に落ち着いたブレッドがなんとか現状把握の為にミーナを見つめるとミーナも頭から狼の耳を、腰から狼の尻尾を出現させると口を開く。

「これは使い魔の耳と尻尾よ。私達、ウィッチが魔力を使う時に、そのコントロールをサポートをしてくれるの。外見は動物の姿をしているの」

「此処に来てからスコティッシュフールドなんて見てませんが？」

「使い魔は、本来だと動物と触れ合ったりすることで契約をするのだけど……貴方は此処に来る前にスコティッシュフールドと触れ合った事はあるかしら？」

ブレッドは頭の中をフル回転させ記憶を探るが全く出てこなかったが頭の耳に触った事があると考えた瞬間にあることを思い出した。

「あー……もしかして、あいつか？」



その一言に、ミーナは納得したかの様にブレッドに質問を飛ばす。  
「……心当たりがあるようね」

「……12歳の時に祖父母の家に住み着いた野良猫達に1匹だけ全身長毛でこの毛色のスコティッシュフォールドが居ましたね。初めて触れ合った後から居なくなったらしいですが……」

「間違いなくその子は使い魔よ。主人を探している途中で貴方にあっただんでしようね。厄介な事になったわ……」

ミーナが頭を抱えながら美緒を半目で睨み付ける。

美緒がブレッドの体の魔眼で見ていた事に気付いていたがまさかこんな事になるとは思っていなかった。

こうなるとわかっていたならミーナは美緒がブレッドの身体に魔力を通して、眠っていた使い魔と溜め込んでいた魔力を解放させる様な事を止めていたからだ。

「兎に角、この事は上に報告をさせて貰うわ。良いわね」

「良いも何もどうしようも無いんですが？」

「そうだったわね。まあ、魔法力があるなら少しは楽になるわ。少し待ってなさい」

ミーナが電話機に手を伸ばしたのを見て、ブレッドが美緒を手招きする。

「どうした？」

「先程の事です。何かが通った感じの直前にあれですよ」

「ああ、魔力をお前の体の中を素通りさせた」

「その刺激で魔力と使い魔が解放された訳ですね」

「察しが良いな」

「まあ、こう言うファンタジー系の本は好きだったので」

成る程なと美緒が頷くとミーナの声が聞こえる。

「ガランド少将から貴方をストライクウィッチーズの臨時隊員と受け入れ、正式な書類が来てからは正式な隊員として配属だそうよ」

その内容にブレッドは口をあんぐりと開けて固まっていたが数秒のすると震えた声で頭を抱える。

「ストライカーズと一緒にじゃん…いきなり飛ばされていきなり配属っ

て……今回は事情説明も無いからなお辛い……」

後半を聞いたミーナが慌てて事情説明を開始する。

基本的に硬直状態で何処でも何かしらのきっかけが欲しかった事と統合戦闘航空団は隊員の質と言うゴリ押しでなんとかなっており、頭数ではかなり少ない為に物理的な部分で無理が生じているのが常であり、実力がある者で頭数が増やせるならば特に止める理由は無一事を話す。

それを聞いたブレッドも此処もストライカーズと一緒にかと内心で呟くと背筋を伸ばして、ミーナに向き直る。

「微力を尽くすと共にその信頼に応えます」

真剣な表情で立派な最敬礼を送るブレッドにミーナと美緒も返礼で答えるとブレッドは敬礼を解き、人懐っこい笑みを浮かべながら口を動かす。

「前から気になっていたのですが……宜しいでしょうか？」

「なんででしょう？」

「失礼ですが、何故にズボンをお召しになっていないのでしょうか？」

いい加減視線をそらし続けるのも辛くて「

「あら、何を言っているの？ズボンなら履いてるじゃない」

そう言つて、上着をたくし上げてブレッドの世界ではパンツと呼ばれる代物を見せつけると冷や汗を流しながらボソリと呟いた。

「……郷に入らば郷に従え……とは、ジャパンパイロットの言葉なのだが……異世界とはいえ……この常識の差は……」

酷いな。と言う言葉を何とか脳内だけで響かせる事に成功したブレッドだった。

### 第3話 501合流

黒板に教壇と何処かの教室を思わせる部屋にストライクウィッチーズの全ウィッチが集められ、教壇にはミーナが立っていた。

「皆さん。今日は新しく501統合戦闘航空団にウィッチ：いえ、ウィザードと言うべきね。新しく合流するメンバーを紹介するわ。ブレッド・フィリップ少尉、どうぞ」

3度のノックの後に扉が開けられると灰色の混ざった紺色に胸のパイロットを示すブローチ以外は飾り気の無い服に身を包んだブレッドが現れる。

騒つく部屋にブレッドの踵が床を叩いた音が強く響くと額縁に飾って置きたい程になる最敬礼を行う。

「ブレッド・フィリップです。階級は王立空軍所属の少尉で、ここに来る前はストライカーズに所属しておりました。先輩方のご指導ご鞭撻をよろしくお願い致します」

1分程の沈黙の後にスツと最敬礼をやめて、気をつけの姿勢に戻ると赤み帯びた茶髪を二本に纏めた髪型の少女、ゲルトルート・バルクホルンが掌を机に叩きつけながら立ち上がる。

「おい！ ミーナ！ 私は新人が来るなんて私は聞いていないぞ！」  
「私も聞いていないわ。強いて言うなら：何て言えばいいでしょうね」

ミーナがブレッドに目配せするとブレッドは日本人達がこの状況でよく使う言葉を引用する事にした。

「湧いて出てきた。と言うのでしょうか？」

「何故に私を見ながら話す」

美緒がブレッドの視線に抗議するがブレッドは視線を美緒から前に座るウィッチに向ける。

ミーナは手を叩くと注意を自身に引きつける。

「これから交流会とします。好きに質問しなさい。ブレッド少尉は話せるだけ話していいわ」

「了解しました」

敬礼をしながら退室する美緒とミーナを見送ると背後から迫る影に反応し、腕を掴むと身体を回しながら地面に倒すように動かし、左手の腕が首を固定する様に動かしてしゃがむ。

地面とブレッドの腕の間には褐色の肌に黒い髪をツインテールに結った少女、フランチェスカ・ルツキーニが居た。

「うじゅじゅ…なんでわかったの？」

完全に背後を取っていた。それなのに組み伏せられた事に疑問を抱いたルツキーニが自然と話し掛ける。

ブレッドはニツコリと笑いながら答える。

「戦闘機乗りだ。背後には敏感だよ。それよりも若いな。13か14かな？ おっと、レデイに年齢を聞くのは無礼だったな。2度の無礼を許して頂きたい」

腕を退かしてルツキーニを立たせると自然な動作で跪いて許しを請うブレッドにルツキーニは目をパチクリとする。

「ルツキーニ。こういう時は許してやれば良いさ」

ルツキーニが放心状態に近い状態で頷くとブレッドはホツとした表情で立ち上がり、ルツキーニに助言をしたオレンジ色の長髪にグラマラスな体型と男受けしそうな女性、シャーロット・E・イエーガーが笑いながらルツキーニの頭に手を乗せる。

「私はリベリオン陸軍第363戦闘飛行隊所属のシャーロット・E・イエーガー。大尉だよ。シャーリーって呼んでくれ。こっちはルツキーニだよろしくな」

「フランチェスカ・ルツキーニだよ。ロマーニヤ空軍少尉！ ルツキーニって呼んで」

「シャーリー大尉にルツキーニ少尉ですね。よろしくお願い致します」

「階級は要らないよ。私もルツキーニもな」

シャーリーの言葉にルツキーニも元気一杯に頷くとブレッドも笑顔で頷き返す。

「しかし、いきなり背後に来るのでついあんな事をしましたが何故でしょう？」

「硬いなー。まあ、いいか。ルツキーニは人の胸を揉むのが好きなんだが……なんで男にまで」

「胸で異性かどうか確かめようとしたのでは？ まあ男にも胸が出る奴は出るので非確実的ではありますが……ルツキーニ」

「うじゅー！」

ギロリと見下ろすブレッドにルツキーニが半歩後退る。

「初対面の人の胸をいきなり揉むのはやめた方が良いですよ。中には同性でも嫌がる女性は居ますからね」

「は、はい……」

ブレッドの注意に、ルツキーニは少し涙目になる。

怒っているつもりは無いのだが語尾が強くなり、怒っている様に聞こえたのかとブレッドが慌てながら、決して怒っている訳では無いと伝えようとするがうまく伝わらずに右往左往しているとシャーリーからのフォローを受けてなんとか事なきを得るとブレッドの背後から声が聞こえる。

「私はエーリカ・ハルトマン。中尉だよ。トゥルーデ、自己紹介は？」

軽い雰囲気、金髪の少女、エーリカ・ハルトマンに敬礼をしながら挨拶をするとエーリカの目は近くに居たバルクホルンに視線を向けるがバルクホルンは聞こえていない振りをして、壁に寄りかかったままでブレッドを警戒している。

「(ルツキーニにやったのが不味かったですかね?)」

彼女との交流に一波乱ありそうな予感をして後頭部を掻いていると横から金髪の長髪にスレンダーな体型に楕円形のメガネに鋭い目付きと少し近寄り難い雰囲気、ペリーヌ・クロステルマンが話し掛ける。

「自由ガリア空軍中尉のペリーヌ・クロステルマンですわ。ウィザードなんて、大昔に数人居たか居なかったって程度ですわよ」

「ウィザードになったと言うのが正しいでしょうね。坂本少佐から魔力の刺激を受けて、ウィザードとして目覚めた訳ですし」

ウィッチと言うのは魔力を生れながらに保有し、その魔力をコント

ロールする助けになる使い魔を後天的に持つと言うのがウィッチの基本だ。

逆に魔力の刺激を受けたから魔力に目覚めたと言う事は一度も聞いた事が無い為にブレッドのカミングアウトに全員が驚くと我慢ならないと言った様子でバルクホルンが口を開ける。

「待つんだみんな。生まれも変で、ストライカーズなんて部隊がブリタニアに有るとは聞いた事が無いぞ」

「でしようね。私は異世界の未来から来ました。私の世界の話を聞きますか？」

「聞かせてみる」

喧嘩腰なバルクホルンにブレッドは自分の世界について第二次世界大戦の事から話し、キャニーについてとストライカーズに設立と活動を主軸に知り得る全てを話し終えたブレッドは、周りを見た。

そこには、それぞれが複雑そうな表情をしたウィッチ達が立っていたのを見て、ブレッドは後悔していた。

「(人同士が行う合法的で体のいい大量殺人だ。話さない方が幸せだったかもしれない……)」

だが、知って貰うには話さなければならぬ。

重い雰囲気立ち込める中でサーニヤが静寂を破る。

「でも……でも、ブレッドさんは良い人ですよ？ ルッキーニちゃんを組み伏せた時に痛くない様に加減してました。それに泣き出しそうになった時も……その……」

サーニヤの言いたい事は全員が察した。

ブレッドが、ルッキーニと接していた時の行動や言動を見て、少なくとも彼が悪い人には見えないことを内心感じていたからだ。しかし、それだけで割り切れるかと言われればそうでもないのが人間である。彼が優しいとわかっていたとしても、彼が人の乗る戦闘機を落とした事実に変わりはない。

そんなことを気にしない人物もこの世には居る。

「まあ、良いんじゃないか？ あっちはあっち、こっちはこっちだ。それよりも此れで自己紹介は終わったのか？」

「オイ！ まだ、私がしてないんだナ！ エイラ・イルマタル・ユーティライネン。階級は少尉ダゾ」

「先任でしょうね。ブレッド・フィリップです。好きに呼んで下さい」「ソウサセテモラウンダナ。コツチはサーニヤダゾ」

「宜しくお願いします」

「サーニヤ・V・リトヴァク中尉ですね。昨晩は誘導ありがとうございました」

「気にしないで下さい」

昨夜にサーニヤと会っていたと言うのを聞いたエイラがブレッドに詰め寄るとブレッドは落ち着くように説得した後に昨夜にこの世界に來た事を話す。

「ナンダヨーソンナコトカヨー」

「何が有ると思っただんですか？」

ブレッドの質問に顔を赤くしてモジモジし始めるエイラを放って、シャーリーがブレッドの肩を叩く。

「基地の案内をしてやるよ。着いてきな」

「大尉殿に案内して頂けるとは光栄ですな」

2人はブリーフィングルームを出て、基地案内へと移った。

## 第4話 愛機と愛銃

ブリーフィングルームを出た2人だが、途中でルツキーニも合流すると501基地のあちこちを移動していた。その途中でシャーリーが部隊での規則なども説明するのだが……

「ぎっくり過ぎるだろー!」

シャーリーの性格ゆえなのか、かなりぎっくりとしており、ブレッドが規則について質問をする事で何とか問題無いレベルにまで無理矢理に知識を引き上げていた。

そして、基地の案内が終わる頃には、時刻は昼頃になっており、ブレッドは精神的疲労が多分にあった。

「そろそろ、ランチタイムだな」

「確かに丁度いい時間ですね」

ルンルン気分で歩くルツキーニの背中を見て、ブレッドが気になった事を話す。

「ルツキーニは少し兵士らしくないですね。私も17か18で志願したから若い兵士は沢山見てきました。けど、ルツキーニは随分と子供っぽいですね」

シャーリーはこの言葉にウィッチが基本的には20歳までが限度である事を話すとブレッドは鈍器で頭を殴られた様な感覚を味わう。

「20歳から魔力低下による退役か……だから、彼女の様な子も……」

「確かにルツキーニは12と子供だし、甘えたい盛りだが、ネウロイと戦わなければロマーニヤがなくなってしまう。ウィッチとしてみんなの家と友達を守るって言うという純粋な想いから戦っているんだ」  
「そうか、ガリアからロマーニヤは目と鼻の先、ガリアとカールスラントの巢は首元に突き付けられたナイフ……」

地理的に存亡の危機に関わっているにはブリタニアだけでは無い。周囲の国と多くを接する国であるが故にガリア解放とカールスラント解放はどの国から見ても他人事とは言えない。そして、ルツキーニの国では無く、国が滅びる事で家と友達を失うと言うとても人間臭い理由で戦うルツキーニを何処か尊敬の眼差しを送る。



少なくとも、志願した時の自分よりは立派だと。

「ルツキーニ」

「うにゅ？」

食堂に着く直前にブレッドはルツキーニを呼び止める。

「ルツキーニの戦いに手伝わせてくれないか？ 私の力はとても微小な物であるが……」

その言葉にルツキーニは眩しいほどの笑みを浮かべる。

「うん！ 一緒にロマーニヤを守ろ！」

「そうだな。じゃあ、まずは腹ごしらえだ！」

「あ！ 待ってよ！！」

ルツキーニを扉の直前に追い越して中に入ると既に他のメンバーは席に着いており、坂本は何処か満足気に頷き、ミーナは何処か微笑ましそうに、他のメンバーも安心した様な表情を浮かべるが、バルクホルンだけは未だに警戒している様だった。

そんなメンバーを気にしていないのかルツキーニはブレッドの手を引いて自分の席の隣に座らせるとミーナが食事を始めようと音頭取ると全員が食事を始めて暫くするとミーナが思い出した様にブレッドに話し掛ける。

「そういえばブレッド少尉」

口の中に入っている料理を飲み込んでミーナの方に向くとミーナは話し始める。

「午後から訓練を行うから食事が終わったら格納庫に来てくれないかしら？」

格納庫で訓練と言われると何をするのかわからなかったブレッドだが、断る理由も立場もない為に素直に了承する。

そして食事と簡単な後片付けを終えるとブレッドは格納庫に向かう。多少の遠回りをしてしまったが問題無く着くとそこには、ミーナ・美緒・ペリーヌが既に到着していた。

美緒は戦闘指揮官の為に同伴している事は安易に想像出来たが、ペリーヌが居る事は想像出来なかったが、決して邪魔をする様には見えない為に何も言わずに3人に近付く。

「これがストライカーユニットですか？」

台に固定された不思議な機械を見て、眩く。外見はブレッドの世界にもあったB f 109。メツサーシユミットに何処と無く似ていた。

「ええ、これが私達の空飛ぶ箒、『ストライカーユニット』です」

「メツサーシユミットに似ている……」

初陣では恐ろしい相手だった。その言葉を何とか押し留める。

ブレッドも初陣がバトルオブブリテンのハリケーンだった経験から、メツサーシユミットは恐ろしい以外の何者でも無く、レーダーにより誘導されたスピットファイアのお陰で初陣は何とか生き延び、その経験があるからこそ今の自分がある。

ミーナはふらふらとユニットに近づくブレッドに声を掛ける。

「メツサーシヤルフ B f 109 G 2。私の予備機よ。本当ならスピットファイアM k IXを用意したかったんだけど、ごめんなさいね」

「いえ……お気になさらず……」

「よし。早速、履いてみる」

台の上に立ち、ゆつくりと足を下ろそうとするとズボンが邪魔で入らない事に気付くと急いで軍服のズボンを捲り上げ始めた。

「何をしているんだ？」

「いや、長ズボンが邪魔で履けないんですよ。

「ん？………ああ、なるほど」

坂本の疑問にブレッドが答えるが当の本人は何のことか一瞬ではあるが理解が遅れる。と言うのも、ウィッチは基本女性しかおらず、男性が乗ることを考えて設計をしていない。

運良くブレッドの足は細身だが、長ズボンを履いたままでは裾が引っかけり、ユニットに足が入らない。

「短パンにした方が楽かな？」

装着に時間が掛かれば緊急出撃に大幅な遅れが生じてしまう。

時間と金が出来たら街に買い出しに行く事を決意しながらユニットに足を通す。

「よし。それじゃあ、魔力を流してみろ」

「魔力を流してみろって……」

いきなり坂本に言われて、ブレッドは困惑する。

そもそも魔法力に目覚めたのは昨晚遅く。24時間も経っていないのにそれをいきなり足の推進機に魔力を流せと言われて戸惑うのは当然である。しかし、ブレッドも何かアクションを起こせばと足に力を込めたりするがウンともスンとも言わないユニットに困惑しているとミーナは近くの整備兵に声を掛けて、故障を起こしていないか調べさせる。

その間にミーナは美緒に魔力に異常が無いか調べて貰うが特に異常は無く、ユニットを脱いだ状態だと使い魔も出せた。

ユニットの方も故障しておらず、何とも言えない雰囲気に含まれる。

「困ったわね……」

「あの。マーリンなら動かせるかもしれないです」

根拠は無いがそう感じているとブレッドが説得すると原因不明である以上は何でもするべきと美緒からの後押しもあり、この基地唯一のマーリン魔導エンジンを搭載しているPー51 ムスタングの前にやって来る。

ブレッドはシャーリーに事情を説明。エンジン始動だけならと許可を貰い、ムスタングに足を入れると自然に使い魔の耳と尻尾が現れて、ユニットに魔法力が注がれる。

魔法力が注がれたユニットは動き出し、プロペラと共に足元に大きな魔方阵が展開される。

その光景に、立ち会った3人のウィッチは内心で驚いていた。初めて見る物と初めての体験。それをブレッドは特にマニュアル無しでやってのけた。

数秒も回すと魔法力を止めて、エンジンを停止させる。

「こんな感じですが、よろしかったですか?」

「ええ。もしかしたら、貴方の魔力はマーリンエンジンにしか適応しない可能性もあるわね。一応だけど、全部のユニットを履いて見えないかしら。私が許可を出します」

残りのユニットも履いて回るブレットだが、起動したのはムスタングのみと完全にマーリンエンジンにのみでその出力もシャーリーが使用する時よりも高かったことからマーリンエンジンに特化した魔力適正である事が判明する。

「あはは…神様は俺にマーリンだけを動かせと告げているのか？」

乾いた自虐の言葉が格納庫に響く。

ムスタングで飛行訓練をしようとしたが回転数が一定以上になるとそれ以上は上がらず、離陸が可能な状態にならないと言う事態に陥っていた。

「何か心当たりはあるかしら？」

ミーナからの問いにブレットは首を振る。ハリケーンにも乗っている為にスピットファイアにしか乗っていないからと言う仮定は通じない為にブレットにも心当たりは無かった。

「予定を変更して地上でも射撃訓練を行います」

通常なら飛行訓練と飛行しながらの射撃を訓練で見るとは思わなかったのだが、飛行ができない以上は仕方ないとスピットファイア Mk IX が来るまでは地上訓練に従事する事になる。そして、初めての射撃訓練とあってか夜間哨戒明けのサーニャとその付き添いであるエイラ以外のメンバーが射撃場に集まる。

ブレットはと言うと美緒からそれぞれの銃についての説明を受けながら銃を構えたりとしていた。

その構えは空軍と言う事を考えると綺麗ではあるのだが、特殊な形状の銃器を扱っていたのか少し癖のある構え方が見え隠れする荒削りから少しマシな程度程度の構えだった。

「それじゃあ、行きますー！」

501で多く扱われるMG42ウィッチ仕様をフルオートで放つ。一般兵用ならば7.92mm弾を放つ本銃だが、ウィッチ仕様となると規格が13mmに口径がアップされている。これは空軍預かりの機銃が13mmに変更されつつあるからだ。

ブレットの放った弾丸は的を斜め左に横切り、的は切られた様に壊れる。

反動を抑えられずに銃身が横にずれ、それを制御しようとした瞬間に銃身が斜めに移動した事の証拠だった。

「凄い反動ですね」

MG42の感想を漏らしながらM1919に持ち替えて使うがこれもまばらに着弾して、扱い切れていない。

M1918は中央こそ外すが中心の円の中にはしっかりと収めており、形状的に扱い易いと使用火器候補に止める。

ブレン軽機関銃もM1918と同程度の精度を見せるが形状的に好きになれないと言つて使用火器候補から外す。

99式2号2型改13mm機関銃はMG42と同様に13mmと反動が大きい事も有り、扱い切れて居なかつた為に候補から外される。

フリーガーハマーは2発目以降は普通に当たると言う結果を見せるとミーナは内心で頭を抱える。

ミーナは可能ならMG42を使用して欲しいと思っていた。というのはこの基地ではMG42が主流であり、補給や修理から考えるとMG42が有利だ。弾丸が一緒と言う事で99式でも良かったがそれも扱い切れていなかった。

「あの、ミーナ中佐？ 少しお願いが」

「あら、何かしら？」

「少し気になる銃器が見えたのと、45ACPをお借りしても？」

「45ACP弾ね。良いわよ、それと気になる銃？」

「ボーイズ対戦車ライフルです。ありましたよね？」

ミーナは倉庫の隅で埃を被っていたブリタニア製のボーイズ対装甲ライフルかと理解すると了承する。

暫く待っていると肩にボーイズ対装甲ライフルを担いだブレッドが腰に銃を2丁吊り下げてやって来る。

「それは？」

「トン普森短機関銃ストライカーズ仕様です」

ミーナが腰の銃を指差すと対装甲ライフルをテーブルに置いてホルスターからトン普森短機関銃ストライカーズ仕様を取り出す。

通常のトンプソンと違うのはまず、銃床が廃止されている事とハンドガードにタイプライターの様なフォアグリップが付けられている事と銃口がサプレッサーなどを取り付けられような加工がされている事だった。

「トンプソンストライカーズって呼んでます。戦闘機に入れてる銃でMP40より短く、威力があるので好きなんですよ」

トンプソンストライカーズにマガジンを入れると左手をフォアグリップに、右手はグリップを握って構える。

その構えは完璧に近い構えなのだが、あまりにも独特過ぎる構えにそれが完璧に近い構えだとは気付く501メンバーは居なかったが、その中央から弾丸1発分ずれた場所を全て奪い去ったブレットを見れば、構えが正しいと認めざるを得ないだろう。

だが、ブレットは使い魔を出したままだったのか普通にグリップのみを握っただけで撃つと中央に命中どころか内側の円を全てくり貫いてしまう。

「やっぱこれだな。サブウェポンをこれにしても？ 中身は殆どトンプソンですけど」

「ええ、良いわよ……」

見たことも無い銃に不思議な構えを見せられてから構えなんて無い撃ち方で十分な精度を見せたブレットを不思議な感情で見つめるミーナの眼の前でブレットはボーイズ対装甲ライフルを5発放つ。

5発共中央から弾丸半分がずれているが、ボルトアクションにしては速い装填と早撃ちだと考えると十分な精度を持っていた。

「メインをコイツにします。宜しいですか？」

「ええ。わかりました」

ブレットの愛銃がボーイズ対装甲ライフルMk. Iとトンプソンストライカーズが彼の愛銃となるが何かあつた時の為と彼に割り当てられた武器庫にはフリーガーハマーとM1918が納められた。

そして、物語はこの日から1週間後に動き出すのだが、それを知るのには遠い未来の話だ。

## 第5話 問題と買い出し

ブレッドがこの世界に来てから8日が経った頃によく彼の愛機となるウルトラマリンスピットファイアMk. IXが到着し、搬入後の整備や調整が終わり、シャーリーが先導機を務めて訓練飛行を開始する。

1週間はムスタングを使ってユニットの稼働訓練をしていた事もあり、1週間で稼働可能な領域に持つて行く事に関しては最速の名を手にしたブレッドだがいざ飛ぶとなるとどうなるかわからない。

いざと言う時の為にバルクホルンと美緒が上空でスタンバイしているのを確認するとブレッドは空を見上げると息を吐き、滑走路の先を見据える。

「エーテル反応は正常…魔力回路は異常なし…エンジン音良好、整備兵に感謝…魔力制御はなんともない…脱着にも問題無し…発進促進装着にも異常無し…」

ブレッドが自分の耳に付けているインカムに触れる。

《こちら、ブレッド。これより離陸します。通信は聞こえますか？》

《ああ、聞こえてるぞ！》

《良かった。少し安心しました。離陸開始準備完了！ 安全ロック解除！ Go!!》

ユニットを遮るロックが外れると同時に競走馬の様に発進したブレッドは滑走路を走り、離陸する。

「よし。ついて来い」

シャーリーの隣に並ぶとシャーリーが肉声で呼び掛けた後に先行するとブレッドは編隊飛行での2番機の位置に位置取りをしながら編隊飛行を開始する。初めはストライカーユニットを履いている感覚と飛行機との操縦方法の違いに慣れず、何回も編隊から外れてしまう場面が見受けられたが、飛行を開始してから暫くするとブレッドは水泳の様な物かと極力上半身を動かさずに戦闘機の動きを体重移動で再現する事で後半には編隊飛行を完璧に維持する。

「やるな！ じゃあ、これなら！」

シャーリーがウィッチ特有の戦闘機動を見せる。戦闘機とはかけ離れた機動に面食らうが何とかシャーリーの動きを見ながら見様見真似で真似を繰り返してなんとか食い付いて行く。

これには理由がある。

この時のブレッドの脳内はハリケーンでバトル・オブ・ブリテンに参加した時の事をすっかりと無意識の間に隊長の言葉である『しっかりと俺のケツを見続けろ』を思い出しながら、必死に喰らいつつ行く。

生き残る為に模倣する。

それこそが彼をエースにまでのし上げた最初の技術だった。

ブレッドの飛行を地上から見ているミアナは感心した様子で微笑んでいると訓練を一通り終えたブレッドがシャーリーと共に着陸、ユニットを固定すると銃の準備を始める。

次の飛行訓練は体重に変化が生じる武装状態での訓練である。

銃の準備を終えたタイミングでミアナがブレッドに話し掛ける。

「見させて貰ったわ。初めて履いたとは思えなかったわ

「必死で後ろに食い付いていただけですよ」

「お？ 私のお尻に魅了された訳じゃないのか？」

2人の会話にからかいの笑みを浮かべながらお尻を見せつける様なポーズをするシャーリーにブレッドが真顔で返す。

「ご自身に魅力を理解しているのは宜しいですが、明らかに目を出していると離れる男性も居るので、理解しておく方が良いですよ。それじゃあ、次の訓練の先導をお願いします」

一足先に離陸したブレッドをシャーリーが予想外の返しに顔を赤くしながら後を追う様に離陸する。

「あのシャーリーさんにあんな反応させるなんて、一体、どんな経験を積んできたのかしら」

ブレッドの過去に若干の興味を抱きつつも2人の訓練を見守るミアナの眼の前でブレッドは精細さを欠いた機動を見せる。

やはり、改造されて、重さの増したボーイズ対装甲ライフルの重量に振り回されている様だったが、その重さを上手く利用してホバリン



グしながらの方向転換を見せるとミーナが手元のファインダーにペンを走らせる。

「彼の強さは適応力とその頭の回転の速さと深さ。色々な知識を浅くても広く持つているから私達とは違う考え方も出来る……今まで見た事ないタイプね」

ある程度の機動ができる様になると2人は模擬空戦を開始する。

シャーリーの射撃を掻い潜りながら接近し、シャーリーが回避を行うが攻撃する素振りを見せる事無く通り過ぎるが対装甲ライフルを振って重心を一時的に前に入れ替えると片足を垂直を斜め後方に向け、もう片方は横に広げる。

すると垂直が横に回るエネルギーと斜め上方に向くエネルギーを生みだし、銃を振った勢いが前に移動した重心の勢い任せに向き直り、同時に構えを取る。そして、構えた先にはシャーリーが飛行しようとするルートであり、戸惑う事無く引き金を引く。

撃鉄に雷管を叩かれたペイント弾がシャーリーへと迫るがシャーリーはこれをロールでギリギリで回避、お返しとBARを構えるがその時には背中倒しで降下したブレットが第2射の準備を済ませている。

「マジか!？」

背中倒しで降下した事でシャーリーの予測位置から大きくずれた位置に移動してブレットを攻撃するには銃の構え・狙い・放つの三動作の狙いから始めなくてはならない。そして、この動作の遅れが致命的な差になるのは空でも陸でも同じ事。

シャーリーは反撃を取り止めて回避行動を行うがシャーリーが回避するよりも速くブレットは引き金を引くが初速の遅いボーイズ対装甲ライフルの弾丸がギリギリで躲かれてしまう。

「クソー！」

悪態を吐きながらボルトを動かして次弾を装填しつつ逃走すると先程まで居た場所にペイント弾が殺到し、ペイント弾の嵐はブレットを追い掛ける様に迫ってくる。

「一旦、雲の中に……」

手頃な雲の中に入ると同時に魔導エンジンの回転数を抑えて、音も抑えながら耳を澄ませる。

聞き慣れたムスタングのエンジン音を見つけて、目を見開くと同時に上昇、雲から突き出ると同時にボーイズ対装甲ライフルを構えるとサイトの中にシャーリーの背中を捉えると発射。

上昇で避けるシャーリーをホバリングしながら装填し、追撃。そのままホバリングしながら僅かに銃を振りながら銃の重心移動を使って細かな動きでシャーリーの未来位置を予測して射撃を加えるがシャーリーも予想を反する動きで弾丸を回避して行く。

「(これでラスト)」

最後の10発目をギリギリで避けられたブレットにシャーリーのBARから放たれた7.62mm弾が飛び込むがボーイズ対装甲ライフルを投げて迎撃する。

「はあ!？」

「貰い!？」

今までのウィッチでは考えられない回避方法にシャーリーが驚きから固まった瞬間にトンブンストライカーズを胸のホルスターから抜いて45ACP弾のペイント弾を放ち、胸と太腿に着弾させる。

「よし! 勝った!」

投げたボーイズ対装甲ライフルを美緒が回収して合流すると空中で小躍りするブレットに声を掛ける。

「まさか、銃を投げて防ぐとはな。だが、ネウロイが相手だところの方法は使えないぞ」

「え?」

ああ、教えて居なかったなと美緒がネウロイに関しての新情報として武装が銃弾では無く、レーザーやビームと呼ばれる非物質的な物である事を告げる。

「全弾躲せとかなんと言う無茶を……」

「その為のシールドだ。これを見ろ」

そう言っただけで目の前で手を翳すと見た事の無い文字が描かれた青い円盤を生み出す。

「これがシールドだ。ストライカーユニットを装着していれば誰でも扱える」

「ん？ シャーリーも扱える筈ですよね？」

「これを使ったら回避の訓練にならないだろ。魔力の殆どを飛行に回してるんだ」

「成る程、可能な限り飛行と戦闘に魔力ソリースを割きたいですからね。躲せる技術は決して無駄ではないと」

ブレッドの言葉に美緒は笑いながらそう言う事だと肩を叩くがその威力が強かったのか肩を抑えるブレッドに銃を渡すと次は回避ではなく防御を意識して動く様に指示して劣位優位無しの模擬空戦を始める。

空戦の複雑な機動を見ながらミーナが双眼鏡でブレッドを見守る。回避に走りそうになるブレッドが何とか防御しようと腕を構えるがシールドが出せずに体をペイント弾で汚して行く。

「シールドの展開が出来ないのかしら……」

ミーナの心配そうな表情を元に弾切れとブレッドの疲労が重なった為に訓練を切り上げて地上に戻るとルツキーニにオレンジの単色に塗りたくられたブレッドを見てルツキーニが腹を抱えて笑い出す。

「体力があつたら抱き付いて前面だけオレンジ色にしてやるのに……」

と、色々な点で恐ろしい事を呟くが美緒から風呂に入って来いと言われて風呂場へと向かって行くブレッドを見送った美緒がミーナに話し掛ける。

「どうだ？」

短い問い掛けだが、付き合いの深いミーナだ。美緒の言わんとしている事に気付き、指を顎に当てる。

「機動や戦闘面では戦闘機パイロットの経験と陸軍の兵士と思える程に銃器の扱いに精通…実戦に出しても心配はないわ……シールドが張れないこと以外はね……」

美緒が頭を掻き始める。

ブレッドはシールドが張れない以外は特に問題の無い即戦力だ。

だが、シールドが使えないと言う事はあがりを迎えたウィッチを戦場に出すような物であり、決して容認できる内容では無い。

その問題はこの世界の住人では無いブレッドにすら理解が及ぶ物であり、頭からシャワーのお湯を被りながら、うち削がれていた。

「シールドが張れないか……致命的だよな……クソ！」

すぐ横の壁を小指側から叩きつけた事で流れる湯に赤い物が混じるがそれを気にしていられない程に追い込まれていた。

「ルッキニーを裏切れないよな……」

初日以外でも交流を続ける数少ない人物でもあり、一種の尊敬すら抱いている少女と一緒に戦うと宣言し彼女もそれを受け取り、仲間だと認めてくれた。

初めて認めてくれた人の片割れ。その恩も含めて裏切れない。

「手当てだな……」

少し落ち着いた瞬間に走った右腕の痛みに湯を止めると身体を拭いてから、替えの整備兵用の服を着ると傷口を直接押さえながら医務室へと歩を進めた。

シールドが出せない。

その事がわかって1週間。何かの前触れなのかブレッドが501に来てからネウロイは攻めて来ていないがシールドが出せる兆しすら見えない毎日にブレッドは日に日に焦りを募らせて行く。

そんなブレッドにミーナが声を掛ける。

「少し街に買い出しに行ったらどうかしら？」

そう言われて、飛行訓練を終えたばかりのブレッドに話し掛ける。

ミーナが気分転換を行う口実をくれた。向こうの世界で何度か教官がしてくれた事を思い出して素直に頷き、ロンドンの街へとトラックで向かっていた。

何故にトラックなのかいえば、何かあった時に飛んで欲しいと言う

ミーナの言葉があつた為に促進装置に接続したユニットを積んでいくからだ。

ミーナはシールドが出せなくても見捨てる筈が無いという意味で言っていたのだが、ブレッドはこれを見捨てていないと言う口実の様に思っている為に真意を掴めていない事にブレッド自身は気付いていない。

トラックを邪魔にならない場所に止めると買い出しリストと店の名前を書かれた紙を取り出すのだが、此処でミーナのミスが発生する。と言うのも殆ど一緒の街だろうと思っていた為に地図を書いていなかった。

実際に道の位置や長さ、形状こそ同じだが彼の記憶に無い店があつたり、ある筈の店が無かつたりと完全に別物の街と化しており、道に迷った訳では無いが特定の店を探せないと言う事態に陥ってしまう。

「……………こういう時は聞こう」

わからぬ事は恥では無い、わからぬままに居るのが筈である精神で首を左右に動かすがこの時間は昼食時とあつてか人は疎らで居ても道が聞き難い雰囲気の人ばかりだった。

「(こんな時に日本人達の人の良さがわかるなんて…………)」

初めての乗艦した空母で道がわからないでいると道を教えてくれた零戦パイロット達の顔を思い出して懐かしさから頬に涙を流している背中になんか当たり、バランスを崩す。

「ぐっ、ぐめんなきいー」

震える身体にクリーム色の髪を三つ編みにした少女が必死に頭を下げている。

「そんなに怖がらないでくれないかな？　少し傷付く」

「ぐっ、ぐめんなきいー」

このままでは埒が明かれないと思つたブレッドはメモを見せてこのお店まで案内してくれとお願いすると少女は頷き、丁寧な案内と女性の買い物に疎いブレッドを補佐しながら店を回つて行くが数時間もすれば荷物は一杯になり、一旦荷物を置きに戻つたブレッドは休憩がてらカフェに少女を誘う。

「あの、本当にごめんなさい」

「気にしていませんよ。それに案内だけでなく買物の補佐までしてくれたではありませんか。お礼を言わせて下さい」

頭を下げるブレッドに少女が慌てながら頭を上げるように言ったタイミングで頼んでいた紅茶とケーキが届き、2人は取り敢えず食べようという流れになるが数口食べ進めた所でブレッドが思い出した様に呟く。

「名前を言い忘れてましたね。私はブート・フィリップだ」

軍人である事と本名を隠して自己紹介をする。これもミーナからの指示で向こうの世界では27歳だったがこっちでは見た目が15歳か16歳程度の少年になっている事とウィッチでも無いのに少尉は可笑しいと言う事で無用な混乱を防止する目的で軍人である事と本名を隠している。

「私はリネット・ビショップです。ウィッチの養成学校通っています」

ブレッドはどうした物かと考えて、世間話を振るように告げる。

「道の端で立っていた私に当たったのが縁の始まりだったね」

リネットがまたも謝ろうとするのを手で制しながら先を続ける。

「何か悩み事かな？」

ブレッドの言葉にリネットが少し迷う様な素振りを見せるが話せば気が楽になると言うのとゆつくりと話し始める。

曰く、祖国であるブリタニアが存亡の危機に立たされている事とその防衛の要となるウィッチになる事は決定したが自信が無くて不安である事。

訓練での実力を買われて501基地へと配属が決定するがやっていけるか心配だと言う事を話す。

ブレッドは父が501基地の基地員に居ると偽って所属するウィッチや雰囲気を話したりするがやはり不安と心配を匂わせる雰囲気をだすリネットにブレッドが手を伸ばそうとした瞬間にロンドン中に聞き慣れた警報が響く。

「空襲警報か！」

「どうして、此処までネウロイが……それよりも早く塹壕に行って下

さい！」

それだけ言い残すとリネットが走り去って行く。養成学校の生徒と言えども軍人の1人に割り込まれる以上はこう言った場合の職務があるのだろうと納得するとブレッドもトラックへと向かい、暗幕を剥がすと荷台に飛び乗り、促進装置のカバーを剥がすと出撃準備を整えながらミーナにインカムで連絡を入れる。

《中佐！ 状況を！》

それなりの大きさのポシエットを複数個付けたベルトを上半身に羽織る様に着ながら叫ぶ。

《ロンドンに空襲にきたネウロイですね。こっちの戦力は護衛に飛んでいた大型ネウロイに割かれています》

靴と靴下を脱いで素足にすると促進装置の上に乗っかる。

《本土防空隊は!?!》

装置の上に乗せていた本皮のウエストポーチを身につける。

《此方も大型ネウロイの護衛の所為で超大型ネウロイだけをロンドン上空への侵入を許し掛けています。ブレッド少尉、貴方はロンドンの空に入るまでにネウロイと接敵して、時間稼ぎをして下さい》

ミーナの通信を聞きながらウエストポーチにボーズ対装甲ライフルの弾倉とトンプソンストライカーズのドラム弾倉をポーチに入れ、ベルトにつけたポケットには通常弾倉を入れ込み終わると胸にトンプソンストライカーズを吊るすと同時にブレッドの足はユニットを履くと何個かの手順を省いて、魔導エンジンを作動させる。

装置の横から現れた改造ボーズ対装甲ライフルを手に持ち、ボルトを動かして薬室を露出させると直接的に手で1発を装填した後に弾倉を装着する。こうする事で強化弾倉により10発に増えたボーズ対装甲ライフルに11発にして持ち運べる。

《時間稼ぎをするのは構わないが、別に撃墜してしまっても構わないだろう?》

吐き捨てると同時に離陸したブレッドにミーナは諦めた様子で方位と高度を教えるとブレッドはその方向に飛び去って行く。

ミーナは司令室の椅子に座りながらブレッドの帰還を祈るしか出

来  
な  
か  
っ  
た  
。



## 第6話 その身を献身的に捧げよ

本初子午線を真っ直ぐに下りながら迫る大型ネウロイを見たブレッドが抱いたのは向こうの世界で資料としてみた事のある全翼機の新型兵器だった。

ブーメランの様なシルエットにレシプロエンジンを思わせる突起が16個にジェットエンジンを思わせるパーツが6つに機体サイズに対して小さく見える尾翼が8枚に大量の赤い六角形の装甲。

「いや、変形するネウロイはいないだろうし、偶然の一致か」

ボーイズ対装甲ライフルの安全装置を外すと同時に構えて発砲。弾丸が飛び出したと同時にネウロイの赤い六角形の場所が赤く光り出してビームを発射する。

ブレッドは2発目を諦めると回避行動を起こしてビームを躲しながら一定の距離を維持する事に努めながら攻撃の機会を窺うが向こうは大量のビームを浴びせて攻撃をさせない様にする。

それでも、ブレッドはしつかりと狙っている訳ではないが射線が重なる度に引き金を引き、ドンと重く腹に来る銃声と共に発射された弾丸はネウロイに着弾し装甲を奪い去って行くがコアと呼ばれる多角形の赤い結晶は露出しなかった。

「まあ、端にあつたら驚きだよな」

ブレッドは急上昇を行いネウロイ直上に移動する。

自分は最も得意とする位置に着いた事を確信すると銃を構え直して背面急降下を開始する。

若干な弧を描いて抉りこむ様に迫るブレッドにビームの応射を行うネウロイだがその全てが悉く外れ、ブレッドに残りの4発を胴体中央に叩き込み、白い破片を大量に撒き散らす。赤い結晶は露出せず、ブレッドは露骨に舌打ちをしながら煙と破片を突っ切って下方に逃げると弾倉を交換し、ネウロイの下面に銃口を向けた瞬間にネウロイは下面に隠していたのか小型ネウロイの群れを放って来る。

「マジかよー」

取り敢えず1発を放つが小型ネウロイを3機貫くだけで終わって

しまう。小型ネウロイは通常兵器でも撃墜可能なネウロイと言うだけあってかそれなりの強さしか無いが多数に囲まれた事でボーイズ対装甲ライフルを放つ時間が無くなってしまおうとライフルを背負い、胸からトンプソンストライカーズを取り出して、コツキンググレバーを引いて、初弾を薬室にねじ込む。

「喰らえー！」

トンプソンストライカーズを構えた小型ネウロイが突如として碎けると大量の弾丸が小型ネウロイの群れに向けて放たれ、ブレットは急いで退避する。

ブレットが退避した事で遠慮がなくなったのかさらに激しさを増す銃弾を頭上にしなから弾丸が飛んで来た方向に向き直るとそれなりの数のウィッチが飛んでいたが、飛び方がブレットの目から見てもまだ拙さが残るのを見て、養成学校のウィッチだと悟るとインカムを操作していた。

《501基地の者だ。諸君らには小型ネウロイを引き剥がして頂きたい。大型は此方で引き受ける》

恐らくはウィッチの教官であろうウィッチが通信に答えると小型ネウロイにのみ目標を定めて空戦を開始するのを見て、ブレットも大型ネウロイへと向かう。

ブレットは横から通り過ぎるルートを飛びながら薙ぐ様に45ACP弾を当てて通り過ぎるがダメージになっっていないと言わんばかりにビームを放って来ると弾切れを起こした弾倉を捨ててドラム弾倉を取り付けるとブレットはネウロイのある部分を睨み付ける。

ブレットは武装が少ない下面を通って前に出ると上昇を開始、ネウロイも2度目は無いとビームを放って来るが上昇し切る前に反転、浅い角度からレシプロエンジンを思わせる突起物を2つ破壊するとそのまま下面へと逃げ、上昇を開始、今度は昇り切ってから浅い角度で突入して、右翼に残った6つを破壊する。

ブレットが行ったのは対爆撃機の常套手段の1つでエンジンを破壊すると言う物だ。

爆撃機は攻撃に耐える為に頑丈に作られている物が多く、攻撃側は

強力な火器か大量の火器を積む、操縦席を狙う、比較的脆いエンジン部を狙うと言う戦術を生み出す。

他のパイロット達はコクピットを狙う傾向が強いがブレッドは爆撃機は嫌いだがそこに乗る搭乗員達には敬意を表すると言う人物である為に可能な限りはエンジン部を狙う人物だ。

「これでどうだ！」

突起を破壊したブレッドが見たのは再生しない突起だった。突起が弱点だとわかるともう一度左翼にも接近するが今度は下面を背面飛行をしながら通過、その時に突起物に向かってトンブソンストライカーズを発砲して1つを破壊すると通り過ぎる前に背面急降下で反転し下面からの上昇攻撃を開始、もう1つを破壊するとネウロイは甲高い耳障りな音を発すると爆弾蔵だろう場所が開き、中から小型ネウロイが現れる。

一旦、大型離れて小型に専念しようとした時に養成学校集団から逸れてしまったウィッチにぶつかり、お互いに体勢を崩してしまうがブレッドはぶつかったウィッチの襟首を掴みと魔導エンジンをカットして、重力に従い落下すると2人がいた場所に複数発の赤いビームが通り過ぎて行くと落下しながら45ACP弾でビームを放ったネウロイを撃墜する。

「す…：凄い。これが501のウィッチ…」

「ワイザードだけだな」

学校では習わなかった回避技術と正確な射撃について口走った言葉にブレッドが反応するとブレッドが助けたウィッチ、リネットが驚愕で思考が一瞬だけ停止する。

「大丈夫だったか？」

迫る小型ネウロイを数発の45ACP弾で破壊しながら背中合わせに飛びリネットに語り掛けるブレッドにリネットは慌てながら銃を構えて大丈夫と応答する。

だが、余りにも力が入り過ぎた構えの所為で安定しないホバリングと相まって全く当たらない弾丸を見て、ブレッドが語り掛ける。

「小型は俺がどうにかするから、大型を狙え。あれなら当たるだろう。」

狙うのは突起だ」

迫る小型ネウロイを破壊すると乾いた音を鳴らすだけになったトンプソンストライカーズからドラム弾倉を外して、最後のドラム弾倉の取り替えて、凄まじい勢いで小型を仕留めていると彼の周りに楔に戦闘機の後退翼を足した様なオレンジと赤白い光を放つ物体が1つ浮かび上がる。

それに驚いたブレッドがネウロイの接近に気付くのが遅れ、リネットの叫び声で気付いた頃にはどうしようも無い距離にまで詰められていた。

小型ネウロイの赤い部分が輝きを増して行く時間が永遠の様にも思えた瞬間に浮かび上がった物体から楕円に円形の安定翼を足した様な同じ色に同じ光を発する物体が射出され、小型ネウロイに突き刺さるとジワリジワリと深く突き刺さって行き、ネウロイが砕けるとぶれる事無く凄まじい速度で飛んで行き、大型ネウロイの盾になろうとした小型ネウロイ達を貫通しながら突き進み、大型ネウロイの突起物を貫いた。

「な、なんだこれ！」

理解が追いつかないブレッドだが、ネウロイは関係無いと言わんばかりにビームを放とうとする為にブレッドを横に浮かぶ物体を無視して射撃を開始すると特にこれと言った指示を出していないに関わらず先程の攻撃を一定のスパンで立て続けに発射し出す。

「リネット！ 大型を狙え！」

リネットも放心状態だったがブレッドの叫びで銃を大型に構えて発砲するが弾丸は惜しい所を通って外れてしまう。

「リネット、重力の影響は弾丸も受ける。撃ちたい場所より上を狙って見ろ」

小型ネウロイを破壊しながら話すブレッドの言葉にリネットは照準を上に向けて放つと突起にこそ外したが胴体に命中させる事に成功する。

「よし！ さっき撃った場所から逆算してもう1発叩き込め！」

2発目は突起の根元に叩き込む事に成功し、根元を吹き飛ばされた

突起物が空中を乱回転しながら落下する。

「そうだ！ 初弾から当てる必要は無い。上手い操縦士は初撃じゃ無くて2回目以降のアタックが上手い奴だ。2発目移行を確実に当てていくんだ」

「は、はいー」

そして、引き金を引いたリネットだが弾丸が吐き出されない事に慌て始めるとブレットが落ち着けと叫び、ボルトにゴミが詰まっていな  
いか、空薬莖を挟んでいないかチェックするべき事を叫んだ事で何と  
か落ち着くとリネットが叫ぶ。

「ブートさん！ 弾が……」

「これをー」

身体に着けていたベルトのポシエツトからボーズ対装甲ライフルの弾倉を取り出して手渡す。

「弾切れになったら言え。まだ何個かある。45ACPはこれで撃ち止めだがな」

ニヒルな笑みを浮かべながら最後の弾倉の底を叩いてしつかりとはめ込むと銃口を小型ネウロイに向けながら飛び去って行く。

リネットは銃口を残りの突起物を狙って発射を繰り返す。

「これでラストー」

残りの1発に魔力を多く込めて放つ事で小型ネウロイを一撃で粉砕して見せるが完全に沈黙したトンブソンストライカーズを胸に戻すとライフルに持ち直し、迫る小型ネウロイは魔力の刃で撃破しながらリネットの狙う突起物とは違う突起物を狙う。

リネットよりも近い位置と言う事もあるが第1射から突起物を掠らせる  
と魔力で強化された弾丸は突起物の装甲と共に内部にあった小さなコアを破壊するがブレットは気付かずに2射目を中央に直撃させたタイミングでリネットも5回目の射撃で突起物に直撃させる。

その後もブレットは1個の弾倉で5つ、リネットは2つで3つ破壊するとネウロイの翼にヒビが入り、ジェツトエンジンに似た場所からジェツト噴流を噴き出しながら急加速を行う。

「まぜー」

もう一つをロンドンは目と鼻の先。ユニットに魔力をさらに流し込むとユニットの排気口から炎を噴き出しながら加速するブレッドにリネットは加速を遅れてしまった為に置いてかれてしまう。

「(この距離なら)」

ボーイズ対装甲ライフルを構えるが高速飛行中の安定性は高い方ではないブレッドにとっては銃がブレれてしまっているが何とか腕の力でブレを少なくしながら発砲を繰り返す。

弾丸は上や下を通る弾もあつたが放った20発の内15発は上部装甲に命中するとネウロイが変形を始めた為にブレッドは追い越してしまう。

振り返った先にはスカートを履いた女性をモチーフにした様な口ポットの姿をしたネウロイが現れるがブレッドにはその姿は記憶の中にあるそれと類似しているが違いとしては色が黒い事とハニカム模様がある事、腰から発生する防御シールドが青では無く、赤なのが数少ない相違点だ。

「クソが！」

ロンドンなどもう直ぐだ。その焦りがブレッドの動きを鈍らせると同時に変形した事で攻撃パターンが変わったネウロイへの対応力すらも奪って行く。

ブレッドも何とか反撃にボーイズ対装甲ライフルを放つが肝心の弾丸はシールドにより防がれ、頼みの綱である魔力の刃も受け止められ、貫通寸前に露散してしまう。

それでも、諦めるなど考えていないブレッドはビームを躲しながら隙あらばボーイズ対装甲ライフルから弾丸を放つもネウロイはシールドに任せたゴリ押しで徐々にロンドンへと近付く。

そして遂にロンドンの町並みを肉眼で捉えた瞬間に焦りが増え、それきり比例する様にボルトの動作が速くなりあつと言う間に10発を撃ち切つて漸く、シールドを剥がす事に成功するが弾倉がない事に気付く。

「弾切れか……」

銃で殴ると判断して、持ち直したタイミングでネウロイは腕の様な

部分を頭上に掲げる様なポーズを取ると腕の間に球体状のビームを作り上げる。

「収束ビーム……」

ミーナの座学で聞いた特徴に似ているビームのボールを見て何が来るか予想すると急いでその場を退避する。

その顔にはシールドが張れない自分を責めるのと悔しさが滲み出しながら安全だと思える程の距離を取ってから向き直ると敵が狙うだろう場所にある建物を見て、王立空軍として性かネウロイの前に躍り出る。

ネウロイは前に躍り出たブレッドに気にする事無く収束ビームを放つ。

ブレッドは迫るビームに恐るどころか手で押さえるかの如くビームに両手を突き出すと脳裏にハリケーンに乗って初陣を飾る時に隊長のハリケーンパイロットが鼓舞の為に告げた言葉であり、部隊の標語になった言葉が蘇る。

「女王陛下と臣民の為……」

手に魔力が無意識の内に注がれるのを直感で理解する。

「その身を献身的に捧げよ！」

その叫びと共に炎で作られた赤と橙色に輝くシールドが張られ、ビームを押さえる訳では無く、触れた先から消失させている。普通のウィッチと違うシールドに防ぎ方だが、異世界の人間に異世界の使い魔だ。違うのは当然なのだが、当の本人はビームを防いだウィッチを見た事がない為に色や作りが違うだけだと思ってしまう。

全てのビームを防ぎきると今度はこっちの番だと半分は無意識に弾切れになったボーイズ対装甲ライフルをネウロイに構える。

何をしているのだと構え終えた瞬間に一瞬だけ脳裏を通り過ぎるがそれよりも強く引き金を引くと命令する本能に従い引き金を引く。

引き金を引かれたボーイズ対装甲ライフルの銃口からは30cmはあるだろう爆炎がジェット噴流の様に噴き出し、ネウロイの正面装甲を融解させた端から炎の吹き出す圧力で吹き飛ばし、吹き飛ばした装甲さえ溶かしながら他の部分も破壊する。

それを遠くから見ていた養成学校のウィッチ達はロンドンの空が赤く輝く空を何かこの世の物とは思えない物で見ているとネウロイの身体に炎が引火し全身を包んでいき、片腕を燃やし尽くし、もう片方の腕は肩から焼き切れ、直撃を受けた胸部はチーズの様に溶けて行き、腰は炙られ、柔らかくなつた所から風圧により引き千切れ、頭部の装甲は吹き飛び、融解すると多角形の赤い水晶体が現れる。

「燃え尽きろー！」

更に魔力を込めたブレッドによりサイズと火力、圧力さえも増した炎にコアは体ごと焼かれ、溶け、砕かれ、溶けるとネウロイは白い破片となつて碎けるがその欠片さえも炎は燃やし尽くすと炎は細くなつて行き、何事もなかつた様に消え、青い空に戻る。

「守れたかな……」

背後を見るとネウロイに狙われていたであろうバツキングム宮殿は無事にその優雅な姿を残しており、その屋根には王旗が風に靡いているのを見て、満足そうに笑うと銃を放す事無く、気絶すると魔法力が注がれなくなつたユニットが停止して、落下を開始した瞬間に加速の固有魔法を発動させたシャーリーにユニットと銃ごと抱えられる。

「よくやったよ。お前は」

そのシャーリーの言葉をブレッドは聞く事は無かつた。



## 第7話 ジャズと新たな仲間

「ん？ 太陽の高さ的に昼かな……」

ブリタニア防衛戦を終えたブレッドが支給された部屋で目を覚ます。

時刻は昼の13時を示す位で眠りも出来ない為に基地の誰かを探して、誰かに着せられていたであろう薄い布を服を脱いで軍服に着替える。

普段の格好はカッターシャツにオリーブ色のネクタイを締めて、上にブリタニアが軍服として採用しているトレンチコートに短パンと彼が街で買い出しに行った時の私服を混ぜた物だが色合いやデザインは可能な限り軍服と混ぜても違和感が無い物を選んでいる。

「訓練飛行はしてないのか？」

外が静かな事を不思議に思うが何かあるだろうと直ぐに視線を前に戻すと誰かが居るであろう基地のリビングルームとも言える談話室の扉を開ける。

「居ないのか……うん？ ピアノなんかあったか？」

談話室に入ってパツと目に映った物に首を傾げるブレッドだが、この部屋に置かれているピアノは彼が来るよりもずっと前、設立されてから暫くした後に来た物なのだが、ブレッドが男と言う事で少し引け目を感じていた事も相まって、呼ばれた時だけに訪れ、用事が終わればそそくさと退散していた。

その為に気付いていなかったただけなのだが、それを知らないブレッドはピアノの鍵盤に被さった蓋を開けると鍵盤を弾いて軽くではあるが曲の冒頭10秒だけを弾く。

部屋に幻想的で悲しげな曲が響くがそれに反応する者は居ない。

ピアノはしっかりと調律がされた音を奏でると急ぎの用が自分にも他人にもある訳では無く、何か音はすれば向こうから来るだろうと思うと何か弾きたいと言う感情が現れる。

誰かが来るまでか一曲終わるまでと自分に言い聞かせながら、ピアノ椅子に腰掛けると高さを調節して、腕を振って服を払い、弾きやす

くする。

そのタイミングで何か視線の様な物を感じて首を回すと階段から、扉の隙間からブレッドを伺う様に見える501のメンバーを見つけると頬を微妙に赤くしながら口と目を開く。

ブレッドは何かあったのか聞こうかと口を動かす前にミーナが微笑みながら弾いてみて頂戴とピアノに5本の指を揃えて指すと観念した様に微笑を浮かべたブレッドが両手を鍵盤に乗せて、弾き始める。

引き始めた曲はジャズと呼ばれる比較的自由的な演奏が特徴的な音楽で音楽の道を歩いていた隊員が居る501では聞き慣れない演奏であった。

曲の冒頭はテンポが良く、速く、聞こえるが印象的には幻想的で儂さを感じさせるメロディーを複数回繰り返すと今度は儂さが増えた同じメロディーを数回繰り返す。それが終わると今度は軽やかでテンポの良いメロディーを流し、繋げる様に2回目に繰り返したメロディーを3回程流すとメロディーを切ることなく、最初に流したメロディーを数回流す。これを2回繰り返すと今度は掛け合う様にメロディーを奏で始める。

曲が中盤に入るとピアノの早弾きによる演奏が始まり、曲のテンションが高まると良く聞いたメロディーが軽やかに楽しそうに流れ、ブレッドの顔にも笑みが浮かぶ。

軽やかな部分が終わると終盤に入り、冒頭に引いたのと同じメロディーが流れるが繰り返されるメロディーに何処か楽しさが混ざり始め、シャーリーとルッキーニは身体を揺らしている。それを見たブレッドの顔にも満足気な笑みを浮かべながら鍵盤に視線を移す。

その後は軽やかで力強いメロディーに変わり、聴く者に終わりが近いと悟らせ、突如として曲が終わりを告げる。

ブレッドは音の残響が無くなるのに合わせて両手を顔に被せる様に動かし、残響が無くなると完全に顔を覆ってうつ伏せになってしまう。

やってしまったと言う様な態度だ。

そんなブレッドにシャーリーとルツキーニは大胆に賞賛を送り、ミーナは微笑みながら賞賛の声を上げる。他のメンバーも拍手を送ると余計にブレッドは顔を俯いてしまう。

「良い演奏だったわ。でも、何か物足りないわね……」

ブレッドがミーナの言葉を聞いて、顔を上げる。

「この曲は自分が一番得意ではありませんが、独奏の曲ではありません。即興で少しは物足りなさを無くしましたがやはり、複数の種類の楽器でやった方がいい曲ではありませんね」

その言葉に意外そうな顔を浮かべるミーナの横からサーニヤが声を掛ける。

「聞いた事のない曲に演奏形態だった……」

「ジャズは始めてかな？ 向こうでは音楽では無いなんて言われてたけど……」

「立派な音楽じゃない」

ミーナの言葉にブレッドは曖昧な笑みを浮かべる。

人種差別の話が出る為に黙っておく事にしたからだ。正直に言うとなら国家同士の殺し合いのより闇が深い話題だ。

「まあ、色々と有るんですよ」

「ウイーンでは聞きませんでした……」

「あれ？ こっちのウイーンはオーケストラとかそっち方面が強め？」

ブレッドの言葉にサーニヤが頷くとミーナの手が叩く音が響く。

「丁度よかったわ。折角なのでこの場でお話ししたい事があります」

ミーナの言葉に全員が頷くと部屋に置かれた思い思いの椅子に座り、ミーナからの言葉を待つとバルクホルンが手を挙げる。

「で？ 何かわかったのか？」

バルクホルンの言葉に全員が真剣な表情でミーナを見つめる。

今の501では2つの調査結果を待っている状況で1つは本初子午線を通るルートで迫ってきたネウロイの行動ルートの算出とブレッドが魔法で出した炎の投剣・放射・盾・加速を行った固有魔法の区分である。

「ええ、まずはブレッド少尉の魔法についてです」

投剣と放射は周囲の環境に魔法力を使って作用する事で自然現象を局地的に発生させる攻撃系魔法に分類されると考えられる為に攻撃系魔法と区分すると盾が攻撃系とは言いがたい事と変形したネウロイに追い付いた加速が説明付かない。

かと言って加速などの物体に魔法力を通して、その物を動かす念動系魔法とすると前者の3つが説明付かない。

この事を確認的な意味合いで軽く説明すると結果を告げる。

「以上の事から、念動・攻撃の複合型となりました。次にネウロイのルートに関してですが、ブレッド少尉。貴方の意見を聞かせて下さい」

「了解です」

机に置かれた世界地図を囲む様に集まったメンバーの前でミーナが判明している情報を告げる。

ネウロイの進行や監視を行う観測所の場所と未発見の情報を開示するとブレッドは進行ルート選択の条件を確認する。

条件は2つ。

1つ目は本初子午線を通るルートである事。

2つ目は全ての観測所に捕まらないルート。

観測所の観測可能な範囲にコンパスで作るとこの2つをクリアするルートをブレッドは即座に3つ程発見する。

「1つ目はガリアから出て、ブリタニアを大きく迂回して、本初子午線を通って攻撃するルートですね」

「待て。何故にわざわざ上から攻撃する。確かに本初子午線の海上はギリギリの隙間があるが其処に入る為に迂回したのか!」

バルクホルンの言葉にそんなまどろっこしい事はしないだろうがあり得る話だとだけで言うのと2つ目のルートを指差す。

「オラーシャの勢力圏を経由してバレンツ海に侵入、北極圏を通過して本初子午線に侵入するルートです」

「あり得ないわ。ネウロイは寒い所や海上を通りたがらないのよ」

ミーナの言葉にブレッドは首を振って話し始める。

「可能な個体が現れたと言う事は？ 3つ目はこの仮説が前提ですが、高度を取ってドーバーを横断してから本初子午線です」

「仮説通りだとして、どうして高度を下げた？ 高高度から攻撃出来るならする筈だ……」

「高高度では攻撃出来ない何かがあるとかでしょうか？ 爆撃機でも何かしらの理由で高高度爆撃では無く低空での爆撃を行った例はこちらの世界にはありますから」

その言葉にこれだと言う様な答えが出ずに頭を捻るブレッドの鼓膜にミーナのパンツと手を叩く音が響く事で思考の海から這い出る。

「それと今朝聞いたけどこの501に新人が来ます」

「リネット・ビショップさんですね」

ブレッドの言葉にミーナが一瞬だけ驚く。

「ええそうよ。資料を見たのかしら？」

「今朝の資料をどう見ろと？ 本人に昨日あつて道案内をして貰った時に」

ロンドン防衛の際に空戦でほんの少しだが共闘した事を話すとミーナが丁度いいと言わんばかりに笑い掛ける。

「それなら丁度良いわ。リネットさんが基地に来た時の案内をお願いしますわ」

「案内出来ない場所がありません？」

「中に入れるなんて言っていないじゃない、前を通るだけでも構わないわ。見知らぬ人より共闘した人の方が聞きやすいでしょうし」

其処まで言われると断る理由が無くなり、仕方なく首を縦に振るとミーナが最後の連絡事項を伝える。

「ブレッド少尉に先日の功績を称えて昇進とブリタニアの女王陛下がヴィクトリアクロスを授与して下さいませようよ」

この内容に談話室が騒がしくなる。

曰く、初めて複数のコアと変形機構を持つネウロイに単身で挑み、その身を持ってロンドンを無傷で守り通したその功績と王宮を守る為に敵の火線に飛び込むと言う勇気を見せたブレッドにブリタニア王室は『敵前において勇気を見せた軍人』に対してのみ授与される

ヴィクトリアクロス章の授与を決定する。

そして、このヴィクトリアクロス章の『勇氣』の基準が厳しく、世界各国において制定されている戦功章の中で最も受章が困難な勲章であるといわれている事もあり、周りは騒がしくなる中でブレッドだけは微妙そうな表情を浮かべていたのを誰も気付く事は無かった。

そして、翌日に勲章の授与式が行われると正式にブレッド・フィリップの名は全世界に轟いた。

そして、授与式から3日後の501基地の廊下をブレッドはルツキーニとシャーリーに連れられてブリーフィングルームへと進んでいたがブレッドの顔には何処か迷いがあった。

「どうした？ 勲章を貰って嬉しくないのか？」

「嬉しいですよ。ただ、着けて出席しろってミーナ中佐が言うからですよ」

『折角のヴィクトリアクロスでしょ。新人ウィッチに見せて上げなさい』とはミーナの談だが、この日はリネットの合流がある日だ。

リネットの性格だとかえって萎縮しそうだなと思うと外しておきたいブレッドだが、外したら外したでバルクホルンに何か言われそうだと思うと憂鬱な気分になるブレッドにルツキーニが話し掛ける。

「でも、勲章は貰ったけど階級章は貰って無かったよね」

ああ、それねとブレッドは頷く。

「国と女王陛下、そしてその国民を守るのは王立陸海空軍なら当然だ。昇進する様な事はしていない」

「でも、勲章は貰ったんだな」

「勲章は自身の行動を称えて下さった女王陛下への返礼でもあるから受け取らせていただいた」

話しているとあつという間にブリーフィングルームに着き、シャーリーとルツキーニの近くに着席して暫くするとミーナ中佐の後をついてリネットが入室する。

「はい。皆さん。注目」

ミーナの声で全員が前を向く。

「改めて今日から仲間になる新人を紹介します。リネット・ビシヨツ

「ブ軍曹よ」

「リ、リネット・ビショップです……」

「前にも言ったけど、基地案内はブレッド少尉がお願いします」

ミーナの言葉にリネットが記憶との行き違いがあったのかほんの少しだけ首を傾けるが、ミーナは2、3話すと解散を告げる。

解散を告げられたタイミングで全員が背筋を伸ばして立つとミーナは真剣な表情で見渡してから扉の方へ立ち去って行く。

そのタイミングでブレッドが机を飛び越えながらリネットに腕を伸ばす。

リネットは突然の事で身体を固めるが腕は頭と肩の間を通り、背後に迫っていたルツキーニの首元に張り手を加える直前に使い魔の耳と尻尾を出して魔力強化を加えた一撃を与えてバランスを崩させると足払いの後に組み伏せて、床に押し付ける。

「うにゅにゅ……」

「ワンパターン過ぎだぞルツキーニ少尉。少しは工夫を凝らせ。大丈夫か？ こいつは人の胸を揉むから注意しろよ」

「え、えつと……ありがとうございます……」

想像と全く違うブレッドの行動に面食らいながらも礼を告げるリネットにブレッドはルツキーニの身柄をシャーリーに預けると笑いながら基地を案内すると告げるがその前に残っているメンバーと軽く交流をしてからと告げてリネットから離れる。

数分もするとリネットも他のメンバーから解放されて基地案内を開始する。

「自室の位置はわかるか？」

「は、はい。ブリーフィングルームと自室の場所は完全に」

「そうか」

それだけ聞くと取りあえずはシャーリーがしてくれた順番を辿りながら通り掛かった場所を説明しようとして自分がシャーリーに基地を案内された時の事を頭に浮かべながら歩く。

その後ろを、リネットがついて行くがリネットは無言の時間をブレッドの背中を見ながら考え事に当てていた。

「(ロンドンの英雄：ブレッド・フィリップ少尉……)」

新聞の一面を飾ったキャッチフレーズを思い出す。

ブレッドはブリタニアはおろか世界中で有名になっていた。無論、ウィザードと言うのもあるがやはりはヴィクトリアクロスを授与された数少ない人物だからだろう。

新人のリネットにとっては前を歩くブレッドは雲の上なんてレベルの人物では無い。勿論、リネットの脳内で自分がそんな事になっているなどブレッド本人が知る筈もなく彼は基地の案内を続ける合間の無言の時間を他愛も無い話で潰す。

メンバーの性格から使用機材、自分の好きな物から苦手な物、趣味などを案内の合間で語る。そんな庶民的な内容にリネットは自分の中のブレッド像にヒビが入った様な気がした。

「此処が俺の部屋だ。何かあれば訪ねて構わない。紅茶くらいなら出せるからな」

「え!？」

ウィザードとウィッチは異性だ。別に棟だと思っていたりリネットが驚きから声を上げる。

ブレッドも予想が付いていたのでミーナの『此処に来た以上はみんな家族』と言う言葉を話してこうなっている事を告げるとリネットの部屋の扉を開けて荷物を降ろさせる。

「店なんかはそっちが詳しいだろう。いつか紹介してくれ」

次は食堂だと言ってベットと机と椅子が置かれているだけの部屋から出る。

「此処が食堂だな。任務や罰なんかで来れない奴以外は基本的にみんなが集まって食べる。係りの兵がやってくれるがたまーにお国料理をご馳走してくれる。まあ、大抵は俺だが」

「フィリップ少尉は料理も趣味だと言っていましたね」

リネットの言葉に向こうの世界を思い出す。

ストライカーズに来て、日本人パイロットから祖国の味とアジフライをご馳走された時に今まで食った事の無いフィッシュチップスだとカルチャーショックを受けてから徐々に料理についてもめり込



んだ記憶がある。

それに笑いながら答える。

「ああ、カルチャーショックを受けたからな。次は浴場だ」

浴場の前で立ち止まって新しく出来た規則を話す。

「基本的に俺が来てからはこの木札を掛ける事になっている。たまに忘れる時や奴もいるからこの紐を引っ張ると良いだろう。鈴がなつて居たら、返事が飛ぶ。今は赤が立ってるから誰かが入っているな」

一緒に入りたければ一言だけ告げてくれれば基本OKだと伝えて先を歩くとリネットは顔を真っ赤にしながらい行く。

「談話室、娯楽室だな。給湯室なんかも併設しているから夜にお茶を飲みながら話すなんかに使う。楽器が色々置いてあるが好きに使って良いらしい。暇があつたらあそこのピアノで軽い演奏をするよ。俺が」

ピアノ演奏と言う意外とも言える趣味にリネットが驚いているのを放って外へと出る。

「此処は射撃訓練場だ。土が焼けて素焼きになっている所があるが気にしたら負けだ」

ブレッドの固有魔法の威力を物語る射撃場にリネットが啞然としていると今度は司令塔の天辺に登る。

「飛行訓練中にネウロイが来たら此処で位置と高度を書いたブラックボードを掲げる兵士が出てくるから覚えておく様にな」

ブレッドが手摺にもたれ掛かりながらリネットの方に向く。

「言わなくてもわかると思うが此処はドーバーに突き出た小島だ。攻勢防御や攻勢に出るなら有利だが……」

悪戯に緊張感を持たせるのはリネットによろしくないと言う配慮から完全な守勢になると撤退は難しいと言う言葉を飲み込む。

「あつちはヨーロツパか……」

向こうではあつちから侵攻して来る戦闘機と爆撃機をドーバーで撃ち墜とし、終盤はこつちが渡って侵攻した土地。

今の状況はブレッドにとつては懐かしく、悔しく、悲しく、頼もしい経験となつたバトル・オブ・ブリテンの事を思い出す。

「思い出すな…バトル・オブ・ブリテンを……」

感慨深い目でヨーロッパ大陸を数秒眺めると懐中時計を取り出して時刻を確認して、リネットに語り掛ける。

「滑走路に移動しよう。坂本少佐のありがたい訓練があるぞ」

その言葉にリネットが元気良く挨拶するとセーブしろよと言いな  
がら降りようとするのと振り返る。

リネットは何かあるのかと身構えるとブレッドが口を開く。

「ああ、そうだ。俺の事はブーツかブレッドの呼び捨てで呼べ。同じ  
王立空軍だ」

「え、でも……」

英雄と言っても過言では無いブレッドを気安く呼ぶのに引け目を感じ  
るリネットだが、ブレッドも『呼べ』という言葉強調して同じ事を言  
われると弱々しくブーツとブレッドを呼ぶ。

「よろしくな。リネット」

「はい」

## 第8話 夜間飛行と忘れられぬ悪夢

「色々困ったわね……」

夜空を飛ぶJ u 5 2の機内でミーナが困り顔でブレッドに呟くとブレッドも疲れた顔で頷き返す。

「まさか、ああも露骨なヘッドハンティングを受けるとは思いもしませんでした」

2人がJ u 5 2に乗って夜間飛行をしているかと言えば、先のブリタニアに現れた変形と分離機能に加えて複数の小型コアを持つネウロイが現れた事への対処として異世界の人間だと言う情報は統合戦闘航空団や統合戦闘飛行隊の隊長や戦闘隊長にだけ伝えられ、対策会議としてブレッドが直接参加しての意見交換会が行われた。

場所は機密性確保の為にハンプトン・コート宮殿の一室を借りての交換会だった。

交換会が終わるとミーナの目があるにも関わらず各部隊の隊長自らヘッドハンティングに来たが『統合戦闘航空団の一員である前に王立空軍の軍人です。まずはブリタニアの防衛に注力したい』というあくまでもブリタニア本土防衛に拘る姿に一蹴されてしまう。

「それはそうとリーネさんの訓練の方はどう？」

「筋は良いとかそう言うレベルじゃないですね。ただ、少し焦っていると言うべきでしょうか？」

その言葉にミーナは憂いのある表情を浮かべながら訳を話し始める。

「おそらくけど、ブリタニアが故郷だからじゃないかしら」

「それは把握しています。おそらくはプレッシャーからでしょうね」

リネットの故郷はブリタニアである。ヨーロッパ大陸の大部分がネウロイに占領された今、ブリタニアは連合国軍にとって欧州最後の砦であり、ブリタニアを防衛の最前線でもある501基地に配属されたことによるプレッシャーは確実にリネットを緊張させ、実力の殆どを出せていないというのは2人とも同じ評価である。

「わからないでも無いですよ。彼女の気持ちは。私も初陣は本土防空

戦でしたから」

バトル・オブ・ブリテン。

第二次世界大戦の中でも激戦とも言える時期を新人で迎えたブレッドにとつては今のリネットは昔の自分を被せられる存在だ。何かと目に掛けてしまう。

「少しお節介が過ぎましたかね?」

「それで萎縮してるのもあると? それは無いと思うわ。彼女も私に貴方に訓練を付けてもらって実力が上がっていると云っているもの」  
嬉しそうに笑うミーナにブレッドは微妙な表情を見せる。

「それが少しでも自信に繋がれば良いのですが……」

「多分だけど、貴方と比較しているのでしょうね」

「それで自信消失か……経験から言うところ初戦果を上げるか実戦を何回か経験すると治りますが……」

「多分、リーネさんの性格だと何も出来ずに終わると更に追い込みかねないわね」

沈黙が支配する機内に美しく綺麗な歌声が微かに響き始める。

「うん? ああ、サーニヤ中尉の誘導歌か」

窓からサーニヤの姿を取られたブレッドが無線で劳いの言葉と感謝を送るとサーニヤは頬を赤らめながら雲の中に入ってしまった。

その反応にまだ慣れて貰って居ないのかと肩を落とすブレッドにミーナは照れ屋さんだから仕方ないとフォローを入れるとサーニヤの通信が響く。

《誰か……こつちを見てます……》

《サーニヤさん。報告は明瞭かつ大きな声でお願いします》

《すみません。シリウスの方角に所属不明の飛行体接近しています》

《ネウロイの可能性大だな。と言うかこつちもこの時期は雲が厚いから見えねーゼクツツタレが!》

笑いながら悪態を吐くブレッドにミーナは紳士的な物腰の中でたまに見かけたリベリオンの陸軍や海兵隊の兵士を連想しながら困った様な笑みを浮かべるが直ぐに隊長としての責務を行う。

《ネウロイだと思います。通常の飛行機の数ではありません……》

「探知系魔法が無いから魔導板出してもサーニヤ中尉の声が明瞭になるだけだな」

独学で物にした魔法を展開する。ただし学び方を間違えたのか魔導針の形がサーニヤなどの一般的なアンテナの様なものでは無く、何かの板を思わせる形状になってしまふ。

『魔導板』とブレッドが名付けた魔法を背中にスピノサウルスの骨格を思わせる形状、額にシユモクザメを思わせる形状で出現させるが探知系魔法を持たないブレッドには電波の入りなどをよくするなど  
が限度だ。

《サーニヤさん。援護が来るだけの時間が稼げれば良いわ。攻勢は出来るだけ避けて》

《はい》

サーニヤの不明飛行物体に近付くと雲の中から太く赤いビームが現れる。

サーニヤは突然の事ではあったがなんとか回避しきると同時に武器を担ぎ直して、引き金を引く。

サーニヤの持つフリーガーハマーから白煙を吐きながら飛翔したロケット弾は空中で爆発。魔法弾として強化された攻撃力にネウロイは雲の合間から大きく損傷した姿を見せると不利と悟ったのか速度に任せて撤退して行く。

サーニヤは追撃を行おうとするが速度差により徐々に距離を離され、追撃を中断すると輸送機の近くで護衛を開始する。

「二波乱起きさそうだな…ミーナ中佐、夜間哨戒を強化する事は出来ますか？」

サーニヤから取り逃がしたと言う通信を聞くと神妙な面持ちで話すブレッドにミーナ中佐は夜間哨戒の強化には同意らしく真剣な表情で頷くと内容を基地に着くまでに考えておくと告げるとブレッドは邪魔をしない様に見ていた。

この世界の夜空は向こうの夜空と大した違いは無かった。

「……と言う事があったので暫くは夜間戦闘を想定したシフトを組む事にするわ。メンバーは……サーニヤさんとブレッド少尉にお願いするわ」

「ちよつと待つて下さい。何故に自分が？ ユニットでの夜間飛行、夜間戦闘訓練はしていません」

ブレッドの言い分を聞いてミーナがコーヒーの入ったカップを揺らしながら訳を話し始める。

「まず、サーニヤさんは純粋なナイトウィッチだから、貴方は魔導板よる通信の安定化が見込めるから、多分だけど通信の要領でサーニヤさんの探知魔法の恩恵を受けれると思うから、ナイトウィザードとしての経験や訓練を積んで欲しいの」

「それに今回の夜戦の当事者だからな。ちようどいいだろう？ と言う訳でサーニヤ、ブレッドの2人が「ハイハイ！ ワタシモヤル！」美緒の台詞を切つてまで志願するエイラにミーナは快く了承するとブレッドが手を挙げる。

「リネットを連れて行きたいのですがよろしいでしょうか？」

リネットが驚愕に固まるとブレッドの言葉にミーナが真意が何かわかった様に頷くが感情は許したいがそうもいかないと半々で別れてしまう。

と言うのもリネットは夜間飛行の訓練はしているが夜間戦闘の訓練はしていない事、夜間戦闘の新人を2人も連れてはサーニヤとエイラの負担が大きくなると考えたからだ、ブレッドは夜間飛行は戦闘機で100時間、夜間戦闘も護衛で80時間はある事を話すとミーナは了承する。

「それじゃあ、夜間専従班はこの4人に任せるわ」

話はこれでお終いとミーナが告げる中でブレッドはサーニヤの何か思い詰めた様な表情が気になったがいきなり踏み込むのも逆効果と思い、後で話そうと決めると自室へと戻って行く。

そんなブレッドをリネットが追い掛ける。

「あの……如何して、私を連れて行くこうなんて言ったんですか……私

なんて足手纏いの……」

言葉が続く前にブレッドがリネットの額にデコピンを喰らわす。

それなりに痛かったのかりネットが両手で額を押さえるとブレッドが話し始める。

「いつも言ってるが少し自信がなさ過ぎる。お前に自信を持つてほしいからだ」

口数少なく手を振って去ろうとするブレッドの背中をリネットは黙ってじっと見つめる。

「自分で気付けど…って事ですね」

教えられる事は全て教える。だが、自分で気付くべきと思った所はヒントは意味深な言葉を並べるだけで済まさせる。

気付けないから気付くべき事があると教える。自分で気付くから成長になると教える。

それを知るリネットは自室でゆっくりと考えるが何も気付ける事は無く、そのまま寝落ちしてしまい、朝を迎えるのだが……

「よし！ 朝食は食べたな。では、夜に備えて……寝ろ！」

朝食を終えた瞬間に告げられた美緒の言葉にブレッドが啞然として夜間シフトについて自分の思っていた事を告げるとミーナがやれやれと頭を抱える。

と言うのも向こうの常識とこっちの常識が未だに入れ替え切っていないからだ。

「魔法力を使って飛ぶから、魔法力の回復を考えると昼と夜に戦闘を行うのは難しいのよ。普通の戦闘機と違ってね」

「成る程、理解しました。では、自分の部屋で寝ますが、何かあれば叩き起こして下さい」

軽い敬礼をしてから去ろうとするブレッドに美緒が声を掛ける。

「ん？ わざわざ自室に戻らずとも、サーニヤたちと一緒に部屋でいいだろ？」

お前は何を言っているんだという感じに話す美緒だが、ブレッドも無表情でお前は何を言っているんだと美緒以上の雰囲気醸し出すが美緒は信頼しきった表情で言葉を紡ぐ。

「大丈夫だ。お前はそういうことをしない男だとみんな信じている！」

その言葉に喜べば良いのか男として悲しめばいいのかそう言う危機感の無い美緒に嘆けばいいのかわからずにしゃがんで顔を手で覆うブレッド。

「いえ、やはり彼女達も男のいる部屋でゆつくり眠れないでしょう」

そう言うブレッドだが、リネットは恥ずかしながらもそんな事をしないと信じているのか頷いて見せる。

サーニヤもブレッドがそんな事をしないと信用しているからか気にしないと告げる。

エイラもサーニヤに変な事をしなければと了承する。

ブレッドがどう答えるか冷や汗を流しながら思考回路を必死に回していると美緒が高笑いを浮かべる。

「これで決まりだな!! まあ、親睦を深めると思って大人しく一緒に眠れば「坂本少佐?」……」

いい。その言葉を紡ぐ前にミーナの手が肩に置かれるとブリキ人形のように肩越しにゆつくりと首を後ろに回す。

美緒の後ろには不動明王と化したミーナが居たがその顔は笑っているのだが、異様な恐怖を植え付けており、向けられていないわかっているサーニヤ・エイラ・リネットは顔を青くしながらブレッドの背後に隠れる。ブレッドもブルブルと子犬の様に震えており、美緒に至っては涙ぐんでいる。

「はい！ ブレッド少尉が言った通り、男女別になって寝ること。そのあたりはきっちりしてもらいます」

笑みを浮かべながら話したミーナが美緒の襟首を掴んで去って行く。それをブレッドは敬礼をしながら見送った。



燃えていた。視界に映る何もかもが燃えていた。

古い美しい大好きな街が爆発と炎で破壊されている。

視界が空に映る。見えるのは薄っすらと見えるヨーロッパ大陸へと消えていく黒い点。

とても小さいが見る者が見ればあれは双発爆撃機だとわかるだろう。

耳に言葉が聞こえる。聞きなれた、生まれてからずっと聴き続けた声だ。

「次来てみる。全滅させてやるぞ」

「!? 俺の声だ……」

ベットから起き上がり、額を拭いながらさつき見た夢を思い出そうとするが朧すぎて思い出せなくなっていく。

だが、それは思い出せないだけで魂にはしっかりと刻みつけられた物の様な気がするのも確かだった。

「時間は……1730を超えた位……少し早いが二度寝する気にもなれないな……風呂でも行くか……」

道具を持って部屋を出ようとすると焦燥に駆られながら廊下を走るリネットを見つけた瞬間に襟首を掴んで立ち止まらせる。

「何があった!」

何かあったのか真剣な表情を浮かべながら言葉を強くするとリネットはハツとして慌て始める。

ブレッドはなんとか落ち着かせるとリネットの襟首から手を離すと部屋に入る様に言って、椅子に座らせると優しく語り掛ける。

「その……ロンドンの街が焼かれる夢を見て……」

「そうか……今日は9月15日……」

リネットの言葉にカレンダーを見つめる。今日は8月30日。向

この世界ではロンドン空襲で最も大きな被害を出した日だ。

そして、3年にも及ぶ制空権の奪い合いが始まった日でもある。

「こっちでは無かったよな……」

この世界のロンドンは1発も爆撃を喰らっていない。それなのにあんな夢を見ればリネットの心情を鑑みれば焦燥に駆られても可笑しくない。

ブレッドは何も起きていないと伝えるとリネットが安心した様に胸を撫で下ろすと頭に手を置いて、語り掛ける。

「ミーナ中佐が言っているだろう。俺たちは家族だ。何かあるなら何でもいいから話していいし助けて欲しいなら一言だけ、助けてと言えればいい。少なくとも俺は助けてやる」

それだけ言うと風呂に入るが如何する？ と告げたブレッドにリネットは顔を真っ赤にして固まるとブレッドは笑いながら夕食時には食堂に行くと言っただけ言っただけ部屋を出て行く。

暫く放心していたリネットだが、寝台の近くに置かれた小さなテーブルに並べられる様に置かれた2つの色違いの小箱を見つめる。

「これって……」

何か気になる。でも、勝手に開けていい物かと思いつつも好奇心に負けてブルーグレーの小箱を手に取り、蓋を開ける。

中には傷が付かない様に綿が敷き詰められており、その綿の上には柏葉剣ダイヤモンド付騎士鉄十字章が収められていた。

「ハルトマン中尉よりも上の勲章……」

柏葉騎士鉄十字章がハルトマンが持つ最も上の勲章。柏葉剣ダイヤモンド付騎士鉄十字章は2つもランクが上の勲章だ。

余りにも恐れ多い物を見たトリネットは震えながら蓋を閉め様とするとある事に気付く。

「あれ？ 何か違う？」

こっちの世界の騎士鉄十字の中央には何も彫られていないのだが、この騎士鉄十字の中央には楕円の下に2等辺が歪んだ2等辺三角形に翼と交差したレイピアが彫られている。

このマークがストライカーズの報告書などの下部空白部分に刻印

されるストライカーズのパーソナルマークだと言う事とこのマークがあるからこそ国籍関係無くこの勲章を授与出来た事はリネットには知るよしもない事だ。

「こっちは一体何が……」

ユニオンジャックが描かれた箱を開ける。

そこには金色の王冠と赤い十字、中央に2本の交差した剣の模様が入ったバッジに赤と青のリボンが付いた勲章だった。

そして、その勲章はリネットにとって是最早憧れと言うよりかは持つ事を夢見る事すら無い程に高位の勲章。

「軍人用の……メリット勲章……」

265機と王立空軍では破格の撃墜数に巨大新型兵器と2度の交戦を経験しながら生還する技術とその性格による行動から君主として女王陛下から渡された勲章。

「あれ？ メリット勲章を新しく授与された何てはな「それにはちよつとばかりし訳ありでな」キヤアツ！」

びつくりしたりリネットが箱を放り投げてしまいがブレッドがしっかりとキヤツチしたことで事無きを得るがリネットは必死に頭を下げている。

「そんなに謝る事は無いさ。聞きたいか？ この話？」

遠慮しながらではあるが領いたリネットにブレッドは笑いながら、『じゃあ、空で』でとだけ伝えたと小箱を机の上に置き、食堂へと歩いて行った。

## 第9話 夜戦と過去の悪夢

「エーテル反応は正常」

ユニットに魔力で出来たプロペラが出現する。

「魔力回路に異常なし」

さらに魔力を流して戦闘用の魔力配分に問題無い事を確認する。

「エンジン音は良好！ 整備兵に感謝！」

祈る様に手を合わせながら告げると発進促進装着から魔法陣が現れて発射とも言える勢いで滑走を始める筈だったのだが、リネットが震えている事に気付いて滑走を取り止める。

「どうしたんだ？」

「あの……凄く怖くて……」

それを聞いてブレッドは懐かしさを漂わせる声で笑う。

「俺の時よりマシだ。ほら、手を出して？」

そう言つて差し出された手を握るとブレッドが発進促進装置を作動させる。

リネットはブレッドの行為に驚きながらも慌てて促進装置を作動させる。手を繋いででの発進は脱臼など大怪我の原因にもなる。装置の作動遅れなんて理由で脱臼などしたくないだろう。

「こうやって手を握られながら飛べるんだから」

戦闘機同士では手を握つて飛び出すなど出来ない。だが、人間は誰かに手を握られると安心感の様な物を感じる事がある生き物だ。

リネットが少し表情が和らいだのを見てブレッドは優しい笑みを浮かべるとリネットを返事を聞く前に促進装置により滑走して空中へと向かう。一足先に離陸していたエイラとサーニヤを追つて雲の中に入る。

「雲が出るまでの辛抱だ」

2人はエイラとサーニヤに一足先遅れて雲を突き抜ける。

雲を突き抜けるとリネットの前には手を握ったまま月明かりに照らされた少しくすんだ黄色に近い金髪と手を離すよとアイコンタクトするブレッドの翡翠色の瞳だった。

「明るいだろ。イギリスの空も同じだった」

バトル・オブ・ブリテンの初期は夜間戦闘もあり、ブレッドはハリケーンに乗ってサーチライトの明かりを頼りに迎撃に出た事もあったがやはり雲の上に出ると今日の様な月夜は視界が良かったりする。

まあ、殆どは雲の中か下から来たのでサーチライトの操作係の腕と運次第だった。

ブレッドは魔導板を出すとサーニャが魔法で出した電波の受け取りと基地や他のレーダーサイトのレーダー波を経由したり受信する事でサーニャよりも狭いがより濃密な索敵を行える場所を作る。

「よし」

「あの…勲章の事は……」

リネットからの指摘でそうだったなと頷くと思いつく様に話し始める。

「これから言う事は全て本当の事だからな」

前置きを置くとブレッドはこの世界の住人では無い事と向こうで言うブリタニアであるイギリスの空軍に所属していた事、向こうで戦争をしていた事と戦死のタイミングでこっちに来た事を話す。

「あの……異世界でもネウロイが……」

「いや、人同士でだ。お前が見た夢だが、恐らくは第三帝国の爆撃で焼かれたロンドンだ」

ロンドンを焼かれた。その話は自分達でもあり得る話だリネットが顔を伏せるがブレッドは気付かない振りをして話を続ける。

「俺は第三帝国からの襲撃が濃厚になったタイミングで志願した志願兵だ。初戦はバトル・オブ・ブリテン……本土防空戦でも、第二次世界大戦でも激戦とも言える戦場だった」

「本土防空戦……」

今の自分がしているのと同じ。それを人間を相手に行った。

その事実がリネットの肩に重くのしかかる。

「敵は爆撃機1100機、戦闘機860機だ」

「イ、イツセンヒャクダツテ!!」

「ロンドンを破壊し尽くせても……」

エイラとサーニヤの言葉に頷き返すとリネットが口を動かす。

「あの……ブリタニアの飛行機は……」

「ハリケーンを中心にスピットファイア少数を加えた約600機。敵の護衛戦闘機に対応できたのは、最新鋭のスピットファイアのみ……俺の乗っていたハリケーンは苦戦を強いられた」

バトル・オブ・ブリテン。数的有利も質的な有利も全て向こうは上だった。それでも、英国はリーダーサイトを使った効果的な迎撃で何とか祖国を守り続けるが、当然ながら激戦は程度の差はあれどパイロットの疲弊させる。それは肉体的にも頭数でも……

「暫くするとロンドンに数発の爆弾が落とされた。後々の誤爆だと知るが当時はな……報復にベルリンを爆撃機。被害は少なかつたが第三帝国は報復の報復とロンドンを空襲。ロンドンは……だが、新しい新人や亡命、義勇兵により本土は防衛に成功し、紆余曲折あつて戦争を終わらせた」

「終わらせたつて……生きて終戦を……でも、さつきは戦死のタイミングでこつちに來たつて……」

「察しがいいな。第三次世界大戦だ。説明は省くが戦争中に開発されなかつた兵器を開発して実戦投入したキャニーツて言う組織が現れてな。統合戦闘航空団みたいなストライカーズつて言う組織を結成して戦つた」

「ブートさんはその……ストライカーズに……」

「ああ、所属していた。教官をしていた時に人員補給の為に2期員としてな。スピットファイアに搭乗して参戦した。そこで巨大兵器を2機、共同撃墜して生き残ると柏葉剣ダイヤモンド付騎士鉄十字章をドイツ連邦が授与してくれた。そして、撃墜数機数が265機に達するとメリット勲章を授与した。これが戦死の3日前だ……」

「あの……帰りたいと思つた事はありますか……」

その言葉に少し考える様な素振りを見せた時にブレッドがホバリングを開始する。

「ドウシタ？」

「何か引つかかつた……何処だ？」

視界をあちこちに振りながら魔導板に魔力を回して感度を強くする。サーニヤもブレッドを見て、固有魔法の広域索敵を発動、同時に魔導針に魔力を回して感度を高める。

「!? 正面！ 回避！」

何かを感じて向いて方向に赤い光を見つけるとリネットの腹を蹴って動かすと自身も固有魔法の応用である瞬間加速で上に逃げて事なきを得る。

「そこだ！」

エイラは未来予知で移動するだろう場所に弾丸を撃ち込むが撃破に至らない。

「速い……」

速度が速すぎる故に放った弾丸が当たる未来が見えない。つまりは相手の飛行速度に対して弾丸の移動速度が遅く、飛翔距離が伸びる故に弾丸が狙った所に着弾する頃には敵は着弾点の前を飛行している。

ブレッドはエイラの未来予知をしている為にとある推理を伝える。

「未来位置で見た場所を基点に弾丸の速度と飛翔距離を加算して偏差射撃しろ」

「ワカッタ」

未来予知を発動させて見た位置から大きく銃をズラして発砲するがエイラの未来予知が旋回する未来を取られる。

距離が遠いと向こうが射撃に気付いて回避行動を取って来る。かと言って偏差射撃をしないと速度だけで躲かれる。

「奴を撃墜するのに必要な条件はつ。至近距離での交戦、相手の減速、コアを装甲ごと貫く火力だろう」

「どうやって、近くの……避けて！」

高出力のビームを躲してから銃口を向けるがネウロイの反応は2人のレーダーからその姿を消している。

攻撃の瞬間だけ捉えられるステルスを持つ相手に此方は後手に回らざるを得ない状況になっていた。

「あの、何であのネウロイって直線的に進んでいるんでしょう……」

リネットが遠慮をしながら告げた言葉に3人が去った方向と向かってきた方向を思い出す。

自分達はホバリングしながら敵の攻撃を待ち、ブレイクして回避、また集まって作戦会議と基本的に円を描いてその中でしか動いていない。ネウロイはその縁を突っ切る様に向かって来ていた。反転もかなり大きな弧を描いて突っ込んで来る。

「ステルスに速度性能は良いが、機動性が皆無か…いい点に気付いたなりネット！ お手柄だ！ 少し確かめたい事がある。エイラはサーニヤとリネットを掴んでくれ」

「ワ、ワカツタゾ。と言うか！ 何で少尉のお前が指揮してんだヨ！ 普通は中尉のサーニヤだろ！」

エイラが文句を言っているがサーニヤとリネットの手を掴むとブレッドは指揮できる奴が他にいるの？ と実力的な部分で攻めると次の指示を矢継ぎ早に告げる。

「リネットとサーニヤはエイラの負担を軽くする程度にユニットを回せ」

「あの…ブートさんは……」

「少し実験をな」

ブートは上昇、銃に炎を纏わせながら魔導板に魔力を回して輝きを強めるとエイラが叫ぶ。

「躲せ！」

エイラが未来予知でブレッドが撃たれると見えると同時に叫んだがブレッドはネウロイの太いビームに飲み込まれたのか姿が見えないが少し離れた場所の雲を打ち払いながら爆炎は上がる。

其処には突然の砲撃で動くの止まったネウロイを見ると銃声とボルトの操作音、そしてネウロイに次々と弾丸が着弾したのか爆炎がネウロイの体から上がり、上空から熱で赤く光る空葉莢が落ちて来る。

「ブートさん！」

「敵が止まった！ 全力射撃！」

ブレッドの号令に反応が遅れた3人は撃つ前にネウロイを雲の中に隠れさせてしまう。



「クソ！ 逃した。コアは？」

「それよりも如何して、無傷なんですか？」

サーニヤの問い掛けに短く答える。

「ビームを視認すると同時にファイヤーブレードを撃った」

ファイヤーブレード

ブレッドが銃口を使って放つ火炎放射だが、その速度はジェット噴流と何ら変わらず、下手をしたらそれ以上の速度で高温の炎を放つ攻撃系固有魔法だ。特徴としてはネウロイのビームを打ち消しながら飛んで行くのでカウンターなどが行いやすい。

「そうするならそうするって言えばよな。驚くダロ」

「すまん……だが、これで向こうはこっちを魔法力で狙って来てる筈だ」

「つまりは魔力消費を抑えたなら狙われないか狙われる確率が減る……けど、ファイヤーブレードは……」

サーニヤの心配する事は分かっているのかブレッドが頷く。

ファイヤーブレードはその威力こそ高いが消費魔力が大きく、空中では2発が限界の諸刃の剣。

カウンターもあと1回が限度。

「次のアタックで決めるしかないだろ……来るぞー」

ブレッドが上昇、3人が攻撃の準備を整えると消費魔力を抑えながら銃を構えるとネウロイとブレッドがお互いにビームを発射する。

ブレッドのファイヤーブレードはネウロイのビームを打ち消しながら飛翔。雲を払いながらネウロイを焼いて行く。

「今！」

ブレッドの号令で銃弾とロケット弾が発射され、ネウロイにダメージを与えるがコアの破壊はおろか発見すら出来ず、ネウロイの分散したビームによる反撃を浴びる。

4人は苦悶の声を上げるが何とかシールドを展開して攻撃を防ぐがリネットは抑えるのに手一杯、残りの3人も苦虫を噛み潰した様な表情だ。

ネウロイは数秒間の照射を止めると一瞬だけブレッドに収束ビー

ムを放つと足元を通って去って行く。

そのタイミングでブレッドの視界に何か灰色の物体の中に一際赤い球体が映る。

「今のは……」

「ナニカアツタノカ?」

「その声はエイラだな……」

「ハ? ナニイツテンダオマエ?」

エイラの言葉にブレッドは自分が今の視界について話し始める。

ブレッドの視界は全体が黒く月がある方向さえ黒いが3人の姿は輪郭が微妙にボヤけているが赤やオレンジ、白に黄色、緑色に青色に見えており、声を聞くと何となくだが誰が何処に居るかわかると伝える。

「ブートさん……目が……」

ブレッドの目が翡翠色から磨かれた赤玉石の様な赤色に変色していた。だが、その目を見た3人は美しいと思う前に何か恐ろしい物を見た様に顔を強張らせる。

「躲せ!」

ブレッドが魔導板でネウロイのビームを探知して指示を出すとポルトを操作、新しい弾丸を装填して発射、先ほど浮かんで来た炎の球からヒートミサイルと名付けた炎の投げナイフを発射する。

弾丸は雲の中を航行するネウロイに着弾しヒートミサイルはブレッドの目に映る一際赤い球体部に命中。

徐々にネウロイの装甲を焼き切って行くヒートミサイルは遂にコアに到達、コアを両断して貫通するとネウロイも一瞬だけ遅れて白い破片となって砕け散る。

ネウロイの消滅を確認するとブレッドの目は赤から翡翠に戻る。

「今の何だ……」

ブレッドが視界が戻った事で記憶を思い出そうと頭を手で抑える。すんなりと受け入れたあの不可思議な視界にあの赤い球体コアなのだと微妙ではあるが確信は持っていた事から何処かあの景色を見た事があると思っていた。

「あ、サーモグラフィか……」

該当した記憶。レーダーを戦闘機に乗せると言う話が出る前に夜間でも有視界飛行が出来るようにと温度で敵を探そうとしたが戦闘機が加速した際に出す炎が無いと見つけれない事、隠蔽装備を持っていると全く役に立たず、温度以外は真つ暗になる為に離陸すら難しい、さらにサイズがデカイから単座に乗せられないなどの理由から不採用にあっていた装備を思い出す。

「ナンダソレ？」

「赤外線……あつと、熱線？ を視覚情報で判断出来る様になる機械です。1回だけ使いましたが、殆ど役に立ちませんでした」

全員が頭を捻っているのを見て、ブレッドは技術者の言っていた事を覚えていた限りで話す。

熱を持つ物質は絶対零度以下で無ければ赤外線を放つ。ブレッドのこの固有魔法はその熱線を捉える眼にする魔法なのだろうと言う憶測が飛ぶが、サーニヤが鋭い質問をする。

「でも、温度でコアを見つけられたんじゃない……」

目の前で起きた結果とブレッドの話が一致しない事を指摘したサーニヤにブレッドは向こうの世界の物は夜間用に改造した機体には意味がなかった事を話すと納得した様に頷く。

「サーニヤの言う通りだと思う。坂本少佐の魔眼の遠視と透視が温度になった感じか……」

「聞いた事の無い魔法ですね。ふふ、熱線魔眼でしょうか？」

リネットが笑いながら話すとブレッドは丁度いいと言わんばかりにそれを採用するとリネットが謙遜して撤回を求めるが心から褒めるブレッドに押し込まれてしまう。

「まあ、何だ？ 目標はクリアしたんだし、帰投しないか？ 弾も尽き掛けてるし」

「そうですね」

サーニヤが帰投のルートに乗ると残りの3人がその後をついて行くくとブレッドが思い出した様にリネットに近付いて話し掛ける。

「お前の撃った弾丸、しつかり当たってたぞ。訓練の成果が出てる

じゃないか」

この言葉にリネットは驚きが何か実感が持てないと言う感じで顔を少しだけ背ける。

今回のリネットは必死な思いで銃とユニットを扱っており、銃弾も通常弾から魔法弾に変更して撃つてこそいたが固有魔法で弾道制御を行っていないかった事もあり、ちゃんと出来たと言う実感が無く、自信に繋がってはいなかった。

ブレッドもリネットが自信に繋がっていない事に気付いていた。

しかし、新人の頃の実感としてちゃんとユニットを制御しないと銃身がぶれる為に狙った所に中々当たらない事を知っているブレッドは今回の戦闘でリネットが構えただけで当てていると言う事はユニットのブレが限りなく少なくなっている事の証明だと思っているが、リネットはそれに気付いていない。

そして、ユニットでのブレを抑える事は基本ではあるが狙撃銃に分類される銃だとこの基本が大切だと言う事もブレッドは知っている為にブレッドはリネットの訓練ではブレを抑える事を中心にしていたのだがそれがリネットにはそこが出来ていないと思っており、自信が無くなって行く事とブレッドの弾道制御に対する認識の甘さが重なっている事もリネットの自信に繋がっていないのだが、そこにブレッドは気付かない。

「(どうするべきか……)」

欠伸をしながら近付く基地に近付いていた。

「やっぱ、夜間戦闘すると疲れて……ふああ……眠くなるな……」

4人の中で最後にユニットを促進装置に立て掛けて脱ぐ。

この世界で初めての夜間戦闘で強敵とぶつかった事に加えて、新しい魔法を使った事へのストレスと不慣れであるが故に魔力消費の多さに加えて、自分の基地に帰って来た事への安心感から促進装置の上で寝てしまう。

整備兵達が毛布を被せてそっとしておくと朝早くに職場巡回を開始したミーナ中佐から寝るならちゃんとした場所で寝なさいと起こされたが今後も格納庫で寝るブレッドの姿にミーナは何も言わなく

なるのは別の話である。

## 第10話 新たな仲間

リネットがペリーヌを長機に飛行訓練を行う。

それを下から見上げるのはミーナとブレッドだが、ブレッドがなんの前置きも無く口を動かす。

「あの日の夜間飛行から機動が目に見えてよくなってるな」

「ええ。ついて行くだけなら完璧に近いわね」

ミーナの言葉にブレッドはなんだかなくと頬を掻きながら苦笑いを浮かべる。

「単独での初戦果を上げないと自信にならないタイプなのがなー」

あの時の夜戦飛行から何回か実戦に出ていたリネットだが、戦果は撃墜補佐5機、共同撃墜3機のみと単独撃墜記録無しと501ではパツとしない記録だが、撃墜補佐の数はブレッドの1機を完全に超えているのだが、その話をミーナの執務室で手伝っている最中のブレッドが漏らした際にこっちの世界に撃墜補佐と言う記録は無いと言うミーナの言葉にブレッドは持っていた書類を足元に落として足の指を痛めたのは余談だ。

「そう言えば、撃墜補佐ってどんな記録なの？」

「一言で言うと部隊長の選抜で決め手になる記録ですね」

ブレッドが細かい解説を要約すると敵を絶好の攻撃位置まで誘導する。敵に無防備な瞬間を作るなどの囮や誘導的な立ち位置や行動をした際に記録される。

基本的に私の強いストライカーズのメンバーでそれが出来るメンバーは殆どが周りを見て行動出来る人物が多く、通信をせずとも助けに行く人物が他人にどんな行動をして欲しいか直感や経験で把握出来る事を意味する。

因みに共同撃墜は複数機で単機を攻撃して撃墜した場合を指す。

こっちは長機よりも僚機として選抜される指針となる。

つまりは部隊全体に利益ある行動や指示を出来る人物と見られ、全体の戦闘指揮を執る部隊長としては撃墜機数よりも共同撃墜、共同撃墜よりも撃墜補佐が重視される。

ブレッドは性格的な所からナンバーワンよりもナンバーツー以降の方が真価を発揮するとして万年僚機止まりであったがこっちは墜機数や実際の能力を重視する評価基準の為に長機を務める事もある。

「そう言えば、今日は坂本少佐の帰還予定でしたね」

「ええ。み…坂本少佐が扶桑でスカウトした新人も来るそうよ」

「リネット程に無いにしろ精神はちゃんとしているといいですけど……」

戦死した徴兵で来た後輩パイロットを思い出す。

博愛主義者で銃を撃てずに初陣で殺られたパイロットだ。

「人じゃなくて機械を撃つんだと思えと言ったただろうに……」

「何か言ったかしら？」

ブレッドが首を振った瞬間に警報が鳴り響き、美緒と新人が乗っている空母の赤城に大型ネウロイが接近していると通信が入る。

ブレッドは魔導板を展開して近場のレーダーサイトから発せられている電波を捕まえて、魔力で強化してから発射、レーダーサイトの外にいるネウロイを補足して機数を確認する。

「大型1、中型1、小型4！」

「ペリーヌさんとリーネさん、シャーリーさんとルツキーニさんだけでは大変そうね。ブレッド少尉も……速い！ 何も言っていないのに誰よりも早くダッシュしてる！」

ミーナのツツコミを聞きながらもブレッドは格納庫に飛び込むと整備員達が既にユニットの準備を終わらせて、ブレッドの到着を待っていた。

「整備は万全を期しています！ ご武運を！」

「ありがとう！ いいエンジン音だ、整備兵に感謝！」

何時もの言葉を言い終えると同時に促進装置から発生した魔法陣に乗り込むと滑走路を滑走して空へと飛び立って行く。

魔導板を展開し直したブレッドは移動するネウロイと5つの魔法力を検知する。

ブレッドの魔導板で飛ばした魔力電波はウィッチの魔力も拾う為

に敵味方識別にも使える。

ブレッドはインカムを弄って、全周波数で語り掛ける。

《此方は王立空軍所属のブレッド・フィリップ少尉である。聞こえるか?》

《は、はい! ワイト島分遣隊の角丸美佐中尉です! え!? フィリップ!? 嘘!》

通信に答えたのは美佐と名乗ったワイト島分遣隊の隊長だった。しかも、ブレッドの事を知っているのかまさかの通信に慌て気味なのに対してブレッドは少し怒鳴るようにして落ち着く様に告げると向こうも落ち着きを取り戻す。

《小型の4機を願ひできますか? こっちは新人を含めた2人が先行しているので中型が限度でしょう。こっちは大型の足止めを行います。よろしいですか?》

《え? あ、はい! わかりました》

向こうの了承を得ると通信を切るが向こうの動きは魔導板がしっかりとキャッチしており、ちゃんと言った通りに小型を引き剥がしているが小型の動きはキレが良く、5人の内で2人が互角、1人が若干の不利、2人が居ないよりはマシ程度の動きしかしていない。

「(うーん……向こうは坂本少佐が居るから……)」

ブレッドがインカムを弄ると501用の周波数に変える。

《リネット。悪いがワイト島分遣隊の救援に行ってくれ。ペリーヌと遅刻組2人はそのまま大型へ》

《わかつたけど、お前は? まさか、中型を1人でするつもりか?》

《of course》

ブレッドの即答にシャーリーが溜息を吐く。

この光景に見る者が見れば驚く光景とやり取りだが、ブレッドはミーナからミーナか美緒、バルクホルンがいない時は臨時で指揮を取る事を許可しており、誰よりも緊急時に慣れていた事とビームが飛び交う戦場だろうと回避や攻撃をしながらリネットに淡々と指示を出せていた。

これがミーナなりの信頼の示し方なのだろう。実力のある者には



それ相応の仕事をして、でなければ、書類仕事の手伝いをミーナが許す筈が無い。

実際に空でも陸でも活躍出来る彼はミーナにとってもありがたい存在の為に政治家や他の部隊長から彼を守るのに必死だ。空でも陸でも活躍出来る人材を手放す馬鹿はいない。

さて、今回の采配だが大型にはコンビネーションの良い美緒・ペリーヌペアとシャーリー・ルツキーニペアを当てる事での戦力の一極集中だが、これには理由があり、小型は動きもキレこそよくても501から見ればマシな程度とワイト島に姉が居ると聞いていたので何かしらの刺激になればトリネットを向かわせた。

中型は501のメンバーなら少し無茶をすれば1人でどうにか出来るレベルだからだ。

「来るな」

魔導板が大型ネウロイの側から離れた中型ネウロイは近付いてくるのを捉える。

ブレッドは即座に安全装置が外されている事を確認するとホバリングを行い、射撃の用意を行い、終わると熱線魔眼を使用してコアの位置を把握する。

「弾丸を魔力弾からヒートミサイルに変更…完了…最終調整…完了！」

薬室に装填された魔力弾に更に魔力を込める事でブレッドにしか撃てないヒートミサイルに変更すると発砲する。

放たれた弾丸は銃身を出した瞬間に弾丸は込められた魔力を解放する事で弾丸はヒートミサイルとなり飛んで行く。

何故にヒートミサイルに変えて放ったのか言う熱線魔眼は美緒などの魔眼と違い、コアの位置は大雑把な位置しかわからないからだ。

と言うのも見え方が平面に限りなく近い為に距離感が掴み難く、中央に見えたとしても中央の奥なのか手前なのかわからないという弱点がある。

だが、ヒートミサイルなら絶対貫通と言う特性を持つ為に直線位置

さえ分かれれば破壊できる。

ブレッドの攻撃はネウロイが回避行動を取った為に躲されれしもう。ヒートミサイルは移動速度が遅くなる為に長距離狙撃だと躲されやすくなってしまふ。

「やっぱりか……」

次弾以降は魔力弾での攻撃を仕掛けるがネウロイは不可解な動きで次々と躲しながらブレッドを攻撃範囲に収めようとする。

ブレッドは10発を撃ち終わると即座に弾倉を交換。1発目をわざと躲させて回避先を予測した位置に2射目を叩き込む。

2射目は命中するが立て続けに発射した3射目以降はビームに迎撃されるがヒートミサイルもビームを迎撃する。

「ヒートミサイルは迎撃されるのか……」

今までで見た事の無い現象に自分の能力の理解を深めながら弾倉を交換しようとしたタイミングで大型ネウロイが破壊された特徴的な音を聞くとブレッドの頬が少し上に向く。

「派手に行こうか？」

弾倉を外すとボーズ対装甲ライフルのボルトを動かして薬室から空薬莖を抜くと薬室に炎の様に揺らめく赤い魔力を込める。

「ファイヤーブレード」

ライフルの銃口からブレッドを身体を覆い隠してしまう程の太い炎が噴射される。

炎は中型ネウロイを巻き込むと正面装甲から融解し、ジェット噴流が溶けた装甲を後方に吹き飛ばしていく。ネウロイの中腹に入ると赤い結晶が現れると直接的に温められた事で溶けて行き、ジェット噴流の圧力に負けて潰れる様に碎ける。

ネウロイは命たるコアを破壊された事で白い破片となって碎けるがその白い破片すら焼き尽くされ、炎がなくなった頃にはネウロイの痕跡はこの世に無かった。

『完全消滅』

連合軍で彼の攻撃系固有魔法を呼ぶ時に使う言葉だが、ネウロイの死骸たる白い破片すら残さぬ文字通りの完全消滅だった。

突如出現したネウロイだが、大型のみになった所で先に交戦していた美緒と新人ウィッチによって足止めを行い、ルツキーニが遠距離から狙撃して大型ネウロイのコアを破壊、小型の方もワイト島分遣隊の助力を受けつつもリネットの救援により被害無しで終わらせる事に成功するが、扶桑艦隊はそうとはいかなかった。

扶桑艦隊は艦隊全滅を免れたが旗艦にして空母の赤城は入渠するレベルの損害を受けた。だが、撃沈と言う最悪を免れただけでも御の字と言うのは艦長の談だが、旗艦を務められる艦の入渠により扶桑艦隊は足止めを食う事になる。更に他艦艇も損害を受けている為にこのタイミングを利用してブリタニアのドックや港で修理を受ける事になる。

その報告をブレッドなど出撃していたウィッチとウイザードは滑走路でミーナから聞くと同時に帰還した美緒から新人が紹介され、彼女らの視線の先には美緒と、扶桑からやってきた新人ウィッチが立っていた。

「(やっぱり若い……)」

ブレッドはこの世界に自分の世界の常識は当てはまる事は少ないと分かっているもやはり、完全には馴染めない。ブレッドはその少女を見て、リーネと同じ年ぐらいかと内心で考える。

「皆揃ったな。紹介しよう！ 本日付けで、第501統合戦闘航空団に配属となった宮藤芳佳だ！」

そう言った後、美緒は新人を見る。

「宮藤芳佳です！ よろしくお願ひします!!」

この日、501統合戦闘航空団に新たな仲間が加わった。

## 第11話 重なる英雄の影

朝、ブレッドは格納庫で目を覚ますと直ぐに顔を洗って眠気を飛ばすとユニットの整備ハッチを開けて、ルツキーニが何かしていないか丁寧に目視と指先で確認する。

異常が無い事を確認するとハッチにセキュリティーテープを貼ってからブリーフィングルームの扉を開ける。

既に部屋にはミーナと芳佳以外のウィッチ達が集まっており、皆がそれぞれの待ち方で待っていた。ブレッドは大事な話があるぞとルツキーニの頭を軽く叩くがルツキーニは身じろぎをするだけで眠り続けるのを見て苦笑いを浮かべながらリネットの隣に座る。と言うのも、ブレッドの指定席の隣にリネットが座っているからだ。

パイロットはその殉職率の高さからジnkスを大事にする。ブレッドはリネットの隣の椅子で座ってブリーフィングを聞いてから出撃した時に初の生還に初の戦果だった。だからこそ、この椅子に座る事を絶対に行っている。

そして、ミーナが芳佳を連れて部屋に入ってくる。芳佳の姿を確認したウィッチーズは視線をそちらに全員向ける。

そして壇上上がったミーナが手をたたく。

「ハイ皆さん、注目。改めて今日から皆さんの仲間になる新人を紹介します」

そう言ってミーナが説明する。

「坂本少佐が扶桑皇国から連れてきてくれた、宮藤芳佳さんです」

「宮藤芳佳です、皆さん宜しくお願いたします」

そう言って宮藤がお辞儀をする。

「階級は軍曹になるので、同じ階級のリーネさんが面倒を見てあげてね」

「は、はい……」

ミーナの言葉にリーネは自信なさそうに返事をする。それを横目で見守ったブレッドだが直ぐに視線が芳佳に戻る。

「はい、じゃあ必要な書類、衣類一式、階級章、認識票なんかはここに

あるから」

芳佳はミーナの前にある壇に置かれた木箱の上に置かれたある物を見ると顔色を変える。

「あの……これはいいりません……」

芳佳が木箱の上にあつた物。拳銃、ワルサーPPKを手渡す。

ミーナは少し心配した様を持つておいた方が良いと説得するが芳佳は頑なに所持を拒否。ミーナも心配そうにしながらも芳佳からワルサーPPKを受け取る。

ブレッドもワルサーPPKは受け取っていない。

と言うのもブレッドは既にLandstad 1900の改良型であるLandstad 1944、M1911モデルの改造銃、友人から賭けで手に入れたC96の9mm仕様モデルのレッド9のフラットサイドモデルをワルサーPPKの代わりに向こうの世界から持ち込んでいた。

だが、Landstad 1944は弾倉が生産されていないのと隊員共通弾薬としての9mm対応では無い事と異世界の人間である証拠に連合軍に提出した為に手元に無い。

M1911の改造銃は共通弾薬では無いので使用を控えている。

レッド9は弾薬が共通なのと弾倉が生産されている事、ワルサーPPKよりも見た目が気に入っている為に基地内では常にヒップホルスターに入れて持ち歩いている。

「あつはははは、おかしなやつだな」

美緒がそう言つて笑うが、ペリーヌは気に食わないと言わんばかりに反応し、後ろで寝ているルツキーニに問い掛ける。

「何よきれい」と言つて、ねえどう思う?」

「んあ?」

ルツキーニは寝ていたのか特に反応を示さなかった為にペリーヌは更に癩癩を起こすと立ち上がる。

「なによ、なによー」

そう言つてブリーフィングルームから出ていくペリーヌ。それを見てブレッドが頭を抱える。隊長の前で勝手な行動を取る。相手が

相手ならタダでは済まない所業だが、ミーナは苦笑いをするだけだ。  
「あらあら、仕方ないわね……個別の紹介は改めてしましょう」

そう言った後ミーナは表情を引き締めて解散を告げると全員が立ち上がる。

ミーナは何も言わずに去って行くと個々に動き始めとルツキーニが真つ先に芳佳に飛びついた。

「ひゃあ!!」

「どうだ、ルツキーニ」

シャーリーがルツキーニに聞く。ルツキーニは残念そうな顔をして告げる。

「残念賞……」

それを聞いたエイラがリネットに視線を向ける。リネットはビクツと驚くとブレッドは顔を傾ける。

「リーネは大きかった」

「……うう……」

エイラの言葉を聞いたリーネが恥ずかしそうに頬を赤くして顔を下げるとブレッドがいつの間にか触ったとルツキーニに詰め寄るとブレッドが夜間哨戒の日に朝早くに忍び混んで触ったと告げる。

ブレッドは寝室に許可無く入るなど言いながらルツキーニの頭を握り拳で挟むとグリグリと回し始める。

「あつはははは、私ほどじゃないけどね」

ルツキーニがブレッドに痛めつけられているのを見ながらそう言ったシャーリーは手で胸を持ち上げる。芳佳はルツキーニに残念賞と言われ、自分の胸を触る。

「私はシャーロット・E・イエーガー、リベリオン出身で階級は大尉だ。シャーリーって呼んで」

「はい」

シャーリーはそう言って芳佳に手を差し出す。芳佳はその手に元気良く返事をしながら握手をするが、シャーリーは悪戯で思いきり握った事で芳佳が痛そうにする。

「ははははは、食べないと大きくなれないぞ!」

そう言つて胸を張るシャーリー。芳佳はその胸を見て驚いたように見る。

ルッキーニは、痛む頭に手を当てながらではあるがそんなシャーリーの胸に顔を埋める。

ブレッドはいつ間にやら消えているバルクホルンと止める気のない美緒に溜息を零しながら手を叩いて注意を引き付ける。

「自己紹介しないなら業務に戻れ」

ブレッドの言葉に眠そうな者、寝ている者は世話を焼いている人物が代わりに紹介をしていくと美緒が話し始める。

「リーネと宮藤は午後からブレッドの訓練だ。リーネ、宮藤に基地を案内してやれ」

「り、了解……」

「少佐……」

ブレッドが立ち上がった美緒に神妙な面持ちで話し掛けると美緒が振り返る。

ブレッドは振り返った美緒に今生の別れを迎えた兵士の様に最敬礼を送ると美緒もそれに最敬礼で返してからブリーフィングルームを出て行く。

「あの……坂本さんは何を……」

「最大の敵と戦うのさ。さあ、午後から訓練だからな。早く行け」

リネットはブレッドにそう言われると芳佳を連れてブリーフィングルームを出て行った。

ブレッドは拳銃の射撃訓練を最近はしていない事に思い出して射撃訓練場に来ていた。

そこではペリーヌがブレン軽機関銃を持って射撃の訓練をしていた。

ブレッドは少し離れた場所に立ってレッド9のセーフティを外して構える。

右手をのばし、左手で軽く押さえる基本的な姿勢だがその姿は様になつていた。

放たれた銃弾は5 m、10 m、15 m、20 mと命中し25 mのター

ゲットには当たらなかったがターゲットの描かれたパネルにはヒットしていた。

「25 mは确实だったんだがな……」

少しショックを受けた様に話すブレッドに銃を置いたペリーヌが話し掛ける。

「あの、普通のウィッチだと15 mが限度ですわよ」

拳銃を抜くような状況は大体だが、お互いの距離が最低でも50 m、一般的には30 mが拳銃同士の撃ち合いが多い為に15 mは十分な数値だろう。

それを25 mとなると一般的な状況では相当な実力者だろう。

「いやな、撃ち合いの訓練じゃないなら25 mは当てられないと不安だぞ?」

「撃ち合いの訓練?」

首を傾げるペリーヌに撃ち合いの訓練について話すとペリーヌが騒ぎ始める。

「鎧を着た2人が正面から22口径を撃ち合うですつて!? 危険すぎますわ!」

「まあまあ、45口径を弾く鎧だから安全だよ。それにこの訓練が出来ないと至近距離でも当たらないぞ?」

「それは人同士の戦いでしてよ!」

銃ほど精神的な揺れ幅に左右される銃は無いだろう。

拳銃で撃ち合う状況はお互いに人を撃つんだと言う動揺や次の瞬間には自分が死体になるかもと言う眼前にある『死』への恐怖から銃軸線がズれる事がある。

そのズレを可能な限り抑える為の訓練に鎧を着て撃ち合うのだ。

簡単に言えば鎧で弾いた分〓死んだ回数であり、それが積み重なる死への恐怖が薄れてブレが多少は減ると言う危険から生み出された訓練だ。

ストライカーズでは脱出後の生存率向上に貢献している訓練だ。

死なない兵士と死ぬ兵士と戦うと言う意識の差だろう。

「ん? ああ、宮藤軍曹か」



射撃訓練場を訪れた芳佳とリネット。

リネットが話が終わると丁度良いと言わんばかりに芳佳にブレッドが近付く。

「午後の訓練は此処で行う。ユニットを履いての射撃訓練を宮藤軍曹がしてから、何時ものメニューだな」

「何時ものって……あれですか？」

リネットが嘘だと言ってくれたいと身体を震わせて匂わせるがブレッドは笑うだけで答えた。

結果から言うと芳佳がユニットを履いた状態での命中率だが相当な距離まで詰めてようやくやく当たると言うレベルで即実戦投入が行えるレベルではなかった。

これにはブレッドも目に見えてガツカリしており、魔法力と固有魔法だけで選ばれたと言われても疑いなく頷いてしまうレベルの出来だった。

まあ、ブレッドの部隊、ストライカーズの女性パイロットが化け物揃いと言うのがブレッドの中での女性兵士を測る物差しを狂わせているのだが本人はそれに気付いていない。

その芳佳はと言うと……

「宮藤軍曹！ 銃が下がっているぞ！ リーネも下がりがかけてる！」

「は、はい！」

滑走路でリーエンフィールドを持ってハイポート走を行っている。

美緒の場合だと何も持たずに長く走らせられるがブレッドの場合はハイポート走で短く走らせる。

簡単に言ってしまうと美緒は兎に角なんでもいいから身体を苛め抜いてやるでブレッドは短時間で効率的に身体を苛め抜いてやるである。

どっちがいいかは賛否両論だ。

美緒の場合は普通に走るので汎用性が高いという意見が出るが訓練の辛さ的に精神や銃への慣れを鍛えるならブレットだ。

ブレットは前を走る2人に声を掛ける。

「俺たちの目の前に何がある!」

「海です!」

芳佳が答えるとブレットが続けて叫ぶ。

「海の方こう側に何がある!」

「ヨーロッパ大陸です!」

今度はリネットが答えるとブレットがまたも叫ぶ。

「ヨーロッパは今どうなっている!!」

「ネウロイに、占拠されています!」

芳佳の返答にブレットが叫ぶ。

「ネウロイは如何しなければならぬ!」

「倒さねければならない敵です!」

芳佳とリネットの前に出て滑走路を走るブレットが叫ぶでなく言い聞かせる様に呟く。

「この戦争に向こうの国益は存在しない。それがどういう事かわかるか?」

「わ、わかりません!」

「この戦争に降伏も休戦も和平もない、あるのは全滅という終わりを求めて、何方かが全滅するまで続く戦いだ」

その言葉に芳佳が立ち止まる。

「私は戦争なんてしたくありません。銃だって…撃ちたくありません」

「リーネは後ろ周走れ。宮藤軍曹、こっちに来い」

リネットが涙目になる。ブレットの纏う雰囲気完全に別物だ。殺意と怒気を何とか押し留めているが完全に滲み出ている。

芳佳もそれがわかっていのかブレットの後について行く。

「何故? 何故、軍隊に来た?」

怒っている。この基地では誰に対しても怒っていないブレットが

怒っている。リネットには遠くにいても自分に向けられている様にヒシヒシと感じながらハイポート走を続ける。

「私……「守りたいか？ お前のその言葉に覚悟も重みもない様に感じる。何故かわかるか？」……わかりません……」

「守る。その為に発生する物を理解していい」

「守る事で発生する物……」

「お前はそれを理解してない。だから、覚悟も重みも無い。何の為に力を得るのか、守る事で生じる物。それを考えろ。軍人としての答えに行き着くまで俺の……」

その先を言おうとした時に何かが肩に置かれた様な感覚を受けて振り返るが誰も居ない。だが、何処か薄っすらと見えた人影は此処には居ない筈の人物だった気がした。

ブレッドは空を見上げて、溜息を吐く。

「兎に角だ。俺の言ったことを考えながら訓練しろ。少なくとも強いとは何か？ 強さとは何かが判る筈だ。俺が納得できる答えを見つけろ。答えは1つじゃ無いぞ」

「失礼します……って、やっぱり死んでますか」

知ってたと言わんばかりに美緒の頭を突く。美緒はまるで死人の様は無反応だ。

「ブレッドさんは何か用？」

司令執務室に入って来たブレッドにミーナが要件を聞くとそうでしたとブレッドはミーナの前に立ち直って口を開く

「宮藤軍曹の訓練結果をお伝えしようかと。今日はずっと執務室に缶詰でしよう？」

「ありがとう。こっちもキリが良い所でしかたら聞いわ。率直に言つて宮藤さんは使えそう？」

ブレッドはミーナの言葉に言葉の取捨選択をする様に顎に手を当

てる。

「率直に言うとうと技量も精神も使い物になりませんね。体力も無ければ魔法操作、は言えませんか」

「貴方のは固有魔法だけでしよう？ 精神と言うのは？」

ブレッドは訓練で芳佳の言った事を話すとミーナも真剣な表情でブレッドを見つめる。

「流石に貴方の世界の価値観を寄せ付けるのはどうかと思うわ」

少し睨みつける様な目のミーナだが、ブレッドはどこ吹く風と受け止めながら話す。

「何も俺と同じ答えに行き着けとは言ってません。ただ、俺の納得の行く答えを見つければ」と

その言葉にミーナの目元が緩む。

「そう。だけど、彼女がこの戦争に何かしらの楔を打ち込んでくれる様な気がするの。この泥沼の戦争に……」

何か縋るようなミーナの言葉にブレッドが小さく言葉を吐き捨てるがミーナには聞こえず、聞き返すがブレッドは何でもありませんと煙に撒いてしまう。

「兎に角ですが技術と身体は訓練で如何にかしますが、精神が育たなかったら後方部隊行きを考えた方がいいでしょう。あんな奴が死んでいくのは何度も見ましたから……」

戦いたくない、撃ちたくない。そう言ってブレッドの近くにいた奴は皆死んで行った。

一時の迷いが無ければ生きていたかもしれない奴がだ。

「あいつは優しい奴です。見て分かります。だから、死んで欲しくない。自分の身を守る為に、守りたい物を守り通す為に何かを犠牲にしなければならぬ事を知って欲しい。覚悟して欲しいんです」

死なない為に、守る為に、救う為に、奪う中で奪わない為に彼の様な人になって欲しいが為にキツく当たる、嫌われる。気付かれなくても良い為に。

「彼女は……彼の様に……彼の様な覚悟を持てれば……皆が命を懸け、彼は命を守る。彼女は……」

彼と同じ、英雄になれると思います」

## 第12話 好機は突然

リネットがブレッドの後を追う様に飛行していると芳佳もリネットの隣を離れない様に飛ぼうとするが不慣れなのか機動が少し歪んでいる。

そんな芳佳とリネットにブレッドが素早く振り返ると同時にペイント弾を装填したリネットと同じボーズ対装甲ライフルMkIIを放つ。

突然の攻撃に驚きつつもリネットは回避行動を取った事でペイント弾を浴びずに済んだが芳佳は腕にペイント弾を浴びてしまう。

芳佳が悲鳴を上げてから文句を言っているとブレッドが叫ぶ。

「馬鹿か！ 今日では武器携行をしながらの飛行訓練を行うと言ったが、それだけしかないとは言っていない！」

「宮藤さんはつい最近まで民間人で……」

ブレッドの言葉にリネットが芳佳を擁護する言葉を掛けるがブレッドはリネットに気にする事なく続ける。

「死にたくなければ咄嗟の事態にも対応できる様に気を張り巡らせろ！」

「そんな直ぐに言われて出来ませんよ！」

「ああ。そうだったな。ならば死ぬが良い。俺が経験した戦場はそれが出来た奴が生き残り、出来ない奴は例外なく死んだ。死にたければ同じ事を喚くがいい。訓練に戻るぞ。ついて来い」

ブレッドが飛行訓練に戻るとリネットは迷う様に芳佳とブレッドを見てから、心配する様に芳佳を見ながらブレッドの後を追いつめる。

芳佳も今は訓練とリネットの後を追いつめる。だが、位置の取り方がリネットの後ろと撃たれる前までの様に並びながらの飛行で無くなっていた。

地上ではブレッドの訓練を見ながらミーナと美緒が話を始める。

「いきなり無茶な要求をするな、彼奴は」

インカムで会話を聞いていた美緒が漏らすとミーナは目を伏せる。

「彼の世界では昨日まで民間人だった志願兵すらも満足な訓練をせず  
に作戦に投入したそうよ」

美緒が空からミーナに視線を移す。

「それをしなければならぬ程に追い詰められたと言う事か……」

「壊されては修理し、壊されては作りを繰り返すイタチごっこだった  
らしいわ。そして失った熟練パイロットを補うのは……」

ミーナが空を見上げたまま話す。視線の先には飛行訓練を行う3  
人の姿があった。

「訓練も出来ていない未熟なパイロット……だからこそ生き残る為に  
必要な事を全て短期間に叩き込む。生きて戦いを終わる為に……か」

美緒が再び空に視線を移すとブレッドが芳佳だけを撃てる様に動  
き、引き金を引いていた。

遠くに居る美緒とミーナの鼓膜を銃声が弱く揺らす。

「制約が無いならば、飛ばせるべき……か」

美緒がブレッドに訓練内容の事で話し掛けた時に言われた言葉  
だったらしい。美緒のこの言葉にミーナが答える。

「私達ウィッチが飛ぶのに必要なのは、時間さえあれば絶対に生産出  
来る魔力。パイロットの彼にはそれが羨ましいのよ。彼の国では燃  
料は運ばないといけないけど、届くかどうか微妙だったらしいから  
……」

訓練で飛ばしたいが実戦に回す燃料が減ってはいけない。だから  
こそ訓練での飛行は必要最低限、しかもその時間は戦争が長引けば比  
例して短くなる。そんな彼だからこそ訓練の殆どを飛行訓練に回す。  
いち早く実戦に耐えられる兵士を作る為に無茶も行う。

ブレッドの訓練が終わる頃にはリネットは迷彩塗装の様にペイン  
トされていない場所とされた場所が点在するが芳佳に至っては両腕  
と背中がペイントでオレンジ色にされていた。

「訓練終了だ。各々で風呂は入っておけ」

それだけ言うとブレッドは基地内に戻る途中でバルクホルンとす  
れ違う瞬間、軽く敬礼を送るがバルクホルンは目線を走らせるだけで  
歩いて行った。

「返礼しないなんて珍しいな」

そんなバルクホルンを不思議に思いながらも彼は基地に戻ると書類仕事をミーナと共に片付ける。

この基地で書類仕事が出来るのは12人中4人と余りにも少ない為にブレッドの存在は重宝している。

夕食も済ませて、自分が処理出来る書類を処理し切ったブレッドは滑走路の先に訪れていた。

この基地で夜間哨戒に出て行くエイラを見送った時に見つけた場所だ。普段は格納庫の中から見えて、眠くなるまで景色を楽しむのだが今日は外に出ていた。

「宮藤軍曹か。綺麗だろここの景色」

ブレッドの登場に宮藤がビクリと身体を震わせるがブレッドが笑顔で話し掛けて来た事に不思議に思い、身体が動かなくなる。

ブレッドは芳佳に断りを入れてから滑走路の先に腰を下ろす。

「宮藤軍曹。別に俺はお前を嫌っている訳では無いんだ」

「いきなりなんですか?」

不思議そうに話し掛けた芳佳にブレッドは続ける。

「逆に好ましいと思っっている。守る為に戦う。それを自ら選択出来る奴も私は敬意を払う。私も……守る為に戦う事を選んだ人間だからだ」

「ネウロイをですか?」

「それもあるな。宮藤軍曹は俺の事を誰かから聞いたか?」

「リーネちゃんからブレッドさんはこの世界の住人じゃないって……でも、本当なんですか?」

ブレッドは本当だよと伝えると自身が経験した戦争を語る。

満足な訓練も無く最前線に赴く事になった事。その訓練も短くなつて行く事。そして、生き残る奴は出来る奴で死んだ奴は出来ない奴と思わなければ心が死んでしまいそうになる程に過酷な環境だった。

「別にな。守る為に戦う事を否定するつもりは無いし否定も出来ない。俺がそうだからだ……半分はな」



後半は聞こえなかった芳佳だが、ブレッドが実は自分と同じ理由で軍に入った事を知って驚く。

「ただ、守る為に、救う為に何かを捨てなければならない事を知って欲しいんだ」

「何かを捨てなければならぬ……」

「ある者は守る為に己の純潔を捨てた。ある者は守る為に己の命を捨てた。ある者は救う為に己の武器を捨てた、ある者は救う為に己の人生を捨てた」

ブレッドが芳佳の頭を撫でる。

「戦争好きになれとは言わない。ただ、自分なりの戦い以外でも戦えるようになってくれると嬉しい。お前にも死んで欲しく無いからな」

そう言つてブレッドが立ち上がる。

「じゃあ、俺は格納庫で寝る。後は新人同士で仲良くな」

そう言つてリネットの肩を数回だけ叩くと手を振りながら格納庫で横になっているとリネットが逃げる様に走って行くのを眠気眼で見送った。

「監視所から報告が入ったわ。敵はグリット東114地区に侵入、高度はいつもより高いわ。今回はフォーメーションを変えます」

あの夜から暫く経った頃のある日にネウロイが侵攻を開始したが人類側はそれをいち早く察知した事で501部隊を出撃させる際に作戦変更を行う事が出来た。

「バルクホルン、ハルトマンが前衛！ シャーリーとルツキーニは後衛！ ペリーヌは私とペアを組め！」

戦闘隊長である美緒が素早く部隊を再編成して指示を送る。

「残りの人は、私と基地で待機です」

美緒とミーナの言葉に全員が頷き、待機組であるブレッド・リネット・芳佳は出撃組を滑走路から見送る。

「行っちゃったね」

芳佳の寂しそうな声が響く。

「そうですね……」

リネットは芳佳の言葉にか弱い声で返す。

「今、出来ることって何だろう?」

「足手まといの私に、出来る事なんて……」

「あつ、リネットさん……」

そう言つて、リネットは基地に向かって走つて行つてしまった。それと入れ替わるように、ミーナが芳佳の元にやつて来るとブレッドは芳佳を願ひしますと軽い敬礼を送つてからブレッドはリネットを追い掛けるのだが、リネットは部屋の中に閉じ籠つており、ブレッドの言葉はリネットに響いていなかった。

自分ではどうする事も出来ずにいると芳佳が現れる。

「彼女を頼む。不甲斐ないが彼女の役には立っていないようだ。すまん、こんな上官で」

リネットの前から離れて格納庫で待機しようと思つて歩いていたブレッドだがその耳にけたましい音の警報が響く。

「クソー!」

ブレッドがブリーフィングルームに着いたのミーナの後でエイラがサーニヤの様子を確認してからブリーフィングルームに現れる。

「出られるのは私とエイラさん、ブレッドさんだけね。サーニヤさんは?」

「夜間哨戒で魔力を使い果たしてる。ムリだな」

指を交差させてバツを作つたエイラにブレッドは当然だなと内心で呟く。

「そう……じゃあ、三人で行きましょう」

ミーナの言葉にブレッドが素早く立ち上がり声が届く。

「待つてください!」

声のした方向を見ると、芳佳が立っていた。

「私も行きます!」

芳佳は自分も戦場に出ると言うのだ。しかし、ミーナはそんな芳佳

を真剣な表情で見て、言葉を紡ぐ前にブレッドの言葉が紡がれる。

「巫山戯るなよ！ 撃つ事に躊躇いのある奴を戦場に連れて行けるか！ 死ぬぞ？」

「死にません！ 守る為なら撃てます！」

脅すような口調のブレッドに芳佳が決意に満ちた表情で告げる。

「巫山戯るのも大概にしろ！ 訓練で出来ない事が実戦で出来るか！」

徐々にお互いの距離が詰まって行く2人の間にミーナが入り込む。

「ブレッドさんは落ち着きなさい」

「す、すみませんでした……」

ミーナの言葉にブレッドは素直に謝り、芳佳と距離を取る。ミーナはそれを確認すると芳佳に顔を向ける。

「宮藤さんはまだ半人前なの。そんな人を出撃させられないわ」

「でも……」

諦めきれない。そんな芳佳の後ろからリネットが現れる。その眼は何時もの気弱そうな眼では無く何かを覚悟した軍人の眼だった。

「私も行きます！」

そんなリネットが自ら行くと言った。その行動には芳佳はエイラだけで無くミーナも驚いたがブレッドだけは満足気に頷いている。

「リネットさん……」

「二人合わせれば、一人分ぐらいにはなります！」

その言葉にブレッドが言葉を紡ぐ。

「俺たちはお前らの護衛はしない。自分の命は自分で守れ。死んでも自己責任だ」

その言葉にリネットと芳佳が同時にはいと答えるとブレッドはミーナの方を向く。

「ミーナ中佐、私は依存ありません。彼女達が自己責任で自分から出撃すると言うなら」

その言葉にミーナは少し考え、そして決断した。

「90秒で支度しなさい」

ミーナは彼女達の出撃を許可したのだった。

2人は一足先に出て行った後に残るの3人はハンガーへと飛び出し、自分のユニットと銃器を装備する。

リネットと芳佳がギリギリ90秒だった事でミーナとブレッドは領き合い、空へと飛び出す。

空に上がるとミーナの指示が飛ぶ。

「私にブレッドさんがついて前衛に回って下さい。エイラさんは遊撃、リネットさんと宮藤さんは後衛です！」

その指示を聞いて両足のユニットに括り付けたホルスターからこの世界で量産されたトンプソンストライカーズを取り出す。

トンプソンの薬室に弾を込めたタイミングでミーナがブレッドに話し掛ける。

「驚いたわ」

「はい？ 何がですか？」

ブレッドはミーナの言葉の真意が分からず質問する。

「ブレッドさんなら、二人の出撃を反対すると思ったから」

「ああ、別にリネットは出撃させても問題ありませんから。それにリネットは宮藤軍曹のお陰で覚悟が決められた。何かしらの功績に報酬を出すのは当然では？」

「その報酬が出撃と？」

「出たくても出れないが、出して貰える様になった。それだけでも与えられざる者には立派な報酬です」

「そうね……彼女達が死んだらどうするつもり？」

ミーナの言葉にブレッドが笑う。

「葬式だけして終わりです。それまでの存在だったとして」

余りにも淡泊な反応にミーナが驚くがそれも仕方ないと思っってしまった。

自分も青春時代と言われる時期を軍と戦争で過ごした。それはブレッドも同様だが彼の場合は人間同士、精神の成長の仕方や方向性は違うのは当然で歪みがあったとしても不思議では無い。

「ミーナ中佐、3時の方向にネウロイです」

「判ったわ。敵は三時の方向から基地に向かってくるわ！ 私とエイ

ラさん、ブレッドさんが先行するから、宮藤さんとリーネさんはここでバックアップをお願いね」

「はいっ！」

「はいー！」

その命令に芳佳とリネットが返事をする。3人が先行する。

3人はネウロイの上方から弾丸を浴びせるが余りの速さに有効打が与えられなかった。

「一撃離脱は無理ですね。後ろから攻撃しましょう！」

「そうね。エイラさん！ 速度を合わせて！」

ミーナの言葉にエイラがサムズアップで答えるとエルロンロールの様に回りながらネウロイの背後につく。

ミーナも高度を下げて後ろにつくがブレッドは劣速の為にロー・ヨー・ヨーをしながら追い掛ける。

ミーナとエイラが張り付いて攻撃、ブレッドは2人が照準調整をする間に射撃を行う事で隙間無く、邪魔にならない様に攻撃を加えるがそれでも有効打が与えられない。

「装填ー！」

ブレッドがリリースレバーを引いてマガジンを放棄、ポーチからノーマルマガジンを取り出して装填する。

普段はドラムマガジンなのだが、ドラムマガジンは装填すると空気抵抗が増えるからか加速が悪くなる為に今回はノーマルマガジンを装填する。

装填を終えてブレッドがネウロイの下部に有効打を与えるとネウロイが分離して、更に加速する。

「加速ー！」

ミーナが追撃を命令する前に固有魔法を使った加速で追い掛けるが向こうはソニックブームと呼ばれる音速を超えた瞬間に発生する衝撃波を後方に残しながら加速する。

ブレッドはソニックブームの対応をしなくてはならなくなった為に距離を離される。

「リーネさん、宮藤さん！ 敵がそちらに向かってるわ！ 貴方達

だけが頼りなの、お願い!」

ミーナはブレットが引き離されたと判断すると芳佳とリネットにネウロイを託した。

そして、ブレットの目に少し斜めに傾いて並んだ弾丸と回避をさせるのが目的の弾丸がずれた列になりながらネウロイに迫る。

ネウロイは最初に來たずれた列の弾丸を回避すると斜めに並んだ銃弾に命中。

ネウロイは立ち上がった様な体勢になり被弾面積が向上、数発は擦りの一撃になるが殆どが命中。最後の1撃がコアを破壊した。

「(さっきの1撃は……)」

リネットの攻撃と芳佳の攻撃だが、完全に芳佳の攻撃は命中目的でも牽制目的でも無く、回避を強要させる事を目的の攻撃だった。そして本命はリネットの攻撃だが、その攻撃も全てが当たる目的では無く最後の1撃を当てる事が目的の攻撃だったが狙いが正確だった事で殆どが命中弾として命中した。

ブレットは加速の魔法を切つて、純粋なユニットの加速力を使つて近づくがリネットの放った弾丸の1発、擦りの1発が髪を切つて行くがお構い無しに加速する。

ネウロイを撃破したリネットと芳佳だが、リネットが興奮からか芳佳に抱き付いていた。

「やった! やったよ宮藤さん! 私、初めて皆の役に立てた! 宮藤さんのおかげだよ!! ありがとう!!」

リネットの飛行時の不安定な射撃を、芳佳が肩車することによって飛行に割いていた意識のリソースを射撃に避けられたリネットが放った六発の弾丸は高速移動するネウロイをコアごと撃ち抜き、コアを破壊されたネウロイは破片になって砕け散った。

2人は抱き合った事でバランスが崩れてホバリングが維持出来なくなり、海に落ちて行くがネウロイの破片を突き破って合流したブレットがリネットと芳佳の襟首を掴み、固有魔法を使って推力を増やして支える。

「芳佳でいいよ! 私たち友達でしょ?」

その言葉を聞いてリネットも笑顔になる。

「じゃあ、私もリーネで！」

それを聞いて芳佳が笑顔で返す。

「うん！ リーネちゃん！」

「はい！ 芳佳ちゃん！」

そう言つて、またリネットが芳佳に抱き着いた。

「あははははははは！」

そんな芳佳とリネットが笑っているとブレッドが2人に話し掛ける。

「共同撃墜おめでとう。リーネ、宮藤軍曹。2人とも、今日の戦果と生還を忘れるな」

ブレッドの言葉に2人は頷くとブレッドが芳佳の目を見てからリネットにも目を合わせる。

「宮藤軍曹の機転と勇気に敬意を表する。リーネもよく頑張った。君に託して良かったと心から告げよう」

バランスを整えさせたブレッドが2人から手を離れたタイミングでミーナとエイラが合流する。

「一件落着かしら？」

「ええ。リーネは確信を持って言えます。もう、大丈夫です。命を預けられる仲間になりました」

ミーナの問いにブレッドは笑顔で返した。

## 第13話 過去の成果

7月10日の夜。ブレッドは格納庫は愚か自室でも眠れず、滑走路の先にギターを持って座っていた。

向こうの世界にいた頃に音楽好きだった仲間から眠れない日は音楽を奏でると良い。そう言われて始めたのが切っ掛けで、今では気分が向いた時や誘われた時、眠れない時に音楽を奏でる様になった。

それと今日はサーニヤから電波を使って音を飛ばす訓練に付き合ってくれる事になっており、背中と額に魔導板を展開するが普段の黄緑では無く、薄い水色に輝いていた。

魔導板や魔導針は使用者の心情を色に出す時がある。今のブレッドがその色に代表される様な心情なのは誰が見ても明らかだが、どの色がどの感情なのかは個人差がある為に完全に把握するにはデータが必要だ。

ブレッドはギターを持つと儂く、幻想的で悲しい旋律を奏で始める。そして、その曲には歌があるのか口ずさむ様に歌い始める。

「血の道で掴んだ 悲しき平和 若人飛び込む 世界を燃やす戦火  
燃え尽きる蠟燭 そつと気付いてしまい 頬伝い零れた 輝石の一  
欠片」

間奏に儂くも優しく幻想的なメロディを流す。

「満ちた世界は虚ろって 微笑むは思い出 想い行き着く場所 深い  
闇に飲まれて」

弱く、語るような口調からサビに入ったのか少し口調が強くなり、  
訴える様に歌う。

「空に飛び立って 闘って やがて墜とされて 幾十 幾百 幾千の  
亡骸となる いつか錆び尽き朽ち果て 消える記憶でも それは消  
さられる事無きサーニヤ兵士達」

語尾を伸ばしながら徐々に弱まっていくと再び弱く語る様な口調  
で歌い始める。

「瞼を閉じると 聞こえる羽ばたく音 誇りと覚悟が刻まれた 鼓動  
だけが響く 布と木を紡いで 作られた翼 その翼の名前を 暴風



と云う」

儂さだけが響くメロディーを奏でると強い口調で歌い始める。

「羽ばたいて 集って やがて群となり 幾十 幾百 幾千の若者が  
往く いつか燃やされ千切られ 消える命でも それは奪われるこ  
となく 空に在る 飛び出して 戦って やがて謳われて 幾十  
幾百 幾千の亡骸となる いつか苔むし草に覆われて 消える記  
憶でも それは忘れられる事無き……兵士達」

幻想的なメロディーから徐々に儂いメロディーへと変わっていき、  
最後はポロンと弱い旋律を奏でて終える。

演奏を終えたブレッドの目から月明かりに光る雫が一滴、頬を伝  
う。

《サーニヤです。しっかりと届きました。でも……凄く、悲しい曲でし  
た》

《仕方ないさ。これは恋人を失って手に入れた平和に悲しむと同時に  
あの戦争で戦った、全ての兵士に捧げた曲だから》

ブレッドが夜空を見上げる。

「(彼奴らはどうしてるだろうか?)」

向こうの世界で今も戦っているかもしれない仲間ブレッドは想  
いを馳せる。

「ねえ、芳佳ちゃん聞いた？ カウハバ基地が迷子になった子供の為  
に出勤したんだって」

「へえ、そんな活動もするんだ。凄いねー！」

501基地の食堂に隣接されたキッチンにリネットと芳佳の元気  
な声が聞こえる。

「たった一人の為にねー」

「でも、そうやって一人一人を助けられないとみんなを助けるなんて無理だもんねー」

「そうだねー」

しかし、そんな2人の背後から新たな声がする。

「みんなを助ける……そんな物は夢物語だ」

「えっ?」「ん?」

リネットと芳佳が振り返り見ると、そこには朝食を取りに来たバルクホルンが立っていた。

「え? なんですか?」

宮藤は何を言ったのか聞き取れずバルクホルンに聞き返すがバルクホルンは朝食の置かれたトレイを持ち上げると振り返ってしまう。

「すまん、独り言だ……」

そう言って、バルクホルンはさっさと席に歩いて行ってしまった。

「バルクホルンの言葉には俺も同意だ」

「あ! ブレッドさん! 昨日は夜間訓練だつて聞きましたけど?」

普段は夜間哨戒に出たメンバーより一足先に来る位のブレッドが朝早い組の一足遅い位に来た事でリネットが驚く。

ブレッドはリネットの言葉に濁した答えを返すと芳佳が質問を飛ばす。

「あの…バルクホルンさんは一体、何を……」

「誰にもその内容で突っ掛かるなよ? 約束出来るか?」

ブレッドの言葉に芳佳が頷く。

「みんなを助ける。そんなのは夢物語だ。だよ。実際にそうさ。俺たちも国を守る為に大勢の仲間を死なせている。勝利無くして守れる物無し、そして、犠牲無くして勝利無し……勝てば軍人が、負ければ軍人と民間人が犠牲になる。どう足掻こうと犠牲は出る……朝食は貰っていくぞ」

「え、あ……はい……」

芳佳が元気の無い声で返事をした後に他のウィッチ達も食堂にやってきて、それぞれ朝食を開始する中でバルクホルンは朝食に手を

付けづじつとしていた。

「どうしたのトウルーデ？ 浮かない顔で」

ミーナが聞く。

「食欲もなさそう」

「……そんなことはない」

ハルトマンの言葉をバルクホルンは否定し、スプーンを動かし始める。しかし一口食べた後、バルクホルンは芳佳の方を向く。

芳佳は視線を感じて振り返るが誰もこっちを見ていない事に首を傾げる。

「おかわりー！」

「あ、はいー！」

二、三、リネットと言葉を交わした芳佳がルツキーニのお代わりに答えて芳佳がテーブルに行くと言葉を交わした芳佳の目にあるものが飛び込んだ。

それはバルクホルンの前に置かれた殆ど手つかずの食事だった。

「あの…お口に合いませんでしたか？」

芳佳がバルクホルンに聞くが、バルクホルンは無言のまま席を立ち片付けに行く。

そんな様子をブレッドはキッチンの中から見えており、去り際のバルクホルンに告げる。

「戦場では忘れてくれよ？ あんたみたいなエースの損失は計り知れんからな」

「……わかってる」

それだけ言い残したバルクホルンに少し不安に思いながらもブレッドがテーブルに視線を戻すとペリーヌが芳佳にあまりにも一方的過ぎる文句を言っている。

「バルクホルン大尉じゃなくてもこんな腐った豆なんて——とても食べられたものじゃありませんわ」

と、ペリーヌが納豆について文句を言う。ブレッドは同意の意味を込めて頷く。

「納豆は体にいいし、坂本さんも好きだって」

芳佳のその言葉にペリーヌが過剰に反応する。

「さ、坂本さんですって!? 『少佐』とお呼びなさい! 私だつてさん…付けで…」

ペリーヌが盛大に自爆している姿をブレッドは呆れた物を見るような目で見る。

「(なんで正直に言わないかな……)」

ストライカーズも同じ理由や様々な理由からペリーヌの様な事をする奴もいたがそういう奴の言いたい事は言わせた奴に殴り合いながらも吐き出させる。

そうした方が後々で怨恨を残さないからだ。ブレッドはそういう直球な事が出来ないペリーヌに嫌な物を見る様な目で見るとリネットが納豆で苦戦しているのを見つける。

「ん? お前も臭いか?」

「あ、は、はい……どうしても慣れなくて……」

「仕方ないさ。これを使うといいぞ」

そう言つて手に持った物を机に置く。

それはゴマ油だった。

「ゴマ油……ですか?」

「ゴマ油の匂いでかき消すんだ。ストライカーズ時代に色々と実験してな。個人的にはゴマ油が一番良いと思う。ネバネバは水かお湯、酢か塩水で洗うか加熱でどうにかなる」

そう言われて、ゴマ油を掛けるとリネットの鼻でも臭いが気にならなくなるとペリーヌなどの納豆の臭いが苦手なウィッチ達も真似しだす。

「あの、ありがとうございました」

「気にするな。みんなで美味しい飯を食べる為にみんなで工夫や実験をした成果だ。本当に凄いよな。同じ釜の飯を食うって効果って」

ブレッドの言葉に芳佳は笑顔で頷くといつの間にやら来ていた美緒も高笑いを浮かべていた。

「(いつから居たんだよ……少佐……)」

朝食が終わると輸送機などに燃料やオイル、整備や駐機を行うスペースにあるとある小さな格納庫にブレッドは足を運んだ。

其処にはエンジンや武装が外されてはいるものの、カバーが丁寧に張り付けられたスピットファイア ストライカーズ仕様が駐機されていた。

この時代や世界には無い装備や部品があつた為に情報提供として此処で各国用の分解図や設計図を現物を元に作成され、現物は出来そうな技術力や向こうの世界で作られた物はこの世界で該当する国に持って行かれた。

主にネジなどの細々とした部品と機械式過給機は扶桑へ、エンジンの大元と武装の半分はブリタニアへ、排気式過給機とインタークーラーはリベリオンへ、武装の半分とコクピットのガラスはカールスラントへと送られた。

そして、今日はその技術を応用して作られたウィッチ用の新しい武器がブレッドに届く事になっているからだ。

新しい武器のテストにこの部隊が使われる事に驚いたブレッドだが、統合部隊は実験部隊としての顔も持つ為に新しい武器や機材が回されるのも不思議な事でも、珍しい事でも無い。

「Ju52。あれだな」

着陸したJu52から金髪に背の低い女の子が降り立つ。

「ご足労をおかけしました。501統合戦闘航空団のウィザード、ブレッド・フィリップ少尉です」

「私は第131先行実験隊第3飛行中隊所属のウルスラ・ハルトマンです」

ブレッドがその名前を聞いて驚くがすぐに心の内側に仕舞い込むと面倒ごとはささっと終わらせるべきと書類にサインする為にペンを取り出す。

ウルスラもブレッドの反応を予想していたのか書類をファイナードーごと差し出す。

「動作確認と安全確認は？」

「向こうで済ませてます。安心して下さい」

「安心した。確認を」

フアインダーを上下逆さまにして差し出す。ウルスラは書類の不備が無い事を確認すると驚く。

「カールスラント表記ですか？」

「スペル違ったか？」

「いえ、ブリタニア語が来ると思っただので」

「カールスラント人だろう？ そっちが良いと思っただけ」

その後も業務的な事を話している間に荷下しと補給が終わり、ウルスラが帰り際にブレッドに話し掛ける。

「初めてでした。お姉様の事を話さなかった人は」

「優秀な姉を持つと大変だろ？ 気を遣ったんだが、逆効果だったか？」

「有難かったです。では、またいつか」

「次も地上で」

ブレッドがJ u 5 2を見えなくなるまで見送ってから懐中時計を開くと大急ぎでベランダへと走る。

今日は午後から隊員同士のお茶会が開かれるからだ。

最後に到着したブレッドだが、ミーナも美緒も時間には間に合った事で何も言わずにブレッドも頭を下げながらリネットと芳佳の座る席に座る。

ミーナはカップを持ったまま立ち上がり、音頭をとると美緒が芳佳とリネットにこの後は訓練だと連絡を入れるとお茶会が始まる。

ブレッドは芳佳がカップを両手で持った辺りに芳佳の足を爪先で軽く小突く。

「なんですか？」

「紅茶の飲み方って知ってるか？ 日本……じゃなかった扶桑の飲み方じゃダメだぞ？」

「え!? そうなんですか！ 私、知りませんでした……」

シヨンボリする芳佳にブレッドが細かい点を省いて教える。と

言っても重要と言うべきか留意していく事として音を立てて飲むなと言うものである。

芳佳も最初は音を立てて飲まないと言う動作に不慣れがあった様だがしばらくすると対応し始めた事で音を立てなくなると来ると芳佳がブレッドに話し掛ける。

「あの……ブレッドさんってバルクホルンさんの事ってわかりますか？」

「ん？ いや、プライベートはさっぱりだ。ただ、書類整理を行っている時にバルクホルン大尉の書類に病院系の書類がちらほら混じっているな。多分だが、身内が入院しているんだろうな」

詳しくは読んでないし見てないから憶測の話だがな。と告げると紅茶で喉を潤す。

自分には出せない香りと味に心の中でリネットに賞賛を送っていると芳佳が改めて話し掛ける。

「あの……ブレッドさんってリーネちゃんにはブーツさんって呼ばれてますよね？」

「ん？ ああ。同郷だし来たばかりのリーネは堅苦しかったから少しほぐそうとな」

「私もブーツさんって呼んでいいですか？」

笑顔で告げられた言葉にブレッドの目が鋭い物に変わる。

その変化に芳佳だけでなく、他のメンバーも驚いた様に身構える。

「俺の居た原隊では、愛称で呼ぶ、呼ばれると言うのはそれ相応……それ相応以上の意味がある。悪いが宮藤軍曹に愛称で呼ばせる訳にはいかない。まだ……な」

「その基準はなんなのかしら？」

ミーナの言葉にブレッドが少し考え込む様な素振りを見せると答える。

「ケースバイケースでしょうね。まあ、信頼や信用が出来る人物でしようか、まあ、本当に様々な基準です」

空を見上げると赤い光が遠くで見えた様な気がしたブレッドだが瞬きの間に消えて無くなった事で気の所為かと思うと芳佳に視線を

移す。

「まあ、簡単に言う相手は自分にとって価値ある存在だと思わせる何かを作ればいい。俺は強い弱い判断はしない」

彼がストライカーズにいた頃の仲間は強い奴や弱い奴も居たが全員が全員、愛称で呼ばせており、ストライカーズの司令からは理想の形だと言われる程には仲が良かった。

ブレッドはもう一度だけ空を見上げる。

其処には向こうと変わらない青空が憎らしい程に澄み渡っていた。



## 第14話 大統領、無視しますか？

新武装の試射を終えたブレッドは試作兵器と言う事で慎重に取り扱っていた事と未知に触れていると言う理由から冷や汗を流しながら試射を行っていた事で冷や汗を流し切ってからその汗が乾いた時の気持ち悪さを感じながら夕飯を終えて、風呂に行こうとするとミーナから手招きをくろう。

「ブレッドさん。これを渡しておくわ。変な事に使わないでね」

それだけ言い残すと直ぐに別のメンバーに茶色の厚い封筒を持って行く。

ブレッドは渡された封筒を見て、リネットが来る直前に貰った給料で行った事を思い出す。

突然だが501基地の立地は完全な孤島だ。陸地へのアクセスは橋があるがその橋も厳重な監視を行っている為に外との接触は完全に少ない。また、街に繰り出すにはロンドンまで行かなくてはならない為にこの従兵達は基本的に娯楽に餓えている。

無論だがウィッチ談義はその数少ない娯楽だがミーナを始めとして憲兵に見つかりでもすれば厳重注意。内容によっては営倉行きである。

安全にかつ満足感の高い娯楽を。そう考えるのは当然であり、その影響で従兵達の間で流行っているのがトランプや花札といった賭けに使える遊びである。

賭けの開催だが、嗜好品が支給される日であると同時に嗜好品を自腹で買う事が出来る補給日や給料日のみの開催だが運命の日はブレッドも参加した。

その日はツキが良いのか実力だけで、と言うよりもイカサマの技術を持っていないにも関わらずボロ勝ち、イカサマをした兵士さえも破るという珍現象発生により会場は荒れた事で見て見ぬ振りをしていた憲兵が取り押さえと報告を行った事で従兵は賭けに使われた嗜好品の没収。ブレッドは嗜好品没収に加えてミーナからのお説教を喰らう羽目になる。

ブレッドはあの時のミーナが出していた表情を思い出したのか。冷や汗を流すと気持ち悪さが増大、格納庫に行く前に浴場に行く事を決意する。

「……若返ったが、これは消えてないか」

若返ったが身体を温めて観察したブレッドが言葉を漏らす。反応する者が居ない更衣室に虚しく響く。溜息を零しながら浴室に入るとまずは身体を洗う。

風呂の礼儀作法などはストライカーズ時代に日本パイロットから教わっている。ブレッドは身体を洗い終わると浴槽のお湯で掛け湯を行ってから湯船に身体を浸す。

扶桑人の気質にあった湯温の為に肌を刺す様な熱さを感じるブレッドだがそれには既に慣れてしまっているのか気持ち良さそうに浴槽の中央に立てられた像に背中を預けて、リラックスしたのか目を瞑る。

『やっぱり風呂はいい。こうしてお互いに無防備で安心して腹の中を話せる。そう思わないか?』

長い髪を後ろで一房に纏めた男が楽しそうに漏らすと一緒に入っていた他の仲間達も肯定の意味で騒ぎ始める。

騒がしい程に賑やかで、国籍や信仰関係無く接するこの部隊のメンバーに差別の2文字は無く、誰もが笑顔だった。

その中でブレッドが口を開こうとしたタイミングで耳に聞こえた異音にゆっくりと目を開ける。

「(夢か……)」

どうやら寝落ちしていたらしい。顎が湯の中に沈んでいるのに気付いたブレッドが上半身を少し上げると首を振る。

「気が付いたか?」

突然の事に驚き尻を滑らせた事で水没したブレッドだが、素早く立ち上がる!

「坂本少佐! 札を掛けていた筈ですが!」

「ああ。だが、お前とは少し腹を割って話したくてな。別に私達が良ければ良いんだろ?」

自分で言った事を出されては反論出来ない。

ブレッドは湯船に身体を沈めて背中を美緒に向けると目の前にリネットが映る。

先程の叫び声に驚いて様子を見に来たのだろう。一瞬にして2人が顔を真っ赤にする。

「どうした？ 何時もの余裕のある対応はどうしたんだ？」

「ブラフ、ハツタリですよ！ ああ言っておいた方が効果が高いからですよ！」

少し混沌した状況になってしまいが暫くすると全員が落ち着き、美緒とブレッドの会話にリネットと芳佳が黙って耳を傾ける。

ただ、芳佳が驚いていたのが『風呂では腹を割って直球に話す』と言う発言だった。

ストライカーズに所属していた頃に聞いた礼儀作法だと話すと美緒が笑いながらブレッドの言葉に同意する。

暫くすると無言の時間が訪れると思いき出した様に芳佳が話し始める。

「そう言えば、1ポンドって幾らなんでしょう？」

「扶桑は円だったか？ 今は約20円だ」

「正確には19.6円だ」

芳佳は19.6円の方が計算しやすいのか19.6円で計算してご飯4000杯分と産出すると芳佳が驚く。

「高給取りだろ？ 俺もこれが半月分と言われて驚いたものだ」

「ブレッドさんの世界では少なかつたんですか？」

リネットの言葉に頷くブレッド。

「ああ、俺の世界では航空歩兵でも此処までの給料は無かったよ。まあ、こっちの戦争は経済機能にダメージがいかない戦争だからな」

その言葉に美緒が反応するのに気付いたブレッドがさらに続ける。「俺の世界では戦争を終わらせる為にお互いに価値のある都市には爆弾を落とさなかったからな」

「民間人のいる都市にか……」

「ああ、落としたから落としたり、生産機能より経済機能にダメージを

与えた方が早期に戦争が終わると判断されたからな」

「可笑しいと思わなかったのか？ 戦争は軍人が行うもので民間人まで巻き込むものじゃないだろう……」

「敵国の民間人を巻き込まなければ、自国の民間人がもつと巻き込まれる。俺はコラテラル・ダメージだと割り切つて、爆撃機を護衛した……みんながみんなそうでは無かったがな」

ふと思いつ出したのはB f 109パイロットとして部隊に合流したドイツ人パイロットを思い出す。

終戦間際は収容所で過ごした彼だったがプロイセン軍人としての誇りと収容所とその容姿、家庭環境から来た性格などは様々な人間が集まるブレッドの部隊では重宝した。

少し懐かしさを感じたブレッドはタオルと腰に巻くと立ち上がる。「お先に失礼します」

顔を伏せて更衣室へと消えるブレッドを芳佳とリネットは見れなかった。今の彼を2人は見る事が出来なかった。

「彼奴の過去は私達には計り知れない物なのかもしれない。いや、こつちでは常識でも向こうでは非常識だった。だからこそ得られる物もあれば、傷付く事もある……」

美緒の言葉が嫌に響くとリネットが話し始める。

「ブートさんの身体……凄い傷でした……全部、塞がってますけど……」

「それに、無理して動かしたからか悪化させた様な傷もあったな」

「守る戦いつて……あれだけの傷付いても全部は守れないんですよね……」

芳佳が顔を伏せる。守る為に戦う。彼はそれを人間相手に行ったからか彼の言葉は芳佳の心に容赦無く突き刺さる。

「犠牲無くして勝利無し……守る為に払う犠牲……コラテラル・ダメージ……あいつの言葉には重みがいやと言う程にある」

守る為に死んだ命を考えても、守る為に殺した命まで考える必要の無いこの世界の住人には彼の言葉に重みを感じてもそれ以上の物は想像出来ても実感は出来ないだろう。

それが明確に隔てる壁になっている。それをリネットは実感して

いた。

更衣室では下半身を着たブレッドにペリーヌが鉢合わせして、狼狽えるがコートを羽織るだけで上半身を隠したブレッドが宥める。

「申し訳ありませんでしたわ」

「札には気付いてくれよ」

そう言うて去ろうとしたブレッドにペリーヌが話し掛ける。

「脇腹のその傷は……ただの傷ではありませんわね」

ペリーヌの言葉に頷くとペリーヌが続ける。

「銃創ですわね。それも貫通し損ねた物の傷ですわ。何で撃たれましたの？」

「宮藤軍曹ならまだしもペリーヌにわかるとはな。20mmだよ。ギリギリでコクピットを貫通した銃弾だよ」

「20mm！ そんな物に撃たれたのに無茶に動いたというんですの！」

「そうしなきゃ死んでいた。逃げる途中で殺されるか、戦っている最中に死ぬか殺されるかだったなら、王立空軍軍人として後者を選ぶ」

ペリーヌが更衣室に入りかけた身体を廊下に出すと背中を更衣室側の壁にもたれさせる。

ブレッドはコートを脱いで上着をしつかりと着用し始める。

「それも……バトルオブブリテンですわね……」

「ああ。兎に角、無茶をしなければいけなかった。でなければ……」「祖国を蹂躪される……わからない訳ではありませんわ」

ブレッドがならば、と続ける前にペリーヌが言葉を紡ぐ。

「過去の事ですわ。あれこれ言いませんが……此処では自分だけが無茶をしなければいけないと言う訳ではありませんわ。貴方が無茶をしなければいけなくなっただけだと思っただけでも声を掛けて下さいな。ガリア貴族として、この基地の仲間としても助力は惜しみませんわ」

それだけ告げるとペリーヌが去って行くのが影と足音でわかるとブレッドがほのかに笑う。

「……感謝する」

ブレッドの言葉は誰にも聞かれる事無く、空気に溶け込んだ。

次の日の訓練時間にブレッドは滑走路に一般兵である少年兵と共に這いつくばっていた。

少し離れた空では芳佳とリネットが美緒とバルクホルンと共に編隊飛行の訓練をしている。

ブレッドはウィッチ4人の方を見て、こっちに出来ない事を確認すると左肘を地面に置いて逆さにしたくの字の様な形を作ると試作品の銃にあるハンドガードを左手に置く。

右手はグリップを握り、銃床の底を肩に押し付けながら頬で固定すると溜息の様に息を吐いて、スコープのつまみを動かしてスコープの調整を行う。

調整を終えるとスコープと銃床から顔を退かして息を吐くと呟く。

「1マイル、1600m……」

隣に這いつくばった少年兵に顔を向ける。

「こりゃ、遠いぞ…大統領、無視しますか？」

その問いに少年兵は苦笑いで返す。返答と突っ込みに困っている様だった。

ブレッドは鼻息を荒く吐くとリボルバーの撃鉄を巨大化させた様な撃鉄を引く。

撃鉄が引かれるのに合わせて回転式弾倉が回転し、引き切ると回転式弾倉が少し前進すると弾倉と銃身との隙間が無くなり、完全に密閉される。

ブレッドが2回、口で呼吸した後引き金を引く。

引き金が引かれた事で撃鉄が倒されて銃弾の雷管を叩く。雷管は装薬を爆発させて銃弾にエネルギーを与え、銃身はそのエネルギーの逃げ場所を前方に固定する。銃弾は銃口から飛び出すとライフリン

グにより回転しながら真っ直ぐに飛んで海の上に浮かぶ小さな岩に乗せられた的へと迫る。

銃弾は的に命中し、的は木っ端微塵に吹き飛ぶ。

「無視しない方が良いです」

ボーイズ対装甲ライフルでは絶対に取り得ない結果がスコープ越しに見たブレッドが呟くと警報が鳴り響く。

「クソ！俺のユニットはO H オーバーホール 中で出撃出来ないのに！」

O Hとは解体整備と言って普段の整備では整備出来ない場所を整備する為に行う物だ。今は定期的に行うO Hが今回の出撃と被ってしまうが元々の話でブレッドの昼間出撃は予定されていないので問題は無い。

だが、ブレッドとしては緊急出撃の人員になれないのは精神的に辛い。

離陸するウィッチの邪魔になると試作品の銃を持って走り出すと少年兵も急いで後を追う様に記録用の機材を持って走り出す。

ウィッチが飛び立った後に元の位置に戻る。

敵の侵攻コースは基地の正面からと言うのもあり、リネットが撃墜した高速特化タイプのネウロイだった場合に備えて消費した弾薬を装填して、伏射の姿勢で銃口を向ける。

ブレッドが銃口を向けている間に出撃していたウィッチ側は既に交戦状態に入っていた。

バルクホルン隊が突入したのに合わせて美緒隊が援護の為に行動を開始する。

ミーナは司令らしく少し離れた位置でリネットとロツテを組んで戦場全体を見渡していた。その中でリネットがある事に気付く。

「ペリーヌさんが少し遅れ気味です」

バルクホルンがMG 42を2挺で弾丸をネウロイに浴びせて離脱していくところを見ていたリネットは、ペリーヌがバルクホルンの動きについていけず遅れている姿に違和感を抱く。

ペリーヌもバルクホルン程では無いが『青の1番』と通称が言われる程には腕が立つエースだ。

そんなエースがバルクホルンの動きについて行けないのが不思議で仕方ない。

「やっぱりおかしいわ」

「え？」

突然にミーナが言い出した言葉を横で聞いていたリネットは何のことか分からずにミーナの方を向く。

「バルクホルンよ！ あの子はいつも視界に二番機を入れているの。なのに今日は一人で突っ込みすぎる！」

それを聞いてリネットもバルクホルンを見ると違和感の正体に気付く。

バルクホルンはネウロイに急接近し、ホバリングしながら弾丸を浴びせている。それはあまりにも危険な行為である。ペリーヌもそれがわかってはいるのかなんとか追い付いて援護に入る。

「あそこを狙って！」

「はい！」

リネットはミーナから命令を受けるとバルクホルンとペリーヌが攻撃している赤い部分を撃つ。バルクホルンとペリーヌは命中の寸前で僅かに離脱し、誤射を受けるのを防ぐ。

命中した弾は装甲を抉り、コアを露出させるが命の危機を感じたネウロイが反撃を激しくする。

バルクホルンは迫りくるビームをシールドで受けず回避するが回避した先にはシールドを張ったものはじき飛ばされてしまったペリーヌが居た事でペリーヌとバルクホルンは空中で激突する。

2人の動きが止まった所を狙わないネウロイでは無いらしく、2人に目掛けてビームを放つ。

バルクホルンは咄嗟にシールドを張ったが不完全なシールドだった事でビームは貫通。手に持っていたMG42のマガジン付近に着弾、薬室に入っていた弾丸が誘爆して飛び散った金属片がバルクホルンの胸に刺さり、バルクホルンは頭を地面に向けて落下する。

「大尉!!」

「バルクホルンさん!!」



ペリーヌと芳佳が墜落していくバルクホルンに駆け寄り、空中で二人はバルクホルンの体をキャッチする事に成功する。

「おのれッ!!」

美緒がネウロイに対して怒りを露にして突入するがネウロイは回転しているパーツの端に付いていた円錐状の物体を切り離す。

それはリネットが初戦果を挙げた速度特化型のネウロイと酷似していた。

「嘘でしょ!?!」

驚くミーナだが直ぐに基地に通信を入れてエーリカ・シャーロット・ルツキーニに出撃を要請。リネットは離れるネウロイに対して狙撃での撃破を行おうとするが小刻みに位置をズラしながら飛ぶネウロイに銃弾を当てるのは難しく、無傷で取り逃がしてしまう。

シャーロットとルツキーニ、エーリカが即座に出撃して子機の迎撃に向かった事を聞いたミーナはリネットに目の前の大型に注力する様に指示を飛ばした。

「あれだ!」

シャーロットがいち早く敵を視認する。

三角形を描く様な編隊を組んだ3機のネウロイが迫る3人にビームを放つ。

3人はシールドで防ぐと散開、1人に1機ずつについて交戦を開始する。

エーリカは横を通り過ぎる際に固有魔法で産んだ風でバランスを崩させた所で胴体中央を銃撃して撃破する。

シャーロットも固有魔法の加速を使って後ろに張り付くと同時に発砲して撃破する。

ルツキーニは固有魔法で産んだシールドを重ねて突進してネウロイを叩き折る。

交戦から撃破まで1分か2分と言う早業だがネウロイの破片から

4体のさらに小型のネウロイが飛び出す。

このネウロイは先程のネウロイのブースターだと思っただけだ。

武器となる赤い部分はないが速度が今まで以上だ。シャーロットがなんとか追い付いて攻撃を加えられたが装甲が硬いらしくシャーロットのBARでは効果が無い。

シャーロットが歯を食い縛ると通信が入る。

《シャーリー退避しろ》

ブレッドのその言葉を聞いてシャーロットはネウロイから少しズレた

位置に移動するとネウロイの1機が粉碎される。

《次だ。右手側のネウロイに攻撃を加えてくれ》

《わかった!》

ネウロイは射撃を受けているが効かないとわかっているのかそのまま直進していると弾頭に当たる部分から潰れる様に壊れると白い破片に変わる。

「なんて威力の弾だよ!」

シャーロットの目の前で1機、また1機と一定のスパンで撃破されるネウロイ。

流星に12機も居た友軍が基地を目視確認出来る距離になる前に8機もやられればネウロイ達も焦るのか一斉に加速する。

一定のスパンで飛んで来るなら3機がやられても加速したなら1機は飛び込めると言う判断だろう。

それをブレッドは展開した魔導板でバッチリ補足していた。

「行かせるとでも?」

スコープを覗き込む。

「主よ。友を守る為、力をお与え下さい」  
引き金を引く。

銃口から飛び出した弾は加速した事で回避機動を取る暇が無くなったネウロイの1機を完全に粉碎するがネウロイもそれは折り込み済みだ。1機でも基地に飛び込めれば良いのだ。

空葉莢が滑走路に転がるとシリンダーが回転する音が短く響く。

「主よ。私に名誉は要りません。ただ、友に帰る場所をお与え下さい」  
引き金が引かれて雷管が爆発する。爆風に乗って撃ち出された弾丸はネウロイを潰す様に破壊する。

シリンダーの回転に合わせて葉莢が吐き出される。

「主よ。私の手と指、銃に戦う力をお与え下さい」

引き金を引いて弾を撃ち出す。葉莢が落ちる音と共にネウロイが粉碎される際に不快なネウロイの叫び声がブレットに聞こえる。

「主は我らの光、我らの意味、我らは盾、ただ主に献身を」

最後のネウロイが滑走路のすぐ近くに迫った所で発砲。

至近距離で自分達を一撃の元に粉碎する攻撃を喰らったネウロイは崩壊。

破片が慣性の法則に伴い前に飛んで来るがブレットと少年兵はブレットのシールドで無傷で済むだものの破片が飛び込んだ事で窓ガラスなどの脆い物に被害が及ぶ。しかし、人的被害は避難済みだった為にゼロだ。

「やりやがったぞ！ ルッキーニ！ ブレットの奴がやったんだ！」

シャーロットが興奮気味にミーナへ報告するとミーナはホッと胸を撫で下ろす。

「リヴォルヴァーショットガン10ゲージモデル…良い銃だ」

ブレットは降り注ぐ欠片の中で立ち上がり、リヴォルヴァーショットガン10ゲージモデルの銃床を掌に乗せると肩に立て掛けた。

戦果を誇る様に……破片の雨の中で銃身が陽光を反射している。

## 第15話 過酷な夜間

ドーバー海峡上空。

薄緑色の光と粒子を撒きながら飛行する物体があった。

「此処は異常無し」

魔導板に反応が無かったのを確認すると身体を傾けて別のグリットへと移動するのは世界的に見ても珍しいナイトウィッチでは無く、ナイトウィザードであるブレッド・フィリップだ。

今日は昼間の出撃も無く、ネウロイの出現も予想されていない為にブレッド1人でも夜間哨戒だった。

ブレッド自身は探知系固有魔法はあるがどちらかと言えば視覚に依存するタイプと言う事でサーニャよりも広域を監視・警戒は不可能だがサーニャ以上に正確な情報を取る事が出来る。

魔導波の感度を高めると耳のインカムが反応する。

「なんだ？」

近くでは無いと魔導板の操作で気付いたブレッドは反射波だと仮説を立てるとそれ様に魔導板の1枚を操作するとはつきりと聞こえる様になる。

それは鼻歌だった。

とても優しい旋律の曲でブレッドもついつい口ずさんでしまうと言んカムから鼻歌が無くなった。

《誰ですか？》

警戒心丸出しの声にブレッドが慌てて返答する。

《501所属のブレッド・フィリップ少尉だ。すまない。反射波を偶然捕まえたのでついな》

《そう言う事でしたか、私はハイデマリー・W・シュナウファー。大尉です》

まさかの人物に驚いたブレッドがバランスを大きく崩す。

ハイデマリー・W・シュナウファー。

カールスラントの4強の1人にして全ての撃墜記録が夜戦と言う異色の経歴の持ち主であり、ナイトウィッチとしてもウィッチとして

も文句無しのトップエースだ。

ブレッドは上官で実力も遙かに自分よりも上の相手に慌てるが向こうからは笑い声が聞こえる。

《少し話し相手になってくれませんか?》

ハイデマリーからの言葉にブレッドはハイデマリーの話に耳を傾ける。

基本的にはブレッドの事を聞いてくる事が多く、ブレッドはその1つ1つに丁寧に答えて行く。

エース揃いのあの場所で価値を持つ為に様々な事に手を出している事。戦闘スタイルは特に無く狙撃も格闘戦も一撃離脱戦法も使える事と昼間も夜間も飛んでいる事。ただ、魔導針が後天的に身につけられる技術だと知った時に独学で訓練したら何を間違ったのか魔導板と言う全く新しい魔法になった事などを話すと一番驚かれた。

《私達とは違って後天的なナイトウィッチ、あ、ウィザードでしたね》  
《ナイトウィッチ不足は嘆かれてるが訓練すればなんとかなる。そこまで嘆く事か?》

《貴方の場合はブリタニアのリーダー基地があるので問題無いでしょうが、ナイトウィッチを欲しがる場所は基本的にリーダー基地が満足に無い場所ですから》

それだけ話したハイデマリーの雰囲気が変わる。ブレッドも無線でそう言った事は経験している為に口をつぐむと予想だにしない言葉が聞こえる。

《ブレッドさん! 回避して下さい!》

《は!?!》

条件反射的に身体を背中倒して倒れた瞬間に魔導板に小さな反応を感じる。

そして意識を反応のあった方に向けた瞬間に高速で飛んで来た小型のネウロイが目の前を通り過ぎる。

急いでインカムを基地に繋げると同時に叫ぶ。

《こちらブレッド! ネウロイと遭遇! 接敵された! 交戦に入る! 場所は……クソ! ジャミングか!》

場所の報告に息継ぎをした事でインカムから砂嵐がはつきりと聞こえると悪態を吐いて銃を握り直す。

顔を前に向けるとネウロイが反転し終えたばかりだった。

形状はカナブンから足を取り外して、逆向きで飛ばしているような形状だが攻撃の瞬間に身体をスライドさせる事でコアを露出させる事で威力の高いビームを放つ事が出来る見た事の無いタイプだった。

魔導板はあの小型ネウロイを示していると判断したブレッドはリヴォルヴァーカノンの銃口に向けた瞬間に背後から複数のネウロイ反応が現れる。

「同じタイプ！」

装填されているのは10ゲージのショットシェルに魔力を込めて魔力弾に変えた米粒ほどの鉛玉を大量に詰め込み、近距離での破壊力と中距離での面制圧力に優れた00B弾。

5機のネウロイが反転して突っ込んで来るタイミングに合わせて引き金を立て続けに5回、銃身の位置を変えながら発砲する。

吐き出された鉛玉は投網の様に広がってネウロイを捉える。ネウロイは鉛の投網にコアを露出させた状態で飛び込んだ事で砕け散ってしまう。

「よしー！」

《待って下さい！ 下に大型の反応！》

下に銃口を向けた瞬間に雲からお椀に似た形のネウロイが4機飛び出してくる。

「新手か！」

3発発射して4機を撃破する。先程のタイプよりは装甲が薄い様だが全身が赤く死角の無い弾幕を貼れると思うとブレッドの頬に一筋の汗が流れる。

だが、それ以上に問題なのは母艦となっているであろうネウロイがステルス機能を持っており、自分には霧が掛かった様な反応になっており、大まかな位置すらわからない有様だが、ブレッドは距離と範囲が全くわからないよりはマシと言う言い聞かせる。

《ハイデマリー大尉。貴方に大型の反応をお願い出来ますか？ 小型

はこつちで察知します》

《こつちは小型を掴めませんが大型は任せて下さい》

ブレッドの要請にハイデマリーは了承する。

ブレッドはナイトウィッチなら誰でも出来る物だと思っているがこれが出るのはハイデマリー程のナイトウィッチのみであり、サーニヤも水平線以上の距離が離れた場所から反射波のみで補足して支援を掛けるのは無理だ。

《貴方から右側50mです！》

「カナブンか！」

ハイデマリーの通信に銃を構えると6機に増えた最初のネウロイが現れる。

ブレッドは向こうが攻撃してくるであろう距離に銃弾が届く様に計算すると迷う事なく引き金を6回だけ動かす。

リボルバーの中身を完全に撃ち切ってしまう回数だったが00B弾の6連射はネウロイの進行方向を完全に封鎖しながら飛んで行き、着弾の寸前にネウロイがコアを露出した事でネウロイが砕けて夜空に6発の白い火花が上がる。

《下を通り過ぎます！》

銃口を下に向けると2回目に出てきたネウロイが8機に増えて雲を突き破ってやってくる。

ブレッドは4発発射して7機を破壊、最後の1機はトン普森を抜いてシューターフロアと呼ばれる横旋回をしながら正面を向き合って撃つと言う動作を使つて撃ち合い撃破する。

此処までシールドを張らずに戦っているとおりリヴォルヴァーカノンと魔力弾の破壊力と言うべきだろう。

《離れます》

ブレッドはリヴォルヴァーカノンのリボルバーにバックショットを3発詰め込むと残りの3つとチューブ弾倉に違う種類の弾丸を詰め込む。

《後方50m！》

「来る！」

銃口を後ろに向けると同時に雲から最初に現れたタイプのネウロイ8機も現れるがブレッドの方から近付いて1発放つと4機がやられるがネウロイは2機ずつに別れると2ルートから迫る。

「甘いー」

ブレッドはホバリングを行うと同時にコンパスの様に回転しながら立て続けに2回発砲して4機を破壊すると同時にハイデマリーの通信で下を通ると聞こえるとブレッドは真下に来たら伝える様に告げる。

《今です！》

ハイデマリーの通信が届くと同時に3発を同時に発射する。

撃ち出された弾丸は投網の様にバラける事はなくフリスビーの様に円板型に固まって発射されるリーンバック弾だ。

暴動鎮圧などに使われる弾丸だが魔力弾に変えてネウロイに放つと魔力を帯びた衝撃波がネウロイの内側や反対側に抜ける。

装甲を破壊する事なくコアを破壊したり、薄いネウロイや脆いネウロイなら切断する事が出来る。

《2つに増えた!? いえ、消滅して中型程のサイズになりました!》

リーンバックによる内側をズタズタにされたのか2つになった様だが中型の反応に下がるとそのままの反応を保って離れて行く。

分離型かコアを複数持つタイプのどちらかだろう。だが、ブレッドに油断する隙を与えないと言わんばかりに雲から4機の円板型ネウロイが現れる。

「また貴様か!」

ストライカーズ

今度はトンプソン S を使って4機を立て続けに撃破するが向こうの反撃も喰らうがシールドで受け止める。

《前方50m!》

ハイデマリーのインカムに不規則な間を置いて4回鳴り響くと中型ネウロイの反応がブレッドの真下を通るタイミングを伝える。

《5...4...3...2...1...》

今、と告げる前に銃声が立て続けに2回響くと中型ネウロイの反応が弱まり、小型よりは大きいが中型と言うには小さいと言う反応にな



る。

「残り6！」

18発装填の為に残弾6発と心許ない数値だがブレッドはそれが危機とは思えなかった。

ハイデマリィから大雑把なデータが告げられる。ハイデマリィも小型化したネウロイの補足が難しくなったのだろうがハイデマリィの情報とブレッド自身が手に入れた霧に掛かったデータを照らし合わせるブレッドは6連射を浴びせる。

最後の6発に込められた弾丸はフレシエツト弾と呼ばれる釘状の弾頭を撃ち出す物で、今回は1シエル9本入っており、54本の釘が空を飛んでいる。

00B弾とは違い破壊力には劣るが貫通力が高く中距離射撃では00B弾よりも強力な弾丸だ。そして今回の弾も無論、魔力弾だ。

フレシエツト弾は釘と言う形の関係上込められた魔力に別の効果を付与できる魔法陣を彫ることが出来る。現在のフレシエツト弾は魔力弾化すると前半分が前方に向けて魔力を放出し、後ろ反応が円板状に放出する様に設定されている。

これは内側は深く、外側は広く破壊する事が目的で前者はコア破壊、後者はコア搜索が目的である。

魔力弾化されたフレシエツト弾は雲を通過する際に大玉スイカ程のサイズでは有るが雲を吹き飛ばして54本全ての釘が命中する。

ロケットの頭から角張った主翼を広げた様なネウロイの身体の彼方此方から爆発してネウロイを破片に変えるが破片は魔力の波に乗って四方八方へ飛び散って行くのをブレッドはシールド越しに見守る。

《ハイデマリィ大尉。貴女のお陰で助かりました》

《撃破出来たんですね。それは良かったです》

ハイデマリィとの短いやり取りを終えると慌てた声で叫ぶミーナの声が耳元で響く。

《ミーナ中佐ですか。ブレッドです》

《良かった。通じたわ……定期連絡が来ないからどうなったのかと》

心配したのよとミーナが話すとブレッドはジャミングで通信出来なかつた事とネウロイに遭遇して交戦した事、ハイデマリーの支援が有って撃破出来た事を報告するとミーナは一度だけ怒鳴るとサーニヤに夜間哨戒を引き継いで帰還する様に命令すると同時にハイデマリーに感謝の言葉の伝言を伝えると通信を切ってしまう。

《聞こえてたか？》

《はい。私からも宜しく伝えて置いてくれますか？》

《承りました》

合流したサーニヤとハイタッチするとブレッドは最短距離で基地へと帰投し、即座にミーナの待つ司令室へと赴く。

「何をしていたの！」

入った瞬間にノータイムでミーナからの叱責である。

「通信を妨害されたならまずは逃げなさいよ！　なんであんな状況で交戦をするの！　今回はハイデマリーさんの探知と通信があつたからとは言えども危険すぎるわ！　サーニヤさんでも大型相手となれば撤退を行うか救援を待つわよ」

ミーナは鳴き声でブレッドの行動を非難する。その内容に口を挟もうとすればミーナは怒鳴る様に叫んでブレッドを黙らせる。

だが、その行動がミーナを冷静にさせたのか珍しく目を伏せてブレッドに謝罪の言葉を告げる。

「気にしていません。今回の事では何も言いませんが、司令がそんな顔をしていては部下が不安がります。もっとビシッと居て下さい」

ミーナが椅子に座り直して上体を起こすとブレッドが敬礼をしてから今回の戦闘に関して報告を入れる。

「今回の相手ですが多段式ロケットの様に複数のパーツが合わさって形作られる多数のコアを持つタイプでしょう。コアを見ていないので何とも言えませんが」

「何か特徴はありましたか？」

「2種類のネウロイを運ぶ母艦型で通信妨害と完全に近い隠密機能を持っていました」

交戦した小型ネウロイについて報告するとミーナが新型だと頭を

抱える。

大型1体だと思ったら複数の小型ネウロイが増える負担と複数のコアを持つ負担がダブルで来るからだ。しかも完全に近いステルスに通信妨害も持っているとなると発見も迎撃も難しくなってしまう。

「レーダー基地が気付けない訳ね。あんなのが特攻型ネウロイか搭載をしたらと思うとゾツとするわね」

ミーナの言葉にブレッドは苦笑いを浮かべると向こうの世界でV1ロケットの迎撃作戦に従事した事を思い出す。

機銃での迎撃は巻き添えを回避する為に長距離射撃が必要だったがサイズの難しかった事からスピットファイアの主翼でをV1の翼を叩いて墜落させていた覚えがあった。

ブレッドはネウロイの特攻型の撃墜にシールドのありがたみと戦闘機では非常識な事をしたなど笑うとミーナが話し掛ける。この夕イミングでブレッドは1つの案を思い浮かべるがこの部隊では使えない案の為に脳内に止めて何でもないと首を振る。

ミーナは疑問に思いながらも頷くと2人で何回か情報の交換を行うとブレッドは退出して自室に入るとペンと紙を用意すると机に齧り付いて書類をまとめた頃には空が白んでいる時間だがベットに軍服ごと倒れ込むと泥の様に眠ってしまった。

## 第16話 壁を超えて

大空を2機のレシプロ戦闘機が駆ける。

《ようやく叶ったぞー!》

嬉しそうに通信を繋げるブレッドに通信機からは同じ様に嬉しそうな声が響く。

バックミラーに映る相手のパイロットは酸素マスクを外して味のあるいい笑顔を浮かべる黒人だった。

《ああー俺もこの瞬間を待ちわびていた!》

後方を飛ぶ戦闘機がブレッドをスピットファイアに銃弾を放つがブレッドはその攻撃をエルロンロールをしながら降下する事で躲し、追撃して来た相手を確認するとクルピットで機首を回し、通り過ぎてしまった戦闘機に銃弾を浴びせた。

《……ザツ……きて……ザザツ……さい……ザー……じ……す……》

機銃が命中したタイミングで通信機からノイズ混じりの声が聞こえると同時に身体が不自然に揺さぶられる感覚と共に通信機からは無く、耳から聞き慣れた声が響く。

「起きて下さい。もう10時ですよ」

リネットに身体を揺さぶられながら声を掛けられた事でブレッドは意識が覚醒して目を覚ました。

「もう……そんな時間か……懐かしい夢だったな……」

「へ? 何がです?」

「何でもない。それでどうした?」

リネットが部屋に來た理由を思い出して、ミーナから談話室に集まれるなら集まってくれと言う伝言を伝えるとブレッドは頷く。

「わかった。それじゃあ、着替えて行く……着替えるから出ておいてもいいぞ?」

ブレッドがニヒルな笑みを浮かべながら言った言葉にリネットは顔を赤くしながら出て行くのをブレッドは楽しそうな笑みを浮かべると上着とズボン、下着を脱いで全部新しい物に変える。

コートはこの季節だと熱い事この上ないので夜間飛行の時以外は

脱ぐ事にしており、夏服として支給されている暗い紺色の半袖半ズボンを身につけるとベルトと肩掛けを身に付けて、ベルトにC96を入れたホルスターをぶら下げる。

身嗜みを姿見で確認し終えて談話室に行くとミーナから何か言いたげな目線を投げられるがブレッドはどこ吹く風で受け流すとミーナが話し始める。

「実は海に行こうと思っているの」

ミーナの言葉に一瞬だけ首を傾げる。

ミーナも元を辿ればカールスラント人、ブレッドにとってはドイツ人であり、ドイツ人の評価として真面目で理由や訳が無いと娯楽を話す事は少ないだ。

「訓練ですか？ 何となく予想はつきませんが」

「あら。解ってるじゃない。訓練で海に行きます。まあ、水泳の訓練ね」

ミーナの言葉に芳佳が目に見えて落ち込むと美緒の叱責が飛んで、慌てて芳佳が佇まいを直す。

そんな様子を笑って見ているミーナにある人物の面影を重ねて目を伏せる。

「お爺ちゃん……」

「何か言ったかしら？」

「いえ、何も。集合時間は？」

これ以上は同じ話題を振られない様に話を進めようとするブレッドにミーナは向こうの世界を思い出したのだらうと察すると話を進める。

「集合はここで時間は1000時よ。いい？」

『了解』

ミーナの説明に全員が返事をする。ミーナは芳佳に目を合わせる。

「分かったわね、宮藤さん」

「はいー」

芳佳が元気良く挨拶するとミーナは頷くと思い出した様に話し始める。

「では、以上の内容をシャーリーさんとルツキーニさんに伝達してください。シャーリーさんは朝からハンガーにいるわ。ルツキーニさんは……基地のどこかで寝ていると思うから探してみて?」  
「わかりました」

リネットの手を掴んで行こうとする芳佳にブレッドが声を掛ける。  
「訓練の後には遊ぶ時間はあるから心配すんなよ」

じゃあ、今日の夜間哨戒は俺だからと伝えたと芳佳とリネットの2人がハンガーに向かっていくのを見送ると醜悪な笑みを浮かべてミーナに目を合わせる。

「体力が残っていればですが……ですよ?」

ミーナはその言葉に満開の笑みで答えたのを見て、自室に戻り夜間哨戒の為に仮眠を取ろうとするとミーナから手招きをされる。

「最近だけど夜間哨戒での戦闘が多い気がするの。だから、近々だけどロッテで出て貰おうと思っているわ」

その言葉に選ばれるであろうウィッチが脳内でリストアップされる。

「サーニヤとエイラですね? でも、3人だとローテが組み難くなりますよね? リーネを夜間要員になる様に鍛えろと?」

501のウィッチは少なからず夜間飛行の訓練を受けているが夜間戦闘となると話は別となり、充分な要員が居ない状況となる。

そして、夜間戦闘員となると計器と言う頼れる物がある戦闘機パイロットと違い、感覚や知識が全てのウィッチとなると機械化出来ない場所がある以上に練成に時間が掛かる。

ナイトウィッチが少ない理由の1つだ。

「それも視野に入れているわ。経験の量で言えば私達なのでしょ?」  
「……………」

言い淀むミーナ。

私達……つまりはカールスラントの3人なのだが、ミーナは事務仕事、他の2名は501の主力を担うメンバーの為に夜間に温存するとなると昼間は使えなくなる。

夜間戦闘の比率は昼間戦闘の比率に比べると微々たる物でそんな

物にエースを使う訳には行かない。

これもナイトウィッチ不足の理由の一端である。

「経験の鮮度だとリーネですね……サーニャとリーネ、エイラと私でしょうか？」

「あら？　夜間撃墜数ならサーニャさんと同列よ？」

「あれ？　ああ、此処って激戦区だから」

ミーナが苦笑いを浮かべながら、貴方の場合は戦闘回数は少ないけど密度が凄いからと突っ込む。

夜間に大型ネウロイと交戦するなど早々に無く、あつてもカールラント方面に近い空でハイデマリーなどのナイトエースを多く輩出した地区位の物だ。

「教える事で深くなる、身につく物もあるわ。お願い出来るかしら？」

夜間飛行・夜間戦闘に至っては戦闘機での経験もあつてかサーニャとエイラの両名から合格点は貰つており、2人からも経験でしかどうにか出来ない箇所しか無いと言われており、ブレットも前回の夜間戦闘で技術不足を痛感しており、新人のリネットを連れて行く事で手に入る何かもあるだろうと考えると敬礼をしながらミーナからの要請を受理する。

「わかつたわ。開始時期に関しては調整があるから、目処が立ったら貴方に伝えるからそのタイミングでリーネさんに伝えて下さい」

「了解です」

《成る程、それで教導について教えて欲しいと》

夜間哨戒中にハイデマリーとの通信を試みたブレットは何とかハイデマリーとの通信を成功させる。だが、4割はハイデマリーの調整が有るからこそ可能な通信だ。

そこは魔法の性質や経験不足故に致し方無しだろう。

《ですが、私は教官と言うのをした事がありませんし、教導されたのも

ナイトウィッチの素質があるのを前提にされた訓教導でした》

《やった事のあるナイトウィッチとコンタクトって取れる?》

《ごめんなさい……そうした話は……》

《やっぱり居ないか……》

前代未聞、前例無しな事をしようとしているのだと改めて実感すると気合を入れる。

それにハイデマリーがポカンとしているとブレッドは誰もした事の無い事に挑戦するのはワクワクするじゃないかと楽しそうに話すとハイデマリーは自身の中のブレッド像が変わった事に薄つすらと笑みを浮かべる。

その後も簡単な説明を受けながら魔導板の操作を行いながら夜間哨戒を行うブレッドが基地周辺のとある地区を異常無しと判断して飛び去るがそんな彼を高度1万1000mから監視する黒い物体があった事に気付く事は無かった。

1万1000m上空の目に気付く事無く、翌日を迎えた501のメンバーの装いは何時もと違っていた。

「やつほーう!!」

シャーロットとルッキニーがはしやぎながら海にダイブした事で海面には豪快な水柱を立てる。

その奥ではバルクホルンがクロールを行い、それを追う形でハルトマンが犬かきをしている。

砂浜ではエイラとサーニヤが座っている。

そう。今日は水泳の訓練であり、同時に海水浴の日であり、この日は全員水着を着ている……ブレッド以外は。

「水着を持っていないのか?」

いつもの軍服を着てきたブレッドに美緒が真っ先に問い掛けるとブレッドは首を振って否定する。

「持ってますけど、今日は不時着水や撃墜時に落水した時の対処の訓



練でしょう？ 軍服で行うのは当然かと？」

「まあ、いいわ。実践的だしいいでしょう」

ブレッドの言葉にミーナが許可を出すと美緒も仕方ないと言う雰囲気です承すると3人の耳に芳佳の声が響く。

「なんでこんなの履くんですか!?!」

「そりゃ、お前。濡れない為だろ？」

そこには訓練型のユニットを履いた芳佳とリネットがおり、ブレッドも訓練型ユニットを履いて立っていた。

「何度も言わずな！ 万が一だが、海上に落ちた時の訓練だ！」

「他の人達もちゃんと訓練したのよ。あとは貴方達だけ」

そう、芳佳とリネット、ブレッドの3人はこれからユニットを履いたまま海にダイブするのだ。

501の主戦場はドーバー海峡。つまりは海上に為に落下した際に死亡率は陸地より少ないが落下後の生存率は低い為に正しい知識と正しい経験は己の命に直結する為にこの訓練は必須と言えるだろう。

「つべこべ言わずに、さっさと飛び込め!!」

そして美緒の掛け声と共に芳佳とリネットは海にダイブし、ブレッドは離れた所にダイブする。

芳佳とリネットは海に入った後に懸命にもがくが、そのまま沈んで行く。

ブレッドはそのままもがく事無くせずに沈んで行き、海中では芳佳とリネットはもがいて海面に上がろうとする。

美緒とミーナは静かにその海を見守っている。

ブレッドはいつの間にかやら上陸して、海水の滴る服をそのままにミーナと美緒の背後に立つ。

「……浮いてこないな」

「ええ……」

そして坂本は懐中時計を取り出し時間を見て呟くとブレッドが肩を叩き2人を驚かせる。

ブレッドは大成功とサムズアップを送る。

「何処から上がってきた？」

「砂浜からです。背泳ぎだったので岩場は危険ですから」

「どうやってあがったの？　と言うかユニットは？」

ブレッドは上がって来たまでの経緯を説明する。

ブレッドは着衣という事もあり動きが鈍く動くに適さないがまずは重りになっているユニットのレバーを引いてユニットを強制的に外すと足の力だけで水面に上がるとまずは浮く事に専念してから服と身体の間を空気を入れて浮きやすくすると足の力だけで斜めに進んで砂浜に上がる。

「斜めに進んだのは対岸から跳ね返ってくる波に捕まらない様にする為ですね」

「わかってるじゃない」

「港町生まれですからね。水は敵じゃないとよく知っています」

水は恐ろしいがその恐ろしさを知り、正しい知識と経験を積めば決して敵ではない。彼は港町の生まれ故にその事をよく知っている。

「じゃあ、ユニットを回収して来て」

「じゃあ、着替えますね」

岩場の影で着替えを行うと言っても服の下に水着を着ているので服を脱ぐだけなので普通に着替えるよりは早く、また向こうの世界で濡れた服の脱ぎ方も訓練したので早かった。

水着になったブレッドはもやい結びにした縄を持ってそのまま海に飛び込むとジャックナイフで潜行、耳抜きをしながら海底に脱ぎ捨てたユニットの翼の下に縄を通して浮上。地上から縄を引くともやい結びの輪が締まり、翼で固定されてユニットが海面まで上がるとそれを慎重に回収する。

「海軍から空軍かしら？」

「よく言われるますけど、生粋の空軍軍人です。と言うかイギリス海軍はカナヅチだらけですよ？」

ミーナがえ？　と笑顔で固まるとブレッドが肩を竦めて話し始める。

と言うのも、イギリス海軍では脱走防止に水泳を教えないと言う一

風変わった伝統がある。これは近代海軍ではかなり珍しい伝統である。

そんな事を話していると海面からリネットと芳佳が出てくる。

「いつまで犬かきをやってるかー、ブレッドを見習わんか!」

と、メガホンを片手に美緒が言う。ブレッドはユニットを後生大事に履いている2人に呆れる。

水に沈む物を持っていては体力の切れ目が酸素の切れ目だ。

二人は懸命に酸素を求めるように顔を上げるが、何回も沈んでは浮き沈んでは浮きを繰り返しており、一向に進展が無い。

そんな2人をペリーヌは呆れた様に見ながら平泳ぎで去って行く。

「そんな……いきなり……むりっ……」

そして芳佳とリネットは再び海の中に沈んで行くと流石にまずいとブレッドが潜水して2人の腰に縄を括り付けて海面に顔だけは出させる。

「よーし、皆休憩だ!」

美緒の掛け声で全員が休憩に入る。他の隊員たちはまだ余力が残っており海で遊んでいる様だが、ギリギリの所をブレッドに救われた芳佳とリネットは海からユニットを持って上がる頃には既にクタクタに疲れ果てており、2人は砂浜に倒れ様に身を預けるのを見てブレッドはこの訓練でユニットを捨てるなどを事は今度教えようと決めて、離れる。

「いきなりユニットを捨てるなんてね」

ミーナの言葉にブレッドは空を見上げながら話す。

「向こうの教官にね。機体あくまでも消耗品、撃墜されても搭乗員が生還すれば大勝利って言うのを教わっていて」

ミーナは成る程ね。と目を伏せる。ミーナも指揮官だ。教官という事は何かしらの部隊で隊長を務めた人物であり、自分の味方を生かす方針の指揮官である故にブレッドの教官の言う事はわかる。

「いい教官だったのね」

「じゃなかったら、ここに居ませんよ」

笑いあう2人に警報の音がけたましく聞こえると2人は頷き合い

格納庫へと走る。

ブレッドは走りながら魔導板を発動させてネウロイを補足する。

「敵は1。リーダー網の穴を通ってきたのか！」

「っ、予定より2日早いわね！」

「統計学を予測でしよう？ 外れるのも視野に入れておかないと！」

2人が滑走路のある場所まで行くとシャーロットがいの一番に飛び出し、リネットと芳佳が風に煽られている内にブレッドがユニットに飛び込む。

今回は速度重視でトンソン1挺のみの装備で促進装置から発進すると同時に固有魔法を発動させて加速して、シャーロットに追いついたブレッドは2番機の位置に付いたタイミングで通信が入れられる。

《シャーリーさん、ブレッドさん、聞こえる？》

《中佐！》 《感度良好》

《敵は一機、超高速型よ。既に内陸に入られているわ》

「敵の進路は？」

ミーナが美緒に目配せすると美緒が定規を地図に押し当てる。

「方角はここから西北西、目標はこのまま進むと——」

ペンがたどった先に遭ったのは。

「ロンドン！」

美緒が無線のマイクを引ったくり様に掴む。

《ロンドンだ！ 直ちに急行せよ！ シャーリー！ ブレッド！ お前らのスピードを見せてやれ！》

それを聞いてシャーロットが首にかけていたゴーグルを上げるのと、ブレッドがトンソンスのコッキングレバーを動かすのは同時で、シャーロットがゴーグルの位置を確認して前を向くのとコッキングレバーが戻り金属音を奏でるのも同時であり、2人が加速の固有魔法を発動せるのも同時だった。

「(ブレッドの固有魔法も捨てたものじゃないな)」

固有魔法を発動させた自分に中高度から高高度での全力稼働とトルクを重点においた改造を施した機体でびったりと2番機の位置に

ついでおり、ブレッドも涼しげな顔で魔導板に意識を向けている。

シャーロットは目線をブレッドから前に移しその僅かな間にブレッドが前に出るとハンドシグナルについて来いと伝えるがシャーロットはそれを無視して速度を速めるとブレッドも仕方ないと肩を落とすと加速するそれはまるで2人がレースを行う様に見える。しかし、それを見れない地上ではミーナが野外に置かれた簡易的な司令所で祈る様に黙っているとルツキーニが到着する。

「あく、シャーリー行っちゃった…まさかあのままなのかな……」

ルツキーニが心配そう気になる単語を呟くとすかさず美緒が聞く。

「ん？ あのままとは何だ？」

「えつとね、夕べね。あたしシャーリーのストライカーをね……」

途中でルツキーニの言葉が途切れる。それは美緒の横にいたミーナの雰囲気があからさまに変わったからだ。その変化に流石の美緒も蛇に睨まれた蛙のごとく固まる。

「あの、なんでもない…です……」

ルツキーニが振り返るがそこには黒いオーラを出したミーナと言う鬼がいた。

「続けなさい？ フランチエスカ・ルツキーニ少尉？」

優しい声だが、目の笑っていない顔で言われたルツキーニは顔を青ざめながら説明する。

ルツキーニは昨晚、シャーロットのユニットを事故で壊してしまい、それをあろうことか適当につなげて戻したのだ。しかも、シャーロットのユニットは相当な改造が施されており、シャーロット以外に弄れる者は居ない事もあり、現在のシャーロットのユニットは奇跡的に動いている状態であると言っている。

自身のユニットがそんな状況だとは知らないシャーロットだが上空では全く別の不思議な感覚に飲み込まれていた。

「何だ？ 全然加速が止まらない。今日はエンジンの調子がいいのか？」

《……せよ……尉！》

美緒の無線がシャーロットとブレッドに入る。ブレッドは聞き取

れたがそれでも少し潰れた状態であり、シャーロットには完全に聞こえていないと判断したブレッドがさらに速度を速める。

「(この感じ…似てる…似てる…あの時と!)」

そしてシャーロットのスピードジャンキーとしてのスイッチが入ったのか、魔導エンジンにありつただけの魔力を流しながら加速の固有魔法を掛け直す。

「いっけえええええええ!!」

そして急激に加速したシャーロットは追い付いて来ていたブレッドを引きちぎるだけで無く、留まるところを知らないかの様に加速を続け、シャーロットの身体を包み様に衝撃が生まれる。

ソニックブーム。

音速を超えた物体が現れた時に発生する衝撃波の事でこの衝撃波の発生は音速の壁を突破した証明である。

そして、ソニックブームは周囲に影響を及ぼすがソニックブームの発生を見た瞬間にシールドを展開したブレッドはそのシールドの性質故に無事で済んだが遙か後方を飛ぶ芳佳とリネットを吹き飛ばしてしまう。そんな事を知らないシャーロットは音の無くなった空間を一人で飛びながら驚く。

ブレッドは追い付けないと判断すると魔導板を使って音声を鮮明にしながら叫ぶ。

《止まれ! 前方にネウロイ! 衝突コースだ!》

《ブレッド! やったぞ! 遂に音速を超えたぞ!》

ブレッドの無線がようやくシャーロットに届いたが当の本人は音速を超えたことで頭がいっぱいであり、本来の目的を忘れており、ブレッドは舌打ちをすると魔法力の生産速度が速く、多くなっている事に気が付きながらも頭の片隅に放ってシールドを展開しながら加速を発動させてシャーロットを追いながら叫んだ時にブレッドもソニックブームを発生させる。

《シールド展開!》

この叫びで目前に迫る円盤に3本の円柱状の突起と針の様な突起が何本も生えた様なネウロイの中央にシールドを展開しながら衝突

したシャーロットは衝撃で気絶する。しかし、見事にネウロイを撃破すると減速したシャーロットをブレットが捕まえる。

その時にシャーロットの足からユニットが外れると同時に身につけていた服は空気抵抗とネウロイの破片で脆くなっており、朽ちる様にバラバラになっていく。

「ああ！ 畜生！ 肉体保護が切れたからか！」

美緒から状況報告の連絡が来たがブレットは追い付いた芳佳とリネットに慌てながら丸投げするが2人も慌てており、何にがなんだかわからないままに4人は帰投コースに乗って帰還する。

そんな4人を監視するかの様に飛んでいた航空機がそつと手短な積乱雲の中に消えた。その高度は1万1000mだった。

## 第17話 不穏な夜空

幾方にも及ぶ星が瞬くドーバー海峡の空を2つの影が飛ぶ。

片方の影はブレッドであり、腹に来る銃声と共に炎と銃弾を吐き出す先には赤いビームを撃ち出す大型ネウロイ。

ブレッドは雨の様に撃ち込まれるビームを右に左に、上に下に、時にはシールドを展開しながら凌ぎつつ、好きあらば銃弾やヒートミサイルを撃ち込んでいく。

だが、ネウロイは渋とくビームを放ち続ける事でブレッドの方も余裕が無くなり隙を晒したネウロイに対して攻撃が出来ない位置や体勢になっている事に焦りを感じ始める。

ブレッドは焦りからか賭けに出る。

それはシールドを張って素早く上昇、ビームと行き違う様にファイヤーブレッドを撃ち込むと言う物だった。

ブレッドは収束ビームが飛んで来た隙についてシールドを展開、消滅させた事で着弾までのラグが出来た事でその隙に上昇。射線が通った所で熱線魔眼で確認した位置に銃口を向けると通常のビームが目の前を覆う。

ネウロイがブレッドの動きを読んでいたのか数個の赤いパーツを使わずに温存した事でブレッドの迎撃を可能にした。

ブレッドは最初の一撃を回避すると同時にファイヤーブレッドを放つが体勢を崩していた事でコアにギリギリ届かず、ネウロイは健在、驚愕で固まった隙にネウロイは直撃コースと回避先を潰すビームを放った。

「またこの夢だ……」



ネウロイのビームに飲み込まれる寸前に上半身を素早く起こして、視線を這わせる。

場所は格納庫の一角にあるルツキーニの寢床だった。

「ああ。悪夢を見ると言ったら貸してくれたんだったか？」

珍しく元気の無い様子を見せたルツキーニの事を思い出して笑う。

ただ、甘えるだけの子供ではない。そう思うとブレッドの頬は自然に上に伸びて行く。

ブレッドは時計を見ると5時間は経っている事に気付くと笑う。

「寝起き直前にだけ見せるか……」

起きる直前だけに自分が死ぬ夢と言うのが鮮明に残る。そんな不快感を頭を振る事で拭い去ると格納庫にリネットが現れる。

「準備は出来たか？」

「はい。今日はよろしくお願いします」

そう言って頭を下げるリネットにそんなに肩肘張らなくて良いと告げながら自分の準備に不備がないか確かめると格納庫の正面ゲートが開かれる。

今日は雲が空を覆っている為に夕方でも少し薄暗い。

「今日は一雨来そうだ。降り出す前に雲の上に出てしまおう」

それだけ告げると何時もの様に機体のコンディションを確かめる様に回した後には離陸するとリネットもブレッドから一息遅れてではあるが離陸する。

2人は少し早めに雲の上に出ると夕日の明かりが薄い上空に出て、光が強い一等星や2等星だけがその光を地球に振らせる空を並んで飛行する。

ブレッドはいつも通り各所のレーダー基地に連絡を入れて、昼間に不審な反応や気になる事が無いか確認しながら哨戒コースに変更があるかどうか、いるならどう変えるかを501の地上班やレーダー基地の兵士と相談する。

暫くするとブレッドがリネットに顔を向ける。

「哨戒コースに変更は無しで行くが、俺を見失わない様に飛べよ」

それだけ告げると夜間哨戒様に8000mから9000mの間に

上昇する。

「あわわ！」

8000mに行く前からリネットの機動が危なくなっていくのにブレッドが気付く。

どうやらユニットの扱いが変わっているのかそれに対応し切れていない様だった。しかし、それも仕方ないだろう。

ユニットは戦闘機とは違い、空気の力で動く訳では無く、ユニットより自動的に発動する飛行魔法で動く訳だが、使用者の魔力消費量や空気中に含まれるエーテルの濃さによりその飛行魔法の強さも変わる。

「おい！ 中高度と同じ様に飛ぶなよ？ エーテル含有量が少ないんだから、中高度と同じ様に飛べる訳ないだろう？」

高高度となると大気が薄くなりエーテルの量も減る為に飛行魔法の効力も落ちる為に高高度で飛行を続けるには他の高度とは違うコツが必要である。

「中高度ではエーテル反応の変更と体制や体重移動で出来るが高高度になるとエーテル反応の補助は受けにくい」

「じゃあ、どうすれば……」

「簡単なのはエーテル反応を5対5にして体重と体勢だけで動く事だ。腕や腰、腹も使ってな」

少し真似して付いて来いと告げると簡単な飛行を飛行機雲で描く。

「この飛行機雲を辿ってみろ」

「は、はい！」

哨戒をしながら高高度での飛び方を教える。これはサーニヤから口頭で教わった事でブレッドも何回か挑戦し、コツを掴んだ事で高高度型のスピットファイアを中高度でも戦いやすくなる様に調整しても問題ないまでの実力を得ている。

つまりは高高度型の機体であればこんな訓練は必要ないのだ。

リネットはと言うと養成学校卒で501に派遣された事もあって筋が良いらしく、空が夕日空から星空になった頃には純粹に哨戒するなら問題無い程に習得していた。

「え!? いつの間に暗く!」

「気付かなかったのか? まあ、ご褒美を与えないとな。と言っても直ぐに用意出来るのはコレだけだけど」

そう言つて人差し指を唇に当てて静かにする様にジェスチャーすると魔導板を操作するとラジオ局の放送がインカムから聞こえ始める。

「夜は電波が少ないからラジオ局の放送が聞こえたりする。まあ、他のナイトウィッチの歌とか会話も出来るが今回は誰も繋げて無いな」  
リネットはブレッドが寂しそうな顔をしたのを見て話し掛け様とした時にブレッドが少し残念そうにしながらもリネットに笑いかける。

「だが、今日はお前がいるから寂しく無い。2人で飛ぶのもいいな」

その言葉にリネットが顔を赤くして視線をブレッドの目に合わせられるがブレッドは熱線魔眼を発動させていた為に気付くことなく哨戒任務を消化していく。

「今日は此処までだ。基地に戻るぞ」

「へ? 夜明けまでまだですよ?」

「今日の夜にミーナ中佐と美緒少佐、宮藤軍曹がロンドンに輸送機で飛ぶ。その護衛がある。今は基地から飛び立つたくらいだ」

2人は哨戒ルートを外れて輸送機とのランデブーポイントに着くとブレッドが鼻歌を歌い始める。

歌い始めて直ぐに輸送機が到着すると鼻歌が止まると輸送機が同高度に来ると輸送機の中から芳佳が手を振るのが見えたりリネットが手を振り返す。

ブレッドはパイロットの男性兵士と業務関係の打ち合せを行うとそのまま並行する様に飛行する。

行程の7割を終えた時に違和感を感じたブレッドが肩越しに振り返り自身よりも上空に意識を割くと魔導板を上空に向けて索敵の感度を上げるが何も反応は無い。

「……」

「あの……何か?」

「……誰かに見られている感じがする」

「ブリタニアのナイトウィッチでしようか？」

「哨戒ルートが外れてる。それにブリタニアのナイトウィッチは俺たちとは仕事が違う」

ブリタニア本国はレーダー網で包囲されているので、ブリタニアのナイトウィッチの仕事はレーダー網の中を突破出来るステルス機能を持ったネウロイや低空突破してくるネウロイの警戒だ。ブレットやサーニャの場合はブリタニアのナイトウィッチの仕事に加えて、レーダー網の穴埋めもある。

今回の場合、ブレットの魔導板は精度よりも距離型でサーニャの完全下位互換だがそれでも輸送機を護衛しながらでもレーダー網に穴を開けることは無い便利なタイプであり、最近では精度も至近距離であるならばサーニャ以上の精度になってきている。

それでも見つからない事にかかなりの距離があるのか気の所為なのかわからなかったブレットだが、ブリタニアのナイトウィッチに合流地点に行くまでも特に何かして来た事も無く、哨戒ルートを夜間飛行ギリギリまで行ったが何か起きた訳でも無い為に気の所為かと片づけて基地へと帰投した。

## 第18話 終わらない悪夢

「うーん……何で眠れた気がしないんだろう……」

リネットが自室のベッドの上で呟く。

時間は夜間哨戒寸前で昼食を取ったのが1時位で寝たのがそれから30分後で現在は1830と単純計算で5時間は寝ている。だが寝れた気がしないリネットだが任務を休む訳にもいかないし、眠い訳でも無いので格納庫に赴く。

夜間哨戒中に安眠法を聞こうと思いつながら格納庫に着くと出撃の準備を済ませているがブレッドの姿は無い。

リネットは曹長の整備員から様子を見て来て欲しいと頼まれてブレッドの部屋へと向かう。

空気を震わせるマーリンエンジンの音が頼もしい。

ブレッドはこの音に何処か懐かしさを感じていると通信機から声が聞こえる。

《なんだあれは?》

レーダー基地から反応があった為にスピットファイアが出撃すると目の前に見た事の無い航空機が現れる。

サイズは航空機爆弾を少し大きくした程度で四角い長方形の翼と背中にスコープの様な物を背負っている。

《兎に角、迎撃するぞ!》

隊長機が高度を上げて、機銃を放つ為に背面に張り付く。

それを見たブレッドはやめろと叫ぼうとしたが何故か叫べず機銃を放ったスピットファイアが小型の航空機と言うより爆弾がある程度捨てた後の爆撃機と同じ様な規模の爆発を生み出す。

まるで空を飛ぶ爆弾の様だった。

《クソ! 距離をとって迎撃しろ!》

副隊長が落下するスピットファイアを見て叫ぶ。

その後も距離をとって迎撃しようとするが不慣れな新人達から爆発に巻き込まれたり、爆発の際に巻き散らした破片で破損し戦線から離脱する機体が続出する。

ベテランの機体も慣れない機体を相手にしているからか損傷を負う機体がチラホラと見え始める。

ブレッドはこの光景を見た事がある。これは始めてV1が飛来した時の迎撃作戦だ。

正体不明の相手だったがコースがロンドンと言う事も有り、撤退が許されない状況だった事も有り、迎撃に出たのだがやはり損害が発生する。

ブレッドも1機を迎撃した所で機体をロールさせて背面降下で爆発と破片から逃れる。

ブレッドは此処で隣の破壊されたV1の羽が直撃して帰投した記憶があったのだが羽では無く、自身の飛行コースと被っていたV1が突っ込んで来る。

直撃する。そう確信した瞬間にV1は直撃して爆発。

ブレッドは機体の残骸と共に空に投げ出されるが自分の身体に痛みは無く、何故か生きている。それどころか戦闘機のスピットファイアだった残骸が降る中で足にストライカーユニットのスピットファイアを付けて空に飛んでいる。

不可解に思っていると2発目のV1がブレッドに迫る。銃も無く、シールドも間に合わない。

目を見開く事しか出来ないブレッドにV1が迫り、視界が黒く染まる。

「はっー」

此処で前が覚めて反射的に上半身を起こそうとすると額に硬質な物が当たった感触と共に激痛が走る、ベットの上で悶える。

涙目になりながら半目を開けたブレッドに同じく激痛に悶えるリネットが映る。

「なんで、俺の部屋に……」

涙声に掠れた音量で話したブレッドにリネットも痛みを堪えながら話す。

簡単に話すと哨戒30分前には格納庫にいるブレッドが居ない事に心配した整備員から様子を見て来て欲しいと頼まれてブレッドを訪ねたのだが、うなされていいる様だったので顔を覗き込んだらブレッドが飛び起きて額を勢い良くぶつけあったと言う話だった。

ブレッドは哨戒15分までだと慌てて軍服に着替えるとりネットと共に格納庫に飛び込むと一緒に飛ぶ予定だったサーニヤが準備をしていた。

「遅かったので心配しました……」

心配そうに呟いたサーニヤを見てリネットが首を傾げているのを見てブレッドが昨日の違和感が如何しても気になった為に今回はナイトウィッチ2人がかりで探す事にしたという事情を説明するとリネットも納得したのか頷くと3人は日が落ち掛けた空へと上がり、哨戒任務を始めるがこれといった成果が無いまま基地へ帰還するミーナ・美緒・芳佳のエスコート任務の為に合流コースへのる。

コースに乗るとブレッドが鼻歌を歌って輸送機のエスコートを開始、10分もすればブリタニア方面からJ u 5 2が現れる。

時間は少遡って、J u 5 2の機内。

美緒は仏頂面で貧乏ゆすりをしていた。

「不機嫌さが顔に出てるわよ、坂本少佐」

そんな美緒の向かい側に座るミーナが美緒の様子を見て指摘すると美緒は仏頂面のまま口を開く。

「わざわざ呼び出されて何かと思えば……予算の削減なんて聞かされた

んだ。顔にも出るさ」

2人がブリタニアへ直接赴いた理由はブリタニア上層部に呼び出されたのだ。その内容は多岐に登ったが2人の中での1番の話題は501の予算削減の話だったのだ。

「彼らも焦っているのよ。いつも私達ばかりに戦果を挙げられてはね」

「連中が見てるのは自分たちの足元だけだ」

「戦争屋なんてあんなものよ……」

ミーナは話した後少し表情を変えると両手で身体を包み、言葉を紡ぐ。

「ネウロイが居なかったら、私たちは人間を相手に戦い合う羽目になっていたかもしれないわね。ブレットさんって言う実例があると思うと冗談に聞こえないわ」

怯える様な空気を出すミーナ。

「そうだな……ブレットにこの世界の事を聞いた時の言葉を思い出すな……」

美緒から紡がれた興味深い言葉にミーナだけで無く、芳佳も少し気になったのか外では無く機内の美緒に視線を這わせる。

「失望した所もあり、平和ではないが、安定している。あいつは私達の世界をそう言った」

「平和と安定……似ているようで違うのかもしれないわね」

ミーナが深く考えながら発した後に芳佳が少し気になった所があるのか手を上げて質問する。

「あの……失望した所って何処なんでしょう？」

「ああ。上層部らしい。こんな状況なのだから自国の利益を無視して世界的な利益を得る為に動くべきで、国が何個か破壊されてもそれが出来ていない事に失望した。と言ってたな」

「それは無理でしょうね。そして、彼はそれがわかっているからこそ失望した。統合戦闘航空団やストライカーズもきつとそんな絵空事が形になったのだと思ったのでしょいうね……そして見事に裏切られた」



統合戦闘航空団もストライカーズも国境と言う垣根を超えた部隊ではあるが大きく違う事がある。

それは人事と結成に至るまでの経緯だ。

統合戦闘航空団はスオムスでの義勇兵やアフリカで偶発的に生まれた部隊が参考に作られたのと似たような部隊が乱立した事で管理の為に統廃合を行う為の口実的な部分もあるがストライカーズはキャニ－の圧倒的な技術力と物量とフットワークの軽さから各軍が個別で出していたのでは対応しきれない。そこで何処の国にも属さず、自由に動かせる軍隊をと言う考えから生まれた。

言ってしまうえば、前者は偶然から生まれた結果を得る為に偶発したものを利用して生まれたのに対して後者は組織としても限界と手順を吹っ飛ばす為の荒手で生まれたのだ。

そして、結成する事が決まり部隊編成や配置の位置でも揉めたのが統合戦闘航空団だ。

各国は優秀なウィッチを派遣したく無いが拠点は自国の近くがいとお互いにお互いが牽制しあい政治的なゴタゴタや利用価値などから様々な問題に見舞われる。

対してストライカーズは拠点を移動可能な空母にした事で結成場所のゴタゴタを回避した。さらに世界の為に動く部隊と言う事で各国からの信頼は得やすいと主義や外交の観点から派遣しない国もあったが派遣できる人員のいる国で利益のある国は派遣員競争と言わんばかりに派遣を行うと人員派遣もゴタゴタは国内のみで他国を巻き込んで言う事は無くすんなりいった。

ただし、似ている所もあり、それは各国の政治家に振り回されると言う事だ。

基本的にどっちの組織も独立した部隊の為に出世に直接関わるのはそこにいた人員であり、派遣などを行うだけの上層部には直接的な恩恵はかなり少なく、貰える恩恵と言えば、上手く使わないと受けられない物やミスでもすれば己の首が飛ぶという危険な物しか無い状況だ。上層部としてはこれは面白く無いと首を突っ込んだり、横槍を入れる訳だが、その対処も全く変わって来るのだがそれは別の機会に

話そう。

美緒は統合戦闘航空団とブレッドから聞いたストライカーズの経緯をわかりやすく、簡潔に述べると芳佳が頷く。

どっちも基本的には変わりはないと言う物だった。違いがあるとすれば政治家の横槍の入れ方と対処法くらいだ。

「軍にも色んな人が居るんですね。ブリタニアの軍の人ってみんなブレッドさんみたいな人かと思ってました」

その言葉にミーナは母親の様な優しい笑みを浮かべながら何かを話そうとした瞬間に機内に居ない筈の人物の声が機内に響く。

《♪ララーラ ラ〜》

それはブレッドの歌声だった。

「……あの、これって」

「ああ、ブレッドの歌だな。基地に近づいたな」

「私達を迎えに来てくれたのね。お願いはしてない筈だけど」

ミーナが首を傾げるが芳佳は輸送機の外で同行している3人に向かって手を振る。

リネットは笑顔で手を大きく振り返し、サーニヤは照れながら小さく手を振り返すがブレッドだけは探る様に敵を探していた。

「なんかブレッドさん、時々ですけど、無愛想ですよね」

「トウルーデ並みに生真面目なだけよ。決して嫌っている訳では無いわ」

そう会話している間も、ブレッドの鼻歌が輸送機内に流れるが突如として歌がピタリと止まり、真剣な声でネウロイの反応と方角などの情報が響く。

それを聞いた美緒が固有魔法の魔眼で確認しようとするが、彼女の目には何も見えず、半信半疑で問い掛ける。

「……私には何も見えないが」

《雲の中です。目標を肉眼で確認できません》

美緒の質問にサーニヤが答える。

ブレッドの魔眼は美緒の魔眼とは性質が大きく異なる為に何処に居るかわかってもどんな場所を飛んでいるかわからない為に説明が

出来ないからだ。

「ど、どうすればいいんですか?」

「どうしようもないなあ」

慌てる芳佳に美緒はどうにも出来ないと言う風に答える。

「悔しいけど、ストライカーが無いから仕方がないわ」

「そ、そんなあ…」

ミーナの補足にさらに焦る芳佳に対して落ち着いて答えるミーナはある答えに行き着く。

「! まさかそれを狙って!?!」

「ネウロイがそんな回りくどいことなどしないさ」

交戦出来ない状況下で攻撃を加える。今までのネウロイとは違う行動に美緒は正面から否定する。

《目標は依然、高速で近づいています》

《全周波数での問い掛け並びに警告に対して無反応、警告通り  
国籍不明機  
アンノウンをネウロイと断定。攻撃に移る》

《みんな、援護が来るまで時間を稼げればいいわ。交戦は出来るだけ避けて》

《はい》《了解しました》

ミーナの命令にサーニャとリネットは返事をする。サーニャはフリーガーハマーの、リネットはボーズ対装甲ライフルの安全装置を解除したタイミングでブレットが通信を繋げる。

《ああ。時間を稼ぐのはいいが……》

ボーズ対装甲ライフルの安全装置を外しながら告げる。

《別に、アレを倒してしまっても構いませんよね?》

その言葉にミーナが面喰らうが直ぐに笑みを浮かべて、告げる。

《ええ。遠慮は結構よ。とことん痛みつけてやって、ブレット》

ミーナの言葉を聞くとブレットは好戦的な笑みを浮かべるとネウロイのいるであろう方向へ転進、ロールを行いながら雲へ飛び込む。

「リーネさんは私と一緒に輸送機の護衛を」

「わ、わかりました」

サーニャの言葉に後を追おうとしたリネットは心配そうにしながら

らも輸送機の近くに戻り、警戒を開始する。

ナイトウィッチでは無いリネットが夜間で攻勢に出るのはまだ辛い所が多いからだ。

機内では芳佳がミーナに質問を投げかけていた。

「…サーニヤちゃんやブレッドさんにはネウロイが何処に居るかわかるんですか？」

「ああ、サーニヤには地平線の向こう側にある物だって見えている筈だろうし、ブレッドにはレーダーに映らないネウロイだって感じ取れるしコアだって見える」

「へえ〜」

美緒の説明を聞いた芳佳は関心したように声を吐きながら頷く。

「それで何時も、2人には夜間の哨戒任務に就いてもらっているのよ」「お前の治癒魔法みたいなもんさ。さっき唄を聞いただろ？ あれもその魔法の一つだ」

「唄声でこの輸送機を誘導していたの。ブレッドさんののは魔導板の応用した技術だけだね」

ミーナと美緒が説明する中、ブレッドは雲の中を航行するネウロイを捉えると迷う事無く引き金を引く。魔力弾にされた弾丸は雲を突き抜けながらそのまま真っ直ぐに飛んで命中。爆発を生み出す。

18回ネウロイに爆発が起きるとブレッドは銃口を向けながら背中から上昇して雲から出てくると今度はサーニヤのロケット弾が発射されて雲を吹き飛ばす。

その後も何回か攻撃したが、ブレッドとサーニヤは攻撃をして来ない事を疑問に思いながらも倒すつもりで攻撃しているとネウロイの反応が急速に離れてガリアかカールスラントに逃げるルートを取ると追撃は危険だと判断したブレッドは武器を下ろすと同時にミーナから戦闘中止の通信が入った。

戦闘を中止したのと同じ時間。雲の下では基地から離陸したバルクホルン・エーリカ・ペリーヌ・エイラの4人が輸送機に向けて飛んでいた。

「ひどい雨だね。何も見えない」

「いや、あそこにいる！」

バルクホルンが顎で示した先にはサーニヤのロケット弾によって吹き飛んだ雲の穴から高度を下げるJU52とそれを護衛する様に飛ぶウィッチ3人の影。

それを見たエイラが急いで駆けつけて行く。

「サーニヤ!!」

「ちよつとエイラさん！ 勝手なことを…!」

「いや、いいだろう。戦闘は終わったようだ」

ペリーヌが止めようとした所でバルクホルンが輸送機の様子を見てそれを容認した。

しかし、輸送機と一緒に下りてくるサーニヤの表情は暗く、ブレッドも雲を睨み付けていた。

## 第19話 予感

「それじゃあ、今回のネウロイはサーニャとブレッド以外は誰も見ていないのか」

ユニットでの出撃ウィッチメンバーが風呂から上がって談話室に集まる。

ブレッドは固有魔法の弊害か何かの効果か高体温になる為に寒気などは無い為に水気だけ拭き取ってから別行動に移っていた。

「ずつと雲に隠れて出てこなかったからな」

「けど、何も反撃してこなかったって言うけど、そんな事あるのかな？」

「それ本当にネウロイだったのか？」

美緒の言葉にエーリカの意見が重なる。確かにエーリカの意見は尤もである。

今までのネウロイは、ウィッチの攻撃に対して反撃の行動を示しているし、過去で反撃を行わずに撤退を選択したネウロイの記録も無い。しかし、今回のネウロイはサーニャやブレッドの攻撃を受けたにもかかわらず反撃を一切せずに巢の方向へと離脱した。

サーニャとしてもネウロイと言う確信が無いのか顔を少し下に向けてる。

「国際周波数から国際救助周波数、各国の一般周波数など機密性の高く無い周波数のみで交信を下に関わらず無反応。友軍機なら撃墜すると警告すれば何かしらのアクションを取る筈だ」

給湯室からブレッドがティーポットとティーカップを持ってやって来る。

「何かの秘密作戦かしら？」

「あり得るなブリタニアがイギリスと同じ気質ならな。自分で言うのもなんだが、俺たちの国って秘密作戦とか大好きだから」

秘密作戦ならあり得ると言う意見も出て来たが、ブレッドの何発か直撃していたし、対装甲ライフルの直撃に耐えられる飛行機となると爆撃機だが、速度が違い過ぎる。

確証は無いが、状況証拠を集めるとネウロイである可能性の方が高

い。

「も、もしかして、恥ずかしがり屋のネウロイ！」

何とも言えない雰囲気になったのを和ませ様とリネットが発言するが何とも言えぬ沈黙が一同を包む。

「……なんてことないですよね。ごめんなさい……」

沈黙に耐えられなかったリネットが謝るとペリーヌが口を開く。

「だとしたら、ちょうど似た者同士気でも合ったんじゃないか？」

ペリーヌが紅茶を飲みながらそんなことを言っつて、サーニヤの方向を見た為かエイラが舌を出す。

「ペリーヌ。あんまり仲間にそういう事を言わない方がいいぞ？　ここは平和だからいいがな」

何かを感じさせる雰囲気を纏わせながらティーカップを口に付けるブレッドを見て、気になるが突いたら蛇か鬼が出ると悟った全員はスルーを選択する。

「ネウロイとは何か。それが明確になっていない以上、この先どんなネウロイが現れても不思議ではないわ」

流れを変えようとしたのか真面目な話をミーナが手に持ったコーヒーカップを回しながら言う。

「仕損じたネウロイ連続して出現する確率は極めて高い……」

「ということとは、また現れるのか？」

ブレッドの言葉にバルクホルンは頷いて返す。

「そうね。兎に角、予想不可能な敵が出た以上はこっちもそれなりの動きをしないとイケないわ。だから、暫くは夜間戦闘を想定したシフトを敷こうと思うの」

「私は賛成です。他は？」

ブレッドの言葉に否定的な意見は出さずミーナが続ける。

「サーニヤさんはこのままでブレッドさんを昼間戦闘シフトから除外して専従班へ移動させて……」

「エイラとリーネを連れて行っても？　今回の夜戦参加者ですし、リーネもいい経験になると思います」

「そうね。それと宮藤さんも夜間専従班に任命します。相手が相手だ

から5機編成で行くわ」

夜間戦闘を十分に以上になせるブレッド・サーニャ・エイラの3人に若干の経験を持つリネット、全くの素人の芳佳を付けるという采配。

ナイトエース3人だけでもやれると思うが今回は未知が多い敵と言う事もあり昼間の戦闘力を極力下げずに夜間に回す戦力を増やしたいと言う考えから新人2人が選ばれる。

無論、新人2人にも2人なりの理由が他にもあるが、新人2人はそれに気付く事は無かった。

「その……ごめんなさい。私を取り逃がしたから……」

「ううん。そんなこと言ったんじゃないから!」

「それを言ったら仕留め損ねた俺にも責任がある。すまなかつた」

サーニャの言葉を芳佳が否定する。そして同時に、ブレッドもサーニャを励ますと同時に謝罪を送る。

「それに、俺とサーニャで出来ないなら、リネットに芳佳、ついでにエイラの3人で戦えばいいんだから」

「何で私がついでなんだよ! ついでは宮藤だろ!」

エイラのツツコミに芳佳が反応してリネットとブレッドが笑うがやはりサーニャの表情は浮かない物だった。

「お! ブルーベリーか。懐かしいが、誰が山盛り3カゴも?」

今日も自分が死ぬ夢を見て飛び起きたブレッドだが、朝食が終わって洗い場から出ると厨房と食堂を繋げるカウンターに置かれた新鮮そうなブルーベリーを見て笑顔を浮かべる。

「私の実家から送られて来たんです。ブルーベリーは目に良いんですよ!」

4カゴ目を抱えたりネットにどれだけ送られて来たんだよと内心



で思っているとバルクホルンが口を開く横でエリカがブルーベリーを口にかき込んでいる。

「確かに、ブリタニアでは夜間飛行のパイロットがよく食べるという話を聞くが……ブレッドの方はどうだったんだ？」

「食べてたぞ。何でもアントシアニンって言う奴が目によく食べてベリー系によく含まれているらしい。まあ、毎朝ブルーベリージャムをドッサリとパンに塗って食ってた奴が夜間でも物が見えたとか言う話が広まってだな。理由は後から来たっけ」

ブレッドもスプーンで掬って食べ始めるがある事に気付いて厨房に戻り、手にある物を持って戻ると口を開く。

「そうそう。ブルーベリーなんかを単体で食べると「芳佳、シャーリー！　べ〜して、べ〜！」

ブレッドの台詞を切るようにルッキーニの声が聞こえる。

呼ばれた芳佳とシャーロットは不思議に思いながらも舌を出し、ルッキーニも舌を出すと3人の舌はブルーベリーの果汁などで紫色になっていた。

それを見た3人が笑い合う。ペリーヌはそんな3人を尻目に口元を拭っていた。

「まったくありがちなことを……」

「お前はどうかナンダ？」

後ろからそろりと近づいたエイラの指によって強制的に口が横に伸びて歯が露出されたペリーヌの歯は紫色に変色しており、それを見た美緒が目の前で立ち止まり「何事もほどほどにな……」と言いながら立ち去って行ったので、ペリーヌは半泣きになりながらエイラに詰め寄っていく。

「なんてことをなさいまして、エイラさん！」

「なんてことナイって」

その光景を見ていたリネットは自分の口の前に手をかざして思案しているのを見て、ブレッドが肩を叩くと手には牛乳が注がれたコップがあった。

「単品で食うとああなるから、何か飲み物を飲みながら食えよ。まあ、

ブルーベリーミルクにすれば問題無いが新鮮な内はそのままの方が美味しい」

そう言って別のコップに注いだ牛乳を口に入れたブレッドからコップを受け取ったリネットも牛乳を口に含む。

「でも、食べ過ぎには注意しないとですね」

「だな」

「なあ。お前らの詰め所ってサーニヤの部屋じゃなかったか？」

男性夜間飛行員詰め所兼ブレッドの部屋に入ったブレッドが自分のベットに固まっている4人に問い掛けるとエイラはニヒヒと悪い事を考える様な笑みを浮かべ、サーニヤは俯いて顔を赤くしているが暗くて誰にも見えない、芳佳とリネットは恥ずかしそうな苦笑いだ。

「まあ、良いけどさ。ミーナ中佐から許可は？」

「貰ってるゾ。悪夢なんか見るらしいナ。原因を占ってやろうか？」

ブレッドはミーナにだけ自分が死ぬ夢を見たと話している。だが、何度も違うシチュエーションを見ていけると言うのは隠し、同じ死に方の夢を見ると虚偽の情報を渡していた。ミーナに必要な以上の心配をさせたく無いが嘘より真実を濃くしないと気付かれると思ったからだ。

「原因と言うきつかけはわかるから放って置いてくれ。で、中佐は？」  
「一緒に寝たら見なくなるんじゃないかって。ブートさんは襲わないだろうって」

「信頼からの言葉なのだろうが……どっちにアクションを取っていいかわからんな……」

信頼があるからこそ出された許可なのだろうが味方を変えると男として見ていないとも取れる内容にブレッドは微妙な表情を浮かべると自作の折り畳み式ハンモックを組み立て横になる。

「なんか固有魔法でしてななって思ったらそんなの作ってたのか」

細い鉄骨を固有魔法で溶接や補強を行った物で限界重量は90kgの1品である。

ブレッドが横になっているとエイラが口を開く。

「なあ。何で武功話をしないんだ？パイロットってよくそう言う話するだろ？」

「人殺しを自慢して褒められる場所とご時世か？自慢話をしない人間では無いが時と場所を選ばず」

「そつか。なあ、タロット占いしないか？」

「お前！この流れでそれかよ！フリーダム超えてフリーイイダムじゃねーか！」

話の流れが回転し過ぎて変な場所に飛んで行ったエイラの話にハンモックから上半身を起こして早口でツツコむとハンモックから降りて、エイラの前に腰掛ける。

「ン？」

「ン？じゃねーよ。タロット占い、してくれんだろ？」

「さつき外れましたけどね」

占いの準備を始めたエイラの背後で芳佳のもうすぐ会いたい人に会えると言う結果が無理と言う結果に終わった事を話すとエイラが冷や汗を流しながらブレッドにカードを引けと言われて、真ん中のカードを引く。

引いたカードは芳佳と同じカードで意味も会いたい人と会えるである。

「いっぱいいるな会いたい奴は……無理だろうが……」

「そう言われてもなー。2人とも会いたい人が難しいんだよな」

「まあ、占いなんてそんな物だよ。あくまでも心の清涼剤みたいな奴さ。ほら寝るぞ」

そう言ってハンモックに身を預けて目を閉じるとブレッド自身も驚く速さで眠りに落ちて行った。

晴天の下で3人の男女が集まって何かを話す。

内容はブレッドにはわからない。だが、セーラー服を身に付けた少女と茶色い皮のジャンパー着た後ろ姿のパイロットと思しき人物が銀髪に背の低い少女から何かを聞くと、セーラー服の少女が真剣そのものの表情で頷き、パイロットと思しき人物も頷き返す。おそらくはパイロットと思しき人物も真剣な表情なのだろう。

2人が分かれたタイミングでルツキーニの声が聞こえて意識が浮上する。

首を回すとブレッドのベットを占領していた4人も眠気眼でボーとしている。

「……ふうあ……久々に寝た感じだな……」

それだけ言うと軍服のまま寝ていたブレッドは部屋を出て食堂へと向かう。

食堂に入ったブレッドは照明が光量が抑えられている事に気付く。

「夜間対策ですか？」

「ええ。所で何かあったのかしら？」

ミーナの言葉に首を傾げるブレッドにミーナが近付き、細く白い指がブレッドの目元に伸びて撫でるとブレッドが何かが取れた様な感覚を味わう。

「少し目元に涙が溜まっていたわ。何かやったのかしら？」

「……久々に寝た感じがしたので嬉し涙でしょう」

これだけでミーナには通じる。ミーナはそう、とだけ告げると机に戻り、ブレッドも机に着くと4人も食堂に入ってきて来て、暫くすると紅茶が置かれるが匂いがただの紅茶のそれでは無かった。

「マリーゴールドのハーブティーか……」

「……山椒みたいな匂いだね」

「山椒？」

「うなぎの蒲焼きの上に掛けるスパイスさ」

芳佳がそう感想するが、リネットは何のことか分からなげに首を

傾げるとストライカーズ時代に使った事のある物だったので簡単に説明したタイミングでルツキーニが芳佳の横に現れる。

「芳佳、リーネ、もっかいべくして」

そうしてルツキーニ達が舌を出すのが、変色していることは無く、ルツキーニは面白くなさそうな表情をして、つまらないと騒ぎ始める。

「(……マリーゴールドだけで淹れてるな)」

マリーゴールドのハーブティーを淹れた際に同じミスをしているペリーヌに何とも言えない感情に埋められていた。

マリーゴールドのハーブティーで喉を潤した後に夜間専従班に任命された5人はハンガーから滑走路を見ていた。

夜の帳に満たされた滑走路に誘導灯が付いて、空へと誘う道が出来上がるのを見て、ブレッドが何とも言えぬ高揚感を感じていると芳佳は初めての夜間哨戒の為に目が慣れておらず、目の前の光景を見て竦んでいる様子だった。

「なんか見た事あるな。こんな光景」

「そ、そうですね……」

ブレッドがリネットの方を向きながら話すとリネットは恥ずかしさからか目を背けながら答える。

その横で芳佳が自分の震える手を見ながら告げる。

「あっ…震えが止まないよ」

「何で?」

「夜の空がこんなに暗いなんて思わなかった」

「夜間飛行初めてなのカ?」

「無理ならやめる?」

エイラとサーニヤが心配する様に告げるとブレッドが芳佳に話しかける。

「誰かに手を握って貰え。雲の上に出たらかなり明るくなるからな。リネットはどうする?」

「ひ、1人で飛べます〜!」

手を差し出したブレッドに昔を思い出したのか顔を真っ赤にしな

がら一足先に飛んで行ったりネットに弄り甲斐のある可愛い奴と内心で眩きながら離陸するとサーニャとエイラが芳佳と手を繋いだまま離陸した。

今日の夜間哨戒ではネウロイとは遭遇しなかった。

## 第20話 抗いようがない運命

翌日の食堂。

目の前に置かれた生臭さを発射し続ける液体をブレッドは親の仇の様に睨み付けていた。

「これは？」

「肝油です、ナツメウナギの。ビタミンたっぷり目にいんですよ？」

そう言う芳佳の両手は一斗缶を底で抱えており、一斗缶の正面には漢字で『肝油』と毛筆で書かれていた。

「……なんか生臭いぞ？」

「魚の油だからな。栄養があるなら味など関係ない」

エリカが匂いを嗅いだ感想を零すとバルクホルンが問題ないと宣言して注がれた湯飲みを片手で掴む。

「あつはは、如何にも宮藤さんらしい野暮ったいチョイスですこと」

ペリーヌは芳佳が肝油を用意したものだと思ひ馬鹿にした様に話すと予想だにしない人物の声が響く。

「持ってきたのは私だ」

芳佳の横でペリーヌが笑っていたのを見ていた美緒が告げるとペリーヌが笑っていた時の姿勢のまま固まる。

まさかな物をまさかな人物が持って来た。それもあろうが尊敬する人物の差し入れを笑った事が本人は許せないらしく慌ててコップを掴む。

「あ、ありがたくださいますわ!!」

肝油を一気に飲み干した途端にペリーヌは再び固まった。心なしか何が割れた様な音も響いた。

「うえくなにこれ〜」

「エンジンオイルにこんなのがあったな……」

ルツキーニが舌を出しながら肝油に対して感想を漏らすとその横ではシャーリーが容器を咥えながら感想を漏らす。

ブレッドは内心でエンジンオイルって飲み物だっけ!? とツツコ

ミながら手をコップに伸ばす。

「ぺっぺっ！」

「……」

エイラはその味を舌が拒絶したのか懸命に吐き出そうしており、その横に座るサーニャは肝油の容器を手に持ったまま、下を向いて固まっている。

ブレッドはコップを机から上げようとしていたが2人の反応を見てコップの握る手に力が籠り、コップがカタカタと震える。

「新米の頃は無理やり飲まされ往生したもんだ」

「……お気持ち、お察しいたします」

美緒が笑いながら昔のことを思い出すように言うが、ペリーヌはその味に完全に撃沈、悶えながらも返事を返していた。

「もう一杯♪」

ここでまさかのミーナである。

彼女は肝油を飲んでおかわりを要求するという正気の沙汰とは思えない行動に出ていた。

その横ではエリカが引いた様子でミーナを見ているが、さらに横ではバルクホルンが『ま、まずい……』と言って撃沈していた。しかし、ブレッドはミーナを見て、個人差だと決心すると彼は肝油を一口付ける。とまた一口と飲み進める。

「……単品専用な味だな……」

飲めるが自分から進んで飲む程では無いし、何かと合わせて美味しくなる様な味では無いが飲める。そんな味に何とも言えない表情が浮かべるブレッドをエリカだけが引いて様子で見ている。

「リーネ。お前、さっきまで何処にいた」

またもブレッドの部屋に集まった夜間専従員達の中にリーネットが居たのでブレッドは肝油を呑むタイミングでリーネットの居ない事を



直接聞くとリネットは過去に飲まされて苦手だった事と事前に察して部屋に籠っていたと告げるとブレッドはそれ以上の興味を示さずにハンモックに横たわる。

「ねえ、エイラさんとサーニャちゃんの故郷ってどこ？」

「おい！ お前、ここにきてどの位だ！ 祖国くらいは把握しろよ！」  
その質問にブレッドがツッコミを入れるが当の本人である二人は気にした様子は無く、寝転がりながら答える。

「私スオムス」

「オラーシヤ…」

「えっと、それってどこだっけ？」

それにブレッドが額に腕を乗せながら答える。

「スオムスはヨーロッパの北の方、オラーシヤは東だ。と言うか、軍人なら主戦場や担当戦域の大雑把な地理は把握しろ」

「仕方ないじゃないですか！ ここに来るまで普通の女子学生だったんですから！」

「いや、新聞とか読んでたら、ヨーロッパのほとんどがネウロイに襲われたって報道されてんだから、新聞を少し読んだらヨーロッパの何処だっけくらいの質問はできるだろう」

「はあ。本気で呆れた様子でブレッドはハンモックに座る体勢に体勢を変える。」

「うん。私のいた街もずっと前に陥落したの」

ブレッドの言葉をサーニャが繋いで説明した。

「じゃあ、家族の人達は？」

芳佳が心配して質問した内容にリネットが声を掛けようとした時にはサーニャは答えいた。

「みんな街を捨ててもつと東に避難したの。ウラルの山々を超えたもつとずつと向こうまで」

「そっかあ、よかった」

「だな。逃げられたなら良かった」

それを聞いて芳佳がホッとした様子で言った。しかしエイラが顔をしかめて起き上がる。

「何がいいんだよ、話聞いてないのかオマエ」

「だって、今は離ればなれでも、いつかはまた皆と会えるって事でしょ」

「ああ。死んでないならいつか再会出来る。それが死別との違いだ」

悲愴感のある目で異様な程に重みのある言葉を吐いたブレッドはハンモックに倒れると眠ってしまう。

「（あれは装甲飛行船か？）」

ブレッドが睨む先には遙か高みを悠然とを飛ぶ飛行船型ネウロイが見える。

飛行船は全体の装甲やボディがスライドし、高角砲や回転翼を持つ子機を離陸させる。

高角砲から放たれたビームを右にロールをしながら回避しきると対装甲ライフルを発射して反撃を加える。

2発目を加えようと頬付けしたタイミングで様々な角度から迫る子機に気付いてバツクを行った事で子機からのビームを避けると同時に射角に2機の子機が入った所で左手に素早く持ち替えた対装甲ライフルを早撃ちで2回射撃して撃墜すると3発目を高角砲に放つが弾丸は高角砲と高角砲の間に着弾する。

「クソー」

ブレッドは絶え間無く迫る高角砲や子機からの攻撃を躲しながら一瞬の隙をついて手に持つボイズ対装甲ライフルで飛行船型ネウロイに的確にダメージ与え、隙を見せたネウロイの子機から自身の子機より放つヒートミサイルで撃墜する。

ブレッドは子機の群れが少なくなったタイミングで飛行船型ネウロイよりも上方に上がると飛行船の装甲蓋が開き、ロケットの様な物を発射、それは意識を持つかの様にブレッドを追い掛けて来る。

ミサイルだ。

ブレットはトンブソンSに武装を持ち替えて引き撃ちをしながらミサイルを撃墜していき、6発全てを撃墜するとファイアーブレードを発動させてミサイル発射筒を破壊。立て続けの2回目で上方の高角砲群を破壊する。

飛行船型ネウロイは体を反転させると前方を向いた内臓型の魚雷発射管に似た武装からミサイルを発射する。

ブレットは円を描くように上昇しながらヒートミサイルで迎撃を行いつつライフルの銃口を向けると今度は高角砲の弾幕が張られ、中々、狙えない。

その間にネウロイのミサイルは徐々に数が増えて行く。

ブレットは舌打ちをしながらミサイルの迎撃をライフルで行う。

最初の一撃を先頭のミサイルに当てて、誘爆で近くのミサイルも破壊、離れた目標にはヒートミサイルで攻撃して迎撃を行う。ある程度の数になるとブレットはミサイルに自ら近付いて、ヒートミサイルで迎撃、爆風と爆炎に飲み込まれるがシールドで防いだブレットは爆炎の中でファイアーブレードを発動させてミサイル発射管を破壊。

発射管を破壊されたネウロイはバランスを崩した所をブレットは早撃ちで全ての高角砲を破壊すると同時に周囲を飛んでいた子機すらも破壊する。

全ての武装が破壊されるとネウロイの頭が開いてから船体が崩壊、砕けた破片の中から4つのプロペラで空を飛ぶネウロイが現れる。

「こんなのは見た事ないぞ」

ロボットの様な敵は見た事があるが向こうの世界では資料でも見なかった敵に言葉を漏らしながら銃を握り直すと敵は上昇して行く。

ブレットは現れたネウロイを追い掛ける様に上昇して、一定の高度になった瞬間に敵がビームで攻撃を開始する。

ブレットはその攻撃をロールや螺旋飛行、急停止などで回避しながらブレットはビームの隙間が何個かある事に気付くと回避行動と同時にその隙間に入り込み、引き金を引いた。

「不発!? 違う! 引き金が!」

だが、銃の引き金は無情にも中身から凍って動かず、その銃に意識

を割いたブレッドは迫るビームに気付かず、赤いビームの光に気付いた頃には既に回避も防御も間に合わない距離で反射的に身を捻るも間に合う筈も無く、ブレッドの視界は赤い光で覆われた。

「うわあー」

ブレッドはハンモックから降りた感触に目を覚ます。

痛む腰をさすりながら起きるとあの音で起きなかった4人に安堵の息を吐きながら寝汗で身体がベタついた感触と火照っているとも言える体温を不快に思いとブレッドは廊下へ出た。

ブレッドは閉じた自室の扉を半目で見つめるリネットに気付く事は無かった。

シャワーから流れるぬるま湯がブレッドの火照った体温を強制的に冷まして行く。

「今日の夢……」

思い出すのは自分が死ぬ時の悪夢の事。

「(妙に現実味がある悪夢だった……)」

今までの悪夢は共通点として過去で九死に一生を得た瞬間や一つでも何か間違っていたら死んでいたと言う有り得たかもしれない過去だったが今回の悪夢は未来の様な気がしたのだ

しかも思い出そうとする度に情報が欠落して行く夢らしい事態には更に不穏な感じを感じずにはいられない。

「そろそろ出よう……」

浴室から出ると書類仕事を終えて疲れ気味のミーナと鉢合わせして行くミーナが何とも言えない表情を浮かべるが髪が濡れているブレッドを見て察すると同時にブレッド本人でも気付いていないであろう疲れも察して短く声を掛ける。

「貴方の気持ちもわかるけど、相談してくれるとかえって心配しなくて済むものよ」

「此処では、ミーナ中佐程でしよう？」

背中合わせになった瞬間に告げたブレッドの短い言葉の深意を汲んだミーナが短く告げる。

「貴方に一番近い人物は気付いていると思うわ」

その言葉にブレッドは首を捻るがミーナの『覗くつもりかしら?』の言葉でブレッドは小走りで格納庫へと向かうと直ぐに他の4人も来ると5人揃って夜空へと飛び立つ。

「ねえ、聞いて！ 今日私の誕生日なの！」

雲を抜けたタイミングで芳佳が決心した様に頷いてから話した内容に一同が驚き、ブレッドが問い掛ける。

「なんで言わなかった？」

「……でも、この日はお父さんの命日でもあるの」

その言葉にブレッドが頷くと前に出る。

ブレッド自身も自分の誕生日が親しかった人物が戦死した日と言う事もあり、その複雑さは理解している。だからこそ、芳佳の背中を叩きながら告げる。

「そういう時は楽しい方を優先して、楽しみながら故人を思う物だ」

「お前、無茶苦茶言ってる事に気付いてないのか？」

「まあ、言われたただけだったらそうだろうが、誰かの誕生日なんかで撮った記念写真を墓前に置くだけでも良いんだよ。貴方は去ったけど、俺たちはこうして生きている。心配しないで下さい、ゆっくりと寝て下さいってな」

その話を聞いた芳佳がそうですよねと同意するとインカムからラジオ放送が聞こえ始める。

「ラジオ？」

「夜になると空が静まるから、ずっと遠くの山や地平線からの電波も届くようになるの」

サーニヤの説明を聞いて芳佳が興奮してはしゃぐがブレッドは少しがっかりした様子で飛ぶ。

「どうしたんですか？」

リネットが気付いて、横を飛びながら話し掛ける。

「ああ。俺には無理だなんて」

「へ？ どう言う事ですか？」

此処でブレッドは自分の魔導板とサーニヤの魔導針との違いを説明する。

「1番の違いは自力で索敵してるか否かだ」

「どう言う事ですか？」

「サーニヤは電波の作成から発信、受信から解析を1人で完結出来る。だが、俺は作成が出来ないんだ」

「電波の作成が出来ない……じゃあ、どうやって索敵を？」

「ブリタニアのレーダー基地からの電波を仲介して飛ばしてそれを受信しているだから、レーダーが無いと夜間索敵は目視距離になっちゃう。」

「あ！ 通常電波のラジオとレーダーの同時受信が出来ないんですね！」

「そういう事だ。ただ、ナイトウィッチが自力で作った魔導波は別だ」

「そう言う事ですか」

リネットが頷いたタイミングで熱線魔眼が雲の中を通る何かを見つけると雲から赤いビームが何本も飛んで来た。

## 第21話 悪夢を勝ち抜く為に……

「敵機接近！ ブレイク！」

ブレッドの警告で初撃を回避しきったブレッドの耳にサーニヤの歌に似た歌が響く。

「なんだこれは……」

疑問を解決する前にサーニヤが履く左足のユニットがビームの擦り命中で吹き飛ぶ光景が映り、疑問を頭から弾き飛ばす。

「ツチ！ エイラはサーニヤの保護して、撤退！ 芳佳軍曹とリーネは2人の護衛に付きながら基地に戻って、増援要請を行え！」

階級を無視して驚愕から固まった全員に指揮が出来るブレッドが指示を早口で飛ばす。

ブレッドは指示を送り切ると姿勢を曲げて雲に飛び込もうとする。ブートさんは何を「奴を撃墜するんだよ！」

リネットの話を遮ると雲ロールを飛びながら飛び込む。

芳佳やサーニヤが見捨てられないと通信を入れると銃声に混じってブレッドの怒号が響く。

《片肺のサーニヤが満足に戦えるか！》

銃声が響く。

《エイラはサーニヤで手が埋まるから使えないだろ！》

何かが燃える音が響く。ブレッドの完全消滅のシールドでビームを防いだ時の音だ。

《サーニヤとエイラを護衛するには素人のお前らだったら2人いる！

だったら、俺が1人で残った方が勝率も生存率も良い！》

《でも！ 危険過ぎます！》

リネットの叫びが銃声に混じって聞こえたブレッドが叫ぶ。

《今は帰れ！ 帰ればまた来られる！》

通信が切れる。

通信妨害を発しながら戦うネウロイだったらしく魔力作動のインカムだったおかげで近距離では繋がったインカムも今はお互いに通信可能範囲を抜けたのだろう。

不快なノイズしか聞こえなくなったインカムに手を話したエイラが撤退だと告げると3人は後ろ髪を引かれる思いで撤退した。

「さてと、あんな事を言っただけで…複数のコアがあるんだよな……」  
雲の中で呟く。

最初の弾倉を捨てて、2つ目の弾倉を銃に取り付ける。

「しかも中型に近い大型だぜこりゃ……」

持って来た弾薬が心配だと心の内で告げると熱源反応が高い場所に弾丸を叩き込む。

爆発する音と何かが割れる音を聞いて『よし』と呟く。

今のところでは全弾命中だが、弾薬は心元ない。

「リヴォルヴァーショットガンの方が良かったか？」

火力不足を不満に思いながらも魔力弾に更に魔力を込める事で無理矢理に火力を高める。

「単機で時間稼ぎは男の子の憧れるシチュエーションだけ。それが可愛い女の子の為なら尚更な」

自然とそんな事をビームの雨に晒されながらも告げる。

その顔には恐怖や真剣さなどは無く、薄っすらと笑っていた。

志願理由が愛国心からだと言すブレットだが半分は祖国防衛と言うワードにワクワクしたからという理由もあった。

まあ、ブレットの年齢だと不思議な事ではないだろう。

本土防衛と言うワードにワクワクしない男の子は居ないだろう。

発射された銃弾が良い所にあったのかネウロイが雲の外に出た事でその全体像が目に映り、ブレットは言葉を失った。



基地とブレッドの交戦地点の中間点を飛ぶ、サーニヤ・エイラ・芳佳・リネットの4人は何とも言えぬ雰囲気醸し出していた。

「やっぱり、助けに行きたい……」

「でも、夜の戦いに慣れてないでしょう……」

芳佳の悲痛な声にサーニヤも悲しそうな声で呟くと何も無い左足を恨めしそうに見つめる。

「……リーネはどうなんだ？」

「私は……私は……」

迷う様に何度も同じ言葉を紡ぐリネットだが、決心したのかエイラの顔を正面から見据える。

「私は行きたいです！ ブートさん、いえ！ ブレッドさんには死んで欲しくありません！」

「あいつの助けに行くか」

エイラの言葉にサーニヤや芳佳も驚く。

「あいつにはサーニヤがより飛ばなくてもよくしてくれたからな。そのお礼ダゾ！ カンチガイスンナヨナ」

「ええ、そうね。行こうみんな」

4人は頷くと来た航路を戻り始める。そして、1番階級の高いサーニヤが指揮を取る。

「私にエイラが付いて、未来予知で私と一緒に回避して、芳佳ちゃんは何かあった時の為に私の側で……リーネさんは……」

真剣な表情で見つめるリネットを見て、大丈夫だと確信したからか微笑みを浮かべると指示を送る。

「リーネさんはブレッドさんに合流して、ブレッドさんの指示に従って下さい。万が一、私達を連れて帰れなんて命令をした時は……」

「した時は……」

「中尉の私からの命令だと言って突っ撥ねて」

「……！ はい！」

サーニヤもブレッドの階級を物ともしない物言いに触発されたのだろう。普段どころか今までからも考えられない言葉に自然とみん

なが笑う。

ブレッドと言う正史とは違うイレギュラーの存在は悪い事ばかりでは無いと言うのがわかる瞬間だった。

1人で敵を引き付ける事に成功したブレッドだが状況にお世辞にも好況と言う訳では無い。

敵は飛行船型ネウロイと言うべき敵であり、船体に設けられた赤い部分などから火力は小さいビームが雨の様に放たれ、収束ビームによる高火力な一撃が飛んで来る。

更には格納されていた子機を出撃して、隙間を埋めて来る。

ブレッドはビームを躲し、防ぎながら必死に反撃していた。

ウィッチ用に支給される強化弾倉を装着したボーイズ対装甲ライフルを持ち直して周囲を確認する。

ブレッドの周りには3機のラジコンサイズのロケット推進戦闘機のコメートに似た物が炎で形作って浮かび、回転翼を持つネウロイが四方八方から迫る。

ブレッドの子機からヒートミサイルが発射状態で展開させるが発射する事は無く、子機を自分の周りを衛星軌道のように回させる事で子機を切断する。

子機は接近戦は無理だと判断して運よく生き残った個体が離れてビームを撃とうとするとヒートミサイルで貫かれて撃墜される。

周囲の子機が全て吹き飛ぶとコメートが4機に増えるがそれでも予断は許されない状況なのは変わりない。

「(そう言えば、何で魔力が尽かない……)」

ブレッドが子機を殲滅して相当な量の魔力を込めた魔法弾を飛行船型ネウロイに放ちながら思い出す。

魔法量の限界を知ろうと実戦形式の空戦訓練を行った時に固有魔法の攻撃型を使わずに防御・加速・探知型のみを使って戦った時は固

有魔法の発動タイミングが多い為に燃費が悪く、一般的よりも多いくらいブレッドでは燃費が悪く、長期戦には向かない事が判明した。だが!! 今回の戦いに挑んだブレッドの使用した魔力量を計算すれば、魔法力測定を兼ねた訓練2回半程の魔力を既に消費しているのに加えて、魔力の質も向上している。

しかし、ブレッドはそんな事を考える事を忘れてただひたすらに目の前のネウロイを破壊してはビームをシールドで打ち消して行く。

戦闘中の為に他の事に頭が回らないブレッドは気付いていないが、ブレッドの身体は魔法力を圧倒的とも言える速度で回復を行っていた。

それは今のブレッド状況と生物としても本能が関わっている。

生命力。

生きる力・命の力などの意味で使われる言葉だが、この生命力が最も大きくなる瞬間は矛盾しているが生命の危機に瀕した状況、つまりは今のブレッドの様な状況である。

この生命力は見方を変えれば生存本能などと言い換える事が出来る訳であり、ブレッドの生きて切り抜けると言う思いに決死の覚悟で挑むと言う矛盾がブレッドの身体に高い生命力を宿し、身体がそれに答える。

危機に瀕すれば瀕する程に力が増す生命力が魔力を生み出し続ける!!

生命の危機を回避する為に二度と困難に屈せぬよう生存を求め、驚異的なスピードで高品質の魔法力を生み出していた!

ブレッドが睨む先には遙か高みを悠然とを飛ぶ飛行船型ネウロイが見える。

雲から出ると子機達を吐き出して自分は高高度へと逃げて船体の赤い場所からビームを吐き出し続けていた。

飛行船型ネウロイはブレッドが迫って来ると判断したのか全体の装甲やボディがスライドし、高角砲を露出させ、更に回転翼を持つ子機を離陸させる。

高角砲から放たれたビームを右にロールをしながら回避しきると

対装甲ライフルを発射して反撃を加える。

2発目を加えようと頬付けしたタイミングで様々な角度から迫る子機に気付いてバックを行った事で子機からのビームを避ける

「(これって……)」

何かが頭をよぎったブレットだが、射角に2機の子機が入った所で左手に素早く持ち替えた対装甲ライフルを早撃ちで2回射撃して撃墜すると3発目を高角砲に放つが弾丸は高角砲と高角砲の間に着弾する。

「クソ！」

ブレットは絶え間無く迫る高角砲や子機からの攻撃を躲しながら一瞬の隙をついて手に持つボーイズ対装甲ライフルで飛行船型ネウロイに的確にダメージ与えていく。

隙を見せたネウロイの子機から自身の子機より放つヒートミサイルで撃墜する。

ブレットは子機の群れが少なくなったタイミングで飛行船型ネウロイよりも上方に上がると飛行船の装甲蓋が開き、ロケットの様な物を発射、それは意識を持つかの様にブレットを追い掛けて来る。

ミサイルだ。

ブレットはトンプソンSに武装を持ち替えて引き撃ちをしながらミサイルを撃墜していき、6発全てを撃墜するとファイアーブレードを発動させてミサイル発射筒を破壊。立て続けの2回目でも上方の高角砲群を破壊する。

「(何だこれは?)」

飛行船型ネウロイは体を反転させると前方を向いた内臓型の魚雷発射管に似た武装からミサイルを発射する。

ブレットは円を描くように上昇しながらヒートミサイルで迎撃を行いながらライフルの銃口を向けると今度は高角砲の弾幕が張られて、射撃を断念する。

その間にネウロイのミサイルは徐々に数が増えて行く。

ブレットは舌打ちをしながらミサイルの迎撃をライフルで行う。

最初の一撃を先頭のミサイルに当ててる事で誘爆を起こし、近くの

ミサイルも破壊、離れた目標にはヒートミサイルで攻撃して迎撃を行う。ある程度の数になるとブレットはミサイルに自ら近付いて、ヒートミサイルで迎撃、爆風と爆炎に飲み込まれるがシールドで防いだブレットは爆炎の中でファイアーブレードを発動させてミサイル発射管を破壊。

発射管を破壊されたネウロイはバランスを崩した所をブレットは早撃ちで全ての高角砲を破壊すると同時に周囲を飛んでいた子機すらも破壊する。

全ての武装が破壊されるとネウロイの頭が開いてから船体が崩壊、砕けた破片の中から4つのプロペラで空を飛ぶネウロイが現れる。

「こんなのは見た事ないぞ」

ロボットの様な敵は見た事があるが向こうの世界では資料でも見なかった敵に言葉を漏らしながら銃を握り直すと敵は上昇して行く。

その途中で何かが頭を通り過ぎていくが戦闘中だと思いい直してからは気にする事は無かった。

ブレットは現れたネウロイを追い掛ける様に上昇して、一定の高度になった瞬間に敵がビームで攻撃を開始する。

ブレットはその攻撃をロールや螺旋飛行、急停止などで回避しながらブレットはビームの隙間が何個かある事に気付くと回避行動と同時にその隙間に入り込み、引き金を引いた。

「不発!? 違う! 引き金が!」

だが、銃の引き金は無情にも中身から凍って動かず、その銃に意識を割いたブレットの脳内に今日の悪夢が蘇る。

「!?」

しかし、迫るビームに気付いても時は既に遅く、回避も防御も間に合わない距離に迫るネウロイのビームがブレットの視界は赤い光で覆い尽くす。

その瞬間に自分の名を叫ぶ声が聞こえるとブレットの身体に何か衝突、凄まじい速度で吹き飛ばされたブレットはビームを避ける事に成功する。

「リーネ! 何で此処に!」

「よかった……帰らなくてよかった……帰ってたら……」

ブレッドの胸にしがみついて泣くりネット。

トンプソンSの皮のホルダーがある為に痛い筈だがそんなのは関係無いと言わんばかりに抱き付く力を増やすりネットを見てブレッドもりネットの腰の片腕だけ回して抱き寄せる。

そんな感動的なシーンをぶち壊す無粋な輩も当然ながら存在する。

ブレッドに攻撃を加えていたネウロイが再びビームを放って来るがブレッドはシールドを展開して掻き消すと銃を捨てて左腰にぶら下げた大型で鋭い鷹の爪に似た形状のナイフ、カランビットナイフを抜き出す。

両側に付けられた刃が月明かりを反射する。

ブレッドがナイフ戦闘を選択したのは銃が凍りつく程に寒くなる高度では拳銃の使えないと判断したからだ。しかし、同時に大型のカランビットナイフでも一抹の不安はある。

と言うのもカランビットナイフは通常のナイフと違いカウンター志向の強い武器であり、振り回して戦う武器では無い。だが、追いつく為か魔力を使い果たす寸前のりネットを守る為にナイフを強く握るとナイフに炎が宿る。

ネウロイはビームで殺せないと感じ取ったのかアイスバイルを3本、指の様に取り付けた手で切り掛かって来る。

ブレッドはナイフの背で手首当たる部分から受け流すと同時に振り上げて腕を切断、怯んで距離を開けたネウロイに届かないとわかりつつも振り下ろすとナイフの炎が剥がれ、鏃に竜の翼が付いたようなヒートミサイルが発射され、ネウロイを一撃で粉碎せしめた。

「す、凄い……」

大型ネウロイを一撃で破壊したブレッドの攻撃を唾然として眺めるりネットの身体からブレッドの抱いている力が抜けた事でブレッドに視線を移すと青く小刻みに震える身体からユニットが脱げて落下するとブレッドもりネットの身体から離れて落下を始める。

りネットが慌てて追い掛けて何とか手を掴んだがその手は氷の様に冷たかった。

ブレッドが目を覚ますとそこは見慣れない天井で何処だったかと思いを巡らす前に聞き慣れた人物の声が目撃を打つ。

「起きたんですね！ 少し待ってて下さい！」

返事を聞く前にパタパタと出て行ったのにリネット直ぐに501の全メンバーが集まる。

ブレッドはと言うと何があったのか考えて、口を開く。

「ネウロイを取り逃がしたのか……」

そう呟いた瞬間にミーナの額とこめかみに青筋が浮かび、持っていたバインダーの側面でブレッドの頭を思いっきり殴打する。

殴打されたブレッドはベットの上で声にならない声を出しながら蹲りその痛みに悶えるがミーナは知った事ではないとバインダーを脇に戻すと怒りを隠さない声で話す。

「ネウロイを取り逃がした？ それよりも前に気にする事があるでしょう！ 貴方の看病をつつきりで見えてくれたリーネさんに貴方に必死の治療をしてくれた宮藤さんにお礼を言うのが先でしょう！ それをすつ飛ばしてネウロイ：はあ、まあいいわ。それよりも状況を説明するわ。貴方にはそつちから入った方がいいでしょう」

ミーナの音頭で状況を伝えられる。

先の夜間戦闘でのネウロイはコアを破壊された事で完全に消滅した。しかし、その代償にブレッドは残量魔法力の全てを使った一撃を放った事で魔法力欠乏を起こして、辛うじて肉体保護を掛けるのがやっとの状態で高度1万5千メートルから落下した。

高度1万メートルでマイナス50度。生命が生きて行くのは到底無理な温度であり、ウィッチやパイロットが生きられるのも魔力でも肉体保護やちゃんとした備品を身につけているからだ。しかし、今回のブレッドの場合は肉体保護は死なないかもしれないという程度で放っておけば確実に死ぬ状況だった。

「全く、貴方が生きていられるのも幸運な事なのよ？」

その状態から生還したのは3つの幸運があったからだろう。

1つ目は複数人で行っていた事。

もし1人だったら海に落下して低体温症か酸欠で死亡していただろう。複数人で行っていた事で救助は容易く、更に簡単ではあるが応急手当が現場で行えた。

2つ目は芳佳の存在だ。

芳佳の固有魔法である治癒魔法は対象に治ろうとする意志や力があればどんな病気だろうと怪我だろうと治しスペックを持っている。そこに多少でも自力で治そうとする能力がブレッドに残っていた事で芳佳の治癒魔法が適用されて一命を取り留めた。これも先の5人いた事で搬送しながらの治療を可能にしていた。

3つ目にブレッドの魔力特性だ。

ブレッドの魔法は発動させると体温が僅かに上がり、固有魔法を発動させるたびに発熱は高くなり、空気で冷やされて微熱程度まで下がるを繰り返す。つまり、ブレッドの魔法力にはこの発熱の効果があり肉体保護の魔法が生命維持の他に肉体を中からゆつくりと温める効果もあつた事だ。

「兎に角、今日は休んで、万全になったらまた働いて貰います」

ミーナが締めくくると他のメンバーも劳いや劳りの言葉を掛けてから出て行き、入れ替わりで出てきた女性軍医の診断では重度の低体温症だった為に問題は無いだろうが後1日は絶対安静と告げられてブレッドは黙ってベットに身体を預けるがリネットだけが出て行かない事に疑問に思ってしまう。

「何だ？ 何かあるのか」

「何で……」

ブレッドの問い掛けにリネットが初めて語気を荒げる。

「何であんな無茶をしたんですか!! 死んじやうかもしれないのに! 何で!」

サーニヤは生粋のナイトウィッチであり、同じ程度の撃墜数を誇るウィッチの中では頭1つ向けて貴重な存在であり、エイラは固有魔法



もそうだがその固有魔法を生かしきれぬ回避技術を持っているエースであり、芳佳は治癒魔法を有する為に並のウィッチ以上に価値のあるウィッチだ。そして、リネットは指揮官になれる素養を十分に以上持っているウィッチだ。指揮官の器を持つウィッチも普通のウィッチ以上に価値のあるウィッチだ。

それに対してブレッドはウィザードと言う政治的には大変な価値を持つ存在だが、言い換えればそれだけだ。

何でも卒なくこなす能力は重宝するだろうがブレッドのそれは努力の賜物だ。時間があれば誰でも出来る物で固有魔法も燃費が悪く、生命力や生存本能に比例して上がる魔法力の生産効率の良さでゴリ押しして安定を保っているとても不安定なウィザードだ。

前者4人と自分。残るべき人物は自然と選ばれるし、1つの犠牲で4つが助かる状況でその1が自分なら後悔も迷いも無く自分の犠牲を選ぶ性格だ。

ブレッドは戦略的価値と性格を交えて話そうとしたがリネットが泣きながら胸に縋る姿を見て、開き掛けた口を閉じる。

「愛する人を守る時、人は最も強く美しい生き物になる……か」

ブレッドの手がリネットの髪を梳くように撫でる。

「リーネ。お前にとつてのその人は俺なのか？」

リネットが胸から顔を上げて、泣き腫らした目のまま頷くと直ぐに顔を胸に付けながら啜る泣き、嗚咽を漏らす。

「そっか……看病と泣いて、疲れただろ？ 少し眠りなさい」

安心する優しい音色で紡がれた言葉が緊張や看病と泣き散らした事で疲れが濃かったリネットに染み込む。

リネットの身体はブレッドに凭れる様に沈むと流れる様に自然な動作で頭を太腿の間に持つて行き、下半身をベットのの上に乗せる。

靴を脱がして逆サイドの床に置くのと優しくリネットの頭を撫でる。

「ゆっくりと休みなさい。今日は……悪夢なんて無いのだから……」

ミーナからネウロイが倒された。それを聞いた瞬間に本能的に感じ取っていた違和感は無くなり、こんな事を眩きながらリネットの髪を手櫛で梳く様に撫でる。

視線を窓に移すと外は太陽が沈み始める黄昏時で黄金色の光が空を包み込む、美しく幻想的な空間を瞳が映すと薄っすらと此処では無い場所と時間の光景が映る。

それは起こりえた未来、それは起こりうる未来、それは会わざるをえない運命。

そして、装甲飛行船が見える。それは抗いようがない運命だったもの。

ブレッドは聞こえないとわかっているリネットに聞かせる様に弱くも優しく呟く。

「自分が死ぬ夢を見たんだ。それも何度も。だが、俺は生き延びた。自分の悪夢に打ち勝った。その為には仲間が必要だった。そして勝ち抜く為に信じ切らなければならなかった」

夜間哨戒に出るサーニャとエイラのユニットのエンジン音が医務室に大きく響くとリネットに視線を移す。

「愛する仲間的心というやつを」

## 第22話 事件解決はこの手に限る

501統合戦闘航空団の基地に気持ちの良い朝が訪れる。

そんな基地の林をブレッドは頭の中を空にする様に使い魔であるスコティツシユフォールド長毛種の垂れ耳と尻尾を出しながら走る。その腕にはボーイズ対装甲ライフルを胸の位置で掲げて走っている。

そう、ブレッドは地獄と言われるハイポート走を対装甲ライフルで行っているのだ。

無論銃は安全を考えて弾の入っていないペイント弾専用のオレンジ色の銃だ。

少し開けた場所に来るとブレッドは銃を立て掛けて腰に手を伸ばして手慣れた手つきで抜きにくいと称されるカランビットナイフを鞘から抜いて、人差し指を柄の輪っかに入れて、逆手に構える。

ブレッドは目を瞑り、目を見開くと同時に身体を反らせると目に見えない腕にカランビットナイフの湾曲を引っ掛ける様に振るい、左手で見えない手の手首を下に捻って、武器を奪う様な仕草をすると見えない腕を左手で押さええながらナイフを解放して逆手のままで相手の首を切る様に振るう。

ブレッドはステップで攻撃を回避する様な動きをした後に相手の手首をカランビットナイフの背で払う様に振るった後に腕に引っ掛けて相手の腕を回すように動かすと倒れた相手に追撃する様に3連撃を素早く繰り出す。

ブレッドは倒すと素早く転がる様に立ち上がり、威嚇する様に柔軟に手を回しながら武器を振るう。これは相手に弾かれたり防がれている様な動きを交える。

少しの停止の後にブレッドのナイフが捻り込んでから掬うように振るわれると素早く引っ掛ける様に腕、浅く切る様に肩を、返しの刃で首を浅く切り、持ち方を変えてもう一度首を切るとブレッドの身体は背後に回る様に動き、輪っかに通した指だけで持つ持つ様な持ち方をして首に引っ掛ける様に当て、スライドさせる様に振るう。

相手を捨て置く様に腕を振るうとナイフを回して逆手に持ち直し鞘にしまうと素早く抜き直して構える。

「出てきたらどうです？ 気付いてますよ」

「気付かせないつもりは無かったんだ。だから、武器を下ろしてくれ」  
木の陰から現れたのは白い扶桑の士官服に身を包んだ美緒だった。  
ブレッドは何だと溜息を吐くと武器を鞘にしまう。

「いや、まさか近接戦が出来るとは思わなかったからな」

「そうですか？ まあ、ストライカーズのパイロットは大なり小なり地上戦も出来ますよ。出来ないともまずい」

ストライカーズが出撃する場所は自分たち以外は全員が敵という場所だ。脱出してから自軍勢力圏まで逃げる為に最低限のサバイバル技術と戦闘技術は持っている。

「そうか……」

そう言つて美緒が刀の鞘が抜けない様に紐で結び始めるのを見て、ブレッドも鞘をベルトから外して構える。ブレッドの鞘は銃のホルスターを改造した物で蓋の皮ベルトを外さない限りは絶対に抜けない様にしてある。

「話がわかるな」

「扶桑人達がよくやっていたので」

ブレッドの部隊には日本人パイロットが3人も在籍しており、全員が全員、剣などの刃物での戦闘が出来る人物と言う事もあり、よく模擬戦を行っていた事もあり、ブレッドは美緒の言葉を予想して先に行動を起こしていた。

「勝敗は？」

「武器を取られる。拘束させる。致命傷を浴びせられるだ」

そう言つて武器を構える美緒にブレッド。

美緒が刀を振り下ろすとブレッドは股関節と膝の動きだけで回避し、セオリー通りに手首を狙ってカランビットナイフを引っ掛けるが美緒が裏拳を身体に目掛けて放ち、拘束から逃れる。

この動作で美緒から武器を奪えないと判断したブレッドは拘束に狙いを変える。

美緒は縦振りは無理と判断して横降り主体で攻めるがこれもナイフやステップ、関節の駆動を駆使されれ躲され、時々ではあるが腕が脇腹、肩を斬られる。

お互いに距離を離れた所で美緒が零す。

「模擬戦でよかった。実戦ならやられている」

斬られた所を左手で触る。

そこは右の二の腕の裏側。つまりは腕を振る為の筋肉がある場所なのだがコーバツツが美緒はそこそこ深々と決る様に斬られている。つまりは実戦なら右手が使い物になつておらず、手首に掛かったナイフを外す時に右腕を大きく振って居るので本当なら拘束されている筈なのだ。

「そうですね！」

今度はブレッドの方からナイフを振るいに来る。

美緒は狙う先を手首だと判断すると腕を引いて躲そうとするがナイフが途中で軌道を修正して手と刀の鏢の間に引っ掛けられると同時に左手が美緒の右手を掴み、足払いを行い倒そうとする。

美緒は力が抜け切る前の左足に全体重を預けてグリップを回復させると引っ掛けられた場所を起点に柄頭でブレッドの頬を振り上げる様に殴ろうとするがブレッドは素早く左手でカードを行い、脇腹を引っ掻く様に斬りつける。

それでも寸前で刀を引きながら飛び退かれた所為で浅くに留まる。美緒は飛び退いて距離が開くと同時に叫びながら突きを放つとブレッドの腕が蛇の様に美緒の腕をくねりながら迫り、首を引っ掻く様に斬った後に振り上げの一撃を素早く加えるとブレッドが体捌きだけで背後に入るとフックを引っ掛ける様に首にナイフを付けると美緒を引き倒し、倒れた所で首を深々と斬るように振るうが寸止めで済ませる。

「私の勝ちですね」

まだ、続けます。と離れて待機するブレッドだが、美緒は鞘から紐を解くと背中に背負う。ブレッドもそれを見て腰にナイフを戻す。

「何かを迷っているな。いや、悩んでいるか？」

あたりだろうとニヒルな笑みを浮かべる美緒にブレッドは観念したかの様に昨日の事を話す。

リーネにとつての自分の存在は教官や上官、仲間以上の存在になっている事。

現状や立場で考えるとその言葉を受け取る事は出来ないが、それを抜きにすれば受け入れたい言葉である事。しかし、自分には恋と言う物や他人の異性に送る愛情という物を知らず、知らない物は悩んでも仕方ないと思いきえない様にしているがそれがいい事なのかかわからない事。

相談しようにも出来そうな相手がミーナしか居ないが、そのミーナは知らない所で色々とあつて恐らくできないだろう事。

それらを話すと美緒は何かを悩む様な素振りを見せた所で起床を知らせるラツパの音が響く。

「まあ、自分でなんとかしますよ」

そう言うのと銃を持って基地の方へ去って行くブレッド背中を見ながら美緒が呟く。

「お前はどつちだ……ブレッド……」

ブレッドは射撃訓練を終えてシャワーを浴びてから食堂に向かうとすると美緒の上着を着た芳佳とすれ違う。

「その格好はどうした？」

ブレッドが聞くと訓練終わりに風呂で汗を流し終えて更衣室に行くとペリーヌのズボンが無くなっており、芳佳のインナーやズボンは証拠物件としてバルクホルンが持っており、何も着ていない事とペリーヌのズボンが無くなった元凶はルツキーニであると伝えられる。「兎に角だ。お前はルツキーニを追う前に服を着て来い。俺もルツキーニを探すのを手伝うから」

芳佳は慌てながら返事を返して去って行くのを飯は後回しと考えてブレッドはルツキーニが居そうな場所をローラーで消して行く。

当のルツキーニだが、ペリーヌと芳佳に追跡されていたがペリーヌは自滅で脱落。芳佳の追跡は木に登り、登らせた所で羞恥心を刺激して落下させる事で一時的に行動を不能にさせる。

この後に芳佳はブレットと合流して救援を依頼して受理される。

その後はバルクホルン・シャリーリーの追跡は足で振り切つて基地内へと逃走し、エイラの部屋へと入る。

エイラに見つかつたルツキーニは人指し指で静かにとジエスチャーをすると窓から降りられるかどうか確認する。

基本的に此処の基地の壁はそれなりの道具が無いと登る事が出来ない様になっている。つまりは降りる場合も徒手では不可能と言う事になるがエイラの部屋の立地がエイラに不幸を与える事になる。

「そだー！」

ルツキーニが降りられると判断するとエイラのズボンが無断で拝借する。

「あ、コラー！ ワタシのー！」

エイラの声を振り切つてルツキーニはエイラのズボンをパイプに通すと壁に足をつけてラペリングの要領で地面に降りる。

「ゴメンー！」

エイラはルツキーニに追跡の為に迷いながらもサーニヤのズボンを借りて就寝着から軍服に着替えると廊下に出て直ぐ、バルクホルンとシャリーリーに遭遇する。

「ルツキーニは？」

「し、下に逃げた。」

「追うぞー！」

一方のルツキーニ。

「どう！ じゃじゃーん！」

右手に芳佳の服、首にエイラのズボンを持ちながら降り立つ。

「見つけたー!」逃がしませんわよ! 泥棒ネコ!

右からペリーヌ・芳佳ペア。

「いたぞ!」「カエセ! コラー!」

左からシャリー・バルクホルン・エイラチームが迫る。

「泥棒じゃないよー!」

ルツキーニは正面へと逃げて直ぐに左折。残りのメンバーをその後を追う。

メンバーが通り過ぎて直ぐにブレッドが同じ場所に現れ、ある場所の部屋を開けようとした瞬間にネウロイ来襲の警報が鳴るとブレッドは溜息を吐きながら扉を開けて警報を鳴らすレバーを押し上げて直ぐに警報を切る。

「フランチェスカ・ルツキーニ少尉」

開けて直ぐの場所に居たルツキーニに逃げられない強さではあるが決して締め上げない絶妙なチョークスリーパーを掛けながら魔導板を展開すると基地内の機器全ての誤報である事を出撃範囲内にネウロイは改めていない事を確認してから告げる。

「さて、ルツキーニ少尉。訳を聞こうか?」

ルツキーニは観念したかの様に訳を話し始める。

事の顛末はルツキーニが風呂から上がった時に自分のズボンが無くなっていた事が発端でペリーヌのズボンを借りていた所にペリーヌや芳佳が盗まれたと大事にしてしまい、言うに言えなかったと言う事である。

それを聞いたブレッドは溜息を零すと一瞬だけチョークスリーパーをルツキーニに決めてから告げる。

「借りるなら借りると持ち主に伺い立てる。直ぐに部屋に戻って予備を身につけたら返すとか。誰かにとって来て貰うとかやりようは幾らでもあった。その努力を怠った貴様の責任だ」

珍しく本気で怒るブレッドにルツキーニは元気が無くなった様にしな垂れる。

そんなルツキーニにブレッドはゆっくりと優しく語り掛ける。

「せめて一言だけでも言えば、此処に居るみんなはお前を助けてくれ



る。俺たちは12人で家族だとミーナ中佐は言っているだろう？  
家族ならどんな些細な事でも頼んで良いんだ。だから、一言だけ告げる。それさえすればもつと良い結果に必ずなる。次からは気をつけような」

ルツキーニを解放すると涙ぐんでいたルツキーニの頭を撫でながら続ける。

「取り敢えずは坂本少佐に出頭して、俺に話した内容をもう一度だけ言うんだ。誰かが乱暴して来たら守ってやるから逃げずに目を見て話すんだぞ?」

「うん……わかった……」

「よし! 良い子だ!」

その後はインカムに魔導板を使って直接的な連絡をとって格納庫で合流して、ルツキーニは事の発端を説明すると最初にルツキーニのズボンを取った者が誰かと言う結論になると真犯人探しとなったのだが、見つからずにエーリカの表彰式の時間となり迷宮入りしてしまう。

「ハルトマン中尉、壇上へ」

「はい!」

美緒の言葉で軍帽を被ったエーリカが壇上に上がる。

「エーリカ・ハルトマン中尉の受勲を執り行ないます」

そう言いミーナ中佐は柏葉剣付騎士十字章を取り出した。

「ハルトマン中尉。貴官は第501統合戦闘航空団にとって見事なる殊勲。多大なる戦果を挙げた。よってこれを称する」

ミーナはエーリカの首に勲章を掛けるとみんなが祝福の拍手を送る中、小さな風が吹き、エーリカの上着をたなびかせるとエーリカが履いているズボンは青と白の縞模様が入ったズボン。つまりはルツキーニのズボンだった。

その事実にも固まった美緒・ミーナ・エーリカ以外のメンバー。美緒は何かわかっておらず、ミーナは笑顔で祝福してくれているとエーリカに笑いかけ、エーリカは『はい』と元気よく返事をした瞬間にブレッドが使い魔の耳と尻尾を出すと同時に地面をへこませる程の踏み込

みで飛び出し、受勲の為の壇に上がるとエーリカを担ぎ上げて天高く垂直跳びすると空中でエーリカの体勢を逆さずりに変える。

「お前が発端かああああああ!!」

壇を破壊する程の衝撃で、着地すると共にブレッドはエーリカに後遺症が残らないギリギリのギリギリまで攻めた筋肉スリーパーを掛けて、ルツキーニのズボン紛失事件は解決した。

## 第23話 完璧なロツテな2人

ズボン紛失事件から数日後のある日。基地に警報が鳴り響く。

「ガリアから敵が侵攻中との報告です」

「今回は珍しく予測が当たったな」

壇の後ろから真剣な顔つきで告げるミーナに美緒が好戦的に笑いながら告げる。

「ええ。現在の高度は1万5千。進路は真つ直ぐこの基地を目指しているわ」

「よし。ルーチンの迎撃パターンでいけるな。今日の搭乗割はバルクホルン、ハルトマンが前衛。ブレッドとリーネが後衛。宮藤は私とミーナの直掩。シャーリーとルツキーニ、エイラとサーニャ、ペリーヌはは基地待機だ」

「ぐぬぬ……私も……」

「おつ留守番、おつ留守番！」

「ユニットのセッティングでもするかー」

ペリーヌは悔しそうに、他の待機組は気楽に答え、出撃組は素早く空に上がる。

空に上がり、敵と正面からかち合う進路をブレッドの魔導板で微調整をしながら進む。

「敵発見！」

美緒が敵を発見するとミーナが素早く指示を飛ばす。

「タイプは？」

「確認する！」

美緒が眼帯をズラして魔眼を発動させる。

先にはキューブ状にネウロイが悠々と飛行をしていた。

「300m級だ。何時ものフォーメーションか？」

「そうね」

「よし！ 突撃！」

美緒の指示でバルクホルンとエーリカが突っ込み、ブレッドとリネットは2人を援護と後ろのミーナ・美緒・芳佳にも援護が出来る位

置に着く。

そのタイミングでキューブが分裂するとミーナが素早く固有魔法の三次元空間把握で敵の数を調べる。

「右下方80。中央100。左30、いえ、29よ」

ミーナが把握しようとしているのを気付いて居なかったブレッドの一撃でネウロイが1機破壊される。

「総勢で209機か、勲章の大盤振る舞いだな」

「一体、何人のエースが生まれるのやら。リーネ！ 最低ノルマは4機な。それ以下だったら訓練メニューを変える」

ブレッドが武器を右手から左手に帰る。

ブレッドの武器は左で保持して、右で撃って、右で装填を行う様に設計されているが保持の手を逆にする事で装填する腕がフリーに近くなり、グリップを保持したまま装填ができる為に連射力が向上する。

「いいか、リーネ。俺たちの仕事は両隊の援護だ。後ろに回り始め様とする奴は確実に落として、ダイレクトサポートに徹しろ」

「はい！」

ブレッドはリネットに指示を送り切ると武器を構え直して、サイトを覗いて息を吐くと引き金を引き、次弾を装填、発射。この3工程をポルトアクションとは思えない速度でこなして確実に倒せるネウロイからの確に数を減らして行く。

リネットはブレッド程の速射は出来ない為に確実に銃を保持して、ネウロイを引いて撃って行く。連射速度はブレッドが5発撃つ内に1発か多くて2発だがそれでも命中率は100パーセントを維持しており、バルクホルンやエーリカの死角に入り込もうとするネウロイを確実に撃破して行く。

「リーネ、息を整えろ。的の中心からズレてる。銃身が息と同時にブレている証拠だ。口で深く長くしろ」

集中しているから息が荒くなるリネットの背中に自信の背中を合わせながら告げる。

その時にブレッドが胸で保持しているトンプソンSのホルダー

のベルトとりネットが腹にぶら下げているトンプソンSのホルダーのベルトがぶつかり合い、金属音を小さく立てる。

その音とネウロイの一部があのだと判断したのか二桁単位でネウロイが波状攻撃を繰り返す。

2人は対装甲ライフルで削るが向こうのビームの射程内に入るとお互いに銃を背中に背負い、トンプソンSを抜いて交戦を始める。

ブレッドは抜くと同時に右斜め上方から後ろに回ろうとしたネウロイに身体を捻る事で射線を通して撃墜すると背中を晒したブレッドにネウロイが迫るがそれに気付いているブレッドは別のネウロイに銃口を向ける。

その瞬間に背中を狙っていたネウロイはリネットの銃弾より破壊され、攻撃の隙を晒したりネットを狙うネウロイはブレッドの銃弾で破壊される。

ブレッドは破壊を確認した瞬間にバレエの様に足を上げるとリネットは身体を曲げてブレッドが開けた射線を通るネウロイ3機を立て続けに破壊、死角が増えたりネットを見逃さないネウロイに対してブレッドはリネットを援護する様にネウロイを5機、連続で破壊する。

此処でブレッドとりネットのトンプソンSが弾切れを訴えたタイミングでネウロイの最後の1機が迫るがリネットが一足早く装填に気付いており、機関部に弾倉を突っ込んだタイミングでブレッドがコッキングレバーを引いて撃って初弾を装填。レバーが金属音を放つと同時に銃声となり、最後のネウロイをリネットが破壊する。

今度は挟み撃ちで迫る4機のネウロイにブレッドは左手でレッド9を抜いて応戦をしながらトンプソンSのマガジンキャッチ部分をリネットの方向に向ける。リネットは片手保持でトンプソンSを撃ちながら空いた手でブレッドのベルトからマガジンを抜いて装填。ブレッドが口でコッキングレバーを引いてトンプソンSとレッド9で2機のネウロイを破壊する。

リネットは1機を仕留めたが残りの1機を仕留める直前で弾切れを起こしたがブレッドがレッド9で仕留めて事無きを得る。

この一連の動作を見て、エーリカが驚いていた。

「ロツテ戦術って極めるとああなるの……かな？」

エーリカはロツテ戦術の生みの親とも言えるエディータ・ロスマンの元で訓練を積み、ロツテ戦術を叩き込まれているからこそ言えた言葉だった。

2機ペアで完璧に動く。それは不可能な話だと言える。何故なら、僚機の事を常に考えるというのは空戦中においては非常に難しい事だからだ。自分が戦っているだけでも大変な空中戦で他人のことも考えないといけない。それは2重人格がそれぞれで別々の事を考える様な物だ。

つまりはロツテ戦法は2機で動くだけでなく、助けが必要な時、速やかにどちらがそれに答えられるようにすると言う物なのだが、リネットとブレッドの場合は違う。

助けが必要だと思われる状況が発生する直前に援護が暗黙の了解の如く行われ、助けが欲しいと思う間もなく危機的状況が未遂で終わる。言ってしまうえば助けが必要無い状況を2人で作っているのだ。それも何の合図も無しに動きや体勢、武器の状況や状態を考えて察していると言うのだから驚きだ。

「上方より敵機！ 太陽を背に突っ込んでくる！」

芳佳・美緒・ミーナの3人組にネウロイが5機迫るのを察知したブレッドが援護射撃を加えるが太陽の所為で上手く狙えずに居たが芳佳がシールドを張りながら撃ち合ったお陰でシールドが遮光板になった事でブレッドが4機を撃墜する。

そして、取り逃した1機がコア持ちの本体だとわかると3人は追撃、ブレッドは3人の援護を行い、他のネウロイを寄せ付けないが命中率80パーセント以上の速射ではどうしても取り逃がしてしまうネウロイも当然ながら現れるがそう言ったネウロイはリネットの一撃で撃墜されて問題にならない。

この援護も何の合図も無くやってのける。

2人の援護を受けながら本体を追い詰めた3人だが、最後は不規則機動中のネウロイに芳佳が弾丸を当てて撃墜するとブレッドがある

事に気付く。

「此処は……」

眼前に広がるのは廃墟となった街々、そして基地らしき建物だった。そんな場所にミーナが降り立つ。

「そうか、此処はパ・ド・カレー」

美緒の言葉を聞いてブレッドは思い出す。

此方の世界でも起きたダンケルク撤退戦、作戦名ダイナモ作戦。

それを成功させたのはダンケルクの小舟達と言われる民間から緊急で徴用した船たちだが、パ・ド・カレー守備隊の存在があつたからこそと言うのを忘れていけない。

ブレッドの世界ではドイツ軍を、此方の世界ではネウロイを引き付ける為にパ・ド・カレーに残り、ダイナモ作戦発動まで徹底交戦を続けた。

共通点はこれだけでなく、ドイツ軍もネウロイも引き付ける為に最後の最後も撤退や救助はされなかった。

違いがあるとすれば、捕虜として生き残った者が居るかビームで全滅させられたかの違いである。

「答えはノー。イギリス軍の義務はドイツ軍と同じく立派に戦う事である」

ブレッドがパ・ド・カレー守備隊の指揮官は降伏を迫るドイツ軍に告げた言葉を口ずさむ。

大勢の味方を本国に返す為に命令だろうと立派に戦うと言い切り、最後までドイツ軍にイギリス軍のジョンブル魂を見せつけ続けた彼らも、この場所でネウロイと最後まで戦い散って行った無名の兵士達も同じなのだ。

ブレッドは無言でパ・ド・カレーの廃墟に最敬礼を送るとミーナが何かの包みを持って帰って来る。

「基地に帰投します」

帰投すると慌てた様子で通信機器の設営を談話室で行う。

きつかけはミーナがパ・ド・カレーに残された自分宛の荷物が赤いドレスでそれを着て歌う事になり、その歌を赤城の乗員に聞かせようとなったからである。

因みにだが、ブレッドはギターで演奏参加する事になった。

歌う曲はリリー・マルレーン。

戦争に赴いた恋人を想う若い女性の物語を描いたラブソングだ。

歌い終わると芳佳がミーナの歌を絶賛するとエイラが芳佳の頬を引っ張りながらサーニヤを褒めろと詰め寄り、芳佳が引っ張られながらも褒めるとサーニヤが恥ずかしそうに顔を赤くするがその表情は嬉しそうに微笑んでいる。

それを少し離れた場所ですぐギターを抱えたまま微笑みながら見ているブレッドにリネットが話し掛ける。

「ブートさんのギターも素敵でしたよ」

「ありがとう。それはサーニヤが上手いから下手な場所を騙し騙し出来ただけさ」

そう言って謙遜するブレッドには笑ってそうですねと告げているのをミーナは何かを押し殺した様な笑みを浮かべながら見ている。



## 第24話 失った者同士

ブレッドは暗くなった廊下を歩いて、ミーナが居るであろう司令室を目指す。

急な搭乗割変更でブレッドの夜間哨戒がサーニヤに変わり、司令室への出頭を命じられたからだ。

「何を話すんだ？」

ブレッドはふざけられる人間だが、ルツキーニやシャーリー、エーリカのように嚴重注意以上の事は単独では行わない様に自制できる人物だ。わざわざ、夜中に司令室に呼び出される事はした覚えは無いブレッドだが、呼び出しとあれば答える他無い。

ブレッドはミーナの司令室兼執務室へとやって来て、ノックしようとドアに近づくと中から少しくぐもった声が聞こえる。

『こんな思いをするくらいなら、好きになんてならなければ良かった……てね。でも……そうじゃなかった』

誰と話している。ブレッドが抱いたの至極真つ当な言葉だった。ブレッドは若干の罪悪感を感じてはいたがそれ以上の好奇心に駆られて耳をドアにつける。

「でも、失うのは今でも恐ろしいわ。それなら……失わない努力をすべきなの！」

はつきりと聞こえる様になった声に辛うじて聞き取れた聴き慣れた音。

辛うじて聞き取れた音に身体が反応して武器に手が伸びる際に扉から耳が離れた事で何かに気付いた様に首を振るとそれ以上はいかない様に必死に自制しながら、状況把握の為に耳を澄ます。

「約束して。もう二度とストライカーを履かないって」

「それは命令か？ そんな格好で言われても、説得力がないぞ」

「私は本気よ！」

美緒とミーナの声。ミーナの声だけが語り掛ける様な物で無くなっていくが、ブレッドは相手が美緒だとわかると武器から手を話す。

「私はまだ、飛ばねばならないんだ……」

「(やばい!)」

美緒がドアに方に向かってくるのを音で悟ったブレッドが一旦離れて、出てきた瞬間に鉢合ったと言っても怪しまれないだろう位置で待機する。

美緒は廊下に出て直ぐに会ったブレッドに驚くような仕草を見せるが直ぐに逆の方向に去って行く。

ブレッドは美緒が開けたままにしていた扉から覗き込む様に様子を伺うと赤いドレスにワルサーPPKを片手で保持したミーナを見つめる。

「どんな理由で抜いていたかは問いません」

ブレッドが言葉を吐きながら扉を閉じてから振り返るとワルサーPPKをミーナは構え直していた。

「背中を向けた瞬間ですか……少し油断してしまいましたかね……」

原隊なら血を流していると冗談交じりに告げたブレッドだが、ミーナは真剣な顔で銃を構え続けている。

「軍規違反ですか?」

「ええ。やっぱり、貴方を信用しきるべきでは無かったわ……」

そう言つて銃を構え直すミーナが告げる。

「リーネさんの事よ」

ミーナの言葉にブレッドが静かに告げる。

「私と彼女の問題です。貴女に害があるとは思えないのですが」

ミーナはブレッドの目が変わった事で銃を突き出し直してから話す。

「ウィッチとの恋愛は軍規違反よ」

「でしような。ですが、同じ釜の飯を食い、訓練で磨き合い、共に死地を生き抜き、時には親身に接し合う異性が何時しかそれ以上の関係を望むのは仕方なき事かと」

ブレッドが言い放った言葉にミーナが言い返す。

「ええ。仕方のない事よ。でも、軍規を違反している以上は相応の対処をしなくてはならないわ」

「お言葉ですが、軍規で感情は縛れません」

無言のミーナにブレッドは続ける。

「我々は兵士です。軍人です。軍規は守らなければならぬ。ですが、私達は兵士や軍人である前に1人の人間です」

ミーナは言葉を失う。

ミーナもウィッチだ。作戦や命令を無視しても民間人を守る為に行動をした事の経験がある。ブレッドの言う事がわからない訳ではない。

言葉を失ったミーナにブレッドが話し掛ける。

「ミーナ中佐はこの戦争で多くの味方を失ったと予想が出来ます。そして……恋人を失った事がある。違いますか？」

その言葉にミーナが目を見開く。

ブレッドは恋人を失ったことはないが、同僚やベテランパイロットが恋人や妻を失ったと潰されているのを見て、自分は戦争が終わるまで恋人を作らないと決心した。だが、失った者を多く見た事で隠そうとしている人間や隠している人間を見つける事は出来る。

「死者を想う。それは人間のできる美学でしょう。ですが、過去に縛られ、死者に縛られていては、軍人は生きていけません。そして、人としての幸せを逃しかねませんよ」

「貴方に何がわかるっていうの!」

普段のミーナからは想像が出来ないミーナの声にブレッドが続ける。

「……パ・ド・カレー守備隊に所属していたんですね」

パ・ド・カレーに行つてからこうなった。つまりはミーナの恋人はパ・ド・カレー守備隊に所属していたと言うのは予想が出来る。ブレッドは沈黙は肯定と受け取つて先を始める。

「兵士は時に死ぬ事が仕事になります。その任務を完遂した彼等を誇りに思わなければ彼等が報われません。悲しんで欲しくて死んだ訳がありません。未来を誰かに託す。それが出来るのも人間です」

「黙って!」

「黙りません。託された私達が、託した人に縛られたら、託した人はど

うなるんですか！ 託した人達が哀れで仕方ないですよ！」

「黙りなさい！ 大切な人を無くした事のない貴方に何がわかるの！」

ミーナがそれを言った瞬間にブレッドがミーナの頬を殴り付ける。殴られたミーナは横向きに地面に倒れるとブレッドが握った掌に爪が食い込む程に強く握りながら叫ぶ。

「大切な人を失ったのが自分だけだと思うな！ 俺はパ・ド・カレーで父親はドイツ軍の凶弾に倒れた！ ドイツ軍の爆撃で母親を失った！ 大勢の戦友を失った！」

その言葉にミーナが驚く。

自分と同じ境遇にいる筈が無いと思ったブレッドが同じだった事に。

「貴女は考えた事がありますか？ もし、死ぬのが自分で、もし一言だけ愛する者に、親しい者に言葉を送れるとしたら」

「それは……」

「恋人だった彼女に送れるなら俺は、忘れて新しくいい奴を見つけろって言いますよ！ そっちの方がずっと幸せになれるから！」

自分に恋人は居なかったが、同じ部隊で結婚間近だった同僚から死んだら伝えて欲しいと言った言葉をそのまま伝えるとミーナは目を伏せる。

ブレッドは初めて自分の掌から流血していた事に気付き、滴る血を見ながら告げる。

「俺は……俺が託した事をやり遂げる、無理なら未来の仲間に託す。それが兵士だった父や彼等への1番の弔いだと思います。そして、自分が幸せになる事が愛する者への、1番の弔いになると思っています。死んでまで愛した者に不幸になって欲しいなんて思わないと思いますから……」

ブレッドが無事な左手で扉を開けると去り際に話し掛ける。

「そこはミーナ中佐が折り合いをつけるべき事です。私は私の想いに従って行動をします。それと譴責でも何でも受ける覚悟がありますので」

そう言つて、扉を閉めようとするブレッド。

「待ちなさい」

だが、ミーナの声に閉じかけた扉を止める。

「きつとリーネさんの関係が変われば、きつと貴方は大きな傷を負う事になる、もしかしたら弱くなるかもしれないわ」

それを聞いたブレッドは望むところですよと笑みを浮かべて敬礼をすると扉を閉めて廊下を歩く。

向かう先は医務室。掌の傷を手当てする為だ。

その途中でリネットと出会う。

「リーネか。こんな夜にどうした？」

部屋の近くを通ろうとしていたリネットに気付いて、右手を上げてしまったブレッドだが、気付いた頃にはリーネが掌に気付き、ブレッドを手を掴んでいた。

「一体どうしたんですか!? 兎に角、手当てしないと」

慌て始めるリネットにブレッドが手当てをする側が慌ててどうすると笑いながら告げるとブレッドがリネットを医務室に連れて行き、自分では難しい手当てや巻きづらい包帯の巻き方を教えながらリネットに手当てさせる。

「こっちの航空歩兵は簡単な応急手当ても習わないのか？」

「習いますよ。ただ、実践は初めてで……」

なら仕方ないとブレッドが笑うとリネットが迷いながらも言葉を告げる。

「……迷惑でしたか？」

リネットの言葉にブレッドが首を傾げる。

「あの時の……その……」

リネットが恥ずかしがるとブレッドが自分が撃墜された時の事だと察するとリネットの頭を撫でる様に触る。

「迷惑なんて思っていないさ。逆に俺みたいな奴でいいのか？ 無茶するし色々と問題のある曰く付き物件だぞ？」

「そんな事はありません！ ブレッドさんはいい人です。優しくして、頼もしくて、面白くて……兎に角ですね「ありがとう」

ブレッドはリネットの台詞を遮る様に抱擁する。

「素直に嬉しい。だけど、お前の言葉を素直に受け取る事も、お前に俺の気持ちを素直に送るのも立場や環境の関係で難しい。だから、もう少し待ってくれるか？」

その言葉にリネットもブレッドを抱きしめながら頷く。

「必ず、送って下さい。良い物でも悪い物でも必ず受け止めます」

一呼吸入れたリネットにブレッドが喋ろうと息を吸ったタイミン  
グでリネットが先に言葉を漏らした。

「送らずに死んだら、地獄の果てまで追い掛けて問いただしますからね？」

可愛い笑顔で告げられた言葉にブレッドは言いたかった言葉を話す前に告げられて良かったと心の底から思うのだった。

地球の何処かにある秘密基地に鎮座するのは鈍い銀色の機械。その機械のスリットが一瞬だけ蟹の甲羅を思わせる鮮やかな紅色に輝くがそれに気付いた者は誰も居なかった。

## 第25話 不穏な空気

ブレッドの姿は501基地から離れてブリタニアの首都、ロンドンにあった。

今日の彼は軍服を脱ぎ、革製の上着に拳銃を隠し、帽子とスカーフで顔を隠して待ち人を待っていた。

「待たせてしまったかな」

そんな彼に紳士服に葉巻をくわえた男性が話し掛ける。

「卿自ら来て頂けるとは思いもしませんでした」

周りに聞こえない様に話し掛ける。相手も頷くと場所をカフェと移すと奥まった席に着き、見張りの人員が安全だと判断して合図を送るとお互いに顔を隠し為に使っていた物をとって顔を合わせる。

「チャーチル卿、今日は何のご用でしょうか？」

「うむ。君に来てもらったのは、マロニー卿についてだ」

ウエストン・チャーチル。

こつちの世界でも向こうでも首相を務めた元軍人だ。

勲章を受章式の後に対談を設けられたブレッドはチャーチル卿と面会を果たして向こうの世界についてとこれからの兵器や戦術について擦り合わせや世間話まで行った。

お互いに軍人。お互いに気心をしてしまえば口は自然と動く様になる。

「マロニー卿が嫌ウィッチ派だという事は君も知っている事だと思うが、そのマロニーがようやく尻尾を見せた」

「予算削減は何度も聞いていますが、その予算は良からぬ所に流れているんですね」

「ああ、その通りだ。しかし、問題はその予算が食費の水増しと言う事で消えている予算が何処に消えているのかだ」

水増し程度で攻めた所で食材費の上昇で片付けられる。問題なのはその金が何処に消えていくのが分からなければ意味が無い。

「兎に角、その辺りは私の方で調べるから君は車に入れてあるトラックの中身を誰にも察知される事無く保管してくれ。それと詳しい指

示を書いた書類を入れてあるが、行動のタイミングは臨機応変に決めてくれ」

「了解しました」

「それとこれはわかって欲しいのだが、私は決してウイッチ達が嫌いでマロニー卿を空軍司令に就任させた訳では無いのだよ。ただ、当時はそれが最良だったのだ」

「了解しています」

「ウイッチ達を頼む」

ブレッドへの信用と信頼をそれだけで言い残すとチャーチルは車に乗り込み、ブレッドはチャーチルが乗った車が曲がり角を回って見えなくなるまで見送った。

そして、自分が乗っていた車に乗り込みと何かに気づいたのか。助手席に置かれていたトランクケースを奪う様にと運転席から転がる出る。その瞬間に運転席から業火が上がる。

「火炎瓶を使ったトラップか……マロニーめ……」

燃える車の爆発からトランクケースと目を守りながら自分の上司に毒を吐き捨てた。

チャーチルの好意で台車を用意して貰ったブレッドが501基地に戻ると殆どのメンバーが出っ張っており、迎えたのはエイラだった。

そして基地を包む空気がピリピリしている事に気付くと無意識にヒップホルスターに入れたレッド9を撫でてしまう。

ストライカーズではこう言う時に必ずと言って良いほどに流血沙汰が起こる。だが、状況を正しく理解、思考してこそその尉官だ。エイラに『状況』とだけ告げると足早にミーナが居るであろう司令室を指す。

エイラはブレッドの見た事のない一面に驚きながらもブレッドに現状を説明する。



内容は決して尉官がする様な報告の仕方では無かったが大方は把握出来た。

事の始まりは無許可飛行訓練をペリーヌと芳佳が行った事から始まる。

何故に無許可飛行訓練を行い、その責任はどっちが多いかはさておき問題はその次だった。

無許可飛行中にネウロイが出現、ミーナが待機を命じるも芳佳が命令違反で独断専行を行って接敵するも何かしらの理由で撃墜せず。接敵から間を置いて本体が合流。美緒が撃墜しようと銃を構えた瞬間に芳佳が庇うような言動を行い、それで固まった美緒にネウロイが攻撃。

美緒はシールドを張ったが年齢による魔力低下によりシールドが脆くなっており、ビームは貫通。弾倉に命中して誘爆を起こしその際の金属破片を深々と喰らい意識不明の重賞と言う状態だった。

「少佐の現状は！」

「だから……「怪我の度合いじゃない！ 治療を受けているかどうかだ！」 えつと……確か手術室に……」

「そうか……ここからは医師達に託すぞ」

「私達はどうすれば……」

「少佐に関しては何も出来ん。兎に角は事後処理をし易くするぞ。ペリーヌと芳佳の身柄を完全に管理下におけ。監禁とは言わないが必ず2名以上でマーク。こう言った問題には……ミーナ中佐とバルクホルン大尉を司令室に呼んでくれ。あとは……追って連絡する」

エイラのブレッドの内容に不服がある様だったが、頷くと走り始めるとブレッドも一足早くに司令室へと着くとミーナ・バルクホルンが入室する。

3人は挨拶をする間も無く、ブレッドが状況説明を要求した為に状況を説明する。そして、終えた後にバルクホルンが話し始める。

「独断専行に命令違反。その結果に上官を負傷させて敵を取り逃がす。重罪だな」

「副司令がやられたんだ。混乱で取り逃がすのは仕方ない。だが、独

断専行に命令違反か……」

「何だ？」

「いや、独断専行に命令違反は結果が伴えば美談で終わるが今回はそういうかない。しかし、今回の一件の引き金はペリーヌにあるだろう」「どういう事だ？」

「聞けば、ペリーヌが宮藤軍治いに嫉妬から無許可飛行……この無許可飛行が無ければ今回の事は起こりえなかった訳であり、普段は監督する側の中尉が行った。宮藤軍曹もそうだが、ペリーヌにも責任問題がある」

その言葉にバルクホルンが反発するとブレッドはその反発が収まるまで横目でバルクホルンを見ながら黙っているとミーナが立ち上がる。

「今回の一件……坂本少佐が目覚めてから判断します」

「甘いぞミーナ！」

「いえ、双方の事情聴取が出来ない状況では正しい判断だと思えますが……方が一の場合は……」

「その場合は貴方に一任します。慣れているでしょう？」

「ええ、まあ……慣れたくは無かったです……」

そう告げた瞬間に美緒の容態が急変したと連絡を受けて駆け付けた3人だが、美緒は芳佳の魔法のお陰で美緒は一命を取り留めた。

その事にブレッドはそっと胸を撫で下ろしていた。

その日の夕方にミーナ・バルクホルン・ブレッドの3人は坂本・ペリーヌ・芳佳の3名に事情聴取を行った。

坂本は事実確認の為の照らし合わせ目的の為にミーナが担当。ペリーヌには上官という理由でバルクホルン。芳佳には話し易いと言う理由でブレッドが担当する事となる。

ブレッドは芳佳を自分の部屋に入れ、用意した丸テーブルの前に置かれた椅子に座るように言う。芳佳は正直に座り、ブレッドはリネットに監視役として同行を指示しブレッドは机の上に弾薬を薬室に入れたレッド9を置く。

「これはお前が逃げた場合に足を撃つ為の物だ。逃げようと思うな。」

そして、私に聞かれた事以外は話すな。いいな？」

芳佳がその言葉に反対する言葉を言った瞬間にブレッドはレッド9を素早く拾い上げて安全装置を切ると芳佳に向ける。

「先程言った言葉を忘れたか？」

「ご……ごめんなさい……」

「わかればいい」

こうして始まった事情聴取だが、ブレッドは芳佳の言葉に曖昧な部分や不可解な部分には質問をするが言っている事に対しては質問を行わずに手元のメモ帳に書き記して行く。

始まりは訓練で左捻り込みを起こった際にペリーヌから抗議を受けて実銃を持った状態で無許可飛行を行い、敵が侵入して来た。その後はバルクホルンから聞いた状況説明となんら変わらなかつたので特に記載はしないがバルクホルンから他の2人の事情聴取が終わつたと扉越しに聞くとブレッドもちょうど終わった為に立ち上がるが、その瞬間に芳佳に拙い扶桑語で『だまってよめ』と書いた紙を渡すとリネットに残る様に指示をすると部屋を出る。

紙には『リーネ。これを芳佳にだけ聞こえる様に翻訳しろ』と書かれていた。

司令室ではミーナは既に座っており3人で今回の一件についての協議が行われた。

結果としては芳佳には独断専行に命令違反、上官を危機に追いやる、利敵行為があつたが美緒の救助の功績を加味して10日間の禁固刑。ペリーヌには監督不足と管理不足が指摘され士官教育の簡易的な復習を行わせる事になる。

そして話はその日の夜。

芳佳の部屋にバルクホルンの手により鍵が掛けられてから始まる。

芳佳はブレッドさえも話を聞いてくれない事に絶望しかけた瞬間にドアの鍵からカチリと開けられた音が聞こえる。

芳佳が扉の方を見るとブレッドが静かにと身振りで伝えており、芳佳は自身の両手で口を押さえて声を押し殺して答えるとブレッドが顎をしゃくつて話せと催促すると芳佳が話を始める。

今までのネウロイとは違った何かを感じた事、ネウロイと戦わずに済むかもしれない事、ネウロイと分かり合えた事を話す。

ブレッドもそれに相槌を打つだけで決して反論などをせず黙って聞き、芳佳の話を終えると優しく語り始める。

「軍曹の話は魅力的だが、具体性に欠けるんだ。何かがあつたと言うがその何かが具体的じゃないと彼女達の心を動かせない」

「それならもつと上の人達に「残念だが、それは無駄だ」……どうしてですか……」

「腹ただしい事に上はこの状況を利用して自国の利権を増やそうとしている。少なくともお前の情報ではネウロイの殲滅を掲げる限りは何処の国の益にもならず、具体的でも無い話は聞く耳を持たれない」

ブレッドの言葉に芳佳が顔を伏せる。

今まで自分が信じてきた物を真っ向から否定された様な気が今の芳佳の脳裏を通り過ぎる。

「政治と軍事は『理』で動く。だが、世論は『情』で動く。世論が動けば政治は動かざるを得ない。今すぐどうこうは無理だが、もしも、お前が具体的に出来る様になるか、無視できない成果を出せば世論が動くかもしれない。世論が動けば政治が動くかもしれない。だが、すぐにどうこうは出来ない。まずは10日間。頭を冷やせ」

芳佳が無言で佇む中で去り際にブレッドが残す。

「俺はこの戦争に停戦も無ければ、休戦もなく、和平も降伏も無いと言ったが、その可能性がある。と言う可能性が持てるようになっただけマシだと思うがな」

公私で考えれば公の部分では芳佳の言い分を素直に受け止められないが、私の部分では素直に受け止められる。しかし、両方とも同意はしかねると言う物であるが芳佳にそれがわかったかどうかは時間が答え合わせをする。

## 第26話 ストライカーウィッチーズ

芳佳がネウロイとの接触を図った日から1日を置いた日に芳佳は脱走を行ってでも、ネウロイとの再接触を図った。これに対して司令部は芳佳の撃墜命令を下し、この命令にミーナは自身を隊長にエーリカ・バルクホルン・シャーロット・ルツキーニ・ブレットと芳佳に差し向けるには過剰と呼べる量と質を差し向ける。

そこで一行はネウロイの巣へと誘われるかの様に入っていった芳佳を目撃すると同時にブレットの世界でも未知の航空機を目撃する。

その航空機は人型ネウロイを1撃で屠る威力を一行に見せると何処かへと飛んで行くのを目で追いかけた後に芳佳を確保。基地へ帰投するとブリタニア空軍の將軍を務めるマロニーが滑走路に陣取り、一行を出迎えると衛兵達に銃を突き付けさせるとマロニーの背後に未知の航空機であるウォーロックが着陸するとストライクウィッチーズの解散を命ずると言う急展開も急展開な状態だった。

そんな状態だが、相手は將軍であり後ろ盾が無い状態で歯向かえば銃殺刑に処される可能性もある為にストライクウィッチーズのメンバーは色々と言いたい事はあったが黙々と退去を準備をしていた。

「すみません。手伝わせちゃって……」

「いいんだよ。男と女じゃ準備に差が出るのは当然だ」

ブレットもこの世界に飛ばされてから1年も経っていないのと数少ない私物も大きな物は殆ど無く、殆どを此処で捨てて行くと決めた事もありトランク1つどころか詰め込めばボストンバック1つで事足りる量と準備が誰よりも速く終わってしまい、手持ち無沙汰になったブレットはリネットを手伝いに来てた。

「これで良しと。詰め込めば意外と入るだろ？」

トランクに乗っかりながら締めた事で大型トランク1つに片付いたりネットの荷物を叩きながら話すブレットにリネットは無理矢理詰め込んだ事に何とも言えない表情をしていたが、何かに気付いたのか直ぐに真剣そのものでブレットに話し掛ける。

「あの……これからどうするんですか……」

「これからか……ま、適当な戦域に放り込まれるかプロパガンダの材料だろう」

おちやらけて言うブレッドにリネットは手遊びをしながら語ろうか語らまいか迷っている。ミーナが芳佳を起こそうと呼びに来て2人は芳佳の部屋に移る。

芳佳も既に起きかけであり、リネットの呼び掛けに反応して目を覚まして直ぐにウォーロックを調べようと告げるが既に時は遅く全員が退去の準備を済ませた後であり、芳佳は自分の勝手な行動が起こした事と涙を流しながら謝罪を繰り返していた。

「そんな顔で帰るつもりか？」

ブレッドの言葉に俯いていたリネットが顔を上げる。

ストライクウィッチーズのメンバーはそれぞれがそれぞれの手でバラバラになって行く。

今回の解散は予定されていた物では無く突発的な事であった事から連続命令が出ていない状況でも転戦と言うとんでも無い状況となっており、取り敢えずは本国の指令が届くであろう場所や本国帰還を選ぶ事となる。

「家の事なら大丈夫なんじゃないか？ 撤退じゃなくて正式な命令が出ての帰還なんだから不名誉な事じゃない。逆に新人だったお前が最前線から生還するだけでも十分な戦果だろ。撃墜記録だって5機以上だ。戦闘機乗りならエースだ」

「……はい……」

覇気の無い返事にブレッドが頭を掻いている。リネットの実家からの迎えの車が走って来るのが見えた。

運転手の青年が会釈をするとブレッドも会釈を返すと青年とブレッドが車のトランクに2人の荷物を詰め込むと青年の運転で車が

走り出すとブレッドが青年に声を掛けてから行動を起こす。

「膝を借りるぞ」

リネットの返事を聞く前に身体を倒してリネットの膝に頭を置くと頭部魔導板だけを発動させる。

「あの……」

「静かに……振り返らずに聞け。監視されている。マロニーの差し向けた奴だろうな。俺たちが離れるかどうか確認する人員だ。無線で頻繁に連絡を取り合っている。このまま離れるまで基地から離れよう」

青年は小さく頷くとリネットも頷くとブレッドに話し掛ける。

「あの……行くんですか……」

「武器もストライカーもある……それにあのウォーロックだっけか、嫌な予感がするんだ」

暫く走行すると無線機の反応が離れ完全に無くなるとブレッドがリネットの膝から起こして、車を止めるように告げるとトランクから自分の荷物だけを取り出す。

それをリネットは心配そうに車内から見つめて、離れようとしたブレッドが何かを思い出した様に車内にいるリネットに身体を車内に入れて顔を近付ける。

「もう、ミーナ中佐の軍規に従う必要が無かったな……リネット、君の気持ちは嬉しかった。俺も君を慕っている。だが、直ぐに忘れろ。死に行く男だ。もっといい男を見つけて幸せになれ」

リネットが何かを告げる前に扉を閉めて出してくれと身振りで伝えると青年は強く頷いてアクセルを踏んでブレッドから離れる。

ブレッドは数秒間だけ見送ると背中を向けて歩き始める。

ブレッドが歩いて来たのは基地が小さく見える位置に建てられた廃屋だった。

ブレッドはボストンバックからトンプソンSと双眼鏡を取り出し、トランクケースから青色を中心としたカラーリングが施されたウルトラマリンスピットファイアMKIXを取り出して折り畳みで出てきたストライカーを見慣れた形に伸ばして壁に立て掛ける。

「ブレット!？」

自身を呼ぶ声に振り返るとバルクホルンがミーナとハルトマンを連れて廃屋を訪れていた。

そこで偶然にも出会った4人だが目的は同じ為にそれぞれの道具で元501基地の監視を続けるとウォーロックがガリア方面へと飛んで行く。

「ジェットエンジンは整備に時間が掛かる筈なんだが……」

「そうなのか？」

「俺たちの世界の奴だと信頼性や整備性に難が多過ぎてキャニー以外はまともに使っていない」

「それでも出撃させた……結果が欲しいのね。バレたく無い事がバレても黙認される程の戦果が……」

ブレットが自前の双眼鏡をガリアにあるネウロイの巣へと向けるとウォーロックがビームで対抗しているのを見つめる。

ウォーロックは巣の中で迎撃に出て来た全てのネウロイを操っているかの様に同士討ちを行わせ、最後に自身のビームをネウロイの巣へと放つとネウロイの巣を示す黒い雲が晴れて、ガリアの地に日光が降り注ぐ。

「解放した……」

ミーナが固有魔法で見た景色に信じられないと言う風に眩くとウォーロックの機体が内側から無いか膨れ上がる様にデコボコに膨張するとウォーロックのパーツが四方八方に飛び散り、空中に赤い結晶だけが浮かんでいる。

「ネウロイのコアか……うん?」

ブレットが見る前でコアの角張った外見が粘土の様にぐにやぐにやと練られる様に変えていき、ネウロイのビームと同じ色の発光体に包まれた赤黒い球体を持ったモノが現れる。

「メカ・キャニー……」

ブレットはミーナが止めるよりも速く、立てかけていたシースピットファイアに足を突っ込むとトンプソンSに初弾を装填して、垂直離陸で空へと言う飛んで行く。



発光体は中心の赤黒い物体がぐにやぐにやと動き出して、黒く巨大なカニの様な姿に形を変えると口に当たると口の部分からビームを吐き出して基地を攻撃、更に4枚の蓋の様な爪を持った子機を2機も生み出すとそれを美緒・芳佳・ペリーヌの乗る赤城へ差し向ける。

流星のこれには赤城の迷う事なく敵と認識して機銃や高角砲で迎撃に出るが空母1隻の対空砲火など微々たる物で爪が開いた先にある赤い場所からビームを吐き出すが向こうの対空砲火の所為か全弾至近弾で済むが最初からこの精度だと2発目は間違いない赤城に着弾する。

赤城の殆どの乗員が2回目の攻撃は命中すると確信しているが必死の抵抗を見せていると赤いタガールの形をした炎が子機に命中して破壊。次の子機は赤い刃に斬りつけられて破壊させる。

「ウィッチ……いや！ ウィザードか！」

赤城の対空機銃を指揮する指揮官が叫ぶとウィザード、ブレットは子機を破壊し尽くすと本体に接近して空戦を開始する。

カニの方も口からビームを出して近づけまいと弾幕を張るが消滅シールドと全弾が魔力弾化された45ACPは効くのか徐々に砕かれ、ブレットが弾倉を2つ程使うと身体がバラバラに弾け飛ぶ。

「倒したの？」

「いや、まだだ！」

芳佳の言葉に美緒の叫び声が被さると弾け飛んだ黒い物体が集合するとぐねぐねと形を変えて、ワタリガニに似た形を作ると目と目の間の位置で背中に空いた穴から大量のビームが吐き出される。それも通常とは違い機関銃の様に細切れにされたビームを機関銃の様にはばら撒く。

ブレットはそのビームをシールドを併用しながら必死の回避を行うが円状にはばら撒く攻撃や腕を振り回しながらの射撃には危ない所が多くブレット1人では手を余し気味な相手に加えて流れ弾が赤城の周辺に突き刺さり、擦り当たりではあるが赤城にも被弾するという焦りがブレットの動きから繊細さと鋭さを奪っていく。

そして、ビームを躲したブレットにワタリガニの腕が迫ろうとした

タイミングでワタリガニの腹に銃弾が突き刺さる。

「宮藤軍曹！」

そう赤城の被弾を受けて美緒が飛ばうとしたのを説得して美緒のユニットで飛んで来た芳佳の援護射撃だった。

「ブレッドさん！ 手伝います！」

決意に満ちた芳佳の目にブレッドは笑うとシールドを展開してビームを防ぎながら叫ぶ。

「シールドに物を言わせて注意を引け！ 俺が一撃離脱で攻撃する。お前は零戦の機動性を見せつけてやれ！」

「はー！」

ブレッドが急降下で速度を稼ごうとするとワタリガニは背中からビームを放つが芳佳が邪魔をさせないと13mm弾を命中せるとワタリガニが標的をブレッドから芳佳に移して攻撃を加える。

芳佳はワタリガニのビームをシールドと機動性を生かした動きで回避と防御を行い正面に陣取っていると決りこむ様な軌道で上昇するブレッドが45ACP弾を腹に加えて横を通り過ぎると今度は引き撃ちで背中に銃弾を叩き込むとワタリガニは身体を傾けてブレッドの追撃を開始すると芳佳が背後について機銃で攻撃を加えてブレッド追撃のみに注意が向かない様にしてブレッドを援護する。

「ブレッドさん！」

ワタリガニの方がブレッドよりも速いのか腕の射程範囲にブレッドが入るとワタリガニは腕を振るってブレッドを突き刺そうとするが芳佳の警告を聞いていたブレッドはこれに対応して見せる。

まずは迫る腕をカランビットナイフで上に弾くとそのまま身体ごと回転させて腕と爪を繋ぐ関節を斬りつける。刃には魔力を纏わせただのか燃えておりワタリガニの腕は焼き斬られて切り口が溶けた鉄の様になっている。

ブレッドは腕を凌ぐとトンプソンSで左目を撃つと斬った筈の爪が虫の神経節の様に動きブレッドの背中に狙いを定めると突進を開始。ブレッドは芳佳が撃墜しようと撃っている事に気付くが腕の甲殻が細長い形をしており命中弾は無く、ブレッドも反応が遅れた所為

で回避も迎撃も出来ない。

ブレッドは時間の流れが遅くなった様な錯覚を感じながら迫る爪を見つめていると突如として爪が弾け飛ぶ。

「え……」

驚いていると頭部の魔導板からリネットの声が聞こえた事でリネットの対装甲ライフルだと気付くと右目と残った腕、背中の穴に銃弾が飛び込み、ワタリガニがバラバラに弾け飛ぶ。

その弾け方は先程のカニよりも遠く、細かく弾け飛んでいた。

そして、基地の方から別れた筈の501のメンバーがそれぞれの武器とユニットを持ってやってくる。

ミーナとエーリカの腕にはブレッドのユニットが握られ、シャーロットの腕には対装甲ライフルと弾倉が詰まったベルトが握られていた。

バルクホルンの腕には芳佳のユニットが握られている。

「みんな！」

「こいつはもう要らなかつたか？」

「それでも無いかも」

エイラの言葉が聞こえた直後に水中や空中から弾けていたモノが集まり球体を作るとその球体はブレッドが見た時よりもトゲトゲしいネウロイのビームと同じ色と光を放つと発光体を纏う。

発光体はまるで貴様らに勝ち目を無いと言わんばかりに回転と収縮を繰り返しながら一行を照らすが無すが逃げない一向に対して濃密とも言えるビームを放つ。

「全機！ ブレイク！」

ミーナの指示が飛びがユニットが急に咳込んだブレッドは挙動が遅れエーテルのプロペラを作ると装置が埋め込まれた場所を撃ち抜かれて片肺飛行となってしまうが未来予知で察していたエイラに肩を担がれると素早くユニットを投棄、バルクホルンがブレッドにユニットを履かせたタイミングでまたも濃密のビームが飛んで来るがブレッドのシールドにより直撃弾は消滅される。

ブレッドが消滅させているタイミングでルツキーニにブレッドの



「クソ！ 濃いとかそう言うレベルじゃねー！」

ブレッドが毒を吐きながらファイヤブレードを放つとビームをかき消しながらメカ・キャニーへと迫るが移動されたのか中央のコアに当たる部分には命中しなかった。

「クソ！ もう一度！」

「待って！ さっきの事でわかったんだけど何も全周囲をあの光が覆っているわけじゃ無い。何本ものワイヤーで編まれたボールの様になっているの！」

「つまりは隙間があるんだな」

バルクホルンの言葉にミーナは頷いてから続ける。

「ええ、ただ今までのネウロイと違って発射出来る角度は360度もあるの。注意して！」

隙間があるが狭すぎる上にビームの発射角度に制限無し。しかも隙間が常に動き続ける上に殆どの銃弾が効かない事もわかった。

殆どの銃弾が発光体に触れた瞬間に熱で消滅しているのだ。

しかし、迎撃されない弾丸も存在する。サーニヤの魔力弾化されたロケット弾と魔力弾、そしてブレッドの炎。

魔眼を持つ美緒はメカ・キャニーの弱点に気付いた。

「魔力弾や攻撃系固有魔法ならあの発光体を一時的に無くせる事もわかった」

「つまりは私の出番だね！」

エーリカが突っ込むとバルクホルンも抗議をしながらエーリカをシールドで守っている。

JG52からの付き合いであるバルクホルンには何をするかわかったからだ。エーリカはメカ・キャニーにバルクホルンの援護を受けながら接近すると固有魔法である『シュトルム』を発動。

破壊の意思を宿した魔力の風がメカ・キャニーの発光体を奪って行く。その空いた隙間にバルクホルンのMG42ウィッチ仕様から吐き出される13mm弾が剥き出しのコアに迫るがメカ・キャニーはビームを様々な角度から放つ事で壁を作り銃弾を防いでしまう。

「右ダナ」

「うん」

エイラに抱き着かれながら飛ぶサーニヤが動くときつきまでサーニヤの居た場所をオーバーキルは確定と言える程の量でビームが通り過ぎていくとサーニヤはロケット弾を発射。発光体を破壊するとそこにブレットトリネットの弾丸が飛び込むがバルクホルンと同じ方法で迎撃されてしまう。

「上ダナ」

「うん」

サーニヤが居た場所に先程以上のビームが降り注ぐが既に射線にはサーニヤの姿は無く、エイラと共に離脱済みであり、サーニヤのロケット弾は発射されるがビームに迎撃されてしまう。

「眠くないか？」

「うん。大丈夫」

3発目のロケット弾は命中しその隙間にブレットの貫通型ファイアブレードが飛び込むがメカ・キャニーはビームの壁を作る迎撃に移った。しかし、ビームを貫通すると悟ったのか回避行動を起こした事でギリギリの所で回避をされてしまう。

範囲型を放てばビームの迎撃で消える。貫通型は距離を詰めなければ躲かれる。

このやりとりでわかったのは2つ。

ウィッチーズ側はブレットを守らなければ決定打を欠く事。

メカ・キャニーはブレットさえ墜とせばほぼ負けない事。

実際にメカ・キャニーは1番の脅威はブレットと判断したのかブレットに攻撃を集中させて撃墜しようとしている。だが、この行動が失策だったとはある2人のウィッチの存在によって悟る事となる。

「ブレットに攻撃は集中して弱まった」

「いつちやうー！！」

メカ・キャニーよりも上空を飛んでいたシャーロットとルツキーニが弾幕が薄くなった事に気付く。

「パフパフ」

背中を預ける様に凭れ掛かったルツキーニの頭がシャーロットの

胸に埋まるといつもの様にじやれつく様に頭を摺り寄せるルツキーニにシャーロットは笑うとメカ・キャニーに向けて急降下を開始する。

「GOO」

急降下をするシャーロットとルツキーニに気付いたメカ・キャニーがビームで迎撃しようとした瞬間にエーリカのシュトルムが、芳佳に守られながら接近した美緒の刀が、エイラの援護を受けたサーニャのロケット弾が、リネットのシールド越しに放たれた範囲型ファイアブレードがメカ・キャニーの発光体を著しく奪い、2人の突入を援護する。

「いつけー!! ルツキーニ!」

「あーちよう!!」

多重シールドを展開したルツキーニがメカ・キャニーに迫る。メカ・キャニーは雀の涙程しか残っていない発光体を使ってビームの壁を作るがルツキーニを防ぎきれずに突入を許してしまうが回避行動のおかげでコアにヒビが走るだけだったが、此処で美緒と芳佳が接近。

芳佳のシールドに守れながらメカ・キャニーに接近するがメカ・キャニーは迎撃では無く発光体の再生を選択。迎撃用のエネルギーを復旧に回された事で離脱するがミーナの援護を受けながら射程距離にまで詰めたペリーヌのトネールがメカ・キャニー目掛けて飛翔する。

トネールの雷撃はメカ・キャニーの発光体全てを奪うがこの一撃でペリーヌは暫くの間はトネールを放つのが難しい程の魔力を消費する。

メカ・キャニーはこれはマズイとコアだけで小刻みに動いて銃弾から逃れ様としながらコアからの直接攻撃という手段で弾丸を迎撃する。

そして、メカ・キャニーの発光体が戻ると最悪の事態がストライクウィッチーズを襲う。

「弾が!」

バルクホルンが弾切れを訴えると次々に弾切れを訴えるメンバーが現れる。

弾数の少なかった対装甲ライフルやロケットランチャーは勿論だとしても、機関銃や連射の効く銃はコアだけになった時に相当な量を消費していた。

タダでさえ小さな目標に大量の弾を消耗し、魔力も消耗した状態で万全な状態のメカ・キャニー。

メカ・キャニーは勝利を確信したのか再生させた発光体を悠々と動かしながら1人に1本ずつ。収束ビームを放とうとする。

「こっちに集まれ！」

ブレッドが全員よりも前に出ながら叫ぶ。

メカ・キャニーの収束ビームを消滅シールドで防ぐつもりなのだと思えると全員が止めようとする。

収束ビームの破壊力は収束されるビームの数により上がる。

今回は数百を優に超える数を収束したビーム。防げる見込みは無いが芳佳の大型シールドよりは可能性はあるとブレッドは踏んできた。

そんなブレッドに全ての収束ビームを収束したビームを放つメカ・キャニー。ブレッドを殺せる千載一遇のチャンスを逃す様な奴ではない。

収束ビームをシールドで受け止めるブレッドの背にリネットの手が触れる。

肩越しに振り返ると全幅の信用と信頼を寄せる目でブレッドを見つめるリネットが見えると腰に吊るしたカランビットに炎が灯るとブレッドが引き抜くが魔力消費と体力消費が重なり腕が震えないブレッドにリネットの手が触れるとリネットがブレッドの手を後ろに引く。

ブレッドは頷くと叫びながら最後の力で腕を突き出そうとするとリネットもその動きに合わせて腕を突き出す。

突き出されたカランビットナイフからはいつかのネウロイを一撃で屠った炎の大剣は撃ち出される。



炎の大剣は収束ビームを切り裂きながら突き進み、発光体を突き破り、迎撃用のビーム壁すらも貫通。回避すら許さぬ速度で迫る炎の大剣が中央に鎮座するコアを一刀両断するとコアが業火に包まれながら砕け散る。

残された発光体も花火の様に周囲にばら撒かれた後には解放されたガリアの青空が広がる。

誰もが数秒間の間、固まる。

「ネウロイの完全消滅を確認しました……周囲の敵反応はありません」

サーニヤの魔導針が完全に消滅した事を察知して告げると全員が喜びから笑い、その喜びを分かち合う。

「ブートさん……」

震える手でカランビットナイフを鞘に収めたブレッドにリネットが声を掛けるとブレッドも緩慢とした動きではあるがリネットの方向に向きなるとリネットが急にブレッドに抱き付く。

「やった！ やったよー！ ブートさん！ ブートさんがやったんですよ！」

リネットがブレッドをキツく抱き締めながら話すとブレッドは疲れと痛みを感じさせる声でリネットに話し掛ける。

「いや……リーネが居なかったら、出来なかった……ありがとう……君は命の恩人だ」

それだけ言うとは恥づかしくなったのか顔を赤くしながらガリアのある方向を向くとそこにはネウロイの巣だった黒い雲が無くなり日光に照らされたガリアの地があった。

ガリア出身のウィッチであるペリーヌは祖国が完全に解放された事に信じられない物を見ている様な様子だった。

「終わったな」

「ええ」

美緒の言葉にミーナが何処か喜色を漂わせながら頷くと顔を501基地に向ける。

「ストライクウィッチーズ！ 全機帰還します！」



果を見せる!! 敵は12機だが速度の速いH0229だ! 油断するなよ!>>

<<イエツサー!!>>

この戦闘で敵12機撃墜、味方の損害は護衛機4機のみだったが、その4機の中にはブレットの映った写真を持つ男の機体が含まれていたが、その機体の残骸とパイロットだけが見つからないという情報が上層部に報告される。

そして、この1機は平和になってから時間を掛けて搜索されたが何時まで経つても見つかることは無く、人々は真相を知らぬまま永遠の行方不明機として後に語り継いでいく。

何故なら……

その機体はパイロットと共にこの世界から消えたのだから……

## ブレイブウィッチーズ編 第1話 飛ばされて異世界

とある戦場の空に巨大な4発推進式全翼機爆撃機が編隊を組んで飛んでいた。

そんな爆撃機にコバンザメの様に搭載された独特な形状の戦闘機のコクピットで1人の男が胸ポケットから一枚の写真を取り出す。

写真を取り出した男の後ろにPー51マスタングとスピットファイアmkⅨの前に立つブレッドが写りこんだ白黒の写真を見て薄っすらと涙を流すと無線機に通信が入る。

〈迎撃を下ろせ！ パラサイトガーディアン出撃！〉

号令のすぐ後に次々と独特な機体が爆撃機から投下され、背中に背負う様に搭載されたパルスジェットエンジンにより加速して揚力を得るとジェットエンジンを投棄。

自前のプロペラを使つて編隊を組んで行く。

涙を流していた男も少し遅れ気味ではあったが編隊飛行に参加する。

〈隊長より各機へ。快適な空の旅は此処までだ！ 日頃の訓練の成果を見せる!! 敵は12機だが速度の速いH0229だ！ 油断するなよ！〉

〈エイツサー!!〉

編隊を組むと隊長機からの通信に全員が叫ぶ様に返事をしたタイミングでお互いのパイロットが互いに目視確認が出来る距離にまで詰める。

パラサイトガーディアンは20機の編隊を10機編隊に分けて2段構えの構えを取る。

まずは第一陣の半分がヘッドオンで撃ち合い残りの半分は上空から一撃離脱を行い2機を撃墜するが向こうの腕が良いのか4機がH0226に喰われてしまう。

第1陣がH0226とドックファイトに突入すると第2陣が一斉

に一撃離脱で襲い掛かる。

これで1機は撃墜できたが、此処までで3機。普通なら此処で全滅か壊滅に近い損害を与えている。

涙を流していた男は脳裏にブリーフィングの時に爆撃機隊の司令官が語った言葉を思い出す。

『敵は此処まで精鋭とされる部隊を温存している。今回の作戦は敵の秘密基地破壊の他にこの精鋭部隊の誘き出し、もしくは基地ごと破壊する事が目的である』

精鋭部隊……実戦での存在価値は語る必要は無いだろうが存在するだけで一定の士気を維持する事が出来る為に存在すると言う情報だけでも戦略的価値が存在する。

これが空に上がってきた事は追い詰められたか必要なくなったか、損害を見ぬフリしてでも出す理由があるかのどれかだろうが現場に居合わせた彼にとっては如何でも良かった。

自分を殺すつもりで来た奴がいる。

ならば、殺られる前に殺るだけだと操縦桿を強く握りなおすと前方を敵に追われた仲間が通り過ぎる。

〈こつちに来い！〉

彼の通信に友軍機は反応して機首を向けると彼もH0226にヘッドオンに持ち込む。

追われていた友軍機は十分な距離にまで詰めると背面急降下で離脱。お互いに射線が開くと彼は12・7mm機関銃とH0226は30mm機関砲を撃ち合う。

12・7mm機関銃の弾はH0226のエンジンと燃料タンクに飛び込んで機体を爆発させる。だが、30mm機関砲の弾もコクピットを抉った事で破片をパイロットである彼に襲わせて深い傷を負わせ、2発あるエンジンの片方にダメージを与える。

彼の機体は敵機の爆発に飛び込んだ事でダメージを負ったエンジンから完全に黒煙を吐き出させると彼は朦朧とした意識の中で何とか酸素マスクを外した瞬間に口から血を吐き出す。

彼は震える手でポケットからブレッドと自分が映った写真を取り

出すと掠れた声で呟く。

「俺も……そっちに行きます……」

通信機から助けた友軍機の怒鳴り声が聞こえるが彼は力無く上半身を前に項垂れると機隊の揺れに合わせて身体が左右にふらふらと動き、機体は操るパイロットを亡くした事で水平飛行は維持できずに回転をしながら急速に高度を落としていく。

助けられた友軍機は落ちて行く彼の機体を追い掛ける様に飛行をしながら機体を水平にしると叫ぶが聞き届けられる事は無く、彼の機体はグランドキヤニオンを流れるコロラド川へと没した。

コロラド川に没した彼と彼の機体は平和になってから時間を掛けて捜索されたが何時まで経っても見つかることは無く、人々は真相を知らぬまま永遠の行方不明機として後に語り継いでいく。

彼と彼の翼は川面に没する瞬間に不思議な事が起こり、機体と身体の損傷が軽くなった状態でグランドキヤニオンから遠く離れたペテルブルクの空に飛ばされていた。

「つつ!! ついつてーなー!」

先程までは生物の息吹を感じられなかった要塞化、軍事施設化されたグランドキヤニオンだったが今は夕日に照らされた針葉樹が覆い尽くす森林と大きな水面だった。

周囲を索敵すると黒くタンDEM翼と言う珍しい形状の飛行機を見つけると敵か味方かの確認の為に接近すると黒い機体は赤いビームを放つ。

咄嗟の事で驚くが何とか回避すると操縦桿に配置された引き金を引いて、機首に搭載された12.7mm機関銃6門での攻撃を行うがパイロットは黒い機体が命中した場所を白い輝きで包みながら再生しているのを見て目を見開く。

「は!? どういう機体だよー!」

黒い機体からのビームが濃くなり、徐々に高度を上げて行く。

高度計をチラリと確認した彼が舌打ちをする。

高度計は高度1万mを指している。彼の機体の限界高度は1万1千mと余裕がほとんど無い。

向こうは高度を下げさせるつもりは無いのか少し低い場所をグルグルと旋回を行いながらビームで攻め立てる。

彼も必死の旋回で何とか可愛しているが正直に言うとな機体の小ささで救われている場所が多い。

「クソ！ 増援が欲しい！」

無線機は肝心な時に故障と絶体絶命な状況だが此処で別の銃声が聞こえる。

「はあ？ 女が生身で飛んでいる！」

まさかの光景に驚く彼だが今はどうしようも出来ないとな頭の片隅に追いやって黒い機体を見つめる。

女が黒い機体を撃った事から利害が一致している。ならば、共同戦線を張った方がお互いの為だと思っただからだ。

そして飛んで来た女、菅野直枝は飛んでいた機体がネウロイで無いことに驚いていた。

パンケーキの様に丸く薄い胴体に主翼らしき物は無く、四角い垂直尾翼に水平尾翼。細い円柱のパーツに異様にデカイプロペラとカラーリングがグロスシールブルーの一色塗りで無ければネウロイと勘違いして銃撃を与える所だったのだ。

「おい！ お前とその機体はなんだ！」

菅野は通信を試みるが向こうが反応示さずにパワーダイブでネウロイへと挑むが不自然なタイミングで機首近くから噴き出していた発射炎が途切れた事でジャムか弾切れだと悟ると菅野が援護に走る。しかし、ネウロイも火力が高いタイプらしくお互いに回避が精一杯で菅野はシールドでの防御を交えて何とか撃墜を免れているが戦闘機の方はいつ撃墜されてもおかしく無い。

菅野は回避と防御をしながら99式2号2型改13mm機関銃を放つが連戦と言う事もあってか弾切れを起こしてしまう

菅野が武器を捨てたタイミングでビームが飛来。シールドで防ぎながら右腕を強く握る。

「（速く墜とさねーとあの戦闘機が……一瞬だけでいい、隙が出来れば！）」

自分はシールドがあるが戦闘機には当然ながら無い。菅野が戦闘機が撃墜される所を想像すると密かに焦りだしたタイミングで増援が到着する。

「菅野！」

「お前ら！ ツグー！」

助けに来たのは雁淵ひかりと雁淵に抱えられたニツカ・エドワードイン・カタヤイネン、愛称ニパの2人だった。

菅野がシールドでビームを防いでいる隙にニパがMG42の引き金を引いて攻撃を当てると一瞬だがビームが止む。

「今だ！」

その隙に菅野が拳に固有魔法である圧縮式超硬度防御魔法陣（超硬度シールド）を発動させる。

シールドを張った拳が青白い光を淡く放っているのを確認するとパワーダイブでネウロイへと突っ込む。

「剣一閃！」

菅野は身体ごとネウロイを貫通。殴った場所がコアだったのかネウロイは菅野が貫通してから一瞬の間を置いて白い破片となって砕け散る。

菅野は苦戦を強いられた敵を倒した事による勝利の余韻に慕っていると双発機の駆動音が聞こえてくると同時に体力の限界を感じ始めるがそれを隠す様に謎の機体を睨み付ける。

3人にとっては謎の機体とパイロットは風防を開けると中に乗るパイロットが手を振るとニパが手を振って答えると謎のパイロットは機体の背中を親指で示す。

謎のパイロットには雁淵以外は飛べないとわかっている様子で、3人は顔を会わせると領き、謎の機体の上方に周り機体マジマジと見ると背面に人が掴むには丁度良い大きさのへこみがある事に気付くとそこに菅野とニパが指を掛けると雁淵はコクピットを覗く。

覗かれた彼は燃料計を指差すと雁淵は顔を突っ込んで覗き込むと



燃料が心許ない量だった。

雁淵が何が言いたいのか悟ると機体の前に出て付いて来て下さいと言いながら身振り手振りで伝えると彼も察したのか頷くと機体をバンクさせて応答すると雁淵は彼を自身の所属する基地へと連れて行く。

「翼端灯1人分確認」

基地では雁淵・ニパ・菅野の安否が心配な502統合戦闘航空団のメンバーが基地の外で3人の帰りを待っており、複合魔法視力と言う固有魔法で遠くを見ていた下原定子が1人分の翼端灯を確認した事を報告すると一向に動揺が走る。

「待って下さい！ 見た事の無い航空機がいます！ その上にニパさんの菅野さんがいます！」

3人と1機が徐々に基地に近付くが鼻にイナゴが張り付いた事でクシヤミをしてしまった雁淵がバランスを崩して落水。同時に航空機も燃料切れで推力を失った瞬間、風に煽られやすい形状の所為で離れるのが遅れた2人は機体に基地の側面を流れる川に連れて行かれて水没した。

「あ」

「落ちた」

「3人とも正座！ そして墜落した機体のパイロットの救助！」

501統合戦闘航空団で戦闘隊長を務めるアレクサンドラ・I・ポクルイーシキン。通称サーシャが叫ぶと一般兵達が手慣れた動作でボートを用意して救助に向かう。

最初に雁淵を救助した後他に3名を救助すると謎の機体のパイロットは救助した兵士に両脇を固められながら一行の前に連れて来られる。

「まずは、所属と名前。それに階級だ」

502統合戦闘航空団の隊長であるグンドユラ・ラルに睨まれながら聞かれた彼は固められたままでも出来る限りの敬礼をしながら答

える。

「ストライカーズのパラサイトガーディアン分遣隊に所属するアラン・レッドフィールドです。階級は伍長です。救助に感謝します！」  
ストライカーズ所属。それを聞いた瞬間のラルの目が獲物を狙う獣のそれになったのを確認出来たのは付き合いの深いたったの2人だけだった。

## 第2話 戦う力

「ストライカーズのパラサイトガーディアン分遣隊に所属するアラン・レッドフィールドです。階級は伍長です。救助に感謝します！」  
ストライカーズ所属。それを聞いた瞬間のラルの目が獲物を狙う獣のそれになったのを確認出来たのは付き合いの深いたったの2人だけ。

その2人はラルの変化にそれぞれの表情を見せる。

背が低く銀色の短髪と可愛らしいと言う印象が受けられるエディター・ロスマンは何処か困った様な表情を浮かべ、ロスマンとは正反対に格好良さを漂わせる顔付きに長身で金を含んだクリーム色の短髪のヴァルトルート・クルピンスキーはまさかの男の登場に所属させようとするラルに何処か嫌そうに肩を落とす。

クルピンスキーとしてはこれが中性的だったりすればまだ我慢できたのだ。だが、出てきた相手は水を吸っても尚若干だが上を向くほどに硬い茶色の毛を短く切り揃えて、細くも太くも無く、長くも短くもない黒い顔付き。

上半身は実用的に作られた細めの黒いゴリマッチョで下半身は上半身に比べると気持ち細く作られているが見るものが見れば実的に鍛えられた足をしている。

正しく戦う男の身体と顔だ。

「兎に角としてはこんな場所で立ち話も何だ。私の部屋で少し話をしよう」

そう言われてアランが領いた事で拘束を解かれると争うのは得策でも無いし争うだけ無駄と判断すると同時に衛兵に自身の武器である多機能的なサバイバルナイフの刃にトマホークの形状を足した様な刃を取り付けたトレンチナイフが2本にコルト・ディテクティブのストライカーズ仕様で重心を5.5インチに延長しその他を改良・補強したコルト・ストライカーズを1丁とスピードローダーを幾つか渡す。

武器の多さと見たことのない武器に驚く502のメンバーだがラ

ルとロスマンは501のブレッドからストライカーズのパイロットなどは自費でサイドアームやナイフを揃えるのは普通の事だと言われている為に他のメンバーに比べると物珍しそうにしているがそこまで驚いていない。

アランは武器を預けると簡易的な身体チェックを受けてからラルの執務室に連れて行かれて中にはラルとロスマン、サーシャだけが残る。

「そうだな。まずは私とこのロスマン曹長は君の所属するストライカーズと言う組織については知っている」

「だから、私達の知っており情報について話すから相違点があったら教えて」

「OK」

アランが頷くとロスマンがブレッドから提供されたストライカーズについての情報を話している途中でブレッドの名前が出るとアランが驚きの声を上げる。

「ブレッド……今さっきブレッドと言ったのか……？」

「ええ。王立空軍では最多撃墜のエースでフルネームはブレッド・フィリップ。階級は少尉だったからしら？ 彼からの情報よ」

「ブレッド・フィリップ……金髪に緑の目だったか？」

「ええ。確か顔が……あつた、これが写真よ」

そう言って新聞の一面を見せる。

それはブレッドがヴィクトリアクロスを授与された時の記事でアランはその新聞に顔を押し付けて泣く。

記事の中のブレッドは彼の記憶に比べて若々しくなっていたがそれで気付かない付き合いではない。彼にはこれが行方不明の末に戦死扱いにされた愛すべき隣人だと直ぐにわかった。

「良かった……彼は生きて……生きているんだな……そして、彼を守り……同じ場所に……行かせてくれた、主に……心から感謝します」

泣きながら床に膝をついて信じる神に感謝の言葉を述べる。

これだけで彼にとってのブレッドがどれだけの存在か気になった

ラルはアランにとってのブレッドについて質問するとアランは語り始める。

キャニーとの戦争がまだ序盤だった頃は欧州のキャニー対策にアランの原隊は第二次世界大戦と同じ場所に駐留していたがそこに視察とP-51との模擬戦の為に英国人が何人か訪れる。

殆どは白人らしく黒人を差別的に取り扱っていたがブレッドだけが敬意を表するかも様に接して来た事やコミュニケーションをしたかったのか何か音楽を引いていると耳で覚えた曲をピアノで紹介して来たりとして来る内にいつの間にもやら音楽のセッションを重ねて交流を重ねた事。そしてブレッドが語った言葉が切っ掛けで大きな存在になった事を話す。

「その言葉とは？」

『俺にとつて君達は愛すべき黒き隣人だと』初めて俺たちを認めてくれた。それだけで俺たちはあいつが凄いと思った」

「肌の色だけで差別を……」

「こつちではないのか？」

「そうだ。少なくとも思想などでは色々があるが肌の色が黒いや白いやなどで差別をしていない」

「羨ましいな……まあ、俺たちを認めてくれたし平等に接してくれた。他の白人ではしない事してくれた。それだけで俺たちは嬉しくて大切な存在になった」

「そうか。誇らない大物と言う空気を纏っていたが異界とは言え、常識に真つ向から喧嘩を売ったのか……」

「ブートは凄い奴だ！ 所で此処は何処なんだ？」

「ああ。今度はこつちの番だな」

話はブレッドの内容から現在の状況に戻る。

「私達は第502統合戦闘航空団。通称ブレイブウィッチーズだ。私はグンドユラ・ラル。階級は少佐でこのブレイブウィッチーズの隊長をしている」

「私はエディータ・ロスマン。曹長よ。此処で教育係りをしているわ」  
「私は此処の戦闘隊長をしているアレクサンドラ・I・ポクルイーシキ

ン。大尉よ」

「さてと早速だが502について説明しよう」

ラルが502統合戦闘航空団について解説を始める。

結成についての経緯は略させて貰うが入ってしまえば東欧オラーシャの防衛とオラーシャ帝国に巢食うネウロイからオラーシャ帝国の国土を奪還する事が目的で設立された部隊である事などが語られるが肝心のアランは意味不明な言葉の乱立に頭が混乱しているとロスマンが急いで補足説明としてこっちの世界とアランの世界での共通項や変更点を話すが肝心のアランは半分しか理解していないが……

「要はソビエト連邦のオラーシャ帝国をネウロイって言う敵から守って殲滅すればいいのか？」

「まあ、単純に片付けるならそうだ」

単純ではあるが一応の理解を示したと思ったラルがいよいよとばかりに本題を突き出す。

「さてと、ブレットと言う前例がある。君にも少し魔法力を受けて貰う。先程も言ったが此処は激戦区だ。即戦力と喉から手が出る程に欲しい。もしも、その可能性があるのなら試すべきだと思う」

「ブーツもウィザードなのか!? じゃあ、さつき出てきた……えつと……ユニット? って奴で飛んでるのか?」

「ああ。スピットファイアだ」

「よっしゃ! やってくれ! またあいつと戦いたい! それに必要な力が魔法力だと言うなら意地でも手に入れてやる!」

「よくぞ言った! 先生!」

「はい!」

ラルの言葉に魔力が込められた突っ張りがアランの腹に炸裂する。突っ張り自体はそこまで強くなかったが手から放たれた魔法力がアランの体内に入るとその衝撃に負けたアランの身体がくの字に曲がって地面に倒れると腰の付け根からこっちの世界の住人でも見た事の無い尻尾が生えて来る。

その尻尾は鱗に覆われた見るからに筋肉質な尻尾だがアラン以外

の3人は尻尾以上の頭部の変化に驚いていた。

茶色の短髪が鱗の集合体の様に固まり、側頭部に丸い耳が生えるが毛らしき者は無い。

とにかくだが見た事の無い生物だが本人はこの動物と触れ合っているのだから知っているだろうと鏡を取り出して見せるとアランは窓ガラスにヒビが入る程の絶叫を上げると外で盗み聞きしてた菅野が『うるせー!!』と文句を言いながらアランの頭を拳で殴り付ける。  
「二いつてー!!」

そして殴られたアランもだが、殴った菅野も痛みを訴えるが内容としては鈍器で殴られた様な痛み方をするアランに対して菅野は切傷をつけられたかの様な痛みが方だった。事実として菅野の殴った腕の指は薄くではあるが切られている。

そんな菅野にジョゼことジョーゼット・ルマールが菅野の手を行っている横で生物の心当たりがないか聞くとアランは首を振って否定するが何処からか声が響く。

「鱗みたいな鋭い毛を持った尻尾に耳……もしかして……」

下原の言葉に全員が下原の方を向くて下原は恐らくですがと前置きを置いて語り始める。

「ミミセンザンコウでしようか？」

「ミミセンザンコウ？」

「大南島とその付近に住んでいる珍しい生き物です。毛が色々使えて肉も食用になるとか……あんまり捕まえてはダメですけどね」

下原の父は学者と言う事もあり様々な事を知っているので間違いは言っていないだろうし聞いた事も無い生き物なら見た事の無い変化の説明がつく。

ロスマンはこの変化についての説明をするとアランはブレッドと同じ力を持っている事がそんなに嬉しいのか人目を気にする事なく飛び跳ねて喜んでいる。しかし、何故か何処で触れ合ったかは忘れていたがラルはわからないならわからないで良いと言い放つ。

ラルにとって重要なのは何処でその使い魔と契約したかでは無く、戦力になるか否かだ。

「丁度いい。ひかりと一緒に色々調べてくれ」

その言葉にロスマンが頷くとひかりとアランに声を掛けて退室するとアランとひかりが後を追う様に退室して廊下に出ると先に歩くロスマンに追いつくと声を掛ける。

「1つ聞いてもいいか?」

「何?」

「何でみんながみんなパンツ一丁なんだ?」

「え? これはズボンよ?」

「オーマイゴット……」

ブレッドのカルチャーショック後の話だった為にこの話題は一切出なかった故のカルチャーショックがアランを襲った。



### 第3話 飛びたければ超えろ

ロスマンに雁淵がやった様な簡単な魔導エンジンの発動テストを行ったが案の定と言うべきか何のストライカーユニットも発動しなかった。というよりはストライカーユニットに足が入らないと言う事態に陥ってしまう。

これはアランの体格がウィッチには無い筋肉質な体型で足や腕も筋肉で太くなっているからに他ならず太っている訳では無い為はどうしようもなく、さらに向こうで乗っていた機体しか反応しないと言うブレッドの前例もあり、現在は流石に性能不足と言う事で余剰機体になっていたP-40を復活させてサイズ調整を行っている最中だ。そして、同時に使えるかどうかを1週間で試される事になる。

そんなアランダが何も行動する訳にはいかないと1人で基地の周りを走り込んでいた。

何度も撃墜される度にサバイバルを余儀なくされた彼にとっては体力錬成は命綱だと身を持って知っているからだ。

そんな彼にニパが後ろから追いつく。

「ニパ曹長か！ どうしたー！」

「あ、ユニットは出来上がったから来てって、ええ!? なんで服を着てないの！」

ニパが上半身裸で走っていたアランに顔を真っ赤にして驚いているがアランは男の上半身に驚くと同時に恥ずかしがる女性心理がわからないのか首を傾げながら了解と伝えて格納庫に戻り服を着ると雁淵とロスマンが入って来る。

「今日はよろしく頼むぜ！ ロスマン先生！」

につこりと笑みを浮かべながら話すアランから楽しみで仕方ないと雰囲気を感じ取ったロスマンは真面目にやりなさいと叱責すると2人にユニットを履く様に告げる。

2人はユニットに装着すると雁淵は日本リス、こっちでは扶桑リスの耳と尻尾が現れ、アランはミミセンザンコウの鱗の様な毛が付いた尻尾が生え、頭の髪も鱗の様な物に変わり側頭部から皮だけの耳が生

える。

「じゃあ、回してみて。回転数は1500をキープ」

「はいー」「おうー」

2機のユニットから出される音にしてはあまりにも小さく頼りない音が格納庫から聞こえてくる。

それは肉声でも少し大きな声を出せば十分に話せる程で生み出される風も服すらも靡かせれない貧弱な物だった。

それを見たロスマンが口を開く。

「あなた達のユニットは不機嫌そうね」

「え!? チドリが!」「機体は問題無い筈だ!」

「そうね。あなた達の所為で本体の性能が出せていないもの」

それを聞いた雁淵とアランが驚きから息を漏らすと自身の履くユニットに視線を落とす。

アランは不可解そうに雁淵は少し悲しそうな表情を浮かべる。

「私の所為……」

ロスマンが何処からか持ってきた工具を雁淵とアランに投げる。

「うわあ!」「あぶね!」

投げられた工具を雁淵がシールドで守り、アランはそれをキャッチして防ぐとロスマンが肩を露骨に落とす。

「はあー。あなたはそうやっっちゃ意味が無いでしょうに、それに……」

(雁淵さんは思った通りね)」

ロスマンの目は雁淵の履くユニットに注がれていた。

「今日の朝食はオラーシヤのザクスキ風にしてみました」

下原の言葉を聞いた後にアランは初めて見る料理だと思いつつながら適当な料理を口に運ぶと『うっ』と声を漏らす。

その声に下原は口に合っていないのかと慌てたように椅子から立ち上がる。

「美味しい……まさか、こんな俺と一緒に食事をしてくれるのにも嬉し

いのこんな美味しいものを食わせてくれるなんて……この部隊は最高だ……そしてシモハラは女神に違いない……」

この言葉に下原が顔を真っ赤にして否定するがアランはそんなことは無いと熱が入った様子で反論するとロスマンは手を頭に当ててため息を吐く。

「まさかと思うけど無自覚に女性を墮とすタイプじゃないでしょね……」

その近くでは菅野が雁淵を挑発していたが雁淵はそれにそっぽを向く事で反抗すると和気藹々とした食事という訳では無かったが食事を終えたロスマン・雁淵・アランは射撃場に赴いていた。

雁淵とアランがユニットを履いたまま何処まで撃てるかの確認の訓練でもあった。

「では、ここからセミオートでの的に当ててみなさい」

「ちっちゃい……」「コイン1枚とか……」

「構え」

「は、はい」「お、おう」

感想と文句に聞こえる言葉を吐く2人にロスマンが淡々と指示を送ると2人は慌てながら金属音を鳴らして銃を構える。

2人とも持っている銃は99式2号2型改13mm機関銃だ。反動に差があると比較や評価がし難くなるからとロスマンからの指示であった。

「銃はしっかりと脇を締めて肩で保持して、静かに引き金を……落とす」

雁淵の列から銃声が響く。13mmの弾丸の銃声は凄まじく、もしもここが屋内の射撃場だったなら3人は酷い耳鳴りに襲われていただろう。しかし、それだけ頼もしい銃声がしても弾丸が当たらなければ意味は無い。

雁淵の放った銃弾は的を大きく逸れて後ろの土壁に黒い穴を開けるだけだった。

アランは雁淵の失敗をみて構えた状態で息を吐くと構えを直す。

「ストックは肩に押し付ける様に脇は硬く締めて、頬でストックを抑

える)」

一般的な長銃を構えるやり方を行うが残念な事に99式はそのやり方で構えられる事を前提していない為にサイトが覗けないと言う残念な事になっていた。と言うのもこの99式は視界を広く取らなければいけない航空ウィッチ用の銃でアランの構え方すると頬付けした方向が警戒し辛いと言う結果が出た。

これも元に頬づけしない事を前提に設計された銃の為にサイトも高く配置されている。

アランは仕方なく銃から頬を外して雁淵と似た構えをして銃弾を発射するが弾丸は的を逸れて雁淵よりも少しマシな位置に着弾した。

「2人とも魔法力が弱い……反動吸収が出来ていないわね」

雁淵もアランもその言葉に何処か思う所があると言う表情を作るがロスマンは気にせず次への指示を告げる。

「5歩分前に出なさい」

「は、はいー」「うしー！」

ユニットを操作して前に出る2人だがロスマンが少し驚いた表情を浮かべる。

低空でホバリングは簡単な技能ではあるが上半身を傾げずに前後の移動はとてもしゃないが難しい技能だ。実際に雁淵は上半身が少し傾いて移動していた。

ロスマンはその驚きを隠す様に撃つように指示を送るがやはり2人とも先程よりはマシな場所に着弾する。

ロスマンはさらに5歩、5歩と距離を縮ませながら撃つように指示すると2人とも同じ場所で着弾する。

「やった！ 当たった！」

「この構え方じゃこれが限度か」

喜ぶ雁淵に対してアランは落胆した雰囲気漏らす。

2人とも銃身から測れば相当な近距離で殴った方が速いのか？  
と思えるほど距離だった。

「まさか、此処までとは……」

ロスマンが歩いて近づきながら告げるとアランと雁淵が振り返る。

「あなた達は絶対的に魔法力が不足しています。私が教える基準に全く達していません」

「じゃ、じゃあ、テストは……」  
「不合格」

ロスマンの言葉に雁淵はなんとか食い下がろうとするが魔法力は先天的な物。後天的な事で頑張ろうとかなんとかなるものではない。

それでも雁淵は1週間の時間があると言って尚も喰い下がる。

ロスマンはアランの方を向くとアランも雁淵の様に食い下がる様な事はせずに短く1週間の訓練をお願いすると告げる。

その様子をニパと菅野が見ていた。

ロスマンはついて来る様に告げて2人を連れてきたのは基地にあるオベリスクと呼ばれる高い柱だった。

「たっかーい……クシユン」

「大丈夫か?」

見上げた雁淵がくしゃみをしたのを見てアランが心配して短い声を掛けるとその横で助走をつけたロスマンがオベリスクのとっぺんに目掛けて軍帽を投げる。

軍帽はオベリスクの先に付いている尖塔に引っかかる。

「あれを取ってきなさい」

「え。あ、はい! ユニットを取ってきます」

「飛んではダメです」

その言葉に雁淵が疑問を漏らす。

「じゃあ、どうやって……」

「手本を見せてあげます」

ロスマンがアランの前を通ってオベリスクに近付くと両手と両足をつけると手足の先から魔法陣が現れるとロスマンは四つ足歩行でオベリスクを登りながら解説を行う。

「魔法力を全身に回してそれを手足に適切に分配。触れている箇所の制御をキチンとすれば登れるわ」

「そ、そんなの学校では習いませんでした」

「つつ、魔法力って凄いな……道具なしでのぼれるのか……」

見上げながら感想を漏らす2人の前にある程度まで登ったロスマンが飛び降りて来る。

結構な高さからの飛び降りだったが魔法力で身体を保護しているので軽い負傷すらしていない。

「無理なら国に帰りなさい」

「帰るべき国がない俺はどうすれば良い？」

アランの言葉にロスマンが顔を伏せる。

失った訳では無く、消失したのだ。取り戻す事も帰る事もできない彼にとっては先程のロスマンの言葉は失言でしかない。

「悪かったわ」

「俺も意地悪だったな。それに……いや、止めよう」

何かを言い掛けたアランだがそれを飲み込むとロスマンが続ける。

「このテストに合格出来なければ、出撃は認めません」

「へ……」「だろうな」

「どうするの？」

「やります！」「やってやるぞー！」

2人はそれぞれの思いでオベリスクを見上げる。

「(そうだ！ やってみなくちゃわからない。やる前に諦めてちゃダメだ！)」

「出来るとか出来ないじゃない。やるんだ。でなきゃブーツと同じ空を飛べない！」

それぞれの決意を再確認すると雁淵が助走をつける為に後ろに下がるとアランは邪魔にならない様に道を開ける。

雁淵はアランが退くと同時に走り出してジャンプを行いオベリスクに張り付くが直ぐに魔法力制御を誤り剥がれてしまうが見ていたアランが受け止める。

「難しそうだな」

そう言いながら雁淵を地面に下ろして今度は自分だと言わんばかりに助走をつけて飛び上がるが魔法力で張り付く前にオベリスクに激突して地面に落ちる。

「発動のタイミングがシビアだ……」

「出来たら持つて来て」

それだけ言うとロスマンは離れて行くのを見ると2人はお互いに頷き合い交互に挑む。

それを離れた場所で見える者がニパと菅野だった。

「あれって本当にテストなのかな？」

「どつちにしても出来なきゃ終わりだ」

ニパの疑問に菅野が真剣な表情のまま答える前でアランがまたもオベリスクに激突していた。

## 第4話 強さの根幹

夕方。司令官のラルとロスマン、そして戦闘隊長のサーシャがラルの司令室に集まり、ティータイムをしながら雁淵とアランの訓練を見物している。

「面白い事を考えたな。だが、あいつらに取れるのか？」

「無理でしょう。でも、自ら無理だと理解させた方が本人の為ですから」

「せめてもの情けか……大尉はどう思う」

ラルは半分ほど振り向きながらサーシャに問い掛けるとサーシャは真剣に答える。

「雁淵さんの根性とやる気だけは十分以上にある様に見えましたが、魔法力が決定的に貧弱です。スタミナだけは有りますが戦闘には向いていませんね」

「アランはどう思う」

「アランさんは雁淵さん以上にタフな心を持っている気がしますが敵意も抱いている感じですね。そして雁淵さん以上にスタミナがありますがやっぱり魔法力が貧弱です」

「この最前線では使えないか……」

ラルの言葉にロスマンは短く、はいと答えた。

「うう……痺れるうう……」

夕食どきに訓練を切り上げた雁淵とアランだが、雁淵だけが手の痺れを訴えていると菅野が挑発する様に声を掛ける。

「なんだお前。食わねーなら俺が食ってやるぞ」

「た、食べますよー」

震える腕でスプーンを持ってボルシチを掬おうとするがスプーン1杯分を掬ったタイミングで腕が大きく動いてしまい、スプーンの中に入っていた熱いボルシチが斜向かいの菅野と向かい側のアランを襲う。



「おつとー」「アツチイ!!」

「ああ!! すみません!」

アランは寸前でパンを使ってガード、菅野は顔面にクリティカルヒットするとアランがため息を吐きながら席を立つと椅子を持って雁淵の隣に移動するとスプーンを奪う様に雁淵から取り上げる。

「えつと……」

「ボルシチでいいか?」

「え?」

なんの事だと呆気にとられる雁淵にアランはボルシチをスプーンで掬うとそのスプーンを雁淵に突き出す。

巷で言う『はい、あーん』と呼ばれる物だが肝心のアランは涼しい顔だ。

それを見たクルピンスキーが口笛を吹いてアランに笑顔で『やるねー』と投げ掛けるとラルやサーシャ、菅野やロスマン以外は顔を真っ赤にする。

「どうした? 食わねーのか?」

「いや、自分で食べれますから……」

「その腕で言っても無駄だ。安心しろ、無茶して自分で飯が食べませんって奴に何回もした事があるから」

「いや……でも……」

恥ずかしさから受け取らない雁淵だが、アランが溜息を漏らす。

「折角、シモハラが美味しい飯を作ってくれたんだ。冷ましたらモツタイナイし、シモハラにシツレイだ」

そう言われても何も言い返せなくなった雁淵は黙ってアランに食べさせて貰ってこの日の食事を終える。

「(偽伯爵以上に厄介だわ……)」

ロスマンは内心で頭を抱えてこの日の食事を終えていたのを誰も気付く事は無かった。

2日になると2人はそれぞれで別の面を使ってオベリスクに登る事にした。

アランも魔法力の発動に慣れたのか昨日の様な激突は無かったが

それでも雁淵よりは登った距離を考えると遅れている。

それでも必死になつて雁淵に追い付こうとアランが頑張っているが魔法力の制御が上手くいかないのか地面に落ちてしまふと向かい側の面から登っていた雁淵が鳥に襲われてオベリスクから落下してしまう。

「2人とも大丈夫!？」

「いたた。あんな所に鳥の巣が……」

「千鳥だな。巣立ちが近付いているみたいだ」

オベリスクから少し登った場所にあるレリーフが彫られた台座に千鳥が巣を作っており、雁淵はその巣に近づいた事で親鳥から敵だと判断されて攻撃を受けた様だった。

「あれが千鳥か……」

アランは初めて見た千鳥を不思議そうに眺めているとニパから少し休憩しようと提案されて4人はオベリスクの根元に腰を下ろす。

「オメーら、まだわかんねーのか？」

腰を下ろしたタイミングで菅野が突然に話し始める。

「ロスマン先生は諦めろつて言ってるんだよ」

「でも、てっぺんの帽子を取ってくれば」

「バーカ。あんなのお前が取れる訳ないだろ」

「決めつけんなよ。出来ないと決まったわけじゃねー」

「あ? なんだと!？」

「やんのかコラ! やってやるぞ!」

「やめなよ、2人とも」

喧嘩に発展しそうな2人をニパと雁淵が必死になつて止めると菅野もアランも同時に謝るとニパが菅野も出来るのかと聞くと菅野はラクシヨーだろと自信満々に助走してオベリスクに飛びつくど雄叫びを上げながら登って行くが暫くするとレリーフが彫られた根元の台座にワンバンして地面に落下する。

「こんなの出来たつてなんの役にも立たねーよ!」

「それを決めるのもお前じゃねー。俺だ!」「そうです。やらなきやダメなんです」

訓練を再開した2人の菅野は勝手にやっつろと捨て台詞を吐きながら何処かに行ってしまうとニパは菅野と雁淵を交互に見てから菅野を追いかけて行く。

「(やっつやるぞ。俺たちは何も出来ない奴じゃない!)」

アランの手足に自然と力が入るがその結果は散々な物で雁淵よりも高く登れないでいたまま夜を迎えてしまう。

雁淵はアランの向かい側で仰向けになりながら洗い息を吐いている中でアランは登ろうとオベリスクに挑もうととしていたがニパに時間が時間だからと止められてしまうがアランは玉の様な汗を垂らしながら首を振って否定するとまたも登り始める。

ニパは心配そうにしながらも笑顔で頑張つてと告げると雁淵を連れてサウナにいてしまう。

「うお! つつー……もう1回だ!」

「少し待ってくれないかしら」

突然の言葉に振り返ったアランの前にロスマンが現れると漸く墜落した機体の引き上げ作業が終わったので機体の説明をして欲しいと言われて大型格納庫に連れて行かれる。

大型格納庫の中では天井から照らされる月明かりを受けてグロスシーブルーを淡く輝かせる機体が静かに佇んでいたが、巨大なプロペラがあったであろう場所は水圧か水との衝突で折れてしまったのか機体の脇に長大なプロペラの翅は8枚積まれている。

そんな機体の前にラルとサーシャが持ち主であるアランを待っており、アランが現れると説明を急かしてくる。

アランも記憶を蘇らせながら説明を開始する。

「こいつはF5UフライングパンケーキのP型だ。損傷機ですら解体が難しい程に頑丈な機体に12.7mm機銃が6門と5001bs爆弾か10001bs爆弾、同じ重さの増槽を2つ積めるがP型は背面にパルスジェットエンジンを1発背負える」

「主翼は何処だ?」

「円盤翼の主翼は胴体と一緒にだ。だから機体の9割が主翼であり胴体だ」

「こんな形状で飛べるなんて……」

「強い向かい風の時にエンジンの出力を抑えたら空中で停止できますよ。まあ、俺から言わせて貰えればストライカーユニットで飛べる方が驚きです」

どっちもどっちだろうと言いたい会話だが、向こうの世界でストライカーユニットなど開発しようものなら未亡人生産機ではなく、傷疾軍人量産機になってしまう。

「こいつは陸上機なのか？」

「違う」

ラルの質問に即答するアランに今度はサーシャが質問を投げる。

「じゃあ、艦載機？」

「それも違う」

少しの間が出来るとロスマンが話そうとする前にアランが口を開いた。

「此処で皆さんに問題です」

アランがF5Uを撫でながら問題を振る。

「往復4000キロ先の基地を爆撃する爆撃機を400キロ分の燃料を使って空戦を行う航続距離約3000の戦闘機が護衛するにはどうすればいいと思う？」

そう言われたロスマンが情報を脳内で整理し始める。

攻撃目標は2000キロ先に存在し護衛機は3000キロの航続距離。  
純粋に同じ基地から出撃した場合は空戦で消費される燃料を考えると片道護衛から少しおまけが付く程度だ。

これを打開する方法としての常套手段の1つは……

「無理ね。途中で補給基地を作らないと」

「その補給基地が破壊された場合は？」

その情報追加にサーシャが答える。

「前線基地かより距離の近い基地から発進して現地で合流」

「基地を作れない立地だった場合は？」

その情報にロスマンがさらに情報を書き換える。

護衛機の最大航続距離は戦闘分を除いて2600キロ。

4000キロ先の基地に行くには片道2000キロ掛かる。間違  
いなく航続距離不足だ。

「敵の迎撃機の航続距離は？」

「約1000から1500キロ」

つまりは最低でも500キロの空白があるとわかった途端に今ま  
での情報のピースが集まり、1つの結果が導き出されるがそれは無理  
だと思いつつも答える。答えが導き出される。

「500から1000キロを爆撃機で爆弾ごと空輸すれば航続距離は  
足りるわ。けど、そんな事を……」

「やったんです。こいつは護衛機が片道とちよつとしか護衛出来ない  
距離の目標を叩く爆撃機を護衛する為に開発された機体です。航続  
距離不足は爆撃機に吊るされながら敵の勢力圏に入ってから切り離  
す事で解決しました。こう言った機体を寄生機と呼んでいます」

その説明を聞いたラルがもう1つの疑問が生まれる。

「パルスジェットエンジンで速度を得るにしても離陸出来るのか？」

「その為の円盤翼です。機体の9割が主翼と言う事は機体の9割で揚  
力が産める訳で短距離離陸機能が高いんだ。しかも、専用のプロペラ  
で更に短距離離陸機能を強化してある」

「馬力は？」

「ターボ過給機付き1600馬力級レシプロエンジンが2基」

「双発でネウロイのビームを躲せる機動性にこのサイズか……」

ラルの呟きはアランの世界とこちらの世界では兵器開発技術に差  
がある事を否応なく自覚させられる。

ブレッドのスピットファイアが改造機でも、使用されている技術は  
数年先と言うレベルを超えており、F5Uの様な機体は対して此方  
では研究していると言う情報や噂さえされていない全くもって未知の  
技術。

人間は想像を超える物には言葉を失うと言うが正しくその通り  
だった。

「ストライカーズに入る前の部隊は？」

機体について粗方は語ったと思っっているアランにラルがアランについて聞き始める。

ラルは報告書やメモを読み返しているとアラン自身の情報が不足していると思っただからだ。

「原隊は第332戦闘群。殆どが黒人で編成された戦闘機隊だ」

口外に差別について話される事になった事にサーシャが止めようとしたがアランの方が早かった。

「そこで俺は様々な任務に従事したが1番記憶に残っているのは白人達の爆撃機部隊を護衛する任務だった。最初は有色人種に護衛されていたって聞いた奴らは険悪感を露骨に出していたよ」

「そんな……」

ロスマンが声を漏らす。

命懸けで護衛をした部隊にお礼を言われるどころか険悪感を露わにされるのは辛いと言うものではない。

それで良く性格が歪まなかった物だと尊敬に近い感覚を受けているとアランが続ける。

「そんなある日だ。俺たちが爆撃機の護衛部隊から外されると聞かされた爆撃隊のとある隊長が俺たちを掩護機から外さないでくれと言ってくれたんだ。自分達の能力が認められたって嬉しかったよ」

そう言っって思い出し泣きをするアランにロスマンは彼の心の強さを垣間見た。

酷い待遇の中でも理性を持って耐え抜き、自分達の実力を認めさせる事で事態の改善を求め、能力が認められた。

諦めずに戦い続ければ報われる。正しい手段で戦い抜けば認めらるそれをわかっているからこそ戦うのだ。

それが彼の心の強さの根幹なのだ……

第5話 I, I'll get on a broom  
of magic and meet.

試験開始から3日目。

雁淵とアランは赤と黄色の2色に分かれたオベリスクの赤い部分、つまりは1段目で足踏みをしている状態だが朝から始めた雁淵はもう直ぐで黄色との接続部となるレリーフまで届きそうであランは半分を少し超えた辺りまで登れる様になっていた。

そんな2人よりもスポットを遠く離れたガリアのパ・ド・カレーの基地へと移る。

「ブレット少尉！ 通信です！」

パ・ド・カレー基地に勤務する兵士の1人がフライト直後の簡易点検を行っているブレットに声を掛ける。

「何処からだ」

点検の手を途中で止めるとボルトを破棄書類を折って作った箱の中に入れて立ち上がる。

「オラーシヤ帝国の502基地です」

それを聞いたブレットは獣じみた目を向けてきたラルの顔を思い出して溜息を吐くと兵士に連れられて大型通信機が詰められた部屋へと赴くと受話器を握る兵士から受話器を受け取る。

「此方はガリア軍司令部。パ・ド・カレー基地のブレット・フィリップ少尉です」

「第502統合戦闘航空団司令のラルだ」

「やっぱりかと顔を手で覆うと次の言葉を予想する。」

「突然で悪いが502に來ないか？」

「予想通り過ぎて笑うしかない……」

乾いた笑い声が通信機から聞こえたラルはうつすらと笑うが直ぐに顔を引き締めて本題へとはいる。

「君に連絡を入れたのはスカウトもあるが別の案件もある」

「502に行かないが別の案件は中による」

〈それは残念だ。書類が偽造だとバレる前に門前払いされたから直接と思っていたのだが……それよりもアラン・レッドフィールド伍長を知っているか?〉

だろうね。とブレッドが溜息を通信機が拾わない様に器用に吐く。ブレッドも501解散から色々政治の荒波に揉まれて今があるからだ。少なくとも外部の書類は一部を除いて門前払いされる位置に立っている。

〈よく知っている。男の中では一番に噛み合う相棒だった〉

それを聞いたラルは『ほう……』と期待を滲ませる声が聞こえるが何処か残念だと言う響きも含まれていた。

〈何かありそうですね。そっちに出ました?〉

〈ああ。F5UPフライングパンケーキという戦闘機を知っているか?〉

〈フライングパンケーキ……完成していたのか……〉

その質問にブレッドが驚きの声を上げる。

〈知っている。と言うのは少し違うな。資料でXF5U……試作機の情報を知っている。円盤翼の機体にアリソンエンジンのどれかが2基だったかな?〉

〈アリソンエンジンなのか……〉

ラルの言葉にブレッドが首を傾げる。

〈実機が破壊されてるんですか?〉

〈いや、あるんだが整備用ハッチからじゃ何がなんだかわかりにくいのとハニカムのバルサ材を挟んだアルミが頑丈過ぎて解体が出来ない〉

その言葉を聞いてブレッドはキャニーに使われたチャンスポート社製の機体達を思い出すと苦い顔を浮かべる。

〈チャンスポート社の特許ですからね。それに円盤翼機は構造でも頑丈になりますから。で、聞きたいのはパイロットのアランについてじゃないですか?〉

〈そうだ。向こうではどんなパイロットだったんだ?〉

〈いいパイロットでしたよ。特に防衛戦と護衛戦では相当な戦果を



挙げていて、損傷して途中帰還する爆撃機がMig5機に追われた時は1機で追い払った位です。タスキーギ・エアメンの逸話に偽り無しと再度理解させられました」

そんな評価を貰っているアランはラルは見ている前でオベリスクから落下している。

「彼の魔法力が低くてな。実戦に出せない。ストライカーズのパイロットだと聞いて期待していたのだがな……」

それを聞いたブレッドが笑い声を上げる。

「あんたは何もわかっていない。彼らは戦う事で輝く。それも戦火の光で一際輝くブラックダイヤモンド。1回でもいいので実戦に出してみては？ 期待をいい意味で裏切ってくれますよ」

そういつた瞬間に基地の警報が鳴る。

「出撃です。ガリアには残党がいるので。それと伝言をお願いします」

伝言を言い終わるとブレッドは定型文で終わりの挨拶をして受話器を兵士に渡すと走って行った。

ペテルブルクでは受話器を置いたラルが窓からアランを見ながら呟いた。

「ダイヤを火に焚べたら一瞬で燃え尽きるぞ……」

アランが赤い部分の6割に達したタイミングで地面に落下した。

#### 4日目。

雁淵もアランも考えたのか靴を脱いで登り始める。

直に触れれば魔法力の操作に想像だけでなく感触の情報も足せる。人間は想像するよりも触れる方がより正確な情報が手に入る。

これにより2人は大きくその高さを伸ばすがアランはスタートラインが雁淵より後ろだった為かようやく2段目のレリーフに手が掛かるがレリーフの凹凸を上手く処理出来ずに落下する。

そんな事を繰り返した日の夜に2人は休憩という事で基地の端に

来ていた。

「そう言えば、どうしてレッドフィールドさんは戦いたいんですか？」

その言葉に口を開こうとしたアランだが、直ぐに閉じてしまう。

彼が空を飛びたかったのはただの黒人で終わりたくなかったから、そして自分達に能力があるのだと認めて欲しかった。何よりも黒人だからと言う理由で差別を受けなくする為に戦っていた。だが、この世界ではこの理由を使う事は出来ない。

ロスマンからの試験も出来ない、必要無いと言われた時に黒人だから出来るわけがないと白人達に言われ続けていた時の事を思い出したからだ。

「すまない。少し考えさせてくれ」

それだけ言うとアランは雁淵の前から消えるのを雁淵は黙って見送る事しか出来なかった。

5日目は雁淵が大きな行動を取る。

「どうしたのひかり。なんで食べないの？」

出された朝食を食べない雁淵を心配してニパが声を掛けると下原も心配した表情で顔を向ける。

「えへへ、ちよつとでも軽い方が登れるから」

「おめーは超弩級のバカだな」

照れ笑いを浮かべながら語る雁淵に菅野のツツコミが突き刺さる。「飯は食って置いた方がいいぞ。特にモーニングはその日の身体を作る基本になる」

昨日の事を忘れた様にいつも通りのアランに雁淵少し不思議に思いつながりも訓練を始めるとアランの警告通り、その日の雁淵は散々な結果となり、逆にアランは2日目レリーフの攻略は腕力で黙らせた。

6日目。

「やっぱ、沢山食べないと」

流星の菅野も引くレベルでがつつく雁淵にアランは甲斐甲斐しくおかわりを注いで上げる光景が朝一から始まりいよいよ試験も後が無くなってくる。

雁淵の5日目の失敗とアランの筋肉により2人は同じ位の高さま

で登っているが雁淵は元々が少ない魔力をほぼ連日の様に使い果たしている。目に見えない疲労が重なっており、挑戦する度にその見えない疲労は雁淵を襲う。

アランもそれがわかつているのか雁淵の登る面の隣を登り、気に掛けている様だった。

そんな隣の面で赤い部分がもう直ぐ終わるといふ位置で雁淵が止まるとニパの慌てた様な声を聞いたアランが使い魔の耳と尻尾は無くなった雁淵が落ちるのを見て素早く動く。

「間に合えー！」

手を離して跳ねる様に面と面を繋ぐ角に足をつけると同時にジャンプを行い空中で雁淵をキャッチすると地面に落下するアランは雁淵だけでも守ろうと自身の身体に寄せて背中から落ちようと態勢を変える。

そして地面に落ちた瞬間にアランの背中が一瞬だけ光ったのを窓から見ていたロスマンが早歩きで廊下に出て行くのとアランがニパと菅野が近づく足音を聞いて目を開けるのは同時だった。

「い……痛くない……」

相当な高さから相当な速度で落下した為に骨折すら覚悟したアランだったが待っていたのは無傷な身体とアランに抱かれて眠る雁淵の間抜けな寝顔だった。

「寝てやがる……」

「部屋に連れて行くか」

アランは雁淵をお姫様抱っこで部屋へと運ぶ為にオベリスクから離れて直ぐに別の出入り口から出て来たロスマンがアランが蹴った場所を見て目を細めていた。

その目は何処か不可解な物を見ている様だった。

「今からあの機体を空輸して欲しい」

雁淵を部屋の持つていくとサーシャから司令室に来る様に言われ

たアランに待っていたのはF5Uの空輸依頼だった。

アランは何を言っているんだという様な顔をするがラルが説明を開始する。

F5Uの解体を行って技術を手に入れようと思った方がいいが502の設備ではF5Uの解体はプロペラシャフトが限界である事が判明した事でより設備が豊富なりベリオン合衆国に送る為にまずはムルマンまで空輸した後に輸送船でブリタニアを経由してベリオン合衆国本土に運ぶと言うルートが取られる。

その為にまずは502の基地から輸送機で牽引しながらF5Uを飛ばしてムルマンに滑空着陸させると言うとしても無い物だった。

そしてこの作戦の問題は空輸を行うF5Uの操縦が出来るのはアランただ1人と言う事だった。

「今から行けば夜に戻れる。休憩がてら空を飛べ」

「飛ぶというよりも滑るなんですが……」

そんなやり取りがありつつも空輸を受けたアランは準備を終えたF5Uに乗り込む。一部は油圧で動く為に其処は腕力で動かすタイプに変更され、プロペラが無いと構造上は飛べないと言う問題は輸送機に引つ張られた際にシャフトの無いプロペラが風車の様に回る事で解決させる。

そして何よりも異様に長い牽引ロープが目を引いた。

これは下手をすると輸送機より先にF5Uが飛び立つ可能性がある為に輸送機が離陸して暫くした後には飛ぶ様にする為だ。

空中衝突などしてしまえば輸送機が叩き折れるのは目に見えてい

る。そして飛び立った輸送機とグライダー化されたF5Uだが基地からはその光景が凧を上げる輸送機と言うシニールな光景が出来上がっていた。

F5Uが輸送機よりも低空を飛んでいれまだマシンだったのだろうか……

アランは1000キロの旅路が始まると502基地からは下原とジョゼの2名が護衛に着くが途中で航続距離の関係で別の部隊の

ウィッチが護衛に着く。

途中でラルから渡されたブレッドからの伝言が書かれた紙を開くと中に書かれた言葉はこの世界に來た事を歓迎する言葉と短い英文1つだった。

I, I l l g e t o n a b r o o m o f m a g i c  
a n d m e e t .

その英文にアランは決意に満ちた目でムルマン基地を眺めていた。

## 第6話 寒空に羽ばたく小さな翼

輸送機でペテルブルクに戻ったアランは報告を忘れて、直ぐにオベリスクに挑む。

ブレッドの伝言。それを果たす為に見つめる彼の目にはオベリスクの先に引つ掛けられた軍帽では無く、上昇するブレッドのスピットファイアを幻視していた。あの場所に行く為にはアランは腕に力を込める。

そして自然と足はオベリスクから離れ、這う様に両手だけでオベリスクを登って行く。

あと少しと言う所でアランは滑り落ちると落ちた場所にロスマンが雁淵と共に立っていた。

「もう少しなんだ……もう少しで……」

珍しく荒い息を吐くアランがもう一度挑戦しようとするロスマンが肩に手を掛ける。

「少し付き合いなさい」

そう言われて渋々と言った様子でロスマンの後に続くアランに雁淵はもう直ぐだったですねと労いの言葉を掛けるがその言葉は耳に入らず心は空に向けられていた。

そんなアランだが、ロスマンに連れてやって来たのは雁淵に戦う理由を問われた場所だった。其処でアランと雁淵はロスマンからどんなウイツチ・ウイザードになりたいか聞かれる。

「どんな……お姉ちゃんみたいにみんなの役に立つ立派なウイツチです！」

雁淵が決意に満ちた目で告げるがアランは目を伏せるがロスマンは川の方を見ながら告げる。

「それは無理よ」

「なんですか!？」

「私は前にも貴方の様にどうしても戦いたって子を教えた事があるの。真面目でやる気は凄くあったんだけど……」

「魔法力が弱かったんですか……」

「そう。その子が戦闘に向いていなかったのはわかっていた。でも、私は熱意に負けて出撃を許可した」

「墜ちたのか……」

アランの言葉にロスマンは振り返る事無く続ける。

「2度と飛べなくなつたわ……戦場では能力の無い者は本人も周りも悲しい思いをするのよ」

「でも、その子は悲しかったのかな……」「そいつは悲しくないんじゃないか？」

2人の言葉にロスマンが気付かされた様に身体をビクリと跳ねさせると振り向き、アランに言葉を投げる。

「アランさんは……どんなウィザードになりたいの？」

「どんな……か……わからない……ただ、言えるのはただの黒人に戻りたく無い、白い隣人が待つている空を飛びたい。そんな感情だけです」

「具体性に欠けるわね」

「飛行士を目指したのも空を飛ぶ飛行機に憧れたからです。男なんてそんな理由で命を張る愚か者の集まりです」

雁淵と比べれば目的意識や具体性に欠ける言葉だが、何か深い意味が隠されているとわかるがそれをロスマンが汲み取れる筈が無かつた。

彼らにとって空を飛ぶ。飛べると言うのはとても大きな意味を持つ。彼の同期が候補生の資格を剥奪された時に飛行機と共に地面に衝突してその命を終わらせている。

それを彼の言葉でしか知らないロスマンにとっては彼らが空に抱く特別な感情はわからない。だが、彼の目からは飛びたい者、飛べる者、空で戦いたい者にとって、飛ぶ事が、飛んで戦う事がどれだけの意味があるかは読み取れてしまった。

「先生。能力が無い者は飛べない事は知っている。能力が無いならすっぱり諦めよう。でも、飛べる可能性があるならやり抜きたい！」  
「私も！ 私も他の人の迷惑になるなら扶桑に帰ります。でも、ほんのちよつとでも戦力になる見込みはあるならここに居たいんです！」

「それなら……」

「わかってます！ 帽子を取るんですよね！ 最後の最後までやらせて下さい！」

「わかってる！ 帽子を取ればいいだろ？ 最後の最後まで足掻かせて下さい！」

2人の訴えに硬い表情だったロスマンが崩れる。

「もう好きにきなさい」

「はい!!」

7日目最終日。

風切り音が聞こえる程の風量を誇るこの日は2人の居残りを賭けた最終日だった。

2人とも挑戦すれば黄色の部分まで登れる様になったが上の方は風が強く、2人は登る以外に張り付く為の魔力を使用する事となる。

そんな2人の片方。雁淵が風が負けて吹き飛ばされてしまうが寸前で両足について逆さ吊りになりながらもへばり付く事に成功する。

「大丈夫か！」

「巢は無事でーす」

「巢は……いや、無事で良かった……」

上の方でホツと胸を撫で下ろしたアランの前で何とか腹筋と足の力だけで上体を起こして両手と両足で張り付くと風に負けて吹き飛ばされてしまう。

「クソ！」

風に煽られて頭から落ちそうな雁淵にアランが即座に飛び降りると足を掴む。

「うおらー！」

片手だけに魔力を集中して張り付こうとするが流石に2人分の重さは貼り付けられずに下に滑り降りてしまう。

「上の方は風が強いな……助けないが出来る2人でも無いしな……」



「そうですね……」

憎らしげに上を見上げながら話したアランに雁淵が頷く。

「おい。この風の中じゃ無理だ。ロスマン先生に言ってもう1日「ダメです。延長は認めません」

「ロスマン先生……」

「さあ。2人とも時間が無いわよ」

「はいー!」「おうー!」

2人は登り始めるがやはり登り方に差があるせいか雁淵の方が速く黄色の部分に突入した瞬間からロスマンの指導が入る。

「雁淵さんは止まって。足を離して」

「ええ!? 落ちちゃいます!」

「いいから。足に掛けていた魔法力を両手に集中なさい!」

ロスマンの指示にニパと菅野は懐疑的だったが雁淵を追い越すアランは雁淵なら出来ると何処か確信しており、自分の腕だけに魔法力を再び集中させる。

「出来た! 出来ましたー!」

「今度は左手を外しなさい」

「うええ!!」

「貴方に全身に回すだけの魔法力は無い。でも、一箇所に集中させることは出来る」

ロスマンの言葉を信じて雁淵が片手だけで張り付くとニパが賞賛の言葉を上げる。

「魔法力を左手に込めて、落ちる前に手を入れ替えて、手だけで登りなさいー!」

「はいー!」

そして、ロスマンの指示に合わせて片手だけで登る。確かに全身に回せるだけのリソースを持たない雁淵に取ってこの試験をクリアするには一極集中と言う絡め手に頼りざるを得ないといつの間にか現れたラルが語る。

この方法は既にアランがイメージの問題だったとは言えども自力で到達した方法だが、こんな絡め手でクリアしたとしても後が辛いと

も語るがロスマンは雁淵の諦めが悪すぎると一言だけ告げる。

「そうか。不肖の弟子か」

ラルが微笑みを浮かべながら登る2人を見上げて暫くすると雨が降り始めるが雁淵もアランも雨に打たれながらも少しづつ確実に上がっていき、遂にアランがもう少しで頂上と言う所まで行く。

「アラン！ もうちよつとだよ！」

ニパが声を掛けた瞬間に風が強く吹いた事でバランスを崩してしまったアランが最後の最後に腕を離してしまい落下するが寸前に足の指先だけに魔法力を集中させながら足を突き出した事でへばり付く事に成功し、頂上近くの斜めになっている場所に指を掛ける事に成功する。

それでも、最後の最後が登れなずに目を瞑ったアランが何かを感じて目を開けると同時に上を見上げる。

鉛色の空を背にアランは見た事の無いがスピットファイアmkIXを履いたブレッドが手を差し出しているのを幻視する。

「ぬ、ぬおああああああ!!」

絶叫を上げながら腕に力と魔法力を掛けると全身を指の力だけで押し上げる、左手を突き出す様に振る上げた事で斜めになっている場所に手が付いた事で吸着力が復活。その後は魔法力を使用して全身を頂上まで押し上げると頂上に立ち上がり、空を見上げるとブレッドが雲の上に登って行くのを見るとアランが黙って右腕を天に向かって突き立てる。

「寒くて手の感覚が無くなって来た……」

雁淵は雨の打たれた事でバットコンディションもバットコンディションだがそれでも登り続ける。それしか道が無いからだ。同じ境遇のアランが成功させた。今度は自分の番だと腕に力を込めて登っていると言報とラルの放送が全員の耳に入る。

「ラドガ湖より大型ネウロイが出現。総員緊急出撃！ アランも出る！>>」

「こんな時にー！」

アランが飛び降りると菅野やニパより速く格納庫に飛び込み、ユ

ニットの発進促進装置に発進促進装置に掛けられている自身のP-40を履いて魔法力を込めるが何処か回転が安定しない。

ニパと菅野が心配そうにするがアランが先に行ってくれと手で合図した事で先に離陸する。

2人が滑走中に機体の整備はスオムス仕込みの整備員が万全に行っている為に整備不良な筈がないとアランが更に魔法力を込める。

これにより機体内部で何かが発射する音と何か割れる音が聞こえるが回転は安定する。

「武器は！」

促進装置に武器がない事に気付いたアランが叫ぶと兵士の1人が預けた筈のナイフと拳銃をベルトやホルスターと一緒に渡すと同時にF5Uのコクピットに入っていたM1887の内部を強化して無煙火薬対応化した10ゲージ仕様の物から銃床を外して手元だけをソード・オフ仕様に改造した物を更に連装化したアランの自作銃が差し出される。

「弾薬はベルトとチューブ弾倉にあるだけで40発か……一戦するだけならマシだな！」

それだけ言い残すと格納庫から滑走して直ぐに空に上がるが戦場に向かう前に未だに張り付いたままの雁淵に菅野がオベリスクの上をホバリングしながら叫ぶのを見つけるとホバリングで様子を伺う。

雁淵がオベリスクをダメじゃないと叫びながら登り切るのを見ると雨は上がり、雲の隙間から漏れ出る日光が雁淵を照らす。

「速く行こう。敵は直ぐそこまで来てるぞ！」

それだけ言い残すと菅野が消えた方向へとアランは飛び去って行くのと直ぐに雁淵とロスマンが追い付き、アランはロスマンの斜め右後方に付き、デルタ編隊を作る。

「アランさんは大丈夫？」

「問題無い！ P-40は乗り慣れた機体だ！」

ストライカーユニットと戦闘機は全く違う筈なのだがアランは戦闘機のP-40に乗っているかの様な感覚に何処か確信めいた感情を抱く。

「行くわよ！」

「了解!!」

欧州を寒空に小さな翼が2枚。新たに並んだ瞬間であった。

## 第7話 寒空に銃声と翼あり

ロスマンを先頭にして、雁淵と並んで飛ぶ事でデルタ編隊を組んで戦場へと進むアランだが、ユニットの基本性能が低い事と合わさって、P-40の調子がおかしく、編隊に遅れ気味だった。

「(機械的問題……じゃない！ このノッキングの仕方は燃焼系の異常に似ている……その中でも燃料不良に近い！)」

整備不良により出力低下と言う奴ではなく燃料の質が悪いが故の出力低下に似ていた。

黒人部隊であるが故に渡される燃料質は他の白人部隊に比べると悪い物が回される事もあった経験から燃料不良による異常燃焼や燃焼不良の変化には敏感になっていた。

「ストライカーユニットにも燃料不良とかあるのか……」

「それは無いわ。基本的には魔法力不足による出力低下はあるけど、今のひかりさんや貴方には関係無い話よ。もう少し集中してみなさい」

そう言われて目を閉じて足に意識と魔法力を回すと回転数が徐々に上がっていき、編隊に追い付くと遠い空に黒と赤の三葉虫の様な見た目をした物体。ネウロイが見えて来る。

ネウロイは可動域であろう全身を波の様に動かして空を泳ぐ様に進んでいる。

「ネウロイ発見！」

「菅野1番！ 出る！」

先行して出撃したサーシャがネウロイを発見すると菅野が真っ先に突っ込み、僚機である二パが続く。

「前衛は攻撃！ 中尉は援護を！」

「了解」

サーシャの指示を受けてクルピンスキーは自身の手を持つMP43から7.92mmの銃弾が放ち、ネウロイの気を引きつけると菅野がバレルロールを行いながら接近して13mm弾を命中させて離れる。

「先行し過ぎだよ！」

菅野への追撃をさせない為にニパがMG42の連続射撃で菅野から気を逸らしながら叫ぶ。

菅野が離脱を行ってから斜め後方に位置取ると連続射撃で装甲を削り、クルピンスキーも斜め下方から張り付いても連続射撃を浴びせるとニパは微速で横にズレながら連続射撃を加えてコアを探すが見つけられずにいるとロスマンを先頭に雁淵とアランが戦域に到着する。

「ひかり！ やったんだ！」

「ふん。おせーんだよ」

ニパも菅野もその声に喜色が混じる。

「ひかりさん。貴方はお姉さんになれないわ」

雁淵は2人の前で狙撃をしようと銃を構えるがロスマンから止められて教練が始まる。

その間も戦闘は続き、菅野が逆さになりながら捻りを加え続けてビームを回避し、ニパの側転をしながら移動してビームから逃げるとフリーになったクルピンスキーがすかさず攻撃を加える。

「攻撃を避け続けて、弾が当たる距離まで接近するのよ。あなたはあなたになりなさい」

ロスマンからの教練。

それは憧れを追うのは良いが、憧れになっではいけないと言う物だった。

人間には向くと不向きがあり、当然ながら姉妹と言えでも違いや差はある。

ロスマンは雁淵だからこそ求められる物、出来る物があると語る。

雁淵はその言葉に最初は呆気にとられた様な表情を浮かべていたが真意を得ると笑って返事を返し、真剣な表情でネウロイに視線を向ける。

ネウロイはロスマンと雁淵、そしてアランに気付いてビームを放

っ。

「右！」

雁淵は身体を右に傾けて第1射を回避すると同時にそのまま右に移動して第2射も躲す。

アランは飛行機乗りとしての勘で当たらないビームだと判断して回避行動を行うこと無く直進すると頭上ギリギリを1本のビームが掠める。

「アランさんも攻撃を躲して接近しなさい。貴方の銃は散弾銃でしょ？」

「了解！」

アランの目の前にビームが飛んで来るがそれをアランは上昇して回避すると同時に身体を捻り様に動かしてネウロイに背中を向けながら上昇すると2発目が飛んで来るがそれを背面急降下で回避する。同時に態勢をネウロイの方向に進み易い様に変える。

「左！」

アランが急加速した事で撃墜は難しいと判断したネウロイが雁淵に狙いを変えるがロールをしながら左に移動された事で空を切る。

雁淵は紫電改チドリが自分の意のままに動く事を戦闘中だと言う事を忘れて喜ぶとネウロイは他のウィッチ達を狙っていた部分を雁淵に集中させる。

点で落とせないなら面で制圧して確実に各個撃破を行う。

今までは基本的にネウロイは全ての目標や危険度の高いウィッチや機体を狙う傾向にあったが今回のネウロイは明らかに危険度は低いが確実に落とせるウィッチを確実に落とすの来た。

「マズイー！」

その変化にベテランだった誰もが意表を突かれて動けず、新人の雁淵は突然の事と隙を突かれた故に固まってしまいがそんな雁淵とビームの間に同じ新人のアランが飛び込む。

アランは新人ではあるが空戦や飛行時間は誰よりも長く、ネウロイの傾向も知らず、落とせる敵から確実に落とし戦術も知っているところの状況下でも問題無く動ける唯一の人材だったが問題があった。

「貴方はシールドが！」

ロスマンの叫び声がアランの耳に入る。

「ああ。そうさ。俺はシールドは張れない！」

それでも、護衛戦闘機としての性か射線に飛び出してしまったアランは腕をボクシングで言うクロスガードの構えを作り、防御姿勢を作ると目をネウロイのビームを睨み付ける。

誰もが当たる。

「なんですか……あのシールドは……」「見た事の無いシールドだよ」「なんだよアレ……」「え、どういうこと……」

そう確信した瞬間にアランの目の前に一般的なウィッチから見ても奇怪なシールドがアランと雁淵を守る。

それを見た、サーシャ・クルピンスキー・菅野・ニパがそのシールドを見て言葉を失う。

「あり得るわね……」

ただ、ロスマンだけがそのシールドを見て表情を崩さなかった。

通常のウィッチ達が張れるシールドやブレットなどの特異型と言われるシールドも模様などの差はあれで形状は大きな円の淵を歯車のように小さな円が回ると言う物だが、アランが目の前で張ったシールドは小さなシールドに余りにも巨大なシールドが2つ。規則的に高速回転して大きなシールドを作っている。

「それよりも、そのサイズはおかしいだろ!!」

菅野が形状よりもそのサイズに突っ込む。

正確な数値はこの際は伏せるが現在確認されている最大サイズのシールドを張れる宮藤芳佳のシールドを越しサイズのシールドだ。しかも、特異型か通常型のシールドかの証明として挙げられる防ぎ方も一般的な受け止めて端から出て行くタイプでもブレットの様に触れた先から消滅させる訳でも無く、触れたビームを中央の小さな円に集めて吸い込む様な消し方だった。

「やっぱり、特異型……それにあの文字は……」

特異型のシールドと言う事実と大きなシールドに描かれた文字と小さなシールドに描かれた文字を見てロスマンが呟く。



「俺が守る」

クロスガードの構えを解いて銃を構え直しながら雁淵に言葉に投げる。

「お願いしますー！」

雁淵はお礼を言うよりも先にそう話すとネウロイへと接近を開始するとアランもその後を追う。

雁淵はビームをロールで回避しながら攻撃が当たると思った距離まで近付いて銃を構えるが片方の目は閉じており自分の身を危険に合わせてでも当てると言う意気込みを感じていたが雁淵の心に恐怖は無かった。

「ひかりー！」

雁淵の瞑った目の方角からビームが迫るが雁淵はビームにもニパの声にも気付いていないのかそのままネウロイに意識を向けている。いや、そもそもその話で雁淵はビームを気にしていない。

何故なら……

「無視しないでくれますか？」

アランがシールドで雁淵を守りながら手に持つ改造されたM1887から2発の鹿などの中型生物を狩る為に使われるバツクショットと呼ばれる種類の弾丸で銃口からは9発の鉛玉が発射され、命中したネウロイの装甲を破砕させる。

「シールドもだけど銃もすげーな……」

ショットガンと言うのは全弾命中すれば余程のライフル弾よりも殺傷力が高くなる。

アランやブレッドの世界では撃たれた人間を必要以上に痛みつけると一時期はショットガンの軍事利用を禁止しようという流れも生まれた程だ。

それでも、現在も軍隊に残り続けていると言う事はそう言う事に目を瞑ってでも使いたくなる程の利点があり、相手の白眼が見える距離ならライフルや拳銃以上に頼もしい味方になる。

クルピンスキーはこの火力が味方として使われている事に冷や汗を流しながらも感謝していた。

頼もしい味方や火力は何処の世界でもいつの時代でも重宝される物だ。

「いけー！」

アランの言葉に雁淵は銃声で答える。

アランの援護で十分に近付けたお陰かネウロイの先から先まで弾丸を叩き込めた雁淵だが浮き上がった尻尾に背中を打ち付けてしまおうがその瞬間に雁淵の目が赤く輝く。

赤くなつた目の視界は突如として薄暗くなるがネウロイだけが白く浮き上がり、その一部に多角形に切り出された様な赤い結晶を見つめる。

「コアが、見えたー！」

ネウロイのコアだ。直感にも似た感覚を信じて雁淵が赤い結晶のある場所に火力を集中させるが装甲が硬いのか13mmでは貫通も破壊も出来なかったがアランが執拗なまでに攻撃する雁淵に何かあると思ひ近付く。

「どうしたー！」

「見えたんです！ コアが！」

コア。と言われても何がなんだがわからなかったアランだが雁淵を信じてアランがネウロイの背中からパワーダイブで接近。触覚の中間に当たる場所にスピッコックで3連射を加えると装甲が砕けて赤いコアが露わとなる。

「コアー！」

「アランがコアを見つけた！」

「コアさえわかりゃー！」

ロスマンとニパ、菅野が反応を示すと全員がコアのある場所に火力が集中されるがアランだけは近付いて撃つ必要がある為に危険と判断して、攻撃には参加せずに雁淵がネウロイから撃たれても守れる様に側を旋回して待機する。

「(ショットガン用のAPDSかAPFSDSが欲しい……)」

白い破片となって砕けるネウロイ前にそんな事を考えていたアランだが撃墜した後に雁淵が笑顔でお礼を言つて来た事が嬉しくて心

から笑うと弾種不足の不満など何処かに飛んで行ってしまった。

「共同撃墜でも初戦果おめでとう！ 俺はハブられたけどな！」

「なら、遠距離攻撃出来る武器を使えば良いじゃない」

ロスマンからの突っ込みに13mmじゃ満足出来ないと笑うとP-40の排気管から炎と黒煙が上がる。

「え？ 被弾も異物も混入してないぞ!？」

出力の低下により何かに引っ張られる様に落ちて行くアランをロスマンと雁淵が追い掛けるのを見て、ニパは仲間が出来たと笑い、サーシャはプルプルと震えながらアランに正座を言い渡す。

そんな中でも雁淵はアランとロスマンに嬉しそうにぶつかった時にネウロイのコアが見えたと話していた。

こうして、雁淵の初実戦は大型ネウロイ1機をサーシャ・クルピンスキー・ニパ・菅野・ロスマン・雁淵の共同撃墜で戦闘は終了。

アランは機械トラブルにより自力での帰還が困難として雁淵と菅野、ニパの手で最初とは逆のパターンで帰投、ニパからは同族認定、サーシャからはブレイクウィッチーズの1人に追加認定されてしまうと言う結果で終わった。

## 第8話 戦う意味は偶然か己の意思か……

「確かなのか？」

戦闘終了後に雁淵とアランはロスマンに連れられてラルの司令室まで連れて来られていた。

理由は今回の戦闘で発覚した雁淵とアランの固有魔法についてだ。

「ええ。どうやら接触する事でコアが見える様です」

「噂に聞いた事がある。雁淵ひかり。お前には接触魔眼の固有魔法はある様だ」

「接触魔眼！」

接触魔眼の固有魔法。偶然にも雁淵にとつての憧れである姉と同じ魔眼の固有魔法がある事を知ってその顔に喜色を浮かべる。

「だが、絶対に使うな」

ラルの言葉に雁淵が聞き返すとアランやっぱりかと顔を顰める。

「無駄に命を捨てるな！」

ラルの強い言葉に雁淵の身体が一瞬だけビクリと動き、固まる。

「何の為に孝美はあの技を使ったと思っっているんだ」

「あの技……」

「絶対魔眼だ。聞いてないのか？」

「絶対魔眼？」

雁淵がアランとロスマンに視線を向けるとアランは俺が知ってると思っっているのかと睨み返す様に目を見開くとロスマンが語り始める。

「心配かけたくなかったのね」

「リバウの戦いで聞いた話だ。通常の魔眼では捉えられない特異型や複数のネウロイのコアを一瞬で捕捉できる必殺の技だ」

「はいはいリスクリスク」

「アランさんが言った様に肉体と精神に負担が大きく、シールドの能力も著しく低下するから援護なしでの使用は自殺行為に等しいわ」

「お前と艦隊を守る為に孝美が払った犠牲を無駄にするな」

「お姉ちゃん……あの時そうだったんだ……」

雁淵がペテルブルクに来るまでにあつた交戦を思い出して俯く。

「いいか。接触魔眼は禁止だ。わかつたな」

「……わかりました……」

納得をしきつていないが姉の事を思つてかそう返事をする内容  
はアランへと移る。

「そして、アランのシールドだが性質もさる事ながら形状も特異だ。  
我々はこのシールドを吸収型シールドと呼称する事にした。それと、  
レッドフィールドに聞くが吸収したビームは何処に行った？」

ラルの言葉に首を傾げるアランにロスマンが補足を加える。

「ビームが中央や外のシールドに触れるとビームは中央の小さなシ  
ールドに吸い込まれて消えたの。それなら吸い込まれたビームは何処  
に消えたのか。吸い込むだけでは終わらないと考えるのが普通なの」  
「いや、わからん。何かが溜まつた感触や感覚もなかったからな」  
「となると吸い込んで消すだけか……」

吸つたら吐く。

何かを溜め込み続ける事は出来ないのは世の常といつていいほ  
どの法則だが、宇宙にはブラックホールと言う吸い込む存在はあつて  
もホワイトホールと言う吐き出す存在がない様に全てが全てその法  
則は当てはまる訳ではない。

「わかつた。レッドフィールドも雁淵ももういい。下がつていいぞ」

その言葉に雁淵は会釈をしてアランは敬礼で答えると2人はラル  
とロスマンに背中を向けて部屋から出ると廊下でサーシャと鉢合わ  
せる。

「サーシャさん」

「ひかりさんもアランさんも試験合格おめでとう。私は隊長とロスマ  
ン先生に用事があるから。それとアランさんは格納庫で正座です」

「ファック!! 覚えてやがった!」

アランの言葉にサーシャが涼しい顔でラルの部屋へと消えるとア  
ランは肩を落として格納庫向かう。正座をする為だ。

「……」

不満そうな雁淵の肩にアランは手を乗せる。

「辛いよな。能力はあるのにそれを使わせて貰えないって。俺もそうだった。実戦配備だと聞いてみんな喜んで待っていたのは後方任務だけ。それじゃあ、意味が無いと武功を焦って営倉や降格処分なんかも受けた奴もいた」

「アランさんはその時は何を……」

「黙って時を待っていた。いつか前線に行けと言われる日が来る。その時に出られる様に耐えた」

今は耐えろ。いつかその力が必要になる時が来ると励ましているのだと思つた雁淵に笑顔が戻るとアランも笑顔で告げる。

「カリブチ。お前は俺に聞いたよな。どうして戦いたいのかと」

雁淵自身が忘れていた内容にアランが酷いなど言いながら笑うと続ける。

「戦いたい理由は見つかった。俺はお前のおかげでそれを見つけた」

「私が……ですか……」

仰ぎ見る雁淵にアランは頭をポンポンと叩く様に撫でる。

「ああ。俺はお前を護りたい。この基地のみんなを護りたい」

アランは窓に映る寒空を見上げる。

「誰かを護る為に飛ぶ。それが俺の戦いたい理由だ」

アメリカ軍でもストライカーズでも護衛を多く行って来たアランだ。様々な理由はあったが何よりも大きかったのは爆撃機乗りの白人から俺たちを守ってくれと頼まれた事だった。そして、迷う自分に合流直前のブレットからお前の力を貸してくれと頼まれた事だった。

ストライカーズに合流したのは一種では目の前の命を護る為だったのだ。

この世界でも同じ理由で戦う。アランはこの事に何か人間ではどうにもならない大きな力が関わっている様に思えてしまった。

「(本当にそうなのか？ この世界に飛ばされた事、ブレットがここにいた事、護る為に戦うと決めたのは偶然かもしれない……)」

アランが雁淵に視線を戻す。

雁淵は突然の目線に首を傾げるが決して目を離したりはしなかった。

「いや、戦う理由を護る為と決めた事は自分で決めた事であって偶然では決してない！」

その理由に直接的に関わったのは雁淵ひかりと言う自分と似た境遇に立った、立っていた一人のウィッチとの、偶然の出会いがあったからこそかも知れないが自分が戦う理由さえも偶然で片付けてはいけない。その意思を自分の意思だと決定付ける為に雁淵にアランは誓いを立てる。

「もしも、もしもだ……お前が接触魔眼を使いたくなつた時は俺に言え。俺がお前をネウロイまで届けてやる。お前をネウロイの攻撃から絶対に護り通す！」

その言葉を聞いて顔が赤くなるのを自覚した雁淵が顔を伏せながらアランに問う。

「絶対……絶対に、ですか……」

「ああ。第332戦闘航空群の隊員として絶対に生きて帰らせる。例え俺の命を懸けてでもな」

「で。どうだったんだ？」

時間は少し遡つてラルの司令部。

サーシャは報告をする前にポケットからユニットのパーツを取り出すとラルの机に置く。

「これは？」

「アランさんのユニットに使われていた魔力用安全弁。簡単に言うと多過ぎる魔力が流れると魔力の流れを止めて自壊を防ぐリミッターの様な物です」

「でも、それって直接的に止めてしまう最終装置よね」

「ロスマン先生の言うとうりですが、これは彼のユニットを試験的に発動させた時に交換されていた物です」

「何か異常があったのか？」

「整備兵が言うには古いから故の故障だろうと交換したらしいです

が、私の固有魔法で記憶している弁と比べると少し可笑しな所があったんです」

サーシャには固魔法として映像記憶能力と言う魔法がある。これは魔法力で記憶したものなら何でも記憶していると言う物で502のユニット稼働率が100パーセントを長い期間で維持できるのはスオムス仕込みの整備兵とサーシャの存在があるからこそ。

そんなサーシャからの報告に自然とラルは身体を前に出す。

「これを」

そう言つて拡大鏡で拡大した弁のほんのごく一部が内部から盛り上がり、亀裂が入っている。

「弁が発動した時に魔力が弁を破壊して漏れ出た証拠です。おそらくは試験の時の稼働記録は弁から漏れ出た魔力だけの結果です」

「漏れ出たそれで雁淵クラス……」

「そして、今回で交換した弁がこれです」

別のポケットから少し真新しい弁が出されるがその弁は内側から完全に割れており、辛うじて固定する際に傷を付けないように取り付けるワツシャにより取れずに済んでいた様な物だった。

「これでも1番マシな弁です。最悪な物だと爆散していました。今回の墜落はその破片と魔法力過多によるデトネーションでピストンの一部が融解、クランクやブロックと言った部分まで破片や熱で崩壊と言つていい損傷を受けてます」

廃棄処分にして鉄などの資源に作り直すしか使い道は無い。そう報告を受けるとラルが予備機があるか聞くとサーシャはオラーシャ帝国から親の仇かと言いたくなる程に送られてきたP-40でも比較的魔法力を要求するQ型を1機持つて来る事に成功したと報告するが、実際はP-40よりも性能がいいユニットがあるが故の厄介払いだ。

それでも機材に乏しい502ではありがたい。特に意図しない破壊を行う彼にとっては1機だけでは心許ないにも程があるが無いはマシと言ひ聞かせる他ない。下手をしたら1戦して機材無しになりかねないがそれは致し方ない事だ。



「早急に新しいユニットが必要か……少しあいつに連絡するか……」

ラルが受話器を取ると交換手にある場所に繋げるように指示を送ると遠く離れたパ・ド・カレー基地に電波が飛び、ラルが話し始めるとサーシャとロスマンは邪魔にならない様にと別の部屋に移動するとサーシャがロスマンに話し掛ける。

「気付いていたんじゃないんですか？」

「あら、何をかしら？」

「アランさんの魔法力の事です。訓練に使っていた柱ですが上の方だけですが、角の一部がへこんでいました」

「ええ。気付いていたけど、まさかここまでとはね……火事場の馬鹿力だと思うんじゃないわ」

「整備士も出撃寸前までユニットは咳き込んでいたので魔法力過多とは思わなかったようですし、ロスマン先生だけの責任じゃありません」

サーシャの言葉にロスマンはありがとうござい告げるが何処か浮かない顔だ。サーシャは更に問う。

「アランさんのシールドですか？ 心強いじゃないですか」

「そうじゃないの。シールドに書かれていた一文が怖いよ」

「私達のシールドに書かれている狭き門を通れ。と言うヤツですか？

何が書いていたんです？」

「大きなシールドには、I r i s k m y l i f e a n d p r o t e c t t h r o u g h y o . 訳は命を懸けて護り抜く。小さい方にはI h a v e t h e a b i l i t y t o r e p e l d e s p a i r d e . 訳は絶望を打ち払う能力を持つ」

「合わせると私は絶望を打ち払う能力を持ち、命を懸けて護り抜く」

それがどれだけ危険かアランは知っているのか。と言う言葉をサーシャは飲み込み、守る為なら自分の命すら捨て様とする彼が危うくて仕方ないと言うロスマン。しかし、サーシャは落ち着きを払っている。

「いいんじゃないんですか？ そうしない、そうさせない為に仲間が居るんですから。私達は守られてばかりの弱い女の子じゃない。違

いますか?」

「そうね」

ロスマンが頷くとラルが入室して来る。

「どうでしたか?」

サーシャが期待を孕んだ目線を送る。

「機材のアテはあるが信頼性と反トルク相殺が上手く行かずにその機材の完成が遅れているらしい」

「つまりはP-40で頑張ってくれと?」

「そうだ」

「はあー。ブレイクウイザードですか……」

「あいつらと違って壊したくて壊している訳じゃない。機材が軟弱なのが悪い」

「共食い整備でどうにかするのでP-40のスクラップでも稼働機でも集めて下さい。そうでもしないと間に合いません」

「善処するけど、期待はしないでね」

3人はため息を吐いて新たなブレイク要員に頭を抱えた。

## 第9話 極寒の空に赤い尻尾は飛ぶ

502基地の朝の厨房にフライパンとフライ返しを振るう人影があった。

人影がフライ返しを振るうと厨房に小麦粉で作った生地が焼ける香ばしい匂いと焼かれた砂糖の甘い匂いが漂う。

そんな匂いに釣られてロスマンと下原が厨房を覗くと黒人、男性、181cm、髪は茶、筋肉モリモリマッチョメンのナイスガイが立っていた。

「え？ レッドフィールドさん……料理できたんですか……」

「ストライカーズでは貴重な朝だけだけど飯ウマ勢の1人だよ」

アランが青筋を立てながら話した内容にストライカーズの食事事情が気になったロスマンだが、流石に聞く気にはなれずに内容を朝食のメニューへ無理矢理に移す。

「これはホットケーキ？ 薄いのと厚いのがあるのね」

「甘いのもそうでない物も用意してます。好みが変わらなかつたので。付け合わせもジャムからバター、スクランブルエッグにハムを焼いた奴とかも作ってます」

中々の内容にロスマンが舌を巻いていると続々とメンバーが集まると下原も手伝いを始めた瞬間にジョゼが味見行う。

「つまみ食いをするとはいいい度胸だ！」

ジョゼの味見がつまみ食いと言ってもおかしく無い量になろうとした瞬間にフライパンとフライ返しを置いたアランが低空タックルでジョゼの腰に飛び込むとそのままの体勢でジョゼを食堂までもの数秒で押し込むと何事もなかったかの様に調理を再開すると朝食は出来るまで手伝いをしていた下原以外は動けないでいたが完成すると全員が朝食を食べ始める。

「このケーキ美味しい！」

「そいつはよかった」

ニパの賞賛にアランは胸をなでおろしながら笑顔で答える。

「厚いのはフワフワしてるな！」

「それはにほ、扶桑人のレシピだ」

菅野が厚焼きのホットケーキを食べての感想にアランはやはりかと言う様子で話す。

「でも、どうしていきなりホットケーキを？」

サーシャがアランに投げ掛ける疑問もその通りだ。

此処では殆どの食事を下原と炊事当番の人間が行っているがアランは誰よりも早く起きてこのホットケーキや付け合わせの調理を行っていた。

その質問にアランは思い出す様に話す。

「ホットケーキはストライカーズで地上で最初にみんなが褒めてくれた物なんだ。だからかな。仲間として迎え入れてくれたみんなに食べて欲しくなったんだ。それよりもシモハラの作ったスープも美味しい。汁物は如何しても上手くないかないんだ」

「下原さんってお料理も上手なんですな」

「喜んで貰えて嬉しいです」

下原が笑顔で答える。

「アラン君の料理もいいけど、下原ちゃんの料理の腕前は最高だよ」

「扶桑料理も繊細で素敵よね」

クルピンスキーが下原には賞賛を、雁淵には自慢する様に告げるとロスマンもそれに続く。

「そう言えばカリブチは何か作れるのか？」

アランの質問に雁淵は……

「お姉ちゃんの作る海軍カレーが好きです！」

「んな事聞いてんじゃねーよ！」「違うんだ！ そうじゃないんだ！」

菅野とアランの突っ込みが雁淵に突き刺さると食卓に笑いが満ちるが下原だけは『料理の腕は最高……か……』と少し不満気にしているのをアランだけが気付いていた。

アランは朝食の調理により潰れていたランニング・筋力トレーニングやボクシングとキックボクシングなどの動きを取り入れた体術の

などのトレーニングを終えるとブリーフィングルームへとやって来る。

「現在、ネウロイの侵攻はラドガ湖の北方で止まっていますが、湖の凍結が始まると一気に南下。つまり、こっちに進出して来ると予想されます」

ロスマンが現状の説明と今後の予想を報告する。

ネウロイの巣と502基地の位置関係からラドガ湖が天然の防衛線となっているが気温が下がれば凍結して地面となり侵攻が激しくなるのは目に見えている。

「凍結は何時からなんだ？」

「12月の頭程ですから、長く見積もって1ヶ月よ。ですので、次の補給を待つて新たな防衛網を構築する必要があります」

ロスマンの言葉が終わると同時にアランが手を挙げる。

「どうした？」

「意見具申をしても？」

「構わん。どうした？」

「防衛網構築には情報が必要だ。偵察飛行はするのか？」

アランの言葉にラルが驚いた様子をみ開く。

「いや、元少尉ですから最低限の知識はあるつもりですし、原隊は偵察飛行も多かったのでこの任務はどんな任務かは理解しているつもりだ」

アランの言葉にロスマンが答える。

「アメリカもリベリオンと同じで飛行学校卒で少尉なのね。勿論、偵察は行おうわ。ラドガ湖北東、ペトロザヴィーツク周辺まで広げます。気付いた事が有れば全て報告しなさい」

「了解」

「ひかりさんもアランさんも同行しなさい。2人とも遠乗りの訓練にいい機会だわ」

「はいー」

「アランさんは機体に慣れて頂戴ね。今回からQ型でE型とは性格が異なるかもしれないから」

「了解です。よろしくお願いするぜ！ お二人さん」「よろしくお願いします」

「ええ。此方こそ」「よ……よろしく……」

ジョゼの様子が可笑しい事に気付いたアランは心当たりがあるのか飛んだら謝らないと思いつながらブリーフィングが終わった瞬間にそそくさと去っていたジョゼを見送るとアランはアランは格納庫へと向かう。出発前の点検を行う為だ。

無論ながらアランが整備兵を信用していない訳ではない。ただ、出発前の最終点検は必ずパイロットの目で行う。

それを怠った奴は例外無く、経緯は違えど地面に墜落している。

アランも候補生時代に教官だったパイロットからその辺りの事は叩き込まれており、点検を終えると最後にボディに塗装が完全に乾いているか確認する。

アランのユニットはP-40Qではあるが普通のP-40の塗装とは違い、垂直尾翼に当たる部分だけを鮮やかな赤で塗装し直している。

尾翼だけが赤い機体は第332戦闘航空群の象徴的カラーリングだ。

「わぁー凄いカッコいいー！」

後ろから聞こえた雁淵の声にアランは嬉しそうに笑う。

「ああ。こいつは俺たちの誇りなんだ。ストライカーズでもこのカラーリングにしてくれと頼み込んだものだ」

自分達に実力がある。その為に戦い、この赤い尾翼が自分達の実力を示す物になった。

だからこそ、この世界でもこのカラーリングを使う。何時でも、何処でも自分の能力を示すと決意を固めた自分への責任であり、誇りなのだ。

「行くか」

アランと雁淵が下原とジョゼの後をついていく様に離陸する。

アランのユニットは吸い込む魔力の量を調整して効率を悪くした事で自壊の可能性を下げる様に設定されているおかげかラドガ湖ま

では何の問題も無くやって来る。

下原とジョゼが天候について話している横でアランが腕を振っている雁淵に話し掛ける。

「カリブチ。固有魔法については流布が禁止されている。手掛かりになりかねない事はしない方がいい」

その言葉に雁淵が納得していないと言う表情を浮かべるがアランの『使いたい時は俺にだけ言え。手伝う』という言葉に雁淵は満足そうに頷くと下原が2人に何を話しているのかとコンタクトを取ってくる。

「お互いにユニットで苦勞しているよな。って話だよ」

「そ、そうなんですよ。そ、そう言えば下原さんて扶桑のどこ出身なんですか？」

アランの自然体のフォローに雁淵の質問に下原はさつきまでの会話から出身地の話に興味に移る。

「安芸国。いえ、広島の尾道です」

「広島!？」

アランが真つ先に反応した為に其処に何かがあるのか気になった2人が興味津々ですと視線を向けるとアランはすぐに忘れてくれと告げて雁淵の出身地について聞いて来る。

「私、長崎の佐世保です! 佐世保も尾道と一緒に坂が多いんですよ! せっせと走ってたんです!」

長崎、その言葉を聞いた瞬間にアランがひっそりと2人の前を飛び始める。

アメリカ人のアランにとって広島と長崎は因縁深い街の名だ。

「私も坂が懐かしいです。そう言えばアランさんは何処の出身なんですか？」

「……ああ! アメリカ、こつちだとリベリオンだな。其処にある緑のオクラハマ州で大規模な農場を持っているんだ」

「て事は大地主って事ですか!?! 凄いです!」

「早い者勝ちで手に入れた土地に飢えて一家全員が亡くなった土地を購入してとか色々やってただけだな。それよりもシモハラはずっとこ

の最前線で戦ってきたのか？」

「いえ、最初から此処と言う訳ではないんですよ。それに私は余り部隊の役に立っていないですし……」

「そんな筈無いですよー。今朝の料理もみんな喜んでいたじゃないですかー」

「そうだけ。うまい飯を作れるのはそれだけで部隊の役に立つんだ。特にこう言う多国籍部隊となるとな」

「料理なんて関係無いです。この部隊に居るからにはネウロイと戦って戦果を挙げ無いと……」

独白の様に告げる下原に雁淵もアランも反応が遅れる。

「他の人達に比べたら私なんてまだまだダメ。もつと頑張つてネウロイを倒さないといけないんです」

「定ちゃんがダメなんてことないよ！」

突然のジョゼに3人は驚いた顔でジョゼを見やるとジョゼは恥ずかしくなったのか顔を前に向けると警戒する様に告げて、ラドガ湖を超えると雪が降り始める。

「あ、雪だ！ 雪ですよ！」

「寒冷前線の動きが速い様ですね」

「早く偵察を終えて戻りましょう」

「そうだな……つて、経験から言わせて貰うぞ。これは吹雪になりかねないな」

アランの言う通り偵察を続けていると徐々に雪と風が強くなり完全に吹雪へと天候が悪化していた。

「吹雪いて来ましたが、大丈夫ですか？」

「平気です」

下原が雁淵を心配して声を掛けるとアランは前を飛ぶジョゼの隣に移動する。

「そろそろペトロザヴォーツクじゃ無いのか？」

「その筈なのに……」

吹雪で視界が悪くなり方角を見失つてもおかしく無い状況になっている関わらず目的地を見失いかけている事にアランが言いようの



無い不安感に駆られるがそれを口には出さない。

向こうでは18歳で飛行機に乗り込んで26歳までずっと戦争に従事して来たアランには誰かの不安が隊長や指揮官に伝われば全員不安になると何度も経験して来た故に自分だけは不安を口にしないといと心掛けている。

「16歳か15歳の身体でも経験と心は変わらずか……」

顔は変わっていない印象だったが筋肉量と身長が下がっていた為に年齢を自覚できたアランが誰にも聞こえない様に呟くと冷たい風が強く吹く。

「うう……寒い……」

「羽織ってろ」

寒いと漏らした雁淵に自分の着ていた革製の上着を羽織らせる。

高度1万m以上の巡航が基本のフライングパンケーキのP型乗りと言う事でデザイン見直しと素材をトドの本革に変える事で耐久力と保温性を高めた専用的高级モデルだ。

雁淵はコートの暖かさのアランの行動からか顔を真っ赤に染めるがアランは方向を見失わない様に必死で気付いていない。

「ん？ 街だ！」

アランがペトロザヴィーツクの街を見つけるが4人を向けたペトロザヴィーツクは津波を受けた後に大寒波を喰らったかの様に街全体が雪と氷で覆われていた。

「……自然でどうこう出来るものじゃ無いな……」

「雲の上にネウロイ発見！」

「え？ 何も見えないですよ……」

アランが警戒心を引き上げた瞬間に下原が固有魔法の複合魔法視力によりネウロイを発見する。

「魔法か……」

「定ちゃんは遠くの物を見る能力があるの」

「行きましょう」

下原の言葉にジョゼが上昇するとアランが雁淵に目配せした後には上昇する。雁淵も3人の後を追う様に上昇して雲の上に出る。

其処には扇風機を横に倒した様な大型ネウロイが1機。佇んでいた。

「502基地！・ネウロイと遭遇した！ 指示を求む！ 502基地！ 応答せよ！」

アランが叫ぶ様に耳にはめたインカムで報告しようとするが電波障害を受けたかの様な不快な音しか吐き出さない。

ジョゼも同じ様に通信をしようとするが結果は同じだった。

「無線が……通じない……定ちゃんどうしよう……」

「(私だって……) 戦いましょう。雁淵さんとアランさんは後ろに」

下原の指示に2人が従うと下原はジョゼを連れてネウロイに攻撃を開始するが武功を焦るかの様に突っ込み気味の攻撃でジョゼが無茶をしない方がいいと忠告を飛ばすが下原は自分も502のウィッチなのだから1つでも多くのネウロイを倒すと言って聞いていない。

そんな下原にビームが飛んでくるとそれを境に全員にビームが飛ん来る。

「警戒せよ！ Watch」

アランが3人の前に出るとシールドを展開全てのビームを吸収してしまうがネウロイは身体を起こして回転している部分を4人に向ける。

アランが本能から何か不味いと判断した瞬間にM1887を肩に掛けて後ろに下がり、雁淵と同じ場所にまで下がると武器を構え直す。

前にいた2人は冷気をもろに浴びてしまった所為か武器が凍りついて使用不能になってしまうと同時にユニットも凍結を起こしており、咳き込んでいるかの様に動作が安定しない。

アランも武器こそ無事だったがユニットが凍りついており、飛行もままならない状況になっていた。

「シット!! ユニットが!」

「私の銃は凍ってません! やってみます!」

「Wait a moment」

アランの警告を無視して接近した雁淵がネウロイから発せられる

冷気をまともに受けてしまい、銃とユニットが凍りつくだけでなく、身体にも霜がつくほどに冷やされ、身体から力が抜けたのか銃を手放しながら地面へと落下する。

「雁淵さん!!」 「カリブチ!」

3人が雁淵を追うとしたタイミングでユニットのエンジンが完全に停止してしまい、3人も固まって落下してしまう。

落ちて行く3人を見送ったネウロイはその体を雲の中へと消した。

## 第10話 ペトロザヴオーツク熊事件

ユニットの凍結による急なエンジンストップにより墜落した下原・ジョゼ・雁淵・アランの4人

雁淵を除いたメンバーは近い場所からの落下であった事もあり、元戦闘機乗りのアランが空中で姿勢を整えて2人を抱き寄せると地面との衝突の瞬間にシールドを発動させるがシールドは何故かマトモに機能せず、3人とも雪の中に埋まってしまふ。

「っうゝ……」

「ジョゼは大丈夫？」

「うん。アランさんのお陰で」

「無事なら降りろ……おも、ふげ!？」

アランが重いと言おうとした瞬間にジョゼから軽いパンチを顔面に放たれたアランはカエルが潰れる様な声を上げてしまふ。

下原は直ぐに立ち上がり、アランやジョゼ、自分にも怪我が無い事を確認し合うとユニットの事より先に雁淵の事を気にして直ぐ固有魔法を発動して辺りを探す。

「居ましたー」

雁淵のユニットが雪の中から逆さに生えているのを見つけた下原が叫ぶとアランがユニットを脱いで近寄ると直ぐに雁淵を引き抜く。

雪に埋めてた場合に怖いのはその冷たさによる被害に加えて窒息の心配があるからだ。

アランの手で早急に雪の中から引っぱりだす事に成功するが状態が悪過ぎた。

体温は著しく奪われており、凍傷寸前になっているが雁淵の使い魔が主人を守る為か保護の魔法を掛けている事により僅かばかりの意識がある。それでも危ういバランスの上に成り立っており、早急な手当が必要になっている。

「私の所為よー。ネウロイを倒す事に拘ったから……」

それを聞いたジョゼが怒った様な顔を上げて腕を振り上げるがそ

れよりも先にアランのチョップが下原の頭に炸裂する。

「シモハラ！ は自分を責めるのは後にしろ！ まずは目の前の仲間を助ける事に集中しろ！ 後悔は何時でも出来るが人命救助は今しか無いんだ！」

「そうね。アランさんの言う通りだわ！」「はい！ 絶対に助けます！」

まずは寒さから逃れる事を目的にアランと下原が雪洞を掘り、ジョゼは治癒魔法で雁淵の身体を温めて、時間を稼ぐ。

命のタイムリミットに4人は必死に抗おうとしていた。

一方で502基地では定時連絡すら無くなった4人に何かがあったと判断されて、ロスマン・クルピンスキー・菅野・ニパがストライカーを履いた状態で待機していた。

「連絡が途絶えてもう4時間……」

「僕の可愛い子猫ちゃん達無事かなー」

クルピンスキーの言葉にロスマンは『それはどっちも意味で』とは聞けず、視線でだけ訴えると菅野は渋々だと面倒くさがっている様な発言をするがニパに真っ先に履いたのは菅野だと突っ込まれると菅野は顔を真っ赤にして否定しているが事実の為か全くと言っていい程に説得力は無い。

「4人の搜索は中止です」

「中止!? 何でだよー!」

「これを見て下さい」

報告に来たサーシャが格納庫の扉を開けながら告げる。

扉の先には吹雪で視界が真っ白になっており離陸すらままならない状況だった。

こんな状態で離陸すれば要救助者が増えるだけだ。

「この視界の中では出るのは危険ね」

それがわかっていているロスマンが危険だと判断すると菅野が握り拳を固く作り、サーシャが別命があるまで待機と告げると菅野は腹正しく手摺にその拳の側面をぶつけた。

「ペテルブルクが猛吹雪か……」

パ・ド・カレーのペリーヌの屋敷にブレッドの姿があった。

ブレッドは今も尚ガリアに潜伏するガリアのネウロイの巣から放たれた地上型ネウロイの掃討作戦やカールスラントから来る地上・航空型ネウロイの対処の為にパ・ド・カレーに拠点を置いて活動しているのだが、今日は数少ない休暇であり、多少の設営能力やガリアやパ・ド・カレーの復興計画の意見交換の為にペリーヌの屋敷に泊まり込んでいた。

そんな彼は日課となった魔導板での情報収集に最近はおライシヤやオムス方面の情報収集を集中的に行っている。

「どうか致しまして？」

そんなブレッドにペリーヌが心配してか声を掛けて来るとブレッドは大したことじゃ無いと言いなながらやはり考えてしまう。

吹雪の中での飛行で求められるのは墜落しない技術以上に墜落しからの対処の技術と知識だ。

アランはロシアで撃墜されてからその寒さに対処を誤り、死に掛けた時があつてから武器やナイフなどの道具見直しを行い、正しい知識を厳しい冬を過ごす国や地域の仲間から聞いている為に正しい知識はあるが実践はまだだ。

もしも、何かしらの理由で墜落していたらと思うと今直ぐにでも飛びそうなブレッドだが、立場と航続距離がそれを許さない。

ブレッドは窓に近付くと空を見上げながら、アランが無事で居てくれる事を祈っていた。

アランは雁淵の治療を下原とジョゼに託して、吹雪が吹き荒ぶ外を歩いていた。

雪洞を作ったはいが道具が無かった為に火が炊けないし燃やせるものが無い。ジョゼが魔法力が無くなる前に雁淵が目覚めなかった場合を考えると火が炊ける場所な道具、燃料の確保は急務と言えた。

「(ロシアやフィンランドに落ちた時は白樺を探せ、だったか?)」

ロシアの大型兵器撃墜に参加したアランだがエンジントラブルで不時着した時にサバイバル知識の無さから死に掛けた事があった。

あの時は雪で視界が悪いの中をそう言った状況に慣れていた日本人・イギリス人生・ドイツ人パイロットが無茶して飛んだ事で早期に発見出来た為に何とかあったが、あの経験をしてからアランはサバイバル知識の蓄積に邁進する様になる。

その中に白樺と松ぼっくりは油を含んでいるから湿っていても燃えやすいというものだった。

流石にこんな環境に松は無いだろうが、白樺は自生している筈と目を皿にして搜索する。

「ん?」

アランが何かを踏んだ感覚に腰からトレンチナイフを抜いて地面に突き立てる。

アランのトレンチナイフはトラッカーナイフの刃先に斧の要素を足した様なオリジナル品で側面には若干な弧を描くように叩いているので雪や土を掘る様な動作にもそれなりのポテンシャルを発揮する。

雪洞を彫る時にも重宝したナイフだが、今回は掘り起こしに使う。

ある程度掘り起こすと見慣れた金属パーツを見つけて掘り進めると銃身が曲がった99式2号2型改13mm機関銃だった。

「これじゃ使えないか……」

周囲を搜索すると機関部が破損した99式に撃鉄が曲がったDP28機関銃、完全に凍結したM1887を見つけた。

無理して動かそうとすれば可動域が壊れるとレバーを操作しない様に背中に吊るす。

もう暫く進むと壊れた戦車を見つけた。

破壊されたと言うよりもエンジンの故障により乗り捨てられた様な状態の車体だった。

車内には一斗缶やカップ状の金属があった為に火を炊けると判断したが車内には設置型の機銃としてDP28軽機関銃があったが、主砲弾共に弾薬が無い。

燃料はある事を確認すると車内から出て、此処への移動を決めて一旦ではあるが3人の元へ戻る事に決めて歩き始めると白樺の木を発見してナイフで樹皮や樹脂を削り取っていると最悪の出会いをします。

下原がアランを探して出歩いている事に加えてまさかの冬眠をしていない巨大な熊が近くに居たのだ。

熊と言うのは冬眠を行う動物であるが、巨体や栄養状態が良いと冬眠を行わない穴持たずと呼ばれる分類にカテゴリーされる。

そう言った熊は決まって凶暴であり、常に餌を探している様な状態で時には人間すら襲う。

「フアックー」

下原に夢中な熊にトレンチナイフを投擲で肩に刺すとナイフに反応した熊がアランの方を向いて走り始める。

アランは使い魔の尻尾を出現させて、髪を使い魔の毛に変化させて迎え撃つ。

熊が斜めに腕を振り下ろすがアランはスウェーバックと言う上半身を傾けてギリギリの回避を行うボクシングの技を使って回避を行い、トレンチナイフのナックルダスター上のグリップで熊の腕を殴る。

アランは熊の腕を殴る時に鎧通しなどと呼ばれる内側にだけダメージを与える殴り方を行うと熊が目に見えてダメージを受けたかの様に後退りをする

アランが気付いていないが鎧通しを行う際に無意識に魔力集中を行っており、拳が命中する瞬間に魔法力が衝撃と共に熊に侵入。さらに自然放出されていた膨大な魔力にも作用して熊は腕全体を巨大なハンマーで殴られたのと同程度のダメージを受けていた。



アランは熊の肩に飛び乗り、ナイフを引き抜く。

「決めるー！」

アランが後退りして体勢が可笑しくなった熊の回転運動で懐に素早く入り込むと熊の腹にワンツーパンチで衝撃を与えて反撃の隙を潰した所でボディブローで腹に追加攻撃を与えて、ワンツーパンチで隙を潰し、間髪入れずにボディブローからの左ストレート起点のワンツーパンチにボディストレートに捻りと鎧通しを入れた一撃に堪らず熊がダウンする。

普通ならこの程度で倒れない生き物だが腹を中心に内側を魔力の乗った衝撃が入り込み、しかも共振効果で増大したパワーには流石の熊も耐えられる訳が無く、熊は生存本能からか逃走しようと顔の横をアランに見せた瞬間に下顎にアランの左ストレートがクリーンヒットした事で顎が外れてしまう。

「まだだー！」

アランのサマーソルトキックが外れた下顎に炸裂して関節が戻る。熊は無理矢理に戻された関節の痛みで叫び声を上げた所にアランが全力のアツパーカットに魔力込めも込めた一撃をお見舞いする。

熊は脳を揺さぶられると同時にアランの腕力で上体が完全に起こされる。

「ヌウオラー！」

上体を起こし、腹を晒した熊にアランがストマックブローをぶちかますと魔力は熊の内側から背中に向けて衝撃波を貫通させて熊を後方に大きく吹き飛ばして大きな杉の木に背中から打ち付けると熊は弱々しく鳴いてからドサリと地面に倒れる。

「ハア……ハア……」

最後の一撃が腕に来たのか腕を摩りながら近付いたアランが熊の動脈にナイフを突き立てた事で熊とアランの戦いはアランの勝利で幕を閉じた。

## 第11話 価値あるモノ

熊をトレンチナイフ2本で仕留めた。そんな話を下原から聞かされたジヨゼは何と言えば良いのかわからずに苦笑いを浮かべているが、雁淵は純粹な笑みを浮かべてアランを賞賛する。

賞賛されたアランは誇らしげに胸を張るが直ぐに鍛えれば誰でも出来ると謙遜しているつもりを上げるがジヨゼと下原はその言葉に『出来る訳ないでしょう』という突っ込みをしたかったが純粹な笑みを浮かべる雁淵を見て、そっと胸の内になってしまう。

「取り敢えず、まずは吹雪が止むまで此処に留まって体力温存と……」  
火にあたる様に置いていた熊の肉を火で炙って殺菌したナイフで突き刺してウィッチ3人に向ける。

「食って体力と魔力の回復だろ？ 熊肉は極寒の地じゃ、貴重なタンパク源だぞ？」

偵察に出た4人が熊肉を食べる事になった時とタイミングを同じくして502基地の食卓には紫。としか言いようの無いスープが並ぶ。

「うっ!？」

ロスマンが意を決して、スープを一口だけ口に含むとその不味さからか顔を青くする。

「ど？ 美味しいでしょう？ 先生ご自慢の食材で、僕が愛情こめて作ったんだよ？」

クルピンスキーがドヤ顔で告げる。

「なんですって!？」

クルピンスキーの言葉にロスマンが席から立ち上がり、厨房に駆け込むと悲鳴が上がる。

厨房にはロスマンが1年かけて集めたオラーシヤキャビアの空き缶が大量に転がっていた。

厨房でロスマンがクルピンスキーに制裁を食らわしている間に他

のメンバーも一口食べるがその不味さに顔を顰める。

「ナニコレ……」「やっぱり、下原じゃないとダメだ」

ニパと菅野が感想を漏らしている横で無言で口を押さえていたサーシャが黙々と食べるラルを見つめる。

「流石、隊長。こんな時も冷静ですね」

ラルが黙って、スプーンを皿に落とす。

「不味い……」

「全然、止みませんね……」

「まさか、冷気を出すネウロイが居たなんてね」

「きつとあの冷気で前線を刺激して、吹雪を起こしているんだわ」

「今頃はペテルブルクも猛吹雪の筈……」

「基地側はこれがネウロイの仕業なんて想定してないだろうが……」

「じゃあ！ 早く伝えないと」

「その手段が無いんだろ？ 今は耐える時だ」

そう言って弾薬庫などを見ていたアランは何か残っていないか見ていたが何も残っておらず、操縦席で確認した限りだと燃料しか残っていない。

「燃料はあるが武器弾薬は無い。DT機関銃は取り外せば使えるだろうが……」

「弾薬が無い。ですね」

「銃は弾が無ければ殆ど意味が無い」

下原とアランは頷くと兎に角は吹雪が止むまで此処で待機と判断を下すと雁淵もジョゼも了承して、一晩が開けると吹雪は止んでおり、4人は久々と思える日光を浴びていた。

「ペテルブルクの方は真っ暗。猛吹雪に包まれているみたいね」

「かなり局地的な吹雪だったんだな……そして、晴れてる」

「ネウロイが移動したって事だよ」

「じゃあ、きつと基地の皆さんが気付いて出撃してますよ！」

雁淵の言葉をアランは首を捻ると下原が顔を伏せながらその可能性は低いと告げ、ジヨゼが説明する。

「ネウロイは雲に隠れてて、基地からは見えし、レーダーにも映っていないかもしれない……」

「それにあの吹雪だ。離陸は難しいだろうから基地待機が発令する筈だ……基地に残ったメンバーが遊び駒にされてる」

「と、考えるとネウロイの事を知っていて、対応出来るのは多分、私達だけ」

「じゃあ、4人で倒しましょう」

雁淵の言葉にジヨゼがああ冷気でユニットも武器も凍ってしまう事を、アランが武器が無い事を告げると雁淵が頭を押さえる。

「ウィッチ不可能は無い……」

「え？」

下原の呟きにジヨゼと雁淵が反応する。

「私の上官の口癖です。そうですね。やってみましょう！」

下原の言葉に全員が行動を開始する。

まずは戦車の中に残っていた一斗缶に薪を入れて、白樺の樹皮や樹脂で火を大きくして燃え移らせ、その周りにユニットを置いて温める。

「これでユニットは飛べるが、これからどうするつもりだ？」

「うん。使える銃が無い以上はどうしようも……」

アランとジヨゼの疑問に下原は策があるのか気負いの無い言葉で告げる。アランのショットガンも可動部は凍り付いてしまうので使う事は出来ない。

それでも下原には策があるのか表情を変えずに告げる。

「ガラスの熱割れよ」

「へ？ 熱割れ？」

雁淵の疑問に下原が薄っすらと笑う。

「冷たいガラスのコップに、熱湯を入れると温度差で割れやすくなるんです」

「つまり、あのネウロイを急激に温めれば壊れやすくなる？」

「そう。燃料を使って一気に！」

「すごいー！」

下原の言葉にやれると士気が向上するがアランがそこに一言謝ると嫌な報告を上げる。

「燃料はあるが、どうやって火を付けるつもりだ？ この戦車に燃料はあっても火薬なんかは無いぞ？ 燃料も燃焼材に作り変えるならギリギリの量だ」

「手は考えてあります。アランさんに手伝って貰います」

「了解だ」

「コアはどうするの？」

「菅野さんみたいにガンンって殴りましょう！」

「私達にそれは無理です」

雁淵の意見に下原が笑いながら林に目を向けた瞬間に何処からか爆発音に似た音が聞こえるとアランが地面を殴り、50kg爆弾が落ちた後の様なクレーターが出来上がっていた。

雁淵の殴りましようと言う言葉にアランは熊を仕留めた鎧通しと言う技にロスマンからの魔力操作を熊の時以上に高度な物を加えたら菅野と似た様な事が出来るのでは？ と思い立ちやってみたら出来てしまった。

これはロスマンの指導により魔力操作を獲得したアランと体外に魔力を常に放出していると言う体質と合わさったが故の奇跡に近かった。

トレンチナイフの柄をあるナックルダスターに込めた魔力をインパクトの瞬間に鎧通しの要領で前方に放出した事で自然放出されている魔力がそれに影響された事で放出されている魔力が破壊力と衝撃波に変わり周囲の雪を吹き飛ばす、下に沈めるなどの結果となっていた。

「これでよろしいか？」

「もう、十分ですよー！」

ハイライトが死んでいるジョゼと下原に変わって雁淵が答えると2人は作業に集中する事で何とか我を取り戻して行く。

雁淵とジョゼは戦車から燃料を取り出して、取り出した燃料に削ったアルミの粉を入れて燃焼材を作る作業に従事。

下原とアランはアランが仕留めた熊の解体を行い燃やす用の脂と毛皮を剥ぎ、脂を溶かして毛皮に塗る。火矢の火は現地でアランが持っていたオイルライターで付ける。

武器の調達が終われば下原は弓の制作に入り、残った3人はユニットにテーピングを行い寒さ対策を行うとネウロイ討伐の準備が整う。

「アランさんもこれを持って下さい」

ジョゼから軽油に削ったアルミの粉を入れた燃焼材が入った瓶を渡される。

「準備完了だー！」

「行きましようー！」

4人は何とか可動出来る様にしたユニットで空へと上がる。

敵の細かな位置まではわからないがペテルブルク方面を覆う大きく厚い雲の中にいる事はわかつている。

迷う事無く雲を目指す4人の目の前に凍ったラトガ湖が現れる。

「まずいな……」

アランが呟く。

ラドガ湖は天然の防衛戦の役割をしており、そこが凍るとなればその機能を失い格好の進軍ルートになってしまふ。無論ながらそれを理解していない軍ではないが問題は凍った時期だ。

自然に考えれば凍結は12月に入ってからであるが今回のネウロイはユニットすらも凍らせる冷気を出していた為に凍結が早まってしまい、防衛戦の準備が整い切る前にラドガ湖凍結をしてしまったのは人類側にとっては予想外の出来事だった。

4人はこの情報も持って帰らなければならぬと頷くとまずは目の前のネウロイを倒す必要がある。

4人はネウロイが潜むであろう黒い雲に臆する事無く突っ込んで行く。

「ううー。寒いー」

雲の中は冷気を出すネウロイの影響で保護の魔法が掛かっ

も寒く感じてしまう。

そして、その寒さは簡易的な寒さ対策しか施されていないユニットすらも襲う。

「定ちやん、急がないとー!」

霜が機体表面にまで発生したタイミングでネウロイを見つける。

「居たぞー!」

「攻撃開始ー!」

下原は矢に火を付けながら叫ぶと残りの3人が燃燒材の入った瓶を放り投げる。

アランの瓶だけが筋肉任せの投擲で凄まじいまでの速度で飛翔。ネウロイに命中させると装甲をへこませるが大したダメージにはなっていない。

「燃えてえええ!!」

軽油と熊の油で火を付けられた矢がネウロイに刺さり、まぶされた燃燒材に火をつけてネウロイを火達磨に変える。

ネウロイの表面は自身の出す冷気により冷やされており、そこに直火で温められた事で身体の至る所から亀裂が入り、遂にコアが露出する。

「あそこのコアが!」

「行くぜ!」

アランがコアを目掛けて急降下を敢行する。

ネウロイもアランの狙いを察したのかビームで応戦するが全てアランのシールドで吸収されてしまう。

「な!? シット! ここでか!」

もう少しと言うタイミングでユニットが凍り付いてしまい推力を失ってしまう。

ストライカーユニットでは揚力と推力を魔力で得ている為に飛行機では出来ない機動や動きが取れる代わりにグライダー移動と言う手段が取れない為にエンジンストップは飛行不能と同意義だ。

「ふざけるな……ふざけるなああ!!」

アランが叫びながら足に魔力を集中させる。

「レッドテイルだろう！ 敵まで連れて行けよ！」

アランの叫びに呼応するかの様にユニットの内部から何かが割れる音と爆発する音。そしてデトネーションが起こり、その爆発は内部機関にダメージを与えながら熱を持たせるが外気温によりその熱は下げられていく為にオーバーヒートを起こす様な事はなく、爆発的加速でネウロイのコアにアランを突き進ませる。

「これで！ 終わりだああ!!」

アランのナツクルダスターが完全にネウロイのコアを捉え、放出されている魔力に放出した魔力が影響を及ぼし、ひび割れて脆くなったネウロイの装甲諸共にコアを砕く。

ネウロイの装甲とコアは花火の様に薄紫と赤白い輝くを放ちながら地面へと落ちていき、ネウロイを囲んでいた雲はアランの魔力で作られた衝撃波で散っており、ネウロイの破片を陽光が優しく照らす。

「やったー！ やりましたね！」

「やってよ。みんな！」

「2人とも……アランさんは！」

下原の言葉にアランを探すジョゼと雁淵の目にネウロイの破片を突き破ってユニットのマフラーから黒煙と炎を吐き出しながらゆっくりと落下するアランを見つけて、3人が地面ギリギリでキャッチする事に成功するがアランのユニットに飛行は不可能だ。

「腹減った〜〜そして、帰ったら正座だ〜〜」

泣き笑いしている面白い黒人に3人は笑いながら基地へと帰投すると時間は遅めの朝食と言う時間で下原とアランが厨房で腕を振るっているロスマンが4人の働きを褒めるが菅野はあの程度の吹雪で死んでいては話にならないと漏らすとクルピンスキーが菅野を弄る。

そんな食堂に人数分の料理を持った下原とアランがやって来る。

「今回の吹雪がネウロイの仕業だったなんて……そして、アランさんのユニットは8割がレストアです」

サーシャが頭を机に突っ伏して呟く。余談だが無事なパーツは1.5割がボデイ。残りが吸気系と1番壊れて欲しくない部分が全滅



だった。

「下原さん達。今回は大手柄よ。アランさんは後で雪の上で正座です」

「いえ、任務ですから」「機体なんざ消耗品。パイロットが生きて帰って来れば大勝利だ！ て言うかあれはコラテラル・ダメージどころ！」

下原の言葉に出撃直後の気負いはない事にジョゼと雁淵が笑い合おうと食事が並べられる。

メニューはシャケの塩焼きにほうれん草のおひたしとごぼうのきんぴら、卵焼きにクルピンスキーの使ったキャビアの残りを入れた茶碗蒸しとオーソドックスな和食だった。

「やっぱり、下原さんの料理は最高だねー」

ニパが笑顔で漏らす横で菅野が黙々と卵焼きを口に運んでいるとロスマンがキャビア入りの茶碗蒸しに気付いて下原を褒めると同時にクルピンスキーを弄る。

「な？ 美味しい食事はそれだけで価値がある。それを作れる人間も部隊では価値がある存在になる」

和気藹々とした食卓を見ながらアランが下原に告げると下原は笑顔を浮かべる。

「戦闘で活躍するのも良いですけど、こう言うのも悪くないですね」

「食事の力は偉大だ。古今東西あらゆる国の人間も美味しい料理を共に食えば仲良くなる。美味しい飯にはそれだけの力があるんだ。それを作る人間にもな？」

アランの脳裏に美味しい飯を食べたがるストライカーズ的面々が蘇っていた。

## 第12話 ペテルブルクに響く砲声

アランは気がつくのと暗い通路に立たされていた。前からは僅かばかりの明かりが入って来るのを見て、出入り口近くであろう事はわかる。

アランは光に誘われる蛾の様に光に向けて歩き始める。

光が徐々に強くなっていくと同時に目が慣れ始めるが外に景色は逆光の所為かわからないままに外に出ると上を2本の鉄骨がアーチ状に若干な弧を描いて掛かっており、そこから屋根が伸び四方を観客席と思しき物が覆っている。

「競技場……だと……」

アランが眩くと同時に向こう側の通路から青いぴつちりとした服を着た女性が威風堂々とした雰囲気を感じながら現れるとアナウンサーがエキシビジョンマッチとして2人がこれから格闘技を行うと告げる。

女の方が既に中央に作られた黄色と赤色で作られたコートのような場所に立っている。

アランはそんな女を見て、性別なんて関係無い。こいつは強いと思うと戦いたくなりコートに立つと腰を落として腕と足を少し曲げた構えをお互いに作る。

2人ともタツクルで勝負を決めるつもりだと言う事は見る者が見ればわかるだろう。

女の方はタツクルに自信があると言う雰囲気だがアランは相手の土俵に立った上で文字通り己の全力をぶつけて勝つと言うスタンスを好む。

アナウンサーが試合開始を告げた瞬間に2人のタツクルは正面からぶつかり合いその衝撃波は2人がぶつかり合った場所を残して、観客席や競技場を襲い、文字通り木っ端微塵に吹き飛ばした。

「脆い競技場だな!？」

アランが目を覚ますと其処はレンガに土を盛って作った壁。強いて言うならば見慣れた502基地の壁だ。

「一体どんな夢だったんだ?」

かなり近未来的な競技場に最強と呼ばれそうな程に強者の風格を漂わせる相手に若干な残念さを醸しながらアランはベットの从上から窓を見るとまだ少し暗かったが時計では午前5時45分を示している。

「ちと早いが行くか……」

モンモンとした心情で整備などの機械工作をすると良い事が無いと言うのがアランの信条であり、この夢の事を忘れる為に何時ものトレーニングを開始する。

「少し冷えてきたな……」

白い息を吐きながら基地外週を走る。

「川が凍結しているが……」

基地外週を取り囲む様に流れる川の水面が湿った氷で覆われている。薄い氷が張っておりこれから厚くなる証拠だろうと思うとアランが特に親しかつたメンバーでロシアの川に出向いて1番の新人が薄い氷を見事に踏み抜いてブレットが助けに行つて引き上げた瞬間に氷が割れて要救助者が2名に増え、縄で助けようとした日本人2人のうち1人が足を滑らせて水没。その瞬間に縄を思いつきり引つ張つた事でもう片方の日本人も滑つて水没。

アランが助けに行くのと全ての氷をぶち抜いてしまい、最後はドイツ人2人に助けられるが、上陸の瞬間にバランスを崩したアランがドイツ人2人を一緒に川に再度水没して全滅した記憶を思い出して笑つてしまう。

最初に落ちた新人の『みんな仲よし』の言葉の後に日本人の1人が『しは戦死の死じゃ無いよな?』のツツコミに焚き木を囲んで笑った。  
「あいつらも来るかな?」

ストライカーズの事を思い出しながら走っていると格納庫に帰つ

て来ており、アランは格納庫でダンベルの代わりに崩れたレンガを詰めたドラム缶や柱の余白を使つて懸垂をするなどの筋力トレーニングを行う。

「あら、早いわね、つて服を着たらどうかしら？」  
「？」

其処にロスマンが現れて苦言を漏らすアランは何か問題でも？と首を傾ける。

筋肉モリモリマッチョメンのナイスガイが上半身裸で首を傾けられる光景はシユールの一言だ。

「女性が多いのだから、その辺りを注意して……」

「男の上半身裸は無問題だろ？ 女ならまだしも」

素で言つてやがるとロスマンが頭を抱える。向こうでは女性兵士は珍しくそう言つた経験が無いからだろうと予想を立てるがそれは違ふ。

アランは英国でストライカーズの任務に就くと自分達の機体整備にマーリンエンジンに触り慣れた熟練整備士が志願でついたのだが、その整備士全員がパンツ一丁で整備しているので軍隊で男の裸は普通と言う物差しが出来てしまったからだ。

無論、アランは露出狂では無いので必要な時以外に脱いだりはしないが訓練・整備で上半身裸やパンツ一丁は普通だと思つているので改める事は何かのキツカケが無ければならないだろうしアランの仲では下半身が9割露出しているウィッチのズボンがあるのだから上半身10割位は許されると思つている。

「もう良いわ」

ロスマンが諦めた様な表情を作ると外に出て行つてしまうとアランは首を傾げながらもそれを見送ると上着を羽織つて作業台の前に立つ。

其処には凍結して分解整備を終えて、部品交換もしていたM1887の近くに2連装化されたShKAS機関銃が置かれているが側だけがShKASだが中身はUltraShKASと言うとんでもない銃だ。

そんな銃が2つ。アランの前に置いてある。

「うん。問題無いな」

射撃方法を指で引き金を引く対応ではあるが戦闘機の様にとりガーが撃鉄に直接付いているタイプではなく戦闘機の翼内機銃の様に遠隔式に改造をされており、動作に問題無いことを確認すると夜間哨戒を終えた下原とニパが帰って来る。

「黙っておいてやる」

ニパのユニットはまた飛べ無い状況になっている事に気付いたアランは鼻で笑いながらそれだけ告げると朝食を取りに行く。

朝食は終わると雁淵がロスマンからバランスを保ちながら回避する訓練をする横でアランが設計図を片手に自作のマガジンを作っている。

「コラー！ 待ちなさいーい！」

「ごめんなさいーい!!」

「お待ちなさいーい」

サーシャがニパを追い掛けて格納庫にやってくるとアランは、バレたかバラされたかでニパに憐れみの溜息を吐くと作業に戻る。

仕上げの段階なのでここまで来るとささっと作って完成品にしてしまいたいのが工作をする人間が最も楽しみな瞬間だ。

「カリブチ。スノーボールに注意」「バランス！」

ニパとサーシャに意識が向いていた雁淵にロスマンが雪玉をアランの警告と同時に投げる。

2発を避けると間を置いて3発目が投げられるがそれも躲す。だが、ニパはオイル缶を踏んでしまい頭から地面に倒れる。

「いたた……なんでオイル缶が転がって……」

「ニパさん……」

「さ、サーシャさん……」

遂に捕まったニパが苦笑いをする。

「正座あ！ ついでアランさんもー」

格納庫にサーシャの叫びが響いた。

「うう……」「なんで俺まで……」

正座されたニパとアランが眩く。その時には木の台に置かれた目に見えて壊れているとわかるニパのユニットとボディだけは綺麗だが中身はズタボロなアランのユニットが置かれている。

「またユニットをこんなにして」

「ふっ。ニパさーん、頭大丈夫ですかー？」

サーシャに怒られるニパに雁淵がロスマンの雪玉を躲しながら気にしていると言いつつ平気だと言いつつ使いつつ魔の耳と尻尾を出すと固有魔法である超回復で大きなタンコブを即座に直してしまう。

「私の固有魔法は超回復でね。他人は治せないけど……ほら、この通り」

「すごい！ 墜落し放題ですね！」

「それ貶してるからな？」

アランの声が響くと同時に雁淵の顔に雪玉が炸裂する。

「しつかり避けなさい。ネウロイの攻撃はこんな物じゃ無いわよ。」

サーシャさん、アランさんを借りるわよ？」

「何をさすんだよ……」

アランの眩きを無視してサーシャが了承するとロスマンから雁淵に向けて雪玉を投げる様に告げられるとアランが満開の笑みを浮かべて雁淵に首だけを回して向ける。

それを見た雁淵から生気が失せたが気にしていないとばかりにアランからロスマンの物とは比べ物にならない速度で雪玉が投げられる。

その横でサーシャはニパのユニットから故障箇所が無いか確認するがその際にサーシャが使い魔の耳と尻尾を出している事にアランが雪玉を投げながらロスマンに聞く。

「彼女の固有魔法は映像記憶能力。難解な技術書から10年前の朝食のメニューと言った些細な事まで魔法力で記憶した事は全て頭の中に入っているのよ」

「すごい」「整備兵向けだな」

「サーシャさん。戦闘隊長であるあなたの力は出来れば修理以外で活用して欲しいものね」

「すみません……」

「(修理以外で使えそうな場面ってなんだ？ 偵察くらいだろ?)」

アランが戦闘にどう生かすんだと思いつながら雁淵に雪玉を投げる横でニパは申し訳無さに沈んだ顔を俯かせていた。

監視所に不自然な鐘が付いているが誰もそれに気付いていない。

その鐘が無音で変形すると空に向かって何かシグナルを送る。

そのシグナルは遠い雪原から大砲の様な物が生えたと大砲に弾を詰めるかの様に蓋が開き、床から迫り出てきた円錐の底が四角形になった物体を開いた蓋が招く砲身の中に入れてと蓋が閉まり、空に向かって詰められた物体が飛んで行く。

大砲は物体が飛んで行くのを見送るとその大砲を雪と土の中に沈めて、身を潜める。

打ち出された物体は回転をしながらペテルブルクに飛翔し、監視所を的確に貫く。

命中から発生した黒煙から小さなネウロイが何処かに飛んで行った。

### 第13話 黒人十ビツクリ十連射の効く銃Ⅱ？

〈北東部監視所が襲撃を受けた。出られる者は全員出ろー！〉

ラル指示を受けてユニットが無事なニパ・アラン以外が空に飛び立つがアランだけは背中にMP44を2丁と腰に替えのマガジンを8本。手にDP28軽機関銃の左手用と右手用を持って走り出した。

因みに整備兵には止められたが、アランは「ユニットを履いて出ろとは言われていない。出られる者は出ろと言われたのだ。この足で出られるのなら軍人として出るのは当たり前前」と吐き捨てて走り去ってしまった。

此処で読者諸君に聞くが街の地理に其処まで詳しく無い者が下見も下調べも無しに街に繰り出したらどうなるだろうか？ その結果は火を見るよりも明らかだ。

「何処だ此処？」

迷うのである。それでも、黒煙を目印に現場にたどり着いたアランにロスマンが嫉妬をする様な目で見える。

体力と体格からドックファイアの才能とウィッチとしての才能を見限ったロスマンにとつて、銃を4丁も持って走り回れるアランの恵まれた体力と体格が羨ましいのだ。

「何発撃ち込まれた？」

「1発よ」

たった1発で監視所の重要区画を吹き飛ばしたネウロイにアランが思考を加速させる。

まず考えられたのはV1ロケットが精密誘導できるような様になった物と座標を送るネウロイの存在だった。

前者なら飛んできた弾を迎撃しながら母機か基地を破壊しなければ止む事は無い。

アランはこれが英国のV1防衛の気持ちなのかと考えながらサーシャにどうするか問うとサーシャはラル、指示を乞うがラルはサーシャに任せると告げる。



「それでは戦闘隊長。ご命令を」

クルピンスキーが笑いながら告げる。

「こ、これより手分けして周辺空域の探索を始めます。アランさんは基地に帰投して下さい」

サーシャの指示に全員が了解と告げるとチリジリに飛んで行く。アランも基地に帰るが全員の視界が切れた事を確認するとアランは各所に置かれた貯蔵庫に向かう。

観測手の役割をこなすネウロイがいるとすれば次の目標地点の近く。そして目の次に狙うなら口と耳、もしくは物資だ。

アランがネウロイなら物資を狙って士気を下げると判断して近場の貯蔵庫をしらみ潰しに探すが効率の悪さと道を覚え切れなかった事と移動速度の遅さから夕方になりつつあった。

「此処が最後だ」

アランが第1貯蔵庫に到着すると違和感を発する物体が目に入る。「乗用車？」

無人の街である車は乗用車など無い。しかもヘッドライトが点滅し始めるといよいよ怪しくなりアランがDP28をフルオートで発射するとボンネットからチンアナゴの様な頭部が生えて逃げ始める。

「待ちやがれ！」

そう言われて待つ様な敵は居ない。ネウロイはアランを純粋な速度で突き放して消えてしまう。

そして、ネウロイの砲弾が第1貯蔵庫の扉や門を破壊する。幸いな事に貯蔵庫は無事だったが扉や門の残骸が邪魔で物資が取り出せない状況に陥っていた。

「これはやばいな……」

膝下にネウロイが彷徨っているのもそうだが1番は長距離から重要施設のみを破壊される事だった。

その晩、ブリーフィングルームに全メンバーが集められる。

「物資はギリギリで守られたが運用を出来ない状況になっている。物資が不足気味な分は辛い、破壊されていない以上はまだ救いだ。ア

ラン伍長の命令無視は不問とする」

ラルの言葉にアランが敬礼で答える。

「すみません……私が油断したばかりにネウロイを取り逃がしました……」

「誰にだって失敗はありますよ」

ニパが励ますがサーシャに響いていない。

「今回も撃たれたのは1発のみ」

ロスマンが黒板の前に移動して指示棒を地図に押し当てる。

「ペテルブルクから88km地点の雪原に潜んでの超長距離ピンポイント砲撃です。これを成功させているのがマーカーネウロイです。そしてそのネウロイは擬態能力を持っているのもアランさんが目撃しています」

その言葉にジョゼが不安そうに呟く。

本拠地に行っている街にネウロイがいると言うのは恐怖を覚えているのだろう。不安そうに呟く。

「其処で部隊を2つに分ける。エディータ、クルピンスキー、菅野、下原、ジョゼは砲撃ネウロイを搜索し発見次第撃破。サーシャ雁淵、ニパ、アランは街に侵入したマーカーネウロイを発見しこちらも撃破せよ。2人はスオムスとオラーシャの出身だ。多少は土地勘もあるだろう」

ラルの言葉にサーシャは南部の生まれだから土地勘は無いと告げるがラルは他人事の様になんか吐き、ニパがそれにフォローを入れる。だが、サーシャの中の不安感は拭えなかった。

後日、4人はユニットを履いて街へと繰り出す。この時のアランの装備は99式2号2型改13mm機関銃を2門と重武装だ。

愛銃にしていたM1887が修理の為に使えない事と新造装備はテストが不十分だからだ。

「いやー。ラル隊長はああ言ってたけど、街には小さい頃に1度だけ買い物に来た位でホントは土地勘とかあんまり無いんだよね」

「カリブチ！ Be<sup>注</sup> care<sup>意</sup>ful<sup>ろ</sup>！」

突然の英語に驚いた雁淵がその場にホバリングする目の前に尖塔

が現れる。

危うく激突仕掛けていたのをアランに助けられる。

「注意しろよ？ それよりも無人の街を防衛する必要は無いのなら重要拠点近くで怪しいものを片っ端から撃つのが良いんじゃないか？」

アランの言葉にニパが驚きの表情を向けるがサーシヤはそれに同意すると進行方向を変えようとするラルから第2貯蔵庫付近で怪しい電波を捉えた事を告げる。

4人は第2貯蔵庫に向かうが其処は既に瓦礫の山となっており、中の物資は全滅した後だった。

「間に合わなかった……」

「そんな……」

「散開して、まだ近くにマーカーネウロイが居るかもしれない」

「アレが怪しい！」

近くに建っていた銅像に13mm機関銃のワンタップ分を放つと銅像がネウロイ変化して何処かへと逃げる。

「いたぞおおお、いたぞおおおおおおおおお！！」

アランが叫びながら2丁の機銃を乱射する腰だめで撃っているのが弾幕こそ派手だが有効弾は少ない。それでもアランは叫びながら追撃を行う。

「ううううおおおおおおおおお！！ いたぞおおお  
おおおおおお！！」

角を曲がって視界から消えるが直ぐに見つかって街に銃撃音と窓や壁が壊れる音が響く。

「ぬうああああああああ！！ え、ええうふう、う、うう  
!!!」

両手の来る反動を気合いで耐えながら連射をしているのでアランの口から変な声が出る。

「止まれやクソツタレエエエエエエエエエエ!!!」

止まらないネウロイに叫ぶアランの猛撃にネウロイは逃げの一手だ。もしも人間だったなら必死の形相だろう。

「化け物めえええええええええええええええええ!!! ちきしよおお

おおおおおおおお!!!」

だが、ネウロイ以上に必死なのはアランだ。

殆どの弾がネウロイでは無く、街の人工物を抉っているだけで、ネウロイへの有効弾が生まれても、立て続けに着弾しないので有効打になっていない。

そして、当然ながら弾切れを起こす。

「あ」

「あ。じゃないですよ!」

アランを追い越してサーシャが攻撃を加えながらネウロイを追い掛ける。

アランは見失わない様に上空から追い掛けるがサーシャに何か思う所があったのか追跡と攻撃の手が緩むとアランもサーシャに気を回してしまいネウロイを見失ってしまう。

「サーシャ。大丈夫か?」

心配そうに声を掛けるアランにサーシャはアランに聞こえない声で呟く。

「私は……この街を、知っている……?」

〈如何しても、連射しちまうんだよな〉

マーカーネウロイの追跡を諦めて基地に帰投したアランはパ・ド・カレールのブレットに連絡を取っていた。

〈Ultra ShKASの4連装とか1分以内に撃ち切るぞ?〉

〈その為の12000発だろ? 1分で仕留める〉

受話器の先から重い溜息が吐かれる音が響くとブレットから喜色を漂わせる声が響く。

付き合いの長いアランにはこれが良い知らせの時のブレットだとわかってるので薄っすらと笑ってしまう。

〈へいいニユースですか?〉

〈Pー51がお前に支給される。なんでもパットン將軍からポケットマネーの援助があつたらしくてな? なんかあつたのか?〉

その言葉にアランには心当たりがあつた。

リベリオンの補給を受ける条件にウィッチの写真集を作つて国債にすると云つて何枚か撮つたのだがパットンが好みそうな写真にジョゼと下原、ロスマンに雁淵が悪ふざけかアランのユニットと背中に99式2号2型改13mm機銃を4丁と腕にに仮組みのShKA S2連装銃を括り付け、腕と肩にロスマンの9連装ロケットランチャーを2基背負わせるフルアーマーアランを作成して上から下原とジョゼで空から吊るして写真を撮っていたのだ。

写真集のコメントではPー40Q型では不可能です。の一文を読んだ火力馬鹿のパットンは密かに陸軍のウィッチで同様な物を行わせて実験。

結果は2000馬力オーバーでトルク特性強めのエンジンが有れば可能だとわかると資金捻出で開発が進めづらいマーリンタイプのエンジン開発にパットンは試作機の供給をアランにすると云う条件を付けてポケットマネーでの援助をした事で完成した試作機がアランの元へ送る目処が出来たのだ。

〈こつちでも火力馬鹿だつたんですね……〉

〈そうだな……それともう一つ〉

〈なんすか?〉

〈アフリカに1人、ストライカーズのメンバーが飛んで来た〉

その言葉にアランが受話器を落とすとブレッドが耳を押さえる。予想外の大音量に耳がダメージを受けた様だった。

〈因みに誰でしょう?〉

〈司令長官〉

〈霊長類最強の片割れか。死んだなアフリカのネウロイ〉

〈こつちに来て数分で既に20mmと7.7mm2門づつで地上型を血祭りに上げてる〉

〈強いなー〉

アランの言葉に盛大な溜息を吐くブレッド。  
へ空を飛べる霊長類で陸戦最強の霊長類が言っても説得力は皆無だ  
ぞ?<<

ブレッドに突っ込みにアランは盛大に笑った。

## 第14話 倒した筈の敵

ブレッドとの連絡を終えた後にアランは格納庫で改造銃の試射を行う為に銃を取りに来るとニパがサーシャのユニットに何かしようとしているのを見て、アランがニパの肩に手を置く。

「何をしている?」

「あわわ、これは、そ、その……」

「ユニットに落書きなんてしようとしたのか?」

責める様な口調のアランにニパは隠し通すのは出来ないと判断してアランに事情を説明する。

「私のユニットにサーシャさんが幸運をつてオラーシャ語で書いてくれたからそのお礼にてんとう虫でも書こうかなって……」

てんとう虫と言われてアランが頷く。

任地が欧州だった事もあってか多少は欧州の文化には慣れていたり事もあってかニパのてんとう虫にも一応の理解は出来た。

欧州ではてんとう虫は幸運を呼ぶと言われている。アランは肩から手を離すと早い内に切り上げろよと言いながらユニットを履いて射撃場へと移動する。

射撃場に移動するとアランが腕を伸ばして、腕に装着した2連装UltraShKASを連射する。

元々が航空機銃でフルオートしかない銃で毎分3000発という発射スパンは1秒で50発を吐き出す。

純正マガジンでは650発なので単純計算で11秒で撃ち切ってしまう。

だが、動作に異常は無い事を確認するとアランは満足気に頷いていると背後からロスマンに声を掛けられる。

「凄い連射力ね。そんな反動を抑えられる貴方も貴方だけだ」

「そうですね? それよりもそんな事を言いに来た訳じゃないでしょう?」

「見て欲しい物があるの」

そう言われて連れて来られたのはラル隊長の司令室だった。

「君に見て欲しい物がある」

そう言つて差し出したのは何かのスケッチだった。

「これは？」

「今回のネウロイの一部だ。コアを破壊した筈なんだが、ネウロイの気配は消えなかった。こう言つた敵は君達の世界の兵器に多く見られた。だからこそ君に見て欲しかった」

そう言われてスケッチをまじまじと見つめる。

異様に太い薬室に短い方針。2つの蓋つきカバーに後退機のレール。アランにはこの大砲を持つ奴は1つしか知らない。

「ドールアスカール……」

「ドールアスカール……なんだそれは？」

「ドイツ軍のキャニオンが作った地上戦艦です。短砲身172mm砲に設置式両用地雷に12・7cm二連高射砲を搭載した車体に34cm4連装砲とエネルギー放出機構を2基搭載したロボットを搭載した戦車です」

そしてサイズが通常の重戦車の十数倍のサイズだと告げるとラルとロスマンから血の気が引く。

カールスラントでもそんな物は作れない。出来たとしても置き砲台がやつとだ。

「明日からは砲撃ネウロイの方に行つてくれ」

ラルの言葉無言の敬礼で答えるとその場で後ろ向いて部屋を出て行く。

アランが完全に出て行くとラルが小さく溜息を吐いた。

「運が良かった……」

そう漏らすラルにロスマンが黙って頷く。

ラルは引き出しから一般兵からの報告書を取り出す。中身は今回の戦闘での消費弾薬と消耗部品の交換の有無、そして備考に書かれた街の被害だ。

「窓ガラス163枚、レンガ62個、木箱14個、看板3枚に瓶が推定で66本。無人の街とは言えこれ程の被害が出ると疎開先から帰つてきた住人から苦情が来るな」



「倒壊しているなら割り切れますが、中途半端に破壊されているとイライラしますからね。でも、驚いたから連射してしまっただなんて可愛い所があるじゃないんですか？　完璧超人よりも少し弱点がある位が可愛いものですよ？」

愛しい物を見た時の様な笑みを浮かべるロスマンにラルがフウくと鼻息を荒く吐くと口を開く。

「いや、あれは機関銃を2丁も持たせたのが問題だろう。トリガーハッピーの気質があるぞ？」

ラルの言葉の半分は当たっている。

ストライカーズでもアランのトリガーハッピーに似た癖がある事が判明した為にトンブソンSからフルオート機能を抜いた物を渡したがトリガーを破壊する。

ならばとスナイパーライフルを渡したら、狙撃能力が皆無に近く、スナイパーライフルの無駄という評価が下される。だが、腰だめで撃つと他の兵士より高い評価を生む事が判明すると腰だめでぶっ放す前提でショットガンを渡したら見事にマッチした。

そこからM1887を2連装化するまでは別の経緯があるが此処では割愛しよう。

これがアランがショットガンをコクピットに突っ込む様になった経緯だが、アラン自身は体質とは違い、連射力のある銃が好みで出来れば連射力のある銃を持ちたいのだ。

それが今回で叶い、深層心理にあったフラストレーションと驚愕からの思考回路停止であんな事になった訳だが、トリガーハッピーも併発していたのも無きにも有らずだ。

そんな事はさて置き翌日は編成変更でアランも雪原方面で飛行しているが今回の武装は今日付けで配備したUltraShKAS2連装2基とMP44が2丁に9連口ケットランチャーを2基だ。これならP140でもギリギリ重量範囲内に収まる計算だ。ただし、ストライカーユニットの場合はそこにパイロットの肉体という枷が出てくるがそこはアランダ。

パイロットの問題はアラン自身の筋肉と肉体強化の魔法で黙らせ

ている。

俗に言う、パイロットは出来るけどユニットが出来ない事を妥協してしまっただが、ユニットもパイロットも可能な範囲に纏めたフルアーマ化だ。無論ながら、上昇性能と高速性能、機動性能が下がるが対地攻撃には上昇性能や高速性能、機動性能よりも低空での安定性能と低速性能、防御性能だ。

安定性能は弾がばらけたり、墜落しない為。低速性能は速度が遅ければ遅い程に攻撃のチャンスが増えるからだ。そして防御性能は速度が遅ければ弾幕に晒される時間も増えるので方が一の命中弾でも耐えられる設計にしなければならぬがウィッチやウィザードの場合はシールドの強度と魔力配分の設定だ。

P-40の場合はそこまで防御より出来ないが低速性能と低高度での各種性能とトルクは強く出来る。

現在は防御に回している魔力を最小限に他の部分に分配している。

「凄い重武装ですね……」

隣を飛ぶ下原がアランに話し掛ける。

その顔は何処か引きつった様な表情だった。

「こっちの世界ではB-29やJU87を大量に派遣して何とか撃破だからな。相当な装甲で走るから撃破が大変だった」

だからこそ、これだけ重武装なのだと語るアランの顔には重さを感じさせない自然な笑顔が浮かぶ。

それを見た下原はもう何も言うまいと苦笑いを浮かべると前を飛ぶロスマンが全員に聞こえる様に告げる。

「もう直ぐ敵の潜伏していると予想される範囲よ。気を引き締めなさい」

普通なら階級が一番高いクルピンスキーの中尉なのだが、指揮能力の高さという点からロスマンが指揮を執っている。

ロスマンは自身の言葉に全員が了解と告げたのを確認すると手に持つ9連装ロケットランチャー、フリーガーハマーから1発だけロケット弾を放つと雪原の中から先日の戦闘で逃した大砲が現れる。

「うおらー」

大砲が見えた瞬間にアランが8発のロケットを放つと全てが大砲に被害を与え、コアを露出させるとそこをすかさずクルピンスキーが銃弾を浴びせて破壊する。

「此処まで威力があるかよ……」

アランの放ったロケット弾が野砲のコアを露出させるまでに破壊した威力を見た菅野が呟く。

サーシャの報告ではDP28軽機関銃に使われる7・62mm弾ではビクともしなかったネウロイの装甲だ。それを9発で破壊した魔力弾化されたロケット弾の威力もさる事ながら魔力を纏わせる・流し込むという所に開花させたアランの才能もある。

それでも、アランの目には敵を倒した時に見せる喜色も余韻も無い。

そんな目を見つめる菅野の視界の端が赤くなった瞬間に今度は青い光が視界全体を覆う。

アランがシールドを発動させた証だ。

「やつぱりかよ……」

当たって欲しく無かったと言いたげな表情を浮かべるアランの目の前にビームによって吹き飛ばされた地面から中央に丸く巨大な肩を持った胸像を半分埋めた様な物を持つ車体を挟む様に正方形に配置された車体を持つネウロイが現れる。

その姿はまさしく、ドールマスカーだったが、違うのはそのカラーリングだ。

車体に先住民的な模様を描く様に配置された赤い六角形の装甲に黒い六角形の装甲。前後の車体には艦船に積まれる様な2連装の高角砲が1基つつ計4基8門と中央の胸像前に2連装の対空機銃。

そして、胸像の肩から地雷の様な円盤を地面に置かれると4方向にビームを放つ。

突然の攻撃に全員が咄嗟にシールドを張るがアランのシールドが全て吸い込んでしまう。

それを見たドールマスカーはこれならどうだと高角砲や車体に存在する赤い部分から大量のビームを吐き出し始める。

「凄い弾幕……」

その全てがアランのシールドに吸われる訳だが、此処でアランのシールドに変化が訪れる。

「!? 回避しろー!」

アランの急な叫びに全員が反射的に反応して散開するとアランのシールドが突如として消え、アランが無防備となってしまいが下原が飛び込んでシールドを張ってアランを守る。

「Thank you。」

下原に守られながらフリーガーハマーから残った9発を高角砲に向けて発砲しながら叫ぶ。

「フリーガーハマーでこれかよ……」

飛んで行った9発の内4発が高角砲に直撃して高角砲を1つ破壊するが残った5発は車体の天板を叩くが破壊出来ていないのか無傷な装甲が白煙の中から現れる。

「まずは高角砲とかの武器を破壊しろ! そこ以外は簡単に破壊できない!」

高角砲の破壊を確認したタイミングで下原と離脱したアランが大きな声で告げると全員の火線が高角砲や対空砲などの武装の集中するが胸像の肩に当たるだろう場所の蓋が開く。

「なんだ……」

あそこは対空ロケット砲が格納されていた場所だと曖昧になりつつある記憶からサルページしたアラン目の前でドーラマスカーネウロイは肩のロケット砲らしく所からロケット弾の形をした小型ネウロイを放つ。

放たれたネウロイは自らに意思があるかの様に周りのウィッチ達に迫る。

分厚いビームの弾幕に小さな誘導弾に追い掛けられ攻撃が思う様に行かなくなる。

特にシールドが張れなくなったアランは顔に玉の様な汗が流れ始め、その汗が目に入った瞬間に動きを止めてしまう。

そこに誘導弾ネウロイが3機とビームが4本も迫る。

「やられるかよ！」

肩に背負うフリーガーハマーを捨てて左腕のU l t a r | S h K  
A Sで弾幕を張って1機を破壊するが残りの2機と4本のビームが  
迫る。

シールドが張れないだけで此処まで追い込まれる自分に嫌気がさ  
すアラン。

前まではシールドなどないパイロットだった為に回避しかない防  
御手段の中で突如と湧いた防ぐという手段に甘えていた。

それが奪われた途端にこの醜態だ。

アランは自身の運命を受け入れる様に目を閉じる。

目を閉じる瞬間に誘導弾ネウロイが目の前まで迫っていた。

## 第15話 新たな力

アランは自分の運命を受け入れるかのように誘導弾ネウロイが目の前に迫る中で目を閉じる。

そして身体にネウロイが突き刺さる感触と音が迫ると思っていた耳は別の音を拾う。

「アランさんー!」 「間に合って!」

自分を呼ぶ下原とジョゼの懇願が籠る声を拾い目を開くとジョゼのシールドに防がれたビームと下原の銃撃に破壊された誘導弾ネウロイが移る。

「今、今さっき諦めましたよね!」

ジョゼの珍しく鬼気迫る声で告げられた言葉にアランが驚いた様に目を見開く。

そんなアランの背後に誘導弾ネウロイを破壊しながら下原が張り付く。

「私達はアランさんとはそんなに長くない付き合いでしたけど、死ぬ瞬間まで引き金を引くような人だって事は分かっているつもりです!」

下原の言葉の後にシールドを収めて、DP28軽機関銃を放ちながらジョゼが告げる。

「死ぬ瞬間まで戦い続ける。死ぬ瞬間まで誰かを守る為に引き金を引き続ける。そんなアランさんだから私も定ちやんも助けるの! 諦めるアランさんって見たくありません!」

そう叫ぶジョゼの先にドローラマスカーネウロイの胸像の肩だと思っていた場所が稼働して、片舷2本づつ、計4本の砲口が迫り出し、収束ビームを4発ジョゼに向けて放つ。

1本なら兎も角、4本だ。ジョゼのシールドで防げる物では無い。下原がジョゼの名を告げながら手を伸ばすがアランが下原とジョゼを腕で払い除ける。

下原とジョゼは払い除けられたタイミングでアランがサムズアツプをしながらビームに向けて叫び声を上げるアランを見つめる。

「アランさん!!」

2人が叫ぶと同時にアランの身体がビームに飲み込まれる。それを見た全員が声にならない声を掠れた声で弱々しく吐き出す。

どれも仲間の死を信じたく無いと言う様な物ばかりだ。特に下原とジョゼは重症でその場で泣きながらホバリングしている。ジョゼに至っては下原に泣きついていてる。

ドーラマスカーネウロイも撃破を確信した事で砲身以外の全ての部分からビームを発射するのを止めるが何かに気付いた様に直ぐにアランが居た場所に収束ビームを作り上げてから片っ端に放つ。

「一体……何が……」

「みんなー あれを見るんだ!」

クルピンスキーが何かに気付いてネウロイの収束ビームを指で示す。

ネウロイの赤いビームの中に綺麗な青い明かりを放つ光が漏れ出ている。

その明かりはネウロイのビームを打ち消しながら徐々にドーラマスカーネウロイに迫る。

誘導弾ネウロイもアランがいた場所に360度とあらゆる角度から迫るがその全てが悉く破壊される。

その青い明かりはビームやネウロイを掻き消しながらドーラマスカーの中央部に突き刺さると周囲の装甲を破壊するのでは無く融解して貫く様に破壊する。操縦席の様な装甲版の下に隠されていたコアと対空砲のコアを破壊すると青い明かりは徐々に細まる様に消えると青い明かりの中からUltarShKASの銃口から湯気を出したアランが現れる。

ドーラマスカーネウロイも残ったビームを放つ赤い部分と高角砲からビームを放つがアランは再びシールドを展開して防ぎながらUltarShKASのフルオートを薙ぎ払う様に放ち、高角砲を2基とも破壊する。

「残り30!」

残弾は数ではなく秒で数える。

これが長い時間を空中戦に費やしたストライカーズの共通認識だ。自分の持つ機銃の連射速度と装填弾数を把握してどれだけ引き金を落としていたかで数える。

アランのUltraShKASは3000発入りヘリカルマガジンを1本ずつくっつけた4本で左右で同時射撃で弾を吐き出す様に設計しているので同時に放てば、腕の銃は1分で撃ち切ってしまう計算だ。

「おい！ ネウロイが！」

アランが高角砲を破壊した事で全てのコアを失ったのか車体が所々から内側の爆発によって吹き飛ばされる様に破片に変わっていくのを見た菅野がガッツポーズをしながら叫ぶがアランは周りに警戒する様に告げる。

菅野がそれに反論しようとしたタイミングで破片を突き破って胸像だと思っていた物が垂直に離陸してウィッチの前に現れる。

その姿は丸く巨大な肩に繋がった腕には4本の大口徑砲に肩には誘導弾ネウロイを放つランチャーにエイリアンの様に細長い顔にスリット状の細長く赤いラインの目は正しく巨人の上半身と言うべき威圧感を放っている。

「おい！ コアは破壊した筈だろ！」

「これが本体だ！ あの車体はこれを格納する器だ！」

菅野の叫びにアランが叫び返すとドールアムスカーネウロイの方が開くと片方に1つづつ大きなコアが現れるとコアからビームが拡散する様に放たれる。

アランがすかさずシールドを展開しようとしながら回避運動を行うと今度は問題無くシールドは展開され、ビームを吸い込んでいる。『それなら吸い込まれたビームは何処に消えたのか。吸い込むだけでは終わらないと考えるのが普通なの』

アランは回避と攻撃を行いながらシールドを発動させた日にロスマンから聞かされた言葉を思い出していた。

アランはビームが迫る中で無意識に銃を向けると本能が囁き、銃を向けた瞬間に自身の身体を包む程に大きな青いビームを吐き出した。



そのビームは迫るビームを打ち消しながら敵に迫り、ドールマスカ  
ネウロイの車体中央を破壊し尽くした。

ロスマンの言葉通りアランのシールドも吸ったビームは何処かに溜めており、その溜めたエネルギーを銃口からビームとして吐き出せる。そして、一定値溜めるとシールドが張れなくなるが一定値を溜めると敵のビームを消滅させながら飛んで行く程の破壊力を持った一撃を放つ事が出来るようになる。

問題はどれだけ溜めたのか自分にはわからない事だ。つまりは自分がいつ発動できなくなるのかわからないと言う事だ。

「弾切れ！」

UltarShKASが弾切れを起こすとユニットの背面に装着していたMP44を取り出して構える。

弾幕が薄くなったタイミングでドールマスカネウロイが肩から誘導弾ネウロイを発射し、肩のコアからは拡散するビームが放たれる。

「ジョゼ！ シモハラ！ 誘導弾を！」

「うん！」「はい！」

アランがシールドを展開して拡散ビームからジョゼと下原を防ぎ、ビームを防がれているジョゼと下原が誘導弾ネウロイを破壊する。

ドールマスカネウロイは拡散ビームを放つのを止めて肩を閉じようとしたタイミングでアランは腕に力と魔力を込める。

「なっ！」

魔力がアランのUltarShKASに侵入すると銃口から魔力が溢れ出し、4本の銃口の前で球体状の魔力塊を作り出した事に驚くが、更に魔力を流せと叫ぶ本能に従って魔法力を更に流すと球体状の魔力塊1つから1本ずつ。計4本のレーザーを吐き出す。

最初の1本が装甲の硬度を弱体化させた所で2本目が同じ場所に飛び込んで装甲を破壊し、3本目が露出したコアに着弾してその形を歪ませるがやはり破壊できない。

破壊を免れたコアは再生を始めるが再生中のコアに4本目のレーザーが突き刺さるとコアは破壊を起こし、右肩を破壊するがコアを破

壊した肩が復活すると拡散ビームをノンタイムで放つ。

「どういう事だ！」

「しつこいよー！」

クルピンスキーがMP44をフルオートで放つと右腕の4連装砲に銃弾を放つと身体の各所に存在する赤いパーツからビームが放たれ、その殆どがクルピンスキーに集中する。

クルピンスキーはシールドを張って何とか耐えようとするが度重なる追撃に腕のビームも組み合わさるとクルピンスキーが耐えられずにシールド越しに吹き飛ばされて、隙を晒してしまう。

其処に誘導弾ネウロイが迫るが寸前で菅野がクルピンスキーの援護に回った事で何とかクルピンスキーは危機を脱する。

「このー！」

ロスマンが腕にロケット弾を5発放つ。

放たれたロケット弾は2発が迎撃されてしまいが残った3発が腕の4連装砲に命中し、破壊には至らず、砲身に守られる様な位置にあったコアを見つけるのがやつとな状態だった。

「喰らいやがれ！ 剣一閃！」

そのコアに急接近をした菅野が固有魔法で強化した拳を叩きつけてコアを破壊すると右腕の連装砲が崩壊する。

腕を破壊されたドーラマスカーネウロイは金切声に近い叫び声の様な物を上げると肩からコアを露出させて拡散ビームを放つ。

至近距離に居た菅野がギリギリでシールドを張るがクルピンスキーと同じ様に吹き飛ばされるがアランがドーラマスカーネウロイと菅野の間に飛び込んでシールドを張って菅野と共に他の仲間も守るとロスマンが上昇して2発を放つ。

2発のロケットは迎撃網をすり抜けて肩のコアに命中するとアラン以外がコアに向けて銃撃を集中させた事で両肩が破壊されるが左肩だけは再生を開始する。

「やっぱり、腕を破壊しないと……！」

肩から腕の先と再生を遂げて4連装砲からビームを放つ。

3発は吸い込まれるが此処でアランのシールドに弱点がある事に

気付かされる。

「しまった!」

アランのシールドは小さなシールドに連結した大きなシールドが2枚回る事で大きなシールドを作っているが簡単に言ってしまうと翅が大きいプロペラをシールドにしている様な物で当然ながら隙間が生まれる物で運が悪ければそのシールドの隙間を抜けて飛んで行く事がある。

今回はその運が悪いが発動し、ロスマンにビームが迫る。

「先生!」

ロスマンは咄嗟に身体を捻るが遅かったのかまだ弾が残るロケットランチャーを掠める。

ロスマン咄嗟にランチャーを投げ捨てた瞬間に爆発を起こした。

アラン以外の周囲のメンバーはシールドを張る事が出来た為にランチャーの破片から身を守る事に成功するがロスマンは急過ぎた故にシールドで破片を守る事が出来ず、その破片が身体に突き刺さる。

「先生! 無事!」

「大丈夫よ……肩に破片が刺さっただけだから……」

クルピンスキーがロスマンを守る様に飛びながら告げるとロスマンは左の二の腕を右手で押さえながら苦痛に歪んだ声で告げる。

破片のサイズこそ小さいが深く刺さっており動かすは辛いと言う事は素人目に見てもわかる。

「中尉、申し訳無いです、ロスマン先生を連れて離れて下さい。破片は抜かずに強く押さえて下さい。抜くと出血が酷くなりますから!」

アランがMP44を放ちながら告げるとクルピンスキーはロスマンに肩を貸しながら離脱を試みるがドーラマスカーネウロイはそれを逃さないと言わんばかりにビームを放つが残ったメンバーがシールドを張って2人の離脱を援護する。

「こっちを向けてんだ!」

正面しかカバー出来ないアランを見て、側面に回り込んで攻撃を仕掛けるという動きを見せたドーラマスカーネウロイにアランは両手に魔力を集中させるとMP44の銃口前に魔力塊が生成され、レー

ザーが吐き出される。

体中央の装甲を2発のレーザーが破壊すると脈打つ様に強い輝きを放つコアが現れる。

ドーラマスカーネウロイはメインコアとも言うべきコアを見つけられた事に焦ったのか全身に配置されたビーム発射機構からビームを吐き出し続ける。

誘導弾ネウロイを発射していた場所からは誘導弾ネウロイを撃ち尽くしたのかビームが放たれている。

流石のアランもシールドで弾幕を防ぐのがやっとだったがジョゼと下原がアランの背後から弾丸をコアに集中させて破壊するがその直前に目が何回か点滅すると残った腕から4発の砲弾が放たれた。

「まさか!」

「マーカーネウロイの諸元を!?!」

飛んで行くネウロイの体組織で生成された砲弾がペテルブルクに向けて発射される。しかも、その砲弾はまだ、この時代には無いMR SI 砲撃で発射されていた。

M R S I 砲撃とは簡単に言ってしまうと M u l t i p l e R o u n d s S i m u l t a n e o u s I m p a c t の略で日本語に直すと多数砲弾同時着弾となる。簡単に言うると一箇所無いし1つの目標に発射した全ての砲弾を同時に着弾させると言う物で非常に高い制圧能力を持つ砲撃だが、可能な砲は自動装填装置付きのしかも高性能な物を搭載した物に限られる。

ドーラマスカーネウロイは砲を8門持っていた。つまりは同時に8発撃てる訳だが半分は死んでおり、放たれた砲弾は4発。

ペテルブルクには3人のウィッチが作戦行動をしており、1人が1発抑えられるとしても1発は抜けるし、そもそもウィッチのシールドで防げる攻撃では無い。

「フアック! このままで終わらせるかよ!」

U l t a r r i S h K A S と M P 4 4 を構えて魔力を集中させる。

U l t a r r i S h K A S と M P 4 4 に魔力塊が生成されたのを確認すると右腕を伸ばして魔力を集中させると U l t a r r i S h K A

Sからレーザーが発射され、砲弾の中央を破壊すると砲弾が爆発するが最も低い高度のの砲弾だった事もあり他の砲弾に影響を及ぼす事は無かった。

2段目の砲弾にはMP44をから放たれたレーザーが砲弾中央から少し下にズレた位置に当たり、照射されたレーザーが砲弾の下に抜けると砲弾が爆発する。3段目も同じ要領で左のMP44に破壊されるが最後の砲弾は高度と距離の関係で射程距離ギリギリの場所を飛翔している。

「当たれ！」

左のUltarishKASから放たれたレーザーが砲弾に当たると思ったが砲弾はレーザーとレーザーの間をすり抜けてペテルブルクへと飛んで行く。

アランは飛んで行く砲弾を追う様に加速するがユニットの限界を理由に雪原に落ちるが、インカムからニパがシールドで防ぎ、無事だと言う通信が雁淵から入るとアランは背中から雪原に倒れた。

その顔には何処か安堵したような笑みが浮かんでいた。

## 第17話 サトウルヌス祭開催の前に

「うん？」

朝のトレーニングの最後に滑走路往復をしていたアランがソリで遊んでいる雁淵・菅野・ニパの2人を見つける。

最初は菅野は押していたがジャンケンで負けた雁淵が2回目の押しを担当したタイミングでニパが何かに気付き、菅野が振り返るがそのタイミングで雁淵がコケた。

「ふざけんなー！！」

菅野の叫びを聞いたアランが只事ではないと滑走路から飛び降りて凍った川に降り立つとソリに向かって走るがソリは薄い氷の上に到達したのか水没し、ヒビが入って脆くなった氷の上をアランが走った事でソリよりも手前にアランが落水した。

「成る程な」

落水したアラン達が身体を温めた後に食堂に集まるとジョゼから雁淵に風邪が発症したと言う報告を受ける。

それに驚いたニパが変わってアランが風邪が珍しい病気なのかと疑問を口にするロスマンがウィッチは怪我や病気を発症するのは魔法により守られているので稀である。と話す。

「ただ、肉体的、精神的疲労が溜まるとウィッチでも病気にかかる事があります」

「疲労!? 私が朝から連れ回した所為だ……」

「それだけが理由じゃないだろ？ 魔法は魔力によって強弱が出るらしいから、雁淵の魔力が弱かったのに加えて候補生がいきなり前線に出たら細かな調整が出来る前に酷使するから疲労が溜まりやすくなる」

「それに厳しい任務が続いた事が大きいでしょうね。もう少し、こちらでも考慮すべきでした……」

サーシャの言葉にアランは違うと首を振る。

「住んでいる場所から環境が大きく変わった場合はその環境に慣れさせる必要がある。それを怠って訓練や任務に就けば当然ながら身体は傷付く。それに体調管理は自己責任だ。もう少し雁淵に自分の身体を自分で労わると言うのがわかっていけば防げた問題だ。まあ、初めての遠距離出兵だから仕方ないだろう」

アランがそう締めくくったタイミングで下原が朝食を持って来る。その朝食に色々なメンバーが不思議そうな表情を浮かべる。

似ている料理はあるがどれも何かが決定的に違う。ロスマンに至っては煮えているのか疑問視をする始末だ。

アランは日本で任務をした際に似た様な物を食べた事がある様に思ったがどうにも思い出せないでいた。

「日本で食べた気がするんだよな」

「これ、すいとんか？」

菅野の言葉に下原は申し訳無さそうな顔で物資不足故にこんな料理しか出せない事を謝る。

雁淵以外はブリーフィングルームに集まり、まずは現状確認と認識を合わせる事にする。

「ムルマン港からの補給が絶たれた状態の上に、先日の砲撃で燃料と武器、弾薬は無事でしたが瓦礫の撤去作業が難航していて取り出せない状況で、不足気味です。さらに第2貯蔵庫の食料は全滅です」

「スオムスからの援軍は？」

「頼んではいますが、向こうも余裕が無い状況です」

「北海経由の陸路だったか？ 補給にかかる時間が長いな」

ロスマンの報告にアランが発言するとサーシャが上層部の現状を報告する。

「現在、補給線奪還作戦を立案中ですが、食料の備蓄が足りません」  
「暫くはずっとアレを食べることになるのか。えっと、ちんとん？」  
「すいとんだ」

クルピンスキーの言葉に菅野が突っ込みを入れる。

「現状で打開策は無し。補給が改善するまで待つしか無いと言う事

か」

「明日は基地恒例のサトウルヌス祭ですが……」

「今年の祭は中止だな」

「ええー!!」

ニパの叫びがブリーフィングルームに響き渡る。

そんなニパにアランは何を馬鹿な事を言っているんだと言わんばかりの目を向けていた。

「カリブチの様子はどうか?」

「さつき起きた所だよ」

ブリーフィングを終えたアランは早々に薪割りの仕事に従事していたの身体の所々に木片を付けた身体に荒縄で縛った薪をもって雁淵の部屋に来ていた。

基地の暖房を燃料不足と言う事で停止される事となり、アランはせめて各部屋にある暖炉くらいは使える様にと薪を多めに搬入するのも含めて雁淵の様子を見に来ていた。

「体調は? どうだ? 寒く無いか?」

入って薪を置きながら雁淵を心配するアランに雁淵は大丈夫ですと告げるか直ぐに顔をベツトに伏せてしまう。

「私……只でさえ役立たずなのに風邪ひいて倒れちゃうなんて……」

雁淵が悔しそうに布団を握るとアランが雁淵の額に右手を置いてベツトに押し倒すと左手で布団を被せる。

「そう思っているなら身体を休める為に寝ろ。風邪の原因は疲労による免疫力の低下だ」

そう言いながら離れたタイミングで雁淵がクシヤミをする様な素振りを見せたのを見て、アランがボックスステップで逃げるとクシヤミで飛来した物が菅野に襲い掛かる。

「速く洗いに行け。移るぞ?」

「言われなくても行くってーの!」

菅野が部屋を出るとアランもニパに出て行くように背中を押しして



部屋から出ようとするが出る直前に振り向く。

「今のお前の任務は風邪を治す事だ。ゆっくり休めよ。それ以外は考えるな」

それだけ告げると返事を待たずに部屋を出て行くとアランはキッチンへと訪れる。

すいとししか作れないらしいがつまりは小麦粉がある事を意味しアランの中にはそれだけで病気や怪我人など食欲が下がっている人間に食べさせるメニューを作るには十分だった。

「クツソ時間が掛かるのが難点だよな」

そう言いながらボウルに入れた小麦粉に塩と水を入れて練った生地を作る。

これを適当に千切って煮立たせたらすいとんだが、此処でチネると言う作業に変えると小麦粉で作った米。チネリ米が出来上がる。

これはストライカーズに日本人パイロットが本格的参加して暫くした時に日本人達が『米……食いたいな』と誰かの呟きが発端となった。

その時は戦線を作らないキャニーンに対してストライカーズがとっていた手段はこの世界の統合戦闘航空団に近く、それぞれが担当領域を決めて、それぞれの区分に複数の基地を配備すると言う物だったが、様々な理由で行く基地が無い兵士は信濃型空母を大型に改造した航空戦艦『ストライカーズ』に乗船しており、アランもブレットが来るまではこのストライカーズに多くの日本人達や他国の部隊が居ない、足りないメンバーと乗船していた。

無論ながら多国籍という事で色々な国の炊事班がいるが殆どが米食ではなくパン食文化圏と言う事で米が無い。でも、日本人は米が食いたい。

そこで日本人達は気付いたのだ。小さくチネった小麦粉の生地をカレーに突っ込んで煮込んだらもち米を入れたカレーに限りなく近くなる。

その事を発見すると定期的にチネリ米制作が始める。そして他国の兵士に広まったのはその気になれば流し込みがし易い形状である

事だった。

流し込みがし易いと言う事は怪我や病気で食欲が無い奴も食べ易いと言う事でチネリ米は一定量が作成され、米が取れる国に停泊した時は米を詰め込む様になった。

因みに日本の米が1番美味しいと言うのは共通認識だったが、日本の米に合うメニューで艦内のみ第3次世界大戦が起こったのは余談である。

「うーん」

そんな経緯があつてか雁淵の為にチネリ米を下原とジヨゼを巻き込んで作り始めたアランだが、始めて10分が経った頃にアランの手が止まった。

それはまな板の上に置かれたチネリ米を改めて見た事が原因だった。

此処で問題だがチネリ米は個体差が無駄に大きいのだが何故かわかるだろうか？

正解への手がかりはその作り方だ。

チネリ米は普通に小麦粉を練って生地を塊を作り、そこから手作業でチネる。

そう、チネるのだ。つまりは指の径によってチネり易い大きさが生まれる。そしてそれが筋肉モリモリマッチョメンのナイスガイがチネって終えれば……

「……大麦ですか？」

下原の声が耳を打つ。

そう作りたいのは米だ。だが、アランがどう足掻いても指のサイズで大麦が生まれる。

これはどうしようも無い事実である。

「……問題無いゾイ」

「語彙力!？」

アランとは思えない声のアランから聞こえるとジヨゼが突っ込みながらチネリ米を作っているとニパと菅野がやって来る。

内容は可能な限りで構わないからサトウルヌス祭をしたいと言う

内容で、料理をどうするか相談に来たのだ。

アランも何とかしてやりたいと言う気持ちがあるがアイデアも物資も無い状況でどうするのかという状況だったがニパの発言が状況を打破する。

「アランの世界にしか無い料理ってあるかな？」

「向こうの？ うーん……中華料理があつたな。こつちだと国が消滅してるけど結構美味いんだ。仲間が懐かしいって言って食ってたな」  
記憶を探っているとフライングタイガースに所属していたパイロットが懐かしの味と称して食べていたメニユーを思い出す。

「此处にある食材で作れますか？」

「肉があればいけるから取ってくる」

ナイフに刃こぼれが無い事を確認しながら部屋を出て行くアランをニパと菅野が必死に止める。

無いなら取ってくる、作ればいい精神が変な所で発露していた。

「ニパさんと菅野さんは祭をやるうとしてるようです」

「なら今日は2人は非番だな」

ロスマンはニパと菅野が隊長には秘密で行おうとした事を報告すると意外にもラルからは肯定的な意見が出て来る。

「寛大なんですな」

「そうじゃ無い。今は哨戒任務も減らして次の作戦の備蓄がしたい状況だ」

「あら。てつきり隊長もお祭りに興味があるのだと」

ロスマンの言葉にラルは何も返さないで居ると内容がクルピンスキーが行った虚偽情報の流布についてになるとラルはサトウルヌスにはツリーが必要と言う事でモミの木の伐採を命じた。

「(なんだかんだ言っても隊長も興味はあるんですな)」

ロスマンは内心で思いながらも口に出さなかつたのはラルの性格

なら真顔で反対するだけで決して認めないとわかっているからだ。  
そんなこんなで当初の予定から少し外れながらも雁淵の与り知らぬ場所でサトウルヌス祭が始まろうとしていた。

## 第17話 新たなる精鋭4人

パ・ド・カレー基地に90機ものC-53B スカイトルーパーが駐機して、その翼を搭乗員と共に休めている。

このスカイトルーパー達はブリタニアから502基地への緊急物資輸送任務に従事するブリタニア軍の機体である。

彼らはここ、パ・ド・カレーで荷物を満杯になるまで載せ、北海經由の極力安全（戦時中に絶対安全な航路など存在しない）なルートを取ってペテルブルクまで行く訳である。

ルートの関係でその旅は傾い4000キロを超える長旅となる。

さて、突然で申し訳無いが、片道で4000キロ、往復で8000キロ以上を飛ぶと言われて少し軍事兵器に詳しい方なら此処で「は？」となるだろう。

C-53B スカイトルーパーだが、その航続距離はフェリー巡航で約5800キロで、これだけでも航続距離不足に加えて、当然ながら満載積載ならば航続距離は落ちる。そして襲撃があれば加速や迂回を強いられる訳であり、4000キロの旅は敵の襲撃も考えると不可能に近い困難さだ。

しかも、行く場所は物資不足故に着陸は出来ても、燃料補給は見込めない。

つまり、この輸送作戦は決死の作戦である。こんな作戦は成功する筈が無いと誰もが話す中でブリーフィングループに入ってきたブレッド・フィリップ少尉が指示棒で通るルートと護衛ウィッチの数を報告するといよいよその手段についての説明を開始する。

「C-47、ではなかったな。C-53Bを操縦する君達にとって、片道4000キロを超える旅は不可能だと言うだろう。だが、安心して欲しい。成功する見込みは作っている」

ブレッドがカバンから2つの書類を取り出す。

「まず、部隊を4つに分ける。物資を載せる15機編成の部隊を1つと燃料を載せる15機編成を5つだ。まずは最初にこのルートでムルマンを目指す」

片道3000キロの道を見て此処までは可能だがそこからどうするのかと言う話になるが1人の操縦士が気付く。

「少尉。ムルマンで部隊を分けるのでしょうか？」

「正解だ。まずはムルマンまで移動して物資を積んだスカイトルーパーに給油を行う。この給油作業には15機が割り当てられる。そして物資を積んだスカイトルーパーは離陸し、残りの30機に詰めた燃料でカレー基地に帰投。カレー基地にて燃料を補充と搭載を行いムルマンまで向い、空荷の90機で帰る」

つまりは帰りの分は軽くなる分燃費が改善するから半分をムルマンに残して半分でカレー基地に帰って、帰りの分の燃料を山分けすれば帰れると言う摩訶不思議な作戦は通達される。

わかりやすく言うと物資輸送の機体を返す為に燃料を運ぶ機体を用意して燃料を運ぶ機体を返す為に倍の機体を用意すると言う物だ。

これならやれるとみんなが頷くがこの作戦で計算を忘れている所がある事に誰も気付かず、やがてこの作戦が後世で摩訶不思議な作戦工程の作戦を実施して成功させるブリタニア軍と言う伝説を作る最初の1歩となる。

「あれがー」

編隊を組んで飛ぶC-53B スカイトルーパーの隊長機に乗る副パイロットが自分の座席側から近づく4人の人影を見つけて声を上げる。

「あれが噂のウイザードか……」

C-53B スカイトルーパー隊には危険な前線輸送と言う事で護衛のウイッチを付ける事になっていたがブレッドが訓練を付けた4人のウイザードを担当に回す事にした。

「まさか、あいつに飛び方を教わるとは思わなかったよな」

それはこの世界に流れ着いたストライカーズでも異色を放つ部隊

であり、とある事情からこの世界でも異彩を放つ存在であった。

そして、勝手が違い過ぎるこの世界の先輩であるブレッドが様々な方面で混乱を防ぐ為にパ・ド・カレーで訓練と教育を施したをメンバーを実際に実戦に出していいのかの試験と共に難易度ルナティツクの経験を積ませる事。そして、こんな無茶を押し通せる実力がある事を証明する為の実績を積ませるのも目的だった。

この4人の恐らく隊長で有ろうメンバーが黒い革製のコートを風にはためかせながら輸送機部隊の間を高速で突っ切ると先頭の隊長機の前に来ると反転し、渋く大人の顔とも言える顔を見せる。

「なんだ……あの武装は……」

ブリタニアのウィッチに変わって派遣されたウイザードの武装を見た機長が声を漏らす。

長い事輸送機に乗っている彼からして言えばウィッチを見るのは前線に緊急物資を運ぶ程の腕になれば難しい物では無い。

そう言える程に実力を持ち、多くの時間を空で過ごした彼でさえそう言わざるを得ない武装をしていた。

黒い革コートの上から茶に黒を混ぜた色のベルトを腹に巻き、刀の様にぶら下げられたP108アーティラリーが目を引くが、それ以上に背中に立てて担がれているFlak18 37mm機関砲だ。

「私はケルベルト・ファン・カスペン大佐である！これが私達が守る隊か？」

尊大で不審な態度に見えるがそれが許される貫禄を持っている。

そう感じた貴重な嫌そうな顔をする副パイロットを放って肯定の通信を入れると秘匿回線での通信が入り、優しそうな声が響く。

「へすみません。ファン大佐はあんな言い方ですけど、良い人なんですよ」

そう言つて首を回すと右側に並ぶように飛ぶウイザードが見えるが頭には耳どころか頬まで覆うフリッツヘルムにフィルターが1つのタイプのガスマスクを付けているが改造されているのかマスクの中に通信機があるので声がしっかりと聞こえる。

「ブフォ!?」「ブフ!!」

通信を入れたで有ろう兵士の武装を見てパイロットの2人が嘖き出す。

顔の装備もそうだがまず目に入ったのは盾だ。何の飾り気も無いが折り畳み機構が取り付けられた四角く黒い盾だ。そして右手に握っていたのはカールスラントのMG151／20機関砲なのだろう。と言うのが見た者に与える印象だ。

何故なら彼のMG151／20は銃身には突けば厚い刃幅の槍で振り下ろせば形状が片刃の剣に似た斧とも取れる刃が付いている。

〈……そうなのか……ところで、君は？〉

〈ああ、わ、自分はエルベルト・フィン・カスペン少佐です。そんなに畏まらないで下さいね？〉

エルベルトはケルベルトに指示を貰ったのか敬礼すると輸送隊の左翼に展開したタイミングで別の兵から通信が入った。

〈すまない。驚かせたかな？ 私はオルベルト・フォン・カスペン中佐だ〉

ケルベルトと同じ恰好で刀の様にぶら下げている銃がレッド9をフルオート・カービン化したレッド9・シュネル<sup>ド</sup>フ<sup>ト</sup>ォイヤー<sup>ス</sup>カービン<sup>ス</sup>とでも言うべき銃に変わり、顔も金髪碧眼の好青年と言う印象の人物が話しかける。武装は変わり映えのしないMG151／20を2丁だ。

背中に37mm砲を担いだワイザードにガンランスとも言える銃に盾を持ったワイザードを見た後にかなりの重量を誇るMG151／20の2丁持ちは普通に見えてしまう。

〈ムルマンまで護衛を担当する。それと後ろもついている〉

オリベルトが後ろを向くと通信機からは楽しそうな声が響く。

〈ク

〉へりオス・F・カール大尉です！ 武器は気にしないで！〉

そういう彼は薄い茶髪に琥珀色の瞳、白い肌とアメリカの元気な田舎坊主を思わせる普通な姿をしていたが持っていた武装がAN／M2 12.7mm重機関銃を4つも束ねた物と言うとんでも無い武装だった。



「もう何も突っ込むな」

「OK」

機長の言葉に副パイロットは震える声で応答する。

4人のウィザードがついた輸送部隊は問題無くムルマンへと到着すると予定通りに整備と給油を行う。

此処で整備不良が無い事を確認すると物資を詰めた15機が4人のウィザードと共に飛び立つのだが、途中でとある出会いを果たす。

「君は？」

サンタが着るような赤と白の服を着た2人のウィッチにケルベルトが声を投げると白い髪に儂そうな印象を受けるウィッチが敬礼を返して名乗る。

「サーニャ・V・リトヴァク中尉です。スオムスから502への物資輸送護衛についています」

「そうか。私はケルベルト・ファン・カスペン大佐だ。よろしく頼む」ケルベルトが話すと長い銀の髪を持ったウィッチが話す。

「スオムス空軍少尉、エイラ・イルマタル・ユージェイライネンダゾ」

エイラの自己紹介が終わったタイミングで残りのメンバーからも階級が高い順に自己紹介を終えるとサーニャの魔導針がネウロイを捉えて報告に上げる。

「聞いたな。カール大尉とフィン少佐は直掩に付け。フォン中佐は前衛、私は後衛に付く」

「私達は？」

「君達が護衛するのはソリだったな。そちの直掩に着いたらどうだ？」

ケルベルトの声にサーニャとエイラは頷くと地上を滑走するソリの直掩に付くべく高度を下げる。

「敵の種類と数は？」

オルベルトが前に出ると同時に目視で確認出来る程に大きなネウロイが接近しているのを確認すると質問を取り消しながら銃の安全装置を外す。

相手のネウロイはスパイクがついた丸い球体の形をしたネウロイ

だった。

ケルベルトも目視で確認すると肩に掛ける様に37mm機関砲を構えて、搭載したスコープを覗き込む。

「……そー」

肩から37mm弾が放たれる。

強装魔力弾に改修された37mm弾はネウロイの装甲を充分に穿つとネウロイが2つに分かれ、我ら所には小型ネウロイの集合体が発射される。

「パラサイトファイターか……」

MG151/20を構えてオルベルトが攻撃を開始する。小型ネウロイは20mmという大口徑を喰らって過貫通を起こして他の小型ネウロイや母機にまで被害を与えるが多過ぎる敵に圧迫を喰らっていたが、ケルベルトから発射された37mm弾が空中で爆発するとパチンコ玉の様な形をした魔力塊が小型ネウロイにめり込み、めり込んだ物から爆発する。

対空爆裂散弾とも言える攻撃に穴が空いた小型ネウロイだが、母機からの直接攻撃がケルベルトに集中すると2人の防衛を突き破る機体が現れる。

〈数機ぬけたぞ！〉

ケルベルトが通信機に叫ぶと同時に抜けた小型ネウロイが破壊される。

砕かれた破片の先には盾の淵に銃身を乗せて安定させたMG151/20を構えるエルベルトが居た。

小型ネウロイはオルベルトよりケルベルトの方が突破し易いと思っただけかケルベルトの方から抜け出して輸送機に迫る。だが、迫った小型ネウロイは悉くが破壊される。

「9ヤードをお見舞いしてやる！」

カールの12.7mmの雨に晒された小型ネウロイが吹き飛び、ケルベルトを突破したネウロイは漏れなく12.7mm弾の嵐に飛び込む事となり、破壊される。

過貫通に弾幕、面制圧と子機が完全に撃墜スコアにしかなくなっていな

い状況になれば大量にあつた子機が全滅してしまう結果となるのは当然である。

遂に母機はお互いに引つ付き完全な球体になると巢を突いたスズメバチの如くビームを吐き出しながら移動を開始する。

「大佐！」

「わかっている！」

オルベルトが502基地へ近付くネウロイを見て、ケルベルトに警告するとケルベルトも怒鳴る様に返すと37mm弾を放って気を向けようとするがネウロイは502の方向に進みながらビームを放つて来る。

「大佐！ 自分に先陣を切らせて下さい！」

エルベルトがゴーグルの向こうから決意と覚悟に満ちた目を向けてくるとケルベルトは頷く。

「わかった。俺の合図と同時に突っ込め！」

ケルベルトが37mm弾を魔導式対爆裂散弾に変換して、有り弾の全てを放つ。

爆裂散弾は数発がビームに当たって蒸発してしまうが殆どが命中して装甲を著しく破壊するとコアが姿を表す。

「行け！」

「ヤー!!」

盾を斜めに構えて顔以外を防ぐながらガンランス化されたMG151/20を放ちながら距離を詰めるがビームの弾幕が厚すぎる時はMG151/20から魔力と見た輝きを放つ雷を纏った弾丸を放つ。

雷を纏った弾丸は一定量進むと弾けるように広がり、一定範囲のビームを遮断してしまう。

ネウロイは分裂して雷に阻害されない場所からビームを放とうとするが上空に移動していたブリックと同高度から2門のオルベルトが放つMG151/20の弾丸を喰らってコアの無い方が破壊され、残った本体の方のビームは盾で防がれてしまっている。

「弾切れ!？」

エルベルトが接近してもうすぐと言うタイミングでMG151／20が弾切れを訴える。

普通なら捨てる所だがエルベルトの銃は銃身と併用されている刃がある。

エルベルトは刃をコアがある場所に突き立てるが刃が辛うじてコアに刺さつていると言う深さで致命傷になっていない。

「ならばー！」

致命傷になっていない事に気付いたエルベルトは銃に魔力を込めてから抜くと刺さっていた場所に紫色の雷で出来た球体が埋め込まれている。

ネウロイは離れたエルベルトにビームを集中しようと赤い場所を輝かせたタイミングで埋め込まれた球体が弾けて雷の結界とも言える球体状の結界を作ると結界内にあった装甲やコアを例外なく消滅させる。

「大型ネウロイの撃墜を確認！ やりました！」

喜ぶエルベルトにケルベルトは被っていた軍帽を位置を正しながら見つめていた。

## 第18話 懐かしい過去

ウイザード5人に護衛されたC-53B スカイトルーパーの編隊が凍った川の上に着陸し、NKL-16と言う輸送ソリが到着すると兵士達が荷下ろしを行う中で護衛任務を行ったメンバーが補給物資の受け取りを証明するサインをラルから貰うとアランが早速とウイザードのメンバーに駆け寄る。

姿は少し若返っていても精神は変わらない。そして、醸し出す雰囲気も変わらない。

「ケルベルト大佐にオルベルト中佐、うんでそのガスマスクがエルベルト少佐だよな？」

「そうだ」

ケルベルトが皆を代表して頷くとアランの肩をカールが叩く。

アランにも及ぶ身長に筋肉。だが、肌は白人特有の白さを放っている。

「俺は？」

「……誰だっけ？」

アランが惚けた顔で話すとカールは憤慨してアランを殴ろうとするとアランはボクシングで対応する。

「お前！ 同郷の仲間を忘れるとかありかよ！」

カールがパンチをしようとするがアランはペアリングと言う掌でパンチを受け止めてから払うテクニクで斜め下にあしらう。カールは返して左フックを飛ばして来るが、それはブロッキングと言われる肩や腕、手の甲の筋肉を張ってダメージを最小限にしつつ相手の拳にダメージを与える防御テクニクを使ってアランが受ける。

「おらー！」

カウンターにストマックブローを放つアランだが、カールはバックステップで回避すると同時に踏み込んで顔に向けて右ストレートを放つ。

アランはストレートに対してスリッピングアウエーと言う顔へのインパクトの瞬間に首を振って威力を逃すと言う高等テクニクで

躲し、アランは背けた運動エネルギーを利用して裏拳を叩き込む。

「甘い！」

カールは放たれた裏拳に対してダッキングと言う前方へ上半身を屈めて相手の懐に潜り込み、攻撃の内側に入る事で回避する技術で回避と同時に接近し、アッパーパンチを放つ。

「うおー！」

カールの攻撃に対し、アランは上半身を後ろに反らせてパンチを避ける。

簡単に見える動きだが、相手の攻撃の攻撃範囲を見極め、そのギリギリに体を逃がすことで、相手の攻撃を空振りさせると言う説明や狙いが入ると途端に難しくなる。この技術をスウエーバックと呼ばれるが、これを使いこなすには、相手の攻撃が繰り返された瞬間を見極める技術と、相手の攻撃範囲を見極める技術が必要となる高等テクニクだ。

「フーン！ フーン！ フーン！ フーン！」

距離を取った所で左ジョブを放つがカールはパンチに合わせて頭部をUの字を描くように左右へ避ける動きを見せる。これはウィービングと言う回避技術を使い、回避で付けた勢いを乗せてパンチを放つ。

アランも負けられないと言わんばかりに繰り返されるパンチをスリッピングアウエーで受け流しながらパンチを放つがウィーピングで躲されてまたパンチが飛ぶがスリッピングアウエーで躲されるを繰り返すと格納庫にロケットの発射音が響き、爆発音が1回だけ鳴り、2人が爆風に覆われる。

「いつまで続ける気ですか？」

殴り合っていた2人が身体をオレンジに染めて、叫びながら黒煙を突き出るとロスマンはフリーガーハンマーを下に向けながら呆れた顔で告げる。

模擬弾の弾頭に実弾の弾体がついていなければ爆発とペイントまみれの2人を同時に証明する事は出来ない。ラルが特に咎める様な素振りを見せないのはおそらくはラルの指示か許可をこぎつけた口

スマンのどちらかだろう。

「大丈夫ですか？」

ひかりが吹っ飛ばされた2人を心配して駆け寄ると2人は白目を剥いているが息はある。しかし、意識は無い。

「放っておけばいいと思います。ストライカーズでもそうでしたから」

オルベルトの言葉にひかりが返事を返すとラルがケルベルトに話し掛ける。

「これからサトウルヌス祭だが、どうする？」

「どうするも、任務は護衛任務です。彼等が帰るなら私も帰らねばならないですし、この物資は全て502の為の物です。我々が使う訳にはいきません」

「そうか」

それだけ言うラルが弾薬の補給は受けて行けと告げるとケルベルトも少し迷う素振りを見せるがこの基地には20mmも12.7mmもそんなに使わないし、基地保管分があるから余裕があると告げるとケルベルトは敬礼しながら感謝を告げ、ブリンクが目を覚ました頃にはユニットも輸送機も整備を終えたのか夕方には空へと姿を消した。

「なんか騒々しい人でしたね」

「半分はアランさん。もう半分はブリンク大尉の仕業ね」

ひかりが消えて行く輸送機とウィザードを見送りながら告げた言葉にロスマンが白い目でアランを見つめる。

「な！ ストライカーズではまだマシだよ！」

あれで、と言うツツコミをなんとか踏み止めながらストライカーズと言う世界がどれ程の物だったのか聞きたくても聞いたら最後。人外魔境に引きづられそうだったが、その人外魔境だろう領域に挑む者がここに居た。

「ナア。イツモブーツニキクトコタエナインダヨーオシエテクレヨ」

「ん？ ブートの知り合い？ 誰だ？」

「ナンダヨーオマエキイテナイノカー」

あからさまに残念そうな表情を浮かべて、エイラが501からの付き合いと言う所も含めた自己紹介をするとアランが笑顔に変わる。

「ブートは何故か前の任地の事を語りたがらないんだよ。なんでだろうな」

その言葉にサーニャとエイラが心当たりのあるとあるウィッチの事を思い出す。

連絡を取り合うと最初か最後は惚け話にとも取れる内容を話す程に信用し、信頼し、そして愛情を注ぐウィッチの事を。

ブレッドの501はそのウィッチの存在が少なくとも半分は閉める。話そうと思えばそのウィッチの存在は絶対に出るだろうし無意識に惚け話に近い内容も出る。ブレッドは自制心は強い方であり、そうなる事も分かっているがいざ起きれば止められない口の軽さも自覚している。だからこそ、全くの部外者には話題に出さない事で未然に防いでいる訳だ。

「ソウダナ。ストライカーズノコトトコウカンダナ」

取り敢えずあのウィッチを除いた部分を話す事にして、ストライカーズやストライカーズでのブレッドを聞き出す事にする。アランは長くなるからと言うとサトウルヌス祭の晩餐会の時に話そうと言う事になり、格納庫の中で並べられた豪華な食事を立食形式で食べながらアランが話を始める。

やはり、501のエースの話し掛けるだ。誰もが気になる。

「語ると長くなるから、ストライカーズからの事を話そう。始めてから語るといつ終わるかわからねー」

アランがポツリポツリと話し始める。

「俺とブレッドが再会したのはストライカーズの戦域が予想以上に広がった事による人員補充の時。書類的に言えば第2期メンバー合流の時だった」

アランの中でストライカーズが使っていた空母の食堂での一幕が思い出される。



「ん？ 失礼だが、アラン・レッドフィールド少尉か？」これがブートの第一声だった」

「思い出すように告げた言葉にサーニヤが手を挙げる。

「どうした？」

「自己紹介の時にアランさんって伍長って言いましたよね？ なんです、少尉なんですか？」

「ん？ ああ、ストライカーズで色々やらかしてな。お咎めが無いと示しが付かないから取り敢えず降格処分や営倉行きとかあったから階級が変わっているんだ。最初は訓練学校卒業だから少尉スタートだった」

リベリオンもアメリカも訓練学校を出れば即少尉だ。サーニヤがわかったと頷くと若干ではあるが長い時間を掛けてアランが思い出して話し始める。

「そう言って入隊式を終えた立食会みたいな奴で白人は誰も近づかない有色人種だけが集まった一角に臆する事無く近づいたブートの雰囲気が大入りびりてな。最初は誰かわからなくてキョトンとしてると笑いながら、『違ったか？ それならすまなかった。ジャズを教えてください大切な友人に似ていたからな』って言ったんだ」

「それでどうやって返したんですか？」

雁淵が食い気味に聞くとアランは手で制しながら口を動かす。

「俺だよ。すまん、雰囲気変わったか？ って言ったらブートは苦笑いを浮かべてたかな？ 詳しく覚えて無いが、『世話を焼かれる側から焼く側になったからかな？』って」

「何をしていたのかしら？」

ロスマンの質問が飛ぶ。

「中等から高等までの訓練教官をしていたらしい。再会はお互いに笑顔だった。その後はお互いに近況報告だな。結婚は？ 彼女は？ いい人は見つけたか？ そんな話をしていると原隊の連中もブートだとわかったのか色々集まって色々話したよ」

「同じ部隊に配属ですか？」

「二パの言う通りだが、同じ部隊では無いな。と言うか部隊は基本

的には同じ国同士で組んでてまだ連合部隊は無くて、共同戦線を張っているって感じだった」

初期の頃は士官達で手探りの試行錯誤だったと笑いながら告げるアランにラルが笑う。

「その後は暫く同じエンジンを使う機体だからと一緒の場所で戦ったり、ブートの紹介でとある日本人と付き合って、その付き合いから日本、こっちだと扶桑に当たる国で戦った」

「その日本ではどんな事を？」

下原が喰いつく。

「ブートは教導隊と迎撃隊に派兵、俺は迎撃任務に駆り出された」

「どんな敵だったんですか？」

「ソビエト、こっちではオラーシヤかな？ って場所とこっちには無い中国が作った爆撃機からの防衛さ。俺たちではどうにもならなかった相手が居たんだが、アランの育てた学徒兵達が迎撃してくれた」

「貴方でも墜とせ無い機体を学徒兵が？」

ロスマンがあり得ないと言う表情で告げる。

「殆どが機体性能の問題でそれが日本機の中に居て、その機体性能が従来機とは掛け離れて居たからベテランを機種変更するよりはその機体性能に最初から慣れさせた学徒兵が良いってブートの発言でな」アランの説明にラルが口を開く。

「その機体に特化した特化部隊か……」

「ああ。しかも、人類最多の爆撃機撃墜記録保持者からの教導を受けた学徒兵だ。武装も性能も合わさって爆撃機迎撃だけならストライカーズ入りも充分な実力を持っていた」

「それだけの高性能機。気になるな」

「震電。震える電と書く機体で全機種が機首集中配備のエンテ形戦闘機です。バリエーションは武装が30mm4門の丁型に25mm1門に12.7mm機銃2門に7.7mm2門の制空仕様の丙型、57mmのリヴォルヴァーカノン2門の迎撃仕様の乙型、乙型に夜間戦闘用の武装を乗せた57mm長砲身型のリヴォルヴァーカノン1門搭

載の乙型夜戦仕様。乙型夜戦仕様のエンジンと機体などを改修してより高高度の夜間爆撃機や新型巨大兵器に対処する為に作られたが操れる人間が1人しかいない事と生産効率とコストの悪さから事実上はたった1人の為の専用機である甲型がある」

「凄い重武装だな」

「当たれば最強。新人の学徒兵が乗るから当たれば一撃必殺にして少ないヒットを致命打にしようとした結果です。まあ、日本は最後の最後はクソみたいに頑丈な海軍機を相手にしていたからでしょうけど」

F6FにF4Uどれも頑丈さが売りの機体に20mmでは不満だったのだろう。新型機にこの雪辱を晴らすと言わんばかりに大口径砲を乗せていた。丙型は25mmオンリーだと継戦能力や小型相手だと辛いと言う理由からこれでもかと連射力の強い銃が乗せられている。

「それから暫くは護衛とその援護だったり、制空作戦で特に強い奴が出てくるなんて事も無い。取るに足らない仕事をこなしていると新型巨大兵器の2つを同時に討つ必要が出てきて、作戦内容の違いから別れた」

「どんな会話をしたんですか？ 最後の会話なんじゃ……」

ジョゼの言葉にアランが縁起でもない事を言うなど笑う。確かに当初はそうだったが、この世界で言葉を交わした以上は最後の言葉にはなりえない。

「お前はソビエトだったけか？ 死ぬなよ。って言ったら、『ドイツ機は手強い奴が多い……って、欧州戦線だったから知ってるよな。気をつける』」

「それでどう別れたんですか？」

「そっちこそ。って告げてお互いに愛機に乗って空で別れた。それだけの会話を残してお互いの戦場に向かった。こつちの世界に来なければ最後の会話になる会話だった」

「アランさん……」

「だが、それが最後じゃ無かった！ それだけの話さ！ さ、501のブートを聞かせてくれ！」

笑顔で締めくくるところこれ以上は無いと言わんばかりに話を急かさ  
れたエイラが話し始めるが文章を組み立てる能力が低いのか殆どが  
サーニヤによつて語られる。

その無茶を無茶と、無謀を無謀と思わない行動や、夜間哨戒の救援  
の為に格納庫で寝る事が多かった話などをするとアランがストライ  
カーズ内でブレッドとアランやその周りが引き起こした珍時や無茶  
苦茶な事を話すアランには嘘を言っている様子は無く、全員が顔を引  
きつらせる。

それと同じ時間にパ・ド・カレーにあるペリーヌの屋敷の庭でハー  
ブティーを作っていたブレッドがクシヤミをしたのは別の話である。

## 第19話 サトウルヌスの夜に

「まさか帰りに襲われるとは……」

「しかも隠密型ともいふべき世界的にも初見の相手だったな」

輸送機をムルマンからパ・ド・カレーへと護衛していたエルベルトの言葉にオルベルトが答える。

4人は帰りの便で上面か下面を空に溶け込ませる事ができるネウロイと遭遇したが2人じつそれぞれ的高度で待機させる事で問題になる前に排除していた。しかし、敵の襲撃を受けた以上は輸送機は回避を余儀無くされ、燃料切れまじかでパ・ド・カレーの空港へと近づいていた。

〈カスペン大佐。まずい事になった〉

〈どうした？〉

〈各機で燃料消費の差があるが少ない順に着陸しないと行けないが航続距離ギリギリだ。前の機体が滑走路から退避する前に後の機体を降ろし続けないとまずい〉

その言葉い全員の顔を引きつるがパ・ド・カレーの空港は幸いと言うべきか滑走路は前後何方から侵入しても退避コースが用意されている。

上手く行けば自動拳銃の様に退避した先から着陸を敢行するの也能る。

ケルベルトは万が一に備えて周辺に不時着出来る様に通行止めと艦船の航行を中止する様に要請するとブレッドが万が一の為に用意していたのかすんなりと通る。

世紀の大着陸劇がこうして幕を上げるが幸いと言うべきか巧みな操縦によりどの機体も追突されずに着陸に成功するが退役したパ・ド・カレーの地方業務員が後世にこう残した。

『滑走路に追突されずしない場所に隙間なく並ぶ光景はこの世の物ではなかった』

こうして、後世に変態着陸のブリタニアと言う功績を残す一世一代の着陸劇は成功に終わった。

ガリアの地でブリタニアがブリタニアしてしばらく経ち、ペテルブルクではネウロイも年末で空気を読んでいるのか平和な時間が流れている。

「メニューをどうするかだな」

厨房では下原とアランが頭を捻っていた。

と言うのもクリスマス近くと言う事で少し豪華な食事を考えているのだが何処の国の料理を振る舞うか迷っていた。

「中華料理はダメなんですか?」

「俺がそんなに自信があるメニューじゃないし、色合いが基本的に茶とか黒とかだからな……それよりもこれだ!」

そう言つて叩きつける様に出したのはこの前の補給で親の仇の如く詰められていたコンビーフだった。

ストライカーズでは一時は肉がコンビーフオンリーと言うとんでも無い状況があった事もあり、ストライカーズではコンビーフと言う言葉は一時期禁句扱いだった。

罰としてコンビーフの缶詰を数える仕事が生まれる程だった。

「もうやだよ! コンビーフ地獄は嫌だよ! でも、親の仇の如くコンビーフが詰められていたんだよ!」

リベリオンからの補給物資と聞いて嫌な予感をしていたアランだがそれが的中して、処理に困る程のコンビーフが詰められた木箱が幾つも見つかっている。

「これを処理するとなると大変ですね。もういつその事ですけど、今日は無視しますか?」

「いつかはコンビーフ地獄だけだな」

「缶詰ですからね。保存は聞きますし……」

一旦はコンビーフを倉庫の奥に押し込む事にして封印指定を行い、

改めてメニュー選びに戻ろうとするとサーニヤが現れて、準備を手伝うと言ってくれた事で、郷土料理であろうオラーシャ料理で決定するとアランは料理に使う材料を持ってくる為にサーニヤと共に食料倉庫へ向かう。

「あ……やられてやがる……」

麻袋に入れて保存している食料がネズミに食い漁られて居るを見つめる。

アランの眩きが静かな食料倉庫ではよく聞こえたのは別の場所です。掃除をしていたジョゼがやって来る。

「Mouse Mast die」

ナイフを2本とも抜いてゆっくりと足音を立てない様にしながら耳を澄ませてネズミを探す。

サーニヤはアランに必死落ち着く様に説得する。心優しい少女であるサーニヤは目の前でネズミがスプラッタされるのを見たく無いと言うよりもネズミが殺されること自体を避けようとしている様だった。

「……わかったよ」

渋々と言った様子で了承したアランにサーニヤがホッと息を吐いて、魔導針を発動させるとネズミを直ぐに見つけて優しく語り掛けるとネズミは倉庫の外に走って出て行った。

これ以降、このネズミは倉庫の巢に戻る事は無かったがサーニヤが去った後にアランが『この手に限る』とそつとバックショット弾を詰めたショットガンの銃口を巢に突っ込んで引き金を引いた事で別のネズミが断末魔を上げるがそれは別の話である。

厨房に戻るとサーニヤと下原はジャガイモの皮剥きと芽を取り、アランは下ごしらえを終えたジャガイモを潰す作業に従事する。

「あの、サーニヤさんって料理も上手なんですね。お陰で年越しパーティーの準備が捗ります」

「ホントだよな。thank you」

下原の言葉にネズミをスプラッタしかけた人物とは同一人物とは思えない笑みを浮かべるアランに何とも言えない表情を向けるサー

ニヤの腰からジョゼの声が聞こえて下原が下を向く。

そこにはサーニヤの腰に抱き付いて至福の表情で頬ズリをするジョゼの姿があった。

「あー!! 何してるのジョゼー!」

下原の言葉を無視して頬ズリをする下原が机の上の物が音を立てる程に強く腕を乗せる。

「ずるーい! 私だって我慢してるのに!」

下原の言葉に3人が驚きから肩を震わせながら下原の方を向く。

下原は小さくて可愛い物好きであり、サーニヤに廊下で抱き着いた事があつた程だ。

そんな彼女の眼の前で抱きつけばこうなるのも無理は無いがアランはまさかのカミングアウトに驚き、作業の手が止まる。

その後はロスマンやラルの介入で何とか料理を再開するも無い食材をロスマンが譲ってくれたりと感動するシーンがあつたが、ラルとクルピンスキーのつまみ食いにロスマンとサーシャが止めた事で大騒ぎになり、それをエイラがサーニヤが困っていると声を荒げるが当の本人は笑っている事で力無く項垂れるとニパによつてサウナまで拉致されていった。

そんな事があつたが無事に料理は出来上がり、年越しパーティーが始まる。

「諸君らの活躍によつて今年もネウロイからの侵攻を阻止し、ペテルブルクを守る事が出来た。そして、来年こそ反抗の年にしよう」

ラルの音頭にジョゼが口に食べ物を含んだ状態で返事しているのに気付いた502のメンバーがジョゼに続く様に料理に手をつけていきながら料理の事で盛り上がっていると警報が鳴り始める。

「まあ、俺達の予定関係無く来るよな」

腕部にUltra shKAS機関銃の連装型が1つずつと背部



にはM1887をショート化に水平2連式にした銃を中央にフリーガーハマーを2基。腰には何処から手に入れたのかM1911A1 I R A Mのストックを外した物と45ACP対応のロングマガジンが2本ずつ入ったケースが4つ括り付けたアランはサーニャ・エイラ・下原・ロスマン・雁淵の5人と共に夜空を掛ける。

アランはストライカーズ時代と第二次世界大戦では夜間戦闘や夜間爆撃の護衛機を務めた事も一度や二度では無い為に問題無く夜間飛行や夜間戦闘もこなせる。だが、雁淵は万全では無い為にユニットの制御を失って錐揉みをしている。

「落ち着け。ユニットには自動で水平を保つ機能があるだろう。マニュアル制御をやめてみる」

今まで自力で戻ろうとしていた雁淵がアランの助言を聞いて深呼吸をしてから自身での制御をやめるとユニットが自動的に水平を作る。

「出来ましたー！」

「夜空は位置を見失い易い。ロスマン先生の近くを離れるなよ」

それだけ残すとアランが下原の斜め後方を飛ぶ。

戦闘機では何度も飛んだ事が有る夜空だが、ストライカーではまだ数える程。502で1番夜間飛行の時間が豊富な下原につくことで経験不足を少しでも補うと同時に最後の頼みの綱になるであろうサーニャ・エイラペアの戦力減少を最小限に留める配分だ。

「居ましたー！」

下原が固有魔法でネウロイを見つけるとネウロイhビームを発射するつもりなのか赤い光が逆三角形を作る様に光るがその光をアランが確認すると自慢のシールドを展開しながらshKASの安全装置を解除する。

「散開ー！」「お返しだー！」

アランがビームを吸い込むと同時にロスマンの指揮で四方八方に飛び去る5人のウィッチだが、アランだけが右のshKASから先程吸い込んだビームを青いビームに変えて発射する。

高濃度の魔力で作られたビームはネウロイにとっては耐え難い物

なのか逆三角形に作られた翼の1枚がもぎ取られるが直ぐに再生しアランにビームを放つが悉くが吸い込まれてアランの攻撃力へと変わる。

「貰ったー!」

アランに意識が集中しているネウロイにエイラがMG42で攻撃を加えるが効いていないのか無視しているのかネウロイはアランに攻撃を集中する。

アランのシールドは時間制限や吸収出来る攻撃に上限がある事を知っているロスマンがフリーガーハマーを使って更にダメージを加えるがフリーガーハマー数発の直撃でヒビが入るだけだった。

「硬くねーか!?!」

shKASの弾丸を叩き込みながら下原の近くまで近寄ったアランが叫ぶ。

「防御特化型ネウロイよ。決して効かない訳では無いわ!」

「そうかよー!」

アランはshKASをユニットの横に増設したラックに装着すると背中に背負っていたフリーガーハマーを肩に乗せて構える。

「大火力を叩き込め。ってことだろう!」

アランの叫び声に反応したネウロイが大量のビームを吐き出し始めるが全てシールドで防ぎながら移動して逃れようとする。

いつ切れるかわからないシールドに頼りっぱなしでは危険だからだ。

そこに下原と雁淵が飛び込み、すれ違いざまに13mm弾を当てるが防衛特化は伊達ではなくダメージを与えられている感じがしない。エイラも後に続くが連射力で7・92mm弾の威力不足を補っているMG42では純粋な火力不足が起きている。

それでもネウロイのビームがアランから先程の3人に向いた事で高火力のサーニャ・ロスマン・アランの3人が合流して4発ずつアランだけが8発のフリーガーハマーを放つ。

16発のフリーガーハマーの火力は絶大の一言でネウロイの身体の半分を奪うがコアを持つタイプはコアを破壊しなくてはならず撃破

には至らない。

「コアは中央からやや前側か……」

ネウロイがコアを見られた事で慌てたのか加速して逃げるように飛び始めるが下原が固有魔法で見た先には基地がある事を慌て気味に報告するとアランはユニットに魔力を流して加速する。

「悪いな、お前の行動。全部見えてんだよ」

先回りしていたエイラを確認したネウロイが減速した事で銃弾は貫通し切れずネウロイが旋回してエイラから逃れようとした瞬間に極太の青いビームが2本。ネウロイの身体を貫く。

ビームによって破壊されたボディから僅かに見えたコアを未来予知の固有魔法で把握していたエイラがMG42での狙撃でコアを破壊するとネウロイは花火の様に砕け、そこから夜空に銀と紫の大輪の花が咲き誇る。

「アランさん！」

遅れて4人が到着すると雁淵が真っ先にアランに近付くと砕けたネウロイを見て、花火みたいだと騒ぐ雁淵に花火を見た事の無いアランは分からずにジツと無言でネウロイの残骸に目を向ける。

「ん？」

暫く飛ぶとアランが何か訝しむ様な声を上げるとアランと花火を見た事で何かを想像したのか顔がほんのりと赤い雁淵が顔を向けるとアランが真下に落ちようとしていた。ユニットからは不自然で小さな爆発音と魔力のプロペラの回り方が弱い。

アランと雁淵が咄嗟に手を差し出すがお互いに咄嗟だった為に手を外し肩を持つとうとした雁淵の手が長さ不足で空を切り、アランの腕は動いた雁淵について行けず雁淵の胸を押し込む様に触れる。

「ひゃあー」「わああー！」

お互いに驚き身と手を引いてしまい、アランが重力に引かれて落下する。

幸いな事に下は雪だった事でクッションとなり武器もアランも無事だったがユニットだけは落下の衝撃でクランクシャフトが折れて、ブロックに突き刺さった事で完全に廃機となり、それを見ていたサー

シヤの正座の叫び声が響いた。

## 第20話 君の瞳に拳で語る

線路の上や近くをランタンに鎌の様な足を4本つけたネウロイが3匹。銃撃を浴びせられて走っている。

そんな3匹のネウロイの前に黒い人柄の影がそびえ立つ。だが、その影には武器らしき物は一切持っていない。

それを見ている筈のジョゼと下原は特にアクションを起こす事無く銃を油断なく構え、ネウロイを逃さない様になっていた。

「ふっ」

軽く息を吐くと同時に一歩踏み出し左のネウロイに近付くと魔力の淡く青い光を纏ったヤクザキックを放つ。

「はっー」

ヤクザキックを放って直ぐに中央のネウロイにねじり込む様に左フックの打ち上げを魔力の淡い光と共に放つ。

走り去ろうとした右のネウロイには飛び膝蹴りを魔力と共に当ててる。

魔力が込められた一撃を喰らったネウロイは吹き飛ぶがそれだけでは撃破出来ずに立ち上がり、赤い装甲を輝かせるが殴られた所から大きくへこみ、それが似た様な場所から3度も続くと内部のコアがグシャリと音を立てながら潰れ、ネウロイが白い欠片へと砕け散る。

「うっしゅあ!!」

拳を打ち付けて撃破すると殴った人物。アランが両手の拳を打ち付けて勝利のマッスルポーズで空を飛ぶ2人に撃破アピールをする。と下原はインカムを使って基地に連絡を入れる。

「へ此方、下原。ペトラザヴォーツクのネウロイの排除完了」

下原の報告をロスマンが司令室で受け取ると通信を繋げていた黒電話の受話器を戻す。

「ペトラザヴォーツク地域の攻略が完了しました」

ロスマンの言葉を聞いたクルピンスキーが欠伸をすると目線をロスマンとラルのいる方向に向ける。

「いやーみんな頑張っているね」

「これでムルマンとの補給路が開通しましたね」

サーシャが嬉しそうに紅茶が入れられたカップに目を落とすと口スマンは頷き、下原からの報告のもう一つを告げる。

「それとアランさんですが、ユニットが爆散したので残骸回収後に歩いて戻って来るそうです」

爆散と歩いて帰って来るの言葉でサーシャの口から含んでいた液体物が噴き出される。

サーシャが内心で正座以上の懲罰を考えている中でロスマンが少し真剣そうな顔をする。

「現在、ブリタニアからムルマンに新型ユニットを搭載した大規模な補給船団が向かっています」

「ああ。我々に船団護衛のラッセルシユプラング作戦が命じられている」

「？ 変ですね。安全な筈の航路なのに」

サーシャの言葉にラルが答える。

「ああ。しかも、この船団に付いている船団ウィッチの情報を見ると相当な物を運んでいるのだらうな」

ラルの言葉が妙に重く響いた。

「イツルのプレゼントにまだ開けて無いのがあったよ」

「早く開けて見ようぜ」

菅野がボールで蓋をこじ開けようとしているのをニパとクルピンスキーが楽しそうに眺めているが雁淵の視線はサーシャとアランに向けられていた。

「アランさん。貴方はいつもいつもユニットを壊して！ 幾ら、P-40がいっぱいあると言っても限りがあります。出撃の度に機体を壊される此方の気も少しは考えて下さい！」

「壊したくて壊してる訳では……」

サーシャの言葉に妙に辛そうなアランの声が返される。

今のアランはサーシャに正座させられているが足の下に何枚も重ねて強度を増やしたトタン屋根を敷かれ、足の上にはアランが壊したユニットが数組、重ねて置かれている。

扶桑でひと昔前に行われた拷問に近い事をされているアランは脛に来る鈍い痛みには耐えながらサーシャの言葉攻めに耐えていた。

そんな事が繰り返り広げられている間に蓋が開けられて雁淵の意識が物質の方に向く。

出てきたMP44やリベレーターを見てクルピンスキーが目に見えて落胆の色を見せる。

「リベレーターまで入ってやがる」

リベレーター。

時のリベリオン大統領が拳銃を持たせる事の士気高揚や安全性の向上。ウィッチ、特に航空ウィッチの生存率に大きく関わるとしてサイズと重さされて単純さに比重を置いた銃の生産を100万丁用意する事を支持し、11週間で100万丁を用意して見せた。それがこの銃である。

さらに驚くべき事は全世界で使うので説明書は実物と見比べながらやれば誰でも出来るイラストのみの物で銃本体も徹底したコストカットに薄い鉄板を電気溶接でつなぎ合わせるだけの至極単純な作りでパーツ総数は23点。サイズは140mmと文句無しの携行性である。

そんな銃だがそれを見た雁淵以外のウィッチが露骨に嫌そうな顔をする。

このリベレーター。量産性確保の為に色々と銃として必要な物以外を色々と排除している。

取り敢えず弾丸撃てればいいよねとライフリングという銃身の内側に掘る螺旋状の溝を無くす。

装填早く無くてもいいよねと自動装填・排莖機構を外す。

この結果で生まれたのが有効射程数m以下と列車の旅客車両の横

方向にいる相手にさえ当たるかどうかの微妙な銃となる。しかも、撃つたら棒で突いて空薬莖を排出し、弾倉から弾を取り出して自分で入れるという非常に手間が掛かる銃だった。

口径は45口径と強力だが当たる距離まで近付き、外すか仕留め損ねるとフルボッコされるといいう一撃必殺 or Die の撃てればOKな拳銃だった。

「可愛い、なんですかこれ？」

雁淵が興味深々な中でアランの足が悲鳴を上げている。だがそんな事は知らんと4人の中で話題は広まっていく。

「これはね、子猫ちゃん。ケルト魔法が掛かったお守りで全体がルー文字の形をしているだろう」

クルピンスキーの言葉にルー文字を知らない雁淵は不思議がる様な表情を浮かべる。

「敵の弾が当たらないおまじないが掛かっているんだよ」

「扶桑の破魔矢みたいですね。いいなー欲しいなー」

「デートしてくれりんだったらあげてもいいよ」

クルピンスキーのデートという言葉にチラリとアランの方を見るがアランはトタン屋根の上で正座され、サーシャから追加の廃棄ユニットを載せられて悶えていた。そんなアランだが、この前の夜戦で偶然とは言えでも胸を触られた事を思い出して顔をほんのりと赤くするとクルピンスキーがニヒルな笑みを浮かべて冗談だと伝えながらリベレーターを渡す。

リベレーターを渡された雁淵が嬉しそうにリベレーターを見つめている間に最後の廃棄ユニットが置かれた事で遂にアランが白目を剥いて気絶する。

流石に5組以上乗せられた上にトタン屋根での正座はアランの屈強な肉体をもつてしても辛かった。

そんな中でニパがクルピンスキーに向けた物資を見つけて怪しんでいたがクルピンスキーが開けてくれと言ったのとエイラからの物資と言う事で変な物は無いだろうと箱を開けると中には色とりどりのマカロンが入っていた。



クルピンスキーはワインだと思っていたのか残念そうにしながらも適当に摘み上げた菓子を齧った瞬間に金属を噛んだ感触に食べ口を見る。

「なんだこれ」

そこには金属のカプセルが仕込まれており、サーシャの指示でクルピンスキーはサーシャと共に解析へ、残った3人はアランの介抱をする事になる。

余談だがカプセルの中にはガリアのネウロイの巣が消滅した半分の要因であるウォーロックについて書かれていたが、最後のマイクロフィルムにキャニの最終兵器という一文が書かれており、ラルは王宮で行われた秘密会議で教えられたキャニの発光体が関わっていると悟った。そして、アランは鈍痛と足の痺れで食事の時間になるまでベットの上で悶えていた。

「シモハラ……今日のディナー……ワッツ？」

言葉が変なのに加えて生まれたての子鹿の様に両足がカクカクと震えている。

トタン屋根正座のダメージが未だに抜け切れていなかったからだ  
が流石のこれにはジョゼとニパ、雁淵がむせてしまう。

「トナカイ肉のシチューです」

かろうじて口を付ける前だった下原はなんとか耐えるとメニューを教える。

「トナカイ肉……久々に豪華だな」

「アランさんのお友達のお陰です」

「コンビーフ料理じゃ無いのは良かった」

厨房の約3割を占めるコンビーフのピラミッドを見ながら頭を抱えているとラルがロスマンを連れて食堂にやって来る。

「そのままいいから聞け。作戦を伝える」

「現在、ブリタニアからムルマンに向けて大規模な補給船団が向かっています。その船団を護衛するのが今回の作戦です」

安全な航路だとされているが気を抜かない様にと告げるとラルが参加人数が5人とクルピンスキーが隊長となり、メンバーを選出する様に告げる。

クルピンスキーは乗り気では無いがロスマンから船団ウィッチが1人いると言って写真を見せるとクルピンスキーがやる気を出し、素早くニパ・雁淵・アランが指名され、菅野は新型ユニットという言葉に志願する。

時は流れて出撃直前の格納庫。

ニパのメッサーシエルフが変に咳混んで黒煙を吐いてエンジントラブル寸前だ。

「おい、大丈夫かそれ？」

「うーん、1000キロもつてくれよ」

不安タラタラなニパと菅野を差し置いて雁淵は何処か上機嫌にクルピンスキーから貰ったリベレーターに紐を付けて首から下げられるようにしていた。

「お前、それ持つて行くつもりか？」

「いいでしょう。あげませんよ」

「(リベレーターとか死んでも欲しく無い)」

アランは嬉しそうな雁淵を見て、リベレーターがどんな銃か語るのを止めた。これが男だったら容赦無く教えていた所だろう。

雁淵はリベレーターを首から下げると服の下にしまい、後ろを見るとクルピンスキーが珍しく作業台に手を付いて何か考え込んでいる。

「ロクでも無い事を考えてるんだろ？」

アランの言葉にニパと菅野は多分そうと頷いている。

「うーん、夜空の星、いや、大輪のバラ……違うな……君の瞳にーの次は何てセリフが良いかな？ ねえ、ひかりちゃん」

突然の話題ふりに雁淵が苦笑いを浮かべているとアランが口を開く。

「君の瞳に拳で語る」

そのセリフの次に肩を叩かれたクルピンスキーが振り返った瞬間に飛び上がったロスマンの拳が顔面の中央を捉えた。

バレンツ海を進む船団の貨物船のブリッジにクリーム色の髪の人影が潮風に髪をたなびかせながら水平線の先を真剣な眼差しで見つめていた。

## 第21話 いつもの2人、再び

「早く会いたいな。ブリタニアの子猫ちゃん」

「楽しそうですね。クルピンスキーさん」

「当然、ひかりちゃんも可愛いよ。でも、この子うちの基地には居ないタイプでさ」

クルピンスキーの言葉に雁淵が苦笑いを後悔と反応に困ると浮かべる。

「さつきからずっとあの調子だよ」

「ロスマン先生の拳が効いて居ないみたいだな」

「クソウ……殴りてえー」

雁淵がこの空気を変える為に懐中時計を取り出すと時刻は休憩を予定している時刻を示していた。

「皆さん。そろそろ休憩の時間ですよー」

「やつと300キロかー」

「3分の1ですね」

「俺ならひとつ飛びなんだけどな」

「ゼロの航続距離を基準にしないでくれ」

軽口を叩きながら5人はペトラザヴォーツク基地で整備と補給を受けるべく着陸すると食事をしている時にクルピンスキーが基地の女性兵士を口説こうとして菅野に耳を引っ張られ、菅野とニパが笑い、アランは機材の不調を整備兵に伝えて応急修理を加えていた。

「もー、直ちゃんは厳しいなー」

「おめーちったー真面目にやれよ!」

補給と整備を終えたクルピンスキーが空で引っ張られた耳を摩りながら零した言葉に菅野が少し切れた様に返す。

「ボクはいつつも大真面目だよ」

「うえー」「本当かよ」

クルピンスキーの信じられない言葉にニパとアランが懐疑的な言葉を漏らす。

「可愛い女の子に対してはね」

「だと思っただよ」

菅野が呆れた様に話すと同時に雲が晴れて海が現れると雁淵が目に見えて騒ぎ始めるとクルピンスキーがやけに真面目な顔と言葉で語り掛ける。

「ちよつと急ごうか」

「え？　なんでですか？」

「向こうの方。水平線の関係で見えないけど、ネウロイの巣。グリゴリーがある。こっちは安全海域らしいけどね」

「くつそーこのまま突っ込んで楽しんでやりたいぜ！」

菅野の血の気盛んな言葉にアランが肩を叩く。

「落ち着け。あっちは最終目的。しかも、敵の本陣であるなら念入りな準備が必要だ。今は時間を優先すべき時じゃ無い」

敵の基地を何度も叩いた事があるアランからすれば基地攻撃には念入りな準備と偵察を加えるか逃げた敵を追いかけての奇襲攻撃がベストだとわかっているが、ネウロイは撤退をしない為に前者しか取る手立てが無い。

「アランの言う通りだよ。あっちは最終目標。今は任務が優先」

5人は途中で森の中に降りて休憩と簡易修理をしてからムルマンに向けて出発。だが、ちゃんとした設備の無い場所での応急修理や簡易修理ではニパの機体を持たせる事が出来ず、ムルマン基地が見た所でユニットが2回ほど咳き込むと黒煙を吐き、その後は持続的に白煙を吐き始める。

「ニパさん掴まって」「たくつしようがねーな」

雁淵と菅野がニパの救援に入る。アランは荷物と武装の関係で難しいからだ。

5人はムルマン基地に降りれば諸々の報告と手続きなどで時刻は夕方。外は茜色の空に変わり、場所によっては夜の藍色に空に変わりつつあった。

「ふああー遠かった〜」

「やっぱり、1000キロは疲れるなー」

「俺はまだまだ行けるぜー」

「私もまだまだ行けますよ！」

「お前はそのまま飛んで扶桑に帰れ！」

菅野の言葉に雁淵が頬を指で引つ張りながら歯を見せて威嚇するが菅野には全くと言つていい程に効いていない。

「すげー量の物資だ。これに追加があるんだろ？」

「そうだね。これでもまだまだほんの一部だからね」

仮置きされた物資を見てアランとクルピンスキーが話しているとニパが異様に巨大な大砲のパーツを見つける。

「すげーな！ 戦艦でも作つてんのか？」

「アレは……」

クルピンスキーが別の何かを見つける。

「陸戦ウイッチの可愛こちゃん発見！ いいね、いいね！」

状態を倒してくねらせる動きがウザつかたのか無言の膝蹴りがアランによって腹に叩き込まれた。

一行は腹を摩るクルピンスキーと共に倉庫の中にやって来た。

理由は新型ユニット受領の為だ。

「此処だったよな？」

アランの声に反応したのかレバーが動いた音と共に明かりが生まれ、ハンガーに納められたユニットが照らされる。

「あつたあつた」

「やったー！ 俺の紫電改だ！ これさえ有ればネウロイ何てイチコロだぜー！」

菅野が自分の紫電改を見つけるとニパはクルピンスキーのBf 109 K型に興味を示す。

「他の箱はなんですか？」

「ラル隊長とロスマン先生様だね。それとこの鉄のは……」

「俺のショットシエルだよ。M1887の弾薬。現地だと補給しづらいからな」

弾薬を運ぶと言う事で安全性を考慮したのか鉄の箱に納められていた。

その後はニパの機体が壊れた為に乗り換えを余儀なくされた事を

理由にクルピンスキーがK型をニパに譲渡され、新型ユニットを受領した菅野とニパ。新しい装備が手に入ったアランが稼動確認の為に滑走路に来ていた。

「菅野！ 番出る！」

「カタヤイネン行きます！」

「レッドフィールド出るぞ！」

「動作確認だけだから無理しない様になって言われてますよ！」

「わかーてるって」

暖気運転をしながらエンジンが温まるまで待っている側で発進補助装置に腰掛けたクルピンスキーが補給物資の中に入っていた瓶のコルクを外すと瓶の口から匂いを嗅ぐ。

「これこれ」

クルピンスキーが至福の笑みを浮かべると同時に3人が発進する。

菅野とニパは出力や重量の問題で早く離陸したがアランは滑走距離が装備重量の所為で長くなってしまふ。

今回のアランの武装だが腕の武装は変わらずにshKAS2連装で両方のユニットにはM0911A1 IRA Mが装着されているが変わったのは上半身の金属パーツにベルトで固定するだけだった背面ラックがタクティカルベストの様な物となり、携行可能弾数の増加と保持力強化が行われた。

両肩肩の正面に当たる部分には2本のM1911の通常弾倉と外のゴムバンドにショットシェルが4発収納出来るポケット。胸の部分にはショットシェル様にゴムバンドが28発分。二の腕にも6発のショットシェルが押さえられるベルトが両方に巻き付けられている。腹の部分には大きなポケットが4つある。

コルト・ストライカーズのホルスターとナイフ用のホルスターが兼用された物が左脇にとスピードローダー用とナイフ用のポーチが右脇あり、腰にもグレネードポーチや弾倉様にポーチがぶら下げられている。

此処までゴテゴテに盛ると位置の調整や重量バランスが崩れる為にそれなりの時間を飛んでトライアンドエラーを繰り返して最適な

位置と重量バランスを身体に覚え込ませて行く。

最終的にアランだけが少し不安が残る状況ではあるが夜間飛行となる為に地上へと戻りこの日の勤務を終えた。

船団護衛の為に格納庫に集まった面々を見て雁淵がクルピンスキーがまだ来ていない事に気付いた。

「あー！ 来た……ぞ……？」

格納庫の奥から現れたクルピンスキーだが足取りがグラついていゝると顔色も悪い。

ニパと雁淵にアランが不可解な事に首を捻るが菅野だけはやっぱりかと腕を組んでいた。

「ひかりちゃんは今日も可愛いね……」

何時もの口説きも元氣や覇氣が無いと言うよりも生氣が無い。

「これから船団の護衛に行くのに……」

「ちよつと休んでいた方が……」

「いや。どうしても行くんだ！」

「クルピンスキー中尉……」

生氣と覇氣が戻った言葉に護衛任務を最も得意としたアランとその部隊にとってクルピンスキーの無茶をしても護衛すると言う姿にアランが尊敬に近い感情を抱き始める。

「ブリタニアの可愛こちゃんを迎えに行かないと」

「海に捨てようぜ」「海に投げようぜ」

クルピンスキーが隊列から離れ気味ではあるが5人は出現する。

菅野がふらつく飛行が目立つクルピンスキーを気にかけるはクルピンスキーはブリタニアの船団ウィッチに会うためとそのまま飛行。その理由を聞いた菅野が2発殴りたいと首を握った瞬間に菅野の身体が大きく揺れる。

「直ちゃん。いつもより飛び方が荒いね。セッティング合って無いん



「じゃ無い？」

クルピンスキーが菅野に向けた言葉に微妙に先頭を飛ぶアランがフラつく自身の身体を少し不安げな目で見ていると緊急入電を受信する。

「緊急入電！ 船団にネウロイ襲来！ 船団ウィッチが出撃！」

「え！？ そこってネウロイが出ない筈じゃ……」

「戦争中の空に敵が来ない場所なんて無い。何処にでも現れる可能性がある事を理解しておけ」

そう言ったアランの下をクルピンスキーが猛スピードで通過する。その飛行はさつきまでのクルピンスキーとは全く違ういつも以上の飛行姿だった。

「急にどうしたの!？」

ニパが急な変化について行けずに言葉を漏らす。

「なんか、ブリタニアの子が危ないって言ってましたよ？」

「ツチ。俺たちも行くぞ」

急ぐ一行だが、既に船団とネウロイは接敵状態となっており、船団ウィッチとして派遣された3人のウィッチが交戦しているが余りにも多い敵に抑え切れず、駆逐艦が大破されてしまう。

「数が多過ぎます！」

金髪のウィッチが隣を飛ぶクリーム色の髪に狙撃銃であるがボーイズ対装甲ライフルを持ったウィッチに話し掛けた瞬間に体当たりで撃墜され、輸送船の甲板に落下してしまう。

此処まで接近されると狙撃銃をしまい、トンプソンSを使った交戦に入る。

もう1人も近付かせまいと狙撃で援護するが装填の隙を突かれてしまい1機が輸送船に迫った瞬間に飛んで来たロケット弾が命中し、立て続けに17機のネウロイが破壊される。

そして、白煙が伸びる先からフリーガーハマーを背中に格納したアランがナイフを左手で抜いて接近し、近場の敵をナイフで切断。迫る別の機体をトレンチナイフのナックルダスターで殴り壊し、少し離れた所を旋回している3機のネウロイに素早く抜いたM1911A1

IRA Mをフルオートの指切りで撃墜する。

「アラン！」

「ブート！」

随伴護衛として派遣されたブレッドと援軍で到着したアラン。

「腕は鈍って無いだろうな？」

「こつちのセリフだ」

S18対物ライフルを13.9mm仕様に変更した物を再装填を再開したブレッドがニヒルな笑みを浮かべながら告げた言葉にアランは腕のUltra ShockASの安全装置を外すと同時に構える。

「来たぞー！」

ブレッドの警告と同時に15機もの楔にエアインテークと尾翼を足したネウロイが迫る。

最初の5機をブレッドが狙撃で的確に機首となるだろう部分を撃ち抜いて破壊。残りの10機がブレッドのシールドに守られながらアランの機銃掃射で破壊される。

「凄い……」

それを見ていた雁淵が零す。

全くの偶然かもしれないがストライカーズでは最高の援護手と最高の護衛手がこの魔法と怪異が渦巻く空で再会を果たした。

## 第22話 破壊される常識

船団の上空でネウロイの残骸の雨が降る。

前衛を担当するブレイブウィッチーズのメンバーを後方からブレットとクリム色の髪にボーズ対装甲ライフルを握ったブレットとロッテを組むリネットがブレイブウィッチーズのメンバーを狙撃で持つて援護を行う陣形を取る。

迫る楔形のネウロイを相手にクルピンスキーと菅野、アランが前に出て撃破し、2人がカバー仕切れない場所から漏れ出た相手をニパと雁淵が共同して撃破する

それでも、クルピンスキーと菅野は押し寄せる数が多いが故に後ろや側面に如何しても生じてしまう隙をリネットの狙撃で潰し、雁淵の経験不足故に出来てしまう穴をブレットがその穴を十分に埋める。

「凄いだか……」

80機は撃墜するとブレットが銃を上に掲げながら警戒する。

「まだ来ると思うか？」

アランがブレットに近づく。旧交を温める事はせずお互いに仕事の時の表情で語り合う。

その間にリネットが他のメンバーを連れて各艦に搭載した弾薬で補充する。

アランとブレットもリネットと雁淵が持ってきた弾丸で補充するがフリーガーハマーとshKASの弾丸は在庫が無く駆逐艦に置いて身軽になる。

「小型機だった。今までの経験で言うと小型機オンリーで洋上に出る事は無い。それにネウロイの行動範囲を超えている。純粋に新型の可能性もあるが……」

ブレットの脳裏に大型に張り付いて移動したパラサイトファイタータイプのネウロイが思い出される。

思考を張り巡らせるブレットの脳にネウロイの反応が現れる。

「ネウロイ反応！ 数は168!?! 高度3000から4000を航行！」

「100機超えだつて！」

流星のクルピンスキーから笑みが消える。

「5秒後に視認範囲！・ 3…2…1…今！」

水平線から現れた黒い点を見て、アランが言葉を失う。

「おい！　なんでMe262みたいな奴が混じってんだよ!？」

ドイツ軍との戦闘で最後に戦った相手がMe262だったアランはその機体のシルエットを強く覚えていた。だが、ブレッドは別の部分に気付く。

「腹に魚雷みたいなの抱えてるな。しかも、コアが見える」

「!?　不味い！　魚雷かロケット弾だ！」

超長距離砲撃を行ったネウロイの砲弾が体組織を利用した砲弾だった事を思い出したアランの警告を聞いたリネットとブレッドが素早くMe262に酷似したネウロイを狙い狙撃を敢行する。

Me262は40機で海面ギリギリを飛んで対空砲火から逃れようとするがブレッドの銃からセミオートで吐き出される強装魔力弾により近い機体から確実に撃破され、リネットは連射力の無さを撃墜した場合に邪魔になるであろう機体から撃破する事で狙撃の機会を増やして撃墜し続ける。

それでも、決死の覚悟で進むネウロイでは無く、ちゃんと護衛機は存在する為に2人に楔形のネウロイが迫るがそれはブレッドとリネットにも同じ事が言える。

「させるかよ！　カリブチー！」

アランが迫る楔形の機体に雁淵と共に迎撃に出る。

雁淵とアランが手に持ち銃でネウロイを破壊し、時にネウロイのビームを躲し、雁淵は不味くなればアランの背後に隠れて、ビームからアランのシールドで守って貰う。

アランもシールドが無くならない様にこまめに銃口から青いビームを吐き出す。

クルピンスキーとニパ、菅野もブレッドとリネットの護衛に入った事でMe262のネウロイが投弾距離にまで迫れたのはたったの5機だったがネウロイにとってはそれで充分だった。

Me262の胴体から離れたロケットの様なネウロイが後部から推力を吐き出すと即座に音速を超えたソニックブーストの後を残して飛翔する。

「くそー」「当たって！」

ブレッドが2発撃った所で1発が迎撃出来たが此処で弾切れを起こして再装填を余儀無くされる。リネットも2発で2発のネウロイを落としたが残りの3発が船団に迫る。

3発のネウロイはそのまま低空を飛んで体当たりを敢行すると思っていた一同の前で垂直上昇を開始し、高度1000まで上昇する。

だが、その高度は残りの5人は空戦をしていた高度だ。当然ながら5人の銃撃を浴びるが1発が直上急降下で船団のもつとも重要な輸送艦に迫る。

「うおおおおお!!」

300m。そこまでの距離になった瞬間にユニット破壊覚悟でネウロイの前に現れたアランが左手で弾頭にあたる部分を掴み、右手で拳銃を引き抜き、素早く銃口をネウロイに張り付かせて引き金を6回引く。

放たれたのは9mm弾と威力不足が懸念される弾丸だが、接射で同じ様な場所に撃ち込まれた事、魔力を追加で纏わせた事とネウロイ自身がそこまで頑丈では無かった事とコアが弾頭の少し後ろにあった事でコアは弾丸が直撃。撃破するが元々は自爆特攻用のネウロイだ。

コアが破壊されるとそれが引き金になったのか爆発を起こす。

アランもシールドを張るがアランのシールドは爆炎と爆風を吸う事に成功してもネウロイの破片までは防げず、身体の彼方此方にネウロイの碎けた破片が突き刺さる。そして、その破片はユニットにも飛び込み、無茶な加速で壊れ気味だったユニットにトドメを刺す事になる。

ネウロイの破片はユニットの魔力タンクを著しく破壊しタダでさえパンク気味なアランのP-40は魔力タンクから多大な量の魔力を放出し、それは魔力制御を機械的に行っていた機関を爆砕させ、そ

の爆発は他の部分にまで及ぶが最初の爆砕でアランは素早くユニットを吐き捨てた事で無事だが、爆風に押されて輸送艦の上に落下する。

仲間の落下にブレッドとクルピンスキー以外は慌て一時的に機能不全になってしまいがクルピンスキーとブレッドの一喝により何とか致命的な隙を作るのを防ぐ。

Me262や垂直尾翼を足した楔の様なネウロイは未だに船団の上空でビームでの攻撃を加えようとしており、船団護衛の軽巡や駆逐艦が必死の対空砲火で何とか被害は軽微で済ましているが落伍する艦もちらほらと現れ始める。

守るべき物はすぐ下にある。それだけでウイツチとしても誇りと義務を思い出したのか戦闘を再開するが仲間が撃墜された事により士気は低下し、先程までの苛烈な勢いの空戦は出来ずにいるとブレッドの魔導板が最悪の反応を示す。

「嘘だろ……」

その反応は今までを遥かに超える大きさの反応に場所が高度0mから始まっている。

「何が……」

「赤城クラスの反応だ……あいつら……空母を投入してたんだけだ!?!」

ブレッドの叫び声に応じるかの様に飛行甲板に巨大な2連装と空母とは思えない量の高角砲や機銃を乗せた空母 赤城に酷似したネウロイが水平線から波を乗り越えながら現れる。

その巨大なネウロイとネウロイは走るか飛ぶという固定概念を真っ先に破壊し尽くしたネウロイに残された6人がその場で立ち止まっていた。

そんな棒立ちの6人に巨大な連装砲から巨大なビームは発射された事で6人だけの超巨大ネウロイ戦が始まった。

時は少し遡りアランがロケット弾型ネウロイの爆風で輸送艦に落下したタイミング。

アランの武装の殆どは爆発と薄いカバーを破壊した事で不具合や落下を起こしており、身体については分解寸前のshKASが2つだけ。背中にあったM1887は少し離れた場所にうず高く持たれたカバーの上に乗って、落下の衝撃で気絶した主人を黙したまま見守り、フリーガーハマーの片方は爆発により砲口部分が破壊され、もう片方は弾切れを起こしているがアランが手の延ばせば届く場所に所なさげに転がっている。

そして至近弾を食らったのか船が大きく揺れると砕けたカバーの欠片がアランの腹を叩き、その衝撃でアランが目を醒ます。

「ツッ」

身体中から感じる痛みを顔で響めるが動けない程ではない。

まず確認したのは四肢が動くかどうかで使い物にならなくなったshKASを外してから浅く皮膚を貫いていたネウロイの破片をそのままに腕を動かし、邪魔になる破片だけ抜く。

刺さった物を抜くと血が噴き出す事がある為にM1887が乗っていた荷物保護用のカバーを切り裂いて包帯の代わりにする為にナイフで切り裂く。

本当なら清潔な布が良いが贅沢は言ってられない。

傷口を強く巻き付けたアランが他の武器を探す為に顔を上げると目の前の壊れたカバーの口から飛び込んで来た陽光を反射するシルバーの塗装に存在感を示す尾翼にあたる部分の深紅の塗装が施されたストライカーユニットのP151の面影を感じさせる機体が鎮座していた。

「これは……」

面影を感じさせる。

それはこのストライカーユニットは既存のP151のどの型にも存在しない物が多くあるからだ。

ユニットの背面にあるエアインテークと同じ場所に浅く出っ張っ

たエアインテークに機体の中腹両側面にあるカタツムリの殻の様なパーツに魔力のプロペラが出て来る隙間が1.7倍程大きく開けられている事だ。

変更点はこの3点だけだが、これだけで今までのPー51とは何かが違う事がわかるが実際に見ているアランにはこのマスタングだが家畜化されたマスタングでは無く、荒野を自由に描ける野生のマスタングを思わせる力強さを感じる雰囲気を感じ、自分の知るPー51とは全くの別物だと思いい知らされる。

アランは目を瞑るとゆつくりと確実に想いを載せて十字を切る。

それはこの機体に出会えた事を神に感謝すると同時にこれを作る為に助力を惜しまなかったブレッドと顔も知らぬこの世界のパットン。そしてこの世界の技術者や研究者達に向けた十字だった。

そして、十字を切り終えた瞬間に何処からか勝手に動いたストライカーユニット用のハンガーに搭載されている保持用アームが発進させる時の位置に動く。

アランがM1887の薬室に弾丸が入っている事を確認すると素早くそのユニットを吐いて魔力を流す。

その魔力が発動のキーになったのかマーリンエンジンとは思えない程の爆音を吐き出しながら今まで聞いてきたどのユニット以上に頼もしい音にアランの頬が緩む。

何よりもこのエンジンは膨大な量が溢れ出すアランの魔力全てを吸い込んでも安全装置が発動する素振りを一切見せない事だ。

「何をー」

武装を補給物資の中から取り出したアランに輸送艦の乗員が声を掛けようとするがエンジンの爆音に掻き消され、アランの身体が垂直離陸し、輸送艦の上空に出た瞬間に戦場となっている方角に身体を向けるで暫く稼働させてエンジンが温まった事を確認する。

「行くぜー」

身体を縮ませて、伸ばすと同時に魔力をさらに流して最大加速を行うとその時に搭載された各種機能が最大稼働を行い、輸送艦と戦場の間に空気の傘が開くと同時に輸送船団に暴風が襲い掛かった。



## 第23話 伯爵戦

空母ネウロイからの砲撃に晒されながらも艦載機だっただろうネウロイの粗方は撃墜したブレット達だが、士気低下を招いた状態と合わさって苦戦を強いられる事となる。

特に疲労が激しいのは意外な事に雁淵だった。

体力こそブレイブウィッチーズ1番の多さを誇る雁淵だが、精神面では経験不足から来る軟弱さが目立ち、アラン撃墜の事実には1番の精神的ダメージを喰らう事になり、最も士気が低下していた事。さらに魔力不足であるが故にシールドが多様出来ない雁淵は躲せる攻撃は躲すでは無く、攻撃は基本的に躲さなければならぬ為に集中力を他のウィッチに比べて使う。

士気の低下に集中力の消耗。そして、アランが無事かどうか知らさずには戦闘を続行しているが故の精神的余裕の無さがネウロイ以上に雁淵を追い込む事となる。

「!? 雁淵!」

菅野の迎撃を抜けたネウロイが消耗した雁淵に迫る。ビームを放つ赤い装甲は削られている為に尖がった機首での刺突だが、雁淵にはそれだけで脅威となる。

雁淵は咄嗟にシールドを張るが集中力消耗に精神的乱れから魔力操作がおざなりとなり、ネウロイの突進すらも防げず、シールドが中央から陥没し、貫通直前になった瞬間に雁淵に神風特攻をしようとしていたネウロイの装甲に蜂の巣の様に細かな穴が開き、砕け散る。

そして、雁淵の目の前を黒い物体と赤い物体が通り過ぎるとその道中にいた数少ないネウロイが次々に破壊され、雁淵の前を通り過ぎた物体はネウロイを撃破しながら旋回上昇を行い、太陽を背にホバリングすると左肩に載せたフリーガーハマーを放ち、空母ネウロイの大型2連装砲を破壊する。

「おい! あれって!」

菅野がその正体に気付く。

ユニットはP-51の改造機に変わっているがその塗装と持って

いる武装は間違いなくアランの物。

「全く、美味しい時に出てきやがって……」

ブレッドがフリーガーハマーを捨てたアランを見て、嫉妬する様な笑みを浮かべるとアランは重そうなバックをブレッドに投げ渡して来る。

バックの中にはブレッドが使用する銃器の弾丸が詰められたS18の弾倉とボイイズ対装甲ライフルの弾倉が収められていた。

「リーネー！」

S18の弾倉だけ回収するとリネットも弾薬を補給する。その間にもアランは輸送艦に積載された他の弾薬が収められた弾倉を配り回る。

「どうした？ 疲れ切ってるな」

13mm機銃のドラム弾倉を渡しながら雁淵にからかう様に言葉を告げる。

雁淵は泣きそうな顔でよかったと声を押し殺して嬉しそうに零す  
がアランが肩を叩いて戦いに集中させる。

「ブート！」

「わかってる！」

薬室に入っていた補給前の最後の弾丸で対空機銃の1基を破壊すると狙撃銃で行うとは思えない速度で弾倉交換を行うと同時に雁淵に問う。

「雁淵軍曹は如何する？」

たったこれだけの問いだが、雁淵はどういう事か把握する。

「ついて行ってみせます！」

本気の自分とアランの飛行についてこれるか？ と口外に問うたブレッドに雁淵は決意と覚悟を持った瞳で正面から答える。

そんな雁淵を見たブレッドは爽やかな笑みを浮かべると武器を構え直しながら指示を飛ばす。

「クルピンスキー中尉、カタヤイネン、菅野両少尉は艦載機の処分を  
！」

少尉であるブレッドが中尉であるクルピンスキーに指示を飛ばす

など言語道断かもしれないがクルピンスキーはそれに文句を言うどころか頼もしいとすら思ってしまった。

精神的にも技術的にも未熟な学徒兵を率いて戦ったが故にブレッドの指示には真剣さが滲み出る。

士気が低下している所や不安がある時にその効果を強く発揮する。ミーナやラルとは違ったカリスマが漂うのがブレッドだ。

「リーネとアラン、雁淵軍曹は私に続け」

3人が開けた穴を4人が突破すると空母ネウロイは自身の手で片付けるつもりなのか全ての機関砲から機銃、高角砲と主砲を作動させると共に各所の装甲に施されたビームを放つ赤い装甲に赤い明かりを灯す。

ブレッドがハンドサインを送るとアランと雁淵は低空から海面を這う様に接近する為に降下。

リネットとブレッドは上昇しながら弾丸を放ち、最初に破壊された機銃の奥に配置された上部甲板右側に存在する高角砲を破壊。

そのタイミングでビームを回避しながら接近したアランと雁淵が行動を起こす。

空母ネウロイの装甲に沿って上昇するアランが赤い装甲をM1911で破壊し、その隙に上部甲板に出た雁淵の近距離射撃を持って右側に3機ある主砲の1番奥を破壊する。だが、そのタイミングで主砲を守る位置に置かれた2連装機銃は雁淵に狙いを合わせるが合わさった所でリネットの狙撃を喰らい爆散する。

1歩遅れて上部甲板に躍り出たアランだが右手にはM1887が握られており、魔力付与を強く与えたスラグ弾の2発同時着弾を喰らった1番手間の主砲が爆散。残った主砲がアランにビームを吐こうとしたタイミングでブレッドの固有魔法であるファイヤブレードが炸裂。船体ごと破壊される。

そして雁淵は右側から左側に抜ける瞬間に機銃を破壊して飛び抜けるとその斜め後ろに配置された広角砲と左側の赤い装甲が赤い光を孕み出すのに気付く。

「アランさん！」

雁淵は側面の赤い装甲に機銃を放って少しづつ潰しながら足を伸ばした座射の姿勢を取ったまま引き撃ちを行うが赤い装甲からの攻撃のみを警戒しているような軌道に感じたリネットが援護に入ろうとした瞬間にアランが高角砲を破壊して、雁淵の離脱を援護する。そして、アランも雁淵と同じ様な体勢で機銃を広角の斜め後ろに置かれた機銃を破壊するが側面装甲と残った機銃、広角砲に狙われる。

「カリブチー・ヘルプー！」

その叫びと同時に雄叫びを上げた雁淵が艦尾から最大戦速で接近すると左側上部甲板に残された広角砲1基と機銃2基を立て続けに破壊する。

「負けてられんな。ブリッジを潰す。援護を」

ブレッドの言葉にリネットが我に帰ると素早くアイアンサイトで狙いを澄ました一撃でブレッドを邪魔するであろう機銃を破壊し、ブリッジの赤い装甲も境目を的確に狙って1発で4枚を無力化する。

ブレッドはリネットが開けた穴に滑り込むとその場で止まりながら身体の向きと銃口だけを動かすと言う簡単そうに見えて難しい機動で最上階近くに1発、中層階に1発、下層階に2発を叩き込むと離脱する。

そして、ブレッドの攻撃で脆く崩れやすくなったブリッジに作られたウェークポイントをリネットが的確に撃ち抜いた事でブリッジが根元から崩壊する。

上部甲板に存在する艦装が全て破壊されると飛行甲板が割れ、艦尾が離脱。上部甲板中央だったパーツが割れて中からMe262が抱えていたロケット弾ネウロイを大型化した物を発射する射出機が現れ、その下からは4連装の機関砲が現れる。

「やっぱり、グラーフ・ツエツペリンだったか！」

アランには見覚えのある巨大兵器に古い記憶が呼び覚まされる。

1度目は北海で哨戒中だったP-38隊と出逢い、交戦したが援軍が遅れた事と高速を活かして航続距離外に逃げられて、取り逃がしてしまう。だが、哨戒任務中だった富嶽が偶然にも停泊修理中だったグラーフ・ツエツペリンを発見。グラーフ・ツエツペリンは富嶽をレー

ダーで捉えたのか港を出港してしまい、追撃戦へと移行。

富岳の雷撃型やBー35での機雷投下や航続距離に優れた機体での艦載機迎撃戦もあり、デーヴィス海峡にその巨体を沈められた。

「再戦かしかも、火力が高くなっているぞ?」

ブレッドの言葉に呼応する様にグラーフ・ツエツペリンの各所から赤いビームが放たれると雁淵とリネットは散開するがアランとブレッドは時間稼ぎのつもりかその場に止まりブレッドが射撃を加えるとアランがシールドを展開して防御を行う。

「変われ」

今度はブレッドがシールドを展開してアランが極太のレーザーで4連装を破壊する。

グラーフ・ツエツペリンは飛行甲板だった方からロケット弾を輸送船団の方に向けて発射するとハサミの様な形に変形させて弾幕を形成する。

「これは辛いな……」

「弾速が増えてる分だけ辛い……」

そう弱音を吐いているアランとブレッドの2人だが攻撃を避けながらも確実にダメージを与えている。

雁淵は今の自分が突っ込んだ所で邪魔になるだけだと遠くから様子を伺っているがそこに緑色の光る帯を残しながら飛び込む人影を見つける。

「クルピンスキーさん!?!」

固有魔法であるマジックブーストによる超加速で弾幕を無理矢理に突破して肉薄しようとする。

グラーフ・ツエツペリンもクルピンスキーに向かう様に弾幕を張るがクルピンスキーは経験でこれを回避し続けるとハサミの様な発射機が上空から直上急降下で突っ込んで来た人影に碎かれる様に破壊された事でクルピンスキーが囷だと知らされる。

「どうだ!」

海面スレスレを飛行しながらガッツポーズをして、してやったり顔の菅野が振り返ると3本目のアームがキノコの様を展開するとこれ

までとは比べ物にならない程の弾幕を張り始める。しかも、アームが左右に揺れる為に弾道予測と照準が合わせにくく攻撃が加えにくくなっている。

「クソー！」

珍しくブレッドが悪態を吐く。

熱線魔眼でコアを探していたブレッドだが高温化した赤い装甲と分厚い装甲でコアの熱が遮られて大体の位置しかわからない事と時々飛んで来る軽い追尾機能を持ったロケットタイプネウロイへの対処が重なり押され気味だ。

リネットが必死にそんなブレッドを支援するが5機のロケットタイプネウロイをブレッドへと迫るのを阻止しようと狙撃するが弾切れで1機を取り逃がしてしまう。

「!?」

トンプソンSを抜いて何とか迎撃しようとするが間に合わないのは目に見えている。

雁淵が援護に向かおうとするが間に合わない。リネットもトンプソンSが精密射撃に向かない為に黙って見るしか出来なかったが、此処で水色の服を着た少女が頭からネウロイに飛び込み機動をズラす。

「ニパさん!?!」

「なんて、無茶を!」

素早く飛び込んで来たネウロイをトンプソンSでの破壊し、追加された3機に向けて片手保持のS18で迎撃する。

「えへへ……ついね」

「ついで下手したら死ぬぞ?」

と告げるブレッドの眼の前で大きなタンコブが引つ込むのを見たブレッドが言葉を失う。

「(魔力がある世界だからな……)」

瞬間的に治る傷を見て、これ以上の事を考えるのを止めたブレッドは弾倉を新しいのに変える。

「アラン! さっきのレーザーは放てるか?」

「出来ると思うぞ?」

ネウロイをビームを守りながら告げるアランにブレッドは銃を構え直す。

「リネット。守ってくれ。アラン！ 今からアームを破壊する。キノコを完全に破壊しろ」

「了解！」

アランの返事が届くと同時にアームの丁度中間にブレッドのファイヤブレードが炸裂。

アームは半分程の長さとなると同時にコアを持たない胴体部が碎けるがアームの先に着いていた銃塔部分から即座に再生が始まるがアランのショットガンが装甲を削った上で先程の極太のレーザーが放たれて、銃塔部分が飲み込まれるとレーザーの中でコアが完全に碎ける。

「よっしゃー！」

アランがガッツポーズをすると同時にS18がファイヤブレードの熱で暴発を起こし爆発すると其方に意識が向く。その瞬間に生き残りのロケットタイプネウロイがアランに飛び込もうとすると雁淵が咄嗟に盾となり、ネウロイの一撃を受ける。

ネウロイは雁淵の影で危険を感じ着いたアランのM1911で破壊されたが弾頭の一部が雁淵の胸に直撃していた。

「カリブチ！ カリブチ！」

ブレッドが必死に自分の胸に倒れ込んで来た雁淵を揺り動かす。

必死の形相なアランに残りのメンバーが近寄るとブレッドだけがアランの頬の拳を放つ。

「落ち着け。外傷は見当たらない。内側の傷なら動かす方が危険だ」

ブレッドの言葉に一応の落ち着きを取り戻したアランが殴られて横を向いていた顔をゆっくりと雁淵に戻すと雁淵の目が薄っすらと開く。

「カリブチ！」

「あ、あらん……さん？ わたし……」

「ネウロイの特攻を喰らったんだ。何処か痛むか？」

ブレッドの言葉に雁淵は横に首を振る。特に隠している素振りはない。

無いが念の為と上着だけをはだけさせると胸元にグリップが歪んだりベレーターが現れる。

「御守りは持つ者の身代わり。なんて言われるがその通りの様だな」

使用を考えない位置に掛けられたリベレーターを守りだと悟ったブレッドの言葉が静かに北海の海に響いた。



## 第24話 ペトロザヴオーツク上空の戦い

「完熟飛行訓練中にネウロイだなんて」

「文句を吐く前に弾を吐かせろ！」

新型を受領した菅野・ニパ・アランは雁淵が護衛と先行機を務めながら完熟飛行に出ていたのだが、ネウロイ襲撃とタイミングが被った事により即座に迎撃戦闘へと飛行目的が変わる。

敵は細長い身体の後ろが丸く輪っかになったネウロイだ。サイズこそは中型だが、装甲が硬い為に撃破が難しい。

「おもしろー」

だが、菅野が銃を捨てるとグローブに固有魔法で作った硬いシールドを纏わせると拳を前に突き出してネウロイへと突っ込み、身体を貫通する。

「コアとは違う場所か！」

「だったら、もう一度！」

反転上昇してからもう一度降下で突っ込んで行き、コアを殴り壊すとネウロイはガラスの破片の様に碎けて消える。

そんな破片の中から菅野が出て来て勝ち誇っているとユニットから黒煙を吹き出して海へと落下してしまう。

「菅野さんはそこに正座！」

サーシャの叫び声が格納庫に木霊する。

理由はネウロイに突っ込んだ際にネウロイの破片を吸気口から吸い込んで魔導タービンを破壊するという事態に陥ったからだ。

菅野の紫電改は魔導タービンで魔力を圧縮する事を前提に設計されているので魔導タービンの破損は即座に飛行への悪影響を及ぼす。

「菅野さんは中尉になったのですから、もっとユニットを大事にして下さい。階級なんてカンケーね。ネウロイをぶっ倒せばそれで良いだろ？」

悪びれも反省もしない菅野にサーシャが諦めたのか呆れているの

かため息を吐くと扉から様子を覗き見ていた雁淵の名を呼び、雁淵は慌てた様子で扉から飛び出して気を付けの姿勢を作る。

「貴女はブレイクウィッチーズなんて呼ばれたダメですよ？」

「ブレイク……ウィッチーズ？」

聞き慣れない言葉に雁淵が疑問を匂わせる声で呟く。

「いつつも無茶ばかりしてユニットを壊す3人……いえ、4人の事です。まず、そのニパさん」

「私は壊さないよ。壊れるんだ」

扉から顔をだけを覗かせて反論するニパ。

「それから、菅野さん」

「ふん。戦果は上げてんだろ？ ブレイク上等！」

正座に腕組みしながら吐き捨てる菅野。

「それとクルピンスキーさん」

「ツクシヨン」

サーシャが名を上げた瞬間に司令室に居たクルピンスキーがクシャミをしまい、ラルに風邪かと心配されるがかわい子ちゃんが噂をしているのだと軽口を叩く。

「それと正式にユニット破壊世界一になったアランさん」

「壊したくて壊すんじゃない！ 軟弱なユニットを作る国が悪い！」

ついさつきブレイクウィッチーズやアンラッキープレイ、クラツシャオヘアなどの名だたるユニット破壊者の記録に大差の記録を付けて世界一を記録した。

その数は96機。クラツシャオヘアの63機以上の殆どを発着艦で壊した数を優に越しているがアランはただの訓練飛行や先頭でも壊す。100回以上の出撃で実戦回数が84回で内84機を破壊。残りは訓練飛行で壊した数で、残りの出撃回数は哨戒任務や戦闘が無かった出撃だった為に破壊は無い。

「良いからアランさんはそこに正座して下さい！」

「トタン屋根に残骸じゃねーか!!」

アランはダッシュした。必ず、あの残忍で残虐な拷問から逃げてやると決意した。アランにはなぜ拷問を受けるのかわからぬ。アラン

は、ただの兵士である。銃を持ち、ユニットを破壊して来た。けれどもサーシャの追跡からは、決して逃げられなかった。

その日の夜にアランは格納庫に震える足を引きづって訪れていた。

「XPー51Z ムスタング……」

アランはユニットに語り掛ける。

初めてこのユニットで実戦に参加した時は妙な一体感を感じていた。どんな地面でも走破する野生馬の如き飛行。

完全飛行を重ねても、全力運転を繰り返してもあの時の様な力強く、軽やかな疾走感を再び感じる事は無かった。

「俺は……お前を扱えているのか？」

そんな眩きをするとそんな事はありませんと力強い声が響き、顔を向けると寝巻き姿の雁淵が暗闇から出て来る。

「アランさんは充分に強いですよー」

「どうだろうな。ブーツと初めて一緒に戦ってわかったんだ。俺はあいつに差を付けられた……」

飛行機では実力が拮抗して居たが故によく友であり、好敵手だった2人だが、この世界に来てその差が明確に出てしまった。

経験の差もあつたが広く浅い知識を用いて自分なりの解釈や言葉で理解した上で運用する事が出来ると言う適応力に秀でたブレッドとありのままを柔らかか過ぎる心で受け止めて深くは考えないアランでは成長速度に差があり過ぎた。

前者は自分から踏み出す事が出来るが後者は非現実的な事や想定外の事態に強いが自分からは動き辛い。

アランはそんな差を船団護衛の時に感じていた。

「あいつの相棒だと胸を張って言えなくなつた……」

相棒とは信用や信頼だけで無く、実力が同等の相手で無ければなり

得ない存在だ。

何方が強くて、弱くてもいけない。お互いに助け合えば自分達よりももっと強い相手でも勝てる。そう言う存在が相棒となるのだ。

「ブートの相棒だって胸を張って言うには俺は弱過ぎる……強くなるんだ、強くなつてあいつの隣で飛びたい」

「あの……私じゃダメですか？」

「カリブチが？」

そんな言葉にアランがニッコリと笑う。

「良いかもしれないな。お前がもう少し強くなつたらな」

そんな言葉に雁淵の頬が薄っすらと盛り上がって、拗ねてますアピールをするが、アランはどこ吹く風と笑いながら格納庫を去って行く。

「おい。お前は何で戦うんだよ」

格納庫から基地に出る連絡通路で菅野はアランを呼び止める。雁淵とは違う雰囲気のアランは雁淵とは違う答えを告げる。

「決まっている。俺の能力を欲している人と守るべき命がある限り、俺は戦う。お前は？」

「決まってるんだろ！ 何処から来たかわかんねー奴らに好き勝手やられてムカつくじゃねーか！」

菅野の言葉が終わると小さな笑い声が聞こえてアランが振り返ると雁淵が立っていた。

「ごめんなさい。でも、凄い菅野さんぽくって」

菅野はアランと雁淵に指を指す。

「その為にはもっと強くならなきゃいけない。今よりもっともつとな」

「え？ 菅野さんは今でも凄く強いじゃないですか？」

「ダメだ！」

菅野が遮る様に叫ぶ。

「ブレットって奴の方がずっとつえー。俺は奴よりももっと強くなつてネウロイを全滅させてやる。1秒でも早くな！」

「はい！ 私も頑張ります」

腕をピンと伸ばして宣言する雁淵に菅野は腕を腰に回して横を向く。

「バーカ。お前の力なんて当てにしてねーよ」

「いー、だー」

微笑ましい光景にアランは薄っすらと笑みを浮かべていた。

翌日のミーティングルームではロスマンとラルの発する雰囲気により緊張した雰囲気が出来上がっていた。

「観測班によるとペトロザヴオーツクへと向かう大型ネウロイが発見されたようだ」

ラルの報告の後にロスマンが指示棒を黒板に張り出された地図を突く。

「わかっていると思うけど、このネウロイを放って置けば補給路を絶たれる事になるわ。だから、司令部からこのネウロイの排除を正式に命令されたわ」

ムルマン港から502を中心にした各所の補給路を指示棒でなぞりながら話したロスマンの内容に全員が様々な反応を見せる。

「観測班によると500m級ネウロイと言う事だ。今回はほぼ全力出撃で迎撃する」

選出されたのはサーシャを最大階級にクルピンスキー・菅野・下原・ジョゼ・ロスマン・ニパ・雁淵・アランの8人だ。

8人はそれぞれのユニットを履いて空へと上がる。

そんな8人の中で菅野がピリピリしているのか飛行が荒々しい事にニパが気付く。

「なんか、菅野の奴、ピリピリしてない？」

「きつと1秒でも早くネウロイを倒したいんですよ」

雁淵の言葉を聞いたアランが頭の中で嫌な記憶がフラッシュバックする。

戦闘機に搭乗していたあの世界では菅野の様に戦果を求めて何処かピリピリとした雰囲気を纏った仲間は遅かれ早かれ撃墜されるか無茶をして墜落していた。

アランは経験からか何処か危うい菅野を心配そうな目で見ていると先頭を飛んでいた下原が敵を見つける。

「ネウロイ発見！」

横にしたTを立てたTに突き刺した様な形状のネウロイが眼前に現れる。

「よっしゃー！」

いつも通りにクルピンスキーと菅野が突っ込む。だが、菅野の突撃はいつもよりも荒々しく、回避が難しいコースを飛行している。

素早くユニットを可能なレベルで全力稼働させて菅野とネウロイの間に飛び込んでシールドを発動する。

「離れるー！」

言うや否や菅野の襟首を掴んで引っ張りながら飛ぶがネウロイのビームは巢を壊されたスズメバチの様に菅野とアランに殺到する。

アランもバツク飛行で逃げながらシールドを張るが保たないと判断すると菅野を別の方向に投げ捨て、腕のshKASでビームを加えながらバツク飛行をしながらの旋回を行い、敵の攻撃を回避するが、ビームが着弾するとビームの厚さが増して、アランは咄嗟にシールドを張り直し、魔力弾を混ぜた弾帯を使用する腕のshKASで攻撃をしながら逃げる。

「アランさん！！！」

そこに雁淵が13mm弾を放って援護を行うが雁淵は魔法力が無い故に飛行と反動制御を同時に行えない。

そこで雁淵は中距離からの射撃の場合はその場で止まって射撃するのだが、雁淵は射撃に集中したばかりに注意力が散漫となり、ビームへの反応が遅れる。

「ひかりー！」

ニパがすかさずフォローに入った事で雁淵は事なきを得るとロスマンの指示で移動を開始する。

雁淵が移動した事でネウロイは別の目標に狙いを変えるが雁淵の行動は仲間に散開する隙とアランに攻撃をする隙を作り上げる事に成功する。

「うおら!!」

やられたアランはロケット弾18発の全弾斉射をネウロイが放つ。目標を変えようと攻撃の手を緩めていたネウロイはこの18発にも及ぶロケット弾を全弾喰らってしまう。

その中の1発がラツキーショットなのか、最も弾幕が厚かった正面装甲の背後に赤く輝く多面体のコアが現れる。

「コアさえ見つければ!」

菅野はこのラツキーを逃すまいと即座に反応して、最近になって慣れたばかりの紫電改を吹かして接近する。だが、ネウロイもやられるとわかったのか菅野に弾幕を集中させる。

精度こそ低いが濃密過ぎる弾幕で回避場所とタイミングを潰して行く。流石に不味いとクルピンスキーがマジックブーストで接近し、菅野のフォローに入る。が、これが不味かった。

援護に飛び込む。と聞くといい事をしている様に見えるが空戦では同じ様な場所に1機以上の機体が入るとお互いをお互いに邪魔するだけで無く、衝突などの危険性を跳ね上げる事と戦闘機ではなるがウィッチでも同じ事が言える。つまりはクルピンスキーが突入した事で回避に必要な範囲が2倍となる事を意味する。

そして、ネウロイは徐々に弾幕を細める事で2人を捕縛し、数発のビームを的確なタイミングで放つ。

最初の一撃が2人の間の視界を奪い、お互いの位置を把握出来なくしてから残りのビームが2人の回避可能なルートを限定する。

お互いにシールドは酷使した故に回避を選択した2人は限定されたルートに飛び込んだ事で菅野の頭がクルピンスキーの腹に衝突し、お互いに動くを止めてしまう。

動きを止めて、体勢を崩した2人を逃がさないネウロイでは無く、予め用意していた収束ビームで2人を同時に撃墜しようと放つ。

「クルピンスキーさん! 菅野さん!」

そんな2人を庇う様にサーシャが躍り出るとシールドを張って守ろうとするが酷使したシールドと咄嗟だった為にサイズが小さく、シールドに沿って流れたビームが両足のユニットを破壊し、その爆発で吹き飛んだサーシャがクルピンスキーに飛び込む。

そして、サーシャが抑え切れなかったビームがサーシャとクルピンスキーに飛んで行くがクルピンスキーが咄嗟に足でシールドを張った事で直撃を免れるが2人は墜落してしまう。

「サーシャ！ クルピンスキー！」

菅野が2人の手を掴むが2人の重量を支えられる程のパワーを菅野も紫電改も持っていない。だが、墜落の速度が緩まった事で下原とジョゼが救援に間に合う。

「ロスマン先生!!」

「わかっているわ！」

ロスマンとアランがそれぞれの武器で攻撃を加えると同時に負傷者3人とは違う方向に逃げてネウロイの気を引いて撤退の支援を行う隙に残りのメンバーが負傷者を連れて撤退した。



第25話 Thank you very much,  
my buddy

「(士気が低いな)」

アランが完全装備で飛びながら後ろを軽く振り返ると出撃したラル・サーシャ・クルピンスキーの3人を除いた502の仲間達が飛んでいるがその顔は総じて浮かぬ顔をしている。

当然だ。戦闘隊長にエースを同時に失った故に士気が大きく下がっており、影響が無いのはアランとロスマンのみと慣れが露骨に露見する。

ロスマンは開戦直後からの最古参とも言える人材で、アランは仲間が死ぬ事など日常茶飯事な環境に数年間も身を置いた軍人だ。

「!? 敵機発見! 前方1000!」

「みんな! 作戦通りに!」

菅野に連れられてニパ・ひかり・アランが編隊から離れてネウロイの背後に回るべく戦場を迂回し始める。

残されたメンバーはロスマン指揮の元でジョゼ・下原の3人が正面から撃ち合って4人を援護する。

これは前方には厚い弾幕を張れるネウロイに全員が束になって挑めばクルピンスキーとサーシャの二の舞を舞うのは必至。ならば、部隊を分けて確実にコアを破壊する。

コアの位置は割れているので前方で気を引いている内に弾幕の薄い背後から迫り、迅速に破壊する。

菅野は突破力を買われて、ニパは援護要員に、ひかりは前方は危険なので火力の足しも兼ねてこっちに、アランは表面の破壊要員という事で選出された。

「コアの位置はわかっているんだ! 速攻で行くぞ!」

両肩に背負ったフリーガーハマーから18発の容赦なき全弾発射により物理的にコアの位置を思っていた部位や装甲は弾けて怪しく瞬く赤いコアが露出する。

全弾斉射とアランの腹の底から出した声に残りの3人も触発されたのかコアに目掛けてフルオートで銃弾を放つ。

アランも同じ様に両手に持ったShKASで攻撃するがネウロイは緩慢な動きで有るが回避行動をしながらビームを放つ所為で有効打が中々出ない。

「フアックー！」

焦り始めたタイミングでネウロイがバラバラに分かれてしまいまして何処にコアが有るのかわからなくなると同時に別れた事で動くが機敏になり、別れた状態で4人に多方向からそれなりの厚みがある弾幕を張って来る。

4人は各自で回避行動を取ってビームを交わすが陣形が壊れて隙を晒すと先程とは違う形に合体して全方向に弾幕を張り始める。

「コアの位置が!!！」

形が変わった事でコアの位置が変わってしまい、わからなくなる。

しかも、広範囲に弾幕を張られた事で回避行動を取る内に全員が合流してしまい、お互いに広く間隔を空けて居るがお互いの回避行動次第では空中衝突してしまう距離で激しい回避行動を強要されてしまい、意識した瞬間に身動きが取りづらくなってしまふ。

「(なんとかしてコアを!）」

こんな時にブレッドが居てくれれば! そんな悪態をついた瞬間にある人物の顔を思い出す。

「アランさん!」

ロスマンの叫び声が聞こえると同時にシールドでビームを防ぐと急加速をしながら上昇する。

速度が鈍る上昇軌道と言う誘う様な動きと生物と言うのは下から上の方が意識を割きやすい動きでネウロイを誘う。

ネウロイも生物としての例に漏れずアランへの攻撃が苛烈になるがそれを速度と戦闘機パイロットとしての培った感と経験、技術で躲して行く。

「凄...」

ビームが少なくなった事で意識がアランに避ける様になった下原

が零す。

防御不可の戦闘機パイロットにとつては弾を当てる技術よりも回避の技術が重要視される世界とも言える。

エースは弾を当てられるパイロットを指すが新人の頃は如何に弾を当てるよりも弾を躲して生き残れるかが課題となるからだ。つまりはエースとは弱小の時に生き残り、生き残る術を身に付けて、磨き上げた者でもある。

そしてアランは新人時代を生き延び、エースと言われる程までに実力を身につけた者だ。その回避能力はシールドと言うアラン達から見たら甘えとも言える物に頼る時があるウィッチでは追い付けない領域だった。

「そいー！」

そしてアランは唯一の死角であるネウロイの直上に出ると垂直の急降下で接近しながら弾丸を放ち、すり抜け様に手榴弾を投げ付けてネウロイを怯ませ、そのままの速度を維持したままひかりを抱えて離脱する。

「あ、アランさん……？！」

ひかりは突然の抱擁に驚くと同時に顔を赤くしながらアランの顔を腕の隙間から覗く。

アランはひかりの言葉に答えずに抱擁を解くと両腕を振って残弾を重さで確かめるとネウロイを睨みつけたままひかりに告げる。

「君が必要だ」

気負いを感じさせる言葉にひかりの顔は直ぐに何時もの肌に治ると同時にアランの真意に気付く。

「魔眼……ですね……」

「君の接触魔眼だ。君でなければ……ネウロイに触ろうなんて思わねーだろ？」

魔眼だけでなく、触ると言う危険を冒す勇気を持つひかりすらも必要とするアランの言葉にひかりは力強く頷く。

「はい！ 私をネウロイの元まで連れて行って下さい！」

「任せろ！ 援護する！」

アランのすぐ後ろをひかりが飛んでネウロイへと迫る。

ネウロイは分離した各個体から戦艦の対空砲火と言える程の射撃を喰らうがアランはシールドを使って命中弾のみを確実に吸う事で自分とひかりをビームから守ると同時にクイックエイムとクイックショットでビームを放って分離した個体にダメージを与える。

「薄くなった!」

回避と防御、そしてひかりを意識してそこまで加速していなかったアランだが、弾幕が薄くなったのは分離した個体がやられたからであり、再生すればまた変わらない量の弾幕が迫る。

ネウロイと接触するには防ぎながら攻撃を加えて、撃破した隙に可能な限り接近する事だ。だが、その行動を見て、2人以外のメンバーは危険な事をしている様に見えないうら。しかし、それでも彼等は前に進む。それがこの2人に出来る事だからだ。

「まさか! 接触魔眼!!」

そんな2人を見てロスマンが2人の目的に気付くとその言葉を聞いたロスマン以外のメンバーが意味がわからないと言うべき反応を示す。

「ロスマン先生……あなたは何を言ってるんだ……」

「どういうことですか? ロスマン先生」

そんな中、菅野と二パは困惑した様子でロスマンに問い掛ければ、ロスマンは迷う様な声で説明する。

「雁淵軍曹はネウロイに触ったらコアの場所が分かるんです」

「触ったら!? 触ったらって、バカか! そんな危なっかしいもの役に立たねえだろ!」

「立たせるつもりなのよ! あの2人は!!」

菅野の言葉にロスマンが珍しく怒鳴る様に言い返す。

やる前から諦めない。

やれる事なら戸惑う事なくやる。

無理も無茶も無謀もやれるからやらなければならぬならやる。

そんな2人だからこそ馬鹿を頭良くやる。

接触魔眼を使うと言えば反対されるのは目に見えている。だから

こそ命令違反を承知で独断先行で動いた。

「菅野、ニパの両名は雁淵、アラン両名の援護を行え。雁淵がコアを特定後に菅野もしくはアランがトドメをさせよ」

ロスマンの声は通信機が拾っていたのかラルにも聞こえており、ラルは状況を打開する為に命令を下す。

「はあ!? やらせるのか!?!」

「隊長!?!」

とんでもないことを言ってくれると思わず聞き返す菅野にロスマン。だが、ラルは命令だと告げられると菅野はネウロイの猛攻に晒されて進退窮まった2人を見てやけっぱちの様に叫ぶ。

「わかったよ! 連れてきやいいんだろ、連れてきや!」

「菅野!」

菅野は自暴自棄にも見える返事を返した。その行動にニパが驚くが、菅野はひかりの方を向くとユニットを加速させるとニパも自棄気味の声を上げてから菅野の後を追う。

「しまった!」

菅野とニパが現場に到着する寸前にアランのシールドが限界点まで敵のビームを吸った事で消えてしまう。

子機のシールドも撃墜数不足故か未だに発生しておらず、アランの視界がビームで赤く染まるがそのビームは直撃の寸前に菅野が飛び込んで張ったシールドに防がれたお陰で一命を取り留める。

「カンノ!?!」

「全く何やってんだよ! 死ぬ気か!」

「死ぬ覚悟が無きや戦争に参加しないし、航空歩兵なんざ以ての外だ!」

ビームを放ちながら叫ぶ様に菅野に返したアランはthank youと叫びながらひかりを連れて距離を詰めて行く。ニパもそんな2人を追うのを見てアランの今まで見た事の無い覚悟と目に身体が固まっていた菅野も3人の後を追いつける。

「(あいつら……本当にネウロイに触る気か……?)」

菅野は前を飛ぶひかりとアランを見ながら考える。そして、その行

動は仇となり、逃亡するネウロイが放った収束ビームへの反応が遅れてしまい、菅野がビームに飲まれ掛ける。

「しまっ……」

そんな菅野の脇腹に楔に航空機の翼を生やした様な物体が飛び込み、菅野を突き飛ばす。

「これって!？」

それはアランが一定数撃破した時に自然発生するシールドを張れる子機だった。

子機は借りを返したぞとアランの伝言を伝える様に眼前で飛び回った後に主人の元へと戻って行く。

「はあ……はあ……はあ……」

主人の元へ戻る子機を彼女は呼吸を荒くして立ち止まったり、見送った。そしてその様子に、ひかりとニパが気付き、ひかりの気配が遠ざかる感覚でアランも気付いた。

「菅野?」

「菅野さん?」

ニパとひかりが振り返って菅野を呼ぶが、菅野は懸命に声を絞り出す。

「駄目だ……こんな作戦馬鹿げてる……どうせ失敗する」

菅野の言葉にひかりが戸惑う。

「作戦は中止だ……」

そう菅野が言うので、二人は驚く。いつもの威勢のいい菅野ではない。今ここに居るのは、弱気になったただの少女だった。その変化は一步遅れて合流したアランにも直ぐに気付けた程だった。

「菅野さん!」

「なんだよ……?」

そんな菅野にひかりが近づいていくが、菅野は力のない声で返事を  
する。

そしてひかりは菅野に聞く。

「菅野さん、変ですよ。どうしちゃったんです?」

「俺には……無理だ……。クルピンスキーやサーシャ、それにブレッツ

ドみたいに、お前らを守れねえ……」

ひかりの言葉に、管野は力も覇気も無い言葉で答える。管野は自分の力では駄目だと、クルピンスキーやサーシャ、ブレッドのように戦えないと。

その様子はいつもの管野とは完全にかけて離れていた。そしてひかりはそんな管野に大声で問い掛ける。

「何言ってるんですか！　いつもの管野さんらしくないです！　ここですら補給路は、502はどうなるんです!?!」

「んなのわかってる！　わかってんだよ!!」

「私の接触魔眼と管野さんの突破力があれば絶対に勝てます!」

「うるせえ！　ひよっこが生意気なこと言ってるじゃねえ!」

管野が大声で言った言葉にアランが管野の頬を殴り付ける。それも拳でだ。

「ひかるがひよっこ？　今の俺から言わせて見れば貴様がひよっこだよ!」

管野が殴られた事からキレてアランの襟を掴むがアランはそれでも口を動かす。

「死ぬ恐怖を直に感じて命が欲しくなったか？　フザケンナ！　俺たちは航空歩兵、明日の命も知れぬ菓子のチリ紙よりも軽い命だろ!」

アランが管野の襟を掴んで引き寄せる。

「俺たちの仕事は空を飛んで仲間の為に戦い、死んでいく事だ！　長寿を望むなら空に関わるな！　俺が為すべき事を必ず為す！　例え

……機材を、己を命を弾丸に変えてでもだ！　それが俺のブレイクウィッチーズとしてのプライドだ!」

アランの剣幕に負けて、管野の腕が緩んだ瞬間にアランが軽く管野を投げる。

「お前みたいな臆病者が居ると俺たちが無駄死にするんだ。引つ込んでろ。行くぞ、こいつもはもう戦えない役立たずだ」

ニパとひかりの肩を叩いて先にネウロイへと接近するアランをニパは後ろ髪を引かれる思いで追い掛ける。ひかりも管野とアランを見比べて未練がましく管野を見てからアランを追い掛ける。

菅野はそれを俯いてその場で浮遊して居ると肩を誰かに叩かれ、顔を上げるとロスマンが視界に映る。

「貴女はこれでいいの?」

「なんだよ……」

「あのネウロイを必ず墜とす。そんな約束をあの2人と交わしたんじゃないくて?」

その言葉に菅野が驚き、ロスマンの目を見つめる。

出撃前夜に撃墜されたクルピンスキーとサーシヤに仇を討つと約束したのをロスマンに聞かれていた事からだ。

「私の知るブレイクウィッチーズの菅野直江中尉は無茶も馬鹿も平然とやってのける威勢の良い人なんだけれども……貴女はブレイクウィッチーズの菅野直江中尉かしら?」

ロスマンの言葉を聞いて、菅野の目に決意と覚悟の炎が揺らめくとユニットを回して先に飛んだ3人を追う。

「良かったんですか?」

「あのままだったら、もう、ユニットを壊さなくなるんじゃないかなかったですでしょうか?」

焚きつけたロスマンにジョゼと下原が突っ込むとロスマンは楽しそうに帰ったら正座させられるかしらと笑い返した。

「(そうだ…何ビビってんだよ、菅野直枝。お前はこんなところで立ち止まってちゃいけねえだろ!)」

菅野は心の中で先ほどのことを後悔した。そして、アランの言葉が蘇る。為すべき事を為す。その言葉を思い出し、決意と覚悟を胸に、ネウロイに向けて直進していく。

そんな菅野に気付いたネウロイは再びビームを収束させ、菅野に向けて放ってくる。しかも、他の3人も牽制できるコースを通してだ。

これに対して菅野は気合を込める様な叫び声を上げると拳に圧縮し強化したシールドを纏わせてビームを殴る。

殴られたビームは花が咲いた様に避け、全てを防がれれしうがネウロイは咄嗟に身体を分離させて分離したコアの無い部位3つを楯の様に配置する。



「関係ねえ！ぶっ壊す！」

菅野の決意と覚悟が拳に乗ったのかシールドが一段と強く輝き、分解されたネウロイを貫通する様に破壊するとその破片を大きく吹き飛ばしながらひかるを抱えたアランが音速でネウロイへと接近すると投下型爆弾を落とす様に直上からひかりを離す。

ひかりは落下とユニットの加速を生かしてネウロイに急接近してついにその右手がネウロイに触れる。

その瞬間にひかりの目がスピネルの様な赤い瞳に変わる。

「そこだあああ!!」

接触魔眼で捉えたコアに機銃を放つ事で周りに知らせるがネウロイはビームを一心不乱に放って近づけさせまいとするがそこに音速を超えたアランと子機がビームを速度の違いで無理矢理に突破して接近。

青いビームで表面の装甲を破壊、トドメにブーメランの様に音速で飛来した子機がコアを真つ二つにして完全にネウロイを破壊した。

「やったね！」

ニパが戦果を確認すると近くを飛んでいたひかりと菅野に抱きつき、2人してニパの腕と胸にサンドイッチされた事で窒息寸前にまで気管を

塞がれ、口も抑えられいるので抗議も出来ない状態となる。

「ニパ。菅野とひかりが窒息死する」

加速のし過ぎで減速が難しかったアランが徐々に減速して戻って来ると肩を叩いて2人を解放させると悲劇が発生する。

「なっ!？」

「えっ!？」

「嘘ッ!？」

三人が嫌な予感がする中、それは見事に的中する。3人のユニットがエンジンは停止してしまい、三人の体は重力に逆らえずに落ちて行くが偶然にも近くにいたひかりの手をアランが掴んだ事でひかりは落下を免れたがそのひかりの足に菅野が菅野の腕にニパが捕まる。

「クッソ重い!!」

重武装に少女3人を掴んでの言葉がその言葉に助けられた筈の少女3人は文句をアランに投げるがアランはどこ吹く風と笑いながら3人を掴んだまま帰るべき502の基地へと頭を向けた。しかし、帰って待っていたのは無事に作戦を終わらせた兵士達に送られる暖かい賛辞では無く、格納庫の門の前で腰に腕を当てて男らしく仁王立ちするサーシャだった。

「菅野さんニパさんひかりさん、ついでにアランさんはそこに正座ー!」  
「ついで!」

頭に包帯を巻いているサーシャの声と共に、4人は格納庫内に正座をさせられる。その様子を、基地に帰投した者たちは揃って微笑ましい表情で見ている。

そして正座している4人を見ながら、松葉杖をしているクルピンスキーはひかりを見て言った。

「いや、これでひかりちゃんもすっかりこの502、そしてブレイクウィッチーズの仲間入りだね」

「ホントですか!?! やったー! やったやっただー!」

クルピンスキーの言葉にひかりは両手を上げて喜ぶ。

「なに喜んでるんですか! ひかりさん!」

「あつ」

しかし、サーシャの言葉にその手は突然固まり、そしてゆつくりと下ろしていく。その様子を見て、アランが突っ込む。

「ブレイクウィッチーズって不名誉なあだ名だぞ? それで良いのか? と言うかクルピンスキーもそうだろう?」

「そうでした。連帯責任でクルピンスキーさんも正座です」

「え!!? ボク、今回は何も壊してないよ!」

「今回は、じゃねーか!!」

足にギブスを巻いている人に正座をしろと言うサーシャにクルピンスキーは反応するが、その言葉にアランがツツコミを入れるが周りからしてみれば頭に特大ブーメランが突き刺さっている様に見える。しまい、その場にいた者たちは笑いだす。無論、それは正座をした新たなブレイクウィッチーズも含めてだった。

「Thank you very much, my buddy」

アランが短くひかりに呟く様に送った言葉にひかりが反応する。全て英語だったが内容はとても簡単な物だった故にひかりは内容を理解する事が出来た。

満開の花の様な笑みを送りながら大きく頷くひかりをアランは気づかしそうに目線を外していたが口元は味のある笑みを浮かべていた。

Thank you very much,  
my buddy.  
ありがとう、私の相棒。

## 第26話 不穏な雲行き

厄介なネウロイが現れ、それを撃破したとしてもそれが最後の敵などと言うゲームの様な展開は無い。

502統合戦闘航空団、通称ブレイブウィッチーズのメンバーの殆どが大型ネウロイ撃墜の為に空へと飛んでいたがその戦い方は従来に比べれば大きく変わっていた。

「今だよ！ ひかりちゃん、アラン君！」

褐色の肌でこちらの男よりもカッコ良く口が上手い事でウィッチに人気なベテランウィッチ、クルピンスキーからの言葉を聞いて動き出す影がある。

茶色い髪に白人から見れば少し黄色みを帯びた白の肌に紺色の水兵服を着た諦めが悪いウィッチ、ひかりは自分よりも前を飛ぶ黒い影に絶対の信用と信頼を寄せた目で見つめてすぐに前を向く。

ひかりから絶対の信用と信頼を寄せられているのは黒い肌を持つが故に迫害され、それでもそんな国の為に命を捨てる覚悟で空を飛び続けた末にこの世界へとやってきた異世界の戦闘機パイロット、アランダ。

「必ず守る。行くぞ!!」

「はいー」

アランの言葉に頷いたひかりがアランの後ろを飛ぶ。

アランはネウロイから放たれるビームを防ぐ訳ではなく、吸い込む事で無力化する特殊なシールドで吸い込みながらひかりを守る。

ネウロイは甲高い謎の声を上げるとマンタの様な翼の下にコバンザメの様にぶら下がっていたミサイルに似た形のネウロイを16機も投下して、2人を撃墜しようとする。

投下された子機は空中で翼の様な物を広げると多角的な動きで2人を囲もうとするがそれをニパと菅野が6機を撃墜するが残りの10機の突破を許してしまう。

「しまったー」

10機はニパと菅野を無視してひかりとアランに迫るがアランの

放った7・62mm弾で撃墜されてしまう。それでも親機を守る為に味方の損害を無視して接近すると同時に囲んだが、ひかりの自衛の為に反撃で1機が。アランも囲まれた瞬間に横や縦方向の回転を交えて銃口の向きを素早く変えながら囲んだネウロイに7・62mm弾を浴びせる。

ネウロイ達は素早く撃破された事でオールレンジからの攻撃を浴びせる前に全機撃墜されて2人の周りをネウロイの残骸が白銀の雨となって降り、壁を作る。そして親機がその壁を目隠しにビームをこれでもかと吐き出してくる。

「ックー！」

突然の事でアランが苦しげな声を吐く。それでも寸前でシールドを展開したお陰で2人は無事であるが範囲は狭いが濃密な射撃に2人の動きが封じられる。

隙が欲しい。そう思った瞬間にネウロイの背中が爆発を起こす。

銀髪で小柄だが、頼れる教官にして友軍のロスマンが持つロケット砲のロケットだと確信したアランはビームが止んだ瞬間を狙ってマントの口にあたる部分に密集して配置された赤い装甲を狙って4本の青いビームを放つ。

放たれたビームは口内を蹂躪するかの如く暴れ回り、一時的にも弾幕形成能力を奪う。

ネウロイは悲鳴の様な不快で甲高い音を発しながら再生させようとしますがそこにすかさずジヨゼと下原の追撃が突き刺さる。

「でえあああああ!!！」

その間に雁淵が最大速度で接近すると同時にネウロイに触れてバウンドする様に離れた。その瞬間になんの合図も無しにアランがひかりを抱えて音速での飛行を持って安全圏へと離脱その後で雁淵は赤く光る目でネウロイを見る。

「右の翼の根元中央！ 深さも真ん中です！」

「よっしやー！」

その指示を聞いた菅野が剣一闪を持ってネウロイ表面装甲を破壊し、菅野が離脱した瞬間に再生中の装甲を破壊しながら青いアランの

ビームがコアを完全に破壊する事

ネウロイはまたも悲鳴の様な声を上げながら粒子となって消えた。

「Nice fight buddy!」

「thank you buddy!」

完全な撃破を確認するとひかりとアランがハイタッチを交わす。

少しスラングがあるがネイティブな発音のアランの英語を聞く機会が多いせいなのかひかりの発音はメキメキと上達しており、ひかりが知っている言葉なら充分に通用するものだ。

「アハハ、すっかりいいコンビだ」

「ちよつと妬けちゃうな」

二パはその光景を見て少し微笑みながら言い、クルピンスキーは少し羨ましそうな感じで感想を零す。他のウィッチたちも微笑みながら見る中、突然クウという小気味良い音がする。

音源はジョゼだった。ジョゼはお腹を押さえながら下原に話しかける。

「定ちゃん、お腹空いた〜」

「じゃあ、帰ったらワツフル作ろっか」

ジョゼの言葉に下原はおいしい提案を出す。それを聞いたジョゼは笑顔になり、アランもガッツポーズを取る。そのガッツポーズは周りのメンバーにA・コロンビアという訳の分からない物を幻視させる程のガッツポーズであったが、そんな幻視を頭を振ってはじき出したサーシャが最後を締めくくる。

「それでは帰投します。二パさんが落ちる前に」

そう言つて、サーシャは二パの方向をチラリと見る。二パは二パで突然に自分のことを言われて思わず焦る。

「うええ？ 最近減ったよね？」

「減ってません」

「あ、あれえ？ 変だな……」

サーシャにピシヤリと言われて二パは慌てて自分のユニットを見るとアランが肩を叩く。

「安心しろ。落ちたら抱えて基地まで帰投してやるから」

「なんかアランに言われると負けた気がするんだよなー……」

「貴様！ 人が親切心で……」

拳を震わせるアランにどこか不満気になったひかりは頬をリスの様に膨らませて横目で見ていたがニパとアランは気付いていなかった。

「うん？」

そんな様子を微笑ましく見ていたロスマンが遠くを飛ぶ飛行機を見つける。その機体はJ u 5 2。各国の各基地でも連絡機や輸送機として利用している機体だ。

「どうしたの、先生？」

「なんでもないわ」

クルピンスキーの言葉で帰り始めていた他のメンバーに気付いたロスマンは帰投する間にクルピンスキーから何があったのかしつこく聞かれていたがロスマンはそれを真に返さずに飛び続けた。

「マンシユタイン元帥に敬礼」

ラルの言葉に、全員が各国それぞれの敬礼をする。統合戦闘航空団や全世界でも連合軍と言えども一枚岩では無い。様々な国の敬礼が飛び交うこの光景がそれを如実に表していた。

先程の出撃に出た502基地に帰投したウィッチーズとウイザードは、出撃後のデブリーフィングや整備士へと意見交換や報告を行うとしたタイミングでラルからの放送ですぐさまブリーフィングルームに集合させられた。そして全員が部屋に入ると、なんとそこにはラルの他にもう一人が立っていた。

その人物はなんとマンシユタイン。ペテルブルク軍集団のトップの1人だ。

そしてマンシユタインは全員の敬礼を確認した後、すぐさま首を小さく振った。

「うむ、座ってくれたまえ」

歴戦を経験した兵士からしか発せられないその声にアランは恐怖に近い感情を感じながら席に座るがそれを表に出す事はしなかった。

「突然すまないな、ラル少佐」

「いえ。それで、今日はどういった用向きで？」

ラルが聞くと、マンシユタインは正面を向いて説明を始めるがその時にアランはラルに謝罪を入れたマンシユタインに好意的な印象を受ける。

アランの知るマンシユタインの様な将官の殆どは部下を奴隷と何かと勘違いした連中が多かったからだ。

「一部の者には内々に伝えていたが……ペテルブルグ軍集団によるグリゴリー攻略のフレイアー作戦について、だ」

「ついに……」

マンシユタインの説明を聞き、ロスマンは覚悟をした様子で反応した。

そんな中、ひかりはフレイアーが何のことか分からず小声で二パに聞いた。

「フレイアーって何ですか？」

「こっちの神様で、豊穰の女神って言われてるんだ」

そんな2人の会話を聞かぬふりをしてマンシユタインは続けて説明する。

「補給路が回復し、士気が大幅に向上したことでフレイアー作戦の発動が正式に決定した。そこで、君たち502部隊にも当作戦への参加を要請する」

「いよいよか」

管野はマンシユタインの説明を聞き、拳をつかみながらやる気滲ませる。アランもブレッドに追い付ける武功を挙げられると左手の掌に右手の拳を当てる……しかし、ラルは気になることがあり、マンシユタインに質問する。

「その作戦ですが、501ストライクウィッチーズがガリアを開放した例に準ずるのでしょうか？ だとすれば、リスクが大きすぎると思われませんが……」



ラルの懸念は最もだ。

詳しい話を知らぬラルだが、最終的には暴走で友軍の正規空母を撃沈寸前にまで損傷を与えたのだ。そんな技術を使う事に一抹の不安、それ以上に警戒心が優っていた。

「ウィッチは耳も早いな。安心したまえ、ネウロイのテクノロジーは我らの手に余る」

小さな笑みを浮かべながら言い切ったマンシユタインのその言葉にラルはホッと胸を撫で下ろす。

「では？」

「作戦そのものはシンプルだ。現在、ムルマンに集結中のペテルブルグ軍集団の戦力でグリゴリーを叩く。そうすることにより……」

「ネウロイの生産力を壊滅させる」

「そうだ。そして無防備になったグリゴリー内部に侵入し、本体のコアを超大型列車砲で撃ち抜く」

それを聞いて一部の物はムルマン港で見たパーツを思い出す。見慣れた大砲のパーツだがサイズが可笑しいほどに大きかったあのパーツを。

「元帥。質問よろしいですか？」

「君はアラン・レッドフィールド伍長だったな。何かね？」

「大砲で精密射撃って10キロくらいが限度だった覚えがあります」

「そうだな」

「ネウロイの大半はコアを破壊する必要がある覚えがあります」

「そうだな」

「もう1つ質問していいですか？ コア特定の魔眼は扶桑の尉官かブリタニアの尉官だろうか？」

「君の様な感のいい兵士は好きだよ」

マンシユタインの言葉と同時に窓からストライカーユニットの稼働音が聞こえ始める。その音は502のメンバーには聞き慣れた菅野のユニットとほぼ同じ音だ。

その音にいち早く反応したのはひかりで誰かが静止する暇も無くひかりはブリーフィングルームを出て行ってしまった。

上官から許可無く退出するのは下手をしたら叱責を受ける物だがそれをやるものはマンシュタインを含めて誰も居なかった。

「ムルマンからここまで時間通り。流石と言うべきだな」

マンシュタインは満足したように言った瞬間に謎の飛行物体が窓の目の前を通り過ぎて行く。

それは白い軍服に身を包んだ長髪の女性で手には黒く長い銃を持ち、足は夏の木の葉の様に緑色と白だった。

「白い軍服に緑のユニット……扶桑のネイビーフォースか……」

「これで502も少し違うが正しい形となるだろう。これまで現場の判断でよく頑張ってくれたな、ラル少佐」

「……恐縮です」

「では、失礼する」

そう言つて、マンシュタインも部屋を出ていった。

そして部屋に残ったラルの横に、ロスマンが来る。

「とんだタヌキジジイだ」

「隊長の独断でひかりさんを502に引き留めた件は、お咎め無しのようにですね」

「代わりに、少しばかり面倒なことになりそうだがな」

ラルの呟きにアランは何か違和感を感じていた。

それは欧州の空でドイツ軍の強襲を受ける直前に感じた感覚と酷似していた。

基地の外、滑走路では今まさに、ひかりが空を見ながら走っていた。

「間違いない！ あれは……あれは……お姉ちゃん！」

ひかりは喜びながら走る。自分の憧れであり、いつか共に飛びたいと願っていた姉が、負傷から復帰してきたからだ。

そしてひかりは、姉の着陸した場所へ到着する。

「お姉ちゃん」

ひかりは息を整える暇すらも惜しのか自分の姉、孝美を呼ぶ。

その声に孝美は振り返りひかりを見る。しかしその表情は、最愛の

妹と久々に会った姉がする様な顔ではない。まるでひかりをこれから叱ると言った表情をしていた。

「ひかり」

そして、孝美はキツイ声で話し始めた。

「お、お姉ちゃん……う？」

予想だにしない声にひかりは困惑を滲ませる。

「どうしてあなたがここに居るの？」

「えっ？」

ひかりはまるで驚いた様子で孝美を見る。

「あなたの本来の任地はカウハバ基地だったはずよ。それが何故ここに居るの？」

「そ、それは……」

その問いにひかりは答えることができなかった。

ひかりは負傷した孝美の代わりに502に残った事を自分の口から言う事が出来なかった。

そんなひかりに孝美はさらに追撃を放つ。

「ひかり。ここはあなたが居ていい場所ではないわ」

「お姉ちゃん……で、でも！ 私、扶桑に居た時より強くなったんだよ！ チドリだってちゃんと乗れるようになったんだよ！」

「誰もそんなこと聞いてないわ」

そして孝美は、ひかりの横をタシキングする様に通り過ぎて行く。

「すぐに荷物をまとめてカウハバに行きなさい。これは正式な辞令よ」

「そんな！」

ひかりは振り返るが、孝美はそんなひかりに振り返ることなく、そのまま502基地へと行ってしまった。

「お姉ちゃん……」

残されたひかりは、ただ呆然と立つていることしかできなかった。

「孝美！ やつと来たな。待たせやがって、コノヤロウ」

孝美が格納庫にユニットを止めると、502のウィッチたちは格納庫にやってきた。

管野は孝美にそう言うのと、孝美は管野の様子を見て微笑んだ。

「相変わらずのようね、管野さん」

「ふん、そうそう変わるかよ。けど、お前の妹はなかなかやるようになったと思うぜ」

管野の口からひかりのことを言われ、孝美は下を向いて黙ってしま  
うが直ぐにラルと向かい合う。

「本日をもって、502統合戦闘航空団に着任しました、雁淵孝美中尉  
です。リバウ以来ですね、ラル隊長」

「ああ。久しぶりだな、孝美」

「本当に復帰できたんだ……」

「良かったね、ジョゼ」

敬礼をしながら告げる孝美にラルは返事をする。

ジョゼは自分の治癒魔法で回復できなかった孝美が復帰をして5  
02に来てくれたことに涙を浮かべ、その様子に下原はよかったと  
言った様子でジョゼに寄り添う。

全員が新たにやってきたウィッチである孝美に向いている中、管野  
はひかりが居ないことに気づき、ニパを連れて格納庫を出ると孝美  
がこの502で最も異様な雰囲気を放つ兵士に顔を向けるのは同時  
だった。

「ストライカーズで有名なアランさんですね」

それを聞いた瞬間にサーシャはクラッシャーとしてのアランは扶  
桑に上陸していないのかと何処かホッとしていた。

アランはストライカーズの方で呼ばれた事で一瞬だけ驚いていた。

「話はbuddyのひかりから聴いている。アラン・レッドフィール  
ドだ。しかし……」

アランは握手をしながら孝美の顔を見る。

「兄弟だけかと思っただが姉妹もそうなのか」

日本人の兄弟は何回か見た事があるアランだがどうにも似ておらず、言われるまで苗字が一緒の他人だと判断していた時の事を思い出す。

「何か？」

孝美は握手をしているが何かしてない様な感触に少し戸惑いながらもアランの言葉に首を傾げる。

「いや、顔が余り似ていないと思ってる？」

手を話して少し下がってから口走ってしまう。

「歳の差グホー！」

歳の差と言った瞬間に両脇腹にロスマンとジョゼが腰と膝、肩と腕の動きを完全に同調させた最大火力の肘打ちを魔力で強化した逸品を両脇腹に炸裂させる。

こうでもしないと整備兵の本気の腹パンに対して、手首の骨を折る事で返り討ちにするアランの岩盤の如き筋肉を貫通し、ダメージを与えられないのだ。

「孝美さん。アランさんの事でまず覚えるべきはこの人を制裁するならこれくらいはしないと止まらないという事です」

格納庫の柱に辺りうつ伏せで倒れたアランの背中に足を置いて放つジョゼの言葉にロスマンが補足する。

「加減が難しいと思つたら簡単よ。いつそ殺すつもりでやればいいわ。そうでもしないと効かないかもしれないわ」

それはロスマン先生が非力だからでは？ とは思ったクルピンスキーだが、一瞬だけ冷や汗を流してから開きかけた口を閉じた。

言ってしまったら逝ってしまうと思つたからだ。

「それとアランさんはデリカシーがなさ過ぎます」

サーシャの言葉にうつ伏せのままアランが震える声で『ジョゼとロスマンには殺意しか無いだろ』と言つた瞬間にアランの頭部がコンクリートの床に打ち付けられる。

「女の子に殺意しか無いとか言っちゃダメですよ？」

「貴方の身体が強過ぎるのがいけないのよ」

体重掛けっ放しのジョゼに踵を捻って微妙なダメージを加える口

スマンに孝美はどんな反応をしていいか分からずに苦笑いで固まっていると下原が肩を叩く。

「大丈夫です。その内に自然と混ざれる様になります」

仏の様な笑みを浮かべながら告げた下原の言葉を聞いても孝美の顔からは苦笑いは消えなかった。

「(拜啓、お母さん、お父さん、扶桑海軍の皆様へ。希望配属先を間違えたかもしれません)」

オモシロ黒人がいる場所に平和で正常な平穏など存在する筈がない。それを孝美が知るのは意外にも早そうだった。

## 第27話 模擬戦

「何か言い分はあるか？」

正座するアランの前で腕を組んだまま仁王立ちするラルの言葉にアランはキリツとした顔で言い放つ。

「コラテラルダメージです」

ペテルブルクの空にアランの絶叫が響いた。

これだけだと何があったか感の良い読者しか分からないと思うので時間を少し遡ろう。

時間は孝美が502に合流した日の翌日の朝食終わりに孝美はアランの事を知りたいと模擬戦を申し込んだ。

孝美は現場での活躍が長いベテランであり、同時に通常の戦闘機パイロットとも大なり小なりの交流があり、その中でベテランの戦闘機パイロットから相手の事が知りたいなら1回は模擬戦をするとよくわかると聞いていた事とアランが元は戦闘機パイロットだと言う事を朝食で知ったからだ。

「OK」

それにアランは孝美の企みなどには気付かず良い笑みで了承すると2人はルールを取り決めながら格納庫へと進むとそこには青筋を浮かべたロスマンがアランを待ち構えていた。

そんなロスマンを見てアランは心当たりがあるのか冷や汗を流し始める。

「アラン伍長、これは何かしら？」

そう言って足元を指差すとそこにはS-18/1100を2つ乗せた金属製のランドセルが鎮座されていた。

「鉄塊です」

アランの返答に孝美はそうなんだけどそうじゃないというツッコミをしたかったがやったら面倒な事になりそうなので黙って流れの様子を見る。

「鉄塊ね。じゃあ、どんな鉄塊かしら？」

「銃ですね」

銃と白状したアランにロスマンは顔を片手で抑えるがすぐに手を離して銃を一丁ずつ丁寧に作業台の上に乗せ、作業台に手をつけて銃を眺めながら問い掛ける。

「アランさん。貴方が長い時間この作業台で何か弄り始めたのはいつでしたっけ?」

「ええと……2ヶ月前だね」

「S-18の残骸が届いたのはいつでしたっけ?」

「……2ヶ月前だね」

「もひとつ質問いいかしら?」

ロスマンの顔が動き片目だけだがアランを睨みつける。

「改修許可届と改修許可証は何処かしら?」

「貴女のような感のいい教官は嫌いだ」

アランの顔が無表情から狂気を感じさせる顔になりロスマンに向けられる。

それに対してロスマンが取った行動はフリーガーハマーの発射トリガーを引く事であり、アランだけが爆発した。しかし、この程度でラルが出っ張ることは無い。

アラン爆発案件はここ最近では『またか!』程度のものだ。理由は回数が多くなって来た他にロスマンの制裁用ロケット弾の調査も上達してアラン以外に被害が無いのもそれに拍車を掛けている。

「(え?) それって密造銃に限りなく近い銃って事!? それよりもロスマン曹長が実弾撃った!? それに全く動じない周りの整備士もどうなの!?)」

非常識は常識の中へと溶け込み非常識ではなくなり、異常は正常に食われて異常ではなくなる。それがこの502である。

孝美は下原の慣れますがこの魔境に慣れる事なのだと思うと何か胃に異常を感じ始める。

「まあ、変な改造をしてないですし、廃棄品なので後で発行します。暴発はしないでしょうね?」

「それは大丈夫です。スオムス印の整備兵公認です」



爆発を喰らった筈なのにダメージを感じさせないアランが黒煙を両の腕で振り払ってロスマンの問いに答えると孝美は己の中で何か減った感触を感じていた。

「さあ、始めましょう」

いい笑顔で告げるアランを見て孝美の中で帰りたいと言う欲求が鎌首を上げるが軍人としての意識でそれを抑え込む。

そんな孝美の前でユニットを履き、暖機運転を行いながら武装を鼻歌を歌い、身につけて行く。

背中にMP44と2連装に改造したM1887を背負うが普段のハードポイントが付いた物では無くロスマンから指摘されたS118が2つ付いたランドセルを背負っている。

両腕にはいつも通りにshkAS2連装を付けて、手には孝美の合流と共に補充され余剰が生まれた99式二号二型改13mm機関銃を1丁ずつ握る。

「あの……飛べるんですか？」

余りにも重武装。欧州の陸戦ウィッチでも持たない量を見て心配になった孝美が話しかけるがアランは問題は無いと言わんばかりに両腕を掲げて身体を震わせる。

「……わかりました」

もう深くは考えないと銃を選ぶ。

孝美が使うのは99式二号二型改13mm機関銃とS118／1100対装甲ライフルの2種類である。

模擬戦では99式、実戦ではS118を多用する孝美だが、迷った末にあれだけの重武装なら動きは鈍い筈、ならば長距離での精密射撃の方が良いと言う判断と実戦に近い状態を見せようと言う意図からS118を選択する。

「それじゃあ、行きましょう」

ルールは簡単で劣位優位無しですれ違うと同時に模擬戦開始と言うシンプルな物で実力差が最も出る方式だ。

高度を上げた2人は反転するとお互いに正面から接近する。孝美は銃を両手で保持しているが銃口は斜め上方を向いている。アラン

は片手保持だが銃口は背後を向いている。

その光景を地上から見ていた菅野が何か嫌な事を思い出した様な顔をする中ですれ違い、お互いが完全にすれ違い切った瞬間に銃声が響く。

「え？　嘘でしょー！」

旋回戦の後に銃撃だと思っていた孝美は爆撃機の後方銃座の様に後方に向けて攻撃された事に驚き、反射的に身体を捻りながら急降下で逃げてしまう。

アランは緩やかな降下をしながら向きを孝美の方に変えながらそのタイミングを待つ姿勢を見せる。

孝美は追撃しないアランを不思議に思いながらも地面が近くなった事で手に入れた運動エネルギーを無駄にしない為に上昇し様とする。

空中戦は感覚と技術の世界と思われがちだが実際は位置エネルギーと運動エネルギーの計算と言う理論がその2つに加わる。

簡単に言ってしまうなら位置エネルギーが高度、運動エネルギーが速度だ。この2つをうまく運用できるか、計算できるかも空戦では重要な要素だ。

今回の場合なら孝美は位置<sup>高</sup>エネルギーを大きく失った代わりに運動<sup>速</sup>エネルギーを大きく得た。アランは僅かな位置エネルギー《高度》を失ったが直ぐに動けるだけの運動<sup>速</sup>エネルギーを得たと言う状況だ。

そして速度を得るには高度を失う必要がある為に一定量の運動エネルギーを得たなら位置エネルギーに変換しなければならない。しなければ地面に激突するからだ。

孝美はアランとの距離が離れているのを確認してから身体を起こして上昇に転ずる。

その瞬間を待っていたと言わんばかりにアランのマスターグに使用されているマーリンエンジンが大きく唸り、アランの身体を弓矢の様に速く前に押し出す。

急な加速だが簡単に言ってしまうえば稼働率を30パーセント程に

まで下げていたのを50パーセントまで上げただけだが孝美には急加速の固有魔法を使った様に見えた。

そして上昇高度に出してしまった孝美にはアランの攻撃を回避するには些か難し過ぎた。

一度上昇するとそこから旋回行動に移るのはそう簡単では無い。

「つくー！」

孝美は必死に身を捻ってアランの射撃を回避する。

難しい上昇機動中のこの強襲を躲した孝美に地上からは。

「このクソエイムー！」アランさんそこで外す?!」「ああ、思った通りですな」「やっぱり、当たらなかったかー」

孝美への賛辞よりもアランのエイム力へのヘイトが勝っていた。ヘイトの順番はロスマン、下原、ジョゼ、クルピンスキーだ。ニパは何処か苦笑いを浮かべ、ひかりだけがアランと孝美を純粋に応援していた。

飛行機なら当てられたアランだが自分の生身を使って当てねばならないウィザードの戦いではこう言う状況は多々あった。

今までは大型や中型、小型が大群でだった為に余りエイム力の無さが目立たない事やビームは照射なので当たらなくても銃口を動かせば良い為にエイム力の無さが気にならなかった。だが、小型ネウロイ1体分の大きさの模擬戦ではこのエイム力の無さが異様に目立つのだ。

孝美は直ぐに通り返けたアランの方向にバック走の様な体勢で上昇しながら銃口を向ける。

下は雪景色でアランの茶色いアメリカ陸軍、こちらではリベリオン陸軍のカーキ色のジャケットとアランの黒い肌がくつきりと浮かんでいる。

これが扶桑の士官服に白い部隊塗装のユニットだったら探すのに苦労した事だろう。

「当たってー！」

銃口から20mmのペイント弾が吐き出される。

ペイント弾は回転しながらアランの未来位置へと迫る。その軌道

はまさしく完璧の一言で誰もが見れば確実に命中すると断言出来る程の精密性だった。

撃った孝美自身もこれまでで1番の狙撃に何処か命中すると確信めいた物を感じていた。

奇跡でも起きない限りは普通に確実に当たる。だが、雁淵孝美はアラン・レッドフィールドと言う航空歩兵に対して余りにも無知だった。

アラン・レッドフィールドは普通や常識と言う物に首を締めながらトルネードスイングに移行してパワー任せに明々後日の方向に投げ飛ばす様な人物だと言う事を孝美は知らなかった。

「え!？」

120度のターン。

一言で言うならばそれだった。だが、やり方がおかしかった。

まずユニットに逆回転を掛けて慣性の法則諸共に前進する力を0にすると身体を水泳選手がターンをする様に身体を曲げて後ろを向く。それと同時に足を斜め下方に向けた状態でユニットを最大稼働させてロケットの様に後方斜め上方を飛ぶ孝美に文字通り最短ルートで迫る。

アランの13mmとshKASの7.62mmのペイント弾が嵐の様に孝美のいる空間ごと穿たんとばかりに殺到する。

普通なら本命の弾に混ぜて牽制弾か牽制弾の中に本命弾だが、アランの場合は良く言えば全てが本命弾で牽制弾、悪く言えば下手な鉄砲数撃ちや当たるの為にかえって孝美の様な熟練者には辛い。

「(同じ高度や格闘戦は不利……なら!)」

孝美が取った行動は普遍的、常識的とでも取れる行動。

障害物や地面ストレスを飛んで敵が狙い難くすると言う行動だった。

それでも孝美の頬から冷や汗は止まらない。

shKASの連射力の問題で弾幕自身はさほど長くないが範囲が広いのと弾速に差がある為に回避の難易度が普段の物とは違った物になる。更に肩に背負ったS-18の狙撃が加わる。

これはそれなりに狙っている為に孝美の逃げられる隙を確実に潰してくる。

孝美は牽制弾を撃つ事でアランの行動を妨害して何とか耐えながら川に滑走路に壁と様々な物のギリギリを飛びながら必死に避ける。

そんな中で孝美の牽制弾が風に煽られて直撃弾コースに入りアランが無茶な姿勢で躲そうとした事で必中だったS-118の狙撃2発があらぬ方向へと飛んで行く。

孝美はこの隙を逃さないと引き金を引き、アランも両手の銃で孝美を狙うが2人の銃からはカチンカチンと乾いた音だけが響く。

「draw……だな」「引き分け……」

2人が銃を下ろした瞬間にS-118の発射音が響き、アランの心臓部に命中してオレンジ色のシミが生まれる。

孝美は突然の事でS-118を落とし、アランの手からも99式が離れて下に落ちる。

アランが胸を押さえた瞬間に頭がオレンジ色に染まり、地面へと落下した。

「あのラル隊長……その顔は……」

サーシャがとても言い難い雰囲気ではあるがラルに声を掛ける。ラルの顔は髪とも相まって全面がオレンジ色一色だった。

「司令室に集めろ」

それだけ言い残したラルはシャワーを浴びる為に基地へと戻って行ったが手に入るいまだに銃口から紫煙を吐くS-118が握られていた。

「さて、何があったか説明しようか」

司令室に全員集められてラルが話し始める。アランだけが立たされてる。だが、それよりも司令室が寒いのだ。

原因は直ぐにわかった。オレンジ色のペイントが付いた割れた窓ガラスがいまだに窓枠にはめられている。

「私はあの窓から模擬戦を見ていたんだ。そしたら確実にアランの銃弾が窓ガラスの1点だけに命中し、そのあとの20mm1発がトドメになって窓ガラスが割れたと思ったら顔面にペイント弾が当たった。

しかも20mmだ」

それはご愁傷様です。という雰囲気は司令室を包むとラルがアランに視線を投げる。

「何か言い分はあるか？」

正座するアランの前で腕を組んだまま仁王立ちするラルの言葉にアランはキリツとした顔で言い放つ。

「コラテラルダメージです」

ラルが即座にアームロックを掛けた事でペテルブルクの空にアランの絶叫が響いた。

フレイヤー作戦始動まで残り29日の出来事だった。

## 第28話 その拳はbuddyの為に

「やっと直りましたー」

疲れた様子で割った窓ガラスを交換したアランが食堂へと戻る。

食堂ではお疲れ様ですと下原がアランに水を渡す。

というのも窓をはめ直すだけなのだが、時折、レールがあー！窓枠があー！歪んだあー！などの叫び声が設営隊の兵士の声と共にアランの叫び声が聞こえるというお前らは何をやっているんだと言いたくなる事が続いていた。

「ちゃんと直ってるんでしょね？」

ロスマンの言葉にアランは。

「安心して下さい。窓と一緒に窓枠やレール、壁も直しました」

「壊してるのか直してるのかどっちなのよ！」

「直して壊して、壊して直してるんです。お陰で重労働です。チップ下さい」

「自業自得じゃない!!」

ロスマンがナイフを眉間に目掛けて投擲するがナイフはアランの屈強なる皮膚と筋肉に遮られて落下の途中にアランがキャッチする。

傷1つ付かないアランとナイフを曲げられたにも関わらず笑っているアランを見て孝美はアタフタしているが他のメンバーは何かが飛んでいくのも、飛んで行った物が意味を成さないのも何時もの事と何食わぬ顔で食事を続ける。

「今日のランチはなんなんだ？」

「孝美さんの故郷の郷土料理、皿うどんですよ」

ナイフが当たった場所を気にする事無くひかりの隣に腰を下ろしたアランの言葉に下原が答える。

「あー……ひかり、どうやって食べればいい？」

アランの言葉に何か考え込んでいたひかりは反応が出来ずにいるとがアランに肩を叩かれてようやく気付き、皿うどんに食べ方を説明し始める。

その顔は何処か無理して笑顔を作っているようでアランに食べ方

を教えてしばらくするとごちそうさまと言い残して食堂を去ってしまった。

日が沈み、空を照らすのが星と月だけになった時間にひかりは最初の訓練で登った塔を両手だけで登っていた。

実戦を積んだ事で魔力制御に磨きが掛かり、初めて登った頃とは比べ物にならない速度で登っていた。

頂点まで登ると尖塔を掴んで荒く呼吸を繰り返す。

「ひかりー！」

ひかりは声が聞こえた方向を見れば、下から孝美が登ってくるのが見えた。

ただし登り方はひかりやロスマンのように柱に手を添えるのではなく、彼女は足だけでまるで歩くように登り、難なく柱の頂点まで登ってきた孝美にひかりは驚く。

「お姉ちゃん……」

「こんな無駄なことをしていないで、早くカウハバ行きの準備をしないさい」

やはりと言うべきだろう。孝美はひかりに対して厳しく言う。しかし、ひかりはその言葉に引き下がる事はしなかった。

「無駄じゃないよー！」

「!?」

「私、少しでもお姉ちゃんに近づきたくて、ずっと頑張ってきた」

そう、今の自分があるのは、この訓練のおかげでもある。そんな訓練が無駄だとは今まで一度も思わなかったし、言われたくも無かった。

「502の皆にも、最初は全然認めてもらえなかったけど、でも頑張つて頑張つて、今は仲間って言ってくれてる！」

ひかりは懸命に、孝美を説得しようとした。

「それにね、私接触魔眼が使えるようになったんだよ！ 魔眼でアラソンさん達と一緒にいっぱいネウロイを倒したんだよ！」



「全部知ってるわ。それでも、あなたはここに居てはいけない」

「お姉ちゃん……」

ひかりはいくら言っても孝美が聞いてくれなかったと思い、シヨックを受けた。

そして孝美はシヨックを受けているひかりを放って、柱からジャンプで地面に降下する。そして、慣れたように地面に降り立って行ってしまった。

「……」

残されたひかりは、ただ一人柱の上で黙っている事しか出来なかった。

そして基地の施設に入った孝美は、アランと廊下で鉢合わせする。

「アラン少尉？」

無意識を装いながらも距離を測る様に詰め寄るアランを不思議に思った孝美が問いかける様にアランの名前を呼ぶ。

アランは左足が地面に着くと同時にその足が軸足となってアランの身体に捻りを与えさせると硬く握り締めた拳を孝美の左頬に命中する。

孝美は殴られた衝撃に耐えられずに吹き飛び、基地の柱に肩から当たり、その衝撃に加えて殴られたと言う精神的な衝撃に座り込む。だが、流星は歴戦のウィッチと言うべきだろう。インパクトの瞬間に使い魔を出現させて肉体保護の魔法を発動させた事で孝美は殆ど無傷だった。

「テメエ……同じ軍の仲間だろうがよ……」

怒気を隠さないアランの声に孝美は原始的な恐怖心が芽生え、地面に座ったまま身体を小さく震えさせながらアランを見上げる。

それに対してアランの目には怒りしか宿っていない。アランの腕は孝美の襟首を掴んで持ち上げる。

「基地を去って生く仲間にかけるべき言葉はテメエが吐いた言葉じゃ無い事は絶対だ！ それくらいはわかるんだよ！」

「わかってるわよ！ わかっているわよそんな事は……でも、私は……ひかりを、ひかりを危険な目に合わせたくないのよ……」

アランに最初を声を荒げて反論する孝美だが、途中からは涙を堪えながらの声が変わっていく。

「それで前線から引き剥がすのか？　それが本当にあいつの為なのか！　俺はそうは思わんぞ！　傷付けたくない妹の心を傷つけて追い払うのがそんなに上等な手段かよ！」

「だってあの子は、ひかりは絶対にあきらめない子だから……。こうでもしないと……」

転属しない。そう言おうとした孝美の額にアランの額が盛大にぶつかる。いや、アランの頭突きが孝美の額にヒットしたと言うべきだろう。

「お前はひかりを理解していない！　あいつが転属を拒否しているのは決して我儘じゃねーんだよ！　たった一言だけ！　たった一言だけの去り行く仲間に向けるたった一言をお前から聞きたくて、世界中の誰よりも認めて貰いたいお前から聞きたくてここにいるんだ！」

孝美自身は、ひかりをちゃんと褒めてあげたいと思っている。しかし、ひかりの我儘な性格を考え、自分を鬼にして最前線に戻らないようにしていたのだ。だが、この基地で誰よりもひかりを見ているのはアランだ。

アランは決してひかりは我儘な性格で無いと言う事を知っている。確かに諦めは悪い所がある為にそこが我儘と取れるかもしれないが、最初の頃に『「私も！　私も他の人の迷惑になるなら扶桑に帰ります。でも、ほんのちよつとでも戦力になる見込みはあるならここに居たいんです！』』と言い切った様に頑固な訳では無い。しっかりと理由があるのならば納得して行動できるだけの理解力はある。

だからこそ、それを理解せずに心を傷付ける様な事しかない目の前の姉に憤りを感じていた。

「本当は……私だって本当はあの子を力いっぱい抱きしめたい。抱きしめて、強くなったねって褒めてあげたい。けど、それは……」  
「やってやりたいって気持ちがあるならやってやればいいだろうが！」

背中から柱に叩き付けて孝美をさらに持ち上げる。

「なんでしてやらない！ あいつは血の繋がった妹じゃないのか！  
ここまで戦い抜いてきた妹の労をたった一言だけでも労えないかよ  
!？」

アランの腕の力が抜けて孝美に会話出来るだけの余裕は生まれる  
が孝美は涙を堪えるのに必死だった。

「That sucks!! あいつの姉を名乗る資格は貴様に無い  
！」

乱雑に孝美から腕を外して何処かに大股で去って行く。

「姉貴なら妹の事を、ひかりの事を俺より理解している筈だろ」

大股で廊下を歩きながら孝美の行動への怒りを募らせる。

アランは労を労うなり、褒めるなりしてから、自分に任せて欲しい  
と言えはひかりは理解する。

アランにはそれが理解できず、労も褒める事すらない姉である孝  
美を認められなかった。

「家族が家族を理解して無かったら、いったい誰が理解してくれんだ  
よ。なあ……」

そう呟くアランの目尻に透明に輝く、小さな宝石が付いていた。

## 第29話 勃発！ 姉妹対決！！

「先ほど、グリゴリーを監視していた偵察部隊が全滅しました」

ブリーフィングルームに集められた502のメンバーはロスマンの言葉を聞き衝撃を受けることとなった。

「全滅!?」

「報告によれば蠍の様な個体だったと言う事です。そして、コアが鋏と胴体に確認されたそうです」

ロスマンの言葉にクルピンスキーとサーシャの腰が浮かぶ

複数コアの個体と言う事はアランの世界のキャニオの敵だ。それは即ち、普段よりも苦戦が強いられる戦いと言う事だ。

その事実にはブリーフィングルームが騒ぎ始める。

「そう熱くなるな」

だが、ヒートアップし切る前にラルが静止した。

クルピンスキーが顔を上げて見ると、そこにはロスマンにコルセツトを縛られているラルの姿があった。

それを見てクルピンスキーは戦慄する。

「隊長……? まさか!」

「相手がキャニオなら私が出るしかないだろう」

そう、ラルは自分が出撃する気であるのだ。今まで502でラルが前線で戦っている姿を見たことがない為にアランはラルの実力をよく知らずに少し不安そうな表情をする。しかし、ラルは負傷した身と言えども、世界第3位の撃墜数を誇る、スーパーエースの一人なのだ。

そしてラルは孝美を見る。

「行くぞ孝美。作戦の肩慣らしにちょうどいい」

「はい」

ラルの言葉に、孝美は立ち上がって返事をしたその時だ。

「待ってください」

ブリーフィングルームの後ろから声がした事で全員が振り返る。するとそこには、ひかりが息を荒げながら立っていた。

「ひかり!」

「何をしに来たの?」

管野は驚いてひかりの名前を呼ぶが、孝美はやはり鋭い目つきをしながらひかりに厳しく言う。しかし、ひかりはそれに臆することなく進言した。

「私も戦わせてください」

ひかりの言葉に反応したのは、やはり孝美だった。

「あなたには無理だと何度言えば!」

「そんなのは、やってみなくちゃわかんない!」「俺のbuddyを侮辱するのもいい加減にして貰おうか!」

孝美がひかりに言った瞬間にひかりはその言葉に孝美を睨み返しながら告げ、アランも机に拳を叩きつけながら告げて睨みつける。

三者が睨んだまま硬直する中、それを解いたのはラルだった。

「いいだろう」

ラルはニヤリと笑いながら出撃を許可をした。

「えっ!」

「ラル隊長!」

その言葉にひかりは顔を明るくし、孝美はありえないと言った様子でラルを見るがラルもタダで出撃許可を出す様なお人好し、が認められる立場では無い。

「もしお前の接触魔眼が孝美に勝るようなら、どんな手を使つても502に置いてやろう」

「ホントですか!」

「ただし、その場合はお前に変わってカウハバには、孝美に行つてもらう」

「えっ!」

無論ながらラルも意地悪でこんな事を言っている訳では無い。

戦力的にはウィッチは1人でも多い方が良いのは当然だが、事はそう単純では無い。何故ならこれは外交的な国際問題に成りかねないからだ。

扶桑はカウハバの基地にウィッチを1人送ると確約し、カウハバの基地を抱えるスオムスもその確約を聞き入れている。

つまりは外交的な問題でカウハバに扶桑のウィッチを1人入れなければならぬ訳であり、扶桑本国から新しく派遣するにしてもその派遣するウィッチの為に輸送船団を組む為の予算や派遣するウィッチの選出など課題が多く残る為にカウハバに送れるのはひかり・孝美・下原の3人のみ。

下原は夜間哨戒や偵察で重宝する固有魔法を持ち、502の士気を保つ上で重要な兵站を握る人物で日向にいる人物でも派手な活躍もしていない人物だが、影の功労者である為に替えが効きづらい人物だ。

ひかりは連携が組みやすいメリットがあるが実力は孝美に比べれば低い位置で孝美はひかり以上の実力を持つが癖を知るのは菅野くらいで連携が取りづらいデメリットを持つ。故にカウハバ行きは孝美かひかりのどちらかとなる。

「もしお前が勝っても、孝美と一緒に戦うという望みは叶わない。それでもやるか？」

ひかりが勝って残った場合、代わりに行くのは敗者となる孝美。これはひかりにとっては姉との決別。そうとも言え換えられる出来事になるのは明白。

「やります！だって今の私は502の一員で……アランさんの相棒ですから！」

「ひかり……」「お前……」

ひかりの決意に、孝美と菅野は驚く。孝美は自分の妹が即座に決断をしたことに。菅野はひよつこのはずだったひかりが、ここまで成長していることに。

そしてアランはその様子に満足したようにひかりに向けて拳を突き出す。

「上等だ。さあ、孝美はどうする？」

「……」

ラルに言われ、孝美もわずかに考える。そして、答えは決まった。「いいわ。どちらがこの502にふさわしいか、はつきりさせましょう」

「うん、わかった」

孝美は、そんなひかりを迎え撃つことを選んだ。そして、両者の存続を掛けた勝負が始まるのだった。

「ネウロイは現在ムルマン方向へ進行中です」

「狙いはやはりフレイアー作戦の為に集結した艦隊に間違いなさそうですね」

姉妹の勝負も込めた戦場に502は出撃した。

メンバーはいつもは出撃をしないラルを含むフルメンバーでの出撃だ。

相手がアランも知らない相手に複数コア持ちともなれば強靱な個体になる事は間違い無い。

全員が真剣な表情で進む編隊の先頭には、ひかりと孝美が並んで飛行していた。

「ひかりはずっと孝美さんと一緒に戦いたがっていたのに、なんだってこんな勝負をするのさ？」

ニパの言葉にアランは昔を思い出す様に答える。

「それは buddy が自分の成長をしつかりとあいつに伝えたいからだろう。姉に認めて貰いたい、その為に戦うんだ。認めてもらう為に戦う気持ちは俺もわかっているつもりなんだ……」

戦闘機パイロットになる事を認めて貰う為に政治家と戦い、パイロットになつてからはドイツ軍と一緒に差別とも戦った。

勝つ事は認めてもらう事、その為には実力と行動で示すしか無い。ひかりはアランの戦いを聞いていなければ、知らなければきっと姉と戦うなんて選択を選ぶ事はなかったかもしれない。

アランは自分の国の人達から蔑まれる中で自分よりも辛い状況で戦い続けた。ならば相棒である自分も認めて貰う為に戦おう。502の仲間として戦う事、何よりもアランの相棒として同じ空を飛ぶ為に。

そして、二人の勝負の内容はこうなった。

「孝美、ひかり、コアの位置を捉え、私に報告しろ。より早く、より正確に見抜いた方を勝者とする」

「了解！」

どちらも魔眼持ち。ならば、どちらの魔眼が相手のコアをしつかりと捉えることができるかが勝負となる。

フレイアー作戦は精密砲撃作戦である為に誤差の少ない魔眼が必要になる。

「遠視可能な孝美さんの魔眼と、ひかりさんの接触魔眼じゃ、どう考えても……」

「そうね。ひかりさんが勝てる確率は万に一つよ」

「それでも、あの子はわずかな可能性に賭けた。私たちと共に戦うために。そして、自分の成長を姉に見せるために」

「ひかり……」

ジョゼは勝負にならないと言い、ロスマンはひかりの勝率はほぼ無いと言った様子だった。

「それでも勝てる確率があるならひかりは挑むさ。でなきや……」

相棒になんて選ばない。という言葉は恥ずかしくて飲み込んだ。

そして、この勝負を決めたのはひかりと孝美である。外から口出できけることは何もないし、アランは口を出すつもりは無かった。

そして、ついにその時は始まった。

「11時の方向、ネウロイです」

黒い蠍の様な姿のネウロイが現れる。身体中に蜂の巣の様に赤いパーツがある事が弾幕で押し切るタイプであろう事を予想させる。

10kmの範囲に入った瞬間にネウロイからビームの嵐が吹き荒れる。だが、孝美はその攻撃を躲しながら隙を見定めた。

「一気に決める」

孝美は目を赤く光らせる。魔眼を発動させた合図だ。

ネウロイは孝美の存在が危険と判断したのか他のメンバーに身体の赤いパーツからビームを発射して弾幕を張りつつも、缺からの帯状のビームで孝美に圧力を掛けて回避を強要しながら尻尾から放たれるビームの狙撃を加えて魔眼を阻害しようとする。



「目標捕捉！ H4699、T9326！」

しかし相手はリバウ撤退戦を戦い抜いた英雄の1人。

たかが火力が高く、多いネウロイ1機相手に手間取る様な相手では無い。

孝美は確実にネウロイの心臓を捉えた。

「早いな」

孝美の言葉を聞き、ラルは即座に座標に向けて狙撃を行う。

ラルの放った弾丸は真つ直ぐに指定された座標に飛び込み、S-18の20mm弾はネウロイの装甲を粉碎。そして、そこにあったネウロイのコアを貫いた。

誰もがその瞬間、孝美の勝利を確信した。

「やった！……えっ!?!」

孝美は思わず喜ぶが直ぐに様子がおかしいことに気づき顔を驚かせる。

孝美の目には、砕けたはずのコアが即座に再生する姿が映っていた。

「コアが……コアが再生した!?!」

「なんだって!?!」

「コアが再生だと!?!」

「じゃあ、どうやって倒せばいいの!?!」

「落ち着け。アランの世界の敵は複数のコアか一定量のダメージを与えれば撃墜出来る。恐らくだが複数のコアを順番に破壊すればいい」

蠍型ネウロイがビームを横薙ぎに放つ。

ブレイブウィッチーズは素早く散開したが孝美を危険視したネウロイが執拗なまでの追撃を仕掛ける。

シールドを展開して防ぎながら魔眼を発動させる孝美だが此処で限界が見え始める。

「(攻撃が激し過ぎて魔眼に集中出来ない)」

孝美が苦しそうしながら必死に耐える。

魔眼と言うのは固有魔法の中では制御が難しい魔法体系の1つだ。妖怪や幽霊などの伝承が生まれるのも夜と言う目に見えない状況

や目に映るはずが無い物が見えるかもしれ無いと言う恐怖の現れでもあると言われている通りに、目に見えない物を感じるのでは無く視覚すると言う事は人間が本来持っている恐怖心を確実な物として誘発する。

つまり魔眼を物にすると言うのはその本能に限りなく近い理性を克服するか忘れる事、抑圧する術を手に入れる事から始まる。

無論ながらその理性への対処を覚えたとしても魔法の制御技術も伴わなければ若き頃の坂本美緒の様に魔眼が暴走すると言う危険性を持つている。

坂本美緒が眼帯をしているの魔眼の暴走が原因で完全に制御し切れていないからと言うのは同世代のウィッチなら殆どが知る事情だ。

その点では孝美はONとOFFの切り替えが出来るので坂本美緒より魔眼の扱いに長けるが回避と防御をしながらコアを探すのは至難の技だ。それが複数あるとすれば精神的負担は大きい。

「(絶対魔眼……ダメ。もしやったら……)」

あのネウロイは他のウィッチを無視してでも自分を殺しに来る事が容易に想像できてしまう。

「孝美……後ろだ！」

菅野が叫んだ。

直ぐ後ろに外れる弾道を描いていた帯状のビームが、孝美を通り過ぎてから、少し進んだ先で何物にも頼る事なく折れ曲り、孝美を背後から強襲して来たからだ。

命中する。

誰もがそう思い、孝美の名を叫ぶと同時に孝美は赤い光に飲み込まれた。

### 第30話 姉妹の関係

「孝美！ 後ろだ！」

菅野が叫んだ。

直ぐ後ろに外れる弾道を描いていた帯状のビームが、孝美を通り過ぎてから、少し進んだ先で何物にも頼る事なく折れ曲り、孝美を背後から強襲して来たからだ。

命中する。

誰もがそう思い、孝美の名を叫ぶと同時に孝美は赤い光に飲み込まれた。

「孝美……そんな、嘘だろ……？」

菅野の動きが止まる。

親しい者が呆気なく亡くなったのだ。男勝りな菅野でもその感性は女性のそれだ。

死んだ者や死に掛けた者を簡単には見捨てられない女の感性だ。それが邪魔をして、菅野は空中で浮いたまま動くを止めてしまう。

「菅野オオオオオオ!!」

ニパの叫び声で我に返る菅野の目の前に赤い物体が視界を遮っていた。

菅野には距離が近過ぎて分からなかったが他の者にはわかった。

菅野の視界を遮るのはネウロイの鋏だ。

赤いビームを発射するパーツが一枚板で出来上がった鋏の内側が菅野の身体を挟もうと迫る。

菅野は改めて感じた明確な死に身体が竦んで動きを止めてしまう。

「(俺も……死ぬのか……)」

視界の両端から迫るネウロイの鋏が嫌にゆっくりな動きだと、場違いな感想を抱いた。

菅野は動けなくなつた時の体勢のまま1mmも動かず、今までの短い人生を走馬灯の様に思い返していた。

蛇に睨まれた蛙がそうであるように……死ぬ時とはそういうものなのだ。

ただしそれは<sup>死期</sup>。

「(鋏が上を向いた?)」

全ての生物に平等に訪れる。

鋏が上を向いた瞬間に99式2号2型改13mm機関銃が持つ独特な発射音と共に13mmの銃弾がネウロイの鋏の半分を破壊する。

ようやく入った有効弾にネウロイが不快極まる声似た音で断末魔を上げると加速して距離を取る。

その所為で後ろから触ろうとしたひかりの腕が空振りに終わり、全員が弾幕に晒される。

菅野は硬直から抜け出せず、ひかりは空振りから不安定な姿勢でシールドを張ろうとする。だが、2人の前に2人分も影が被さり、馬鹿デカイシールドを2人の代わりに発動して、ネウロイのビームから2人を守る。

「寄り道してたら遅れた」菅野さん、しっかりして」

アランが笑みを浮かべながらひかりに、孝美は菅野の肩を優しく触れながら告げる。

「アランさん！ありがとうございます！」

「Buddyの信頼には答えるさ」

ひかりは孝美が撃たれそうになった時も気にする事なくネウロイへの接近を試みていた。何故ならアランが孝美を助けに行くと信じていたからだ。

「孝美！孝美なんだよな！幽霊じゃないよな！」

「ええ。アランさんに助けて貰ったの。音速の世界は目が回るから次はごめんしたいわ」

そしてアランは<sup>相棒</sup>ひかりの信頼に孝美を音速で捕まえて上昇して、文字通りマツハで答えた。

孝美は音速の世界に慣れていない所為か目を回しており、回復したのがネウロイが菅野の向けて鋏を突き出そうとした瞬間で、狙撃ができるまでに回復したのは菅野がネウロイの餌食になる直前だった。

孝美はそんな状況だろうと直線距離1000mから菅野だけを外してネウロイの鋏のみを破壊したのだ。無論ながら鋏の中央に存在

するコアを狙ってだが、体調不良の状態だった所為か少し外してしまったが菅野に命中すると言う不安は、孝美に存在しなかった。

どんな状況だろうと友だけは誤射しない。

孝美はそれを有言実行できるだけの経験と訓練は積んでいると、自負しているからだ。

「来るぞー！」

アランの警告と共にネウロイが金切り声をあげながら、身体中からビームを放って来る。しかも、全てが途中で折れ曲がると言うおまけ付きだ。

そして最も苛烈な砲火を受けるのはやはり孝美。魔眼を発動しながらシールドと折れ曲がる攻撃に対して何とか対処しているが危ういバランスで成り立っている。

「このままじゃ……！」

被弾は時間の問題。そう思った瞬間に四方から折れ曲がったビームが迫る。

逃げ道にもご丁寧に時間差で飛び込んで来るビームを置いている嫌らしい攻撃だ。

「任せろー！」

だが、逃げ道を塞ぐビームを菅野がシールドで防いでくれたお陰で孝美に逃げ道が出来た。孝美は素早く菅野が作ってくれた道へと逃げるがその脇をひかりがネウロイだけを見ているかの様な視線で通り過ぎて行く。

接近するひかりにも火線が集中するが元の火力が高いのかシールドだけで無く、回避の余裕が出来る他のメンバーだが、孝美やひかりの援護に行けず、孝美の援護に行けたのは偶然にも近くを飛んでいた菅野だけだった。

ひかりは勝負に勝つ為に接近するがネウロイも近付かせまいとビームを乱射してくる。

流星に距離が近くなるとひかりの行動に回避だけで無く、シールドでの防御も混ざり始める。

「あぐう……！」

「ひかりさん！」

しかし、魔法力に余裕が無いひかりだ。シールドごと吹き飛ばされ、バランスを崩した拍子にネウロイが尻尾での狙撃を放つ。

「させるかよー！」

尻尾からの狙撃は飛び込んだアランのシールドに吸収され、吸収された分だけ青いビームとなって飛んで行き、回避行動を取ったネウロイだが、逃げ遅れたのか尻尾が弾け飛ぶ。

そして回避行動を終えたネウロイの鋏にラルが孝美の指示に従って放った20mm機関砲が命中する。

回避行動を取った事で弾幕が薄くなり、その隙に孝美が素早くコアを特定してラルに指示を送ったのだ。

「やった！ ！？」

だが、砕けた瞬間にコアの割れ目から小さなコアらしき物を孝美は見つける。

「コアの中にコア!？」

「そういうカラクリか！」

最初のコアも恐らく移動式のコアが内蔵されており、それに気付く前にグリッドを指示した事で外したのだと孝美は理解すると魔眼に魔力と精神力を更に集める。

これによりコアの中を動くコアを捉える事に成功。ラルへの指示で右腕の鋏を破壊する。しかし、孝美が移動式コアの指示と同じタイミングでラルにひかりが左の鋏にあるコアの位置を報告。手一杯だったラルに変わりアランが腰に搭載したS-18を持って破壊した。

「1発で破壊しただと、偶然か？ それとも接触魔眼は移動式のコアも感知するのか？」

アランが一撃で破壊した事を疑問視しながらもネウロイからのビームが降り注いだ事で一旦ではあるがラルは疑問を保留にして回避行動を取る。

「残りは胴体だけ！」

孝美が魔眼を発動すると案の定と言うべきか、ビームが殺到する。

しかし、今回は菅野が近くに居てくれたお陰で菅野が孝美のフオロ―に入る。

ひかりも孝美が行動を起こしたのと同じタイミングでネウロイより高い高度からパワーダイブを敢行して接近を図り、アランが迎撃に撃ち出されるビームを吸い込んでひかりの護衛を務める。

「目標、捕捉!」「邪魔をするなあああ!!」

ネウロイが迎撃では無理と判断して高機動での回避行動に移り、速度任せにひかりを振り切り、ひかりに向けていた火力を孝美に向ける。さらにそれだけで無く、各個のビームが精密な射撃で確実に落としにかかる。

素早い動きに加えて濃密で正確な射撃に孝美も菅野も押され、孝美の魔眼の精度が落ちるだけで無く、孝美の姿勢がビームを弾く度に揺れ始める。

「マズイよー!」「援護に!」「孝美ちゃん!」

ジョゼ・下原・クルピンスキーが孝美の状況を見てマズイと思ったのか援護に入ったお陰で孝美は魔眼に集中する。

「目標、重捕捉!」

魔眼のプロセスが進むがひかりとアランはネウロイに追いつくので手一杯で勝負は孝美が有利な状況へと移る。

「目標、最終捕捉! 嘘でしょ!」

「どうした孝美!」

孝美の言葉に菅野が振り返ると孝美は信じられない物を見ているような表情を浮かべる。

「コアは2つの気配がするの……でも、移動式のコアが5つもあるのよ」

魔眼のウィッチはコアの有無を気配で感じ取る事が出来る者が多く、孝美もそのウィッチだが魔眼に移る光景は1つのコアに移動式コアが5つ、縦横無尽に動き回る光景だった。

「4つはダミー。けど……」

今の魔眼ではどれが本物の移動式コアか見極められない。

孝美は絶対魔眼を使うべきか迷いが生じた瞬間にアランのロケツ

ト弾とS-18の弾丸がネウロイ胴体を破壊し、動きが鈍った瞬間を狙ってひかりが急接近を図る。

「絶対魔眼、発動！」

ひかりに負ける訳にはいかない。その思いで孝美は絶対魔眼の使用を決意し、即座に発動。髪が赤くなり、目の輝きも強くなる。だが、それと同時にひかりがネウロイに触れた。

「完全捕捉！ グリッドH5274、T7401！」「ここです！」

ひかりは迷い無く、ネウロイの身体に機銃の銃口を突き立てて場所を教える。

2人が示した位置は全くの一緒、ラルは即座に銃口を向けて発砲。ネウロイが最後っ屁に放とうとしたビームが吐き出される前に弾丸は装甲を穿ち、コアを砕き、移動式コアを貫いた。

コアが完全に壊れたネウロイは、その姿を光の破片へと変えて、破片は重力に従い、地面へと落下する。

全員が戦闘終了によりその場で立ち止まる。

「私？ お姉ちゃん？ どっち？」

ひかりは、先ほどの勝負が自分が勝ったのか、それとも孝美が勝ったのか気になり、懸命に周辺を見る。その時だった。

「!？」

ひかりの真下から蠍型ネウロイの破片が蟹型ネウロイとなつてひかりに体当たりを仕掛ける。

ひかりは突然のことに対処しきれずに動きが固まり、目を見開いて迫るネウロイを見つめる。

「ひかり！」

そんなひかりを救ったのは意外にも彼女の姉である孝美だった。

「おねえ……ちゃん、どうして……」

「貴女は私の妹よ。そして私はお姉ちゃんなの。妹を守るのは同然じゃない」

どんなに敵対したとしてもやはり姉妹。死に掛ければ今までの関係がどうであろうと、建前がどうであろうと助けてしまう。

2人は自然とお互いから抱擁の力を強くする。



ネウロイは抱き合い飛ぶ2人以外に身体中に存在する赤い装甲のビームを放ちながら、本当の蟹なら脚が生えているであろう場所から異様なまで太いビームを2発同時に発射しようと身体を向ける。

だが、ビームは放たれる前に青いビームに装甲ごと撃ち抜かれて露散するどころか、青いビームのエネルギーと反応したのか誘爆を起こし、ネウロイは身体の左右25パーセントを失う。

「姉妹の感動する仲直りを邪魔すんじゃないよ。殺すぞ?」

ネウロイは健在している赤い装甲と現時点で再生した赤い装甲全てのビームを合わせて戦域に居るウィッチ全員を1撃で飲み込もうとする。

ラルは距離的に離れていたお陰で死角に逃げようと動き始める。

ニパ・ジヨゼ・下原・菅野は4人のシールドを組み合わせる事で強度を増やした4人分のシールドで耐えようとする。

クルピンスキーはマジックブーストで加速すると同時にロスマンを連れて被害範囲から逃れようとする。

ひかりと孝美の両名はアランに音速で抱えられて、被害範囲の外に移動しようとする。

ネウロイはそれぞれの行動を起こそうとしたウィッチ関係無く、ビームを放つ。

そのビームは地上を走る赤い流星の如く飛び、その赤い筋は射線上の全ての場所で観測された。

が、このビームでの損傷は耐える選択をした4人のスタミナと魔法力以外の被害はなく、他のメンバーは無事に射線から逃れていた。

「うりゃあああああああ!!」「目標、最終捕捉!!」

ビームを撃ち尽くしたネウロイに機関を過加速させて垂直に迫るひかりと髪を赤く輝かせ、凜と輝く赤い目でネウロイを睨む孝美が高度15000に居た。

「H6392」「てええ!」

孝美がコアを完全に捕捉すると同時にひかりがネウロイに触れる。

「ハイですー!」「T9371!」

孝美とひかりが同時にコアを見つけ、ラルは無茶な姿勢ではあるが

珍しく弾着修正射撃で弾丸をコアに当てる。

ネウロイは金切り声に似た悲鳴を上げながら白い破片へと姿を変えるがその破片は青く太いビームに掻き消された。

ネウロイの完全撃破を確認したひかりは魔法力の限界から気絶する様に眠りに落ちる。

ひかりの体から魔力を使い切った事と眠ってしまった事から魔力放出が無くなった事でユニットは停止、揚力を無くしたひかりは重力に逆らうことができずにそのまま墜落していくのだった。

「マズイ！」

アランが音速行動を起こそうとしたが魔法力操作は途中で止まる。

孝美がひかりを優しく抱き抱えてホバリングしたからだ。

「強く……強く、なったね。ひかり」

そう言っただけ抱き締める孝美の肩をアランが叩いた。

「当たり前だ。俺の buddy だぞ。それと……出来ればそれはひかりの意識がある時、贅沢言えば合流初日に言っただけ欲しかったな」

そう言うアランに孝美はそうだったかもしれないとひかりを抱きながら呟く様に返すとアランは殴って悪かったと謝り、直ぐに冗談めかした様子で告げる。

「ラル少佐、早く帰りましょう。ひかりを寝かすのと……ニパが落ちる前に」

肩越しに振り返るアランにニパは心外だと言わんばかりに食いつく。

「なんでそこで私の名前が」

だが、食い付き切れなかった。それは突然のエンジン停止による清々しいまでの垂直落下により声が聞こえなくなったからだ。

その後はアランに抱えられて帰投する訳だが、抱え方が腰と肩を支える所謂、お姫様抱っこだった事でニパの顔は常に真っ赤だった。

「何も見なかった事にしましょう」

そんなニパをどこか羨ましそうな目で流し見た孝美、アランを半眼で睨みつけるジヨゼと下原がいた事はロスマンだけの秘密だ。

### 第31話 buddyとしての行動

「チドリ……さよならだね」

孝美が502残留を決めた翌日、ひかりは格納庫内で自分の愛機であつた紫電改『チドリ』の前に立ち、お別れの挨拶をしていた。

魔眼勝負で孝美に敗れたひかりは、即刻カウハバ基地への転属となる。その為にひかりがこの紫電改に乗るのはあの勝負が最後となつたのだ。

「昨日は接戦だったぜ」

ひかりは話しかけられ、声が出た方向に振り返ると、そこには菅野が立っていた。

「菅野さん」

意外な人物の登場にひかりが面喰らう。

確かに菅野ともそれなりに面識があつたがそこまで親しいかと言われれば微妙なラインだ。

友人以上親友未満というべきだろうか？

「一瞬おめえが勝つかもって思ったぐらいにな」

「もしかして、私を応援してくれました？」

ひかりは思わずそんなことを菅野に聞く。菅野は歩み寄りながらいつも通りの口調で答えた。

「んなわけねえだろ。昨日はたまたま出来が良かっただけ……」

菅野の台詞が途切れる。

「いや、そうじゃねーな。孝美に絶対魔眼を使わせたんだ。お前の実力は確かだ。今度はちゃんとした方法で来いよ」

と、菅野はひかりに対して背中を向けて、手の甲を見せて、軽く振りながら去って行く。

ひかりは菅野のその言葉に少し寂しそうな表情をしながら笑顔で答えた。

「次はちゃんとした方法で此処に来て、戦います」

孝美が負傷した事、扶桑からの補給が断たれると言うラルの都合など不確定要素が多分に絡み、非正規のルートで此処に所属して戦った

ひかりだが、実力は確かな物になっている。

過程はどうであれ、経験という結果はついて来る。

菅野が去ると、ひかりは自分が今まで使っていたチドリを指先でそつと撫でる。

チドリは、ひかりとの数々の戦闘によって小さな傷をとところどころに残していた。

「チドリ。今までありがとう。お姉ちゃんと頑張つてね」

指先を離そうとするのと、誰かが滑走路の方角から近寄るのは同時だった。

「Good morning my buddy」

此処まで流暢な英語を話すのは、502では1人しか居ない。ひかりは明るい笑顔を浮かべて振り返る。

「Good morning. です」

アランは聞き慣れた流暢な英語が返つて来た事に笑みを浮かべると少し寂しそうに目尻を下げる。

「昨日は……ありがとうございました」

ひかりが少し恥ずかしそうにながらアランにお礼を告げる。

「忘れてくれ。アレは俺でも少しどころじゃないレベルでギザったらしかった」

昨日の魔眼対決の結果発表の時にひかりとアランはブリーフィンルームから席を外していた。

その時にひかりは、基地の滑走路に、アランは格納庫のゲート脇にある柱の影に居た。

ひかりは滑走路の先端で、懸命に涙をこらえていた。

「うっ……うっ……」

ひかりは、涙を流したくなかった。自分で決めたことであり、そして出せる限りの力を出し切った上で敗北した。悔しい思いがあつたが、決して後悔はしていなかった。しかし、彼女の中に渦巻いていた思いは、堪えられず、ついに爆発した。

「うわああああん！ うわああああああん！！」

ひかりは滑走路の先でへたり込み、思い切り泣いた。大粒の涙は、

次々と滑走路を濡らしていく。

自分の中に渦巻いていた思いは涙と共にグシャグシャになってしまい、もはやどうして泣いているのかすらひかりはわからなくなってしまう。しかしひかりは、大声で泣いていた

そんなひかりを正面から抱き留めたのはアランだった。

「悔しいから、悲しいから、堪えられないから、そんな理由で泣く奴は何があっても泣かない奴よりずっと素晴らしい人間だ」

頭をポンポンと優しく叩きながら、背中をさすりながらアランが告げる。

「今日は泣けば良い。でも、明日からは今日の事で泣く事だけはするな。そうやって人は強くなるんだ」

アランの言葉を聞いたひかりの腕がアランの肩を掴み、ひかりの方からアランに抱き着く。

「泣けばいい。此処には俺しか居ないからな。ハンカチを貸す事は出来ないけど、胸を貸す事は出来るから」

昨日の事を思い出した2人は同時に顔を赤くして、視線を外す。

アランはこの空気をどうにかしたいと細かな傷が光を反射するチドリに視線を向けた。

「悔いは……あるか。納得は出来たか？」

アランは言い換えた。悔いがあるのは当然だ。ひかりが敗者で、此処を去らなければならぬからだ。

ひかるは悔いという言葉に頷ぐが、いつものように明るい声で、本心が現れている様子で告げる。

「悔しいけど、やれることはやりきったんでスッキリしました。やっぱお姉ちゃんは凄いです」

「お前も充分にスゲーよ。エースとやり合って、あそこまで追い詰めた。誇りを持ってばいいさ」

アランが腕時計に視線を落とす。

そろそろひかりが乗るトラックの準備が終わる頃だ。

アランが声を掛けようとするが何故か喉仏の所から声が堰き止められた様に声が出来ない。だが、ひかりはそんなアランの事が分かつ

ているのか明るい笑みを浮かべながら行きましようと言を掛けるとアランは用意していた荷物を持って、ひかりの後を追う様に道路へと出る。

「本当にスオムスに行っちゃうのかよ、ひかり」

「あはは……そうですね」

ひかりの転属を、見送りに来た代表としてニパは言う。その言葉に、ひかりは少し笑ってから返事をする。

そして次はサーシャが前に出る。

「向こうに行ってもユニット壊しちゃダメよ」

「はい。正座させられないように気を付けます」

サーシャはひかりがユニットを壊さないように念を押しながら、見送りの言葉を述べる。

そんな言葉を受け取ったひかりも、正座されないようにしようと言うが、カウハバに正座がある訳では無いのだが、それを知っているのかいないのか。だが、502らしい言葉だと誰もが思った。

そして次に、下原とジヨゼが出る。

「これ、おにぎりです」

「飲み物も」

そう言っ、二人は手に持っていた物を差し出す。

「下原さん、ジヨゼさん。お世話になりました」

「ひかりさん」

ひかりが二人にお礼したら、今度はロスマンがひかりに話しかけた。

「あなたの今日までの日々は無駄じゃないわ」

「先生……」

訓練の日々を思い出したのか少し泣きかけるひかり。

「昨日の動き、なかなか良かったわよ」

「ありがとうございます、ロスマン先生！」

ひかりはロスマンに褒められて、嬉しくなり大声でお礼を言う。

そして、ひかりはトラックに乗り込もうとした時だった。

「やっぱり、ひかりちゃんが持ってた方がいいよ」

「あ、お守り」

クルピンスキーがポケットから取り出したのは、ひかりに以前渡されたリベレーターだった。

ネウロイの体当たりからクルピンスキーを守ったそれは、見事にグリップ部分から機関部にかけて歪んでおり、とても弾が撃てそうには無い姿だった。

「二パさんから聞きましたよ。これ本当は武器なんですよね」

「あはは、バレた。でも、これは確かにお守りだよ。ボクを守ってくれたからね」

ひかりはクルピンスキーの言葉に笑顔を浮かべてお礼をしてから、とクルピンスキーの手に乗せられたリベレーターを受け取り、首に掛ける。

首から下げられたリベレーターの鈍色の外装パーツが陽光を淡く反射する。その光景にクルピンスキーはこの銃が、ひかりを守ってくれるお守りになるだろうと何処か確信めいた物を感じていた。

「ひかりー」

アランがひかりに声を掛けようとした時に意外な人物が息を荒くして、ひかりを呼び掛ける。

ひかりはその声の主を信じられない光景を見た様な目で見つめる。

「お姉ちゃん……」

声を掛けたのはひかりの姉である孝美だった。

孝美はゆっくりとひかりに近付くと、無言で、しかし優しくひかりを抱き締める。

「遅くなってごめんね。ひかりは頑張ったんだね。此処で、精一杯の努力して強くなったんだね」

「お姉ちゃん……私……」

最後の最後であるが姉に認めて貰えたひかりは黙って孝美にしがみつく強さを増やす。

そのままゆっくりと時間が流れるが2人はお互いに離れる。ずっとこのままではいけない。

孝美は頑張ってねのと応援すれば、ひかりが頑張ると宣言する。そ



の光景を見たアランは自分が話そうと思っていた事を捨てて、ひかりに話し掛ける。

「ひかり、脇を広げて、後ろを向け」

アランの言葉にひかりは不思議そうにしながらも言われた通りにすると肩に何かが乗っかる様な感触を受ける。

「これって！」

ひかりが着けられた物を見て驚く。

それはアランが普段使っている左脇にリボルバー銃のホルスター、左肩にナイフのホルスターが着けられたショルダー式のホルスターだった。

右脇にはクイックローダが出しやすい形状のマガジンポーチでも言うべき物に9mm弾がベルトに嵌められて携行されている。

武器はアランのコルト・ストライカーズを複製した物とアランが持ち歩いていた2本のサブバイバルナイフの片方1本だ。

「左右反転しているが俺と同じ武器が収まっている。大切に使ってくれよ。それと、これは手荷物で常に持ち歩け、ただし、開けて良いのは本当に何か困った時だけにしろ」

そう言っただけの大きさがあるアタッシュケースを渡すとひかりは重そうにしながらもしっかりと受け取り、トラックの助手席の足元に入れ、ひかり自身もトラックに乗り込むとトラックは走り出す。

「みなさーん！ お元気でー！」

ひかりはトラックの窓から体を乗り出しながら、全員に手を振って別れの挨拶を掛けた。

その様子を、アランを含む他のウィッチ達は黙って見ていたが、ニパは思わず走り始めた。

「ひかりー！」

ニパは離れていくトラックを追いかける。だが、トラックと人間の足では悲しい程に速度差がある。

ニパとトラックの間はどんどん離れて行く。

「ひかりー！」

「ニパさん……」

追いかけるニパを見て、ひかりは少し寂しそうな顔をする。始めて来た502で、一番最初に親しくしてもらった同性の友であるニパの事を思うと、ひかりも別れるのが辛く感じるのは当然だ。

そして、今まで離れたところで様子を伺っていたアランは、ニパが追い掛けるのをやめたタイミングでニパの下へ行き、肩を叩いてから基地を親指で示しながら、顎をしやくる。

「何で追いかけないんだよ……」

怒りを感じさせるニパの言葉に、アランは返さずにひかりの乗ったトラックが去った方向に目を向ける。そんな行動にニパはアランの方を振り返った。

「私達の仲間だろ！ アランの相棒じゃなかったのかよ！」

ニパは思わず、アランに大声で問う。

アランの表情を見ると、ひかりと別れるのが少し寂しそうではあるがそうでもないと言う表情も浮かんでいた。

「あいつは俺がbuddyとして認めた女であり、兵士だ。あいつは必ず俺が飛ぶ戦場に戻つて来る。だからこそ追わなかった」

アランがニパから視線を外し、トラックの去った方向に顔を向ける。もうトラックの姿どころか排気ガスや巻き上げた砂塵すらも見えない。

「去つて行くbuddyに対して行うべき行動は、追うでは無い。帰つて来た時に向かい入れてやる為に腕を広げて待つ事だ」

アランは振り返り、基地へと歩いて行く。

「これで良いんだよな……ブート……」

彼の囁きは誰にも聞こえずに、風に攫われて消えた。

### 第32話 フレイアー作戦始動

「周知の通り、グリゴリーは現在時速5キロで南西に移動している。目標はペテルブルグ。この502で間違いない」

ブリーフィングルームに集められたウィッチ達は投影機の関係で暗い空間に座り、マンシュタインの説明を静かに聞いていた。

前方に鎮座するスクリーンには投影機により移されたグリゴリーの写真が投影されている。

そしてマンシュタインは投影されている写真を叩く様に手を付けながら、続けて説明する。

「従来の出現した敵に応戦する策を捨て、我々から打って出る大反攻。それがフレイアー作戦である」

マンシュタインの言葉は今までの常識を、戦術を遥かに覆す物だった。

今まではネウロイが出現し、それをウィッチが、もしくは通常兵器により、迎撃すると言う後手に回らざるを得ない不利な戦い方をしていた。

当然だ。カールスラント奪還を図った戦争初期の状態だった時には近づく事さえ困難で、近付いたら疲弊した状況に大量のネウロイによる人海戦術に物量作戦、しかも波状攻撃と言う最悪フルコースだ。

つまりはフレイアー作戦の様な事をする理由も意味もないのだ。何故なら、失敗と言う前例を幾つも作ったあとだったからだ。しかし、今回は移動するネウロイの巢と言う異例な存在と、ネウロイにも数に限りがある為に出血を強いれば撃破は出来ると言う事実を、ウォーロックが証明してしまっている。

故に先手を打ちに行く。そんな戦術が通った。通ってしまったとも言えるだろうが……

ウィッチ達の不安そうな顔を浮かべるが、マンシュタインの作戦説明は続き、投影機は次の写真を写す。

スクリーンには骨組みのボビンのような姿を中心に、細い糸のようなものが無数に出ている謎の形状をしたネウロイの姿があった。

一言で言うならば異形なネウロイがそこにいた。

「北方軍がグリゴリー内部の観測に成功した。その結果、雲状の巢の中心には巨大な本体があり、それがネウロイの発生源であることが判明した」

「ネウロイの生産工場」

マンシユタインの言葉に、ラルの感想がブリーフィングルームに響く。

「我々の作戦目的はその本体の破壊。そのための切り札が……これだ」

そう言ったマンシユタインの指示で写真は次の物に変わる。そこには巨大な大砲が2つ並べられた写真が現れた。

「超巨大列車砲、グスタフとドーラだ」

「これが……」

「でけえ……」

写真であるにも関わらず、見る者を圧倒するその大きさに、ニパと管野の口から思わず漏れる。

いや、声を漏らした二人だけでなく、誰もがその大きさに圧巻された。

「カールスラント技術省の力を集結して制作された。口径800ミリの史上最大最強の火砲だ」

「800ミリ……そんなの作れるんだ……」

800ミリという途方もない大きさの大砲に、下原は現存技術で実現可能なことに驚く。しかし、この中で唯一驚いていないのはアランだけだった。

彼は攻略こそされていないものの、アフリカ南部においてこの巨大列車砲と同等サイズの列車砲が配備されているという情報を知っていたからだ。

そしてマンシユタインは次の写真に写る物を指し棒で指す。そこには巨大な砲弾が映し出されていた。

ただ、写真であるがただの砲弾でない事は本能的に察してしまう写真だった。

「まずグスタフがグリゴリーに向かって撃ち込むのは新たに開発した超爆風弾だ。この砲弾を使って本体を隠している、この雲を消滅させる。その後、露出した本体を破壊するのがドローだ。ドローには対ネウロイ用魔導徹甲弾が装填されている」

「魔導徹甲弾……？」

マンシユタインの説明を聞き、孝美は思わず聞きなれない単語を耳にする。

マンシユタインは孝美の言葉に説明して置いた方がいいだろうと、誰にも聞こえる音量で呟くと、次の写真を投影機に映し出させる。

そこにはある図面を前に数多のウィッチや技術者の前でチョークを手に語るブレッドの写真だった。

「魔導徹甲弾はブレッド・フィリップ少尉が考案した強装魔力弾を超える弾薬として考案された弾丸だ」

強装魔力弾は一言で言うならば、魔法力を強く込められた弾丸、もしくは込められる弾丸の事を言うが、もう少し詳しく、一言で語るならフルメタルジャケット弾の改造弾だ。

通常のジャケット弾は弾芯となる鉛を真鍮で覆う訳で断面図だと2層構造だ。

対して魔力強装弾は場所によって3層構造となる。

これは魔力をより多く込める為に弾芯となる鉛に魔法吸着をし易くする術式を彫り、その術式に魔力吸着性の強い鋼を流して削り、術式を鋼の刺青の様にしてから真鍮でコーティングする。

ただし、強装魔力弾を製造する上で工業力以外に求められるのは術式を掘れる職人と術式を削らずにコーティングした鋼だけを削れる研ぎ師達による職人の手作業だ。

これにより強装魔力弾は反動などの運用面での問題よりも補給面での問題で数が少ない狙撃ウィッチ用の銃弾となっている。

ブレッドは強装魔力弾と同程度の魔力弾の開発に着手した際にある事に至る。

『弾芯かジャケットを魔力の結晶で作ったらいけるんじゃない？』

魔力の結晶化はとうの昔に実用化されており、古代ではウィッチ用

の武器として使われた記録もある。

作り方も術式に魔力を流し込むだけなので、宮藤理論を応用した専用機械を作れば生産は楽になる。

こうして試作されたのが魔導弾である。

魔導弾は簡単に言ってしまうと弾芯を魔力結晶に変えただけのフルメタルジャケット弾及びパールージェット弾だ。

「この魔導弾のノウハウを徹甲弾に組み込んだのがこの魔導徹甲弾だ。魔導徹甲弾の弾芯には陸上ウィッチのべ数百名の魔法力を結晶化した魔力結晶を使用した。これを本体コアに叩き込み、決着をつける!!」

マンシユタインが力強く宣言している中でアランが手を挙げる。

「それだけの大口径砲を対空に使用するととなると直射になる筈です。両方の対空有効射程と十分な命中精度を維持できる距離は幾つですか?」

「有効射程は13 km、だが敵は1100 m先で移動目標だ。命中精度を考慮すると最大で10 kmだ」

「10 km!?! そこって敵の攻撃範囲じゃないか」

クルピンスキーの言う通り、10 kmという範囲はネウロイの攻撃範囲内になる。それだけでなく巢を突く訳である為に向こう側からの攻撃はオオスズメバチの巣を攻撃したかの様に激しくなることも容易に予想できた。

だからこそマンシユタインの口から、502に命令が下った。

「502統合戦闘航空団、諸君らの任務は列車砲を護衛し、射程内に到達させることだ。そして、雁淵中尉はコアの位置を特定せよ」

第502統合戦闘航空団の任務はネウロイ攻撃の要となる列車砲を護衛する護衛作戦だった。そして同時に、孝美には作戦の成否を決めるコア特定と言うとても重要な役割が与えられたのだった。無論ながら孝美も護衛対象だ。

そしてブリーフィングは終了し、出撃するメンバーは格納庫に移動した。それぞれが自分のユニットに足を入れると、魔道エンジンを始動させ、そして手に自分の火器を持つ。

「いいか！ グリゴリーを倒すまで帰れると思うなよ！ 502統合戦闘航空団、出撃！」

『了解！』『H o o r a h!!』

ラルの掛け声に全員が大きく返事をする。そして、502統合戦闘航空団は作戦成功を目指し、出撃したのだった。

「では、ここからは列車移動になりますので。小官はこれで」

「はいーありがとうございます！」

敬礼しながら告げた運転手の言葉に、ひかりはお辞儀をしてからお礼を言う。

運転手はひかりからのお礼に笑顔を浮かべるとひかりを乗せてきたトラックに乗り込み、走り始めた。

残ったひかりは周辺を見渡す。

現在地はペテルブルクにあるスオムス方面へとつながる駅。ペテルブルクは街から人々が疎開しきっている。故に周辺にいる人はすべて軍人、もしくは軍属関係者のみであり、着ている服は似通った物で、纏う雰囲気も大作戦が行われていると言う事もあつてか少しピリついた雰囲気を持っている。

ひかりはここである人物を探していた。

「確かスオムスからの迎えの人が……」

ひかりが改めて首を回し始める。

「ヨウー！」

「あっー！」

直ぐに後ろから声を掛けられた。

ひかりは聞き覚えのある声にハツとし、振り返ればそこにはよく知る懐かしい人物が2人も居た。

「エイラさん！ サーニャさん！ 迎えに来てくれたんですか？」

そこには以前の休暇でひかりと共に年越しをしたエイラとサー

ニヤが居た。二人はひかりのはしやいだ姿を見ると、何処か安心した様に揃って微笑むがひかりはその微笑みの下に抱く感情に気付かない。

そして、ひかりは2人に先導されて列車に乗り込んだ。

スオムスに行く旅客列車は誰も乗っていない為に汽車の稼働音と車輪が線路の間を踏み越えるガタンゴトンと言う音しか聞こえない。

暫くの間だが列車が走行するとサーニヤは何故、ひかりを二人で迎えに来たか事情を説明した。

「ニパさんとブレッドさんから迎えに来てほしいって連絡があったの」

サーニヤから告げられた人物の名前にひかりは首を捻る。

「？ ニパさんはわかりますけど、なんでブレッドさんが？」

思いがけない人物の名前にひかりは驚く。そしてその訳を今度はエイラが説明した。

「あいつはワタシもサーニヤの連絡先を知らなかった見たいデナ。知ってそうなブレッドのヤツに連絡したんだろうナ。ブレッドはそうでも無いけど、あの2人はひかりのこと、すんげー心配してたゾ」

「……」  
ニパは友人として、アランはバディとして、ブレッドはひかりの歳を考えれば大丈夫だろうと言う信用から然程の心配はしていなかった。

それでも、心配されていると言う話を聞き、ひかりは寂しさから少し下を向いたその時だった。

サーニヤが突然、魔導針を頭に出現させて空の方を向く。

「あ」

「サーニヤ？」

「空」

サーニヤの言葉で窓から空を見上げると空の中を何かが並んでいる。

ひかりが窓を開けるとそれがより鮮明となり、空を進んでいるのがウィッチの糸乱れぬ編隊飛行をした際に生じる飛行機雲だった。



「502が出撃したのか」

「はい！」

エイラはそれを見て、502が出撃したことを理解した。

と言っても、この辺りに常在するウィッチ戦力は502統合戦闘航空団のみだ。しかし、そんな理論はひかりが空を飛ぶウィッチ達に指を指しながら興奮したように話し始めた事に関係無くなる。

「あれは隊長！ あれはサーシャさん！ ロスマン先生、下原さん、ジョゼさん」

「よく見えるナー……」

目測で何キロと言う距離でも個人の特定さえしてしまうひかりの目の良さにエイラは若干ではあるが戦慄に似た感情を抱くと同時に感心する。

「左はクルピンスキーさん、ニパさん、管野さん。それから……」

次々と名前を呼んでいく中、ひかりの声は尻すぼみになっていく。

「ねーちゃんとアランか？」

「はい」

言いにくそうにしていたひかりにエイラが陽気になれる様に雰囲気気を軽くしながら言う。

「ま、そんな湿っぽくなるなって」

エイラはそう言つて、軍服のポケットを手慣れた手つきで探る。

そして、ポケットの中から一つの箱を取り出した。

なんの変哲も無い赤い長方形の箱だ。

「じゃーん。気分が落ち込んだ時でも、おいしいお菓子を食べればウキウキハッピーになれるもんさ」

エイラはそう言つて、ひかりの掌に箱の中に入っているお菓子を分け与える。

次々と掌に積まれていくお菓子にひかりはその見た目でなんであるか理解したのか、目を輝かす。

「あっ！ チョコレートだ！」

そう言つて、ひかりは手のひらに乗っていたお菓子をいつぺんに口に運ぶ。しかし、ひかりは一つ勘違いをしていた。そのお菓子はチョコ

コレートでは無かった。と言うよりもどのチョコレートよりも黒かった事に気付いていなかった。

チョコは一言で言えばブラウンや茶色なのだろうが、ひかりが口に含んだ菓子は黒かった。もうそれはドス黒いと言いたくなる程に黒かった。しかし、ひかりはそんな色のチョコだろうと判断してしまった。

いや、そう判断せざるを得なかったと言うべきだろう。人間と言う生き物は知らない事は想像も出来ない生き物なのだから。

「チョコじゃないぞ。サルミアックだ」

「そ、そんなにいっぱい……」

エイラがお菓子の正体を明かす中でサーニヤはいつぺんにアルミアックを口に含むひかりに顔を青くしながらアワアワとする。

サルミアック。これはエイラの地元の呼び方でサルミアツキと言った方が多く知る人が多いだろう。

因みにサルミアック（サルミアツキ）とは、北欧の国で生まれたりコリス菓子的一种で、分かりやすく言うならばキャンディーである。

北欧では懐から無くなると禁断症状を訴え始める人がいる程で、世代を超えて親しまれる北欧を代表していいと言える程に誰もが食べるお菓子である。が、それ以外の国ではとある理由からあまり食べられることは無い。

かく言うサーニヤもそのとある理由からこの菓子を食べる事は無い。

「おいひい………」

最初こそおいしそうに食べていたひかりだが、徐々にその顔色を青くしていく。それを見たサーニヤの嫌な予感というよりかは経験が働き、それは見事に的中した。

「うえっ!!」

口に広がるサルミアツクの味と匂いにひかりは思わず悲痛の叫びを出すのだった。

「お、おい、ひかり!」

「ひかりさん」

急いで水を渡したサーニヤからの救援でなんとか事なきを得たばかりだが、ひかりがこうなったのはサルミアツクの特徴が原因である。

サルミアツクの特徴と言えば、その主成分から来る独特な味だ。

サルミアツクはリコリス菓子的一种と言ったが、リコリスは甘草の一種でこれだけでも甘ったるい漢方薬の様な後味がある為に好き嫌いが分かれるが、サルミアツクは更に塩化アンモニウムを叩き込んで来る。

塩化アンモニウムは元々は肥料や医薬品であり、味は塩っ辛く、鼻に来る刺激臭を出す物質である。これだけでも好き嫌いが分かれる。

今のひかりの状況は口の中に大量の甘ったるい中に塩っ辛い漢方薬に似た後味がする物質が刺激臭を発しているのだ。

全くの余談だが、ストライカーズではフィンランド人が持ち込んだこの菓子が刑罰の一種として採用されており、日本人以外には正座かサルミアツクか選べと言われるとこの世の絶望の様な顔を作る。尚、日本人はサルミアツクか肝油かで同じ表情になる。

やがて肝油、正座、サルミアツクが実現不能を可能にする日本人とネタからガチまでドイツ人、変態紳士のイギリス人とハイテンションなアメリカ人による手でとんでもない爆弾となるなんて誰も想像していなかった。

### 第33話 フレイアー作戦 ファーストラウンド

「なんだろうな……この感覚……」

一糸乱れぬ編隊飛行をしながらアランが呟いた。

そしてそれは何故かも首を回して周囲を見た事で理解する。

「えっと……何か？」

後ろを向いた瞬間のアランの視線に気付いた孝美がアランに語りかければアランは首を振ってからなんでもないと答えて前を向く。

孝美はまだ気に入らない事をしたのだろうかと不安になるがそれは無いと直ぐに判断出来た。

「(彼にとつて居るべきは私じゃなく、ひかりなのよね……)」

固定の僚機やアランの言うバディーと言う物を持った事がない孝美にはそれしかわからない。そしてアランはこの感覚を味わうのは初めての事ではない。

「慣れないな……相変わらず」

何処を見ても、頼りになる相棒がいない。

アランも軍人と言う特殊な仕事をしているが故にいつも一緒に居られない事くらいは理解しているし、納得もしている。だが、目に見える場所にいつも居ると思っていた人間が居なくなっているこの感覚にはいつまでも慣れる事は無かった。

「(かなり大きな存在だったんだな……)」

隣を飛んで居た紺色の水兵の服を着て、顔を向ければいつでも花が咲いた様な笑みを投げってくる雁淵ひかりと言う存在が自分にとつてどれだけの存在か、離れてみてその大きさに気付く。そんな自分にアランは自然にフツと自虐的な笑みを浮かべた。

「あのアランさん……やっぱり……」

「No problemだ。ひかりが居なくちゃ戦えない訳では無い」

下原から心配そうに話し掛けられるとアランは自然な笑みを浮かべながらガッツポーズをして答える。

「私達も頼って下さい。ひかりさんほど頼りにならないでしょうけど

……」

「それはこっちのセリフだ。護衛任務は得意だからな！」

こんな様子のアランを見た下原とジヨゼはお互いに顔を見合わせる。

アランの様子を見れば何も心配ない様に見えるがひかりが居ないと言う事とアランの様子がいつもと同じ事が返って何か起きないか2人を不安にさせる。

「グスタフとドローラを確認しました」

ロスマンがいつ早く見つけた作戦の要に自然と全員が無意識に自分の持つ獲物を握りしめる。

「あれをボクたちが守るのか」

クルピンスキーの眼下に2両の大型、と言うには巨大過ぎる列車砲が雄雄しく、二つのレールに跨って移動している。

グスタフとドローラの発する列車砲としての堂々とした姿は、誰が見ても圧巻の一言だ。

「10時の方向。グリゴリーを視認した」

ラルの言葉を聞いた他のメンバーも列車砲に向けていた視線を上げる。

顔を上げた視線の先には、黒に赤が混じった禍々しい色をした積乱雲が浮かび、徐々に近寄って来る。

こんな色の雲が自然に発生する事は無い事は氣象に詳しくない人間でもわかる。間違いなくネウロイの巣である。

そして、502は編隊を維持したまま巨大列車砲の上をパスして更に前に出れば連合軍の大部隊が駐留していた。

長砲身に換装された4号戦車を中心にした大規模な戦車部隊がその砲身を、機銃を空に向けて出番を静かに待つ。

戦車隊の後ろには名砲と名高いアハト・アハトを中心に編成された高射砲部隊が空を睨みつける。

更に急ピッチで用意されたであろうオラーシヤのカチューシヤを中心に編成したロケット砲部隊が空を見上げて作戦開始を待つ。

兵器だけでもとてつもない規模を誇る車両・火砲部隊だが更に周り

にはStG44を持って走る回る歩兵達が見て取れる為に歩兵にまで装備を充実している辺りにマンシュタインの本気度が伺える。

地上で動き回る歩兵達の目には上を通り過ぎて行くウィツチ部隊に期待を込めた眼差しを送っている。

更にマンシュタインはこの地上戦力に航空支援としての黒海に空母艦隊が待機させている。

陸と空に隙間の無い布陣に可能な限りで揃えた最新装備や近代化を施した大部隊だ。

東部戦線のあらゆる面での戦力を殆どを抽出して投入する今回の作戦に否応無く緊張感が地上を支配する。

「スゲェー部隊だ。だが……」

陸上兵器の主となっているのはカールスラントの兵器軍であり、兵士もカールスラント軍人が割合的に多いがそれでもこれだけの部隊をここまで動かしたり、武器弾薬を集めるとなると大量の戦時物資を使う事になる為に失敗した場合はこの辺り一帯を放棄しなければならなくなる。

少尉だったアランとしてはこのくらいは理解出来ると同時に失敗は許されない戦いなのだと思わされると自分の所属していた混成部隊を率いていた2人の日本人とブレッドが緊急で育成した際に連れてきたまだ若い日本人学徒兵を思い出す。

「こんな戦いをしていたんだな……」

日本軍の末期の状況を身を持って知ったアランが空を飛んでいる頃に前線司令部では、マンシュタイン元帥を初めとした多数の国家の将校が司令部に詰め寄り、それぞれの仕事に従事していた。

「黒海に待機中の空母艦隊に連絡。艦載機の発進を要請しろ！」

「了解！」

司令部付きの副官がマンシュタインの言葉を通信兵に命令として下し、通信兵は黒海の空母艦隊に通信を入れると空母では通信兵から報告を受けた士官から艦長へ、館長から司令官へと伝えられ、司令官は艦載機発進の命令を下せば、艦長から航空機発進の命令が下され、甲板から航空機が我先にと飛び立って行く。

「何機が帰ってくるかな……」

空母艦隊司令官は飛び立って行く戦闘機の後ろ姿を見ながら哀愁漂う声を漏らした。

「艦載機、前線に着きました！」

「よかろう。これより、フレイアー作戦を開始する！」

そんな空母艦隊司令官の言葉を知らぬマンシユタインは作戦開始の言葉を告げる。

その言葉は時を置かずして全部隊に伝わり、それぞれの部隊がそれぞれに与えられた役割を行い始める。

陸上からは高射砲と戦車部隊による砲撃がグリゴリーへと放たれ、その上を誤射を受けない位置取りをしながら上空を戦闘機が飛翔していく。

砲弾が迫って来る事に感付いたグリゴリーは不気味な雲からネウロイを飛び出させるが高射砲や戦車からの砲撃に雲から出た瞬間に撃ち抜かれて撃破されるネウロイを作るだけに終わる。

そこに間髪入れずに出鼻を挫いたグリゴリーに戦闘機部隊が襲い掛かるが、グリゴリーはネウロイの出現速度を早める事に対応し、砲弾から逃れたネウロイと艦載機部隊での制空戦闘が行われる。

それでも勢いに乗った艦載機のパイロット達は今までの鬱憤を晴らすが如く、次々とネウロイを撃墜していくが、巢から現れるネウロイの数は無尽蔵であり、いくら倒しても次々と現れてくる。

そして遂に均衡していた空中戦力がネウロイに僅かでも傾き掛けた瞬間に次々と艦載機達から炎や煙が上がり、中には1発で木っ端微塵にされる機体まで現れる。

艦載機の残骸が名も無き航空歩兵達の亡骸と共に雪原へ墜ちるとグスタフとドーラがその巨砲の射程内にグリゴリーを捉えようとしていた。

「ふはー……びつくりした……」

「大丈夫？」

ひかりは出発の際に下原から渡された飲み物を口に含み、飲み込む事で口の中のサルミアツキを洗い流し、無理矢理にでも胃袋へと流し込んだ。

飲み込んだ後にホツと息を吐くひかりの様子を、心配そうに見ながら声を掛けるサーニヤに対して……

「どうだ？ いけるだろうか？」

今まさにサルミアツキをサーニヤの横で食べているエイラが居た。それを見たサーニヤは内心ではサルミアツキを美味しいと言って食べるエイラの事を友人ではあるが理解しかねる様に苦笑いを浮かべるサーニヤは頭に何かが入り込んで来る様な感覚を味わう。

サーニヤは長年の経験から慌てる事無く魔導針を出現させる。

「始まったのか？」

「うん。通信量が跳ね上がってる」

魔導針を納めると同時にエイラが頭の後ろで腕を組む。

「はあ……私たちも出撃したいナー」

「スオムス軍はバックアップでしょ……」

エイラは少しつまらなさそうに呟くとサーニヤが今回のフレイアー作戦ではスオムス軍はバックアップだろうとクギを刺す。

お互いに兵士で有るがサーニヤにとつてエイラは大切な存在だ。表立って出撃する必要があるのなら心配こそするが止めはしない。だが、そうでないなら出撃して欲しくない。

無傷のエースと言われても出撃すれば死亡する危険性は付き纏うからだ。

今はひかりをカウハバに連れて行くと言う仕事があるからこそ、そんな心配はしていないがカウハバに行けば出撃すると言い出しかねない。まあ、カウハバに行く時間を考えればフレイアー作戦をどんな結果であろうと終わっているだろうとサーニヤは考えているとひかりは窓から空を見上げていた。

「お姉ちゃん……アランさん……」

ひかりは現在地から見えない場所で戦っている孝美とアランの様



子が気になり、心配そうな表情をするひかりに、サーニヤが話しかける。

「やっぱり心配?」

「はい……」

ひかりの横で何かを置く音がする。気になり振り向くと、そこには大きな箱が置かれていた。

「じゃーん!」

「あつ! 無線機!」

ひかりはそれを見て、ビックリしたように無線機を見る。

無線機、しかも電源内蔵型となれば士官でも簡単に持ち運べるものではない。

特に大規模作戦の最中なら通信機器を持ち出すなど更に難しい。

「へへーん、待ってろヨー」

そしてエイラは、無線機のダイヤルなどを回し、周波数を合わせるとノイズが流れる無線機は、徐々にその音を明白にして行き、通信兵の声を吐き出す。

〈第8航空隊、205空域にて小型ネウロイ10体と交戦状態に〉

「敵の攻撃範囲に到達」

「来るぞ! 列車砲が射程内に到達するまで何としても守り抜け!」

『了解!』

二両の巨大列車砲が敵の攻撃範囲に入ると同時にラルの言葉に全員が答える。

それにより、502の任務が始まる。ネウロイはウィッチの姿を確認すると戦闘機と交戦状態に入っていない個体や乱戦に入りきれない個体から順にその矛先を向ける。ウィッチたちはそれぞれ攻撃を回避しながら、作戦開始前に支持された自分の持ち場に移動していく。

「見てて、ひかり！ 必ず勝って帰るから！」

孝美決意を新たにネウロイの集団に攻撃を開始していく。しかし、数機のネウロイは仲間を犠牲にしながらも孝美をそのまま通り過ぎ、列車砲に向かっていく。

ネウロイ達は列車砲の異質な存在に気付き、破壊しようとしてビームを放つがその攻撃は1発も列車砲に届く事は無かった。

「スゲー数だなー！」

アランの張った特大のシールドがネウロイの攻撃から列車砲を守ると同時にアランの体内に攻撃エネルギーとして蓄積される。しかし、その攻撃の激しさにアランは内心で焦りを抱く。

アランのシールドは有限だ。

魔力もそうだが、吸える攻撃に限りがあり、その量もネウロイの個性差で変動する為に予想も付けない。つまりは体感でどうにかするしか無いが身体の変化もない為に視覚情報からの共感覚だけと言う頼りないメーターしか無い。

「アランさんは攻撃を！」

下原とジヨゼがアランの前に出てシールドを張ることで交代を促す。

「thank you！」

アランは2人がシールドを張った後にシールドを収めると同時に敵の群れに飛び込み、レーザー攻撃を開始する。

思ったよりも吸っていないのかSHKASの2本の銃口の間にくしく輝く大玉真珠くらいしか無い光球が出来上がる。

アランは構う事なく腕で円錐を描く様に回転させて周囲の小型ネウロイを溶断する。

数回転した事で数回も溶断されたネウロイは耐えられずに雪の様に地上へ降り注ぐだけでなく、巢の直前まで進行したレーザーにより僅かながらの空白時間が出来上がる。

この隙に前衛組がアラン付近まで下がり、アランが列車砲の上で背負った各人の予備弾薬が入ったバックパックからジヨゼと下原が投げ渡して行く。マガジン重量が重いS18用のマガジンだけはアラ

ンが手渡しで渡す。

今回の作戦は機動性よりも継戦力と火力を優先させる為にアランの機動力を犠牲にアランを空中補給基地として運用。補給前は列車砲直掩として動く。

搭載力と防御力に長けたアランが居るからこそ出来た作戦だ。

補給が終わると同時にネウロイが更に出撃して来る。

「5秒で1体がノルマだぞー！」

「言われなくてもー！」

ラルの言葉に、クルピンスキーが返事をする。直掩以外のメンバーが上昇をしながら次々と迫りくるネウロイを排除していく。

「うおりゃああああ!!！」

そして管野は大声で雄叫びをあげながら次々とネウロイを倒していくが些か自身の防衛を捨てる様な動きをしているが管野の後ろを孝美が援護する事で管野の火力を最大限に発揮させる。同時に孝美の空間把握能力なら倒し損ねたネウロイも倒せる。

「ふっ。あの2人には負けられないな」

「お先に行くよー！」

そしてラルとクルピンスキーペア。

2人は武器が同じなので弾薬共通化が出来る為に継戦力が上がる。同時に2人の技術なら数発で1機は倒せるので撃破率も当然ながら高くなり、持続火力を高く維持できる。

ネウロイもエース級2人のデイフェンスを抜けずに破片となって行くが2人の撃破に目的を変えれば裏を取られる。

「させないわー！」

しかしそこも考えられている。

2人の背後にはサーシャとロスマン、ニパが控えている。

ラルとクルピンスキーの裏を取ろうとしたらフリーガーハマーのロケットで空間ごと撃墜し、いざとなれば群れにロケット弾の爆発に載せてパチンコ玉サイズの鉄球をばら撒く、ブレット考案のフレシエットロケット弾を叩き込む。

サーシャとニパはロケット弾の再装填や援護で無防備になるロスマンの護衛兼ロスマンが動く程では無い状況に対応する係だ。

〈ウイッチにばかり活躍させるなよ!!〉

そんな通信と共に戦闘機部隊もネウロイに襲い掛かる。

戦場を駆るのはウイッチだけでは無い。戦闘機部隊もウイッチの活躍に負けじと、ネウロイに攻撃を加えて、ネウロイの数を減らす。戦闘機部隊はウイッチほど臨機応変な動きが出来ない為に痛み分けの如く、一機、また一機と墜とされていく。

戦いはマンシユタインの予定通り、消耗戦へ向かっていく。

「第1航空隊壊滅！ 第8高射砲大隊壊滅！ 全体損耗率30%！  
ネウロイの毎分出現数半数に減少」

司令部では前線の報告が次々と入ってくるが経験豊富な通信兵のお陰か混乱は微塵も感じられない。

「攻撃を緩めるな！ 撃って撃って撃ちまくれ！出し惜しみは無しだ！」

マンシユタインの横に座る初老の軍人、カール・グスタフ・エミール・マンネルハイムが大声を出すと同時に通信兵が報告をする。

「グスタフ、ドーラ、射程圏内到達まであと1分！」

「超爆風弾発射用意！」

通信兵の言葉に、次の命令をマンネルハイムが行う。

そして前線では、巨大列車砲の1機、グスタフが動き出す。

グスタフはその巨体の上部に搭載された巨大な砲身をターレットリングを使つて、胴体ごと回していく。

そのゆっくりとした動きは、ネウロイの注目を集めると同時に攻撃も集める事となるが、その選択をしたネウロイは悉くが破片へと姿を変えらる。

「ヒヤッホオオオオオオオウ！ 最高だぜええええ!!」

ドーラから伸びる無駄に長いベルトリンクを繋いだアランのSh KASから7.62mm弾がこれでもかと吐き出される。

問題だった装填弾数はベルトリンク式なら装弾数無制限と言う利点を生かしてドーラから上空1500mまで届くベルトリンクを作

成した事で解決した。

「いいぞ、ベイビー!! 突っ込んで来るのはネウロイだ! 突っ込んでこないのはよく訓練されたネウロイだ!」

撃ちたくても撃つ前に弾切れを起こすShKASが弾切れを起こさない為にアランの中に眠る悪魔トリガーハッピーが目覚めた。

お陰で一定距離以上はネウロイが接近出来ないがアランの前を飛び、アランと列車砲を守るジョゼと下原の精神衛生は最悪だ。

「フウハハハーハー! ホント、戦場は地獄だぜ!」

これ以上は精神異常をきたすと思った瞬間に撃ち切ったらしく連射音が無くなり、ネウロイのウェーブも去る。

「満足しましたか?」

「あ? なんだって! 撃ち過ぎて耳がおかしくなってる! もっと大きな声で!」

「満足ですか!」

下原の声にアランはいい笑顔を浮かべた事で2人はホッと胸をなで下ろす。

「おかわり!」

「もうやめて!!」

2回目は流石に不味いと2人が止めに入るとネウロイがアランに粗方駆逐されたのかグスタフがその砲身から火を噴いた。まるで雷が落ちたかのような音を放ちながら、その砲弾は撃ち出され、空を突き進む。

「きゃあ!」

「すごい衝撃!」

あまりの衝撃に、護衛で近くを飛んでいた下原とジョゼはその凄まじい反動を喰らう事になるがアランが素早く掴んだ事でそこまで体勢が崩れる事は無く、アランはその反動の中でも上半身が少し揺れるだけだ。

そして、グスタフから放たれた超爆風弾は、一直線に飛翔していき、黒雲の周辺に居たネウロイ諸共、ネウロイの巣を捉え、爆発する。

そして、その砲撃により、ネウロイの巣は周辺ネウロイ共々に吹き

飛ばされ、黒雲の中に隠されたネウロイの本拠地が姿を現わす。

ブリーフィングの写真に写っていたネウロイが、この砲撃により、その巨大な体を人類に向けて堂々と曝け出したのだった。

「さあ、セカンドラウンド開幕だ」

ShKASを再装填したアランの眩きに呼応したのか両陣営が動き出す。

### 第34話 フレイアー作戦 セカンドラウンド

「超爆風機構発動成功。グリゴリー周辺の雲が消滅しました」  
「成功だ！」

副官の言葉に、思わず喜びの声を出すマンネルヘイム。だが、その近くで冷静を保つ人物が居た。

「ここまでは、です」

マンシユタインだった。

彼の表情はまだ動かない。作戦はまだ途中であり、次が決まってこそ成功である。それまで、彼の気が緩むことは無かく、その目は地獄と名高いダイナモ作線を戦い抜いた歴戦の将兵であり、否応無く周りに冷静さを振りまく。

だが、現場では超爆風弾により隠れ蓑を失った巨大ネウロイの姿にウィッチ達は圧巻され、全員が立ち止まって見てしまう。そんな中、ロスマンは手に持つフリーガーハマーからロケット弾を数発ネウロイに向けて叩き込む。

真っ直ぐと飛翔した弾丸は、そのままネウロイに吸い込まれていくが、命中個所に傷一つつけることは無かった。

「通常の兵器では傷もつけられませんね」

ロスマンは冷静に、巨大ネウロイを分析していく。

そして、ここからが孝美の大仕事であり、最も危険な時間だ。

〈雁淵中尉、コアの特定だ〉

マンシユタインの無線がウィッチ達に伝わる。そう、孝美はこの後に魔眼を使い、巨大ネウロイのコアを特定しなくてはいけない。しかも最近現れた蠍型ネウロイの事もあり絶対魔眼を使う事になっている。

〈孝美をコア特定エリアまで護衛する〉

『了解！』

ラルの言葉に、アランを除いたウィッチが返事をする。彼女たちの任務は、ネウロイの攻撃から孝美を守ることであランは手薄になる列車砲護衛を少しでも守れるようにする為の最後の防壁だ。

「行つてきます」「行つてきますね」

「死ぬなよ」

下原とジヨゼが孝美の直掩隊に合流するべく上昇すると同時に超巨大ネウロイは動き出した。

ネウロイは自分の体に巻き付かせていた糸状の物体を解き、その先を連合軍に向けた。

糸の先はビームを吐き出す赤い装甲で構成されており、先の部分から次々と赤いビームが伸びて行く。太さこそ細いが数と精密性が段違いの弾幕をアラン以外のメンバーを回避をしながらも散会。

その糸状になっている部分に攻撃を加えて行くが無数にあるその部分は、いくら攻撃を加えて行ってもキリがなく、再生した後の攻撃が死角から飛んで来る事もあり、苦戦を強いられる。

そして、孝美は絶対魔眼の補足範囲に巨大ネウロイと捉えると同時に絶対魔眼を発動。

ネウロイのコアを特定しようとするがネウロイはそんな孝美を危険と判断したのか激しい攻撃に晒す。しかし、その攻撃は前に立ったアラン以外の502のメンバーによって阻まれた。

超巨大ネウロイの攻撃から管野はシールドを張った体勢を保ったまま孝美に聞く。

「見えたか、孝美!？」

「ええ。目標重捕捉……目標補正……」

管野の言葉に返事をしながらも孝美は次々とコア特定の工程を進めて行くがネウロイもさせる訳にはいかないと攻撃をさらに激しくする。

それを低高度から見ていたアランは敵も必死だと悟る。

〈最終捕捉……完全捕捉! グリットH58954……T87449!!〉

〈H58954T87449、了解!〉

孝美の座標が届くと同時にマンシユタインから発射準備の命令を受け、ドーラの薬室に魔導徹甲弾を装填。更に音速で魔導徹甲弾を飛ばす為の装薬が止められる。1t近い砲弾を飛ばす為のその装薬の



量は尋常では無い。

薬室に魔導徹甲弾と装薬が詰められるとドーラはその砲身を横に縦に動かしながら術式を展開する。

〈ドーラ、術式完了。発射10秒前。9、8……〉

ドーラの射撃が秒読み段階に入る。その時にネウロイは孝美を倒し切れなかったと判断したのか今まで分散させていた糸を束ねて1門の大きな砲身を作り、束ねていない糸で弾幕を張ってウィッチ達を阻害しながら束ねた糸でビームを収束させ、ドーラを狙って発射させる。

放たれた収束ビームは、そのままドーラへ向けて直進していく。

そんなビームに対応できたのはアランだけだった。

「やらせるかああああああ!!」

シールドを展開してネウロイの強力な攻撃を防ぐアランだがエネルギー量が多いのかシールドの吸収に対してネウロイのビームの方が強い。

「こんな所で……終われないんだよ!」

アランは賭けに出る。

吸うのでは無く消滅させる。つまり、固有魔法である放出を使ってネウロイのビームを掻き消しに掛かる。

アランの想いに応えたのかビームは全ての銃口から発射されるだけでは無く螺旋を描きながら1本の巨大なビームとなりシールドで受け止めたネウロイのビームとぶつかり合う。

赤と青のビームはお互いに拮抗するがエネルギーが互角になったのか大きな爆風が起けると同時にお互いのビームが消失し戦域を巨大な閃光が包むが、閃光が発生する直前にドーラが発砲。

閃光の中を突き進み、超巨大ネウロイに命中する。

「無事だったか……」

それを音で判断したアランは糸が切れた様に重力の鎖に捕まり、頭を下に落下するがそれを支えたのは意外にも孝美だった。

孝美は地面にアランを横たえるとジョゼが真剣な顔で近付き、治癒魔法を行使しようとしたが、治癒魔法が展開される事は無かった。

「そんな……そんな事って……」

物言わぬアランにジヨゼが泣きそうになるがラルがジヨゼの肩を叩く。

「脈はあるんだ。死んだ訳じゃない。ただ、魔力を使い過ぎたんだ。しかし……意識を失う程の行使か……」

「そうだ！ グリゴリー!!」

そう行つて空を見上げた菅野の前を赤い光を帯びながら開いた流れ星と見間違えそうな物体が通り過ぎ、ドーラに直撃するとドーラが予備として搭載していたであろう装薬が誘爆して爆発を起こす。

「え……」

何処からか飛来した物体に誰かが信じられない物を見たと言う様に声を漏らしたのと列車が動くガタンゴトンと言う特徴的な音がグリゴリーの本来あつた位置の方角から聞こえてくる。

その方向はネウロイ勢力圏。間違いなく敵であると理解する。

その音の主は数分もしない内に地平線から現れる。

〈〈新型ネウロイ出現！ ドーラが大破!〉〉〈〈戦車部隊交戦開始!〉〉

〈〈6号車がやられた! こっちの主砲が効かない! 援護を……〉〉

〈〈アハト・アハト砲撃開始するも弾かれています!〉〉〈〈航空機全滅により航空支援は出来ません!!〉〉

突然の武装列車型のネウロイの出現に慌てふためく現場をエイラが持ち込んだ無線機から吐き出されると中には通信が途中で切れる時もあり、否応無く誰かが死んだと想像させる。

その通信に離れた場所にいるエイラ・サーニャ・ひかりも驚く。

「そんな……グリゴリーは倒したのに……」

ひかりの顔から血の気が失せて行く。

作戦は成功したと思つたら突然の敵増援の到着。

更にアランの戦闘不能に加えてウィッチの攻撃も有効打になつていないと言う通信を聞いたひかりが立ち上がり、列車内を突如として

走り出す。

「おい、ひかり！」

エイラが静止を呼びかけるが、ひかりはそれを聞かずに列車の後方へと走る。

そこにある筈の物を目指して。

「みんなを助けなきゃ！」

ひかりは行つてどうこうすると言うプランも無く感情で動き出す。

彼女は貨物に積まれた自分のユニットを目指していた。そして、車両のドアを開ける。

「えっ!? ユニットは……」

しかし、ひかりの目の前に貨物車両は無く、そこにあつたのは遠ざかる景色だけだった。

その光景にひかりはその場でへたり込んでしまう。

「貨物列車は別だって」

後ろから追いかけてきたエイラが言う。ひかりのユニットを載せた貨物列車は別の車両。旅客車両であるこの列車では無かった。

ひかりは無力な自分を嘆く様に顔を伏せて涙を流す。

「そんな……こんな事って……」

ひかりが502での出来事を思い出すと自分の座っていた席へと走つて戻る。

アランが渡してくれた荷物に希望があると信じて。

「クソ硬えぞ!!」

菅野の放った13mm弾は天板に当たったにも関わらず弾かれる。

陸亀を思わせる武骨な一両編成の武装列車から単装の高角砲や車体各所に描かれた先住民が書きそうなラインに並べられた赤い装甲からビームが吐き出される。

アランは安全の為にジョゼが遠い場所まで引き摺って移動している事もあり動けない仲間を気遣う必要が無いだけが唯一の救いだろ

う。

「このままじゃ埒があかねーぞ！」

「わかってる！　だが、菅野の拳も弾かれたんだ！」

「どうするべきか……」

此処までの交戦で孝美は魔眼により複数コア所有と言う事でアランの世界の兵器を模した敵だと判断したが肝心な事にその情報源になるアランが意識不明の状態。

コアの場所である高角砲を攻撃しようにも保護用の装甲に銃弾は弾かれ、菅野が殴ろうにも接近が難しく殴れない事が多く、殴れても腰が入っていない、そもそもが硬すぎると正直に言うならば攻めあぐねている状態だった。

「ボク達の撃破にご執心だね。このネウロイ」

雰囲気軽くしようとするクルピンスキーが攻撃を回避しながら軽口を叩くが痩せ我慢に近い行動なのは誰の目に見ても確かだった。

それでもクルピンスキーの軽口に心が折れかけていたメンバーの心に支柱が立ち上がる。

「それでもどうすれば……」

ロスマンが動きが良くなったメンバーを見ながら思案する。

最大火力を誇る自身のフリーガーハマーでさえ傷をつけられなかったネウロイを相手にどうするべきか。

一番良いのは天板でこれ以上の火力を誇る攻撃を叩き込む事だが、生憎とネウロイが自分で作っては通り過ぎれば解体してを繰り返した自前の軌道の所為で対グリゴリーの戦場から離れてしまっていてそんな武器は落ちていない。

「本当に……」

どうすればいいと思いを動かしながら戦うロスマンに単装砲が向けられるがロスマンが作戦考案中だったが故に反応が遅れてしまう。

「先生！」

ニパが叫んだ瞬間に乾いた銃声が響き、ロスマンを狙っていた単装砲がヘコむ様に破損し、自分のビームで爆発する。

まさかの光景に安全となっていると上空から新たなウィッチが舞

い降りる。

「すみません！ 遅れました！ 雁淵ひかり！ 参戦します！」

零式艦上戦闘脚を履いたいる筈のない最後の502メンバーだった。

### 第35話 ブレイブウィッチーズ

居ない筈のひかりの登場に加えて使用しているユニットが零式と  
言う違いに全員が面食らっている。とひかりが種明かしをする。

「出発前にアランさんが渡してくれた荷物が下原さんが前に使ってい  
た零式を折り畳んだ状態で入っていたんです！」

時は少し遡る。

貨物列車が無いと知ったひかりは最後の希望をアランから貰った  
カバンに賭ける。

「困った時にだけ開けろって言ってたよね……お願い！」

ひかりが意を決してカバンを開ければ中から押さえつけられてい  
た物体が解放される。

ひかりが開けたカバンからは折り畳められた零式艦上戦闘脚が斜  
め上に飛び出して、使用者を待っていた。

「ストライカーユニット……それも下原さんの……」

ひかりは理解した。

アランは502の誰かに何かがあれば走っても戦場に来るだろ  
うと。しかし走行中の列車から走り出せないという予想もしており、  
そんな時の為に紫電改に乗り換えた下原のユニットを拝借。秘密裏  
にひかりへ渡していた。

「アランさん……」

相棒の為なら軍法会議などクソ喰らえなアランの行動にひかりは  
涙を流しながら感謝する。そしてエイラとサーニヤの2人は顔を見  
合わせながら笑う。

自分達も仲間の為なら平然と無茶をするストライカーズの兵士で  
あり信頼を裏切らない自慢の仲間を知っている。そんな仲間の相棒  
なのだ。

これくらいの事はやると何故かわかる。いや、やって貰わないと彼

の相棒だとは言わせないと2人の気持ちは一致すると同時に行動指針も一致する。それはひかりをあるべき場所。つまりは502の戦場に送る事だった。

2人はひかりからユニットを貰うとエイラがひかりを肩車で浮かせ、サーニヤがひかりの足にユニットを履かせる。しかし、問題は列車の中からどう飛び立つかだ。

垂直離陸は慣れていないウィッチや熟練した魔力制御を持たないウィッチの場合はかなりの魔法力を消費する。

ひかりは後者なのだが、あくまでも効率良く武器やユニットに送る為の制御法であり、飛ぶ為の制御法ではない。

「あ」

頭を悩ませる3人にサーニヤから意外過ぎる案が飛ぶ。

「最後尾から私かエイラが投げればいいのよ」

「アランの奴がいいそうな事言うナヨ……」

こうしてひかりはエイラの手でトルネードスイングを受けて初速を得た事で何とか離陸に成功する。

「みんな、待ってて下さいー！」

ひかりは出せる限りのスピードを持ってペテルブルクの空を駆けた。

「なるほどな。アランには後で嚴重注意だな」

軍の備品を無断で持ち出した事に関しては何かしらの刑罰が無ければ示しが見つからない。普通なら軍法会議だが、そのアランの独断専行が救った状況なのでラルは嚴重注意で済ませた。

「しかし、ひかりさんが1人来ただけでどうこうなる問題ではないですよ?」

「そうでもないみたいだよ。先生?」

ロスマンの言葉に飄々とした態度でクルピンスキーがそれを証明

するようにStg44をセミオートに切り替えて1発だけ放つ。

ロスマンは弾かれてお終いだと思っただが着弾した単装砲のコアが破壊したのか砕けて再生しない。

「成る程、魔力を1発に集中して魔力とネウロイの対消滅作用で破壊する」

「殆ど魔力で殴ってるだけじゃん！」

サーシャの言葉にニパが突っ込む。

「魔力を込めて滅ぼせばいい……筋肉でない事が唯一の救いね」

「孝美さんも染まってますよ？　まあ、あれはアランさんの特権ですからね？」

孝美も魔力を集中させてS18による射撃で単装砲を破壊する。下原は孝美がここ短時間で502になったの突っ込みながら孝美を守る為にシールドを貼る。

下原の行動は単射が出来ない銃を持つメンバーには渡りに船だったのか単射が出来るメンバーを守る為に行動を開始する。

単射可能なのはカールスラントの3人と孝美と拳銃だけのひかり。シールドを張るのはニパ・菅野・サーシャ・下原。ジョゼとアランは戦線を離脱済みだ。

シールド係と攻撃係が合っていないが1発に魔力を込めるのを戦闘しながらとなるとひかり以外は慣れていないと言う理由で少し時間が掛かる為に撃つたら下がって溜めて、溜まったら前に出て撃つのが繰り返す。

ロスマンのロケット弾は残弾と魔力の残量問題でコアを叩く最後の詰めを担う為に後方で回避に徹する。

ネウロイは優位が無くなった事を察したのか弾幕を張るだけだった攻撃から戦術的な攻撃に移る。

それでも流石は多国籍精鋭部隊の統合戦闘航空団と言うべきだろうか、1人に対してシールド係全員でフォローを入れる事でフレキシブルな一撃に対応して見せ、後方に下がった人員に直接攻撃をしようとするれば、直掩として飛ぶひかりの拳銃弾が赤い装甲に命中して破壊し、回避コースを無理矢理だが作ってそこに逃げ込ませる。



各個撃破は無理だと判断したネウロイはいくつものビームを収束させたビームを何条にも渡って照射する。

「お姉ちゃんー!」「ひかり!」

この姉妹はこの極限状態でお互いの意思をすり合わさっていた。孝美が下がると同時に全弾が詰まったマガジンをひかりに孝美は渡していた。

ひかりはこのタイミングで使用するのだと悟り、自分の仕事に来るまではただひたすらに20mm弾に魔力を注いでいた。

そして孝美はひかりからネウロイが収束ビームを放つ準備をした瞬間に魔力弾だけで構成されたマガジンを受け取り既存のマガジンを躊躇う事なく破棄。ひかりのマガジンを詰めて、単装砲に向けて、素早く、確実に当てていた。

ネウロイはこの戦術が悪手だったとは残った単装砲が立て続けに破壊された事で悟り、そこ時には胴体が破裂して、白い破片が視界を埋め尽くす。

「終わった……」

誰かが呟いた言葉に全員が銃を下ろしたタイミングだ。

破片の雲の中で何かが動き、赤いビームが孝美に向けて飛んで来る。雲の中には黒い巨人とも言えるネウロイが右腕を突き出した姿で大地に敷かれた軌道の上に立っていた。

誰もが孝美の名を叫び、孝美を助けようと手を伸ばすが間に合わない。

誰もが命中すると思った瞬間にひかりが追い付いた。孝美を引張るのでは無く、突き飛ばすつもりで加速したお陰で間に合い、孝美を被害範囲から追い出す事に成功するが、それは孝美の位置にひかりが入れ替わるだけの事を意味する行動だ。

「ひかりいいいいいい!!」

孝美の叫びが木霊した瞬間にネウロイの赤いビームを撃ち落とすと同時にいくつもの青いビームがネウロイの身体に降り注いだ。

ネウロイはビームが飛んで来た方向に攻撃を加えるも飛んで来た物体は自分で自分を守る用に背中を向けて円を描くに回り出し、ネウ

ロイのビームをしつかりと受け止めながらも壊れない。

ネウロイは飛来物を諦めて再びひかりに狙いを定めてビームを放つが今度は飛来した物体が4機が集まり1枚のシールドを形成してひかりを守り、守り切ったと同時に雪煙を巻き上げて何か之急上昇すると青い輝きを発する。

ネウロイはその発光物体にビームを放つがまたも4機でのフォーメーションを組んだシールドに遮られる。

発光物体はゆっくりと高度を落としながらひかりの前へと降りて来るがその間もネウロイは墜とさんとビームを放つが飛行物体のフォーメーションシールドに遮られる。

「ア……アランさん……」

ひかりの前に空中に降り立つ様に現れたのは腰の僅かばかりの軍服を残して、はち切れんばかりに何倍もパンクアップした筋肉により、閉じたばかりの傷だけで無く、古傷も開いた場所から魔力を溢れ出させる無装備のアランだった。

アランはひかりに振り返らず黙って巨人を見つめる。己のこの肉体こそが最大の武器であると胸を張って、立ち塞がる様にホバリングする。

そんなアランを見たネウロイにも怒りと言う感情があるのだろうか、何度も倒せるタイミングを防がれ、降り立ったアランと言う新手を脅すように見間違いの方向ではあるがいくつものビームを放つ。

放たれたビームの熱で水蒸気が。爆風で雪煙が舞う中に1発の砲弾が飛び込んだ。

砲弾が命中した音のすぐ後に大爆発が起き、ネウロイの破片がそこから中に雪煙を突き抜けて飛んで行くがそれを確認出来ないウィッチ達はシールドを張って身を守るがひかりだけが咄嗟に出せなかったが、アランの浮遊シールドとも言うべき飛行物体がひかりの身を守り、アランに飛んでくる砲弾は肩の上に浮遊する青い球体から発射されるレーザーがCIWSの様に命中する破片だけを正確に撃ち落とす。

そしてシールドを張れたウィッチは飛び込んだ砲弾が撃ち損ねた

魔導徹甲弾だとわかったのはその爆風が余りにも凄まじかったからこそ。しかし、予想出来たのは爆風に煽られて地面に落ちてから直ぐだった。

「アランさん……」

そして孝美が空中に浮かぶ、変わり切ったアランに眩く。

「そうだよ。ひかりがピンチになれば駆けつけるよね」

ニパが納得した様に頷く。

「それが相棒だから、アランさんですから」

下原が笑う。

「そして1tの爆弾を放り投げてここまで届かせるって……」

ロスマンが頭を抱える。

「アランくんだからね、仕方ないよね」

クルピンスキーが笑う。

「ふん。こうでなければ面白くない」

ラルが不敵な笑みを浮かべる。

「アランさん以外の全員が地面に叩きつけられてますけど？」

周囲を考えないのがアランらしいですけど、と笑うサーシャ。

そして、暫くするとアランのユニットも活動を停止する。

外部に漏れ出るほどの魔力に当てられたユニットが安全弁を落とした故のパワーダウンだった。

「これで破壊出来るほどヤワじゃねーよな。ゴライアス……いや、グリゴリー!!」

アランの叫びに呼応してか、雪煙が晴れると同時に目と思われる場所が赤く光り、同じ様な体型のネウロイ、グリゴリーが殴り合いの構えを見せる。

アランも武器を全て捨てて殴り合いの構えを見せる。

「行くぜー」

お互いに走り寄る。

最初に繰り出したのはグリゴリーの正面を向いたままで円を描く様な蹴り。

アランは屈みながら回り込む様に走る事で回避、身体を回して正面

を向くと同時に背面を取る。しかしグリゴリーもそれがわかったのか蹴った足を軸に振り返り、同じ足でサイドからの蹴りを放つがアランを両手で弾く様にガード。

そして左フックを当てるが大したダメージになっていないのか、間髪入れずにグリゴリーが右ジョブを繰り出すがそれも両腕を横側に押す様に防がれてしまい、逆にアランの右フックを喰らってしまう。「グウギイ」

立ち上がり重視だった為にそこまでダメージは無いと思ったアランだが当たると確信した故の大振りに近い一撃を放った為にクリーンヒットを先に取れたのは近接戦で重視される物の一つ、流れの中では大きなアドバンテージを持つ。

グリゴリーは殴られた衝撃を糧に左腕での殴打を繰り返すが、慌てる様な一撃を喰らう様な柔な鍛え方をアランはしていない。

腕の一撃を防ぐと同時に自分の左手首を腕に掛ける様に動かし、左手を相手の思惑以上に動かさせ、腕を動かす際に生んだ捻りの動作で右フックを再び与え、更に左に向いた隙に左フックをリズムミカルに叩き込む。しかし、2連撃を加えたタイミングでグリゴリーからもリズムミカルな左右のフックを合わせて3発も喰らってしまう。「ううおら!!」

だが、攻撃する際には隙が生まれる。アランは3撃目の隙に腰と踏み込みの入った右フックを喰らわせる。

「グウガア」

グリゴリーもこの攻撃には後ろに下がってしまい、アランの右フックが飛ぶはステップングで回避し、身体を傾けた蹴りを放つがこれをバックステップでアランは回避。

グリゴリーはボディローを放つも腹を引つ込められて不発。左フックを放つがこれも伏せられて不発。パンチでは無理と判断したグリゴリーが回し蹴りを放つが、アランは上半身をグリゴリーの脚と平行になる様に脚と腰を使って上半身を動かして転倒する所を回転運動にする事で距離を取ると同時に離れる。

「グウア!」

だが、距離を取った事でグリゴリーの回し蹴りが放たれるがこれをアランは反射で掌と膝でガード、グリゴリーは防がれた脚を使ってアランの掌と膝を使って逆回転のエネルギーを生成して左足での回し蹴りを放つがアランはこれを察知してリンボードダンスの様に身体を倒して回避。しかし、グリゴリーはそのままもう一回転して連続攻撃を放つが今度は前に身体を倒してアランは回避。

グリゴリーは搦め手のつもりでもう一撃を足払いをする様な回し蹴りを放つがアランは予想していたかのように前に倒れた力を利用して背中から後ろに飛び、グリゴリーの回し蹴りを躲すと素早く腕力と脚の遠心力を使って、グリゴリーの目の前で立ち上がり、立ち上がった衝撃を伝える様に右フックを顔面に叩き込んだ事でグリゴリーがたたらを踏みながら後ろに下がる。

アランをその隙を逃がさない。

脚が地面に対して垂直になる様に身体を回転させて顔面を強く殴りつける。

「グウガアガア!!」

しかしこれで倒れるグリゴリーでは無い。

立ち上がり、叫び声を上げると蹴りをアランの側頭部に向けて放つがそれをギリギリでガード、連続で逆方向に蹴りを放つもそれは予想していたのか上手く弾くアラン。

アランは距離を取れせようと腹に蹴りを入れようとするが脚を掴まれてしまう。しかし、そこで慌てるほど喧嘩慣れしていないアランではなく、フックパンチを左右から3発叩き込み、拘束が緩んだ隙に力づくで振りほどき、渾身のパワーを込めた右ストレートを当てる。

「やった!」

「まだ終わっていない!」

ひかりの言葉にラルが叫べばグリゴリーは問題など無いと言わんばかりにスムーズな動作で立ち上がり、アランに向けてラリアットの様に腕を振るうが、身体を傾けられて躲されただけでなくレバークローさえ喰らってしまい、流れる動作で顔面を更に横から殴られる。

「グウア!」

しかし、グリゴーリもそれで怯まずに身体ごと降っていたアランの顔面にパンチを1発叩き込む。

アランも肘打ちを放つがグリゴーリはパンチで迎撃、肘打ちを放つがアランに防がれるだけでなく腕を捉まってしまう。

「グルウアアア！」

だが、グリゴーリは捕まった腕を起点に身体を捻ってアランの頬に肘打ちを喰らわせて脱出。追撃を掛けるアランの首に斜めに腕を通して拘束すると膝蹴りを何度も喰らわせる。

「フウン！」

アランもやられるだけではない。最初の2発は喰らうがその後は腕でガードし、脚が下がると同時にグリゴーリの首をチョップで叩いて脱出。更に首を掴んで膝蹴りを数発だけ放つが全て防がれる。

「ぬあ」

防いだグリゴーリは腕を掴んで背負い投げの様な態勢を作ってアランを目の前の地面に放り投げる。

グリゴーリは倒れたアランに下ろし撃ちの右ストレートを放つが咄嗟にジャンプしたアランは着地と同時に走り寄りラリアットの様な大振りの一撃を放とうとするがグリゴーリの回転動作で遠心力をつけた蹴りを肝臓に喰らって倒れてしまう。

誰もがアランの声を叫ぶ。

グリゴーリがファイティングポーズを構え直しながら振り返るとアランも立ち上がっていた。

「うわああああああ!!」

気合いを入れる声と共に突進するアランは両腕で左右の側頭部を挟む様に殴ろうとしたが、低空タックルで腹を掴まれ、地面に背中から叩き付けられてマウントポジションを取られる。

「ファツキュー!!」

そこはアラン。全身全霊のストマックブローを放って吹き飛ばす。

「来いやー!」「キイイイ!」

第2ラウンドとばかりに向き直る。

グリゴーリは戦術を変えて太腿を狙った蹴りを放つが、アランは太

腿をブロッキングの様に筋肉を張らして耐える。

グリゴリーは回し蹴りを顔面に放つがアランは素早く頭を身体ごと傾けて回避、そして傾けた身体を戻す勢いも対して右ストレートを顔に放つ。

右ストレートを直撃されたグリゴリーは後方に後退りしてしまうが、逆に開いた距離を利用して加速したグリゴリーはアランに肘打ちを喰らわせる。

「ううぐう……」

目に見えたダメージを喰らうが後退しなかったアランにグリゴリーは至近距離でまたしても肘打ちを放つがアランは右手で速度が乗る前に咄嗟にガード、左肘が迫るがそこは同じく肘でガード。右フックのかち上げを放とうとしたグリゴリーだが、事前に防がれ、左肘を飛ばすがそれもガードされ、逆にそのガードを起点に首を絞められるがグリゴリーはアランを背負い投げで地面に叩きつける。

咄嗟に叩きつけられた故にアランは大したダメージは無く、立ち上がるが立ち上がった瞬間に素早い右ジョブを顔面に喰らう。

「ふっ」

素早いコンビネーションパンチで応戦するアランに対してグリゴリーもコンビネーションパンチで応戦するも雪原に肉体と金属が当たった様な音を響かせて、お互いに全弾ガードされる。

「ふうあー！」

だが、グリゴリーが此処でアランを出し抜いて蹴りを両太腿に入れる。アランも膝蹴りを放つもパアリングされた上に肘打ちを放たれるがアランは両掌で防ぐと左ジョブが飛んで来るがそれをヘッドスリップで躲し、側頭部を殴ろうとするがグリゴリーの頭突きに塞がれ弾かれた隙に軽いジャンプからに撃ち下ろしを顎に喰らう。

「ふう、ぬあ、うう……」

怯んだ隙に掴まれるが咄嗟に顔をクロスガードしたが腹に3発の膝蹴りを喰らった後に投げられるが投げられた勢いを前転で逃がしながら立ち上がりフックを放つが腕を掲げられただけで防がれ、パンチを放ったグリゴリーだが、アランはダッキングで回避し、空いた腹

の肝臓に当たる部分にアッパーを放ってダメージを与えるが、グリーゴリーはまたも大振りの一撃を放って来るがアランをそれをガードして膝蹴りを放つが途中でチョップによる迎撃を受けて失敗。

「ふうお、ぐうほ」

左右から顔面に1発ずつのフックを喰らってしまっても、腰を入れたフックを顔面に当てて首が横を向いたタイミングで右ストレートを放ったがステツピングに回転運動を混ぜた動きで躲かれ、更に回転動作で生んだエネルギーを回転蹴りに変えた一撃を喰らってしまい、地面に倒れるも再び立ち上がる。

「があ……」

だが、グリーゴリーは立ち上がるのは許さないとばかりにサマーソルトキックを放ち、アランは直撃を貰ってしまう。

それでもギリギリでフラつきながら立つが、逆にそれが大技を誘う隙になる。

「ブフウー」

再び放たれたのは空中で浮いてからの回転蹴り。

それを頭部に食らったアランは吹き飛び、今度こそ地面に倒れる。

倒れた際に身体から溢れ出ていた魔力も無くなる。

「(クソ……いてえ……)」

地面に倒れ、朦朧とする意識の中で浮かぶのは久しく味わうあまりにもリアルな死の予感。思い出されるのは此処までの思い出……

いつの日かの空港。

そこにアランはアメリカ陸軍の航空歩兵の軍服に身を包み、滑走路の先を睨む様に見つめ、アランの隣には英国空軍の軍服を纏った兵士が木箱に腰掛け、別の木箱に乗せたティーセットから紅茶の入ったカップを持ち上げて音を立てずにリラックスした様子で飲む。

暫くはなにかを話していたがエンジンが聞こえ始める。

滑走路の先に広がる空にV字の編隊がいくつも浮かぶはその飛行機は従来の形状とは著しく違う姿をしている。



そんな奇怪な姿の航空機は前々から決まっていたのか着陸すると格納庫へと引っ張られる。

目の前には深緑の背面に白い腹を持った奇怪な形状の航空機と白い腹にオリーブドラブに灰色を混ぜた様な色の奇怪な形状の航空機だ。

そんな航空機から兵士が2人降りて来る。2つとも幼さが目立つ若い兵士だ。

英国空軍の兵士は懐かさしさを滲ませる顔で顔を向けると手に持っていたティーカップを落とした。

若い兵士の2人は自慢気にアランの教えをずっとやってましたと胸を張って言う。と英国空軍の兵士が顔を向ける。

英国空軍兵士から回転蹴りを喰らって立ち上がるとサマーソルトキック、それで倒れなかったアランに流れる動作で飛び回し蹴りを加えた。

『何やってんだ！ アランつつつつ!!』

「そんな……アランさんが……」

ひかりの言葉にあのラルでさえ絶望を滲ませる顔を浮かべる。

グリゴリーはゆっくりと502に近寄る。

菅野は自分しか居ないと、己を奮い立たせてグリゴリーの前に立ち塞がる。

グリゴリーは腕を引いて菅野を殴る姿勢を見せる。

「待Wait!!」

グリゴリーが声をした方向に向けると身体から魔力を溢れ出したアランが立って居た。

グリゴリーはアランに向けてファイティングポーズを取るとア

ランもファイティングポーズを取る。しかしそれはさつきまでと違い、攻守に優れた構えでは無く、速く、多く、強く叩き込むかの攻撃全振りの構えだった。

「第15ラウンドだ」

アランの言葉に答える様にグリゴーリが右ストレートを風切り音が聞こえる速度で繰り出す。ダメージを負ったとは思えない正確なヘッドスリップで回避、続けて繰り出された左ストレートは先程以上の速度だったこれも先程より洗練されたヘッドスリップで躲される。

そして次々とフックやアッパーを5発ほど放つだどれもフットワークのみで躲され、これまでで最大速度の右フックを躲されると大振りだった故に身体の側面に割り込まれそこから全身のパワーを乗せた右ジョブを顔面に喰らう。

アランをバランスを崩したグリゴーリに余波を逃さぬ様に左ジョブで胸を殴って怯ませると無駄のないコンパクトな乱打で2発ずつ両頬を殴り、5発目のアッパーで後退させる。

グリゴーリは反撃に右ストレートを放ったが、アランはステップイングで回避しながら踏み込み、ストマックブローを叩き込み、上半身上がった瞬間を狙って腰の捻りごと左フックを顔面に叩き込み、右腕でボディーブローから流れる動作でアッパー。

苦し紛れの一撃を放ったグリゴーリだがステップイングで回避されると同時に左側に移ったアランからボディーにコンビネーションパンチから左腕でのボディーブロー、全身のパワーを使った左フックでガン絵を殴られ、グリゴーリが正面を向いた瞬間に全身のパワーを込めた右フック。

「グイガア」

苦しそうな声を上げると同時に鳩尾を殴りつけられ、更に苦しそうな声を上げるグリゴーリに右腕の本気のアッパーを喰らって上へと吹き飛ばされる。

『アラン(さん)!!』

502の全員がアランの名を叫んだ。

「ぬうああああああっつつつつ!!」

全身全霊。

全ての魔力と全ての関節、なによりも全ての筋力を込めた文字通り全ての身体と全ての魂を乗せた右ストレートが放たれ、グリゴリーの鳩尾に直撃する。

その命中音は遠く離れた司令部の全ての兵士が耳を押さえなくなる程の轟音。

衝撃エネルギーは502のメンバーをアランが離脱したジョゼのいる場所まで全員のユニットごと吹き飛ばす程だった。それでも吹き飛ばされたウィッチ達は魔力で守られたお陰か何処も異常は無い。

その顔と身体には壮絶な殴り合いが合った事を示す腫れた肉体に口からは勿論。顔の至る所から血を流したアランが左手に自分のユニットをそして右腕は勝利を誇示するかの様に高く掲げながら、ゆっくりと歩いて近づいて来る。

その姿は見えない司令部からも双眼鏡で確認した兵士からの報告。そしてグリゴリーはアランの発する雰囲気から撃破したと疑う事なく報告する。

疑う必要は無い。真正面から殴り合いという勝負で勝利を得た男の顔は絶対に裏切らないのだから。

司令部では通信機から聞こえる兵士達の鬨の声とレーダーに反応がない事とアランから目の前で粉碎したというインカムの通信でようやく確信し、司令部の兵士たちが書類を打ち上げながら歓声を上げる。

マンネルヘイムも、横に座るマンシユタインに手を出し、固い握手をする。

「やりましたな、元帥」

「ええ、やってくれました。第502統合戦闘航空団ブレイブウィッチーズ。戦場の魔女たちに祝福あれ」

マンシユタインはグリゴリーを倒したブレイブウィッチーズのことを心から祝福する。それはブレイブウィッチーズには聞こえなかったがそれで良かったのだ。

全員が無事に合流し、欠けなんて物はない編隊を組みながら帰るべ

き基地へと帰っているのだから。

誰も欠けずに基地へと生還する。なによりも難しい作戦を成功させたのだから。

「綺麗ね」

「うん」

孝美の言葉に、ひかりが答える。

雲が晴れたその隙間から降り注ぐ太陽の光がオラーシヤの自然を輝かせる。あまりにもきれいな光景に、他のウィッチ達も思わず認める。

「もうすぐここにも春が来るわ」

「平和な春だね」

「ぐううううぎゆるうううううごころおおおおお」

そんな時に全く可愛げの無い魔獣の鳴き声を上げる腹の虫がアランの腹の中に居た。

「腹減ったな……」

「私もです」

その言葉にひかりが同調すると孝美からまずさっきのお腹の音について言及されるが502はえ？ アランだから。という様な顔を向けられる。

孝美はこれ以上の言及をせず、此処で慣れという精神汚染がされなにか我が身を心配する。

「定ちゃん。アランさんには心配させた罰として塩いっぱいのリゾットなんてどうかな？」

「良いですね。そうしましょう！」

「口の中切れてる人間に出すのか！ お前ら人間じゃねーだろ！」

「ウィッチですから」

ジョゼと下原、アランのやり取りに皆が大笑いする。

「フツ。全く……帰るぞ、ブレイブウィッチーズ」

『了解！』

ラルも思わず微かに笑い、そしてブレイブウィッチーズに号令をかける。こうして、任務を終えた英雄、ブレイブウィッチーズは基地に

帰投していくのだった。

『502と筋肉大活躍！グリゴリ攻略成功！』

パ・ド・カレーではそんな文字がデカデカと印刷された新聞が出回っている。

そこにはグリゴリ攻略の指揮をした將軍のコメントと写真。そしてグリゴリのコアユニットとも言えるネウロイと殴り合いの末に撃破したアランへの取材の記事が載せられている。

新聞を読むブレッドはアランの記事だけを読み、その新聞の向こう側にはリネットとペリーヌが同じ記事を読んで戦慄している。

『アラン・レッドフィールド、オラーシャの大地を禿げさせる!!』

と題され、トタン屋根に正座され、膝にこれでもかと弾薬箱を乗せられたアランの横で更に弾薬箱を載せようとするサーシャを止めるひかりと孝美の写真と共に戦場付近にあった森の8割が無残にもアランの最期の一撃でグリゴリごと破壊された記事が載せられていた。

「やり遂げたなアランツ!!」

記事を全て読んだブレッドが新聞を真つ二つに破く。

「あ……」

そしてこの新聞はリネットもペリーヌも先程の記事以外は読んで居ない。

「買って「トネール!!」ぎゃああああああああ!!」

パ・ド・カレーに晴天であるのに稲妻が落ち、男の悲鳴が響き渡る。

そんな光景にパ・ド・カレーの住民は今日も平和だなどと話しながら復興作業を始める。

パ・ド・カレーではアランの記事は稲妻と男の悲鳴がついてプライストレスのワンセットである。

## ストライクウィッチーズ2編

### 第1話 新たなる衝撃

ブリタニア連合王国。

つい最近まではネウロイに対する欧州反抗の足掛かりにして、欧州唯一の大きな役割を持った防波堤。と言うのが地政学的かつ軍事的に語れる国。

ドーバー海峡に挟まれてすぐの国であるガリアにネウロイの巢と呼ばれる敵の本拠地が居座っていたからこそその評価だが、つい最近になって第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズの活躍もあり現在は欧州振興への大事な後方拠点となっているがその政は現在、少し危うい場所にある。

世間では秘匿しきった事実だが、ネウロイの巢撃破に当たってはウォーロックと言うネウロイの技術をリバースエンジニアリングを行なって製造された無人兵器が使われた。が、その無人兵器が暴走。同盟国の空母を撃沈してしまうと言う人類同士での血泥の戦いになってもおかしく無い国際問題を生んでしまう。

その問題はネウロイと言う共通の敵がまだ存在した事と金と資材、そしてこの問題を生み出した兵器を生んだ人間の処罰で国体的には手打ちとなり戦争は回避されたのだが、その処罰された人間に内政にも深く関わる空軍大将の名前が載っていたのが問題となった。

当然ながら直ぐに後釜に変わる訳なのだが、消えた前大将の尻拭いが目に見えているそんなポストに付きたい人間は流石の野心家でも二の足を踏む。しかも世間に隠せても今回の事は同じブリタニア空軍内では噂として広まってしまった以上は変な人間を置けば内政と軍政。最悪は政治家の椅子に関わる投票率にも直結してしまう。

そんな訳で長らく空軍のトップ不在と言う少し宙ぶらりんのブリタニア空軍だったが、漸くの後釜が決まり、同じ軍人向けへのデモンストレーションとナシヨナリズムの増加を狙って、ガリアの解放のその武功による階級の昇格と勲章の授与を着任式でやろうと言う事に

なり、祝福される側の席に3人のウィッチ、正確には2人のウィッチと1人のウィザードが座っていた。

「空軍大将の着任とそれによる内政のゴタゴタが済んだから勲章を授与とついでに昇格はわかる。が、此処までするか？」

そう言うのは今回の事で更なる昇格を約束されたブレッド・フィリップ大尉だった。

少尉だったブレッドだが今回のガリア上空に存在したネウロイの巢の破壊に関わり、他の作戦などでも陰に日向に大活躍を行い、短い時間で二階級も上げていたが、今回の式典ではとある事情から少佐への昇格が行われる。

「それよりも始まるようですよ？」

そして時間となったのか軍楽隊の奏でるファンファーレの演奏が始めると隣に座っていた金髪のカリアウィッチ。ペリーヌ・クロステルマンの声でブレッドは姿勢を正す。

そして祭典は続き、勲章の授与は恙無く行われ、そして大将の着任式が行われる。

「え!」

ステージに上がった人物を見たクリーム色の髪を三つ編みに編んだりネット・ビシヨップが驚きの声を上げた。

アドリア海。

ロマーニャ公国とバルカン半島に挟まれた海で地形的には湾と言つていい形状をしている。

四方を大陸に阻まれた地中海の中にあるアドリア海は太平洋に比べると波は穏やかで客船を出すには沿岸域の風光明媚な風景も相まって人気のクルージングルートとなろう。

そんな海を進むのは客船。では無く、無骨な主砲や副砲、機銃を乗せた軍艦達だ。



艦隊を組み、航行する軍艦達はその主砲を空中に浮かぶ古代の生物を模した様な形の黒い物体。ネウロイに向けられ、その砲口から爆炎と白煙、砲弾が吐き出された。

吐き出された砲弾は僅かな弧を描く様に飛翔、ネウロイの目の前で爆発。周囲に焼夷弾を撒き散らし、ネウロイの身体を焼く。

焼夷弾は通常の銃弾・砲弾・爆弾とは異なり、目標を物理的に破壊する際に爆発や物理的なエネルギーを使用せず、攻撃対象を燃焼させる事で破壊する弾だ。

無論ながらネウロイその物は可燃物では無いが、それでも燃焼剤により火炎はネウロイの装甲に傷を付ける事は出来る。

「見たか！ 対大型ネウロイ用焼夷弾の威力を。次弾、徹甲！」

旗艦の艦長の指示は他の軍艦にも送られ、各艦の主砲からは徹甲弾が撃ち出される。

徹甲弾は貫徹力重視の形状に加工した鉄塊を弾とした物だ。純粋な貫通力なら先程の砲弾よりも高く、過去にはラツキーパーンチだったとは言え、空中に居たネウロイを撃破した事が有る砲弾でもある。

「ウィッチ以外の攻撃で墜とせる物なんですか？」

その光景を二式大艇。扶桑皇国が保有する飛行艇だ。その性能は世界有数を超え、世界最高と言われる飛行艇の側面の偵察用風防から観察していた少年が呟いた瞬間に軍艦の一隻にビームが着弾する。

「やっぱり、ウィッチが居ないとダメか！」

カーキ色の半袖のシャツに同じ色の短パンを履いた少年の様な顔立ちの人物が風防から離れて木製の作業台の上に鎮座したユニットに駆け寄る。

「待って下さいい！」

その少年の前に白と青のセーラー服を着た少女が前に躍り出ると両手を広げて止める。

「私も行きます！ 私も守りたいんです！」

決意の籠った目がまるで自分の様に思えた少年は頷き、指示を飛ばす。

「わかりました。先に出て下さい。自分も後で出ます」

「はいー」

二式大艇の背面のハッチが開くとストライカーユニットの駐機装置が競り上がる。

其処に装着されたユニット、零式戦闘脚を履いているにはセーラー服の少女、ガリア解放の英雄の1人、宮藤芳佳。その人だ。

「行きますー！」

ユニットが発進すると同時にビームが飛来、エンジンに命中して機体は大きく揺れ、2発目が背中の中の発進装置を破壊する。

〈大丈夫ですか！〉

〈問題無い！ それより前！〉

少年の様な顔立ちの人物に注意されると同時にシールドを展開してビームを防ぐ芳佳。

「デカイ……」

その芳佳が張ったシールドのサイズは二式大艇を悠々に超え、十分な強度も併せ持ったシールドだった。

少年が今まで見た事の有るシールドのサイズなど張った張本人が覆い被せる程が精々だった。強度に至っては言うに及ばずである。

「?! 出撃は可能か？」

「魔導過給機損傷！ 10分下さい！」

シールドのサイズに呆気にとられていた少年だが直ぐに意識を取り直すと同時に整備士に叫んだが、整備士の言葉に拳を握り、歯軋りしてしまう。

「二戦持てばいい！ 5分で頼む！」

少年が叫びながら二式大艇の通信機に張り付き、飛んだ宮藤に連絡を入れる。

〈5分だけ時間を稼いでくれ！ 撃墜は考えるな。墜とされない様に意識しながら立ち回れ！〉

〈わ、わかりました！〉

宮藤が上昇した瞬間にネウロイの横っ腹が爆発。装甲と共に白い水蒸気の様な煙が吹き出す。

突然の奇襲にこの場に居た全員がその方向に視線を向ける。

「ファーストショット、ヒット。クイックファイア、セット」

「撃ちます！」

「下降して一撃離脱を。まずは艦隊に攻撃が行かないように距離を取らせましょう」

「わかりましたわ。貴方はどうされますの？」

「このまま接近、コアを探しながら攻撃、あわよくば撃破です」

「戦果に拘らない方だった気がしますが？」

「時勢がそれを許さない」

それだけ言い残して急降下を行い、接近しながら3発、すれ違い様に1発、離れながら引き撃ちで2発を当ててマガジンを外して新しいマガジンに切り替えて再び構えようとするがビームの嵐がそれを遮る。

「くそ！ 硬さは無いが速いし手数もある！」

海面スレスレを蛇行してビームに狙いを絞らせない機動で逃げるブレッドを援護するべくリネットが狙撃で援護しようと銃を構え直した瞬間に遙か遠方から飛んで来た弾丸がネウロイの身体を貫く。

「何処から?!」

驚いて弾丸が飛来した方向を向いたりネットのすぐ側を赤い服を来た1人のウィッチが歓声を上げながら猛スピードで通過して宮藤の側も通過、そのまま旋回上昇をしながら手に持ったBARによる射撃を加える。

「チャオ〜、ヨシカ〜」

「ルツキーニちゃん！」

「見た見た！今の全部命中したでしょう！」

自慢げに話すのはガリア解放の英雄の1人で最年少のお調子者、フランチェスカ・ルツキーニとその保護者のシャーロット・E・イエーガーだ。

「なんだこいつ。滅茶苦茶硬いぞ！」

「硬くねーよ。その銃の火力不足だよ！ と言うかなんで居る。アフリカでの懲罰は？」

「そんな事は今はどうでもいいだろう?!」と言うかそんな暇無さそう

?!

ルツキー二の警告にシャーロットとブレッドがルツキー二と共に散開して飛んで来たビームを躲す。

「再生速度が速いんだよ」

「火力が足りないか、ツチ」

シャーロットの恨みがましい声に応える様に空から飛んで来たロケット弾が立て続けにネウロイに命中して爆発、ネウロイを大きく揺らす。

「エイラさん！ サーニヤちゃん！」

宮藤の喜びに満ちた声が空に響く。

ロケットが飛来した方向に目を向ければ遙か先から銀色の髪を風に揺らしながら近付いて来るのは同じ様にガリア解放の英雄の2人、サーニヤ・V・リトヴァクとエイラ・イル・ユージェイライネンだ。

「じゃ、ワタシが先に行くから」

「うん」

エイラが加速、サーニヤはその場で足を前にして急停止、そのエネルギーを利用して武装であるフリーガーハマーを構え直してロケット弾を放つ。

ロケットと言う対装甲にも使える爆薬の塊は白い煙の尾を曳きながらひここうし、ネウロイのボディに立て続けに命中して爆発、その爆風に飛び込み、至近距離で機銃弾を放つエイラ。

「駄目だ。持続火力が無いから再生速度が勝ってる」

ロケット弾の威力は高く大きく身体を抉っているが連続してその火力を投射出来ていない故にコアを見つける前に身体が再生してしまう。撃破にはもう何押しも必要であるがそれを現状のメンバーで得ようとするブレッドだが命の危機を感じてかネウロイの攻撃に苛烈さが増して行く。

「敵ネウロイはコア移動タイプ。再生速度は従来の2倍を超えるわ」

「再生速度より早く潰せばいいだけじゃん！」

「全く……折角のクリスとの休暇が不意になった」

戦場に新たに現れた3人の影。その存在に魔力で気付いたのはブ

レットとサーニヤの2人だった。

現れたのはまたもやガリア解放の英雄、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケとゲルトルート・バルクホルン。そしてエーリカ・ハルトマンの3人だった。

「ミーナ中佐にバルクホルン大尉、それにエーリカ中尉だな！ 総攻撃を要請します！」

「わかってるわ。私達が突入します。その間にフォーメーション・カエサルを組んで」

3人が並んでネウロイに機銃による攻撃を加えながらエーリカとバルクホルンが更に左右に広がりながら攻撃を続ける。その間にブレッドはメンバーをシャーロット・ルツキーニ・宮藤の3人組とエィラ・サーニヤ・ペリーヌの3人組に編成を組み直し、自分は編隊の最後尾をリネットと飛び、全ての部隊の援護が行える様に陣取る。

逆三角形を描く様に飛んでいた部隊にミーナ・バルクホルン・エーリカの3人が合流して菱形の編隊を組む。

「曹長！ 疾風、飛べます！」

「よし！ 疾風で出る！」

少年がストライカーユニットに跨り魔法力を流す。

「おい！ なんだあれ!!」

シャーロットがまずそれに気づき、全員の意識が海面に降りていた二式大艇に意識が向く。

全員の視線の先には大艇を中心に海の一角を覆う様に扶桑式の魔法陣が浮かんでおり、その青白い光は退避しているヴェネチア海軍の艦艇からも確認出来たが、その巨大な魔法陣を縛る様に魔力の鎖が魔法陣の中央から伸びて雁字搦めにすると一般的なサイズまで無理矢理にサイズを小さくするとそこから1人の人間が飛び上がる。

扶桑陸軍の軍服に身を包んだ1人の少年がブレッドの後ろに着く。

「教官！ 自分も戦わせて下さい！ 足手纏いにはなりません！」

「貴官の合流を許可する。俺の後ろにつけ」「ケツの匂いを嗅げる位置から離れるな。ですか？」

自分の言いたい言葉を先に言い当てて笑う少年にブレッドは歯を

見せる様に笑う。

「行くぞ。こっちの世界の貴官の実力を示してみろ」

「攻撃開始！」

ミーナの命令で全員がユニットのスロットルを開いて加速、腕を伸ばす。ミーナの前が出るが誰よりも速いワイザードが1人居た。

「絢崎鱗斗、敵を駆逐する！」

## 幕間の物語 ガリア復興

復興が進むガリアの土地。しかし、それはあくまでも港周辺のごく一部であり、最も復興が進んでいるのは、物資が集め易く、比較的被害が少なかったパ・ド・カレーだった。

「……………」

そんなパ・ド・カレーも全ての地域で復興している訳では無い。

復興が進んでいない場所に多くの中年男性と中学生程の子供達が集まり、1人の青年。ブレッドの背中を生唾を飲みながら見守る。

「バンガロオオオオルツ!!」

ブレッドが目の前レバーらしき物にハンマーを叩きつけた。

バンガロオオオオル…………ドガアアアアアアアアアア…………

「またですね…………」

「またですわね…………」

復興が進んでいない地区から聞こえた叫び声と爆発音にリネットとペリーヌが呟き、近くで捨てるレンガを入れた頭陀袋の紐を縛る婦人が平和だねえと呟くとそれを受け取った息子が平和ってなんだっけと呟くとトラックに袋を乗せる紳士が少尉殿が地面を爆発させる事だよと告げる。

「ああ…………私達のカレーの地が…………」

ペリーヌが頭を抱える。

復興が進むのは良いが、ペリーヌ的にはその方法がいただけなかった。

まず復興を進める上で必要なのは金だ。しかしフランの紙幣的信頼が低い今は資金集めも大変だ。

ウィッチの収入もあるがそれだけでは到底足りない。故に方法と

しては雑でも危険でもそこまで予算の掛からない方法が求められる。そして復興にはライフラインの整備が重要となる。人間が発展したにはこのライフラインの開発と整備、発展があったからこそ。簡易な物でも構わないので兎に角に燃料と水、物資運搬のインフラ整備も必要だ。

そこで活躍するのがバンガロールだ。

本来は鉄条網や地雷処理などに使われる兵器だが、その破壊力は絶大だ。

そこでこの破壊力を使って掘り起こしに使用したのが今回の復興事業だ。

ブレッドはまず12歳から15歳までの少年達にバンガロールを埋められる程の溝を掘らせる。そしてその溝に退役軍人や予備役軍人達がバンガロールを設置。従業員は安全な塹壕に身を隠してから爆破をする事で僅かな労力で大きく深く掘れる。後は掘った場所に水道を通すパイプなどを敷設する。

このバンガロール復興の利点は危険度を上げる代わりに費用と労力を削減すると同時に撤退前の建物は一部富裕層向けの頑丈な建物以外は基本全て撤去しないといけないの地面ごと建物を撤去出来る。

爆破後の破片は若い男性や退役したウィッチに旧式陸戦ユニットを着せてブルドーザーやパワーシャベル代わりにして撤去すれば良い。

お陰で港から離れた場所はモリモリ進むが、汗と泥の匂いに混じって爆音と硝煙漂う復興と言う訳がわからない復興が進んでいる。

「そう言えば、リーネさんはどうして此処に？」

「あ、そうでした。お昼ご飯が出来たので呼びに来ました」

その言葉を聞いたペリーヌは作業員達にお昼休みに入る様に指示してからある事に気付いてリネットの方に向く。

「ブレッドさんには伝えましたの？」

「はい。先に「私よりも先に伝えに行っただね」近かったの「屋敷でお料理してましたわよね？ でしたら、ブレッドさんの方が遠いですわよ？」……………」



ペリーヌの反撃にリネットが顔を真っ赤にして俯く。

ペリーヌが嫉妬などの感情では無く、純粹に弄る目的で話している所為でどう反論しても弄んで来る筈だ。

無論ながらペリーヌもそれはわかっており、遺恨を残さない程度にするつもりだが、それとは別にペリーヌにも思惑がある。

「(これでバれてないと思ってるから、困りますわね)」  
リネットはブレッドに恋愛感情を抱いていると言うのはパ・ド・カレーに住み者なら殆どが知っている。

というのもリネットは隠し切れていないどころか隠しているつもりで、ブレッドは隠し切れていない状況で周りから見れば見せつけられている物だ。

その所為で早く結婚しろよが共通認識である。

「は、早く食べましょうよ！ 時間が来ちゃいますし！」

リネットの方から話題の転換に走ったのをいい事に揶揄いが過ぎる前にペリーヌも領いて昼食を取る為に移動を開始する。

場所はいつも変わらず公園だった場所に残る木が植えられた花壇の縁。

そこにペリーヌ・リネット・ブレッドの3人で集まって情報交換や世間話をしながら昼食を取っている。

2人は着くと同時にブレッドも着いたらしく、何時もの通りペリーヌ・バスケット・リネット・ブレッドの順で座る。

「へえ、ベーグルサンドか」

「はい。簡単な物ですけど……」

謙遜する様に言っで見せるリネットだが、ブレッドとしては作ってくれただけでありがたく、不味く無い限りは文句を言うつもりは無い。

暫くはリネットの作ってきたベーグルサンドの味をブレッドが絶賛しながら食事をし、ペリーヌもブレッドの様に美味しいと言いながら食べるが、リネットがペリーヌの口に合っていたようで良かったと感想を漏らせば、ペリーヌは恥ずかしながらも狙撃と料理の腕だけは良いが他は半人前だと告げる。

リネットとブレッドは向かい合うとペリーヌの素直じやない反応にクスクスと笑う。ブレッドは向こうでは20を過ぎた事もあつて何処かペリーヌを近所の妹の様な女の子に向ける様な笑みだ。

「……残骸ばかりの場所で食事すると思ひ出すな……」

「何をですか？」

ブレッドが呟いた言葉をリネットが拾うと独り言なんだけどなど言いながら日本で飛行場整備に駆り出された時に炊き出しで出されたおにぎりを思ひ出すと話すとペリーヌは空を見ながら何かを考える。

「……坂本少佐に元の美しいガリアをお見せできる日は一体……何時になるのかしらね……」

「確かに。お世辞にも復興は進んでいるとは言えないな。物資も、人手も、資金も足りない、時間はまだまだある。進んでいないだけでしていない訳ではない」

ブレッドの励ましの言葉もペリーヌの顔に落ちた影を振り落とす事は出来なかつた。

「……ペリーヌさん」

リネットが足に乗せた拳を握る。

「前に芳佳ちゃんが言つてました。ネウロイと戦うのは怖い。でも、何もしないでじつとしている方がもつと怖い、つて。私だつて本当は怖いです。ネウロイと戦うのも、こんなに大きな仕事に携わるのも……でも……」

2人の目を見てからリネットが告げる。

「何も出来ないのはもつと怖くて、何もしないのはもつともつと怖いんです。芳佳ちゃんはいつだつて、自分に出来る事があるのなら、どんな困難でも立ち向かつていつてました」

ブレッドもペリーヌも芳佳の後ろ姿を思ひ出す。

絶対に諦めない。

誰もが思ひながら実行出来ない事を彼女は実行し続けている。

今も扶桑で難題にぶつかつても諦めずに頑張っている筈だと不思議と信じてしまう。

「ブレッドさんだって、出来ないと言われた事も無茶だ無謀だと言われた事も、やらなければいけないなら、やってみたら出来るかもしれないって言って挑んで、やり遂げて来ました……だから、2人を見ていると思うんです。挑む事に意味があつて、諦めないそう言う気持ちが大切なんだって。それが……」

あの場所で教えられた事ですからと笑顔で言い切つて見せたりネットにブレッドは恥ずかしさで顔を抑える。

「そうですね……何もしてない訳ではない、何も出来ていない訳ではありませんからね」

「そうだぞ、3人とも……元氣出せ……!!!」

ペリーヌに活力が戻ったと思つた瞬間に背後から3人に抱き着く1人の少女が現れる。

突然の出現にペリーヌは驚きから声が出せず、ブレッドは油断していた、警戒していないとは言えでも直前まで気付かなかった事に警戒して声が出せずに居るとリネットがその人を見て、震える声で告げる。

「お……お姉ちゃん!? なんでここに……」

「は!? お姉さん!?!」

「この方、リーネさんのお姉さんなんですの!?!」

まさかの身内登場に固まるペリーヌだが、それ以上にまさかの身内登場にダメージを負っているのはブレッドの方だが、そこは年の功か即座に思考回路を再起動させる。

「これはこれは、何時も妹さんのリネット・ビショップさんにはお世話になっております。王立空軍で少尉をしておりますブレッド・フィリップです」

「どもども、改めまして初めまして、リーネの姉のウイルマ・ビショップです! 元フアラウエイランド空軍所属のウィッチよ。いつも妹がお世話になってます。女王陛下の凄腕飛行士さん。青の1番さん」

「(丁寧)ありがとうございます」  
「あつ、いえいえ、此方こそですわ」

ウイルマがお辞儀をするとブレッドも社交界でする様なお辞儀を返すとペリーヌは何度もペコペコを慌ててお辞儀する。

「じゃなくて！　なんでそのリーネさんのお姉さんがここにいらつしやるんですの!?!」

「あはは。何、簡単な理由さ。うちのカワイイ妹がガリアで頑張ってるって聞いてね。応援に来んだよ。姉としてね!」

笑顔でリネットの頭を撫でながら告げるウイルマに片目を閉じながら恥ずかしさに何処か嬉しさが混じった表情を浮かべるリネット。

「……もつとも」

ウイルマの言葉を聞いて直ぐにブレッドが何かが飛来する音に気付いてヒップホルスターに入れたレッド9に手が伸びかけるが直ぐに頭に被っていた軍帽を押さええながら、目を庇うように動かす。

「ここに来たのは私1人じゃないんだけど、ね?」

ウイルマの言葉が紡がれたと同時に何かが複数。

4人の頭上を高速で通り抜けた風に4人の髪が乱れ舞う。

「こつ、これは……!?!」 「本国も粋な事を……」

見上げる空には、ブリタニア・ガリア・扶桑・リベリオン・カールスラントの国籍マークを塗装したストライカーユニットを履き、武器を持つ腕には武器では無く、大きな鞆を持ったウイッチ達だった。

「すごい……」 「ガリアとブリタニアだけじゃない、扶桑にリベリオン、カールスラントのウイッチがこんな沢山……!」 「何処から引つ張り出して来た?　こんな数……」

その数は数えるのが億劫になる程の数。たかが戦災復興に寄越す数では無い。

そんな中でペリーヌの名を叫びながらパワーダイブで迫り、ペリーヌに抱き着くウイッチが現れる。

「アメリカ!?!　アメリカ・プランシエール!?!」

「お久しぶりですペリーヌ中尉く、お会いしたかったですくくく」  
抱きつかれた衝撃で少し頭を痛めたのか、痛みが引いてから抱き着いたウイッチの名を呼ぶペリーヌと涙を流しながら喜び、さらに抱き着く。

「……お姉ちゃん?」

「あはははっ、ペリーヌちゃんの元相棒なんだって」

引き気味のリネットは指を指しながらウイルマに聞けば、ウイルマは楽しそうに笑いながら告げる。

ブレッドは相棒との再会と言う感動の光景に少し羨ましいと思うが、こんな再会は嫌だなと思った。

「アレが小柄な体型だからな……あの体型でアレをされると……」

ブレッドはアランと再会したとしてああして来たら全力で迎撃しようかと思いつながら、ウイルマに話し掛ける。

「なんでこんな数のウィッチが此処に？ 残党処理も終わりが見えてる位です」

「ウィッチはネウロイ退治だけが仕事じゃないのよ？」

そう言いながら、ブレッドに新聞を渡そうとしたウイルマだが、リネットが渡される前に引つ手繰る様に取って、ペリーヌと肩を並べながら開く。

新聞には復興開始の記念であり、最初の復興として植えた月桂樹を植えた時の写真が掲載されていた。

その写真は膝をついて笑みを浮かべるペリーヌとリネット、後ろを振り向く様にして横顔の微笑みを浮かべたブレッドが月桂樹を囲む写真だった。

見出しには『ガリア復興へ！ 小さなエース達の大きいなる一歩』

3人は大袈裟な記事に恥ずかしいのと呆れの感情で何も言えずに言えるとウイルマは笑いながら話し掛ける。

「本国じゃあなた達の話で持ちきり。お陰で市民の間でガリア支援の支持する声の日日に増して来ててね。とうとう軍上層部も重い腰を上げたって訳。しかも、501以外の統合戦闘航空団で活躍するウィザードが復興支援の演説をしたから扶桑にリベリオンにカールスラントのウィッチも来たのよ」

それを聞いた3人が空を見上げる。

リネットとペリーヌは501以外のウィザードとなればブレッドの味方だと思いつき、まだ見ぬウィザード達に感謝の念を贈り、ブレッドは離れていようと、戦場も戦う相手も違えど仲間だと言うメッセージに気付いて、目尻から涙を流す。

「……あなた達の頑張りが、みんなを動かしたのよ。人を。軍を。国を。そして世界をね……無駄なんかじゃなかったのよ。あなた達の手してきたことは……」

ペリーヌが感情を抑えられずに静かに口元を押しえて泣き始めるとブレッドは自分の被っていた軍帽をペリーヌの頭に被せて、顔を隠す様に傾ける。

「その涙を流す時じゃないぞ」「そうよ、泣くにはまだ早いわよ」

ブレッドとウイルマに言われて視線を上げると到着しているウィッチ達は何をすれば良い？ と笑顔で待っている光景が映る。

「その涙は、ガリアに再び明かりが灯るその日まで、とっておきなさい」「この位で泣いていたら、ガリに明るが灯った時に流す涙がなくなるぞ？」

「………はい………っ」

ペリーヌは歩き出し、アメリーと情報交換を行い始める。ブレッドも固有魔法を使ってインカムを持つウィッチに連絡を入れて能力や知識を聞いて担当してもらおう場所を手元の手帳に書き込んでいく。

「リーネも、暫く見ない間に随分頼もしくなったね。正直、お姉ちゃん。ビックリしちゃた」

「………」

そんな光景を見ていたリネットの頭にウイルマの手が乗ると嬉しい恥ずかしいと片目を閉じて、リネットはウイルマの手を受け入れる。

「………1人じゃないから………たとえ遠くに離れていても、大切な友達がいてくれるから………」

空を見ていた目をウイルマからブレッドの背中へと移すリネット。

「大切な相棒が近くで頑張っているから、頼ってくれるから、信じてくれるから………だから、私。変わったんだよ、お姉ちゃん」

「………そっかあ」

何処か感謝を込めた目でブレッドの背中をウイルマも見ているとペリーヌが3人を呼ぶ叫び声が聞こえる。

「それじゃあ、その友達と相棒の為に、頑張らないとね。リーネ」

「……うん！」

屈託のない笑みを浮かべるウィルマに優しい笑みを浮かべながら答えるリネット。

2人は同じ場所の復興をペリーヌから頼まれる事になりその道の途中でウィルマがリネットに声を掛ける。

「その相棒つてブレッドさんなんだろうけど、何処まで進んでいるのかしら？」

まさかの言葉にリネットは顔を真っ赤にしながらアタフタと声にならない声で意味を持たない言葉を何度も紡いでは、途切れさせるリネットを見たウィルマは生暖かい笑みを浮かべた。

「(ステキな出会いを妹にありがとう。ブレッドさん)」

ブレッドの預かり知らぬ場所でリネット家の外堀の1つが埋まった。

「母さんと父さんは強敵だよ。2人とも頑張っただね？」

「ブートさんとはそんな関係じゃ」「お姉ちゃんは、誰も名指してないけど？」……知りません！」

ガリアに姉妹の微笑ましい行いが行われる。

自然とリネットもウィルマもつかの間の平和を楽しむ。この後の激戦に備える様に。

## アフリカの空で

アフリカ。

砂と太陽が支配する世界。

人間が生きるには一筋縄ではいかないそんな過酷な世界で戦う者達もネウロイの脅威があるにならば、当然のように存在する。

「シャーロット・イエーガー大尉にフランチエスカ・ルツキー二少尉か」

下は砂の茶色に上は空の青に雲の白と額縁に入れてしまえばとても美しい世界に機械音が一つだけ響く。その機械音とはネウロイと言う怪奇に対して、始めて人類が作り上げた有用性の高い兵器、ストライカーユニット。

現代の魔法の箒と言われるウィッチと言う人間が空を飛び、地を素早く駆ける為の兵器。そして、ウィッチはうら若き乙女が普通なのだが、神様は何をトチ狂ったのか、ストライカーを履く資格をアラフォーかアラファイフ程の男に与えていた。

〈〈聞こえる?〉〉

通信を掛けてきた声が自分の上官である事を察するが、直ぐに個人を特定できる情報を告げる様に言えば、通信の主は直ぐに所属軍隊と階級に所属部隊とその役職、名前を告げるとやっぴりかと思いながらも同様の内容を告げる。

〈〈感度は良好。もうすぐ……と、言いたいのが流星に真昼じゃ現在地がわからない。現在地の確認と修正を頼む〉〉

そう言う通信相手からはレーダーと通信のあった座標に彼の居場所を照らし合わせて、経路の修正を指示されて経路を修正、そのまましばらく飛び続けた彼の前に飛行型のネウロイと交戦するウィッチ二人を自身よりも低高度で見つける。

先に交戦していたルツキーニ・シャーロットとの格闘戦で高度を落としていたネウロイは彼に背中を取られる事となり、奇襲を受ける事となる。

〈〈通報のあったネウロイと遭遇した。交戦に入る〉〉



反転飛行から急降下でネウロイの背中にウィッチ用に改造した9式旋回機銃を構えて発砲。

ネウロイの背中は放たれた7・92mm×55mmモーゼル弾全てが背中を抉り、ネウロイの背中は砕けた破片でそこだけが雪が積もったかの様に白く染まるが風圧で直ぐに破片は散ってしまい、再生を試みるネウロイの背中が太陽の光に晒される。

「そこだー」「うりやりやりやー!」

しかし、その隙を逃す様ではあの501で生き残る事など出来はない。

シャーロットとルツキーニは二人で背面を取り、ネウロイの背中を見ながらも息の合った見事なユニット捌きにより空中衝突をする事なくすれ違おうとするが、ネウロイも501に襲撃するネウロイよりも強力な個体が揃うのがアフリカという土地だ。

ネウロイは素早く反転する事で回復の追い付かない背中を庇いながらビームを放てる赤い装甲が無事な腹側で攻撃を開始する。

これによりシャーロットとルツキーニの二人は離脱を余儀無くされ、このネウロイは危機を脱した訳だが、このネウロイ……残念な事にある事を失念していた。

「射線を確保……超限定使用……」

この眩きが 死の間際だとネウロイは気付く。

頭上に突如として現れた小さな黒雲を確認したからこそだ。

最初に自分に対して痛手を与えた相手が居た事、そしてその相手は上から高速ですれ違った以上はどう足掻こうと下から来る。

そして一番に警戒すべきは下に居る彼の方だった。それを失念して上から攻撃するウィッチ二人に火力を集中した。

少しでも邪魔しようとして素早く反転して赤い装甲を光らせるがそれよりも早く彼が腕を振り下ろした。

「神嵐!!」

ネウロイの中心に細くも眩しい程の光を放つ稲妻が、爆音と共に突き刺さった。

ネウロイは断末魔の様な不快な叫びを上げて砕けると白い破片と

なつてアフリカの砂漠に降り注いだ。

「シャーロット・イエーガー大尉にフランチェスカ・ルツキー二少尉です。すね？ ようこそアフリカへ、あなた方の参戦を歓迎します」

### 第31統合戦闘飛行隊『アフリカ』

規模こそ飛行隊というとうり第501統合戦闘航空団よりも小さいもののネウロイ1体が他の戦場では3体分と称されるアフリカ戦線で重要な戦力と言われる程に戦果を叩き上げる、空中・地上問わず精鋭が集まる戦闘集団だ。

その歴史は意外にも早く、501結成の前例の一つにもなっているがその実態は偶然にも同方向に派遣された扶桑・カールスラントの部隊が合流した成り行き編成部隊だ。

そんな部隊を支えるのは魔力低下で一線を退くがその判断力と人脈を持つ加東圭子少佐、空戦の天才と称されるウルトラエースのハンナ・ユステイーナ・マルセイユ大尉の2人。

この2人を中心に連合軍に多大な戦果を与えると共にアフリカの地に巢食うネウロイに睨みをきかせている。そして、砂漠に吹き荒れる嵐の如き戦いぶりから人は彼等をこう呼ぶ。

「ようこそ、ストームウィッチーズの基地へ」

ストームウィッチーズ。その基地の滑走路にてルツキー二とシャーロットに振り返って、先程のネウロイに留めを指した彼が口を開いた。

その基地へ着陸したシャーロットとルツキー二はユニットを専用の駐機機材にセットすると早速と2人は助けに来たウィザードに挨拶の為に少し離れた場所の格納庫、として運用しているテントへと赴いた。

「さつきはありがとう……って、あのウィザードは？」

テントの中に居ると思つて入ったシャーロットとルツキー二だが、中には扶桑海軍の軍服を来た一般兵と扶桑海軍の航空服に身を包ん

だ1人の20歳程の青年だけだった。

助けに来た老人の姿は無かった。

「ようこそストームウィッチーズへ。お目当ての彼はそこよ」

背後からシャーロットの肩を叩いた圭子の指が飛行服を着る青年を示すと青年が上着を脱ぎながら歩み寄る。

「ストームウィッチーズで副司令をしている、加<sup>かとうえいし</sup>稲衛士だ。階級は此処では少佐だな。両名の迅速な対応、痛み入る」

「さつきは援軍ありがとう。まさか、こんな所でウィザードに会えるなんてな。ブレッドの知り合いか？」

「彼なら私の部下だよ。ブレッド・フィリップ少尉から君達の事は聞いている。圭子少佐、彼女達の補給だが」

「もうやっているわ。朝までには終わると思う」

そうかと衛士は頷くと格納庫代わりに使われているテントの天幕が乱暴に開けられると桃色の髪を伸ばした1人のウィッチが入ってくる。

「エイ！ 私と勝負しろ！」

その第一声を聞いた衛士はまたかよと肩を竦め、顔には面倒くさいというような顔をする。

「こつちもそつちも出撃があつただろう。身体と機材を休めろ。出撃後の点検が終わるまでは訓練飛行も中止すると言つただろう。マルセイユ大尉。それと客人の前だ。少しは礼儀よくだ」

ストームウィッチーズのエースであるハンナの登場だった。

普段は唯我独尊と言う言葉が使えそうなハンナだが、彼の言葉に一応の礼儀をルツキーニとシャーロットの2人に挨拶として見せる。

そして客人が来ていると聞いたのか衛士とは別方向に出撃していたストームウィッチーズのメンバーが続々と集まって来る。

航空ウィッチとして活動するライーサ・ペットゲンに稲垣真美など、アフリカでは陸戦ウィッチも数多いが今回は遠方故に今回は来れなかった様だった。

「挨拶はこれで終わりね。真美、2人分増えたけど構わない？」

「あのおく扶桑食でも大丈夫……ですか？」

真美の言葉に芳佳の影響で扶桑食好きになっているシャーロットとルツキーニは相当な食い気味で反応してしまい少し臆病と言うか小さな真美が萎縮してしまうが衛士が2人に落ち着く様に言い聞かせる。

「水道はあるから水は好きに使ってくれて構わないけど、無駄遣いしないようにね」

「そっちの小さいのに牛乳はどうだ？」

ハンナがシャーロットに小さな水筒を投げ渡すとなんで牛乳なのか苦笑いを浮かべるシャーロットとルツキーニに衛士が小さな声だが、近くで牛を飼う程には牛乳が好きだと告げると2人な納得した様に頷く。

「……………」

ルツキーニがハンナの胸を凝視するがシャーロットは衛士と圭子から扶桑食で食い付いた事で根掘り葉掘り聞かれている事で気付かず、ルツキーニがハンナの胸を見ている事に気付いて声を上げようとした時には既にルツキーニはハンナの胸を揉んでしまう。

「お、すごい！ サイズはシャーリーの方が上だけど、この張り柔らかさはなかなか……………」

そんな光景に周りの人物はハンナと言うアフリカの星とも言われる程のエースにそんな事をしてしまうルツキーニに絶句し、ルツキーニはシャーロットからお叱りと注意を受け、シャーロットは補給が受けられないのは辛い為にハンナが怒っていないか肩越しに振り返るが、ハンナは2人の事を獰猛な笑みを浮かべて見ていた。

「!!」

だが、そんなハンナの顔から獰猛な笑みが瞬間的に消えると十代乙女がする様な恥ずかしさを表す様な表情に皮膚が赤く染まる。

何故なら女性の小さく柔らかい手の感触では無く、大きく硬い男性の手の感触を胸に感じたからこそだった。

「おお。確かにサイズは手頃から少し大きい程だが、この張りや弾力はなかなかの逸品と見た」

しかも揉み方が一言で言うならただ揉むだけで無く、端的に言えば

性的だった。

「ッ……ッ……エイ!!」

突然の自体にようやく感覚では無く、知覚で判断したハンナが衛士の腕を振り解くと同時に振り返ると同時に横蹴りを放つが、衛士はその蹴りをいとも容易く掴むと脛を撫で、太腿を揉む様に触る。

「おお、以外にも女性らしい柔らかさだな。しかも意外と肌も滑る。顔も相まって確かに上物な女だな」

衛士をよく知るストームウィッチーズの面々は衛士なりの言葉で紡がれた褒め言葉にハンナは真つ赤となり、男性兵士は衛士を引つ捕らえると集団の中に引き込むと囲んで逃げられなくした上で更に詳しい話を聞こうとする。

衛士も衛士で例えを交えながらハンナの身体について説明しながら褒めちぎるのでハンナの顔は茹蛸の様に真つ赤になる。

が、これがある人物の堪忍袋の緒を切るどころか引きちぎった。

「衛士？ ウィッチに手を出せばどうなるかわかっているわよね？

貴方達もわかっているわよね？」

「はは……」

衛士が乾いた笑みを浮かべると囲んでいた兵士を飛び越えて全力で逃亡すると他の兵士達も揃って逃亡する。

「今すぐ捕まえなさい！ シャーロットさんもルツキーニさんも捕まえたら今回の事は無罪放免よ!! 一般兵には好きな写真を謝礼として渡すわ！」

その言葉を聞いたルツキーニとシャーロットは衛士と逃げた一般兵を追いかけ、写真が趣味な圭子の写真の中には一般兵の中では写真屋には流れないアレな写真もあり、それを目当てで追い掛け始める。

その日のアフリカ基地では扶桑語・カールスラント語・ブリタニア語・ヴェネチア語の怒号と悲鳴が響き、何とか衛士を二人掛かりで捕まえたシャーロットとルツキーニは圭子の制裁により負傷が原因で半月の間は飛行出来ない体になった事で半月程だが、ルツキーニとシャーロットは衛士の穴埋めで一時的に指揮下に入ったが彼女達が出た後に2人の報告について圭子はこう語った。

「あの2人を501の平均とするなら、4人居て衛士1人分」  
後にこの言葉が各地を飛び回った事で圭子は何処ぞの誰かが送っ  
てくる書類と仕掛けてくる偽造書類と格闘する事になるがこれはま  
た別の話。

## 502でゲーム

「(どうして私はこんな光景を見ているんだナ……)」

雪が覆う502基地でエイラ・イルマタル・ユートイライネンは自問していた。

目の前には棺桶に納められようとしているクルピンスキーが居た。

「迷惑かけたかしら?」

事の始まりは502基地にオラーシャ軍の書類を届ける為にサーニヤとエイラの2人が訪れた事からだった。それに対応したのは声の主でも有るロスマンだ。

「いえ、ついでの用事でしたから」

首を振って答えるサーニヤ。

書類の運搬などは普段は一般兵がやる仕事だが、今の2人は戦況が安定した事を理由にオラーシャとスオムスを行き来しながらサーニヤの両親を探していた。

そんな中でサーニヤの教官だった元ウィッチで今は政治将校の女性からサーニヤとよく似た女性を見たと言う情報が有ると告げられ、そのお礼に速く届けられるなら可能な限り速く届けたい書類を届ける事にしたのだ。

「アリガトナンダナ」

「構わないわ。北方生まれのあなた達でも吹雪の夜間飛行は控えた方がいいわ」

北方生まれだからこそ知っていますと思つた2人だが口には出さないでいるとロスマンもそれを察してた優しく微笑む。

「でも、吹雪の夜って不安になるわね」

「先生、それなら良い案があるよ!」

軽い口調で壁にもたれかかったクルピンスキーが視界に映つた瞬

間にエイラはサーニヤを庇う様に立ち塞がるが、今はロスマンが居る事もあり、その行動は徒労で終わる。

「そうね。貴女を雪に埋めたら少しは不安が和らぐわ」

「最近、アラン君に毒されてない？」

「いいえ。あの人のある意味での容赦の無さは参考になるわよ」

おお、怖い怖いと少しも思っていない調子で口に出すクルピンスキーにロスマンはそんな事を話しに来た訳でないだろうと促すとクルピンスキーはこれが本題だと言わんばかりに話し始める。

「実際に今日は新月で吹雪でしょ？ 流石のひかりちゃんや初めての孝美ちゃんも怖がっちゃってね。アラン君が面白い事やろうって言うってみんなを食堂に集めているんだ」

それを聞いた3人はクルピンスキーの後を歩いて食堂に向かうが途中でロスマンが冷や汗を流しながらクルピンスキーに問い掛ける。

「アランさんワンマンマッスルライブとかじゃないわよね？」

「それはないよ。もしも、そうだったら……全裸で放り出して貰って結構だよ」

そう言つて両手で開け放ったクルピンスキーの視界、そしてその後を歩いていた3人の視界にいい笑顔でキレッキレのマッスルポーズを上半身裸で決めるアランがいつぱいに映る。

「えつとこれは……ね」

違うんだ誤解なんだと弁明しようとしたクルピンスキーだが、ロスマンにベルトを、エイラに肩を掴まれた事でパクパクと酸欠状態の鯉の様になるクルピンスキー。

「お、来たな」

そんな3人を見てアランは素早く上着を着ると速く座れ座れとジエスチャーする。

これには暇つぶしの余興だったのだろうと察したエイラとロスマンは露骨に舌打ちすると各々の椅子に座る。

「集まったな」

アランの視界でレクリエーションが始まる。

「なにするんですかー」



ひかりの発言にアランが予め用意していたであろう何かの棒が入ったカップを持ち出す。

陶器製のカップだが、アランの握力が強いのか一瞬だけピツシと嫌な音がしたがアラン以外の全ウィッチは聞かなかった事にした。

「コマンダーゲームだ」

その一言に全員が？マークを浮かべる。

「ルールは簡単だ。カップの棒を抜いてCと書かれた棒を抜いた奴は番号を抜いた奴に命令出来る。ただし命令はちゃんと行える範囲で常識を逸脱し過ぎないものな。そして命令された奴は絶対服従。簡単だろ？」

「それってつまりは私がCを引いて、1番さんは私に抱っこされるって命令したら、1番さんは絶対服従っていう事ですよね？」

「シモハラの言う通りだぜ。つまりは合法的に抱きつける。ただし番号だから最悪は俺だ」

「成る程、運や趣味嗜好知れる。奥が深いゲームですね」

「サーシャ。オメエーがなに言ってるかわかんねーけどこれって要は王様げー」

何かを言おうとした菅野の顔をアランがアイアンクロードで抑える。

「それ以上はいけない。いいね？」

「アツハイ」

菅野が黙った辺りで細かな辺りを説明して、早速行われるコマンダーゲームと言う名の王様ゲーム。ぶっちゃけると細かいところも王様をコマンダーに変えただけである。

男女比率1:9。唯一の男性枠であるアラン大勝利な条件だが、そんな下心はアランにはない。と言うよりもそんな考えが出来る脳みそではない。なぜなら筋肉脳みそだからだ。

「コマンダーだーれだ!!」

かくにもC一本に1〜12の13本の棒からCの棒を引いたのは……

「俺だな」

アランだった。

まさかの男性にCが行ってしまった事に全員がそれぞれの方法で悔しがる。と言うよりも嫌な事からどう逃げようか考えている様にも見える。

「そうだな……1番と3番は！ 6番の肩を揉む！」

「あ、1番だわ」

1番を引いたのは孝美だった。

「私3番！」

そして3番だと自己申告したひかりを見て、菅野が逃げようとする。

「逃すか!!」

だが、楽しい事好きなアランとクルピンスキーに捕まってしまう。

「さあさあ、やりましょう」

姉妹ゆえか息ピッタリな2人に両サイドを掴まれた菅野だが、それでも僅かでも抵抗しようとした菅野の頭にアランの手が置かれる。

「ルール」

徐々に力を入れていくアランに菅野は勘弁したのか2人からの肩揉みを受けた。

「直ちゃん顔が真っ赤だよ」

「うるせー」

クルピンスキーの揶揄う様な言葉に弱々しい声で反論する菅野の逃げるかの様な催促により、ゲームは第2ラウンドへと突入する。

『コマンダーだーれだ!』

「私ですね」

サーシャだった。この結果に全員が悔しがるが、アランが台パンをしており、机が嫌な音を立てる。

「1番から12番！ 内容は何でもいから私にお礼を言う！」

「「いつも整備ありがとう」「「いつも整備ありがとう」「「いつも整備ありがとう」」

「ブレイク連中はもつとストライカーを大切にす！ 特にアランさん！」

サーシャのツツコミを喰らうブレイクウィッチーズの面々。他のメンバーも整備や補給の面でありがとうと告げる。

これにはサーシャは別の方向での感謝を期待していただけに微妙な心情だが、補給や整備が出来なければ戦闘行為が行えない。

「3回戦目だ、おらあああああ!!」

「セーのっ!」

『コマンダーだーれだ!』

「私だな」

ラルが即座にCの棒を掲げた事で王様を逃した他のメンバーが悔しがる。

「3番と9番、5番と12番と、そうだな……6番と11番は互いの頬に口付けな」

「ホントナンダナ!!」

エイラが3番の棒を握って詰め寄るとラルは命令の変更は無いと言いつ切る。

「サ、サーニャは……9番ダヨナ?」

顔を赤くしておらしい姿を見せるエイラにサーニャは優しく名前を呼んで自身の棒を見せる。そこには9では無く、6が描かれていた。

「エ?」

「私よ」

肩を突かれて振り返るとロスマンが9の棒を持って立っていた。

「サ、サーニャ……」

改めてサーニャの相手が気になって振り返ると既にサーニャの相手である11番の棒を抜いた下原が既に抱き着いていた。

「サーニャから離れろー!」

下原を引き剥がそうとしたエイラだったがアランに羽交い締めにされると同時に持ち上げられてしまう。

「抵抗はしないで下さいね」

アランがエイラを逃げられない様に頭を固定している隙に最後のペアは雁淵姉妹で何処よりも平和に済ませていた。

「昔は良くしてたけど、今になると少し恥ずかしいね」

「そうかしら？ ほら、横を向いてひかり」

何処までも仲慎ましいと同時に百合百合した光景にクルピンスキーが耐えられずに鼻血を流しながらのたうち回っていたが、クルピンスキーがジョゼの治療を受けて復活する頃には全員が終えていた。

下原はサーニヤに謝るが気にしていないと返すサーニヤにアランはブレットドから聞いた物静かで優しいが芯があるウィッチと言う言葉に何処か納得する。

「そう言う命令でもイインダナ……ダツタラ、もう容赦はしないカンナ！」

「いや、普通はさつきみたいな命令は嫌がるも「セーノ！」

『コマンダーだーれだ!!』

アランのツツコミを無視して再び棒が引き抜かれる。

「私？」

見事に引き抜いたのはサーニヤだった。

この結果に全員が悔しがると同時に警戒する。どんな命令するか全く予想がつかないからだ。

「そうですね……4番と12番は互いに何かを1つ褒めて」

その命令を聞いて菅野とアランが手を上げると互いに向き合う。

「何でも筋肉で解決しようとするお前がスゲーよな」「何でも猪突猛進で片付けるのスゲーよな」

「……………」

互いに同時に褒めると同時にその内容を脳内で整理する。

「剣一閃!!」「ウイザードパンチ!!」

そして終わった瞬間に眨されていると判断したのか同時に拳を魔力で纏わせた一撃をぶつけ合う。

その衝撃が四方八方に逃げると部屋の窓を震わせる。互いに本気の一撃では無かったお陰で物が大きく揺れるだけで済まされる。

「内容を考えてください」

ひかりの突っ込みを受けた2人は。

「それ以外あると思うか？」

魔力を纏わせた拳がラッシュで打ち込まれる度に空中で幾度となくぶつかりあい、食堂の棚が何度も揺れる。

流石にこれ以上はやばいと止めに入り、サーニヤはラルに謝るがラルはこれが502だと胸を張る。

一癖も二癖もあるメンバーだが、手綱を握れていれば心強い味方になる。のだが、これで胸を張らないでくれとロスマンとサーシャが内心で突っ込む。

「そろそろラストと行こう」

各話題で色々あり過ぎて時間は予想以上に時間を要しており、時間的にもこれを最後にして寝た方が良い時間になっている。

「コマンダー、だぁーれだー!」

「ヤッター!!」

エイラだった。

「ヨシー・サーニヤはワタシとハグして欲しいンダな!」

今までのエイラを知る人物から見ればテンションで吹っ切れている事がわかる。だが……

「エイラ。ルールは守らないといけないわ」

「そうだぞ。これは番号でやるから楽しんだ!」

アランの言葉にエイラは頷くと使い魔の耳と尻尾を出現させる。未来予知で様々な行動をシミュレートしてサーシャを引き当てる未来を見つける。

「Cと11、1と5、2と12、3と4が抱き着け!」

何でそんなおかしい数字配分なんだよと突っ込みたいメンバーだが、それよりも誰が誰に抱き着くのが、気になる。

Cと11は予想通りエイラとサーニヤだが、1と5が下原とロスマン、2と12が菅野とサーシャ、そして4が……

「ボクと熱い抱擁をするのは誰だい?」

これでクルピンスキーだと全員が察した。そして当の本人はやる気満々なのか両腕を広げて待っているクルピンスキーに巨大な物体が低空タツクルで飛び込み、クルピンスキーを抱え上げる。

「え? あのだ……アランくん、何で使い魔が出てるの?」

使い魔を出現させて、クルピンスキーを抱き上げているアランが尻尾に持たせた棒を見せる。

その棒には3と書かれており、クルピンスキーは助けを求めようと首を回した瞬間、真っ先に見たくもない物を見る。

「いいわ……そのまま、全力全壊でやってしまいなさい」

最早文字や言葉を聞くだけでSAN値が削れそうなハイライトを無くしたロスマンとそれを後ろから抱きしめて幸せそうな顔を見せる下原だった。

「隊長！」

クルピンスキーは最後の頼みの綱だとラルの方を向くが本人はサムズアップを無言で送っていた。

クルピンスキーはコレが幸運を、と言う意味で受け取れたが、察すると言う能力でかなり低い位置を飛ぶアランにはコレがゴーサインだと認識してしまう。そしてクルピンスキーの察する能力がアランのサムズアップに対する返答に正答をもたらした。

「うわあああああああ!!」

やばい、死ぬ。今までの人生、それこそネウロイを相手にしてでも感じなかった明確なまでの死へのビジョンにクルピンスキーが本気でもがき始めるが、周りはそれがわからないのか笑って成り行きを見ており、クルピンスキーの決死の叫びも雰囲気作りと判断されていた。

クルピンスキーが脱出しようとしてアランの頭を殴り続けるが、グリーゴリー攻略戦にて、ネウロイと殴り合った状態のアランの身体は強力な保護魔法で守られており、クルピンスキーの使い魔を出した状態での殴打も殆どが効いていない。と言うよりも内側にダメージを与え、殴り方を知らないのだから殴ってもアランの筋肉と言う防御壁の所為で殆ど効かない。

そして、クルピンスキーの胸がアランの胸板で大きく潰れた辺りで、これ以上はヤバイと察したのか止めようとするがその瞬間には部屋中に骨が壊れる様な音が鳴り響き、いつの間にか用意された棺にアランがゆつくりと横たえさせると下原から解放されたロスマンが蓋

を閉めた。

「(どうして私はこんな光景を見ているんだナ……)」

雪が覆う502基地でエイラ・イルマタル・ユージェイライネンは自問していた。

自分の見た未来では確かにサーニヤとハグ出来る未来を選んだがハグする前にこんな光景は見ていなかった。

サーニヤとのハグを忘れて呆然としているとそそくさと火葬の準備をしようと言いながらアランとロスマンが部屋から出ようとする  
と蓋を押し開けてクルピンスキーがまだ死んでいないと叫びながら出て来る。

コレにはロスマンは隠す事無く舌打ちし、効かないと分かりつつもアランの爪先を踏み付け、アランは申し訳無さそうに頭を掻く。

「お前達も巫山戯すぎるところなる。程々にな。時間が時間だから解散」

ラルの言葉で寝ようとそれぞれがそれぞれの部屋へと戻るがクルピンスキーは一応は医務室に行けと言うラルからの命令を受けてアランが棺桶に入れた状態で肩に担いで医務室へと向かう。

クルピンスキーは後日の診断で上半身、全ての骨にごく僅かだがヒビが入っており、完治まで飛行禁止命令が下された。

なお、アランはロスマンから全力全壊でやれと言われたが出来なかつた罰として除雪作業従事が言い渡されたが、魔力パンチで全ての雪を除雪した。